



労働政策研究報告書 No. 148

2012

JILPT : The Japan Institute for Labour Policy and Training

大都市の若者の就業行動と意識の展開

－ 「第3回 若者のワークスタイル調査」 から －

大都市の若者の就業行動と意識の展開

－「第3回 若者のワークスタイル調査」から－

独立行政法人 労働政策研究・研修機構

The Japan Institute for Labour Policy and Training

まえがき

本報告書は、これまで当機構が日本労働研究機構時代から実施してきた、「若者のワークスタイル調査」の3回目の成果を取りまとめたものである。

2001年に当機構が実施した第1回目の「若者のワークスタイル調査」は、若者の働き方に関する調査研究の嚆矢となった。その後、様々な主体によって若者の働き方についての調査研究が進められたが、継続的に実施されている調査研究はほとんどない。本調査は、当機構ならではの強みを生かした調査と言えるだろう。

こうした研究を進めることができたのも、調査に対して協力して下さった方々のおかげである。これまでの調査協力者の皆様、また今回のインタビュー調査に時間を割いてご協力いただいた皆様に、あらためて御礼申し上げる。

本報告書が、関係者のお役にたてれば幸いである。

2012年3月

独立行政法人 労働政策研究・研修機構
理事長 山口 浩一郎

執筆担当者（執筆順）

氏名	所属	執筆章
堀 有喜衣	労働政策研究・研修機構 副主任研究員	序章、第2章、 ケース記録
小杉 礼子	労働政策研究・研修機構 統括研究員	第1章 ケース記録
寺地 幹人	労働政策研究・研修機構 臨時研究協力員	第3章 ケース記録
久木元 真吾	公益財団法人 家計経済研究所 次席研究員	第4章 ケース記録

目 次

序章 問題意識と調査の概要	1
第1章 教育から職業への移行の変容	17
第1節 はじめに	17
第2節 卒業直後（中退直後）の状況	19
1. 離学時の就業状況	19
2. 学歴と親の学歴・生家の豊かさ	21
第3節 卒業・中退時から現在までのキャリア	23
1. 正社員就職した者の離転職	23
2. 失業・無業、非典型雇用からの移動	24
3. 調査時点における就業状況	25
4. これまで経験した就業形態	26
5. キャリア類型の作成とその分布	26
6. 学歴・世代とキャリア	28
第4節 就業形態から見た現職の特徴	30
1. 職種	30
2. 企業規模	31
3. 収入・労働時間	32
4. 社会保険	33
5. 労働組合への加入	35
第5節 20歳代後半層のキャリアと意識	36
1. 離学以降のキャリアの概観	36
2. キャリアと家族形成	37
3. キャリアと望ましい働き方	38
4. 具体的な将来（自由回答）	40
5. キャリアと生活の評価	42
6. キャリアと社会的問題への関心	45
第6節 職業能力の形成とキャリア	46
1. 仕事上の知識や技能についての強みの獲得	46
2. 強みとキャリア	48
3. 学校時代の職業教育・専門教育とキャリア	51
第7節 まとめ	54

第2章	フリーターへの経路と離脱	57
第1節	はじめに	57
第2節	フリーター経験の認識	58
1.	フリーター認識とキャリア類型	58
第3節	フリーター経験率—誰がフリーターになっているのか	60
1.	フリーター経験率の推移	60
2.	年齢・学歴別フリーター経験率の推移	61
3.	家庭的背景とフリーター経験率	62
第4節	フリーターになった理由	64
1.	フリーター理由	64
2.	フリーター類型	65
第5節	フリーターからの離脱プロセス	68
1.	フリーター離脱志向の推移	68
2.	正社員になろうとしたきっかけ	73
3.	離脱の際の相談相手や経路	74
4.	正社員になろうとしない理由	79
第6節	活用した行政サービスや公的支援	82
第7節	本章の要約	84
第3章	大都市の20歳代の職業意識の分析	87
第1節	はじめに	87
第2節	第3回調査の分析—2011年20歳代の職業意識	90
1.	年齢層：20歳代前半層、20歳代後半層	92
2.	雇用形態：正規雇用、派遣・契約、アルバイト・パート、無業・その他	94
3.	学歴：高卒、専門・短大・高専卒、大卒・大学院卒	96
4.	キャリア類型：正社員定着、非典型一貫、他形態から正社員、正社員転職	98
5.	家族形態：単身、無配偶・親元、配偶者・子供同居	100
6.	第3回調査新設項目：対人関係、一般的信頼感、政治的有効感覚	102
第3節	職業意識の2時点比較—2001年20歳代と2011年20歳代	103
1.	2時点の回答分布の概観（正規雇用と非典型雇用）	104
2.	フリーター共感	107
3.	能力向上志向	110
4.	栄達志向	112
5.	仕事離れ・迷い	114
第4節	まとめ	116

第4章 若者の相談ネットワークの状況：推移と変化	122
第1節 はじめに	122
第2節 質問項目の設計	123
第3節 相談ネットワークの状況	124
第4節 相談ネットワークの広がり	130
第5節 相談チャンネル数の状況	141
第6節 相談チャンネル数の年齢層別の推移	145
第7節 無配偶男性正社員における「相談相手がない」こと	147
第8節 おわりに	148
基礎集計表	153
調査票	167
ケース記録	179

序章 問題意識と調査の概要

1. はじめに

本報告書の目的は、東京都の20代の若者に対する調査を通じて、大都市の若者の就業の実態や彼ら彼女らが直面している課題について明らかにし、政策的な支援の方向性について検討することである。本研究はプロジェクト研究「新たな経済社会における能力開発・キャリア形成支援のあり方に関する研究」のサブテーマである「キャリア形成弱者の実態と支援に関する調査研究」に位置づく。序章では当機構における研究の経緯について述べ、先行研究のレビューは各章に譲りたい。

労働政策研究・研修機構は、前身である日本労働研究機構時代より若者の教育から職業への移行についての研究を積み重ねてきたが、当初の主たる問題意識は高卒者にあった。というのは、従来日本の高卒者は高校や労働行政による支援により職業社会に円滑に参入できるため失業率が国際的に低く抑えられたとされてきたが、そのようなスムーズな移行の筋道が細くなっているのではないかと、という疑問がもたれるようになったからである。「日本的高卒就職システム」の弱体化、高卒無業者（高校を卒業しても、進学も就職もしない高卒者）研究として開始された調査研究の範囲は、若い非典型雇用者の急増を背景に、高卒者にとどまらずその他の学歴の者も含めた、卒業後の状況や初期キャリアについての研究にまで広がった。

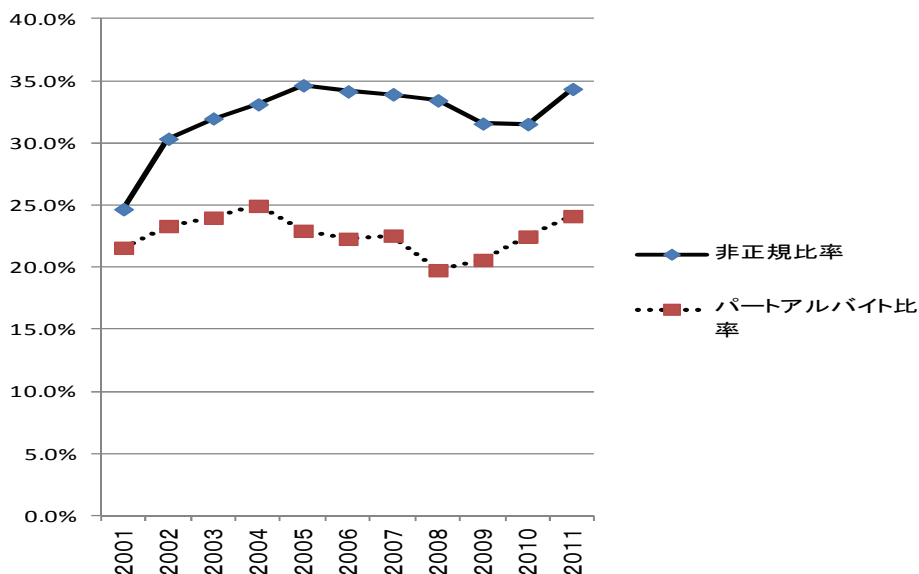
若者の学校から職業への移行のありようが大きく変化しつつあるのではないかとという問題意識から、東京都の若者を対象に行った初めての量的調査が「若者のワークスタイル調査」（2001年）である。当時は先行研究が限られており手探りであったが、2001年当時は若いパート・アルバイト労働者の増加とともに、新奇な存在としての「フリーター」が関心を集めており、調査票には「フリーター」を意識した項目が多く盛り込まれた。

2001年に第1回の調査を実施した後、2005年前後より景気が回復しはじめた。図表序-1は、非正規雇用比率とパート・アルバイト比率を示したものである。非正規雇用率は2006年より低下し、雇用環境が改善した。新卒就職の改善も目覚ましかった（労働政策研究・研修機構2012）。2003年に1.21倍になった高卒求人倍率は2008年には1.87倍までに改善した。

しかし金融危機以降、新卒者の就職は冷え込み、高卒求人倍率も1.24倍にまで低下した。非正規雇用率も2011年より再び上昇した。

第1回調査の後、共通する問題意識を持った調査は様々な主体によって実施された（太郎丸2006等）。けれどもそれらの調査のほとんどは単発の調査に終わっているようである。SSM調査（社会階層と社会移動全国調査）は1955年から10年ごとに実施されている歴史ある調査であるが、若者に焦点をあてて分析されたのは2005年が初めてである。

図表序－1 15－24歳の非正規雇用・パートアルバイト比率の推移
(役員除く非農林雇用者に占める割合)



資料出所：総務省「労働力特別調査」各年2月、02年以降は同「労働力調査詳細集計」1-3月
なお2011年は岩手・宮城・福島県を除く

個人を追跡するパネル調査も実施されており、若者についての代表的な調査としては、東京大学社会科学研究所のパネル調査と日本教育学会の成果(「若者の教育とキャリア形成に関する調査」)があげられるだろう。

いずれの調査研究も意義あるものだが、本調査研究は①複数世代を対象としていること、②地域労働市場に配慮した設計になっていること、という2点において特徴を持つ。

第一に、若者の雇用のように労働市場の影響を受けやすい分野では、見出された知見がその時の雇用状況の影響ゆえであるのか、あるいは長期的な日本社会の変化を示した事象と捉えられるのかについて単発調査から判断することは難しい。一時点ではなく複数時点で、共通性を持った調査を行う必要がある。

第二に、若者の移行において地域の労働市場状況の影響が大きいことはよく知られている。若者の地域移動が低調ななかで、彼ら彼女らのおかれている地域の労働市場、さらには社会文化的背景の相違(例えばフリーターに対する許容度などもそれにあたらう)なども視野に入れ、分析枠組みに取り込んでいくことが望ましい。日本社会全体を対象とした場合、社会文化的背景まで視野に入れたマクロな分析枠組みを変数として設定することは物理的に容易でないため、いくつかの種類化された地域労働市場の枠組みのもとでの調査がより現実的だと考えられる。

以上のような問題意識から、労働政策研究・研修機構では、「若者のワークスタイル調査」を東京都において5年ごとに実施し、若者の変化の実相を捉えようとしてきた。

しかし、「若者のワークスタイル調査」は東京で実施されるため、対象が大都市の若者に

限られているという問題を抱えている。そこで 2008 年には高卒労働市場類型に基づき、サービス業中心で雇用情勢のよい東京という大都市だけでなく、製造業中心で労働力の需給バランスがとれている長野、サービス業中心で労働需要不足である北海道を事例とし、地域労働市場による若者のキャリア形成の差異についての調査研究を実施した。

なお本プロジェクトで行った高卒就職に関する研究（『日本的高卒就職システムの変容と模索』）では、高卒労働市場を、需給状況、求人内容の違い、労働力移動の方向から、次の 3 つに分類している（労働政策研究・研修機構 2009、図表序－2）。

図表序－2 高卒労働市場の類型

	労働力移動	需給状況	求人内容	調査地域
類型 1	流入	良好・中間	サービス・販売	東京
類型 2	バランス	良好・中間	製造	長野
類型 3－①	流出・バランス	不足	サービス・販売	北海道
類型 3－②	流出・バランス	中間・不足	製造	**

資料出所：労働政策研究・研修機構（2008）をもとに改変

【類型 1】は、求人が多く、他地域からの流入がみられる地域である。かつ求人にも、サービス・販売などの仕事が多いという特徴がある。大都市部が中心である。

【類型 2】は、地域の労働市場内の需給バランスがとれており、労働市場が地域内で完結している。また製造業の求人も多い地域である。

【類型 3】は、地元での求人が少ないため地元での就職は難しく、北海道を除くと、県外への流出が大きい地域である。求人は、サービス職・販売職が多い地域【類型 3－①】と、製造業からの需要がある地域【類型 3－②】がある。

この 3 つの類型によって若者のキャリア形成は大きく違い、学歴の影響も異なっている（労働政策研究・研修機構 2008）。類型 1 は、大学進学率が高いため高学歴者が量的に多く、高卒者の安定した就職先である製造業も少ないため、高卒者が安定したキャリアを形成することはかなり難しい。類型 2 は製造業の集積地域であるため、高卒者が正社員として定着する割合が高い。他方で類型 3 の雇用状況は悪いため、高学歴者でも安定した仕事を得ることが困難であり、結果的に高卒者も大卒者も安定したキャリア形成が難しいという知見を得ている。

本報告書は、類型 1 に位置する東京調査の第 3 回目について報告するものである。

2. 調査の実施方法とその概要

経緯に記したように、東京で実施した「若者のワークスタイル調査」は 3 回を数え、非大都市の調査を 2008 年に実施している。それらの詳しい説明は図表序－3 に示したが、北海道

(釧路)を除くと、エリアサンプリングという手法を用いて実施している点が共通している。

図表序－3 調査の概要

調査名	調査年	地域	抽出方法	調査対象者	調査対象者数
第1回若者のワークスタイル調査	2001年	東京	エリアサンプリング法（フリーター1000人、非フリーター1000人に割り付け）	18-29歳	2000人
第2回若者のワークスタイル調査	2006年	東京	エリアサンプリング法（割り付けなし）	18-29歳	2000人
第3回若者のワークスタイル調査	2011年	東京	エリアサンプリング法（割り付けなし）	20-29歳	2058人
30代のワークスタイル調査	2012年	東京	エリアサンプリング法（割り付けなし）	30-39歳	2000人
地方版 若者のワークスタイル調査（北海道2008）	2008年	北海道（札幌）	エリアサンプリング法（割り付けなし）	20-34歳	600人
		北海道（釧路）	無作為抽出	20-34歳	240人に依頼・113人回答・回収率47.1%
地方版 若者のワークスタイル調査（長野2008）	2008年	長野（長野市）	エリアサンプリング法（割り付けなし）	20-34歳	500人
		長野（諏訪・茅野・岡谷）	エリアサンプリング法（割り付けなし）	20-34歳	500人

注：「30代のワークスタイル調査」の結果は、平成24年度にとりまとめる予定。

エリアサンプリングとは、住民基本台帳の閲覧が難しくなる中で編み出された調査方法であるが、地点をランダムに選ぶという以外の共通した抽出方法はまだ十分に確立されているとは言えず、調査機関ごとに様々なノウハウを持っているとされる（氏家 2010）。本調査は次のような方法を用いた。

まず本調査の目標数を2000人と定め、20代前半1000人、20代後半1000人とし、母集団を反映するようにあらかじめ性年齢に層化した目標数を定めた（クオータ抽出）。

続いて、各町の世帯数が示された住民基本台帳より、等間隔抽出法にて任意の地点（今回は100地点）を選ぶ。例えば練馬区上石神井4丁目がランダムに選ばれたとすると、上石神井4丁目の任意の地点から調査を開始し、順番に各家庭を訪問し、調査を依頼する方法である（回答者は各世帯1名で、対象者が複数いた場合には誕生日法にて抽出）。もし上石神井4丁目の中で調査協力者が見つからなければ、隣接した上石神井3丁目などにまで範囲を広げて依頼を続け、各地点の目標人数（今回の場合は20代前半10名、20代後半10名で、男女のバランスは東京都全体の母集団の割合にあわせている）に達するまで調査依頼を行い、調査票を留め置き法にて回収する。この手法では調査依頼の数はカウントしないので回収率を計算することはできないが、エリアサンプリングによる調査実施上の利点は何と言っても確実に一定数の対象者を確保できることである。

他方でエリアサンプリングの実施上の最大の欠点は、在宅している人に偏りがちであるということであるが、今回の調査は働き方に関する調査であるので、調査にあたっては、専業主婦（夫）は除いている（失業中や育児休業中、未婚の無業は含まれる）ため、その欠点の

影響は小さくなっていると推測される。

なお抽出方法の違いが結果にもたらす偏りについては研究の途上にあるが、現在のところは同じ地域で異なる抽出方法（住民基本台帳、エリア抽出、クォータ抽出）で実施した調査結果を比較した先行研究によると、職業構成や意識についての大きな違いは見出されていない（朝倉・桜井・染谷 2005）。

しかしながら、2011年東京調査は2－3月の実施であったため、調査中に東日本大震災が起きた。そのため円滑な調査実施ができなくなり、結果として年齢・男女のバランスが崩れることとなった。したがって2011年調査では2058名のご協力を得たものの、20代前半男性の対象者を十分に集めることができず、完全に母集団を反映した対象者とすることはできなかった。ただし3節でみるように、学歴や雇用形態からみた構成は母集団に近くなっており、分析には十分耐えるデータだと考えられる。

図表序－4 調査票回収数と目標値（第3回 若者のワークスタイル調査）

		年齢		合計
		20－24歳	25－29歳	20代計
男性	回収数	423	607	1030
	目標値	512	519	1031
女性	回収数	527	501	1028
	目標値	488	481	969
合計	回収数	950	1108	2058
	目標値	1000	1000	2000

また2011年東京調査においては、調査票の最後にインタビュー協力のお願いを記し、任意で連絡先を書いて頂いた。19名の方にインタビューにご協力頂くことができ、ケース記録を巻末に取りまとめるとともに、分析の解釈にも使用している。

なお、現在「30代のワークスタイル調査」（2011年7月～9月実施）についてもとりまとめを進めており、第4章では知見のごく一部を紹介している。詳しい内容については平成24年度に報告する予定である。

3. 「第3回 若者のワークスタイル調査」のデータの特徴

続いて本調査の調査対象者について、総務省統計局「就業構造基本調査（2007）」の東京のデータと比較し、本調査の標本の特徴を明らかにする。データの出所は、労働政策研究・研修機構（2009）の巻末集計である。

両調査のカテゴリーや調査対象者は異なっているため、必ずしも比較項目が対応しているわけではない。「就業構造基本調査2007」は15—34歳を特別集計しており、本調査は20—29歳が対象である。

図表序－5は、就業形態について本調査と「就業構造基本調査」を比較した。

図表序－5 就業形態の比較

	正社員	非典型	求職・ 無業	自営・自 由・家族
本調査：男性	66.9	22.3	6.0	4.9
就業構造基本調査2007	67.7	22.1	7.3	**
本調査：女性	54.6	37.4	5.3	2.8
就業構造基本調査2007	55.2	27.7	8.9	**

注：「就業構造基本調査2007」は東京都のデータであり、正社員に役員を含んでいる。

男性については、2つの調査ともかなり共通しているが、女性で非典型が多くなっている。これは本調査が専業主婦（夫）を除いた調査設計となっているため、求職や無業の割合が低いためだと考えられる。

次に、図表序－6で学歴構成を比較した。

図表序－6 調査対象者の学歴構成の特徴

	高卒	専門卒	短大・ 高専卒	大学・ 大学院卒	中卒・ 高校中退	高等教 育中退	その他 不明	合計
本調査	18.5	21.8	6.9	41.1	4.4	5.8	1.5	100.0
就業構造基本調査2007	22.3	18.2	8.5	46.7	3.3	**	**	100.0

注：「就業構造基本調査2007」の分析は15－34歳を示しており、本調査は20－29歳

年齢構成にやや違いはあるものの、本調査の高卒と高等教育中退（ $18.5+5.8=24.3\%$ ）を一つのカテゴリーにまとめると、「就業構造基本調査」の22.3%と近い数値となる。また大学・大学院と高等教育中退（ $41.1+5.8=46.9\%$ ）を一つのカテゴリーとすると、「就業構造基本調査」では46.7%と、2つの調査の数値は類似する。

したがって、本調査の特徴として、男性については就業形態や学歴構成については、東京都の母集団に近いものとなっているが、女性についてはサンプリングの特徴を反映し、無業が少なく、非典型が多い構成になっていると言える。

分析にあたっては以上のことに留意し、解釈を進める必要があるだろう。

4. 主な調査項目

今回の調査は、過去の調査と比較可能なように、主な調査項目を踏襲しているが、一部新規項目を追加している（主な新規項目に*を記した）。

I 生活や働くことについて

フェイスシート・現在望ましい働き方・3年後望ましい働き方

将来について具体的に考えていること・仕事上の強み*

これまでの人生の評価

職業意識*

労働問題に対する関心・経験・身近な人々の経験*

働く中で疑問を持ったこと*

II これまでの経歴

卒業した学校の所在地・学歴・学科

離学後の就業状態（就業形態・時期・規模・継続の有無）

最近1週間の就業状態（就業形態・時期・採用経路・職種・規模・労働時間・年収・組合参加の有無）

III 多様な働き方について

これまでの就業経験

正社員以外の働き方について（期間・正社員になろうとした経験・理由・相談相手・行動の内容・正社員になったかどうか・入職時期・採用経路・職種・規模）

IV フリーター経験

フリーター経験の有無・期間・仕事内容・フリーター理由・フリーター経験を通じて感じたこと

V 家族のこと

行政サービスの利用*・年金*・保険*・誰と同居か・結婚・相談相手・両親の最終学歴・経済的豊かさ

5. 本報告書の構成と知見

本報告書の構成と各章の知見について述べる。

第1章では、非典型雇用の拡大の中で変動してきた若者の職業キャリアと意識の近年の状況を、本年行った第3回「若者ワークスタイル調査」の結果を用いて、第2回調査（2006年）結果と比較しながら検討した。これまでの検討で明らかになった主な点は以下の通りである。

①離学時の正社員比率は2006年調査より高まった。高等教育卒業者及び2005～2009年の景

気回復の影響下にあった時期に学校を卒業した者の正社員比率は高いが、高卒者の正社員比率は低い水準のままである。この高卒者の離学時の正社員比率は、学校や職業安定機関を通して把握されている水準よりかなり低い。また、初職の就業形態に対しての親の学歴や生家の豊かさの影響は、本人の学歴を固定すれば見られなかった。親の学歴や豊かさが本人の学歴を規定し、学歴が正社員としての就業機会を規定するという関係はみられ、これは2006年と変わらなかった。

- ②2006年調査と比べて、離学時に正社員就職した場合の定着率は高まった。一方、離学時に無業や非典型雇用であった場合に後に正社員になる比率は、男性では5割と2006年の4割より高まったが、女性は3割で変わらなかった。この結果「非典型一貫」は男性では若干の減少がみられた。変わらない傾向は、中途退学者には「非典型一貫」が多いこと、中途退学者のうち20歳代後半男性では「他形態から正社員」も多いことである。
- ③正社員と比べた時、アルバイト・パートは勤務先が小規模企業であることが多く、年収は半分程度、1時間当たりの収入では7割程度である。契約・派遣では勤務先規模は小規模が少なく、年収は8割弱、1時間当たりの収入は9割弱の水準で、いずれも2006年とほぼ同じであった。また、アルバイト・パートでは社会保険加入について「わからない」や「加入していない」者が少なからずいた。「他形態から正社員」の場合の勤務先は、「正社員定着」に比べて小規模企業が多く、年収も時間当たり収入も9割弱にとどまっていた。
- ④20歳代後半層のうち、「非典型一貫」の場合、現在の働き方として非典型雇用を望ましいとする者が4割程度いるが、3年後についても望ましいとする者は男性で8%、女性で26%と少ない。2006年調査と比べると現在も3年後も正社員を望ましいとする者が増えた。特に女性で大幅に増えた。また、「他形態から正社員」になった男性では、将来の具体的展望への記述が特に少なく、正社員後のキャリアに課題があることが感じられた。
- ⑤20歳代後半層の意識では、将来の見通しやこれまでの進路の順調感、自立感、生活満足感については、「正社員定着・転職」で肯定的意見が「非典型一貫」で否定的意見を持つ者が多い。女性は男性よりキャリアによる意見の差が小さく、全般により肯定的である。経年的には2001年から2006年には肯定的意見が増える方向に変わったが、2006年から2011年の変化は逆で否定的意見が増加した。男性では「非典型一貫」での進路の順調感、「他形態から正社員」での自立感の低下が大きく、女性では「他形態から正社員」が全般的に否定的な方向への変化が大きい。また、「派遣切り」などの社会的問題への関心の程度は、就業形態やキャリア類型によってはあまり違わなかった。
- ⑥本人が「強み」と意識する職業能力を「スキル・資格」「対人能力」「行動様式」「その他」に分けると、「非典型一貫」では「スキル・資格」を挙げる者が特に少なく、強み「なし」や無回答の者が多い。「非典型一貫」では、強みの獲得経路として職場経験を挙げる者も少ない傾向があり、職場外のスキル獲得経路として学校も重要である。学校を通して強みを獲得したという者が多いのは、理系・工業系や資格系の高等教育卒業者である。高校に

については職業教育を受けた者では「非典型一貫」が少ない傾向があった。学歴段階によって職業教育・専門教育の効果の現れ方は異なる。

これらのファイディングスから今後の若者の就業をめぐる政策展開において重要だと思われる点を下記に示す。

① 新卒就職支援の継続・拡充

離学時に無業や非典型雇用であった場合、後に正社員に移行する比率は2006年より高まってはいるものの、男性でも5割、女性では3割にとどまっている。マッチングの仕組みやの工夫や個別の支援などを通して、学卒時点での就職活動を途中で断念することなく続けられるよう集中的に支援することが必要である。また、本調査での高卒者の正社員就職率は、学校や職業安定機関で把握されているものより低く、求職者として把握されていなかった卒業者がアルバイトなどの形で就業していることが考えられる。高卒時点での就職支援の在り方を検討する必要がある。さらに、求職活動時の景気によって離学時点の就職率は左右されるので、特に不況時には重点的な支援が必要である。

② 中途退学の予防と退学後の支援

高校や高等教育機関からの中途退学者が離学時に正社員となる比率は非常に低い。20歳代後半には男性では正社員に移行する者が4割近くにまで増えるものの、女性は非典型雇用のままであることが多い。中途退学が以降の職業キャリアに与える影響を伝えたり、他の機関での学びなおしや就業支援につなげるなど、学校と連携した支援が求められる。

③ 企業の正社員登用・採用及び新卒卒の柔軟な運用の促進

男性では非典型雇用から正社員への移行率は高まっていたが、「非典型一貫」の正社員志向は男女とも強くなっていた。若者のキャリア形成の面からは、非典型雇用者の正社員への登用や採用を促進する支援が期待される。企業の採用リスクを軽減するトライアル雇用や職業訓練を伴ったジョブカード制度など、あるいは、新卒3年以内の者の採用促進策などについて、政策の効果を測りながらの施策の継続が期待される。なお、女性の正社員への移行率が低くとどまる中で「非典型一貫」での正社員志向が高まっていることの背景要因について、改めて検討のうえ対応する必要がある。

④ 非典型雇用者の均衡待遇と能力開発の促進

非典型雇用者の均衡待遇を目指した政策はすでにすすめられているところであるが、今回の調査でも「非典型一貫」キャリアの若者の多くが、将来に明るい展望を持たず、自立も家族形成も難しい状況がうかがわれた。労働条件の改善やキャリア形成につながるさらなる施策が期待される。また、そのためには若者自身の職業能力の獲得・向上が必要だと思われるが、「非典型一貫」では職場経験を通しての獲得が進んでいず、学校教育を通しての職業能力開発を含め、多様な能力開発の機会を社会的に整備することが重要である。

⑤ 20歳代をキャリア探索期と捉えた相談機会、能力開発機会の充実

「非典型から正社員」になれば、キャリア形成の課題がなくなるわけではない。このキャリアの若者たちは相対的に労働条件に恵まれない場合が多いが、そればかりでなく、男性の場合には将来への希望が語られにくい傾向がみられた。いったん正社員になった後に非典型雇用や無業状態になるケースも少なくない。新規学卒就職して一つの会社に定年まで勤め上げるというモデルから外れれば、キャリアの初期は様々な迷いの中にいるのが当然である。20歳代は揺れ動く時期として幅広くキャリア形成支援の対象と捉えて対応できる体制整備が望まれる。

第2章は、3時点のデータを用いて「フリーター」に焦点を当て、第1章を「フリーター」という側面から補完した分析を行った。

- ①自分をフリーターとして認識するかどうかには地域差が見られるが、おおむね、パート・アルバイトで働いた経験があるとフリーターをしたことがあると答える傾向が見られる。
- ②フリーター経験の有無には本人学歴、離学のタイミングと学校での専攻が大きく影響しており、女性の場合には生家の経済的豊かさも関連している。
- ③2011年のフリーター経験者によるフリーター経験の評価として、フリーターという働き方は「自分に合う仕事を見つけられる」「自由」な働き方とは認識されにくくなった。
- ④フリーター3類型の分析からは、2001年に比べて2006年同様に「夢追求型」が増加したが、「モラトリアム型」の割合は経年的に低下、「やむを得ず型」は2006年にいったん減ったが、再び上昇していた。フリーター3類型の分布には経済的な豊かさとの関連が大きく、特に女性は豊かでないと「やむをえず型」が半数を占めていた。
- ⑤経年的な変化をみると、正社員になろうとした割合は2001年から2006年に低下したのち、2011年にふたたび2001年の水準にまで戻った。しかし正社員になれた割合（離脱成功率）は、2001年の水準にまで戻ってはいない。
- ⑥正社員になろうとするきっかけは、安定したいという気持ちによるものが強いが、男性の場合には結婚をきっかけとする割合が高い。学歴別にみると、高卒以下学歴の場合には、男女とも正社員のほうがトクであるという回答が多い。他方で高卒超学歴の場合には、「やりたいことが見つかったから」が男女とも高く、学歴によって、フリーターを離脱する動機が異なることがうかがえる。
- ⑦正社員になろうとした時にすることとして、就職活動、ハローワークの利用、情報収集やスキルアップ、正社員登用の希望を出す等が挙げられた。
- ⑧正社員への経路として中心的な存在であった人的ネットワークの割合は次第に低下しており、他方でパートや契約社員からの登用割合が2006年に増加したが、2011年にふたたび低下した。
- ⑨正社員への離脱について、明確な効果が見られたのはフリーター期間であり、フリーター期間が6カ月以内で高く、3年以上になると低下していた。

⑩失業経験のある若者にもっとも利用されている公的支援のうち、働くことに関する支援で最も利用率が高いのはハローワークであり、利用率は半数近くにのぼる。行政サービスや公的支援の利用は（奨学金の利用を除くと）、キャリア類型の影響が大きい、学歴が低いほどまた生家が豊かでないほど利用割合が高い。

以上から、次のような政策提案をしたい。

第一に、フリーター期間が短いと正社員への離脱成功率が高いことから、早期の離脱を促すということである。EUでも、若者を6か月以上無業にしないという政策がなされているが、6か月というのは無職の若者が再び仕事を得る上で、雇用側の見方についてもまた本人のモチベーションという点においても、ターニングポイントとなる時期の目安になっていることがうかがえる。労働行政は若者が6か月以内に安定した就業に至るように、集中的な支援を行っていくことが求められる。

第二に、フリーターから正社員への離脱を目指す若者に対しては、すでにフリーターとして働いている若者に対する「正社員登用」を支援する政策の拡充も効果的であろう。あるいはトライアル雇用やジョブカードなどの職場実習を含む職業訓練なども、企業の採用のハードルを下げるのに役立つと考えられる。

第3章は、若者の意識の変化を第1回調査（2001年）と第3回調査（2011年）のデータで比較した。

①第3回調査で東京都内に住む1981年～1991年生まれの者の全体の傾向を見た際、仮に経済的な不利や就労の不安定さと、フリーターに象徴されるような働き方の自由さが天秤にかけられるとして、後者が支持されるとはいいがたい。専門的な知識や技術を磨くこと、資格取得といった能力向上に対する志向は8～9割の者に支持されている。「ひとよりも高い収入を得たい」という経済的な向上への支持は7割弱存在するものの、独立や有名になることに対する支持は、全体の4割を下回っている。全体の3～4割の者が「できれば仕事はしたくない」などの仕事離れの意識をもっており、また、4割を超えた者が自らの仕事についての迷いを抱いている。

②第3回調査で男性と女性を比較した際、その分布で特に違いが目立ったのは「ひとよりも高い収入を得たい」などの「栄達志向」に該当する項目で、男性の方が女性に比して肯定の割合が高い。

③第3回調査で男女別に20歳代前半層と後半層を比較すると、男性では、正社員志向や能力向上について、後半層の方が支持しているという傾向を確認できた。一方女性においては、前半層の方が、典型的な就労行動に縛られないフリーターのようなあり方への支持・共感が存在しており、「自分に向いている仕事が見つからない」「できれば仕事はしたくない」「有

名になりたい」といった項目への肯定も高いことが確認できた。

- ④第3回調査で男女別に雇用形態間の職業意識を比較した際、男性に関して、正規雇用は堅実・安定的な意識をもちつつも迷いや仕事離れ志向があり、派遣・契約は自分の働き方に対する明確なビジョンや既存の働き方・制度から自由な志向をもつ傾向にある。また、アルバイト・パートは、やりたいことを優先する考え方や雇用形態にこだわらない考え方をもち、無業・その他の者は、刹那的な生き方や自由な働き方を肯定せず、迷いのなかで、できれば仕事はしたくないという意識をもっている傾向が確認できた。一方女性に関しては、正規雇用が安定的な雇用を支持する堅実な志向をもっている点は男性と共通しているが、派遣・契約の「能力向上志向」や「仕事離れ・迷い」の項目に対する肯定回答の割合が他の雇用形態に比べて低いとは言い切れない点などが、男性と異なった。
- ⑤第3回調査で男女別に学歴間の職業意識を比較した際、男性に関して、大卒・大学院卒は、フリーターのような働き方を支持せず正社員志向が高い一方で、できれば仕事はしたくないという意識も垣間見える。また、専門・短大・高専卒はやりたいこと志向や独立志向が強く、高卒は刹那的な生き方への支持や迷いを抱えながらも、安定的な職業環境で真面目に働く志向ももっているといった傾向が確認できた。一方女性に関しては、全般的には男性と似た傾向があるものの、「フリーター共感」に該当する項目において、高卒と専門・短大・高専卒の間に意識の違いが見られるという点などが、男性と異なった。
- ⑥第3回調査で男女別にキャリア類型間の職業意識を比較した際、男性の特徴は、非典型一貫型が「できれば仕事はしたくない」に対する肯定が最も低いこと、他形態から正社員型が<夢追求型>フリーターに特徴的な項目（「将来は独立して自分の店や会社を持ちたい」「有名になりたい」）に対する肯定が高いこと、などだった。一方女性に関しては、男性と対照的に正社員転職型が「自分に向いている仕事かわからない」の肯定が最も低い点などが特徴的だった。
- ⑦第3回調査で男女別に家族形態間の職業意識を比較した際、女性の方が男性よりも家族形態による違いが顕著だった。配偶者・子供同居の女性は他の家族形態の女性に比べて、「仕事離れ・迷い」の項目への支持が低く、安定性に関わる項目への支持が高かった。また、単身の女性は他の家族形態の女性に比べて、「栄達志向」の項目や新しい可能性へのチャレンジに関する項目への支持が高かった。
- ⑧第3回調査で新設された3項目を男女別に雇用形態間で比較した際、男女ともに、無業・その他が政治的有効感覚や対人関係自己評価の項目に対する肯定が低い。政治的有効感覚に関しては、男性ではアルバイト・パートが、女性では派遣・契約が、正規雇用と同程度に高かった。
- ⑨「フリーター共感」に該当する各項目を時点比較すると、第1回調査より第3回調査の方が、「今の世の中、定職に就かなくても暮らしていける」「若いうちは仕事よりも自分のやりたいことを優先させたい」「いろいろな職業を経験したい」「やりたい仕事なら正社員で

もフリーターでもこだわらない」に関しては賛成が減少、「一つの企業に長く勤めるほうがよい」「フリーターより正社員で働いたほうがトクだ」に関しては賛成が増加する傾向が見出された。2001年から、やりたいこと志向は減退し、安定性を求める志向が高まった。

- ⑩「能力向上志向」に該当する3項目は、2時点とも肯定の回答傾向を示しているが、第1回調査より第3回調査の方が、「専門的な知識や技術を磨きたい」と「職業生活に役立つ資格を取りたい」に関しては賛成が減少、「ひとの役に立つ仕事をしたい」に関しては賛成が増加する傾向が見出された。
- ⑪「栄達志向」に該当する各項目を時点比較すると、例外がいくつかあるものの、第1回調査よりも第3回調査の方が、「将来は独立して自分の店や会社を持ちたい」「有名になりたい」「ひとよりも高い収入を得たい」の3項目ともおおむね賛成が減少する傾向が見出された。
- ⑫「仕事離れ・迷い」に該当する各項目を時点比較すると、第1回調査よりも第3回調査の方が、「将来のことを考えるよりも今を楽しく生きたい」に関しては賛成が減少、「自分に向いている仕事かわからない」と「できれば仕事はしたくない」に関しては賛成が増加する傾向が見出された。今を楽しく生きて将来のことを考えなくなっているとは言えず、2001年から、一部の若者を除いて、自分に向いている仕事かわからないという迷いをより抱えるようになり、職業世界からの離脱志向が高まった。

以上から、2001年に比べて堅実な意識を表明する20歳代の若者の姿が浮かび上がった。また、かつてのフリーターは専門知識や資格の取得に対する意欲が高かったが、フリーターを含む非典型雇用者についてみると、2011年ではその意欲が低下していることは職業能力形成上看過できない変化である。安定を優先し、「堅実化」が若者たちの目標となる一方で、それを達成するための手段の具体性が不在であると感じさせる現状は、まさにアノミーであり、こうした状況に対して労働行政としては、実現可能性や具体性を伴った対応が求められる。

第4章は、若者のソーシャル・ネットワーク（相談相手）についての分析が展開される。

- ①2006年調査の結果から見出された、悩みの相談相手に職場関係の人を選ぶ割合が「正社員 > 非典型雇用 > 無業」という関係になること、そしてそれと呼応して正社員→非典型雇用→無業の順で相談ネットワークの平均チャンネル数が少数になる傾向は、2011年調査の結果からも（多少曖昧になっている面もあるものの）基本的に見出すことができる。非典型雇用や無業であることによって、相談チャンネルの一つとしての職場関係の分が欠けやすくなったり、さらには相談ネットワーク全体のあり方が多方向的でない形でつくられたりする可能性は、基調として今なお無視できないものである。
- ②第一の点の例外として、「今の仕事や働き方」についての悩み、および「これからの生き方や働き方」についての悩みに関しては、無配偶の男性の正社員と非典型雇用の間で相談ネ

ットワークや相談チャンネルの状況に大きな差はみられなくなっており、そのことが第一の点で述べた傾向を弱める結果になっている。

- ③男性の非典型雇用の相談ネットワークに関しては問題がないとすることは適当とはいえない。年齢層を20～24歳および25～29歳に分けた検討からは、正社員と非典型雇用の中で差が小さくなったとしても一時的なもので、やがて両者の差は顕著になっていく可能性が高いと考えられるからである。
- ④男性の正社員が悩みの相談相手に恵まれていると単純に言い切ることは適当とはいえない。男性の正社員では、相談相手のいない人の割合が2006年に比べて大きく増加しており、そうした人たちの今後は注視する必要がある。

以上から、正社員と非典型雇用との関係は2006年時点よりも流動的になり、相談ネットワークについての差が明確でなくなっていることがうかがえた。それはすなわち、20代でキャリアが何らかの意味で確立されるとは限らなくなり、むしろ20代という期間が全体としてキャリア探索期ないしキャリア形成期になったということの意味していると考えられる。

また男性の正社員で相談相手がいない人が増加するという展開は、正社員でありさえすればすべてが解決するわけではないという当然の事実を教えている。「20代という期間が全体としてキャリア探索期ないしキャリア形成期になった」ということは、一度正社員になったからといって何らかのゴールや社会的安定にたどりつくとは限らないということである。それはすなわち、そうした過程の中で、相談ネットワークも形成されたり衰退したりするということである。相談ネットワークや、それを含むソーシャル・ネットワーク一般に関して、その形成のみならず維持や変化なども視野に入れていくことも、今後求められていくのかもしれない。

以上のように、若者の包括的な移行支援は、当初「包括」という言葉を用いた時点の予想を超えて、さらなる視野の広がりをも求められていると考えられる。若者のソーシャル・ネットワークについての考察もまた、同様の課題を負っているといえる。

5. 政策提案の要約

各章から導かれた政策提案を整理したい。

(1) 新卒就職支援について、就職活動の継続に対する支援および求職者に限ってきた支援の対象層の拡大

先行研究によれば、初期の段階でつまずき、就職活動から撤退する若者は少なくない（労働政策研究・研修機構 2007）。労働行政には、在学中に高校や大学の就職部・キャリアセンターと連携しながら生徒・学生を労働行政に誘導し、卒業後は活動を直接支援する布石を打つことが求められる。その際には、現在は求職者に限られている対

象者層をさらに広げ、就職活動から脱落・撤退した潜在的な就職希望者を取り込んでいけるような政策の内容にすることが求められる。

(2) 中途退学の実態把握と予防、退学後の支援

現在高校中退者に関しては内閣府による調査研究が開始されているが、大学進学率が上昇するなかで、大学中退者の実態についてはほとんど分かっていない。早急の実態把握と、それに基づく支援が求められる。

(3) 企業の正社員登用や新卒枠の緩和の促進のサポート

企業の採用リスクや当事者の負担感を軽減するトライアル雇用や職業訓練を伴ったジョブカード制度、あるいは、新卒3年以内の者の採用促進策などについて、拡大が期待される。

(4) 能力開発の促進について

新卒者にとっての職業訓練の機会はかつてと比べて広がってきてはいるものの、まだ希望する新卒者がすべて職業訓練を受けられるまでに至ってはいない。学校教育を通しての職業能力開発を含め、多様な能力開発の機会を社会的に整備することが重要である。

同時にその際には、専門知識や資格の取得に対する意欲の低下の兆しが若者の意識からうかがえることを考慮し、資格や専門知識に対して具体的なイメージをもつための教育の機会を提供することが欠かせないであろう。

(5) 20歳代をキャリア探索期と捉えた相談機会、能力開発機会の充実

将来の展望においても、相談ネットワークにおいても、20代は試行錯誤の時期となっている。また正社員であっても将来の展望が持てなかったり、相談する人がいないという事態が生じつつある。雇用形態を問わず、幅広くキャリア形成支援の対象とすることが求められる。

最後に、10年間の東京都の20代の若者の変化についてごく簡単にまとめておく。

この10年、景気変動による雇用情勢の変化は、若者のキャリアや就業行動を規定してきた。離学時が景気回復期にあたった若者層の移行は安定し、低迷期にあたった若者の移行は不安定なものとなっていた。ただしその不安定な状態は景気回復期にやや挽回されたようにも見える。なお、就職氷河期世代のその後のキャリアについては「30代のワークスタイル調査」の分析を待って論じたい。

しかし若者の意識や生活面からみると、景気変動に影響を受けつつも、異なる次元で動く部分があることもうかがえた。2001年と2011年の職業意識の分析からは、若者の「堅実化」がこの10年で進行したことが読み取れる。「消費しない若者」「草食化」などは消費市場でしばらく前から話題になっていたが、職業意識という観点からみても、落ち着いた若者像が見えてくる。また、雇用形態によるソーシャル・ネットワークの分化傾向がやや曖昧になり、正社員男性では相談相手がいない割合が増加した。さらに年齢を重ねると正社員であってもソーシャル・ネットワークに内包されにくくなるという可能性を示された。

他方で景気変動とは関係なく、家庭的背景が若者の離学時の就業形態を直接規定するという関係は弱まり、本人の学歴の影響が大きくなった。特に東京都はサービス業中心で、大学進学率が高い地域であるので、学歴の影響が大きくなりやすいことが推測される。

今後の課題としては、現在30代から40代にさしかかっている「就職氷河期世代」を対象に調査を行った「30代のワークスタイル調査」について分析を行い、かつての調査（「就職氷河期世代」が20代の時の調査）と比較しながら、日本社会における若者の移行がこの20年間でどのように展開したのか論じることとしたい。また、2016年にも同様の調査分析を実施し、大都市の若者の就業行動と意識・移行過程についてさらに動的な分析を深め、中期的な見取り図を描くことを目的としたい。

朝倉真粧美・桜井薫・染谷保幸，2005，「サンプリング方法の違いが調査結果に及ぼす影響」
日本行動計量学会第33回大会発表論文抄録集。

日本労働研究機構，2001，『大都市の若者の就業行動と意識－広がるフリーター経験と共感』
調査研究報告書No.146。

労働政策研究・研修機構，2007，『大学生と就職』労働政策研究報告書No.78。

労働政策研究・研修機構，2006，『大都市の若者の就業行動と移行過程』労働政策研究報告書
No.72。

労働政策研究・研修機構，2012，『学卒未就職者に対する支援の課題』労働政策研究報告書。

太郎丸博，2006，『フリーターとニートの社会学』世界思想社。

氏家豊，2010，「エリア・サンプリングの問題点」『行動計量学』第37巻第1号。

第1章 教育から職業への移行の変容

第1節 はじめに

2008年以降の景気後退下、2010年3月学校卒業予定者への求人は大幅に減少し、就職も進学も決まらないまま学校を卒業する若者が増加した。「就職氷河期」時代の未就職卒業者がその後も長く正社員として雇用されず「年長フリーター」問題となっている事態をふまえ、現在では、新規学卒者の就職促進は重要政策として取り組まれているし、さらに、卒業3年以内の既卒者への救済策も講じられている。

若者が学校教育段階から職業生活へと移行するプロセスは、学校卒業時点の景気状況によって、また、企業の採用慣行、すなわち新規学卒採用にどれほど重きを置くかによって大きく異なる。取り組まれている政策は、学卒時点のマッチングの有効性を高め、同時に学卒採用慣行の制約をより緩やかにすることを狙うものだといえよう。

一方で増加する非正規雇用者が、正規雇用者に比べて、雇用調整の対象になりやすく、雇用保険の受給対象から外れることも多く、賃金水準が低く、また、能力開発機会が少ないなど雇用の様々な面で差異があることが指摘され、正規・非正規の二極化構造を解消することを狙った政策も展開されてきた。正社員と同視すべきパートタイム労働者についての賃金等の差別的扱いを禁じたパートタイム労働法の改正、雇用保険の適用範囲の拡大、最低賃金の引き上げなどである。こうした政策を通じて非正規雇用の諸条件が改善しているなら、それは若者の就業への移行にも影響を与えているだろう。

さらに、学卒就職できなかった若者の正社員への移行支援を目的の一つとする政策であるジョブ・カード制度も、紆余曲折を経ながら2008年以来継続して取り組まれている。

本章では、このような経済環境や政策的対応の変化の下で、大都市の若者たちの就業への移行の実態と意識がこれまで(2006年の「第2回 ワークスタイル調査」、および2008年の「地方版 若者ワークスタイル調査」とはどのように変わったのかを、2011年3月に行った「第3回 若者ワークスタイル調査」の結果を用いて明らかにする。その上で、今後の若者キャリア形成支援の課題について考えたい。

2006年の「第2回 若者ワークスタイル調査」では下記の点が明らかになった。すなわち、非典型雇用者比率は2001年の「第1回 若者ワークスタイル調査」に比べて高まっていた。学校卒業後から調査時点までの職業キャリアに注目してみると(その変化は、2001～2006年間の変化というより、1990年代前半～後半にかけてのキャリアと1990年代後半～2000年代前半にかけてのキャリアの対比になるが)、卒業時点も調査時点も正社員ではない「非典型一貫」キャリアが増え、非典型雇用から正社員になるキャリアが減っていた。また、キャリア分岐における学歴の重みが増し、低学歴層が非典型雇用にとどまる傾向が強まり、低学歴の背景には出身階層の影響が見えた。

2006年調査では「年長フリーター」¹問題を重視し、20歳代後半層に焦点を絞ってそのキャリアの実態と意識の分析を行ったが、キャリアについては、離学時点において非典型雇用か失業・無業状態であった場合、男性の約5割、女性の約6割がその後も一度も正社員になっていないこと、20歳代後半の調査時点において非典型雇用か失業・無業状態の者の場合、男性では約7割、女性では約6割が離学時点からそうした就業状況であり、離学時点からキャリアは分断されていることを指摘した。

意識のうえでは、「非典型一貫」のキャリアの場合、現時点での働き方として非典型雇用を望ましいとする者が5～6割いたが、3年後の働き方として非典型雇用を望む者は少なく（男性では1割以下）正社員や自営・家業従事を希望する者が多かった。その自営希望には芸術・芸能系の仕事も少なくなかった。また、「非典型一貫」であってもキャリア形成上の問題だと思わなくなる傾向は強まっていた。景気回復下にあつて労働力需要が高まり、正社員に移行しやすい者は移行し、フリーターを続けざるを得ない背景とキャリアの一つのステップとしてフリーターを続けようという意識とが重なり合つて当時のフリーターを構成しているように思われた。

2006年調査結果は、2008年に行った「地方版 若者ワークスタイル調査」によって、解釈が深まった。すなわち地方で同様の調査を行ったことで、キャリア分岐における学歴の重みが大きいことや「非典型一貫」型を問題だと思わなくなる傾向は、東京の産業構造や学歴構造を反映している部分が大きいことが明らかになった。

地方調査からは、キャリア類型の構成が地方によって異なり、特に低学歴層にとっては地元の製造業における雇用機会の有無が大きく影響することが明らかになった。第2回調査でみられた学歴差の拡大は、サービス業が多く、また高等教育への進学率がきわめて高いため低学歴であることが不利に働きやすい大都市の状況を反映したものであった。また、地方調査では、非典型雇用であり続けることへの不安や危惧が、とりわけ男性では強く示され、東京でみられたような非典型キャリアへの肯定観とは異なるものが示された。2006年調査で見えた意識の特徴も大都市ならではの事情が反映されていたといえる。

なお、学校中退者の離学直後の状況については、地域を問わずアルバイトや無職がほとんどであり、新卒採用の仕組みにのれなかった場合には正社員になりにくいという点については、大都市でも地方でも共通していた。

地方調査では、職業能力における自らの「強み」とその獲得経路について新たな質問を設けた。ここからは「正社員定着」の場合、学校時代の勉強や資格などを評価する割合が高いことなどが明らかになったが、これはキャリア形成と職業能力の獲得との間の関係に踏み込む分析の試みであった。

以上のこれまでのファインディングスを踏まえて、本章では以下の点を検討する。

¹ 総務省統計局「労働力調査」から推計されるフリーター数は2003年以降減少に転じていたが、年長層については減少していず「年長フリーター」問題とされていた。

- ①近年の離学時の就業状況の変化を景気動向の影響をふくめて明らかにする。また、これに対する社会階層要因の影響が2006年調査結果から変化したか否かを検討する。
- ②離学時から調査時点までの職業生活への移行のプロセスを類型化し、離学時の就業状況の影響が、2006年調査結果と比べた時どう変化しているかを明らかにする。
- ③就業形態による就業職種、労働条件、社会保険への加入状況などの差異を確認する。同時に、そこに現職以前のキャリアの影響があるかを検討する。
- ④年長層である20歳代後半の若者に注目し、そのキャリア形成の状況を明らかにする。特に、非典型就業から正社員への移行にかかわる実態や意識を、2006年調査結果と比較しながら明らかにする。
- ⑤獲得した職業能力の種類と獲得経路を検討し、正社員としての就職・移行に効果的な職業能力形成について検討する。
- ⑥キャリア形成の現状を踏まえて、今後の若者就業支援政策のあり方を検討する。

本章で分析に用いるデータは、基本的には2011年に実施された「第3回ワークスタイル調査」結果であるが、時系列比較のために、2006年の「第2回ワークスタイル調査」の個票のうち20～29歳層（第3回調査のサンプル構成に相当）のみを取り出して再集計したものも併せて用いる。

第2節以降の各節では、上記の各課題を順に検討する。

第2節 卒業直後(中退直後)の状況

1. 離学時の就業状況

「第3回ワークスタイル調査」の対象者は東京都内に在住する20～29歳の男女（主婦と学生を除く）である。学校を卒業または中途退学した（以降、離学と呼ぶ）直後の就業状況は、男女とも正社員が約6割、パート・アルバイトが約2割であり、図表下段の2006年調査²に比べると、正社員比率が高まりパート・アルバイト比率が低くなった（図表1-1）。

図表1-2は、これを学歴別にみたもので、正社員比率は高学歴者ほど高く、中退者では著しく低い。これは2001年調査、2006年調査から変わらない傾向である。大学・大学院卒の正社員比率は2006年よりも特に高くなっており（2006年の大卒・大学院卒の離学直後の正社員比率は、男性68.6%、女性67.3%、高卒のそれは男性49.3%、女性41.5%）、学歴差の拡大傾向が引き続きみられた。また、高卒者の離学時の正社員比率は、学校や職業安定機関を通して把握されている就職率や一時的な雇用への入職率を勘案すると、かなり低い。求職者として把握されていない卒業者が実際には労働市場に入りアルバイトなどに就いていることが考えられる。

² 2006年に実施された「第2回ワークスタイル調査」。本章では、2011年の第3回調査のサンプル構成に合わせて、2006年調査の個票のうち20～29歳層のみを取り出して再集計し、随所で比較のため提示している。

図表 1-1 離学時の就業状況

単位：%

	正社員 (公務含 む)	アルバイト ・パート	契約・ 派遣等	自営・ 家業	失業	無職で 何もして いない	無職で 進学準 備・結婚 準備等	その 他・無 回答	合計	
男女計	58.6	21.5	8.1	2.1	3.7	2.0	2.0	1.9	100.0	2,058
男性	59.2	21.7	5.8	2.4	4.6	2.0	2.2	2.0	100.0	1,030
女性	58.1	21.3	10.4	1.8	2.9	1.9	1.8	1.8	100.0	1,028
2006年男性	53.7	26.7	5.5	3.8	3.1	3.6	3.1	0.4	100.0	923
2006年女性	54.3	28.0	8.7	0.6	2.6	2.6	2.7	0.6	100.0	851

図表 1-2 離学時の就業状況（学歴別）

単位：%

	正社員(公 務含む)	アルバイ ト・パート	契約・派 遣等	自営・家 業	失業・無 職	その他・無 回答	合計	N
男性 高卒	46.6	34.7	4.1	3.2	9.1	2.3	100.0	219
専門・短大・高専卒	66.1	16.3	8.6	1.7	6.4	0.9	100.0	233
大学・大学院卒	78.1	7.5	4.7	2.1	6.5	1.2	100.0	429
中卒・高校中退	10.7	46.4	5.4	5.4	32.1	0.0	100.0	56
高等教育中退	9.5	63.5	9.5	2.7	10.8	4.1	100.0	74
その他不明	31.6	21.1	5.3	0.0	10.5	31.6	100.0	19
男性計	59.2	21.7	5.8	2.4	8.8	2.0	100.0	1,030
女性 高卒	43.2	36.4	9.3	4.3	4.3	2.5	100.0	162
専門・短大・高専卒	58.5	20.4	12.9	0.6	5.6	2.0	100.0	357
大学・大学院卒	74.3	7.9	9.8	1.2	5.8	1.0	100.0	417
中卒・高校中退	2.9	70.6	0.0	5.9	20.6	0.0	100.0	34
高等教育中退	4.3	58.7	8.7	6.5	21.7	0.0	100.0	46
その他不明	41.7	25.0	8.3	0.0	0.0	25.0	100.0	12
女性計	58.1	21.3	10.4	1.8	6.6	1.8	100.0	1,028
男女計 高卒	45.1	35.4	6.3	3.7	7.1	2.4	100.0	381
専門・短大・高専卒	61.5	18.8	11.2	1.0	5.9	1.5	100.0	590
大学・大学院卒	76.2	7.7	7.2	1.7	6.1	1.1	100.0	846
中卒・高校中退	7.8	55.6	3.3	5.6	27.8	0.0	100.0	90
高等教育中退	7.5	61.7	9.2	4.2	15.0	2.5	100.0	120
その他不明	35.5	22.6	6.5	0.0	6.5	29.0	100.0	31
男女計	58.6	21.5	8.1	2.1	7.7	1.9	100.0	2,058

対象者の離学時期は一律でなく、学歴によって、1997年から2011年まで幅広く分布している。正社員就職の可能性は就職活動時期の景気によって左右されるので、この間の景気変動をみると、2000年と2002年に景気の谷があり、2008年に山があるかたちになっている。就職活動の時期は学歴によって異なるが、おおむね卒業の半年から1年半ぐらい前からなので、そのずれを織り込むと、景気拡大の恩恵を受けたのは、およそ2005年3月卒から2009年3月卒といえよう。そこで、離学時期を2004年以前と2005年～2009年、2010年以降の3期に分けて離学直後の正社員比率をみる（図表1-3）。高卒女性では異なるものの、全般に2005～2009年間の離学者は、正社員比率がやや高い傾向が確認され、これは景気変動の影響だと思われる。

図表 1-3 離学時期別・離学時の正社員比率（学歴別）

		離学時期								合計	
		2004年以前		2005～2009年		2010年以降		無回答・不明			
		正社員比率	N	正社員比率	N	正社員比率	N	正社員比率	N	正社員比率	N
男性	高卒	45.0%	100	52.0%	98	-	3	27.8%	18	46.6%	219
	専門・短大・高専卒	60.9%	69	68.3%	126	64.0%	25	76.9%	13	66.1%	233
	大学・大学院卒	79.4%	34	80.2%	303	68.8%	77	80.0%	15	78.1%	429
	中卒・高校中退	7.7%	39	16.7%	12	-	0	-	5	10.7%	56
	高等教育中退	5.9%	17	11.9%	42	9.1%	11	-	4	9.5%	74
	その他不明	-	1	-	4	-	1	23.1%	13	31.6%	19
男性計		45.4%	260	66.5%	585	61.5%	117	45.6%	68	59.2%	1,030
女性	高卒	49.2%	65	39.8%	83	-	0	35.7%	14	43.2%	162
	専門・短大・高専卒	59.8%	92	60.5%	195	54.2%	48	45.5%	22	58.5%	357
	大学・大学院卒	64.5%	31	79.8%	277	64.8%	91	55.6%	18	74.3%	417
	中卒・高校中退	0.0%	15	6.7%	15	-	0	-	4	2.9%	34
	高等教育中退	0.0%	13	9.1%	22	-	8	-	3	4.3%	46
	その他不明	-	1	-	3	-	0	-	8	41.7%	12
女性計		49.3%	217	63.5%	595	57.8%	147	39.1%	69	58.1%	1,028

注：10人以下のセルは正社員比率を計算していない。

調査対象が20～29歳であることから、大卒の2004年以前卒業者は少なく、高卒の2010年以降卒業者はほとんどいない。

2. 学歴と親の学歴・生家の豊かさ

離学直後に就職できるか否かに親の学歴や生家の豊かさが影響しているのだろうか。こうした要因が安定的な就業への移行を阻む要因になっているとしたら、貧困の世代間連鎖につながる。

2001年調査では、低学歴の若い世代においてその傾向がある程度認められた。しかし、2006年調査の分析においては、親の学歴や家の豊かさの影響は、本人の学歴に対しては認められたが、本人の学歴を固定すれば、親の学歴や生家の豊かさの影響は初職の就業形態には認められなかった。本調査でも再度このことを検討する。

本人の離学時期と学歴をそろえたうえで、両親の学歴及び生家の豊かさによって、離学直後の正社員比率が異なるかみたのが、図表1-4から図表1-6である。ここからは、父母の学歴や生家が豊かさの水準が本人の正社員比率を高めるという関係は確認できない。2010年以降の高等教育卒の場合に、例外的に生家が豊かであるほど正社員比率が高い傾向がみられるが、これだけでは階層的要因が直接に正社員就職を左右しているとは言えないだろう。

一方、本人の学歴と親の学歴・豊かさの間には、2006年調査と同様に一定の関係が確認された。図表1-7のとおり、本人学歴が高い場合は、親も高学歴である場合が多く、家計も豊かだと認識している傾向がある。

図表 1-4 父親の最終学歴別・離学時の正社員比率（離学時期・学歴別）

本人の離学時期・学歴	父親の最終学歴									
	中卒		高卒		専門各種、短大高専		大学・大学院		合計*	
	正社員比率	N	正社員比率	N	正社員比率	N	正社員比率	N	正社員比率	N
計	52.3%	130	55.1%	615	60.5%	205	64.5%	921	58.6%	2,058
2004年以前高卒	66.7%	21	47.5%	80	46.2%	13	29.2%	24	46.7%	165
05～09年高卒	38.9%	18	48.3%	89	73.3%	15	42.1%	38	46.4%	181
2004年以前専短卒	66.7%	18	64.0%	50	76.5%	17	60.7%	56	60.2%	161
05～09年専短卒	64.3%	14	64.4%	104	66.7%	51	60.2%	123	63.6%	321
2004年以前大卒	-	1	78.9%	19	-	5	66.7%	36	72.3%	65
05～09年大卒	82.4%	17	78.3%	120	80.0%	40	80.7%	383	80.0%	580
2010年以降高等教育卒	-	7	59.6%	52	55.2%	29	69.5%	141	63.9%	241
学校中退	11.1%	27	5.9%	68	5.0%	20	7.8%	64	7.6%	210
その他	-	7	45.5%	33	46.7%	15	48.2%	56	47.8%	134

注：合計には、無回答・不明を含む。

図表 1-5 母親の最終学歴別・離学時の正社員比率（離学時期・学歴別）

本人の離学時期・学歴	母親の最終学歴											
	中卒		高卒		専門・各種		短大・高専		大学・大学院		合計*	
	正社員比率	N	正社員比率	N	正社員比率	N	正社員比率	N	正社員比率	N	正社員比率	N
計	57.5%	73	57.7%	762	53.3%	246	64.3%	387	63.5%	417	58.6%	2,058
2004年以前高卒	90.9%	11	51.1%	92	46.2%	13	27.8%	18	-	8	46.7%	165
05～09年高卒	58.3%	12	48.4%	93	53.8%	26	38.5%	13	33.3%	18	46.4%	181
2004年以前専短卒	90.0%	10	68.6%	70	56.0%	25	56.3%	16	45.5%	22	60.2%	161
05～09年専短卒	-	5	66.7%	132	48.9%	47	76.3%	59	57.4%	47	63.6%	321
2004年以前大卒	-	0	64.0%	25	-	9	81.3%	16	72.7%	11	72.3%	65
05～09年大卒	80.0%	10	80.0%	165	76.4%	55	79.4%	141	81.5%	189	80.0%	580
2010年以降高等教育卒	-	3	53.8%	65	69.2%	26	68.5%	73	63.9%	61	63.9%	241
学校中退	9.5%	21	6.8%	74	3.3%	30	6.3%	32	13.3%	30	7.6%	210
その他	-	1	52.2%	46	40.0%	15	42.1%	19	54.8%	31	47.8%	134

注：合計には、無回答・不明を含む。

図表 1-6 生家の豊かさの認識別・離学時の正社員比率（離学時期・学歴別）

本人の離学時期・学歴	実家の経済的な豊かさ											
	豊かである		やや豊か		あまり豊かでない		豊かでない		わからない		合計*	
	正社員比率	N	正社員比率	N	正社員比率	N	正社員比率	N	正社員比率	N	正社員比率	N
計	63.2%	223	65.0%	761	55.3%	553	49.3%	286	54.0%	202	58.6%	2,058
2004年以前高卒	-	9	44.0%	50	54.8%	42	36.1%	36	60.9%	23	46.7%	165
05～09年高卒	58.3%	12	50.0%	40	41.1%	73	48.6%	37	50.0%	16	46.4%	181
2004年以前専短卒	66.7%	18	65.6%	64	57.5%	40	50.0%	20	52.6%	19	60.2%	161
05～09年専短卒	65.7%	35	58.0%	100	64.8%	88	72.7%	44	63.8%	47	63.6%	321
2004年以前大卒	80.0%	10	60.9%	23	75.0%	20	-	8	-	3	72.3%	65
05～09年大卒	78.1%	73	83.6%	275	81.1%	132	69.6%	56	71.4%	42	80.0%	580
2010年以降高等教育卒	71.4%	28	69.8%	116	53.0%	66	52.9%	17	54.5%	11	63.9%	241
学校中退	11.8%	17	9.6%	52	4.8%	62	7.7%	52	7.7%	26	7.6%	210
その他	42.9%	21	56.1%	41	43.3%	30	50.0%	16	46.7%	15	47.8%	134

注：合計には、無回答・不明を含む。

親の学歴や家計が本人の学歴を規定し、学歴が離学直後の就業形態を規定する関係が確認されたが、こうした関係であるなら、高等教育進学を支援することで貧困の連鎖を阻める可

能性は高い。

図表 1-7 離学時期・学歴別父母の大学・短大・高専卒業率及び生家の豊かさの認識

	対象数 (N)	親の大学・短大・高専卒業率		生家の経済的な 豊かさ*
		父	母	
2004年以前高卒	165	16.9%	15.7%	-0.28
05～09年高卒	181	22.1%	17.1%	-0.46
2004年以前専短卒	161	36.7%	23.6%	0.12
05～09年専短卒	321	43.0%	33.0%	-0.02
2004年以前大卒	65	58.5%	41.5%	0.11
05～09年大卒	580	68.4%	56.9%	0.31
2010年以降高等教育卒	241	63.1%	55.6%	0.30
学校中退	210	32.9%	29.5%	-0.38
その他	138	46.3%	37.3%	0.16
合計	2,058	47.8%	39.1%	0.04

注:* 「豊かである」=2点、「やや豊かである」=1点、「わからない」=0点、「あまり豊かでない」=-1点、「豊かでない」=-2点とした時の平均値。

第3節 卒業・中退時から現在までのキャリア

この節では、離学以降、調査時点までの就業の有無、就業形態の変化を明らかにし、ここから職業キャリアを類型化する。

1. 正社員就職した者の離転職

最初に、離学直後正社員になった場合のその後の離転職状況を見る。図表1-8の通り、男性の66.7%、女性の66.8%が調査時点まで就職先に定着している。2006年調査での正社員就職者の定着率は、男性60.5%、女性で56.9%であり、2011年調査結果はこれより高くなっている。景気拡大期に就職した者が多いことから早期離職率が低下していると思われる。

離学から時間が経過している者ほど離転職を経験する可能性は高い。離学時期別にみると、2005～2009年卒では男女とも定着率は約70%だが、学歴別に見ると違いがあり高学歴層のほうが定着率は高い(図表1-9)。これは厚生労働省の就職後3年以内の離職率統計でも明らかな傾向である。一方、離学後7年以上たっている2004年以前卒業者の場合は、定着率は40%前後と低いが、これには学歴差はあまりない。ケースが少ないので一般化はできないが、就職3年以内の離職率は高学歴者ほど少ないが、高等教育卒業者ではそれ以降の離職が多い可能性がある。男女の差もあまりない(2004年以前卒の継続率は大卒男性44.4%、同女性30.0%、専短卒男性31.0%、同女性36.4%)が、本調査が専業主婦を対象者から除いていることから女性の離職率が低く出ている可能性がある。

図表 1-8 正社員就職者の離転職状況

単位：%

	2011年調査					2006年調査	
	続けている	勤務先を変わった、辞めた	無回答	合計	N	続けている	N
男性	66.7	32.6	0.7	100.0	610	60.5	496
女性	66.8	32.7	0.5	100.0	597	56.9	462
男女計	66.8	32.6	0.6	100.0	1,207	58.8	958

図表 1-9 正社員就職者の離転職状況（離学時期別）

単位：%

性別	離学時期	続けている	勤務先を変わった、辞めた	無回答	合計	N
男性	2004年以前	40.7	58.5	0.8	100.0	118
	2005～2009年	71.0	28.5	0.5	100.0	389
	2010年以降	87.5	11.1	1.4	100.0	72
	男性計	66.7	32.6	0.7	100.0	610
女性	2004年以前	34.6	64.5	0.9	100.0	107
	2005～2009年	71.2	28.6	0.3	100.0	378
	2010年以降	88.2	10.6	1.2	100.0	85
	女性計	66.8	32.7	0.5	100.0	597
男女計	2004年以前	37.8	61.3	0.9	100.0	225
	2005～2009年	71.1	28.6	0.4	100.0	767
	2010年以降	87.9	10.8	1.3	100.0	157
	男女計	66.8	32.6	0.6	100.0	1,207

注：合計には、無回答・不明を含む。

図表 1-10 正社員就職者の離転職状況（離学時期・学歴別）

単位：%

離学時期	続けている	勤務先を変わった、辞めた	無回答	合計	N
2004年以前高卒	40.3	57.1	2.6	100.0	77
05～09年高卒	54.8	45.2	0.0	100.0	84
2004年以前専短卒	34.0	66.0	0.0	100.0	97
05～09年専短卒	63.2	35.8	1.0	100.0	204
2004年以前大卒	38.3	61.7	0.0	100.0	47
05～09年大卒	78.2	21.8	0.0	100.0	464
2010年以降高等教育卒	88.3	10.4	1.3	100.0	154
学校中退	37.5	62.5	0.0	100.0	16
その他	68.8	29.7	1.6	100.0	64
合計	66.8	32.6	0.6	100.0	1,207

2. 失業・無業、非典型雇用からの移動

離学当初、アルバイトやパートなどの非典型雇用で働いた者や無業、失業状態であった者が、その後正社員（公務員含む）を経験した比率は、男性で約5割、女性で約3割であった（図表1-11）。2006年調査と比べると、男性では離学後の状態がどのようであっても正社員経験率が高まっている。女性では契約社員・派遣社員であった場合の正社員経験率は約4割、アルバイト・パートも失業・無業状態も約3割で、これは2006年と変わらない。

図表 1-1-1 離学時失業・無業・非典型雇用から正社員への移行状況 単位：%

		2011年調査		2006年調査	
		後に正社員(公務員含む)経験あり	N	後に正社員(公務員含む)経験あり	N
男性	アルバイト・パート	52.5	223	42.7	246
	契約・派遣等	51.7	60	37.3	51
	失業・無職	47.3	91	39.6	91
	男性計	51.1	374	41.2	388
女性	アルバイト・パート	28.3	219	28.6	238
	契約・派遣等	40.2	107	39.2	74
	失業・無職	27.9	68	25.4	67
	女性計	31.5	394	30.1	379
男女計	アルバイト・パート	40.5	442	35.7	484
	契約・派遣等	44.3	167	38.4	125
	失業・無職	39.0	159	33.5	158
	男女計	41.0	768	35.7	767

3. 調査時点における就業状況

調査時点においては、正社員は公務員を含めれば約6割であり、男性では7割近い。アルバイト・パートは約2割である(図表1-1-2)。この比率は離学直後と大きく変わってはいないが、男性で正社員が増え、アルバイト・パートが減っている。また、2006年調査と比べると、正社員比率は高く、アルバイト・パート比率は低くなっている。

図表 1-1-2 現在の就業状況

単位：%

	2011年調査			2006年調査	
	男性	女性	男女計	男性	女性
合計	1,030	1,028	2,058	923	851
	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
正社員	64.2	52.4	58.3	57.6	48.1
公務員	2.7	2.2	2.5	1.6	1.8
契約社員・嘱託	4.1	8.0	6.0	4.6	6.5
派遣社員	1.4	4.8	3.1	2.3	6.2
アルバイト・パート	16.8	24.6	20.7	22.8	30.8
自営業・自由業	3.6	1.7	2.6	3.4	0.6
家族従業者	1.3	1.1	1.2	3.8	1.5
無業計	6.0	5.3	5.6	3.7	4.5
無職で仕事を探していた	3.7	2.3	3.0		
無職で仕事以外の活動	0.6	1.4	1.0		
無職で特に何もしていない	1.2	1.3	1.2		
その他	0.2	0.0	0.1		
福祉的就業	0.2	0.1	0.1		
療養中	0.2	0.2	0.2		

4. これまで経験した就業形態

これまで経験した就業形態や、無職経験を複数回答で尋ねた結果が、図表1-13である。

正社員・公務員経験者が合わせて6割強と多く、またこの数値は2006年調査より少し多い。アルバイト・パート経験者は4割弱で、これは2006年調査より10%ポイントも減少している。1ヶ月以上の無職を経験した者は約3割で、これは2006年調査の水準とほとんど変わらない。

この質問は複数回答の形式であり、一人の人が正社員とアルバイト・パートなどの非典型就業の両方を経験していることがある。それを勘案して整理しなおすと、正社員のみを経験した者は全体の47.2%、非典型就業のみを経験した者は22.0%、正社員と非典型就業の両方を経験した者は28.1%（不明2.7%）であった。2006年にはそれぞれ39.6%、28.6%、30.9%であったので、正社員のみを経験が大きく増え、非典型就業のみを経験が減少した。

図表1-13 これまで経験した就業形態（複数回答）

単位：%

	2001年			2006年	
	男性	女性	男女計	男性	女性
合計	1,030	1,028	2,058	923	851
	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
1ヶ月以上無職だったことがある (学生や主婦ではなく)	33.2	26.6	29.9	31.1	30.4
働いたことはない	1.2	1.5	1.3	0.3	0.4
正社員	65.0	59.9	62.4	61.2	58.0
公務員	2.7	2.6	2.7	1.3	2.0
契約社員・嘱託	8.7	13.0	10.9	8.0	10.9
派遣社員	6.2	11.3	8.7	5.7	11.5
パート・アルバイト	34.1	39.8	36.9	45.8	49.9
自営業・自由業	3.9	2.2	3.1	3.6	1.3
家族従業者(家の仕事)	1.7	2.7	2.2	5.1	2.5
その他の働き方	0.5	0.2	0.3	1.1	0.7
無回答	0.0	0.0	0.0	0.3	0.6

5. キャリア類型の作成とその分布

ここまで見てきた離学直後の就業状況、その後の移動、経験した就業形態、調査時点の就業状況から、就業形態に注目してキャリアを類型化する（図表1-14）。

これを集約すると（図表1-15）、最も多いのは「正社員定着」（39.2%）であり、次が「非典型一貫」（21.6%）である。2006年調査と比べると明らかに前者が増えて後者が減った。離学直後に正社員就職した者が増え、早期離職が減ったことを反映していると思われる。

図表 1-14 職業キャリアの分布

単位：%

	男性	女性	男女計		
現在正社員					
正社員定着	410	397	807	39.2	正社員定着
正社員→正社員	77	54	131	6.4	正社員転職
正社員→非典型→正社員	29	28	57	2.8	正社員一時他形態
非典型→正社員	124	69	193	9.4	} (11.9%) 他形態から正社員
自営・家業→正社員	4	0	4	0.2	
自営・家業→非典型→正社員	2	1	3	0.1	
失業・無業→正社員	2	3	21	1.0	
失業・無業→非典型→正社員	2	8	22	1.1	
失業・無業→自営・家業→正社員	2	0	1	0.0	
その他→非典型→正社員	2	1	1	0.0	
現在非典型					
非典型のみ	117	206	323	15.7	} (21.6%) 非典型一貫
非典型→正社員→非典型	11	25	36	1.7	
自営・家業→非典型	3	3	6	0.3	
自営・家業→正社員→非典型	0	1	1	0.0	
失業・無業→非典型	21	34	55	2.7	
失業・無業→正社員→非典型	8	5	13	0.6	
その他→非典型	2	7	9	0.4	
その他→正社員→非典型	0	1	1	0.0	
正社員→非典型	63	98	161	7.8	正社員から非典型
現在自営・家業					
自営・家業のみ	13	14	27	1.3	} (3.8%) 自営・家業
自営・家業→正社員→自営・家業	2	0	2	0.1	
正社員→自営・家業	14	5	19	0.9	
非典型→自営・家業	8	6	14	0.7	
非典型→正社員→自営・家業	5	2	7	0.3	
失業・無業→非典型→自営・家業	2	1	3	0.1	
失業・無業→自営・家業	6	0	6	0.3	
現在無業					
失業・無業のみ	8	6	14	0.7	} (5.2%) 現在無業
失業・無業→正社員→失業・無業	2	2	4	0.2	
失業・無業→非典型→失業・無業	7	8	15	0.7	
失業・無業→自営・家業→失業・無業	1	0	1	0.0	
正社員→失業・無業	13	8	21	1.0	
正社員→非典型→失業・無業	5	7	12	0.6	
非典型→正社員→失業・無業	3	4	7	0.3	
非典型→失業・無業	16	14	30	1.5	
自営・家業→失業・無業	1	0	1	0.0	
その他→失業・無業	1	0	1	0.0	
無回答→失業・無業	0	2	2	0.1	
その他					
無回答→正社員	9	1	10	0.5	} (1.3%) その他・不明
無回答→非典型	3	4	7	0.3	
無回答→正社員→非典型	1	0	1	0.0	
無回答→非典型→正社員	1	1	2	0.1	
その他のキャリア	5	2	7	0.3	
合計	1,030	1,028	2,058	100.0	

図表 1-15 職業キャリアの分布（集約）

単位：%

		正社員定着	正社員転職	正社員から非典型	正社員一時他形態	非典型一貫	他形態から正社員	自営・家業	現在無業	その他・不明	合計
2011年	男性	39.8	7.5	6.1	2.8	15.7	15.8	4.9	5.5	1.8	100.0
	女性	38.6	5.3	9.5	2.7	27.4	8.0	2.7	5.0	0.8	100.0
	合計	39.2	6.4	7.8	2.8	21.6	11.9	3.8	5.2	1.3	100.0
2006年	男性	32.6	7.5	6.3	4.7	23.6	14.7	7.2	3.4	0.1	100.0
	女性	30.8	6.1	11.6	3.8	32.2	9.4	2.0	3.9	0.2	100.0
	合計	31.7	6.8	8.9	4.2	27.7	12.2	4.7	3.6	0.2	100.0

6. 学歴・世代とキャリア

このキャリアの分布を学歴別にみる(図表1-16)。大学・大学院卒者では、とりわけ「正社員定着」の者が多く男女とも6割を占める。男女差は小さい。高卒者の場合、男性では、「正社員定着」と「非典型一貫」、さらに「他形態から正社員」の3つのタイプが多い。高卒女性では、「非典型一貫」が4割と多い。高卒男性が正社員に移行しているのに対して女性は移行していないということである。専門・短大・高専卒の場合は、「正社員定着」の比率も「非典型一貫」の比率も高卒と大学・大学院卒の間の値となっている。学校中退者は高校中退でも高等教育中退でも、「非典型一貫」が多い。とりわけ女性で多い。男性では他形態から正社員も多く、中退した場合も男性のほうがより多く非典型雇用から正社員に移行しているということである。

2006年調査と比較すると、大学・大学院卒では「正社員定着」の割合が増えている。これに対して、その他の学歴では同割合はほとんどかわらない。また、「非典型一貫」は減っているが、男性で大きく減り、女性ではあまりかわらない。離学直後に正社員になる比率は大学・大学院卒で高くなり、また、非典型雇用から正社員への移行者は男性で多くなっていたが、これがキャリア分布の変化として現れている。

図表1-16 学歴別現職業キャリアの分布

単位：%

	正社員 定着	正社員 転職	正社員 から非 典型	正社員 一時他 形態	非典型 一貫	他形態 から正 社員	自営・ 家業	現在無 業	その 他・不 明	合計	
高卒	26.5	5.5	6.8	4.1	22.4	23.3	5.5	4.6	1.4	100.0	219
専門・短大・高専卒	35.6	13.3	9.0	3.4	13.3	15.0	4.7	4.7	0.9	100.0	233
男 大学・大学院卒	<u>60.6</u>	7.0	5.6	2.6	8.6	7.7	3.0	4.2	0.7	100.0	429
性 中卒・高校中退	5.4	3.6	1.8	0.0	21.4	33.9	16.1	<u>16.1</u>	1.8	100.0	56
高等教育中退	1.4	1.4	2.7	1.4	36.5	33.8	6.8	12.2	4.1	100.0	74
男性計	<u>39.8</u>	7.5	6.1	2.8	15.7	15.8	4.9	5.5	1.8	100.0	1,030
高卒	14.2	2.5	19.1	4.3	40.1	6.2	4.3	8.0	1.2	100.0	162
専門・短大・高専卒	34.5	6.7	11.5	3.9	26.9	10.1	2.5	3.4	0.6	100.0	357
女 大学・大学院卒	<u>58.8</u>	6.2	5.8	1.7	14.9	6.5	2.2	3.6	0.5	100.0	417
性 中卒・高校中退	2.9	0.0	0.0	0.0	76.5	11.8	2.9	5.9	0.0	100.0	34
高等教育中退	2.2	0.0	2.2	0.0	65.2	8.7	4.3	17.4	0.0	100.0	46
女性計	<u>38.6</u>	5.3	9.5	2.7	27.4	8.0	2.7	5.0	0.8	100.0	1,028
高卒	21.3	4.2	12.1	4.2	29.9	16.0	5.0	6.0	1.3	100.0	381
専門・短大・高専卒	34.9	9.3	10.5	3.7	21.5	12.0	3.4	3.9	0.7	100.0	590
男女計 大学・大学院卒	<u>59.7</u>	6.6	5.7	2.1	11.7	7.1	2.6	3.9	0.6	100.0	846
中卒・高校中退	4.4	2.2	1.1	0.0	42.2	25.6	11.1	12.2	1.1	100.0	90
高等教育中退	1.7	0.8	2.5	0.8	47.5	24.2	5.8	14.2	2.5	100.0	120
男女計	<u>39.2</u>	6.4	7.8	2.8	21.6	11.9	3.8	5.2	1.3	100.0	2,058

注：計には学歴不明を含む。下線は、2006年調査結果と比べて、7%ポイント以上の増加、斜体は7%ポイント以上の減少を示す。

(図表 1-16 附表 2006 年調査結果)

単位：%

	正社員 定着	正社員 転職	正社員 から非 典型	正社員 一時他 形態	非典型 一貫	他形態 から正 社員	自営・ 家業	現在無 業	その 他・不 明	合計	
高卒	22.5	7.3	9.6	6.0	28.1	15.2	7.3	3.6	0.3	100.0	302
専門・短大・高専卒	33.8	10.3	5.6	5.2	22.5	11.7	9.9	0.9	0.0	100.0	213
男性 大学・大学院卒	53.0	7.8	4.2	2.5	14.1	10.2	4.6	3.5	0.0	100.0	283
中卒・高校中退	6.1	3.0	7.6	6.1	28.8	30.3	12.1	6.1	0.0	100.0	66
高等教育中退	10.5	1.8	0.0	5.3	45.6	28.1	1.8	7.0	0.0	100.0	57
男性計	32.6	7.5	6.3	4.7	23.6	14.7	7.2	3.4	0.1	100.0	923
高卒	17.9	3.4	15.0	2.4	46.9	4.8	2.4	6.8	0.5	100.0	207
専門・短大・高専卒	33.9	8.2	14.7	5.4	22.6	9.6	2.5	2.8	0.3	100.0	354
女性 大学・大学院卒	49.5	7.7	5.3	3.8	22.1	9.1	1.0	1.4	0.0	100.0	208
中卒・高校中退	0.0	0.0	4.5	0.0	68.2	18.2	0.0	9.1	0.0	100.0	44
高等教育中退	5.4	0.0	8.1	0.0	54.1	24.3	2.7	5.4	0.0	100.0	37
女性計	30.8	6.1	11.6	3.8	32.2	9.4	2.0	3.9	0.2	100.0	851
高卒	20.6	5.7	11.8	4.5	35.8	11.0	5.3	4.9	0.4	100.0	509
専門・短大・高専卒	33.9	9.0	11.3	5.3	22.6	10.4	5.3	2.1	0.2	100.0	567
男女計 大学・大学院卒	51.5	7.7	4.7	3.1	17.5	9.8	3.1	2.6	0.0	100.0	491
中卒・高校中退	3.6	1.8	6.4	3.6	44.5	25.5	7.3	7.3	0.0	100.0	110
高等教育中退	8.5	1.1	3.2	3.2	48.9	26.6	2.1	6.4	0.0	100.0	94
男女計	31.7	6.8	8.9	4.2	27.7	12.2	4.7	3.6	0.2	100.0	1,774

注：計には、学歴不明を含む。

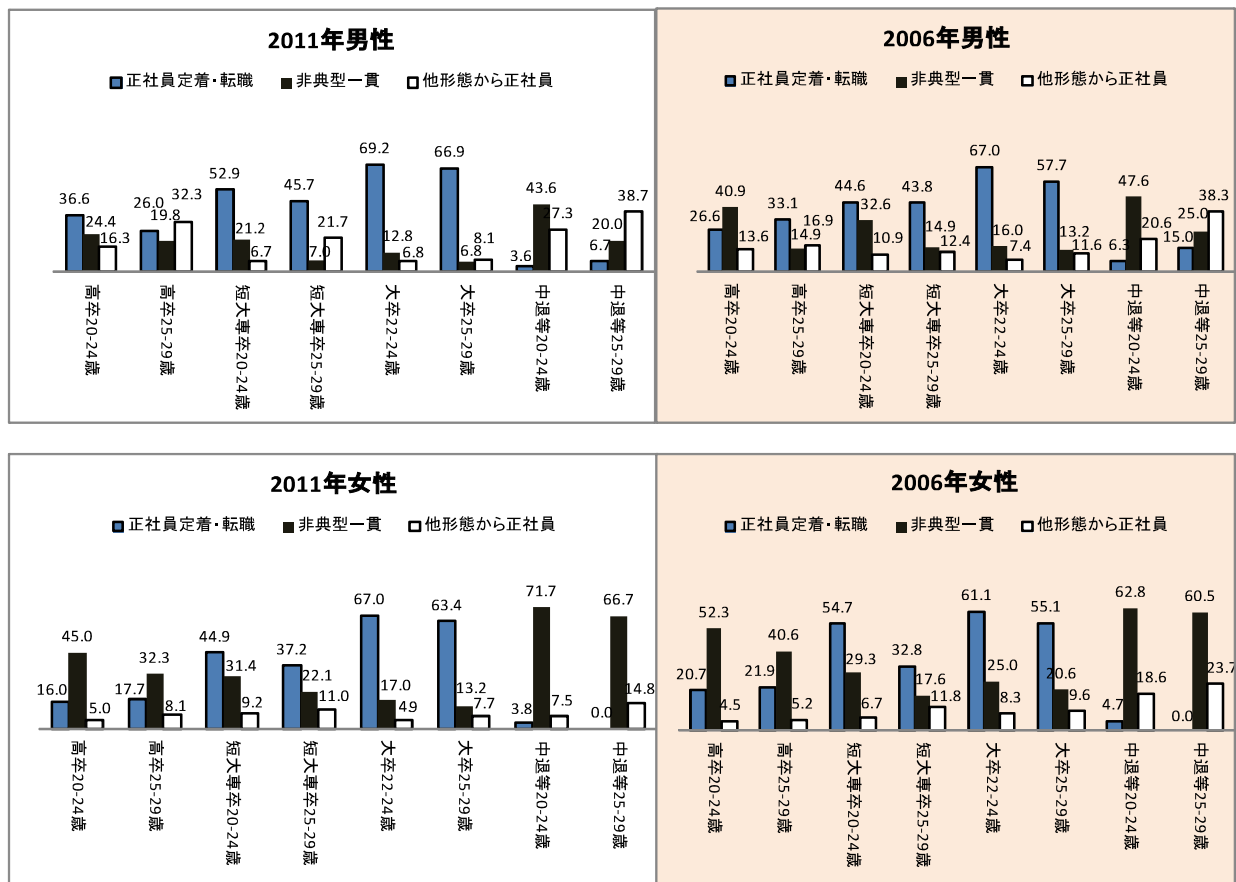
次に、この職業キャリアを 20 歳代前半と後半に分けて整理し、世代による違いをみる。ここでは正社員市場内にとどまっているという意味で、「正社員定着」と「正社員転職」を合わせて一類型とし、これと「非典型一貫」「他形態から正社員」を対比させて、20 歳代前半と後半とのキャリアの分布の差を、2006 年調査でのそれとの差を含めて検討する。加齢によって個人の行動が変わる側面と、世代によって就業環境が変わった影響との両方の効果が考えられる。

図表 1-17 のとおり、男性では、当初から正社員が多い大学・大学院卒を除き、高卒も短大専卒（専門・短大・高専卒）も、中退者も 20 歳代後半のほうが、20 歳代前半より「非典型一貫」が少なく、「他形態から正社員」が多い。ここから男性では 20 歳代前半から後半にかけて正社員への移行行動が盛んにおこなわれることがうかがわれる。この傾向は 2006 年調査にも見られるが、2011 年調査のほうがより顕著である。また、20 歳代前半層の「正社員定着・転職」率は全般に 2006 年調査より 2011 年調査のほうが高く、離学直後から正社員市場にとどまる者が増加しているといえる。

女性でも「非典型一貫」は 20 歳代後半のほうが少ないが男性ほど顕著ではなく、また「他形態から正社員」の比率は変わらない。非典型雇用から正社員への移行はあまり起きていないといえる。20 歳代前半層の「正社員定着・転職」率は、高卒も短大専卒も 2006 年調査より 2011 年調査のほうが低く、大卒・大学院卒以外は、女性の場合、正社員市場に入りにくくなっていることが考えられる。男女でのキャリアの変化の方向は異なっている。

図表 1-17 年齢・学歴別現職業キャリアの分布

単位：%



第4節 就業形態別に見た現職の特徴

就業形態別に現職の特徴を確認しておく。正社員といっても、学卒直後から正社員として定着している場合と転職を経験している場合、当初は無職や非典型雇用であった者が後に正社員になった場合で仕事の特徴が異なるのか、現職へのこれまでのキャリアの影響も検討する。

1. 職種

正社員の場合の職種は、男性では専門・技術的な仕事が多く、女性では事務の仕事が最も多いが専門・技術職も多い（図表 1-18）。アルバイト・パートは男女ともサービスの仕事が多く販売の仕事がこれに次ぐ。契約・派遣社員の職種は正社員に近い分布である。これらの特徴は 2006 年調査と変わらない。

図表 1-18 就業形態別現職の職種

単位：%

		専門・ 技術的 な仕事	事務の 仕事	販売の 仕事	サービ スの仕 事	生産工 程・建 設の仕 事	運輸・ 通信・ 保安の 仕事	その他 の職業	無回答	合計	
男性	正社員(公務含む)	35.8	14.2	17.4	13.9	11.0	5.8	0.9	0.9	100.0	689
	アルバイト・パート	11.0	4.0	23.1	42.2	6.4	11.0	0.6	1.7	100.0	173
	契約・派遣等	32.1	7.1	25.0	12.5	3.6	14.3	1.8	3.6	100.0	56
	自営・家業	32.0	4.0	16.0	16.0	14.0	6.0	2.0	10.0	100.0	50
	男性計	31.0	11.5	18.8	19.0	9.9	7.2	0.9	1.7	100.0	968
女性	正社員(公務含む)	33.8	36.8	14.4	12.8	0.5	0.4	0.0	1.2	100.0	562
	アルバイト・パート	12.6	12.6	24.1	45.5	1.2	2.4	0.8	0.8	100.0	253
	契約・派遣等	18.3	39.7	14.5	17.6	3.1	2.3	1.5	3.1	100.0	131
	自営・家業	46.4	10.7	14.3	17.9	3.6	0.0	3.6	3.6	100.0	28
	女性計	26.6	30.2	16.9	22.1	1.1	1.1	0.5	1.4	100.0	974

正社員をこれまでのキャリアによって分けて職種の分布をみた(図表 1-19)。いずれのキャリアでも男性では専門・技術が、女性では事務と専門・技術が多い。ただし「他形態から正社員」の場合は、サービス職も多かったり、男性の場合には生産工程・建設、運輸・通信・保安職も少なくないなど、多くの職種に分散している。

図表 1-19 正社員のキャリア別現職の職種

単位：%

		専門・ 技術的 な仕事	事務の 仕事	販売の 仕事	サービ スの仕 事	生産工 程・建 設の仕 事	運輸・ 通信・ 保安の 仕事	その他 の職業	無回答	合計	
男性	正社員定着	38.0	18.0	17.8	11.5	9.5	3.7	0.2	1.2	100.0	410
	正社員転職	35.1	10.4	13.0	19.5	11.7	6.5	3.9	0.0	100.0	77
	他形態から正社員	31.3	6.7	19.0	16.6	14.7	9.8	1.2	0.6	100.0	163
女性	正社員定着	33.1	38.4	15.4	10.6	0.5	0.5	0.0	1.5	100.0	396
	正社員転職	37.0	40.7	3.7	16.7	0.0	0.0	0.0	1.9	100.0	54
	他形態から正社員	32.9	31.7	14.6	20.7	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	82

2. 企業規模

現在の勤務先企業の規模は、正社員と比べた時、派遣・契約社員では 29 人以下の小規模企業が少なく大規模の企業が若干多い。アルバイト・パートでは小規模企業が 4 割以上と多い(図表 1-20)。男女で傾向は変わらない。また、正社員のキャリア別には(図表 1-21)、「正社員定着」では 1000 人以上規模の比率が最も高い。これに対して、「他形態から正社員」の場合は小規模企業の比率が高いが、特に男性では 29 人以下が多い。大企業には新規学卒採用で入り定着するケースが多く、転職するとより小規模に、学卒採用の乗れなかった場合は、さらに小規模企業に職を求めることが多くなるということであろう。一方、女性では「他形態から正社員」でも 1000 人以上規模が 2 割を超え、男性とは違う移動があることがう

かがわれる。

図表 1-20 就業形態別現職勤務先の規模

単位：%

	公務	1000人 以上	300～ 999人	30～ 299人	29人以 下	無回答	合計		
男性	正社員(公務含む)	3.8	25.8	15.4	28.3	25.7	1.0	100.0	689
	アルバイト・パート	1.2	16.2	11.6	25.4	40.5	5.2	100.0	173
	契約・派遣等	1.8	28.6	10.7	39.3	16.1	3.6	100.0	56
	自営・家業	0.0	2.0	2.0	6.0	76.0	14.0	100.0	50
	男性計	3.0	23.0	13.7	27.3	30.4	2.6	100.0	968
女性	正社員(公務含む)	3.7	33.8	17.8	23.7	20.5	0.5	100.0	562
	アルバイト・パート	0.4	14.2	11.1	26.5	42.3	5.5	100.0	253
	契約・派遣等	3.1	37.4	17.6	30.5	7.6	3.8	100.0	131
	自営・家業	0.0	3.6	3.6	14.3	71.4	7.1	100.0	28
	女性計	2.7	28.3	15.6	25.1	25.9	2.5	100.0	974

図表 1-21 正社員のキャリア別現職勤務先の規模

単位：%

	公務	1000人 以上	300～ 999人	30～ 299人	29人以 下	無回答	合計		
男性	正社員定着	4.4	36.8	19.3	25.1	13.4	1.0	100.0	410
	正社員転職	2.6	14.3	10.4	37.7	35.1	0.0	100.0	77
	他形態から正社員	3.7	6.7	8.6	29.4	49.7	1.8	100.0	163
女性	正社員定着	3.3	39.4	21.2	22.2	13.6	0.3	100.0	396
	正社員転職	5.6	18.5	11.1	24.1	37.0	3.7	100.0	54
	他形態から正社員	6.1	23.2	7.3	30.5	32.9	0.0	100.0	82

3. 収入・労働時間

調査では、現在のおよその年収と1週間の労働時間(残業含む)を尋ねている(図表1-22)。年収については、男女とも正社員(公務含む)の年収が最も高く、アルバイト・パートが最も低い。アルバイト・パートの年収は、正社員に対して半分程度の水準であり、契約・派遣はこの両者の中間程度、自営・家業従事は男性は正社員と同程度だが女性は低い。2006年調査とこれらの傾向はほぼ共通している。

労働時間は、男性では自営・家業と正社員が週50時間を超えており長い。これに対してアルバイト・パートは36.5時間と短い。女性でも正社員の労働時間は長く(46.9時間)、アルバイト・パートは短い(31.6時間)。年収と労働時間から「一時間あたりの収入」を推計し、正社員100に対しての比で示すと、アルバイト・パートは男女とも71、契約・派遣社員の場合は87とそれぞれ正社員より小さい。こうした関係は2006年調査でもほぼ同様である。

図表 1 - 2 2 就業形態別現職の労働時間と収入

	2011年調査						2006年調査	
	対象数	昨年の 年収 ^{*1)}	週労働時 間 ^{*1)}	時間当た り収入 ^{*2)}	年収の対 正社員比 ^{*3)}	時間あたり 収入の対正社 員比 ^{*4)}	年収の対正 社員比 ^{*3)}	時間あたり 収入の対正 社員比 ^{*4)}
		(万円)	(時間)	(千円)				
正社員(公務含む)	645	331.0	50.8	1.25				
男 アルバイト・パート	160	169.2	36.5	0.89	51	71	56	71
性 契約・派遣	51	256.1	45.0	1.10	77	87	77	89
自営・家業	42	334.4	56.7	1.13	101	91	94	88
正社員(公務含む)	527	288.1	46.9	1.18				
女 アルバイト・パート	224	136.8	31.6	0.83	47	71	50	69
性 契約・派遣	118	215.0	40.0	1.03	75	87	84	96
自営・家業 ^{*6)}	24	170.8	33.8	0.97	59	82		-

注：1)上下5%を除いた平均値。

2)時間あたり収入は (昨年の年収) / (週労働時間×52週) とした。

3)正社員 (公務含む) を100とした時の年収の比。

4)正社員 (公務含む) を100とした時の時間あたり収入の比。

5)2006年の女性の「自営・家業」は対象数が少ないので省いた。

図表 1 - 2 3 正社員のキャリア別現職の労働時間と収入

	対象数	昨年の年	週労働時	時間当た	年収の対	時間あたり	勤続年数 (年)
		収 ^{*1)}	間 ^{*1)}	り収入 ^{*2)}	正社員比 ^{*3)}	収入の対正 社員比 ^{*4)}	
		(万円)	(時間)	(千円)			
男性							
正社員定着	386	342.1	50.6	1.30			3.7
正社員転職	71	329.5	51.6	1.23	96	94	2.7
他形態から正社員	151	304.7	51.6	1.14	89	87	3.0
女性							
正社員定着	381	293.5	46.9	1.20			3.3
正社員転職	47	297.8	47.6	1.20	101	100	2.8
他形態から正社員	72	252.3	46.9	1.03	86	86	3.1

注：1)～4)は図表1-22に同じ。

正社員のキャリア別にこれらの条件を比較すると(図表1-23)、男女それぞれ週労働時間は1時間程度の差であるが、「他形態から正社員」の場合の収入は低い。収入には、勤続年数が強く影響すると思われるので、平均勤続期間を併せて示した。「他形態から正社員」の場合は、正社員定着者より短い、ただし1年に満たない差である。勤務先に小規模企業が多く、全体に賃金水準が低いことのほうが大きく影響しているのではないかと推測される。

4. 社会保険

就業形態別に社会保険への加入状況をみると(図表1-24)正社員は会社の健康保険・共済保険、厚生年金・共済年金に加入している率が7~8割、派遣社員・契約社員だとこれが6割程度になる。自営・家業は国民健康保険、国民年金が多く、アルバイト・パートも半数

程度がこれに加入している。アルバイト・パートの年金では特に「加入していない」、「わからない」という本人に保険加入の認識がないケースが多い。減免措置を受けている可能性もあるが、未払い状態を続けているのかもしれない。

図表 1－2 4 就業形態別社会保険への加入状況

①健康保険

単位：%

	会社の健康保険・共済保険	国民健康保険	その他	どれも加入していない	無回答・不明	合計	
男性 正社員(公務含む)	71.7	20.0	0.4	0.6	7.3	100.0	689
アルバイト・パート	27.2	53.8	0.0	5.2	13.9	100.0	173
契約・派遣等	58.9	32.1	0.0	3.6	5.4	100.0	56
自営・家業	20.0	70.0	0.0	4.0	6.0	100.0	50
男性計	60.3	29.3	0.3	1.8	8.3	100.0	968
女性 正社員(公務含む)	79.7	10.3	0.0	0.5	9.4	100.0	562
アルバイト・パート	33.2	52.2	1.2	2.0	11.5	100.0	253
契約・派遣等	66.4	23.7	0.0	0.8	9.2	100.0	131
自営・家業	28.6	60.7	0.0	0.0	10.7	100.0	28
女性計	64.4	24.4	0.3	0.9	10.0	100.0	974

②年金保険

単位：%

	国民年金	厚生年金・共済組合	加入していない	わからない	合計	
男性 正社員(公務含む)	23.8	69.1	2.3	4.8	100.0	689
アルバイト・パート	54.3	11.0	20.2	14.5	100.0	173
契約・派遣等	28.6	51.8	14.3	5.4	100.0	56
自営・家業	60.0	14.0	18.0	8.0	100.0	50
男性計	31.4	54.9	7.0	6.7	100.0	968
女性 正社員(公務含む)	15.5	77.9	0.9	5.7	100.0	562
アルバイト・パート	59.7	17.4	9.9	13.0	100.0	253
契約・派遣等	25.2	61.8	3.1	9.9	100.0	131
自営・家業	75.0	3.6	3.6	17.9	100.0	28
女性計	30.0	57.9	3.6	8.5	100.0	974

正社員のキャリア別にみると（図表 1－2 5）、「他形態から正社員」の男性では、国民健康保険、国民年金加入者が 3 割を超える。小規模企業の比率が高かったことの反映であろう。女性の場合は、「他形態から正社員」でも保険は「正社員定着」と変わらない。男性より正社員への移行者は少ないが、移行した勤務先は社会保険が整っている場合が多い。

図表 1 - 2 5 正社員のキャリア別社会保険への加入状況

①健康保険

単位：%

	会社の健康保険・共済保険	国民健康保険	その他	どれも加入していない	無回答・不明	合計	
男性 正社員定着	78.3	12.9	0.7	0.5	7.6	100.0	410
正社員転職	66.2	23.4	0.0	1.3	9.1	100.0	77
他形態から正社員	58.9	35.0	0.0	0.6	5.5	100.0	163
女性 正社員定着	82.1	8.8	0.0	0.5	8.6	100.0	396
正社員転職	74.1	16.7	0.0	1.9	7.4	100.0	54
他形態から正社員	80.5	9.8	0.0	0.0	9.8	100.0	82

②年金保険

単位：%

	国民年金	厚生年金・共済組合	加入していない	無回答・不明	合計	
男性 正社員定着	17.3	76.6	1.0	5.1	100.0	410
正社員転職	27.3	66.2	2.6	3.9	100.0	77
他形態から正社員	38.7	51.5	4.9	4.9	100.0	163
女性 正社員定着	14.6	77.8	0.5	7.1	100.0	396
正社員転職	24.1	70.4	3.7	1.9	100.0	54
他形態から正社員	13.4	82.9	1.2	2.4	100.0	82

5. 労働組合への加入

労働組合への加入状況も就業形態で大きく異なる。男女での差はほとんどなく、正社員のほぼ半数が職場の組合に加入している。アルバイト・パートの職場の組合への加入は10数%、契約・派遣社員では26~27%で、個人加盟の独立系労働組合に入っている人はほとんどいない(図表1-26)。

図表 1 - 2 6 就業形態別労働組合への加入状況

単位：%

	職場の組合に加入	個人加盟組合(独立系労組)に加入	入っていない	無回答・不明	合計	
男性 正社員(公務含む)	49.2	1.5	45.1	4.2	100.0	689
アルバイト・パート	13.3	0.0	83.8	2.9	100.0	173
契約・派遣等	26.8	1.8	64.3	7.1	100.0	56
自営・家業	14.0	8.0	68.0	10.0	100.0	50
男性計	39.7	1.5	54.3	4.4	100.0	968
女性 正社員(公務含む)	52.3	1.1	42.5	4.1	100.0	562
アルバイト・パート	10.3	0.8	85.0	4.0	100.0	253
契約・派遣等	26.0	0.0	68.7	5.3	100.0	131
自営・家業	7.1	7.1	78.6	7.1	100.0	28
女性計	36.6	1.0	58.1	4.3	100.0	974

正社員のキャリア別では、「正社員定着」の男女で6割近くが職場の組合に加入している(図表1-27)。これに対して、転職者、他形態から正社員になった者では加入者比率が低い。

比較的小規模企業が多く、企業に組合がない場合が多いと推測される。

図表 1-27 正社員のキャリア別労働組合への加入状況

単位：%

	職場の組合に加入	個人加盟組合(独立系労組)に加入	入っていない	無回答・不明	合計	
男性 正社員定着	58.8	1.0	36.8	3.4	100.0	410
正社員転職	37.7	1.3	58.4	2.6	100.0	77
他形態から正社員	31.9	3.1	58.9	6.1	100.0	163
女性 正社員定着	57.3	1.3	38.1	3.3	100.0	396
正社員転職	33.3	1.9	61.1	3.7	100.0	54
他形態から正社員	42.7	0.0	47.6	9.8	100.0	82

第5節 20歳代後半層のキャリアと意識

この節では、焦点を20歳代後半の若者に絞ってその移行過程や意識を詳細に検討する。この年齢層に限るのは、第一に、学校を離れてから間もない段階ではキャリアは変動のさなかであり、キャリア形成の問題の検討には適さないからであり、また、第二には、20歳代後半のほうが正社員への移行がより困難であることが指摘されているからである。なお、正社員への移行の困難さは30歳代のほうがさらに大きいと推測される。別途30歳代の調査を実施していることから、「年長フリーター」の問題はこのデータと接合して改めて論じたい。ここでは、2006年調査結果との違いを中心に検討する。

1. 離学以降のキャリアの概観

対象となる20歳代後半層は、当然学歴によって離学時期が異なる。それを整理しておく、図表1-28のとおり、高卒者の場合はほとんどが2004年までの就職環境が悪い時期の卒業生であり、大卒者の場合はほとんどが2005年から2009年までの比較的就職環境に恵まれた時期の卒業生である。言い換えれば、この年齢層は、高卒で就職せず進学することでより就職機会に恵まれた可能性が高かった世代であり、学歴の効果に景気変動の効果が上積みされ、学歴間の就業形態の差異が大きい世代といえる。

図表 1-28 20歳代後半層の学歴と離学時期

単位：%

	1997～ 2004年	2005～ 2009年	2010～ 2011年	無回答・ 不明	合計	
高卒	91.8	1.3	0.0	7.0	100.0	158
専門・短大・高専卒	52.8	39.9	1.3	6.0	100.0	301
大学・大学院卒	12.2	79.8	3.6	4.3	100.0	531
中卒・高校中退	84.8	0.0	0.0	15.2	100.0	46
高等教育中退	53.6	39.3	1.8	5.4	100.0	56
合計	39.7	51.5	2.2	6.6	100.0	1108

注：合計には、学歴不明を含む。

さて、この世代について 2006 年調査と同様に離学後の正社員経験をみる。離学時点において非典型雇用か失業・無業状態であった場合に、調査時点まで一度も正社員を経験しない比率は、男性の 36.2%、女性の 60.0%であり、2006 年の男性 50.0%、女性 60.2%と比べると、男性で大幅に数値が下がっている。すなわち、男性はかなり正社員として採用されている。一方、女性は 2006 年とほとんど変わっていない。

この変化は、キャリア類型として、すでに図表 1-17 でも確認されているところである。改めて数字を示すと、25-29 歳男性・高卒者の「他形態から正社員」の比率は 32.3%と、2006 年の 16.9%を大幅に上回り、専門・短大・高専卒の男性でも 2011 年は 21.7%で、2006 年の 12.4%の倍近い。いずれも、2004 年以前の卒業者が多い学歴で、こうした不況期に卒業した男性が正社員に多く移行していた。

次の図表 1-29 はこれをキャリア類型ごとの学歴構成としてとらえなおしたものである。「正社員定着・転職」の大半は高等教育卒業生であるが、「他形態から正社員」「非典型一貫」キャリアには高卒者も多く、この 2 つのキャリアの学歴構成の差は小さい。

図表 1-29 20 歳代後半層のキャリア類型別学歴構成

単位：%

	高卒	専門・短大・ 高専卒	大学・大 学院卒	学校中退	合計		
男性	正社員定着・転職	8.6	20.3	68.3	1.7	100.0	290
	非典型一貫	28.8	13.6	30.3	22.7	100.0	66
	他形態から正社員	27.7	25.0	21.4	25.9	100.0	112
	その他	15.1	23.7	38.8	18.7	100.0	139
	男性25-29歳計	15.8	21.3	48.8	12.4	100.0	607
女性	正社員定着・転職	4.8	28.2	65.6	0.0	100.0	227
	非典型一貫	18.5	35.2	28.7	16.7	100.0	108
	他形態から正社員	10.9	41.3	39.1	8.7	100.0	46
	その他	21.7	42.5	30.8	4.2	100.0	120
	女性25-29歳計	12.4	34.3	46.9	5.4	100.0	501

注：合計には、学歴不明を含む。

2. キャリアと家族形成

「正社員定着・転職」「非典型一貫」「他形態から正社員」の 3 つキャリア類型別に家族形成の状況を見る。図表 1-30 のとおり、男性の「非典型一貫」では、結婚して配偶者や子どもと同居している者が特に少ない。また単身で暮らす者も少なく、未婚で親元にいる者が 6 割と多い。この関係は 2006 年調査と同様である。非典型雇用は全般に収入が低く、男性の結婚率が低いことはすでに指摘されているところであるが、親から自立しての一人暮らしも厳しいということであろう。「他形態から正社員」では、2 割が結婚している。正社員になることと家族形成とは相互に関連した選択であろう。

女性の「他形態から正社員」では有配偶者は少ないが、一方で単身で暮らす者が多い。女性では正社員への移行率が低い、正社員になろうとする意志と単身で暮らすこととは相

互の関連があると思われる。なお、晩婚化傾向を反映して、男女ともに 2006 年時より配偶者や子ども同居する者が減り、単身で暮らす者が増えているのだが、「他形態から正社員」の女性での単身者の増加が著しい。

図表 1-30 20 歳代後半層の家族形態

単位：%

	単身	無配偶・ 親元	配偶者・ 子供同居	その他	合計	
正社員定着・転職	31.7	38.3	24.1	5.9	100.0	290
男 非典型一貫	19.7	62.1	7.6	10.6	100.0	66
性 他形態から正社員	25.9	38.4	22.3	13.4	100.0	112
男性25-29歳計	26.4	44.0	20.6	9.1	100.0	607
正社員定着・転職	15.4	67.8	10.1	6.6	100.0	227
女 非典型一貫	11.1	50.0	27.8	11.1	100.0	108
性 他形態から正社員	30.4	63.0	4.3	2.2	100.0	46
女性25-29歳計	14.6	59.7	19.0	6.8	100.0	501

注：計にはその他のキャリアを含む。

3. キャリアと望ましい働き方

こうした就業形態やその連続としての職業キャリアは本人の希望にどれほど副ったものなのか。調査では、現在最も望ましい就業形態と 3 年後に実現したい就業形態とを尋ねているので、これをキャリア類型別に検討する（図表 1-31）。

「正社員定着・転職」と「他形態から正社員」はいずれも現在は正社員であり、現在も将来も正社員希望が多い。「他形態から正社員」という移動は本人の希望に副ったものと言える。ただ男性の「他形態から正社員」では、3 年後は正社員でなく自営やその他の働き方を希望する者が若干目立つ。2006 年調査でも同様の傾向があったが、当時よりは減っている。

「非典型一貫」では、現在はアルバイト・パートや契約・派遣を望ましいとする者が男性で 37.9%、女性で 45.4%に達している。しかし、3 年後にこれらの働き方を希望する者は男性で 7.6%、女性で 25.9%と少なく、正社員や自営・家業を希望する者が、男性で 80.3%、女性で 67.6%と多い。今と 3 年後で希望が異なるのは、非典型雇用である現状は将来の正社員等になるためのプロセスと捉えられているのではないかと思われる。

2006 年と比べると、現在非典型雇用を望ましいとする比率も、3 年後に望ましいとする比率も減った（2006 年調査では、現在：男性 46.3%、女性 67.6%、3 年後：男性 13.8%、女性 43.2%）。3 年後には正社員、自営・家業を望ましいとする者は格段に増えている（2006 年調査では、男性 70.0%、女性 48.0%）。特に女性で変化が大きい。2006 年調査と比べて男性では非典型雇用から正社員への移行比率が高まっていたが、女性ではそうした変化がみられなかった。正社員への移行意志を持った女性がそれをなかなか果たせない現状があるため、女性で特に正社員希望が強まっていると思われる。

図表 1-31 20 歳代後半層のキャリア別働き方の希望

①現在最も望ましい働き方

単位：%

	正社員(公 務含む)	アルバイ ト・パート	契約・派 遣	自営・家 業	その他	合計	
正社員定着・転職	96.6	0.0	0.0	2.4	0.0	100.0	290
男 非典型一貫	48.5	22.7	15.2	9.1	4.5	100.0	66
性 他形態から正社員	94.6	0.9	0.9	1.8	0.9	100.0	112
男性25-29歳計	80.7	5.9	3.0	7.9	1.6	100.0	607
正社員定着・転職	98.7	0.9	0.0	0.4	0.0	100.0	227
女 非典型一貫	48.1	29.6	15.7	4.6	0.9	100.0	108
性 他形態から正社員	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	46
女性25-29歳計	75.2	13.0	6.0	5.2	0.4	100.0	501

注：計にはその他のキャリアを含む。

②3年後に実現したい働き方

単位：%

	正社員(公 務含む)	アルバイ ト・パート	契約・派 遣	自営・家 業	その他	合計	
正社員定着・転職	83.8	0.0	0.7	13.4	0.7	100.0	290
男 非典型一貫	59.1	1.5	6.1	21.2	10.6	100.0	66
性 他形態から正社員	76.8	0.0	0.0	17.9	4.5	100.0	112
男性25-29歳計	73.5	0.7	1.5	19.8	3.5	100.0	607
正社員定着・転職	84.6	5.7	1.3	4.8	3.1	100.0	227
女 非典型一貫	54.6	18.5	7.4	13.0	4.6	100.0	108
性 他形態から正社員	80.4	0.0	4.3	10.9	4.3	100.0	46
女性25-29歳計	69.7	10.4	4.0	12.0	3.2	100.0	501

注：計にはその他のキャリアを含む。

なお、図表 1-32 には現在の就業形態別の働き方の希望を示した。男女の「契約・派遣」、男性の「アルバイト・パート」で、現在の働き方を望ましいとしている者が約 3 分の 1、女性の「アルバイト・パート」では現在の働き方を望ましいとする者が半数を超える。3 年後についてはいずれも正社員希望が多くなり、女性の「アルバイト・パート」では半数弱、「契約・派遣」の男女、「アルバイト・パート」の男性では 6~7 割が正社員を希望している。女性の「アルバイト・パート」には、正社員志向でない者も少なからずいるが、全体としては、すぐにか、数年先かの違いはあるが、正社員を希望する者が多い。2006 年調査でも「契約・派遣」には正社員希望がある者が多かったが、2011 年調査ではこの比率はさらに高まっている（2006 年の「契約・派遣」の正社員希望は、男性：現在 37.5%、3 年後 52.5%、女性：現在 35.7%、3 年後 44.3%）。非典型雇用者の正社員志向は 2006 年より高まっているといえる。

図表 1-32 20 歳代後半層の現職就業形態別働き方の希望

①現在最も望ましい働き方

単位：%

	正社員(公務含む)	アルバイト・パート	契約・派遣	自営・家業	その他	合計		
男性	正社員(公務含む)	96.1	0.5	0.2	2.1	0.2	100.0	432
	アルバイト・パート	40.6	36.2	5.8	14.5	2.9	100.0	69
	契約・派遣等	54.5	6.1	36.4	0.0	3.0	100.0	33
	自営・家業	16.7	2.8	0.0	72.2	8.3	100.0	36
	失業・無職	66.7	15.2	0.0	9.1	6.1	100.0	33
女性	正社員(公務含む)	99.0	0.7	0.0	0.3	0.0	100.0	298
	アルバイト・パート	33.3	54.2	7.3	4.2	0.0	100.0	96
	契約・派遣等	55.4	4.6	33.8	4.6	1.5	100.0	65
	自営・家業	23.8	4.8	0.0	71.4	0.0	100.0	21
	失業・無職	45.0	30.0	5.0	15.0	5.0	100.0	20

②3年後に実現したい働き方

単位：%

	正社員(公務含む)	アルバイト・パート	契約・派遣	自営・家業	その他	合計		
男性	正社員(公務含む)	80.8	0.0	0.5	15.7	1.9	100.0	432
	アルバイト・パート	58.0	1.4	2.9	24.6	11.6	100.0	69
	契約・派遣等	69.7	0.0	9.1	15.2	6.1	100.0	33
	自営・家業	19.4	0.0	2.8	69.4	8.3	100.0	36
	失業・無職	72.7	9.1	0.0	15.2	0.0	100.0	33
女性	正社員(公務含む)	83.9	5.4	1.7	5.7	3.0	100.0	298
	アルバイト・パート	45.8	29.2	4.2	16.7	2.1	100.0	96
	契約・派遣等	60.0	4.6	15.4	12.3	6.2	100.0	65
	自営・家業	23.8	4.8	0.0	71.4	0.0	100.0	21
	失業・無職	50.0	20.0	5.0	20.0	5.0	100.0	20

4. 具体的な将来（自由回答）

実現したい将来については具体的な内容を自由記入方式でも記載してもらっている。有効票の3分の2には何らかの記載があった。20歳代後半層について、その内容を現在の就業形態（正社員か非典型雇用か）とキャリア類型別に整理したものが、次の図表1-33である。

非典型雇用者では男性の3分の1、女性の4分の1が、パートから派遣社員、さらに正社員へとようになっていくような正社員志向の将来設計を記載していた。うち「非典型一貫」にしぼっても同様な比率での正社員志向が示された。このキャリアの男性では、他に「独立・自営、経営」や「自己実現」も多い。「独立・自営、経営」は「店を出す」「経営に携わる」といった記述をまとめたもので、「自己実現」は、漫画家、タレント、専業作家、演奏活動、あるいは「命を懸けてできる仕事」などの記述をまとめたカテゴリーである。2006年調査でも同キャリアの男性にはこうした記述が目立ったが、大都市の若者の特徴のひとつであることはすでに指摘したとおりである。

女性の非典型雇用、あるいは「非典型一貫」キャリアでは、こうした「自己実現」志向は多くない。むしろ「結婚、出産」などとの関係から将来を考えて非典型雇用を位置づける記

述のほうが多い。

図表 1-33 20 歳代後半層が将来について具体的に考えていること（キャリア類型別）
（自由回答のアフターコード・複数回答）

①男性

単位：%

	現職就業形態		キャリア類型		
	正社員(公務含む)	非典型雇用	正社員定着・転職	非典型一貫	他形態から正社員
現状維持	11.8	2.0	14.1	3.0	8.9
パート→派遣→正社員	0.0	27.5	0.0	24.2	0.0
内部登用で正社員	0.0	5.9	0.0	4.5	0.0
業績向上、昇進、能力アップ、経験拡大	10.9	5.9	12.1	4.5	8.0
資格取得、資格を生かした仕事	2.1	3.9	2.1	3.0	1.8
転職(企業間移動)	6.3	2.9	7.2	4.5	4.5
労働条件、社会保障、福利厚生、安定性向上	3.7	4.9	3.1	3.0	4.5
自己実現	2.3	11.8	1.7	13.6	3.6
結婚・出産等を優先しての働き方	0.5	0.0	0.3	0.0	0.9
海外勤務、留学	1.9	0.0	2.1	0.0	1.8
専門・大学等進学、職業訓練	0.2	2.9	0.0	3.0	0.9
独立・自営、経営	12.3	11.8	12.4	10.6	9.8
その他	2.5	2.9	2.1	1.5	1.8
ない、考えているところ	13.2	11.8	12.1	13.6	17.0
無回答	37.5	21.6	36.6	22.7	41.1
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
	432	102	290	66	112

②女性

単位：%

	現職就業形態		キャリア類型		
	正社員(公務含む)	非典型雇用	正社員定着・転職	非典型一貫	他形態から正社員
現状維持	21.8	5.6	21.6	4.6	26.1
パート→派遣→正社員	0.0	18.6	0.0	17.6	0.0
内部登用で正社員	0.0	3.7	0.0	3.7	0.0
業績向上、昇進、能力アップ、経験拡大	7.0	1.9	5.7	1.9	8.7
資格取得、資格を生かした仕事	2.7	4.3	1.8	3.7	6.5
転職(企業間移動)	6.0	0.6	6.2	0.9	2.2
労働条件、社会保障、福利厚生、安定性向上	4.7	2.5	4.4	0.0	2.2
自己実現	1.3	3.1	1.3	4.6	2.2
結婚・出産等を優先しての働き方	5.7	7.5	5.7	6.5	2.2
専業主婦	1.3	0.6	1.3	0.9	2.2
海外勤務、留学	1.3	0.0	1.8	0.0	0.0
専門・大学等進学、職業訓練	1.3	0.6	1.3	0.9	0.0
独立・自営、経営	4.0	7.5	3.5	4.6	6.5
その他	2.3	0.0	2.6	0.0	0.0
ない、考えているところ	12.4	13.7	12.8	15.7	15.2
無回答	35.9	35.4	38.3	38.9	28.3
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
	298	161	227	108	46

男性の非典型雇用で注目されるのは、この自由回答欄への無回答者が少ないことである。「将来について具体的に考えていること」という設問に反応する人が多いのは、将来の方向

を自ら意識し続けることが必要な環境にあるからであろう。反対に無回答が多く、同時に「なし」とか「考えているところ」という記述が多かったのが、男性の「他形態から正社員」キャリアである。さらに、このキャリアでは「正社員定着・転職」にみられるような現状維持や現職で昇進や能力向上、あるいは独立・自営などの希望を記述する者も少なかった。正社員志向が満たされたところで次の将来設計が見えなくなったのか、あるいは、「他形態から正社員」キャリアでは賃金水準が低く、社会保険も未整備な職場である比率が高かったが、そうした諸条件の悪さもあって改めてキャリアの方向を迷っているのかもしれない。

これに対して女性の「他形態から正社員」は正社員となった現状維持を表明する者が多く「無回答」が少ない。女性では正社員への移行比率は低かったが、その中で正社員になった者は、かなり意識的に進路を拓いてきたのではないかと推測される。

5. キャリアと生活の評価

結婚・出産との関係のように、職業キャリアは職業以外の生活の諸側面と関連しながら築かれてきたし、また、今後の希望もその関係において表明されているのであろう。ここではキャリア類型と生活全般にかかわる意識との関係を検討する。調査で用意された設問は、図表1-34に示すとおりだが、2006年調査と同じ設計であり、比較の形で検討する。

まず男性について見ると、ここで取り上げた3つのキャリア類型の間で違いが大きいのは、「これまでの進路選択は順調であった」「自分の生活は周囲の人からうまくいっていると思われる」「将来の見通しは明るい」「経済的に自立している」及び「現在の生活に満足している」である。「正社員定着・転職」キャリアでは、このいずれについても「あてはまる」が多く、数値化した時の平均値はプラスで比較的大きい。これに対して、「あてはまらない」が多いのが「非典型一貫」キャリアで、数値化した平均値はマイナスになっている。「非典型一貫」の働き方をしてきた者は、これまでの進路を順調だとは思っていないし、周囲からもそう思われていないと認識している。この類型の自由回答からは正社員志向や自己実現的な職業への希望が見て取れたが、「切り開ける」希望は持っているが現実の見通しは明るくないということであろう。一方、「他形態から正社員」キャリアは、この2つの中間的な位置にある。正社員になってはいても、収入や社会保障に不安はあり、明るい見通しを持っていない状況があるのではないかと推測される。

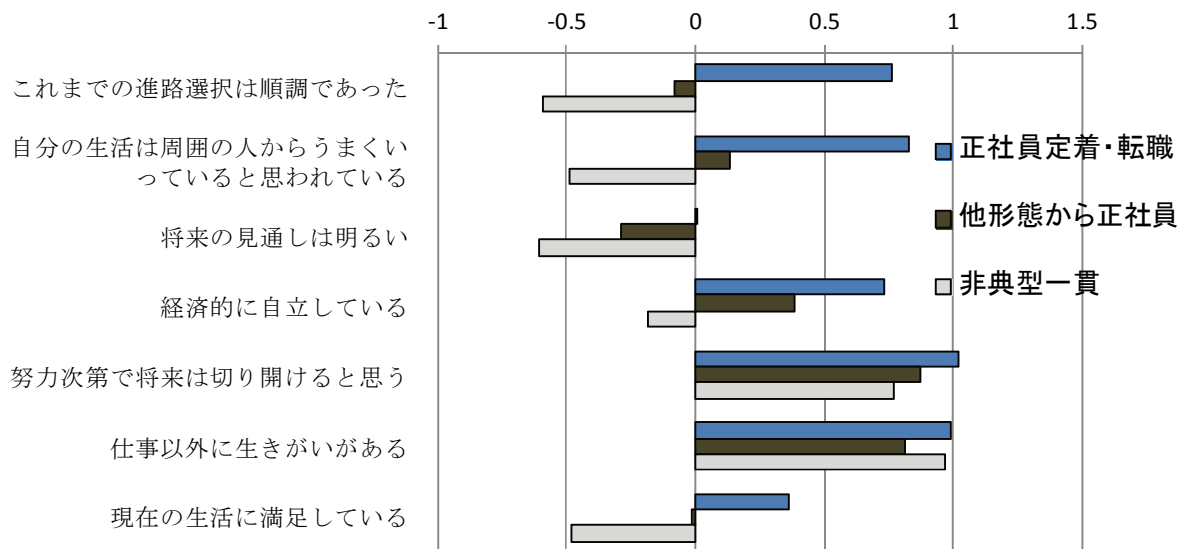
これを、2006年調査結果と比べると、大きな違いは2006年調査結果にはマイナスの数値がなかったことである。実は2001年から2006年への変化は、マイナスからプラスへの変化だった。2006年から2011年へはマイナスへの逆転であり、結局2001年に近い数値になっている。いずれのキャリアも最も大きく変化したのは「将来の見通しは明るい」で、この設問への回答には、時代の気分、閉塞感や開放感が投射されているのであろう。

3つのキャリアの相対的位置関係は2006年からあまり変わっていない。変化の幅が比較的大きかったのは「非典型一貫」で、進路の順調感（自認と他認の両方）についての数値が大

大きく低下した。正社員への移行者が増える中で非典型のままで残っていることという状況ゆえであろうか。「他形態から正社員」では、経済的な自立についての肯定が大きく減った。

図表 1-34 20歳代後半層のキャリア別生活評価

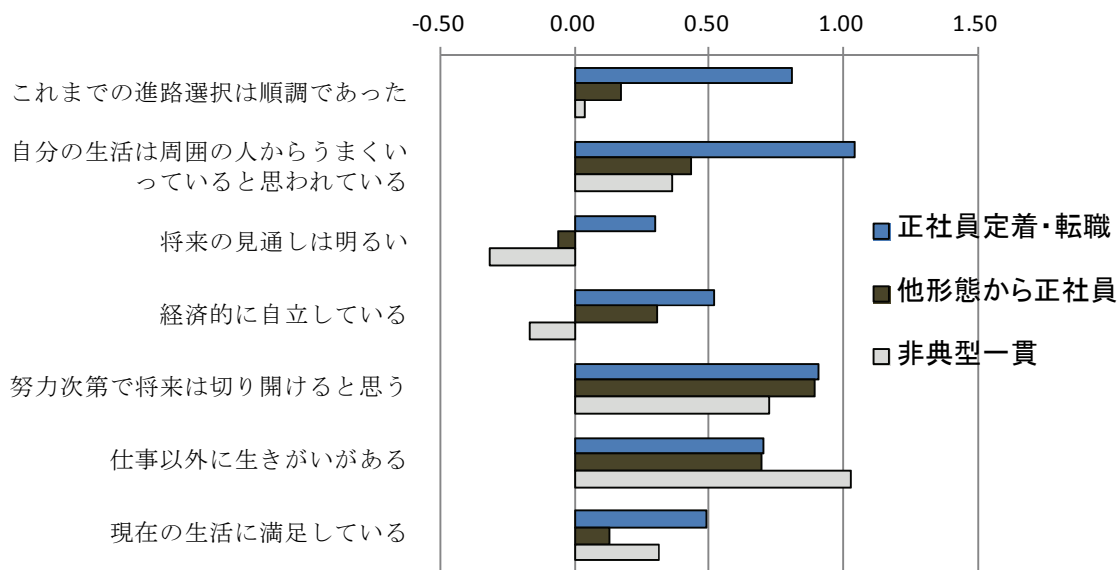
①男性



	2011年			2006年		
	正社員 定着・転 職	他形態 から正社 員	非典型 一貫	正社員 定着・転 職	他形態 から正社 員	非典型 一貫
これまでの進路選択は順調であった	0.76	-0.08	-0.59	1.07	0.23	0.32
自分の生活は周囲の人からうまくいっていると思われる	0.83	0.14	-0.49	1.11	0.76	0.28
将来の見通しは明るい	0.01	-0.29	-0.61	0.96	0.62	0.37
経済的に自立している	0.73	0.39	-0.18	1.12	0.95	0.21
努力次第で将来は切り開けると思う	1.02	0.87	0.77	1.30	1.21	1.21
仕事以外に生きがいがある	0.99	0.81	0.97	1.25	1.30	1.41
現在の生活に満足している	0.36	-0.02	-0.48	0.94	0.73	0.37

注：「かなりあてはまる」=2点、「ある程度あてはまる」=1点、「あまりあてはまらない」=-1点、「ほとんどあてはまらない」=-2点としたときの相加平均。

②女性



	2011年			2006年		
	正社員 定着・転 職	他形態 から正社 員	非典型 一貫	正社員 定着・転 職	他形態 から正社 員	非典型 一貫
これまでの進路選択は順調であった	0.81	0.17	0.04	1.14	1.09	0.70
自分の生活は周囲の人からうまくいっていると思われる	1.04	0.43	0.36	1.24	1.26	1.01
将来の見通しは明るい	0.30	-0.07	-0.32	0.95	0.77	0.67
経済的に自立している	0.52	0.30	-0.17	1.06	0.50	-0.26
努力次第で将来は切り開けると思う	0.91	0.89	0.72	1.31	1.33	1.12
仕事以外に生きがいがある	0.70	0.70	1.03	1.29	1.39	1.27
現在の生活に満足している	0.49	0.13	0.31	1.05	1.05	0.85

注：かなりあてはまる＝2点、「ある程度あてはまる」＝1点、「あまりあてはまらない」＝-1点、「ほとんどあてはまらない」＝-2点としたときの相加平均。

女性の場合はどうか。今回調査結果に注目すると、男性に比べて、これらの3つのキャリアの間の差が小さいことが指摘できる。「非典型一貫」キャリアでは、「将来の見通し」と「経済的自立」がマイナスになっているがその差は小さく、男性ではマイナスだった「これまでの進路選択は順調」「周囲の人からうまくいっている」「現在の生活に満足している」はプラスで、他のキャリアとの差は小さなものである。特に「仕事以外に生きがいがある」は、このキャリアが最も高い数値になっている。女性では男性に比べて、職業キャリアによってこれらの意識に違いが出ることは少ない。つまり、生活における職業の位置づけが男性より小さいということであろう。

経年変化については、2001年から2006年にはプラス方向への変化、2006年から2011年へはマイナス方向への変化という点は男性の場合と同様である。どのキャリアでも、すべて数値が2006年より小さくなり「あてはまる」が少なくなっている。特に「将来の見通し」が大

大きくマイナス方向に変化した点も男性と同様である。

女性で変化が大きかったのは「他形態から正社員」キャリアで、進路の順調感や生活の満足度の低下幅が大きい。女性では男性のように、この間に正社員への移行者が増えてはいないので、正社員への移行のハードルは高かったのではないかと思われる。そうした困難さか、あるいは、獲得した正社員の雇用が納得のいくものではなかったからなのか、はっきりしたことはわからないが、正社員への移行が即満足につながるわけではないことは指摘できよう。

6. キャリアと社会的問題への関心

職業キャリアの違いによって働き方にかかわる社会的問題への関心は異なるのだろうか。近年、国際的には若者が当事者として格差問題に関心を持って行動する傾向がみられ、大きく報道されるようになってきている。我が国の若者も、当事者として非正規雇用についての問題意識をもっているのだろうか。

調査では「ワーキングプア」「派遣切り」「新卒で就職できないこと」「ニート」についての程度問題と感じているかを尋ねている。その回答を数値化して、キャリア別、現職就業形態別に示したものが、図表1-35、図表1-36である。

キャリア別の傾向をみると、女性の「他形態から正社員」で「ワーキングプア」の問題を問題視する人が少し多く、また、就業形態別には、女性の「失業・無業」で「ワーキングプア」を問題と思わない傾向があるが、それほど顕著なものではない。「非典型一貫」の人が特にこうした問題を強く意識しているということはなく、この調査の時点では、職業キャリア、就業形態によって働き方の問題への意識はそれほど違うわけではなかった。

図表1-35 20歳代後半層のキャリア別社会的問題への関心

	ワーキング プア	派遣切り	新卒未就 職	ニート
男性 正社員定着・転職	2.9	2.8	3.1	3.0
非典型一貫	2.6	2.9	3.0	2.9
他形態から正社員	2.6	2.9	2.9	3.1
男性25-29歳計	2.8	2.9	3.1	3.0
女性 正社員定着・転職	3.1	3.1	3.5	3.1
非典型一貫	2.6	3.4	3.4	3.1
他形態から正社員	3.4	3.3	3.5	3.3
女性25-29歳計	2.9	3.2	3.5	3.2

注：計にはその他のキャリアを含む。

数値は、「とても問題だと思う」「やや問題だと思う」「あまり問題ではない」「まったく問題ではない」「わからない」をそれぞれ4～0点とした時の相加平均。

表 1-36 20 歳代後半層の現職就業形態別社会的問題への関心

	ワーキング プア	派遣切り	新卒未就 職	ニート
男性 正社員(公務含む)	2.8	2.8	3.0	3.0
アルバイト・パート	2.6	2.8	3.0	3.0
契約・派遣等	2.8	3.1	3.0	3.0
自営・家業	2.7	3.0	3.3	2.9
失業・無職	3.0	3.3	3.3	3.2
女性 正社員(公務含む)	3.1	3.1	3.5	3.2
アルバイト・パート	2.7	3.4	3.4	3.1
契約・派遣等	2.8	3.3	3.5	3.2
自営・家業	3.0	3.1	3.5	3.4
失業・無職	2.3	3.3	3.7	3.2

注：数値は、「とても問題だと思う」やや問題だと思う」「あまり問題ではない」「まったく問題ではない」「わからない」をそれぞれ4～0点とした時の相加平均。

第6節 職業能力の形成とキャリア

この節では、職業能力の形成・獲得という点から初期キャリアを考える。非正規雇用の問題の一つは、正社員に比べて勤務先による能力開発の機会が少ないこと、そのために職業能力形成の上で重要な若年期に能力形成が進まないことである。それは本人の将来にも、また我が国の経済発展にもマイナスの影響を与える可能性が指摘されている。

調査では自己認識によるものではあるが、個人がどのような「仕事上の知識や技能についての強み」を持ち、それを、いつごろ、どのような経験で獲得したか、自由記入で書いてもらった。また、学校での職業教育・専門教育については最後に在学した学部や学科を具体的に記入してもらった。これらの記述を基に、どこでどう獲得した職業能力がキャリア形成に関係するのか探してみたい。

1. 仕事上の知識や技能についての強みの獲得

まず、本人が「仕事上の知識や技能についての強み」と認識しているのはどのような能力であろうか。自由記述を整理したのが次の図表1-37である。パソコンやキヤドなどその操作、職業資格、そのほか特定分野の具体的な知識、技能を挙げる人が多く、ここでは、これをまとめて「スキル・資格」と呼ぶことにする。こうした能力を強みとして挙げた人は全体の44.0%と多い。次に、接客や言葉使いマナー、あるいはコミュニケーション能力、気配り、さらに営業力などをくくって「対人能力」とした。これを挙げる人が19.3%あった。また、忍耐力や責任感、積極性、先見性、まじめさなど、「行動様式」レベルの能力観も多く記述され、これもひとくくりとして数えると9.3%の人が挙げていた。経験という表現もあったが、その内容が不明なのでここでは「その他」に入れた。なお、自由記述のアフターコードであり、内容によっては2つ以上の項目にまたがることもある。したがって、複数回答としての集計になるので、図表の比率の合計は100%を超える。

また、この欄への無回答者は17.8%、強みは特にないという回答は10.8%あった。すなわち、約4分の3の回答者が具体的な強みについて記述してくれたことになる。

図表1-37 仕事上の知識や技能についての強み（複数回答）

		N	パーセント
対人能力	営業力・販売力	59	2.9%
	接客・笑顔・マナー・サービス精神	183	8.9%
	コミュニケーション能力、気配り、協調性	135	6.6%
	人脈	8	0.4%
	リーダーシップ、その他の対人能力	19	0.9%
スキル・資格	パソコン、キヤド操作	149	7.2%
	情報処理技術、IT	59	2.9%
	経理・事務	69	3.4%
	医療・福祉	86	4.2%
	機械・電気・自動車・技術	54	2.6%
	調理・栄養	45	2.2%
	教育・保育	53	2.6%
	法務・金融・保険・不動産	53	2.6%
	語学	52	2.5%
	美理容・エステ・整体	63	3.1%
	建築・測量・インテリア	18	0.9%
	音楽・美術、ファッション・デザイン	34	1.7%
	トリミング、動物関係	8	0.4%
	車の運転	11	0.5%
	資格	154	7.5%
	その他専門知識	150	7.3%
行動様式	忍耐・責任感、信頼感	51	2.5%
	うちこむ、一所懸命、まじめ	31	1.5%
	器用・正確、早い、効率が良い	27	1.3%
	物覚え、先見性、判断力、思考力	61	3.0%
	前向き、積極性、行動力	14	0.7%
その他行動様式(適応力、企画力)	19	0.9%	
その他	マネジメント、経営管理	8	0.4%
	経験	39	1.9%
	体力	15	0.7%
	その他	31	1.5%
	なし	222	10.8%
	無回答	366	17.8%
合計		2,058	100.0%

調査では、この強みの内容と同時に、それをいつ頃、どんな経験で身に付けたかも尋ねている。それを分類してまとめたのが図表1-38である。漠然と日々の仕事を通してといった回答も含めて、現在の職場での経験を挙げる者が3分の1と多い。これに、前職での経験やOff-JT、自学自習を含めた、職場に入ってから能力開発経験を挙げた者は全体の41.2%に上った。また、学校時代の経験（留学は除く）を挙げた者は22.4%であった。

図表 1-38 強みの獲得経路（いつごろ、どんな経験で？）（複数回答）

	N	パーセント
在職場のOJT、漠然と仕事経験	682	33.1%
前職経験	104	5.1%
自学自習	46	2.2%
会社主導の研修	44	2.1%
学校時代のアルバイト経験	120	5.8%
学校での勉強（インターン含む）	237	11.5%
学校での資格取得	83	4.0%
学校での部活・委員経験、ボランティア	40	1.9%
留学、海外経験	29	1.4%
卒業後の資格取得	47	2.3%
職業訓練	7	0.3%
生活体験、生活上の経験	176	8.6%
習い事	19	0.9%
その他、趣味	7	0.3%
なし	111	5.4%
無回答	490	23.8%
合計	2,058	100.0%

2. 強みとキャリア

さて、この強みと職業キャリアの間には何らかの関係があるのだろうか。挙げられた強みの内容と職業キャリアの関係を見たのが、図表 1-39 である。「非典型一貫」キャリアと他の 2 つのキャリアの違いに注目すると、「非典型一貫」では男女とも、「スキル・資格」型の強みを挙げる人が少ない。特に女性では他の 2 つのキャリアの半分程度にとどまっている。他の 2 つのキャリアではどのような「スキル・資格」が挙げられているかを図表 1-40 でみると、女性の場合、他の 2 つのキャリアでは、パソコンやキヤド操作、医療・福祉、美容・エステ、何らかの資格を持っていることなどが多い。男性の場合は「正社員定着・転職」で機械や電機の技術やパソコン操作などが挙げられている。「非典型一貫」ではこうした強みがあまり挙げられず、多いのは対人能力、それも接客系の能力である。就業職種にサービス系の仕事が多いことを反映しているのであろう。さらに、男性では「なし」女性では「無回答」が多く、自分の仕事上の能力に自信が持てない状況がうかがわれる。

「非典型から正社員」と「非典型一貫」との違いが、正社員への移行に有効な職業能力を示唆する可能性は十分あるだろう。「非典型から正社員」に移行した人と「非典型一貫」の人とで違いが大きいのは、まず強みを持っているという認識であり、そしてその強みが接客に偏らない点である。特にこれは女性で顕著な特徴である。

次に、その強みの獲得経路との関係を見る。図表 1-41 にみるように、「非典型一貫」は他の 2 つのキャリアに比べて、職場を挙げる者が少ない。やはり無回答が多く、男性では、「なし」も多い。

図表 1-39 キャリアと仕事上の強み

単位：%

	男性					女性				
	正社員 定着・ 転職	非典型 一貫	他形態 から正 社員	その他	合計	正社員 定着・ 転職	非典型 一貫	他形態 から正 社員	その他	合計
対人能力	15.4	16.7	17.8	20.2	17.0	16.4	27.7	19.5	25.8	21.7
スキル・資格	48.9	30.9	34.4	38.5	41.6	55.9	30.1	62.2	41.8	46.4
行動様式	9.2	8.6	12.3	10.1	9.8	10.0	8.9	7.3	8.5	9.1
その他	5.1	8.0	7.4	6.0	6.1	2.7	3.5	2.4	2.8	2.9
なし	7.2	23.5	11.7	11.9	11.5	10.0	12.4	3.7	9.9	10.1
無回答	20.1	16.0	22.1	18.8	19.5	12.0	21.6	13.4	18.3	16.1
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
	487	162	163	218	1030	451	282	82	213	1,028

図表 1-40 キャリアと仕事上の強み（詳細）

単位：%

	男性					女性				
	正社員 定着・ 転職	非典型 一貫	他形態 から正 社員	その他	合計	正社員 定着・ 転職	非典型 一貫	他形態 から正 社員	その他	合計
営業力・販売力	4.3	1.2	3.1	3.2	3.4	2.7	1.4	0.0	3.8	2.3
接客・笑顔・マナー・サービス精神	4.9	<u>12.3</u>	5.5	7.3	6.7	7.3	<u>17.4</u>	6.1	12.7	11.1
コミュニケーション能力、気配り、協調性	4.7	3.1	6.7	7.8	5.4	5.8	8.9	<u>12.2</u>	8.5	7.7
人脈	0.6	0.0	0.0	0.5	0.4	0.4	0.4	0.0	0.5	0.4
リーダーシップ、その他の対人能力	1.2	0.0	2.5	1.4	1.3	0.9	0.0	1.2	0.5	0.6
パソコン、キヤド操作	<u>6.0</u>	3.7	4.9	5.5	5.3	8.6	7.1	<u>13.4</u>	11.3	9.1
情報処理技術、IT	4.9	3.1	3.7	2.8	4.0	3.1	0.4	1.2	0.9	1.8
経理・事務	2.3	1.2	1.8	1.8	1.9	8.2	1.1	2.4	3.3	4.8
医療・福祉	3.1	0.6	2.5	0.0	1.9	<u>8.4</u>	2.5	<u>7.3</u>	7.0	6.4
機械・電気・自動車・技術	<u>6.6</u>	0.6	1.2	5.5	4.6	0.9	0.7	1.2	0.0	0.7
調理・栄養	1.2	<u>6.2</u>	1.8	2.8	2.4	1.3	2.5	3.7	1.9	1.9
教育・保育	1.2	3.1	1.8	1.8	1.7	4.7	2.1	6.1	1.4	3.4
法務・金融・保険・不動産	4.1	0.0	2.5	1.4	2.6	4.2	0.7	2.4	1.4	2.5
語学	2.1	1.2	2.5	1.4	1.8	4.0	1.8	3.7	3.3	3.2
美美容・エステ・整体	<u>5.3</u>	0.0	0.6	2.3	3.1	3.3	1.8	<u>7.3</u>	2.3	3.0
建築・測量・インテリア	1.2	0.0	0.6	2.8	1.3	1.1	0.0	0.0	0.0	0.5
音楽・美術、ファッション・デザイン	0.4	3.7	1.2	1.4	1.3	1.3	2.8	3.7	1.9	2.0
トリミング、動物関係	0.0	0.0	0.6	0.0	0.1	0.2	0.7	1.2	1.4	0.7
車の運転	0.4	2.5	1.2	1.4	1.1					
資格	<u>6.4</u>	1.9	3.1	4.6	4.8	<u>15.7</u>	2.8	<u>9.8</u>	8.5	10.2
その他専門知識	<u>9.9</u>	6.2	<u>8.0</u>	7.3	8.4	6.2	6.0	<u>8.5</u>	5.2	6.1
忍耐・責任感、信頼感	2.1	1.9	<u>5.5</u>	3.2	2.8	2.7	2.1	2.4	0.9	2.1
うちこむ、一所懸命、まじめ	1.6	1.2	3.1	1.4	1.7	1.6	1.4	0.0	0.9	1.3
器用・正確、早い、効率が良い	0.8	2.5	0.0	1.8	1.2	0.7	1.8	2.4	2.3	1.5
物覚え、先見性、判断力、思考力	3.9	3.1	2.5	2.8	3.3	3.1	3.2	0.0	1.9	2.6
前向き、積極性、行動力	1.0	0.0	0.6	0.0	0.6	1.1	0.4	1.2	0.5	0.8
その他行動様式(適応力、企画力)	0.4	0.6	0.6	1.4	0.7	1.3	0.4	1.2	1.9	1.2
マネジメント、経営管理	0.8	0.6	0.6	0.0	0.6	0.4	0.0	0.0	0.0	0.2
経験	1.8	2.5	4.3	3.2	2.6	1.1	1.4	0.0	1.4	1.2
体力	0.6	3.1	1.2	0.5	1.1	0.0	0.7	1.2	0.5	0.4
その他	1.8	1.9	1.2	2.3	1.8	1.1	1.4	1.2	0.9	1.2
なし	7.2	<u>23.5</u>	11.7	11.9	11.5	10.0	<u>12.4</u>	3.7	9.9	10.1
無回答	20.1	16.0	22.1	18.8	19.5	12.0	<u>21.6</u>	13.4	18.3	16.1
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
	487	162	163	218	1,030	451	282	82	213	1,028

図表 1-4 1 キャリアと強みと獲得経路

単位：%

	男性					女性				
	正社員 定着・ 転職	非典型 一貫	他形態 から正 社員	その他	合計	正社員 定着・ 転職	非典型 一貫	他形態 から正 社員	その他	合計
職場	42.5	34.0	41.1	38.1	40.0	43.5	39.7	47.6	41.3	42.3
学校	23.6	14.2	8.6	18.8	18.7	29.0	21.6	30.5	24.4	26.2
生活・その他	12.1	14.2	17.2	18.3	14.6	11.8	11.3	20.7	15.0	13.0
なし	4.1	11.7	7.4	7.8	6.6	4.2	5.3	1.2	3.8	4.2
無回答	23.0	29.0	27.6	24.8	25.0	18.6	29.4	13.4	25.4	22.6
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
	487	162	163	218	1,030	451	282	82	213	1,028

図表 1-4 2 キャリアと強みと獲得経路（詳細）

単位：%

	男性					女性				
	正社員 定着・ 転職	非典型 一貫	他形態 から正 社員	その他	合計	正社員 定着・ 転職	非典型 一貫	他形態 から正 社員	その他	合計
現職場のOJT、漠然と仕事経験	37.8	28.4	29.4	26.1	32.5	38.8	29.8	39.0	26.3	33.8
前職経験	1.6	4.3	8.0	9.6	4.8	2.0	6.4	2.4	12.2	5.4
自学自習	2.1	0.6	4.9	2.8	2.4	1.3	1.8	4.9	2.8	2.0
会社主導の研修	2.7	1.2	1.8	0.9	1.9	2.7	2.5	3.7	0.9	2.3
学校時代のアルバイト経験	5.1	4.9	3.7	4.1	4.7	4.9	11.0	6.1	6.6	7.0
学校での勉強（インターン含む）	13.8	6.2	4.9	11.9	10.8	13.5	8.5	19.5	11.7	12.3
学校での資格取得	3.3	1.9	0.6	1.4	2.2	9.8	0.7	3.7	5.2	5.8
学校での部活・委員経験、ボランティア	2.3	1.2	0.6	2.3	1.8	2.2	2.5	2.4	0.9	2.0
留学、海外経験	0.6	0.6	1.2	2.8	1.2	1.6	1.4	2.4	1.9	1.7
卒業後の資格取得	2.3	0.6	3.1	2.8	2.2	3.1	1.1	2.4	2.3	2.3
職業訓練	0.4	0.0	0.0	0.5	0.3	0.0	0.4	1.2	0.9	0.4
生活体験、生活上の経験	7.8	11.7	11.7	10.6	9.6	5.8	7.4	13.4	8.9	7.5
習い事	0.4	1.2	0.6	0.9	0.7	1.3	1.1	0.0	1.4	1.2
その他、趣味	0.6	0.0	0.6	0.9	0.6	0.0	0.0	1.2	0.0	0.1
なし	4.1	11.7	7.4	7.8	6.6	4.2	5.3	1.2	3.8	4.2
無回答	23.0	29.0	27.6	24.8	25.0	18.6	29.4	13.4	25.4	22.6
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
	487	162	163	218	1,030	451	282	82	213	1,028

企業が非正社員に対しては正社員に対してほど能力開発を行っていないことは、すでに指摘されているところであるが、個人の意識を通して見ても、非典型雇用の場合、仕事を通しての強みの獲得はあまりできていない。現在の職場での就業を通じての能力開発を促進することは、非正規雇用対策として考えなければならない対応だが、一方、強みとして意識しやすいのがスキルや資格であることから、まとまった形での職場外での能力開発の機会の整備も重要である。学校時代の職業能力の獲得や職場外での資格取得や職業である。

今回の調査では、学校時代の勉強が現在の強みにつながっているという記述は少なくなかったが、「非典型一貫」の場合にはこれはあまり挙げられていない。図表 1-4 2 でより詳細にみれば、「正社員定着・転職」の男女と「他形態から正社員」の女性では、学校の中でも勉強の面を挙げた人が多い。一方、「非典型一貫」の女性は学校時代のアルバイトに多く言及していた。「非典型から正社員」への移行を促進するような強みには、学校時代の勉強を通して

獲得されたものもあるだろう。

3. 学校時代の職業教育・専門教育とキャリア

ではその学校時代の勉強によって獲得したものとは何か。最も考えられるのは、職業教育・専門教育を通して獲得したものであろう。調査では、最後に在学した学校での職業教育・専門教育を次の図表1-43のように分類した³。

図表1-43 学校時代の職業教育・専門教育と強みの獲得経路

単位：%

	職場	学校	生活・その他	なし	無回答	合計		
男性	高校 普通・総合	34.2	5.4	11.4	14.1	35.6	100.0	149
	高校 商業・ビジネス系	40.0	0.0	16.0	8.0	40.0	100.0	25
	高校 工業・機械・電気系	40.4	10.6	19.1	6.4	25.5	100.0	47
	高校 その他	45.5	13.6	18.2	9.1	18.2	100.0	22
	専門短大高専 人文・ビジネス系	21.7	13.0	30.4	8.7	34.8	100.0	23
	専門短大高専 資格系	52.8	29.2	8.3	4.2	12.5	100.0	72
	専門短大高専 理・工業系	33.9	35.6	16.9	6.8	15.3	100.0	59
	専門短大高専 芸術他	39.7	12.7	15.9	7.9	27.0	100.0	63
	大学 文系	45.3	20.3	17.2	3.7	19.3	100.0	296
	大学 理系(工農薬など)	42.8	29.7	6.5	5.1	22.5	100.0	138
	大学 芸術他(体育、学際的な情報・環境系含む)	41.7	37.5	8.3	8.3	16.7	100.0	24
	大学 保健教育福祉	46.7	33.3	20.0	0.0	13.3	100.0	15
	大学 家政生活科学	-	-	-	-	-	-	1
	合計	41.6	19.7	14.1	6.6	23.1	100.0	934
女性	高校 普通・総合	41.7	13.3	10.0	9.2	29.2	100.0	120
	高校 商業・ビジネス系	42.4	30.3	9.1	3.0	30.3	100.0	33
	高校 工業・機械・電気系	-	-	-	-	-	100.0	5
	高校 その他	38.5	7.7	7.7	7.7	38.5	100.0	13
	専門短大高専 人文・ビジネス系	42.7	20.9	16.4	3.6	22.7	100.0	110
	専門短大高専 資格系	38.5	36.3	8.9	5.2	19.3	100.0	135
	専門短大高専 理・工業系	30.0	40.0	10.0	0.0	30.0	100.0	10
	専門短大高専 芸術他	48.5	33.7	11.9	4.0	15.8	100.0	101
	大学 文系	44.9	25.0	16.7	3.3	18.5	100.0	276
	大学 理系(工農薬など)	39.5	37.2	7.0	4.7	16.3	100.0	43
	大学 芸術他(体育、学際的な情報・環境系含む)	53.3	28.9	20.0	0.0	13.3	100.0	45
	大学 保健教育福祉	34.1	29.3	14.6	0.0	34.1	100.0	41
	大学 家政生活科学	60.7	35.7	3.6	0.0	10.7	100.0	28
	合計	43.6	26.8	13.0	4.1	21.0	100.0	960

これと獲得経路との関係を見てみよう。学歴段階ごとにみると、高校レベルで強みを学校を通して獲得したという者は少ないが、女性の商業系では3割が学校を挙げている。高等教育卒業者のほうが多く学校での経験を挙げているが、中でも理系・工業系の専攻の場合や資

³ ここでは受けた職業養育・専門教育に注目するため、卒業者と中途退学者を区別せずに、卒業者として扱っている。

格系の専攻の場合に学校での経験を指摘する比率が高い。低いのは文系、ビジネス系の専攻である。このあたりは、彼らがどのような職種に就いているかも関係しよう(図表1-44)。高卒女子の商業系卒業生の8割近くは事務職か販売職についている。理系・工業系の高等教育卒は5~7割が専門技術職に、専門・短大・高専の資格系職種ではサービス職(理美容など)が多い。卒業生数の多い高校普通科や大学文系で、仕事上の強みと学校教育との関係が薄いことが課題であろう。

図表1-44 学校時代の職業教育・専門教育と現職職種

単位：%

	専門・技 術的な 仕事	事務の 仕事	販売の 仕事	サービス の仕事	生産工 程・建設 の仕事	運輸・通 信・保安 の仕事	その他・ 無回答	合計			
男性	高校 普通・総合	11.9	3.0	20.7	30.4	19.3	12.6	2.2	100.0	135	
	高校 商業・ビジネス系	8.3	4.2	25.0	33.3	16.7	12.5	0.0	100.0	24	
	高校 工業・機械・電気系	15.6	2.2	13.3	15.6	37.8	13.3	2.2	100.0	45	
	高校 その他・不明	4.8	0.0	14.3	47.6	14.3	19.0	0.0	100.0	21	
	専門短大高専 人文・ビジネス系	36.4	0.0	13.6	13.6	4.5	22.7	9.1	100.0	22	
	専門短大高専 資格系	15.5	2.8	7.0	67.6	0.0	5.6	1.4	100.0	71	
	専門短大高専 理・工業系	54.5	3.6	14.5	5.5	18.2	3.6	0.0	100.0	55	
	専門短大高専 芸術他	32.1	8.9	28.6	16.1	1.8	8.9	3.6	100.0	56	
	大学 文系	27.0	28.1	26.3	8.2	2.5	5.3	2.5	100.0	281	
	大学 理系(工農薬など)	67.7	4.7	11.0	11.0	5.5	0.0	0.0	100.0	127	
	大学 芸術他(体育、学際的な情報・環境系含む)	54.5	13.6	22.7	4.5	4.5	0.0	0.0	100.0	22	
	大学 保健教育福祉	40.0	13.3	20.0	26.7	0.0	0.0	0.0	100.0	15	
	大学 家政生活科学	-	-	-	-	-	-	-	-	1	
	中卒	18.8	0.0	0.0	0.0	68.8	0.0	12.5	100.0	16	
	無回答・不明	33.3	8.0	13.3	17.3	10.7	12.0	5.3	100.0	75	
	男性計	31.2	11.5	18.8	19.0	9.9	7.2	2.3	100.0	966	
	女性	高校 普通・総合	9.8	24.1	20.5	39.3	1.8	3.6	0.9	100.0	112
		高校 商業・ビジネス系	0.0	41.4	34.5	20.7	0.0	3.4	0.0	100.0	29
		高校 工業・機械・電気系	25.0	0.0	0.0	75.0	0.0	0.0	0.0	100.0	4
		高校 その他・不明	8.3	8.3	41.7	33.3	0.0	8.3	0.0	100.0	12
専門短大高専 人文・ビジネス系		24.5	31.8	18.2	20.0	1.8	1.8	1.8	100.0	110	
専門短大高専 資格系		37.1	12.9	7.3	41.1	0.8	0.0	0.8	100.0	124	
専門短大高専 理・工業系		50.0	30.0	10.0	0.0	0.0	10.0	0.0	100.0	10	
専門短大高専 芸術他		25.0	15.6	24.0	31.3	3.1	1.0	0.0	100.0	96	
大学 文系		18.3	53.1	17.2	9.5	0.4	0.0	1.5	100.0	262	
大学 理系(工農薬など)		65.9	17.1	12.2	4.9	0.0	0.0	0.0	100.0	41	
大学 芸術他(体育、学際的な情報・環境系含む)		36.4	34.1	13.6	13.6	0.0	2.3	0.0	100.0	44	
大学 保健教育福祉		57.5	20.0	7.5	7.5	2.5	0.0	5.0	100.0	40	
大学 家政生活科学		44.0	28.0	16.0	12.0	0.0	0.0	0.0	100.0	25	
中卒		11.1	0.0	44.4	33.3	0.0	0.0	11.1	100.0	9	
無回答・不明		32.7	16.4	12.7	23.6	1.8	0.0	12.7	100.0	55	
女性計		26.6	30.2	17.0	22.1	1.1	1.1	1.8	100.0	973	

この教育と職業キャリアの直接の関係をみる(図表1-45)。学歴ごとに見ると高校では男女とも商業や工業の職業教育を受けている者が「正社員定着・転職」が多く、職業教育を受けていない普通科卒で、「非典型一貫」や「他形態から正社員」が多い。高等教育卒業者は全般に「正社員定着・転職」が多いのだが、専門・短大・高専レベルでは、資格系や理系・

工業系（男性）で特に「非典型一貫」が少ない。大学でも理系で「非典型一貫」が少ないが、職業との関係が低い文系でも「非典型一貫」は少ない。学校段階によって、職業との関係を持った教育が卒業後のキャリアに与える意味は異なると思われる。

図表 1-45 学校時代の職業教育・専門教育と職業キャリア

単位：%

	正社員 定着・転 職	非典型 一貫	他形態 から正 社員	その他	合計			
男性	高校 普通・総合	18.1	28.2	29.5	24.2	100.0	149	
	高校 商業・ビジネス系	40.0	16.0	20.0	24.0	100.0	25	
	高校 工業・機械・電気系	51.1	10.6	10.6	27.7	100.0	47	
	高校 その他・不明	40.9	27.3	9.1	22.7	100.0	22	
	専門短大高専 人文・ビジネス系	39.1	17.4	21.7	21.7	100.0	23	
	専門短大高専 資格系	62.5	5.6	8.3	23.6	100.0	72	
	専門短大高専 理・工業系	55.9	6.8	8.5	28.8	100.0	59	
	専門短大高専 芸術他	15.9	34.9	23.8	25.4	100.0	63	
	大学 文系	57.4	11.5	12.5	18.6	100.0	296	
	大学 理系(工農薬など)	68.8	12.3	5.8	13.0	100.0	138	
	大学 芸術他(体育、学際的な情報・環境系含む)	50.0	16.7	8.3	25.0	100.0	24	
	大学 保健教育福祉	60.0	26.7	0.0	13.3	100.0	15	
	大学 家政生活科学	-	-	-	-	-	1	
	中卒	22.2	11.1	33.3	33.3	100.0	18	
	無回答・不明	37.2	12.8	29.5	20.5	100.0	78	
	男性計	47.3	15.7	15.8	21.2	100.0	1,030	
	女性	高校 普通・総合	10.8	55.0	7.5	26.7	100.0	120
		高校 商業・ビジネス系	36.4	12.1	3.0	48.5	100.0	33
		高校 工業・機械・電気系	-	-	-	-	-	5
		高校 その他・不明	7.7	46.2	0.0	46.2	100.0	13
専門短大高専 人文・ビジネス系		39.1	29.1	10.9	20.9	100.0	110	
専門短大高専 資格系		55.6	10.4	7.4	26.7	100.0	135	
専門短大高専 理・工業系		30.0	40.0	10.0	20.0	100.0	10	
専門短大高専 芸術他		14.9	53.5	10.9	20.8	100.0	101	
大学 文系		63.0	16.7	6.2	14.1	100.0	276	
大学 理系(工農薬など)		74.4	7.0	4.7	14.0	100.0	43	
大学 芸術他(体育、学際的な情報・環境系含む)		37.8	35.6	8.9	17.8	100.0	45	
大学 保健教育福祉		68.3	17.1	7.3	7.3	100.0	41	
大学 家政生活科学		64.3	14.3	3.6	17.9	100.0	28	
中卒		0.0	50.0	30.0	20.0	100.0	10	
無回答・不明		34.5	32.8	13.8	19.0	100.0	58	
女性計		43.9	27.4	8.0	20.7	100.0	1,028	

第7節 まとめ

本章では、非典型雇用の拡大の中で変動してきた若者の職業キャリアと意識の近年の状況を、2011年に行った第3回「若者ワークスタイル調査」の結果を用いて、第2回調査（2006年）結果と比較しながら検討してきた。これまでの検討で明らかになった主な点は以下の通りである。

- ①離学時の正社員比率は2006年調査より高まった。高等教育卒業者及び2005～2009年の景気回復の影響下にあった時期に学校を卒業した者の正社員比率は高いが、高卒者の正社員比率は低い水準のままである。この高卒者の離学時の正社員比率は、学校や職業安定機関を通して把握されている水準よりかなり低い。また、初職の就業形態に対しての親の学歴や生家の豊かさの影響は、本人の学歴を固定すれば見られなかった。親の学歴や豊かさが本人の学歴を規定し、学歴が正社員としての就業機会を規定するという関係はみられ、これは2006年と変わらなかった。
- ②2006年調査と比べて、離学時に正社員就職した場合の定着率は高まった。一方、離学時に無業や非典型雇用であった場合に後に正社員になる比率は、男性では5割と2006年の4割より高まったが、女性は3割で変わらなかった。この結果「非典型一貫」は男性では若干の減少がみられた。変わらない傾向は、中途退学者には「非典型一貫」が多いこと、中途退学者のうち20歳代後半男性では「他形態から正社員」も多いことである。
- ③正社員と比べた時、アルバイト・パートは勤務先が小規模企業であることが多く、年収は半分程度、1時間当たりの収入では7割程度である。契約・派遣では勤務先規模は小規模が少なく、年収は8割弱、1時間当たりの収入は9割弱の水準で、いずれも2006年とほぼ同じであった。また、アルバイト・パートでは社会保険加入について「わからない」や「加入していない」者が少なからずいた。「他形態から正社員」の場合の勤務先は、「正社員定着」に比べて小規模企業が多く、年収も時間当たり収入も9割弱にとどまっていた。
- ④20歳代後半層のうち、「非典型一貫」の場合、現在の働き方として非典型雇用に望ましいとする者が4割程度いるが、3年後についても望ましいとする者は男性で8%、女性で26%と少ない。2006年調査と比べると現在も3年後も正社員を望ましいとする者が増えた。特に女性で大幅に増えた。また、「他形態から正社員」になった男性では、将来の具体的展望への記述が特に少なく、正社員後のキャリアに課題があることが感じられた。
- ⑤20歳代後半層の意識では、将来の見通しやこれまでの進路の順調感、自立感、生活満足感については、「正社員定着・転職」で肯定的意見が「非典型一貫」で否定的意見を持つ者が多い。女性は男性よりキャリアによる意見の差が小さく、全般により肯定的である。経年的には2001年から2006年には肯定的意見が増える方向に変わったが、2006年から2011年の変化は逆で否定的意見が増加した。男性では「非典型一貫」での進路の順調感、「他形態から正社員」での自立感の低下が大きく、女性では「他形態から正社員」が全般的に否

定的な方向への変化が大きい。また、「派遣切り」などの社会的問題への関心の程度は、就業形態やキャリア類型によってはあまり違わなかった。

⑥本人が「強み」と意識する職業能力を「スキル・資格」「対人能力」「行動様式」「その他」に分けると、「非典型一貫」では「スキル・資格」を挙げる者が特に少なく、強み「なし」や無回答の者が多い。「非典型一貫」では、強みの獲得経路として職場経験を挙げる者も少ない傾向があり、職場外のスキル獲得経路として学校も重要である。学校を通して強みを獲得したという者が多いのは、理系・工業系や資格系の高等教育卒業者である。高校については職業教育を受けた者では「非典型一貫」が少ない傾向があった。学歴段階によって職業教育・専門教育の効果の現れ方は異なる。

これらのファインディングスから今後の若者の就業をめぐる政策展開において重要だと思われる点を下記に示す。

① 新卒就職支援の継続・拡充

離学時に無業や非典型雇用であった場合、後に正社員に移行する比率は 2006 年より高まってはいるものの、男性でも 5 割、女性では 3 割にとどまっている。マッチングの仕組みや工夫や個別の支援などを通して、学卒時点での就職活動を途中で断念することなく続けられるよう集中的に支援することが必要である。また、本調査での高卒者の正社員就職率は、学校や職業安定機関で把握されているものより低く、求職者として把握されていなかった卒業生がアルバイトなどの形で就業していることが考えられる。高卒時点での就職支援の在り方を検討する必要がある。さらに、求職活動時の景気によって離学時点の就職率は左右されるので、特に不況時には重点的な支援が必要である。

② 中途退学の予防と退学後の支援

高校や高等教育機関からの中途退学者が離学時に正社員となる比率は非常に低い。20 歳代後半には男性では正社員に移行する者が 4 割近くにまで増えるものの、女性是非典型雇用のままであることが多い。中途退学が以降の職業キャリアに与える影響を伝えたり、他の機関での学びなおしや就業支援につなげるなど、学校と連携した支援が求められる。

③ 企業の正社員登用・採用及び新卒卒の柔軟な運用の促進

男性では非典型雇用から正社員への移行率は高まっていたが、「非典型一貫」の正社員志向は男女とも強くなっていた。若者のキャリア形成の面からは、非典型雇用者の正社員への登用や採用を促進する支援が期待される。企業の採用リスクを軽減するトライアル雇用や職業訓練を伴ったジョブカード制度など、あるいは、新卒 3 年以内の者の採用促進策などについて、政策の効果を測りながらの施策の継続が期待される。なお、女性の正社員への移行率が低くとどまる中で「非典型一貫」での正社員志向が高まっていることの背景要因について、改めて検討のうえ対応する必要がある。

④ 非典型雇用者の均衡待遇と能力開発の促進

非典型雇用者の均衡待遇を目指した政策はすでにすすめられているところであるが、今回の調査でも「非典型一貫」キャリアの若者の多くが、将来に明るい展望を持たず、自立も家族形成も難しい状況がうかがわれた。労働条件の改善やキャリア形成につながるさらなる施策が期待される。また、そのためには若者自身の職業能力の獲得・向上が必要だと思われるが、「非典型一貫」では職場経験を通しての獲得が進んでいず、学校教育を通しての職業能力開発を含め、多様な能力開発の機会を社会的に整備することが重要である。

⑤ 20歳代をキャリア探索期と捉えた相談機会、能力開発機会の充実

「非典型から正社員」になれば、キャリア形成の課題がなくなるわけではない。このキャリアの若者たちは相対的に労働条件に恵まれない場合が多いが、そればかりでなく、男性の場合には将来への希望が語られにくい傾向がみられた。いったん正社員になった後に非典型雇用や無業状態になるケースも少なくない。新規学卒就職して一つの会社に定年まで勤め上げるというモデルから外れれば、キャリアの初期は様々な迷いの中にあるのが当然である。20歳代は揺れ動く時期として幅広くキャリア形成支援の対象と捉えて対応できる体制整備が望まれる。

引用文献

- 日本労働研究機構，2001，「大都市の若者の就業行動と意識—広がるフリーター経験と共感」調査研究報告書 No.138，日本労働研究機構。
- 労働政策研究・研修機構，2006，「大都市の若者の就業行動と移行過程—包括的な移行支援に向けて」労働政策研究報告書 No.72，労働政策研究・研修機構。
- 労働政策研究・研修機構，2008，「地方の若者の就業行動と移行過程」労働政策研究報告書 No.108，労働政策研究・研修機構。

第2章 フリーターへの経路と離脱

第1節 はじめに

本章では、誰が自分をフリーターとして認識しているのか（第1節）、誰がフリーターになりやすいのか（第2節）、フリーター経験がどのようなものとして認識されているのか（第3節）、フリーターからの離脱はどのように起こっているのか（第4節）、という観点から3時点の若者のワークスタイル調査を用いてフリーターの変遷について探してみたい。

フリーターという言葉はもともとフリーアルバイトの略であり、80年代後半に就職情報誌の編集長が考案した言葉だと言われている。当初は就業形態というよりも、自分の夢を追いかけてながら働くという自由なライフスタイルの側面が強調されていた。もともとフリーターは、アルバイトという就業形態ではなく、意識に力点が置かれた呼称である。

その後政策を進める中でフリーターを数量的に把握する試みがなされるようになったが、その際に誰をフリーターと定義するかが議論になった。若者である・正社員ではない・学生ではない・主婦ではない、などが主な指標となったが、正社員でないとはいってもパート・アルバイトのみとするのか派遣や嘱託を入れるのか、無業をすべて含めるのか、年齢をどこまで広げるのかなど、その定義は今でも一致をみているとは言えない。

こうした動向に対して本研究は、「誰が自分をフリーターだと思っているのか」という地平から出発し、調査分析を進めてきた。本章で「フリーター」という言葉を使う場合には、それは本人の認識（自己認識）に拠っている。具体的には「あなたはフリーターを経験したことがありますか」という問いに対して「はい」と答えた人々を意味している。

この「フリーター」の定義は主観的なものであるが、実際にはのちの分析にみるように、就業形態としてのアルバイトという状態と主観的な意識はほぼ重なっている。しかし就業状態と意識に乖離があるケースも数少ないながらもあり、例えば学生でもなく主婦でもない状態でアルバイトをしている若者が自分を「フリーター」とは認識していないこともあれば、正社員男性でも自分を「フリーター」と認識することもある。前者の若者は「フリーター」を「やる気がない若者」と考えているが自分は違うので「フリーター」ではないと感じているのかもしれないし、後者の若者は正社員の不安定さを強く感じているために、正社員でも「フリーター」のようだと感じているのかもしれない。この乖離も興味深いところであるが、いずれにしても現代の若者においては、自らの状態を「フリーター」と意味づけるかどうかには彼ら彼女らの意識のありようの一端が開示されるともいえる。本章は、「フリーター」を就業状態と意識のハイブリッドとして捉え、それぞれの時代の若者の「フリーター」観を反映した「フリーター」の定義で分析を行っていくことにしたい。

さて以上のような問題意識でフリーターを捉えて行くが、前回の2006年（第2回調査）においては、2001年調査に比べてフリーター経験率は上昇したが、フリーターからの離脱志向は弱まった。この現象を前報告書では、フリーター経験の「一般化」により、フリーター

への忌避感が弱まったと解釈した。2012年時点で振り返ってみれば、前回調査はちょうど正社員への道が開かれはじめた景気回復期にあっていた。若者の将来像は全体として明るいものであり、フリーターも例外ではなかった。事実リーマンショック前の景気回復の時期においては、フリーターから正社員への道は相対的に広がったのである（労働政策研究・研修機構 2010）。

しかし現在では、本章の分析や第3章に見るように、フリーターは自由でやりたいことが探せる働き方だとは思われなくなった。2006年調査と前後して登場した「格差社会論」の広がりにより、若者がいだけフリーターのイメージも大きく変化したことが背景にあると推測される。また経済危機を境に雇用環境は悪化し、若者の雇用をとりまく状況も大きく変化した。

「格差社会論」の実証的な検討の多くは長期にわたる観察が多いが（石田・近藤・中尾編 2011 など）、本報告書では若者の移行の変化が生じた90年代後半以降の中期的な変化に焦点をあてるものである。本分析の特徴は、長期的な不況によりフリーターが増加しはじめていた2001年、雇用の状況がよくなりつつあった2006年、そして再び経済危機による雇用の低迷が起こっている2011年という3時点を比較することができるため、近年の若者の変化をより鮮明に捉えられる利点があると考えられる。

下記では、フリーター経験を規定する変数や、フリーターから正社員への離脱について検討することが主たる作業になるが、第5節では公的支援の活用についても論じることにする。

第2節 フリーター経験の認識

分析に先立ち、誰が自分をフリーターと認識しているのか（自己認識）について検討する。分析においては、フリーター経験の認識と就業形態についての関連を分析する。

1. フリーター認識とキャリア類型

図表2-1は、キャリア類型とフリーター認識の関連について示した（男性のみ）。結婚後の女性のパート労働者はフリーターとみなされないことが多いため、主に男性について示している。わずかではあるものの「正社員定着者」にフリーター認識を持つ者がいたり、他方で非典型一貫でもフリーター認識を持たない者も含まれる。ただし全体としては、正社員以外の働き方をしたことがある場合に、フリーターを経験したと認識される傾向がみられる。

図表 2-1 フリーター認識とキャリア類型（男性のみ）

	経験率	N
正社員定着	5.1	409
正社員転職	23.7	76
正社員から非典型	84.1	63
正社員一時他形態	82.8	29
非典型一貫	87.7	162
他形態から正社員	77.2	162
自営・家業	46.0	50
現在無業	63.2	57
その他・不明	47.1	17

続いて、フリーター経験があると認識される雇用形態とはどのようなものか。ここでは非典型雇用経験者に焦点をあて、その経験の内実とフリーター認識を詳しく分析した。なお女性については、結婚後のパート・アルバイト労働はフリーターとはみなされないことが多いことから、ここでは主に男性についての結果を示している。

図表 2-2 フリーター認識と非典型雇用経験の内実

	2011 東京・男性	2006 東京・男性	2008 北海道・男性	2011 東京・女性
すべて経験	100.0	100.0	100.0	87.0
契約・嘱託＋派遣	80.0	0.0	0.0	28.6
契約嘱託＋パートアルバイト	93.9	96.3	88.0	83.3
契約嘱託のみ	27.0	17.1	0.0	20.0
派遣＋パートアルバイト	96.4	100.0	60.0	89.5
パートアルバイトのみ	90.1	97.0	74.2	90.8
派遣のみ	61.1	38.5	0.0	14.3
いずれも経験なし	17.5	0.0	1.2	11.0

図表 2-2 は、経験した就業形態とフリーター認識についての関連を示したものである。「2006 年東京調査」、「2008 年北海道調査」、「2011 年東京調査」について比較した。参考までに 2011 年の東京女性についても示したが、検討は男性について行う。

非典型雇用を「すべて経験」している場合には、自分がフリーターを経験したと認識する割合がきわめて高くなっている。しかし数は少ないことに留意が必要だが、「契約・嘱託のみ」や「派遣のみ」の場合には様相が異なっており、フリーターとは認識されにくい傾向がある。派遣については地域差があり、労働政策研究報告書（2008）においても考察したように、北海道は製造業が少なく派遣といえば事務職的な仕事内容が多いため、北海道では派遣で働いていてもフリーターと認識されにくいものと思われる。参考までに示した東京の女性においても、派遣のみ経験者においては同様の傾向を示していることから、事務職としての派遣

の場合にはフリーターだと認識されにくいことが裏付けられよう。「派遣のみ」、あるいは「契約嘱託のみ」経験している場合には、一定程度の専門性を生かすタイプの仕事が多く含まれているために、フリーターとは認識されにくいことが推測される。

また 2011 年では、いわゆる非典型雇用を経験していないにもかかわらず、自分をフリーター経験者と認識する若者が一定数存在している。これは調査票のインストラクションをよりわかりやすくするため、2011 年より「ここからは全員の方にお尋ねします」という趣旨の文章を質問文の前にあらたに追加した影響もあると思われるが、正社員とフリーターの境界のゆらぎを示したものと読めるかもしれない。

以上から、フリーターのイメージは、主にパート・アルバイトとして働いている場合に想起されると言える。そこで以下では、就業形態としては主としてパート・アルバイトをイメージしながら、フリーターについての分析を進めていくことにする。

第 3 節 フリーター経験率—誰がフリーターになっているのか

本節ではフリーター経験率の検討から、誰がフリーターになりやすいかについて分析する。

フリーター経験率は過去のキャリアが含まれるため、本データは調査時点の最新の動向を示しているというよりも、調査当時に 20 代だった若者のフリーター経験率を示していることに留意して検討したい。

1. フリーター経験率の推移

図表 2-3 はフリーター経験率の推移について示している。20 代後半男性を除くいずれの年齢層でも、2006 年にもっとも高くなり、2011 年には下降していることがわかる。したがって、2006 年に 20 代であった若者層においてもっともフリーターが経験されていることが観察される。

図表 2-3 フリーター経験率の推移

		2001	2006	2011	N(2011)
男性	20-24歳	41	51.9	44.8	420
	25-29歳	31	41.3	43.3	605
女性	20-24歳	35	50.4	45.8	526
	25-29歳	36	50.0	40.4	500
合計	20-24歳	39	51.2	45.3	946
	25-29歳	34	45.7	42.0	1105

※2001 年はウエイトバックをしているため、四捨五入している

これは第 1 章で分析されたように、2006 年当時に 20 代の若者だった層で学卒時点での景気状況が悪く、学卒時点で正社員になれなかった層においてフリーター率が高くなったと解釈できる。

2. 年齢・学歴別フリーター経験率の推移

続いて、2011年調査に限って年齢別・学歴別フリーター経験率を示した（図表2-4）。

全体として、学歴が高いとフリーターになりにくいという傾向はあるのだが、特に高卒女性のフリーター経験率が高い。さらに学校段階を問わず、中退の場合にはフリーター経験率がほぼ8割となっている。中退してすぐに正社員の仕事を見つけるのは難しいので、いったんアルバイトをすることが多いからであろう。

図表2-4 年齢・学歴別フリーター経験率

	合計	男性	女性	N
高卒20-24歳	61.7	54.1	71.0	222
高卒25-29歳	67.5	66.3	69.4	157
短大専卒20-24歳	42.4	42.7	42.2	288
短大専卒25-29歳	47.5	48.1	47.1	301
大卒22-24歳	22.2	21.8	22.5	315
大卒25-29歳	23.8	24.7	22.6	529
高校中退等20-24歳	81.8	76.2	87.0	44
高校中退等25-29歳	76.1	68.6	100.0	46
高等教育中退20-24歳	87.3	85.3	89.7	63
高等教育中退25-29歳	82.1	85.0	75.0	56
その他不明	56.7	55.6	58.3	30

さらに、離学年別にみると（図表2-5）、2004年までに離学した場合で高く、2005年以降に学校を離れた場合には低下していることがわかる。2010年以降のリーマンショック後の景気低迷はまだ読み取れないが、フリーター理由には違いが見られ、すでに影響が出始めているといえよう（第3節参照）。

図表2-5 離学年とフリーター経験率

	合計	男性	女性	N
1997～2004年	57.4	58.1	56.7	477
2005～2009年	37.5	37.6	37.4	1177
2010～2011年	37.1	35.9	38.1	264
無回答・不明	60.2	58.5	61.8	133

専攻別にみると（図表2-6）、高卒では普通科等よりも、専門高校出身者において低くなっている。高等教育の場合には、専門短大高専および、大学では芸術他で高くなっている。

図表 2-6 専攻別フリーター経験率

	男女計	男性	女性	N
高校 普通・総合	72.3	68.2	77.3	267
高校 商業・ビジネス系	50.9	45.5	54.5	55
高校 工業・機械・電気系	51.9	51.1	60.0	52
高校 その他	72.7	60.0	92.3	33
専門短大高専 人文・ビジネス系	42.6	56.0	39.6	136
専門短大高専 資格系	40.4	41.1	40.0	208
専門短大高専 理・工業系	37.7	39.0	30.0	69
専門短大高専 芸術他	67.9	65.6	69.3	165
大学 文系	27.7	30.4	24.8	570
大学 理系（工農薬など）	27.2	28.5	23.3	180
大学 芸術他（体育、学際的な情報・環境系含む）	32.4	33.3	31.8	68
大学 保健教育福祉	27.3	35.7	24.4	55
大学 家政生活科学	20.7	0.0	21.4	29
中卒	57.1	50.0	70.0	28

出身地域（卒業した中学校の所在地）別にみると（図表 2-7）、男性は南関東で高いが、女性はほとんど違いがない。男女計でみると、やや南関東で高くなっている。東京のフリーターはバンドなど地方から一旗あげようと上京してくるタイプだというイメージもあったが、今回の調査対象にはあてはまらないようである。今回新たに追加した項目であるため過去の状況についてはわからないものの、地元志向が高まる中で、上京フリーターは過去のものとなりつつあるのかもしれない。

図表 2-7 出身地域とフリーター経験率

男性	南関東（東京・神奈川・埼玉・千葉）	45.5	706
	南関東以外の地域	38.4	245
	無回答	47.3	74
女性	南関東（東京・神奈川・埼玉・千葉）	42.6	782
	南関東以外の地域	43.1	188
	無回答	51.8	56
合計	南関東（東京・神奈川・埼玉・千葉）	44.0	1488
	南関東以外の地域	40.4	433
	無回答	49.2	130

3. 家庭的背景とフリーター経験率

家庭的背景とフリーター経験率について、経済的豊かさや保護者の学歴から検討してみよう（図表 2-8）。

「家庭の経済的豊かさ」については（図表 2-8 左）、全体として豊かでない方のフリーター経験率が高いが、特に女性でその差が大きくなっていることが分かる。

両親の学歴別にはどうだろうか（図表2-8右）。

図表2-8 家庭的背景とフリーター経験

経済的豊かさ			父学歴 母学歴			
男性	豊かである	39.1	男性	中卒・高卒	45.6	45.6
	豊かでない	47.4		専門各種・短大	43.9	41.4
	わからない	47.2		大学・大学院	38.6	39.6
	男性計	43.6		該当なし	50.0	25.0
女性	豊かである	37.0	女性	わからない	56.5	48.4
	豊かでない	51.3		男性計	43.5	43.5
	わからない	43.8		中卒・高卒	52.4	48.9
	女性計	43.2		専門各種・短大	39.8	41.4
合計	豊かである	38.0	合計	大学・大学院	34.2	30.9
	豊かでない	49.2		該当なし	0.0	100.0
	わからない	45.5		わからない	65.6	63.6
	合計	43.4		女性計	43.1	43.0
				中卒・高卒	48.9	47.2
				専門各種・短大	42.0	41.4
				大学・大学院	36.2	34.7
				該当なし	40.0	50.0
				わからない	60.3	53.2
				合計	43.3	43.2

父親の学歴別には、男性の場合には、専門各種・短大と大学・大学院の間にはっきりした違いが見られるが、女性の場合には、中卒・高卒とそれ以上の学歴で大きな差異が見出される。母学歴は、男性は中卒・高卒とそれ以上の学歴によって数値が大きく異なるが、女性は学歴段階ごとに大きな違いがある。保護者の学歴によってフリーター経験率には差が見られるが、特に女性において差異が顕著に現れていると言えよう。

それでは家庭的な背景（経済的豊かさ）と本人学歴のうち、どちらがフリーター経験を大きく左右しているのだろうか。

図表2-9は、経済的豊かさ別に、学歴の効果を示した。男女とも、同じ経済的豊かさの中でも、本人学歴による差異が明確である。同じ豊かである層でも、男性高卒だと62.7%だが、大学・大学院だと21.0%に減少し、女性においても同じ傾向である。豊かでない層でも、男性高卒は58.8%、大学・大学院は24.7%になっており（女性も同様）、きわめて本人学歴による差異が大きい。特に男性の場合には経済的豊かさの影響は弱く、高卒では逆転している。

女性の場合には、高卒学歴、大学・大学院学歴の場合には、経済的に豊かでない層でフリーター経験率が高くなっており、男性よりも経済的豊かさの影響が強いように見えるが、専門・短大・高専卒や中卒・高校中退では逆転しており、それほど強い関連ではない。

図表 2-9 経済的豊かさ・本人学歴とフリーター経験率

		豊かである		豊かでない	
			N		N
男性	高卒	62.7	75	58.8	114
	専門・短大・高専卒	50.0	96	46.2	104
	大学・大学院卒	21.0	243	24.7	150
	中卒・高校中退	61.5	13	73.5	34
	高等教育中退	82.8	29	86.1	36
	その他不明	42.9	7	40.0	5
	合計	39.1	463	47.4	443
女性	高卒	66.7	51	71.6	88
	専門・短大・高専卒	48.5	171	42.5	134
	大学・大学院卒	18.9	265	30.7	127
	中卒・高校中退	100.0	8	94.7	19
	高等教育中退	73.7	19	95.8	24
	その他不明	60.0	5	100.0	2
	合計	37.0	519	51.3	394
合計	高卒	64.3	126	64.4	202
	専門・短大・高専卒	49.1	267	44.1	238
	大学・大学院卒	19.9	508	27.4	277
	中卒・高校中退	76.2	21	81.1	53
	高等教育中退	79.2	48	90.0	60
	その他不明	50.0	12	57.1	7
	合計	38.0	982	49.2	837

すなわち、フリーター経験率は女性の場合には経済的豊かさとの弱い関連が見られるものの、全体として本人学歴がフリーター率を左右していると言えよう。

以上から、フリーター経験には本人学歴、離学のタイミングと学校での専攻が大きく影響しており、女性の場合には経済的豊かさもやや関連していると結論できる。

第4節 フリーターになった理由

本節では、フリーターになった理由に着目し、主に経年的な変化を観察する。

1. フリーター理由

図表 2-10 は、複数回答で答えてもらったフリーター理由であり、図表 2-11 はそのうちもっとも重要な項目について答えてもらっているが、2つの表とも傾向は共通しているので、あわせて傾向を指摘する。

「仕事以外にしたいことがあるから」は、2006年でもっとも高くなったが、2011年でもあまり低下していない。また「自分に合う仕事をみつけるため」、「自由な働き方をしたかった」、という項目は3時点を通じて減少している。他方で「学費稼ぎなど、生活のために一時的に働く必要があった」も、2006年で低下したが、再び上昇している。「正社員として採用されなかった」は3時点を通じて上昇した。

図表 2-10 フリーター理由（多重回答）

		と仕事以外にしたいこと	期間として	つきたい仕事のため	機会を待ったため	つきたい仕事のため	ききたい・パートがで	つきたい仕事が見	自分には合う仕事を見	れなかつたから採用さ	く必要があつたから働	の学費稼ぎなど、生活	なんとなく	から社員はいやだった	家庭の事情で	かつたから	自由な働き方をした	その他
男性	2001	14.1	15.0	10.7	2.9	41.8	8.9	29.4	23.2	7.1	4.9	26.5	5.1					
	2006	24.2	27.5			36.3	11.8	18.6	28.9	7.2	5	18.8	4.4					
	2011	22.4	29.8			28.2	20.4	26.4	24.6	4.9	4.0	15.9	4.0					
女性	2001	11.0	16.4	12.3	8.1	34.9	17.0	22.2	21.5	17.1	6.3	33.0	3.8					
	2006	20.2	21.6			35.1	12.0	16.6	24.6	12.4	12.8	27.5	5.4					
	2011	16.6	29.3			24.1	19.5	22.3	21.1	11.1	11.1	25.5	3.0					

図表 2-11 フリーター最大理由

		と仕事以外にしたいこと	期間として	つきたい仕事のため	機会を待ったため	つきたい仕事のため	ききたい・パートがで	つきたい仕事を見	自分には合う仕事を見	れなかつたから採用さ	く必要があつたから働	の学費稼ぎなど、生活	なんとなく	から社員はいやだった	家庭の事情で	かつたから	自由な働き方をした	その他
男女計	2001	6.6	7.3	6.8	1.7	21.9	6.4	13.8	8.8	3.0	2.5	14.9	3.4					
	2006	13.5				15.9	7.1	9.4	12.6	2.0	4.8	9.9	5.1					
	2011	12.8				17.2	13.5	14.8	10.4	3.2	3.6	9.2	3.5					
男性	2001	8.3	7.0	5.8	0.1	24.1	5.0	15.5	9.7	1.1	2.6	12.6	5.2					
	2006	15.4				18.2	20.4	10.4	14.4	1.6	1.4	7.6	3.6					
	2011	16.0				17.6	15.8	10.4	12.8	1.9	1.6	5.3	3.5					
女性	2001	4.9	7.7	7.8	3.2	19.6	7.8	12.1	7.9	4.9	2.5	17.3	1.7					
	2006	11.6				13.6	17.8	8.4	10.8	2.4	8.2	12.2	6.6					
	2011	9.6				16.8	11.2	14.7	8.0	4.5	5.6	13.1	3.5					

注：無回答省略 2006 年調査より「つきたい仕事のため」という一連の項目を、「つきたい仕事への準備や勉強、修行期間のため」に統合した

以上の項目からは、景気の回復が見えていた 2006 年のフリーターには前向きなイメージがあったが、2011 年にはその肯定的イメージに影が差していることがうかがえる。また「自分に合う仕事を見つけられる」「自由」な働き方というフリーターのイメージは、2011 年現在の若者には共有されにくくなったことがわかる。フリーターに対するイメージについては、第 3 章で検討される意識項目においても同様の傾向が見出されており、フリーター経験に付与されてきた「自由」「適職探索」というイメージは過去のものになりつつある。

2. フリーター類型

続いて以上の項目をもとに、フリーター 3 類型について検討した。

フリーター 3 類型は、「フリーターになった契機」「フリーターになった当初の意識」に着目し、類型化を行なうことを通じて、フリーターの実態把握を試みるために作成したもので

ある。ヒアリング調査から導き出されたフリーター3類型は、次のように整理される（数値は四捨五入している）。

(a) 夢追及型 仕事以外にしたいことがあるため、当面の生活の糧を得るためにフリーターになったタイプ。

第1回調査 14%→第2回調査 25%→第3回調査 23%

(b) モラトリアム型 やりたいことを探したい、正社員になりたくないなどの理由からフリーターになったタイプ。

第1回調査 47%→第2回調査 44%→第3回調査 37%。

(c) やむを得ず型 正社員になれない、または家庭の事情などで、やむなくフリーターになったタイプ。

第1回調査 39%→第2回調査 31%→第3回調査 40%。

類型の作成については、2001年調査と同様の手順で行なった。無回答に分類される者がいるため、類型に分類されたのは、男性で373名、女性で374名となった。2001年、2006年、2011年と同様のシNTAXスを用いて類型を作成した。

2001年から2006年にかけて夢追求型が増加し、やむをえず型が減少したが、2011年にはモラトリアム型が減少し、やむをえず型が増加した。

図表2-12で現在の年齢別にみると、若い男性層で「やむをえず型」がやや高くなっているのが特徴であるが、より詳しく離学年別にみたのが図表2-13である。

図表2-12 年齢とフリーター3類型

		夢追求型	モラトリアム型	やむをえず型	合計	N
男性	20-24歳	25.5	31.2	43.3	100.0	157
	25-29歳	26.4	35.2	38.4	100.0	216
女性	20-24歳	20.8	38.7	40.6	100.0	212
	25-29歳	17.3	41.4	41.4	100.0	162
合計	20-24歳	22.8	35.5	41.7	100.0	369
	25-29歳	22.5	37.8	39.7	100.0	378

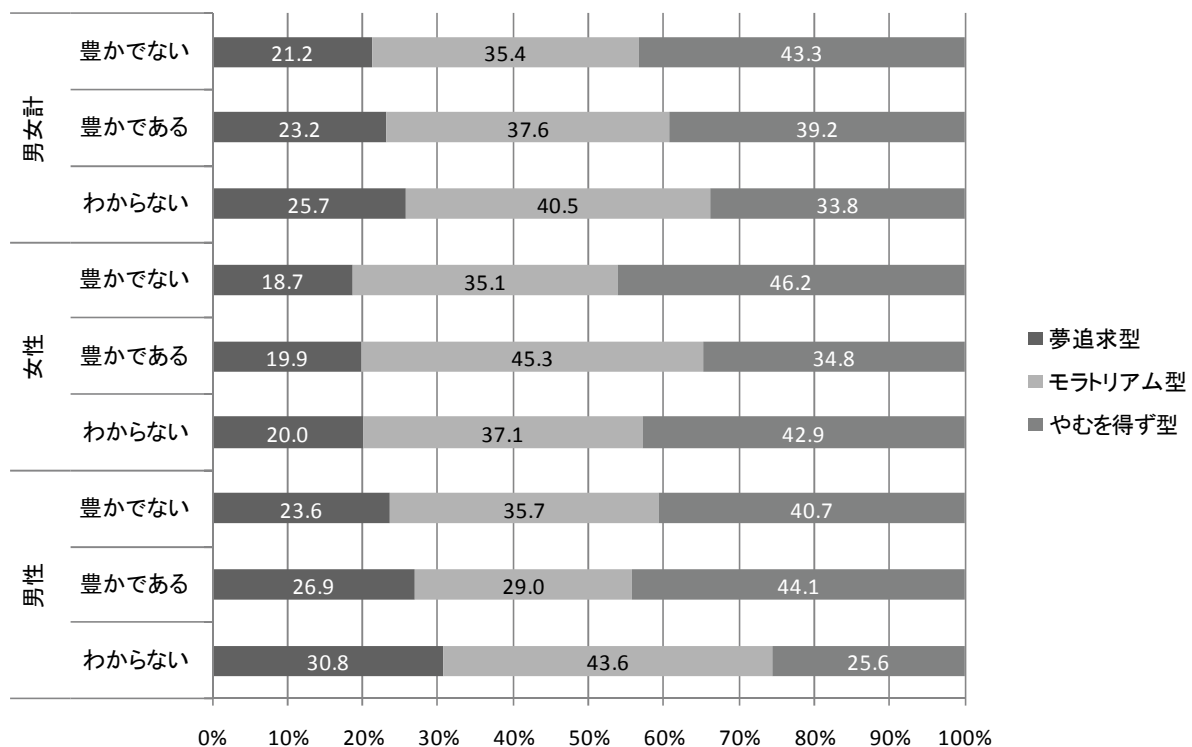
2009年以降の離学者の対象者数が少ないので留意しなくてはならないものの、2009年から急に「モラトリアム型」が減少して「やむをえず型」が増加している。

図表 2-13 離学年別フリーター3類型

		夢追求型	モラトリアム型	やむを得ず型	N
男性	1981-2004年	26.7	37.4	35.9	131
	2005-2008年	26.0	33.5	40.5	173
	2009-2011年	18.9	18.9	62.2	37
女性	1981-2004年	17.0	44.3	38.7	106
	2005-2008年	21.1	38.9	40.0	185
	2009-2011年	23.4	21.3	55.3	47
合計	1981-2004年	22.4	40.5	37.1	237
	2005-2008年	23.5	36.3	40.2	358
	2009-2011年	21.4	20.2	58.3	84

さらに経済的豊かさ別にみると（図表 2-14）、特に女性において経済的豊かさの影響が大きい。すなわち、豊かでない層で「やむを得ず型」が半数近くを占める。女性フリーターにおいて階層的な影響が強くあらわれやすいと言えよう。

図表 2-14 経済的豊かさでフリーター3類型 (N=733)



以上の検討をまとめよう。

2011年には、フリーターという働き方は「自分に合う仕事を見つけられる」「自由」な働き方とは認識されにくくなった。

また、フリーター3類型の分析からは、モラトリアム型の割合は経年的に低下、やむを得

ず型は2006年にいったん減ったが、再び上昇していた。2001年に比べて2006年は夢追求型が増加したが、2011年も一定の割合を占めた。

フリーター3類型の分布には経済的な豊かさとの関連が大きく、特に女性は豊かでないとやむをえず型が半数を占めていた。

第5節 フリーターからの離脱プロセス

本節では、誰がフリーターから離脱しようとするのか、また誰が成功しているのかを探っていく。なお一部の分析において対象者の数を確保するため、学歴別の分析の際には、高卒まで（高卒・中卒・高校中退）、と高卒超（専門・短大・高専・大学・大学院卒・高等教育中退）に分けた分析も行う。なお、フリーター経験者は783名、正社員になろうとしたことがあるのは520名である。

1. フリーター離脱志向の推移

図表2-15から、経年的な変化をみると、正社員になろうとする割合は2006年に低下したのち、2011年にふたたび2001年の水準にまで戻った。しかし正社員になれた割合（離脱成功率）は、2001年の水準にまで戻っておらず、2006年前後からの景気回復期に正社員に離脱した若者が2011年の第3回調査に含まれていることを考えると、決して高い数字とは言えない。ただし、景気回復期のフリーターと就職困難期のフリーターを比較した場合、景気回復期には正社員のハードルが下がっているにもかかわらずフリーターになったと考えるのであれば、景気回復期のフリーターの方が正社員への離脱可能性は低いと考えられる。したがって、景気回復期を迎えて正社員になれた就職困難期フリーターと、もともと景気の良い時でも正社員として採用されにくい景気回復期フリーターが混在していることが、2011年の第3回調査における正社員への離脱可能性を低めているという解釈もできるかもしれない。

しかしいずれにしても、やはり日本社会においてはいったんフリーターになると、再び正社員になることは不可能ではないが、それほど簡単ではないと言える。

図表2-15 正社員離脱志向割合の推移

正社員になろうとしたことがある			
	2001	2006	2011
男性	73%	50.5%	73.9%
女性	53%	36.3%	59.3%

うち、正社員になれた			
	2001	2006	2011
男性	75%	58.7%	60.5%
女性	47%	53.6%	48.1%

図表 2-16 正社員になろうとした割合・学歴別

		正社員になろうとした割合	N
男性	高卒まで	76.0	146
	高卒超	72.8	224
	その他不明	70.0	10
	合計	73.9	380
女性	高卒まで	52.2	136
	高卒超	63.1	260
	その他不明	57.1	7
	合計	59.3	403
合計	高卒まで	64.5	282
	高卒超	67.6	484
	その他不明	64.7	17
	合計	66.4	783

学歴別にみると、男性は高卒超学歴で高いが、女性は高卒以下の方が高くなっており、男女計でみると、学歴ではほとんど差がない。そこで以下では年齢・学歴別に示した。

図表 2-17 正社員になろうとした割合・年齢学歴別

	男性	N		女性	N	合計	N	
高卒20-24歳	66.0	53	高卒20-24歳	60.3	68	高卒20-24歳	62.8	121
高卒25-29歳	78.9	57	高卒25-29歳	50.0	40	高卒25-29歳	67.0	97
短大専卒20-24歳	68.6	35	短大専卒20-24歳	57.3	75	短大専卒20-24歳	60.9	110
短大専卒25-29歳	84.0	50	短大専卒25-29歳	65.8	73	短大専卒25-29歳	73.2	123
大卒22-24歳	42.9	21	大卒22-24歳	69.7	33	大卒22-24歳	59.3	54
大卒25-29歳	75.9	58	大卒25-29歳	64.4	45	大卒25-29歳	70.9	103
高校中退等20-24歳	78.6	14	高校中退等20-24歳	42.1	19	高校中退等20-24歳	57.6	33
高校中退等25-29歳	90.9	22	高校中退等25-29歳	22.2	9	高校中退等25-29歳	71.0	31
高等教育中退20-24歳	66.7	27	高等教育中退20-24歳	50.0	22	高等教育中退20-24歳	59.2	49
高等教育中退25-29歳	78.8	33	高等教育中退25-29歳	83.3	12	高等教育中退25-29歳	80.0	45
その他不明	70.0	10	その他不明	57.1	7	その他不明	64.7	17
合計	73.9	380	合計	59.3	403	合計	66.4	783

全体として（図表 2-17）、同一学歴の中では年齢が高い層で正社員になろうとした割合は高い。またおおむね、同年齢層では高卒以下学歴と高卒を超える学歴では正社員になろうとした割合に差が見られ、高卒以下学歴で低い傾向がある。

続いて、フリーター期間について検討する。これまでフリーター期間が長引くと、フリーター離脱志向やフリーター成功率が低下することが観察されてきた（労働政策研究・研修機構 2006）。

しかし図表 2-18 によれば、2011 年東京調査においてはそのような傾向は男性では弱く、フリーター期間が 3 年を超えるとやや低下するにとどまった。女性では 6 カ月以内で離脱志向が高く、そのあとはゆるやかに低下する傾向が観察された。

図表 2-18 フリーター期間と離脱志向（無回答省略）

	男性	N	女性	N	合計	N
6か月以内	75.5	53	74.2	62	74.8	115
7か月から1年	73.4	64	62.0	79	67.1	143
1-2年	71.4	70	57.5	73	64.3	143
2-3年	77.3	75	57.8	64	68.3	139
3年以上	71.2	111	50.8	118	60.7	229
無回答	100.0	7	71.4	7	85.7	14
合計	73.9	380	59.3	403	66.4	783

それでは家庭的背景との関連はどのようになっているのか（図表省略）。結論を先取りすると、フリーター離脱に対してはあまり家庭的背景の影響は見出されないが、親学歴が低いとフリーター離脱志向がやや高まることが観察された¹。ただしその傾向はいまひとつ明確ではなく、理由も判然としない。

むしろ家庭的背景よりもフリーター理由の方が、正社員になろうとした割合と深く関連しているように思われる。

図表 2-19 正社員になろうとした割合とフリーター類型

		正社員になろうとした割合	N
男性	夢追求型	67.1	85
	モラトリアム型	76.7	103
	やむを得ず型	80.8	130
女性	夢追求型	51.5	68
	モラトリアム型	44.0	134
	やむを得ず型	74.3	140
合計	夢追求型	60.1	153
	モラトリアム型	58.2	237
	やむを得ず型	77.4	270

図表 2-19 によれば、正社員になろうとした割合は、男女ともやむをえず型で 77.4% と最も高いが、男性は夢追求型で 67.1% と最も低く、女性はモラトリアム型で 44.0% と低い。女性がモラトリアム型で低いのは、将来を結婚で展望している者があえてハードルの高い正社員になろうとしないことの反映だと推測される。

¹ まず経済的豊かさに関して言えば、豊かである 66.6%：豊かでない 66.9% とほぼ違いはなかった。男女別にみても、男性豊かである 74.5%：豊かでない 72.6%、女性豊かである 59.5%：61.6% であり、経済的豊かさとフリーター離脱志向には関連が見えなかった。

親学歴については、父学歴が中卒・高卒 67.4%：専門各種・短大 70.7%：大学・大学院 62.2% とリニアな関係ではないものの、父が低学歴の方がフリーター離脱志向は高かった。母学歴についても、中卒・高卒 70.8%：専門各種・短大 65.9%：大学・大学院 57.5% と、学歴が低い方がフリーター離脱志向が高い傾向が見られた。親学歴については、2001 年にはやはり学歴が低いとフリーター離脱志向が高くなる傾向が見られたが、2006 年は明確ではなかったため、再び親学歴が低いとフリーター離脱志向が高いという傾向に戻ったといえる。

次に、フリーターから正社員への離脱成功率をみていく。

図表 2-20 は、年齢別に検討した。年齢が高い方が正社員への離脱割合が高くなっている。ただしこの年齢は現在の年齢でありフリーターを離脱した時の年齢ではないが、年齢を重ねると正社員に離脱できる割合が高まると解釈できるかもしれない。

図表 2-20 年齢と正社員になれた割合

		正社員になった	N
男性	20-24歳	53.0	100
	25-29歳	64.6	181
	合計	60.5	281
女性	20-24歳	36.2	130
	25-29歳	62.4	109
	合計	48.1	239
合計	20-24歳	43.5	230
	25-29歳	63.8	290
	合計	54.8	520

図表 2-21 は学歴別に正社員への成功率を示しているが、男性では高卒までの学歴、女性は高卒を超える学歴の成功率が高くなっている。学歴が高いからあるいは低いから正社員になりやすいという傾向はみられず、学歴による影響は明確ではない。

図表 2-21 学歴と正社員になれた割合

		正社員になった	N
男性	高卒まで	66.7	111
	高卒超	57.1	163
	その他不明	42.9	7
	合計	60.5	281
女性	高卒まで	43.7	71
	高卒超	50.0	164
	その他不明	50.0	4
	合計	48.1	239
合計	高卒まで	57.7	182
	高卒超	53.5	327
	その他不明	45.5	11
	合計	54.8	520

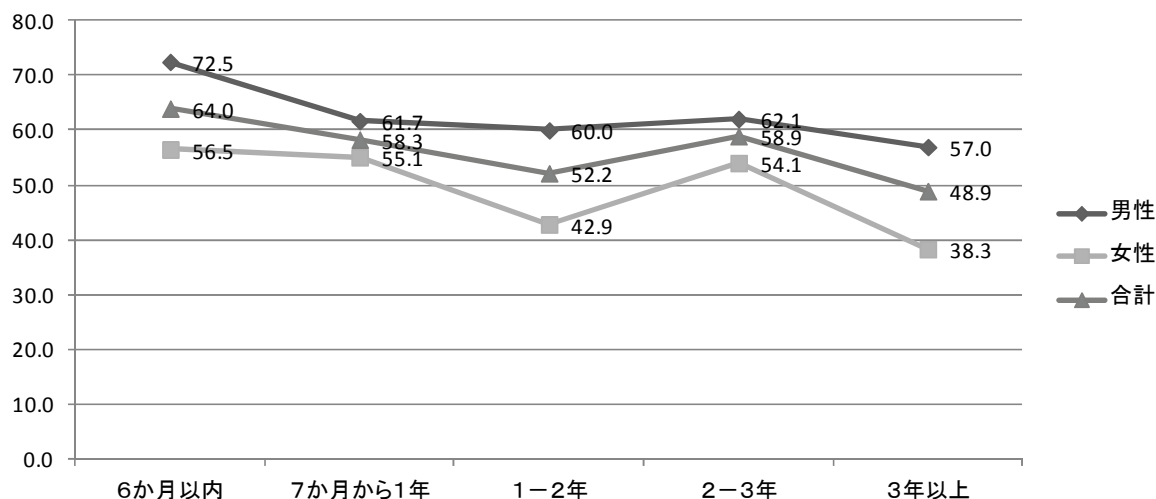
フリーター 3 類型別にみると (図表 2-22)、男性ではモラトリアム型が、女性ではやむをえず型がもっとも離脱成功率が高くなっている。男女の合計でみると、モラトリアム型がもっとも高い。フリーター離脱志向については男女とも「やむをえず型」がもっとも高かったが、離脱成功率は異なる傾向を示しているのが興味深い。

図表 2-22 フリーター3類型と正社員になれた割合

		正社員に なった	正社員には なっていない	無回答	N
男性	夢追求型	61.4	35.1	3.5	57
	モラトリアム型	67.1	32.9	0.0	79
	やむを得ず型	56.2	42.9	1.0	105
	合計	61.0	37.8	1.2	241
女性	夢追求型	37.1	62.9	0.0	35
	モラトリアム型	45.8	52.5	1.7	59
	やむを得ず型	47.1	51.9	1.0	104
	合計	44.9	54.0	1.0	198
合計	夢追求型	52.2	45.7	2.2	92
	モラトリアム型	58.0	41.3	0.7	138
	やむを得ず型	51.7	47.4	1.0	209
	合計	53.8	45.1	1.1	439

フリーター期間別にみると(図表2-23)、男性の場合は明確であり、6か月以内で高く、3年以上になると低下する。女性は男性に比べるとあまり違いはないが、3年以上の場合には低くなっている。

図表 2-23 正社員になれた割合・フリーター期間別



以上から、フリーターからの離脱志向率については、学歴やフリーター期間、家庭的背景の影響はあまり明確ではなく、性別やフリーター類型の影響が大きい。またフリーターからの離脱成功率についても学歴の影響は小さく、性別やフリーター期間による差異が大きいといえる。女性においてフリーター期間が長くなると離脱志向が低下し、また成功率が下降する要因は、結婚・出産という就業継続にマイナスに働くイベントが、採用する企業側だけでなく、(周囲を含めた)女性本人にも強く意識されるために、企業側は採用をためらい、女性

側も躊躇することが強く働いていると推測される。

2. 正社員になろうとしたきっかけ

正社員になろうとしたきっかけについて尋ねた。年齢別に示したのが図表2-24である。

安定した仕事につきたいという思いは男女とも高い。ただしできれば安定したほうがいいというのは、直接の動機としてはあまり強くはないだろう。男性で目立つのは、年齢や結婚であり、特に20代後半になると結婚をきっかけとする割合が上昇している。

図表2-24 正社員になろうとしたきっかけ（年齢別）

		見や つり かた つい たこ かど らが	たつ かき らた いた と仕 思事 つに	安 定 した ら切 り を つ	け 夢 たに か見 ら切 り を つ	とい 思 つ たう かが らい い着	年 齢 的 に 落 ち 着	か け ら た キ ル と を 思 身 つ に たつ	う 結 婚 思 つ た、 か し ら よ	か 就 職 し る は の じ 友 め 達 た が	か ト ク 社 員 の 思 ほ う が	そ の 他	N
男性	20-24歳	20.9	62.6	6.6	18.7	22.0	5.5	8.8	26.4	5.5	91		
	25-29歳	16.7	73.0	6.9	36.8	20.7	16.1	4.0	33.3	9.2	174		
女性	20-24歳	18.3	67.5	3.2	27.0	22.2	4.8	12.7	42.1	7.9	126		
	25-29歳	19.8	72.6	1.9	18.9	16.0	1.9	2.8	38.7	14.2	106		

学歴別に示したのが図表2-25である。

高卒以下学歴の場合には、男女とも正社員のほうがトクであるという回答が多く、女性の場合には安定性やスキルを求めている。他方で高卒超学歴の場合には、「やりたいことが見つかったから」が男女とも高く、男性はスキルを身につけたいという希望が強い。学歴によって、フリーターを離脱する動機が異なることがうかがえる。

図表2-25 正社員になろうとしたきっかけ（学歴別）

		見や つり かた つい たこ かど らが	たつ かき らた いた と仕 思事 つに	安 定 した ら切 り を つ	け 夢 たに か見 ら切 り を つ	とい 思 つ たう かが らい い着	年 齢 的 に 落 ち 着	か け ら た キ ル と を 思 身 つ に たつ	う 結 婚 思 つ た、 か し ら よ	か 就 職 し る は の じ 友 め 達 た が	か ト ク 社 員 の 思 ほ う が	そ の 他	N
男性	高卒以下	16.0	69.8	6.8	27.2	15.4	11.1	3.7	31.5	9.9	162		
	高卒超	26.3	65.8	3.5	29.8	28.1	10.5	7.9	26.3	8.8	114		
	その他不明	15.6	71.1	6.7	26.7	24.4	11.1	4.4	31.1	0.0	45		
女性	高卒以下	14.6	72.2	1.3	19.9	21.2	4.0	7.9	49.0	11.9	151		
	高卒超	21.9	65.6	2.3	23.4	15.6	3.1	4.7	35.9	10.2	128		
	その他不明	17.4	65.2	4.3	4.3	17.4	0.0	13.0	21.7	21.7	23		

次に、フリーター生活の中で感じたことと、正社員への離脱志向を取り上げる（図表2-26）。

図表 2-26 正社員になろうとした経験とフリーター生活の中で感じたこと

	やりがたい仕事に直接役立つ能力が身についた	いかに減らされたり、来なくて困った	アルバイト先から急に日数を減らさなくてはならなかった	アルバイト先がなかなか見つからなかった	アルバイト先がなかった	人脈やチャンスを得た	やりがたい仕事に就くための	人間関係に関する能力(人づいて話せるなど)が身についた	たやりがたい仕事はつきりし	将来に不安を感じた	がいろいろな経験をすること	社会的に認められていないと思つた	生活が不安定だった	自由な時間が持てた	か正社員に比べて収入が少な	ないこの中であてはまるものは	N
正社員になろうとした経験がある	18.9	11.1	14.8	12.8	41.6	18.3	47.7	50.0	21.4	29.8	39.9	45.5	3.5	514			
正社員になろうとした経験はない	22.9	12.0	18.1	13.7	49.8	19.3	35.3	53.4	19.7	30.9	50.2	34.5	2.4	249			

注：無回答省略

正社員になろうとする者は、フリーターとして働き続けことや収入の少なさに不安を感じている。他方で正社員になろうとした経験がない者は、フリーター経験がコミュニケーション能力を身につける機会となり、また自由な時間を持てるとして評価しているため、正社員になろうとしていないことがわかる。当然のことであるが、正社員離脱志向は、フリーターという状態に問題を感じた場合に起こるのであって、フリーターという状態を肯定的に受け止めているうちは、離脱志向には向かわないことがうかがえる。

3. 離脱の際の相談相手や経路

続いて、正社員への離脱の際の相談相手と経路について検討しよう。

図表 2-27 年齢と正社員への離脱の際の相談相手（フリーター経験者のみ）

	親・保護者	兄弟姉妹	の職場上司やバイト先	の職場友人やバイト先	た学校友人や知り合った	員学校の先生・職員	る趣味の人	恋人・配偶者	な支専機関	のカウンセラー等の	その他	誰もいない	N
男性 20-24歳	54.6	14.4	15.5	8.2	16.5	7.2	12.4	8.2	1.0	0.0	30.9	97	
25-29歳	45.5	10.7	16.3	20.2	14.6	3.9	12.4	15.7	2.2	3.4	28.1	178	
女性 20-24歳	61.9	11.1	16.7	15.1	23.0	9.5	14.3	24.6	5.6	0.0	15.1	126	
25-29歳	60.0	13.3	19.0	17.1	16.2	8.6	10.5	20.0	4.8	2.9	21.0	105	

図表 2-27によれば、男性は年齢が上がると、親・保護者や兄弟の割合が低下し、職場の同僚や恋人・配偶者の割合が増加する。女性は年齢が上がると、学校で知り合った友人の割合が低下し、相談相手が誰もいないという割合が高まるのが特徴である。

図表 2-28 経済的豊かさと正社員への離脱の相談相手（フリーター経験者のみ）

		親・保護者	兄弟姉妹	の職場やバイト先	の職場やバイト先	た学校や友人で知り合った友人	員学校の先生・職員	る趣味をともにする友人	恋人・配偶者	な支援機関	のカウンセラー等の	その他	誰もいない	N
男性	豊かである	50.9	12.7	13.6	12.7	14.5	5.5	10.0	15.5	1.8	2.7	29.1	110	
	豊かでない	48.4	12.7	19.0	19.0	15.9	4.8	15.1	11.9	1.6	2.4	26.2	126	
女性	豊かである	65.7	15.7	20.6	11.8	18.6	9.8	12.7	24.5	2.0	2.9	17.6	102	
	豊かでない	57.4	9.3	15.7	22.2	23.1	9.3	13.0	23.1	8.3	0.0	15.7	108	

経済的豊かさとの関連をみると（図表 2-28）、女性において、豊かでない層は親・保護者や兄弟姉妹の割合が低く、職場などの同僚・友人や学校で知り合った友人の割合が高くなっている。不安定な家族には頼らず、友人関係を大事にしていることがうかがえる。

男性は女性ほどはっきりした傾向ではないが、豊かでない層では職場やバイト先の上司・友人や同僚、趣味をともにする友人の割合が高く、豊かな層で恋人・配偶者の割合が高くなっている。

続いて、正社員になろうとした時にしたことを自由記述で尋ねた。回答があったのは 313 人であった。複数の内容が書かれていた場合には、より具体的な活動の項目に分類した。

就職活動をしたという割合が最も多く、次に HW に行くという回答が上位を占めた。ただし情報収集や資格、スキルアップに努めるなど、具体的な求職活動に至っていない者も含まれた。他方で、正社員登用の利用や、上司（会社）に頼むなどの回答もあった。

- ① HW に行った、登録した、仕事を紹介してもらった 73 人
求人誌、求職サイト、ハローワークの若年対象への応募など
- ② 正社員登用を利用しようとした、上司（会社）に話をした 33 人
正社員雇用試験のチャレンジ
正社員登用制度等がある求人を探したなど
- ③ 知人の紹介、学校の先生や親などとの相談 25 人
- ④ 就職活動をした、（公務員・就職）試験をうけた 108 人
- ⑤ 情報収集（インターネットや求人広告等） 39 人
- ⑥ 資格、スキルアップ、（試験）勉強 35 人

次に、正社員の離脱成功率と相談相手の関連をみよう（図表 2-29）。

図表 2-29 正社員離脱成功と相談相手

		親・保護者	兄弟姉妹	職場やバイト先	職場やバイト先	学校で知り合った友人	学校の先生・職員・相談員	学校の先生・職員・相談員	趣味をともにする友人	恋人・配偶者	ななカその他	専門家のサポート	誰もない	N
男性	正社員になった	51.2	11.3	14.9	15.5	16.1	4.8	12.5	14.9	0.6	2.4	28.6	168	
	正社員にはなっていない	45.2	12.5	18.3	17.3	14.4	5.8	12.5	10.6	3.8	1.9	28.8	104	
女性	正社員になった	60.5	11.4	14.9	13.2	16.7	12.3	7.9	18.4	3.5	1.8	24.6	114	
	正社員にはなっていない	61.7	13.0	20.9	19.1	22.6	6.1	16.5	27.0	7.0	0.9	10.4	115	

図表 2-29 を詳細にみると、男性の場合には、親・保護者を相談相手にしていると正社員離脱成功率が高まっている。女性の場合には、正社員になれなかった者で、職場やバイト先の上司・同僚や友人・趣味をともにしている友人・恋人・配偶者への相談割合が高く、正社員になった者では、学校の先生・職員・相談員の割合が高くなっている。

他方で、正社員になろうとした時に相談した相手についてもそうであったが（図表 2-17、18）、ここでも「誰もいない」という割合が高い。いったん労働市場に出てフリーターになったあとに正社員になろうとした時、新卒の時とは異なり相談相手を見つけるのは難しく、相談相手がいなくても就職活動をサバイバルできるだけの自律性と意志の強さが必要のようにも思われる。この点については、下記のインタビュー記録から検討する。

次に、正社員としての離脱経路を検討しよう（図表 2-30）。

まず 2011 年についてみると、最も多いのが、「インターネット・新聞・雑誌・貼紙」などのオープンな経路であるが、「親・保護者・親戚・知人の紹介」のような人的ネットワークの割合も高くなっており、特に男性においては 3 分の 1 を占めている。女性よりも男性の方が格段に高いのは、男性は正社員ではたらくべきだという性別役割分業観が背景にあり、周囲が何かと気にかけるからであろう。「パートや契約社員からの登用」、「ハローワークなど公的機関の紹介」がこれに続いている。

図表 2-30 正社員への経路（フリーター経験者のみ・無回答省略）

	高校紹介・大学など	紹介・公的機関	ハローワーク	情報卒サイトの採用	親戚・知人の紹介	貼紙・新聞・雑誌・ト	インターネット	社員から契約登用	派遣会社の紹介	民間支援機関	公募	その他	N
2001	1.7	10.8			33.3	39.1	9.2	1.7		0.8	3.3	120	
2006	17.4				26.7	31.4	20.8	3.4		**	0.4	236	
2011	3.8	10.8	7.3		24.7	27.2	15.3	2.4	0.3	4.9	3.1	287	
男性	2.3	11.1	8.8		30.4	23.4	15.8	0.6	0.0	4.7	2.9	171	
女性	6.0	10.3	5.2		16.4	32.8	14.7	5.2	0.9	5.2	3.4	116	

まったく同じ項目を用いているわけではないものの時系列的な変化としては、「親・保護者・親戚・知人の紹介」は趨勢として低下が見られる。代わって台頭したのが「パートや契約社員からの登用」であるが、2006年に2割を超えたが、2011年には再び低下している。

なお『就業構造基本調査』（2007年）の特別集計では、企業間でのフリーターから正社員への移行について分析しているが、2004年前後から2006年までは非典型雇用から正社員に離脱した若者が増加した時期にあたっている。2002年においては14.2%だったが2007年には16.1%に上昇しており、かつ正社員への離脱は若い時期に起こっていた。

2008年10-12月に労働政策研究・研修機構が実施した「働くことと学ぶことについての調査」（全国の就業者である25-45歳である4024名を対象にしたエリアサンプリング調査）によれば、現職が正社員である者のうち非正規から正規への移行者は13.9%をしめ、企業間移動が10.7%、同一企業内での登用が3.2%、正社員への移行全体に占める登用者の割合は22.9%であった（労働政策研究・研修機構2010）。

登用の割合は2006年東京調査の結果（20.8%）ともほぼ一致しているが、上述したように2011年東京調査においては15.3%と下降しており、東京だけでなく日本社会全体としても正社員への移行者に占める正社員登用者の割合の減少を予感させる。

離脱職種については（図表2-31）、専門・技術がもっとも多く、3分の1を占めている。

図表2-31 正社員への離脱先・職種（フリーター経験者のみ・無回答省略）

	的専 な門 仕・ 事技 術	事管 理 的 な 仕 事	事 務 の 仕 事	販 売 の 仕 事	仕サ 事 ビ ス の	建生 設産 の工 仕程 事・	仕信運 事・輸 保・ 安通 の	そ の 他	N
合計	30.6	1.1	14.6	16.4	21.0	7.8	3.9	4.6	281
男性	27.7	1.8	7.2	18.1	20.5	12.7	6.6	5.4	166
女性	34.8	0.0	25.2	13.9	21.7	0.9	0.0	3.5	115

図表2-32によると、企業規模は2001年と比べてあまり変化はなく、299人以下の企業がほとんどを占めているものの、1000人以上の大企業の正社員となった者も1割存在する。第1章の分析によれば、「他形態から正社員」の場合には、「正社員定着」「正社員転職」に比べると企業規模の小さい企業に就職している割合が高くなっている。なお、入職経路と企業規模の関連についてもクロスしてみたが、対象者の数が少ないため、はっきりした関連は見いだせなかった。

図表 2-32 正社員への離脱先・企業規模（フリーター経験者のみ・無回答省略）

	公務	1000人以上	300～999人	30～299人	29人以下	N
2001	5.0	10.8	3.3	35.8	44.2	120
合計	2.7	12.0	9.3	32.3	43.6	291
男性	3.4	10.3	10.3	27.4	48.6	175
女性	1.7	14.7	7.8	39.7	36.2	116

注：2006年はカテゴリーが異なっているため提示していない。

さて、ここでインタビュー記録から、フリーターから正社員への具体的な事例についてみてみよう。

Qさん（男性・調査当時24歳：巻末のケース記録参照）は大学進学（農学部）のため上京し、大学時代に格闘技をはじめプロにまでなった。だがプロでは生活していけなかったため、卒業時にいったん地方で正社員（農業に関わる旅行会社）として就職する。しかしサービス残業の毎日で格闘技と両立ができなかったため1年で離職し、再び東京に戻って、学生時代のアルバイト先で働きながら格闘技を再開した。2年ほどこうしたフリーター生活を続けたが、結婚をきっかけに生活を安定させるため、学生時代に使ったインターネットサービスの社会人版で見つけた農業に関わる東京の会社に正社員として就職した。学卒直後の仕事よりも、現在の仕事の方がやりがいがあり、安定しているという。

Qさんの場合には、短期で離職してはいるが学卒後すぐに正社員経験がある。かつ離職した理由が明確であり、学部選びから仕事まで農業関連を選んでいる。フリーターから正社員になる主なきっかけが結婚というあたりも、「そろそろ落ち着いて仕事をしそうだ」という企業の眼に適いやすかっただろう。

Iさん（女性・調査当時27歳）は、専門学校で簿記一級を取得したが、両親の離婚による家庭のごたごたから離れるためにアルバイトでお金をため、ワーキングホリデーを使って海外に出た。海外では日本食レストランのウエイトレスと旅行が中心であったが、ワーキングホリデーから戻ってすぐにハローワークに行き、簿記の資格を生かせる会計事務所に就職した。そのあといろいろな仕事を経験したいということで、短期間の派遣を半年ほどしたあとに、大手旅行会社に紹介予定派遣として入社、正社員の誘いがあったが断り、人材会社を通じて簿記の経験が買われ、ベンチャー企業に正社員として入社している。現在の勤務先は海外との取引があり、簿記に加えて海外企業との調整にまで仕事内容が広がっている。

Iさんの場合には、経済的な理由からアルバイトでも仕事上のブランクをつくらなかったこと、また簿記という専門性を活用しながら仕事経験をつんできたことがキャリアにプラスになっている。

Gさん（男性：調査当時28歳）の場合は、大学時代はNGO活動とアルバイト一色であった。卒業近くなって知り合いのNGO関係者から東南アジアの組織の立て直しを頼まれ、契約社員として2年間滞在した。滞在中に結婚。2年間の活動ののち、日本に戻ってから活動

のあり方に疑問を感じ、4ヶ月間主夫をしていた。比較的時間の自由がききそうだったシステムエンジニアの小企業に入社する。未経験者歓迎ということだったが、システムは海外にいる時に独学で学び、実践していたので慣れていた。現在の仕事内容のレベルにあきたらなくなっており、退社後に勉強をしながら、5年後に独立したいと考えている。

Gさんは4カ月とはいえブランクがあるものの、NGOで独学でシステムを組んだだけでなく経営的な実践経験を持ち、離職が多い業界に入りこんだことがプラスになっているように思われる。

3人に共通するのは、キャリアの関連性の強さとブランクの少なさである。正社員として1社に長く定着するというキャリアではないが、それぞれの専門性を培いながらキャリアを重ねてきている。また常にキャリアを自ら切り開いていこうという意思と自律性が特にIさんとGさんには感じられる。

いったん社会に出た後に正社員になるためには、新卒一括採用の流れにのって就職していくという状況に比べると強い意志と行動力が必要であり、すべての若者に高い水準の自律性と行動力を求めることは難しいようにも思われる。今回のケースにはないが、正社員登用の場合には相対的に心理的なハードルが下がることが予測されるので、正社員登用への道筋をさらに開くような支援も重要だと考える。

以上のインタビュー記録からは、専門性を感じさせるキャリアの一貫性とブランクの少なさは、フリーターから正社員へ移行するにあたって有利に働くことがうかがえる。ただし、東京という雇用情勢のよい地域でのケース記録であるので、フリーターから正社員への経路は相対的に開かれていると考えられ、非大都市に同様に適用できるわけではないことに留意したい。

4. 正社員になろうとしない理由

調査では「なぜ正社員になろうとしないのか」ということをあわせて自由記述で尋ねているが、フリーター経験者のうち230名が回答した。回答はおよそ3つのタイプに分類できた。

- ① 正社員になりたいが、なれない
- ② 自由がいい・やりたいことを探している・特に理由はない・正社員はいや
- ③ ほかにやりたいことがある（独立したいを含む）

フリーターのメリット・デメリットは、正社員のデメリット・メリットの裏返しである。この3つのタイプは先に述べたように、フリーターになった理由に対応していることは言うまでもない。

- ① 正社員になりたいがなれない 41人 (17.8%)

- ・高校中退だから（女性・26歳）
 - ・正社員になれないから（男性25歳）
- ② 自由がいい・やりたいことを探している・特に理由はない・正社員はいや 114人(49.6%)
- ・特に考えていない（男性・20歳）
 - ・高校卒業後会社にいましたが、あまりいい体験をしなかったの、どこも同じなのかな
と
思っているからです。（26歳・男性）
- ③ ほかにやりたいことがある（独立したいを含む） 46人（20.0%）
- ・俳優としても活動しているので正社員にはなれない。（男性・23歳）

その他

- ④ 体調がすぐれない 6人
- ⑤ その他・分類不能 6人
- ⑥ 結婚・子育てなど 17人

再びケース記録から、フリーター継続者（3名）についてみてみよう。

次の例は大卒男性であるが、本人はフリーター経験がないと回答している（お笑いの養成所に通っているためフリーターではないという認識）ことに留意してもらいたい。

Hさん（男性：23歳）は、地元の普通高校を卒業後、予備校に行き、大学（外国語学部）に入学した。外国語学部を選んだのは、高校時代のファミレスのバイトにいた大学生の影響である。バイトでは人に恵まれ、上下関係や世の中の仕組みなど様々なことを学んだ。これまで人間関係で苦労したことはない。

大学時代はサークルとアルバイトの楽しい毎日で、就職活動も数社受けたが、ふと、小学校の時に「お笑い芸人になりたかった夢を思い出した。ちょうどM-1に友達と出る機会があり、その時の経験が鮮烈で、お笑いをやりたいと思い始めた。両親ははじめは反対したがあっさりと認め、現在はお笑いの養成所に通っている（年間数十万かかる。学費は両親に借りており、自宅に住んでいる）。養成所は1年で、認められるとスタートラインに立てるが、それでもまだ食べていけるわけではない。最近は30歳くらいでやっと売れるようになるので、心配である。大学時代の友達の多くはワーキングホリデーに行ってしまった。大学は最後に単位が足りなくなり、中退ということになっているが、5年以内は再入学できるシステムになっているので、来年以降は大学に復学することも考えている。パソコンが趣味で自作している。

Hさんによればお笑い芸人は「究極のサービス業」とよく言われるそうだが、相手の要求や雰囲気を読むことを要求されるお笑い芸人の修行というのは、意図したわけではないが、

営業やサービスの仕事に欠かせないコミュニケーション能力を養っているようにもインタビューからは感じられた。もしHさんが、お笑い芸人の道を断念し正社員として就職しようと思った時、フリーター期間がそれほど長引いていなければ、お笑い芸人の経験は一定程度プラスになるようにも思われる。過去にイギリスのNew Deal For Young People(NDYP)政策のオプションの一つに、ミュージシャンを目指すコースが追加されたが（厚生労働省 2010）、若者に人気があるが就くことは難しい華やかな仕事に向かって様々な努力をすることは、その世界で成功するかどうかはさておき、一般的な仕事に関わる能力を結果的に高めるという側面があることを感じさせるケースであった。

なおNさんは女性既婚者のためいわゆるフリーターにはあたらないが、フリーターから結婚し、そのあとも働き方を模索中なのでここで取り上げる。

Nさん（女性：調査当時27歳）は、関東地方の理系の大学院を卒業後、東京で就職して間もなく精神的なバランスを崩してしまい、休職もしたが2年あまりで離職した。地方の実家に戻って休養がてら、パン屋さんでアルバイトを2カ月しているが、調査票には、自分に合う仕事を見つけるため、また収入が欲しかったことが記されている。すぐに結婚が決まって東京に戻り、単発のアルバイトを1カ月して、結婚生活が落ち着いたところに、派遣会社の紹介で倉庫のピッキング作業の仕事 시작했다。その会社には、派遣→パート→契約社員→正社員というルートがあり、一時はそのルートに乗りたいたと思ったが、仕事内容が事務に変わり自信がついてきたので、現在の会社や、正社員ということにこだわらずに働いていきたいと考えている。現在は家庭とのバランスを考慮しながら、フルタイムに近いカタチで働いているが、ネットワークビジネスにも関心がある。配偶者も仕事をすることを望んでいる。

Nさんにとっては現在の仕事は本意ではないように見受けられ、それがネットワークビジネスへの期待となっているようにも推測される。Nさんの現在の立場はフリーターという枠組みから解釈できる範囲にはないが、Nさんが納得できる状態にたどりつくことを期待したい。

Sさん（女性：調査当時27歳）は、中学校時代はやんちゃでまったく勉強をしなかったのが高校には行きたくなかったが、両親の強い希望で定時制高校に入学した。中学生の時からこっそりアルバイトをしていたが、高校2年生の時から兄弟に代わって家業の飲食店手伝いをしてきた。高校卒業時はそのまま飲食店手伝いを継続したが、同じ学年の友達には誰も正社員としての就職活動はしておらず、在学中のアルバイトをそのまま続けるか、男性だったら職人（見習い）になる場合もあったが、基本的には高校時代の状態を「持続」するものであった。

27歳の時に両親がお店を閉めることとなり、新聞店に勤める知り合いから折り込み求人広告をもらって仕事を探した。家から近く時給も高かったのが、雑貨店での接客・倉庫の検品（アルバイト）に就いた。家庭的でとても働きやすく気に入っているが、今年か来年に結婚をしようと考えているので、結婚の際には住居移動を伴うため辞めることになるだろうと予

測している。働くことは苦ではなく、人付き合いで困ったこともない。

Sさんのケースは高卒女性のフリーター継続者の意識としてはおそらく典型的なものである。東京の若い高卒女性が正社員になるのは難しく、またキャリアが将来的に開けることを期待することもできないので、正社員とフリーターの待遇面の違いがあまり意識されないのである。さらに、周囲には雇われて働くホワイトカラーの正社員はいない。父は調理師、兄弟はトラック運転手、友達は男性の場合は職人見習いになっており、腕一本で身を立てるタイプの仕事に就いている。いずれも正社員かどうかというよりも職種が意識されるタイプの仕事であることも、雇用形態の違いが意識されない要因になっていると思われる。

調査票の回答においても、自由な働き方をしたかったからフリーターを選んだと回答しているが、フリーター経験をマイナスなものとして捉えておらず、人間関係能力が身についたり、いろいろな経験をすることができたと評価している。自宅にいるため、アルバイトでも経済的に困るわけではない。Sさんの場合、結婚しようと考えている相手は経済的に安定した職人であるため、結婚が安定したものであれば、将来にわたって問題は生じにくいと思われる。

以上のように、フリーター継続者といっても動機や状況は様々であるが、現在はまだ経済的に切迫はしていない若者たちが多く、また理由が明確なケースについては、政策的な支援は限定的でよいと思われる。

ただし今回は、量的調査への協力者の中から希望者を募るという方法であったため、正社員としての仕事が見つからずに困っているタイプの若者には協力を得られなかった。こうした若者層に対しては別途のアプローチが必要であろう。

第6節 活用した行政サービスや公的支援

本節ではフリーターという視角を離れ、若者が活用した行政サービスや公的支援の状況について検討する。

はじめに、働くことに関わる公的支援について、「1カ月以上無職だったことがある」と回答した若者のうち、どのような公的支援を活用したかについて分析した（図表2-33）。

無職経験がある者のうち、ハローワークの利用率は半数近くにのぼっている。また失業手当を受給したことがある割合も、男性で15.5%、女性で16.5%になっている。地域若者サポートステーションやジョブカフェ、職業訓練や生活保護はまだそれほど高いとは言えない。ハローワークが公的支援として、もっとも若者に認知されていることがうかがえる。

図表2-33 無職経験と公的支援

	失業手当	ハローワーク	若者サポートステーション	ジョブカフェ	国または自治体の職業訓練	生活保護	N
男性	15.5	44.2	2.0	2.0	2.9	1.2	342
女性	16.5	44.0	0.4	1.5	3.7	0.7	273

注：働くことに関わる支援以外は省略

続いて、社会的背景との関連から公的支援の利用について検討する。

図表 2-34 は、学歴別に利用状況を示した。当然ではあるが、高い学歴の者ほど奨学金を活用している。失業手当やハローワークは低学歴層に浸透している傾向が見られるものの、公的支援のいずれも活用したことがないという割合は低学歴層で高くなった。

しかし奨学金は主に高等教育進学者に利用されていると考えられることから、奨学金を利用していない者のうち、授業料免除・失業手当・ハローワーク・地域若者サポートステーション・ジョブカフェ・国または自治体の職業訓練・生活保護のいずれかを利用したことのある者の割合も併せて図表 2-34 の左側に示した。

奨学金の利用を除くと、高学歴者の利用割合はかなり低くなった。奨学金を除くと、低学歴層で特に公的支援が利用されていることがわかる。

図表 2-34 本人学歴と公的支援

		活用した行政サービスや公的支援												N
		奨学金	授業料免除	失業手当	ハローワーク	若者サポートステーション	ジョブカフェ	訓練または自治体の職業	国または自治体の職業	生活保護	その他	なにも活用したことがない	の割合(その他除く)	
男性	高卒	5.1	2.3	8.4	23.7	1.4	1.4	2.3	0.9	0.0	68.8	25.6	215	
	専門・短大・高専卒	16.7	1.8	9.2	24.6	0.4	0.4	2.2	1.3	0.0	58.8	24.0	228	
	大学・大学院卒	27.6	3.1	5.5	17.1	0.5	1.2	0.2	0.0	1.0	58.2	13.3	421	
	中卒・高校中退	1.8	0.0	5.5	20.0	1.8	1.8	0.0	7.3	0.0	72.7	25.0	55	
	高等教育中退	37.8	1.4	8.1	23.0	2.7	1.4	1.4	0.0	0.0	41.9	20.3	74	
	その他不明	33.3	11.1	11.1	27.8	0.0	0.0	0.0	0.0	5.6	33.3	26.3	18	
女性	高卒	6.8	2.5	10.6	29.2	0.0	0.0	1.2	1.2	0.0	64.0	29.0	161	
	専門・短大・高専卒	23.7	2.9	8.0	24.6	0.6	0.9	1.4	0.0	0.6	54.6	20.7	350	
	大学・大学院卒	31.7	4.8	4.1	15.9	0.2	1.9	0.7	0.0	1.4	53.8	13.4	416	
	中卒・高校中退	8.8	5.9	5.9	23.5	0.0	0.0	0.0	8.8	0.0	61.8	29.4	34	
	高等教育中退	22.7	6.8	6.8	20.5	0.0	0.0	2.3	0.0	2.3	70.5	4.3	44	
	その他不明	18.2	0.0	9.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	72.7	8.3	11	

図表 2-35 は、経済的豊かさと公的支援の関連について検討した。

奨学金はその性格上当然ともいえるが、豊かでない家計でもっとも活用されており、豊かでない層の 4 割で活用されている。授業料免除も同様の傾向が見られる。また失業手当やハローワークの活用についても同様であり、どれも活用したことがないという割合は豊かな層で最も高くなっている。

奨学金を除いた支援活用割合については、あまり豊かでない・豊かでない層でわずかに逆転が見られるものの、経済的に豊かでないほど公的支援が利用されているという傾向が見られる。

図表 2-35 経済的豊かさと公的支援

	活用した行政サービスや公的支援											N	
	奨学金	授業料免除	失業手当	ハローワーク	若者サポートステーション	ジョブカフェ	国または自治体の職業訓練	生活保護	その他	なども活用したことが	の割合(その他除く)		奨学金を利用していない者
男性	豊かである	7.1	1.0	2.0	15.2	1.0	1.0	2.0	0.0	0.0	77.8	14.9	99
	やや豊か	12.6	1.1	4.7	17.0	0.6	1.1	0.3	0.0	0.8	70.4	16.2	358
	あまり豊かでない	24.2	4.2	9.7	21.5	1.0	0.7	1.4	0.7	0.3	52.6	22.7	289
	豊かでない	37.1	5.3	13.2	28.5	2.0	2.6	3.3	4.0	0.0	40.4	22.4	151
	わからない	20.6	0.0	3.9	28.4	0.0	0.0	0.0	1.0	1.0	52.9	24.5	102
女性	豊かである	8.3	0.0	5.8	19.0	0.8	1.7	0.0	0.0	1.7	73.6	16.4	121
	やや豊か	21.0	3.3	6.4	16.7	0.0	0.8	1.3	0.3	0.8	62.3	15.9	390
	あまり豊かでない	27.5	5.3	6.9	27.1	0.8	1.9	1.1	0.0	0.8	48.9	22.9	262
	豊かでない	41.7	7.6	9.8	29.5	0.0	0.0	2.3	2.3	1.5	36.4	20.9	132
	わからない	20.2	2.1	4.3	18.1	0.0	1.1	0.0	1.1	0.0	61.7	17.7	94

これまでいくつかの先行研究は、若者支援機関に集まってくる若者層が社会的に恵まれた層に偏っている可能性を指摘してきた。本稿の知見とは異なるようにも思われるが、学歴が低いとキャリアが不安定になる確率が高いことなどを考慮すると、経済的に豊かであったり高学歴であると公的支援をたよらなくてはならない状況には陥りにくい、潜在的な活用能力は高いと解釈することが妥当であろう。

いずれにしても、無職経験のある若者の半数近くにハローワークが活用されていることは、公的支援が一定程度はセイフティネットとして機能していることがうかがえる。

第7節 本章の要約

本章は、誰がフリーターと自認しているのか、誰がフリーターになりやすいのか、あるいはフリーター経験とはどのようなものとして認識されているのか、フリーターからの離脱はどのように起こっているのか、という3つの観点から、主に時系列的な分析を中心に行った。明らかになった知見は次のようにまとめられる。

- ① 自分をフリーターとして認識するかどうかには地域差が見られるが、おおむね、パート・アルバイトで働いた経験があるとフリーターをしたことがあると答える傾向が見られる。
- ② フリーター経験の有無には本人学歴、離学のタイミングと学校での専攻が大きく影響しており、女性の場合には経済的豊かさも関連している。
- ③ 2011年のフリーター経験者によるフリーター経験の評価として、フリーターという働き方は「自分に合う仕事を見つけられる」「自由」な働き方とは認識されにくくなった。
- ④ フリーター3類型の分析からは、2001年に比べて2006年同様に「夢追求型」が増加した

が、「モラトリアム型」の割合は経年的に低下、「やむを得ず型」は2006年にいったん減ったが、再び上昇していた。フリーター3種類の分布には経済的な豊かさとの関連が大きく、特に女性は豊かでないと「やむをえず型」が半数を占めていた。

- ⑤ 経年的な変化をみると、正社員になろうとした割合は2006年に低下したのち、2011年にふたたび2001年の水準にまで戻った。しかし正社員になれた割合（離脱成功率）は、2001年の水準にまで戻ってはいない。
- ⑥ 正社員になろうとするきっかけは、安定したいという気持ちによるものが強いが、男性の場合には結婚をきっかけとする割合が高い。学歴別にみると、高卒以下学歴の場合には、男女とも正社員のほうがトクであるという回答が多い。他方で高卒超学歴の場合には、「やりたいことが見つかったから」が男女とも高く、学歴によって、フリーターを離脱する動機が異なることがうかがえる。
- ⑦ 正社員になろうとした時にすることとして、就職活動、HWの利用、情報収集やスキルアップ、正社員登用の希望を出す等が挙げられた。
- ⑧ 正社員への経路として、人的ネットワークの割合は低下しており、パートや契約社員からの登用が2006年に増加したが、2011年にふたたび低下した。
- ⑨ 正社員への離脱について、明確な効果が見られたのはフリーター期間であり、フリーター期間が6カ月以内で高く、3年以上になると低下していた。
- ⑩ 失業経験のある若者にもっとも利用されている公的支援のうち、働くことに関する支援で最も利用率が高いのはハローワークであり、利用率は半数近くにのぼる。行政サービスや公的支援の利用は（奨学金の利用を除くと）、キャリア類型の影響が大きい、学歴が低いほどまた生家が豊かでないほど利用割合が高い。

今回の対象者は上述したように、景気回復期に離学した若者が半数以上を占めている。したがって学卒時に正社員になるチャンスは相対的に開かれており、それがフリーター経験率の低さに現れているといえる。ただし不景気になってからの離学者は大きく状況が異なっており、今後のフリーター経験率の増加を予感させる。

それではフリーターになる若者が増加した時、フリーターからの離脱に対して労働行政はどのような支援をすることが望まれるであろうか。

まずは、フリーター期間が短いと正社員への離脱成功率が高いことから、早期の離脱を促すということである。EUでも、若者を6カ月以上無業にしないという政策がなされているが（労働政策研究・研修機構2005）、6か月というのは無職の若者が再び仕事を得る上で、雇用側の見方についてもまた本人のモチベーションという点においても、ターニングポイントとなる時期の目安になっていることがうかがえる。労働行政は若者が6か月以内に安定した就業に至るように、集中的な支援を行っていくことが求められる。

さらにインタビューからうかがえたのは、正社員離脱者の自律性と意思の高さ、あるいは

キャリアの一貫性であった。おそらくこれは、人的ネットワークを使用しておらず、正社員登用ではない正社員離脱者の特徴だと考えられる。つまりまったくつてがない企業にフリーターから正社員として就職するというのはそれなりの経歴や能力が必要であり、かなりハードルが高いものと考えられる。

しかし人的ネットワークをもっていたり、あるいはすでに働いている職場の正社員登用であれば、こうしたハードルは多少下がるものと考えられる。雇用側が本人の人となりや能力をすでに把握できているからである。だが正社員登用の機会も景気が良い時期には開かれるが、現在は閉じつつあるようだ。

したがって、フリーターから正社員への離脱を目指す若者に対しては、ひとつにはすでにフリーターとして働いている若者に対する「正社員登用」を支援する政策の拡充も効果的であろう。あるいはトライアル雇用やジョブカードなどの職場実習を含む職業訓練なども、企業の採用のハードルを下げるのに役立つと考えられる。

フリーターから正社員への離脱を進めるに当たっては、本人の経歴や能力に応じたいくつかのオプションを用意し、自分に合った道を選べるようにすることが求められる。

参考文献

石田浩・近藤博之・中尾啓子，2011，『現代の階層社会 2 階層と移動の構造』東京大学出版会。

厚生労働省，2010，『海外情勢報告 2008-2009 年』

<http://www.hakusyo.mhlw.go.jp/wpdocs/hpyi221101/b0303.html>

労働政策研究・研修機構，2003，『若者就業支援の現状と課題』労働政策研究報告書No.35。

労働政策研究・研修機構，2006，『大都市の若者の就業行動と移行過程』労働政策研究報告書No.72。

労働政策研究・研修機構，2010，『非正規社員のキャリア形成』労働政策研究報告書No.117。

第3章 大都市の20歳代の職業意識の分析

第1節 はじめに

本章では、2011年2月に実施された第3回若者のワークスタイル調査のデータを用いて、大都市の20歳代の職業意識について検討する。分析の前半（2節）では、後に示す設問への回答の分布を、職業意識が異なると予想される諸変数ごとに見ていく。また、10年前に実施された第1回若者のワークスタイル調査にも、ほぼ同様の文言の設問が存在する。分析の後半（3節）では、第1回調査の結果と第3回調査の結果を比較し、2001年時点の20歳代（1971年～1981年生まれ）と2011年時点の20歳代（1981年～1991年生まれ）で、どのように意識が違うのか（あるいは変わらないのか）を提示する。

1990年代には、戦後からの長期的な豊かな社会の到来、バブル崩壊前後からの経済の変化や雇用・就労環境の変化などを背景とした職業世界の変容に呼応する形で、若者の職業意識（職業観・労働観）が変化していると考えられ、それを捉えようといくつかの角度から説明が試みられていた。代表的なものだけでも、自分主義の強まり、自己実現志向やこだわりの強さ、仕事の手段化、余暇志向（および仕事との両立志向）、脱会社志向、頑張りの低下、人間関係の重視とその煩わしさ、離転職志向、と枚挙にいとまがない¹。このような1990年代の若者の職業意識の把握は、既存の企業就職や雇用慣行に乗らない新しい世代をいかに捉えるかということに主眼が置かれていたように思われる。

しかしながら、そのような典型的な就業における若者の問題とともに、1990年代後半から2000年代初頭以降、第1回本調査で中心的に扱ったフリーターのような非典型的な就業の問題が、2000年代中盤前後からは、職業世界への参入そのものに困難を抱える若年層（例えば、NEETの状態にある者）の問題が、より一層注目されていった。

職業意識という点でそうした問題にアプローチしたものとして、例えばフリーターについての調査・分析をあげると、日本労働研究機構（2000: 70-85）は、ヒアリング調査のデータをもとに、「フリーターのメリット・デメリット」「世間のフリーター観」「正社員観」「フリーターの理由」「フリーター経験による変化」の5つの観点からフリーターの職業意識を分析している。また、質問紙調査の分析としては、第1回本調査を分析した日本労働研究機構（2001: 31-77）や下村（2002）、職業意識の分析から多様なキャリア教育の必要性を論じた亀山（2006）がある。

こうした約20年間の若年者雇用の文脈における先行研究・調査の蓄積がある今日は、2000年代初頭以上に問題が複雑かつ困難になっていると考えられ、また、日本社会に存在するさまざまな格差の問題が人口に膾炙した時代にある。こうした時代における若者の職業

¹ 座談会形式のものから調査データに基づく論考まで、さまざまな所で論じられている。例えば、佐藤ほか（1991）、堀田（1991）、江上（1991）、など。

意識は、どのような状況にあるのだろうか。本章で検討していきたい。

本章で扱う職業意識の内容を具体的に説明しておく。若者の職業意識と一口に言っても、職業に関するさまざまな意識項目が先述した諸研究および調査でとりあげられているが、本章では第1回本調査の問題意識を基本的に継承する形で、同様の職業意識を分析対象とする。

第1回調査時の分析において、日本労働研究機構（2001: 54）は、職業意識に関する質問項目を、主成分分析法を用いて「フリーター共感」「能力向上志向」「栄達志向」「仕事離れ・迷い」の4つに集約した²。第1回調査において、この四つの成分によって提起された問題意識は、次のように説明できる。

第一に、「フリーター共感」については、「フリーターを支える意識は、若者に広く共有されている」（日本労働研究機構 2001: 54）として、移行過程の変容において供給側（若年者）に非典型的な就業行動への支持・共感が存在する、としている。こうした支持・共感第1回調査から10年経った現在、どのような様相を呈しているのか。若者の多様化がますます注目されている今日、そうした支持・共感も多様なものになっているのかという点を確認する必要がある。

第二に、「能力向上志向」からは、若年者の意欲とフリーター離脱の関係の問題を考えることができる。専門知識や資格はフリーター離脱の資源となりうる。これらの取得に対する若年者の意欲に応えるための一つの支援として、職業能力開発の機会の提供を日本労働研究機構（2001: 27）が提案しているが、そうした意欲が現在も維持されているのか。もし状況が変化しているならば、資格や専門知識に対して具体的なイメージをもつための教育を提供するなど、能力開発機会以前の支援の強化も考えなくてはならないのではないか。変化については第3節で検討するが、さしあたって第2節で現在の状況を確認することが必要である。

第三に、「栄達志向」については、第1回調査時に、「有名になりたい」「将来は独立して自分の店や会社を持ちたい」といった考え方が＜夢追求型＞フリーターに特徴的であるとされた（日本労働研究機構 2001: 91-93）。この志向は、一旗揚げることを目指した働き方に通じる点でリスクである一方、将来に向けて野心的・意欲的に活動することを支えるものであると考えうる。仮にこの志向自体が衰退しているならば、職業アスピレーションの低下、就業行動を支える原動力自体を若者が失いつつあることを意味するのではないか。こうした変化を第3節で検討するためにも、第2節で現在の状況を把握する。

第四に、「仕事離れ・迷い」については、「フリーター選択の背景に強く働く意識」と考えられる（日本労働研究機構 2001: 54）。この意識の高まりの有無は、非典型的な働き方に

² この4つと具体的な項目の対応に関しては、本章の図表3-1を参照。

対する自発的な選択の問題のみならず、職業世界からの離脱や就業行動に対する不活発層（NEET など）がますます社会問題化された 2000 年代の状況を鑑みても、注目に値する。

こうした問題意識のもとに、2011 年時点において大都市に住む 20 歳代の若者の職業意識の現状を理解したい。

加えて、次節からの分析の前に、若者の職業意識を捉える際のいくつかの切り口（変数）をあげておきたい³。

第一に、ジェンダーや性別役割分業の観点から、若者の職業意識を考えることができる。育児支援と女子青年および男子青年の職業意識の関係について論じている村松（2001）、ジェンダーと雇用の典型／非典型的の組み合わせで第 1 回本調査を分析した日本労働研究機構（2001: 163-185）、ジェンダーの観点からフリーター現象を分析した本田（2002）などが問題化しているように、現実の職業世界は、その存立という点で性別・ジェンダーと分ちがたく結びついている。

第二に、一口に若者や若年層といっても、10 歳代から、後期若年層とされる 20 歳代後半および 30 歳代まで、幅広い年齢層を対象とすることには言うまでもなく留意が必要である⁴。こうした年齢段階による対象の把握を、雇用・就業といった領域に適応すれば、先行研究・既存の調査もいくつかに分類可能である。職業への移行やそこにつながる進路意識を問題とし、高校生・大学生を対象にしたもの。職業世界へ足を踏み入れた段階の若者から社会の就労状況を読み解こうとし、新入社員を対象にしたもの⁵。結婚や家族形成といったライフコース上のイベントが問題化される段階での若者の就労を扱ったもの、など。若者にとっての就業・労働上の課題のバリエーションは、教育から職業への移行の中断のなさや年功賃金評価をその特徴として持ち続けてきた日本社会において、年齢を重ねて段階を経ることによりかなりの程度対応すると考えられる。よって、年齢の考慮が必要である。

第三に、雇用形態や職種、職業キャリアが職業意識に関連していることが考えられる。職業についての意識なので、対象の現在および過去の就労経験がその形成に影響している可能性と、ある職業意識をもっている者が特定の就業行動をとる傾向にある可能性の両方

³ ここでとりあげたもの以外にも、社会階層、経済的状況（所得、資産など）等、さまざまな変数を考えることができる。また、日本労働研究機構（2001: 9）は、学校から職業への移行過程の変化を促す要因を、労働力需要側の要因、供給側の要因、マッチングシステムの要因の三つに分け、このうちの供給側の要因の一つとして若者の就業意識（の変化）を挙げ、この形成を規定している要因として、以下のものを想定している。

- ・学校に関わる要因：進学層の拡大、高等学校の「水路付け」機能や社会化の機能の低下、「個性」重視の教育政策・進路指導の展開
- ・家庭に関わる要因：親への依存の長期化、家庭の教育力の低下、少子化（きょうだいの減少）、結婚年齢の上昇
- ・若者文化に関わる要因：消費文化への接触の低年齢化
- ・その他の要因：交友関係の変化、在学中のアルバイト経験

⁴ 加えて、年齢段階で捉えるか、世代・コーホートで捉えるかでも、論じられることは変わるだろう。

⁵ 例えば、公益財団法人日本生産性本部の「職業のあり方研究会」と社団法人日本経済青年協議会は、毎年、新入社員に対する意識調査を行っている。

が考えられるが、いずれにせよ、就労の経験の考慮が必要だろう。

第四に、学歴や教育という変数が考えられる。これもまた、意識形成に対する教育の直接的な効果（例えば、進路指導や職業教育によるもの）と、教育とそれにより獲得した学歴が上述した第三の変数（就労の経験）に関連することによる間接的な効果、両方があるだろう。

第五に、現在の家族形態が職業意識に関連していることが考えられる。例えば、働いて食いぶちを確保する目的に自分以外の他者（家族）の生存がある場合には、就労に対するモチベーションが高く、逆に、就労以外に経済的基盤を確保する術（その一例として、家族が保有する潤沢な財産）がある場合には、就労に対するモチベーションが高くない可能性が考えうる。

最後に、地域という変数も忘れてはならない。序章でも説明しているが、3回にわたって実施された本調査は、東京居住の若者を対象にしている。この対象を一般化して日本全体の若者について語ることはできない。なぜなら、例えば都市と地方という対比を考慮しただけでも、両者の間には、就労機会、産業構造、文化の蓄積、教育水準、対人ネットワークの量と種類などの違いを想像できるだろうし、それによって職業意識も異なることが予想される⁶。本節の分析を読み解く際には、それが2011年時点で東京都内に住む1981年～1991年生まれの者であることに留意する必要がある。

第2節 第3回調査の分析——2011年20歳代の職業意識

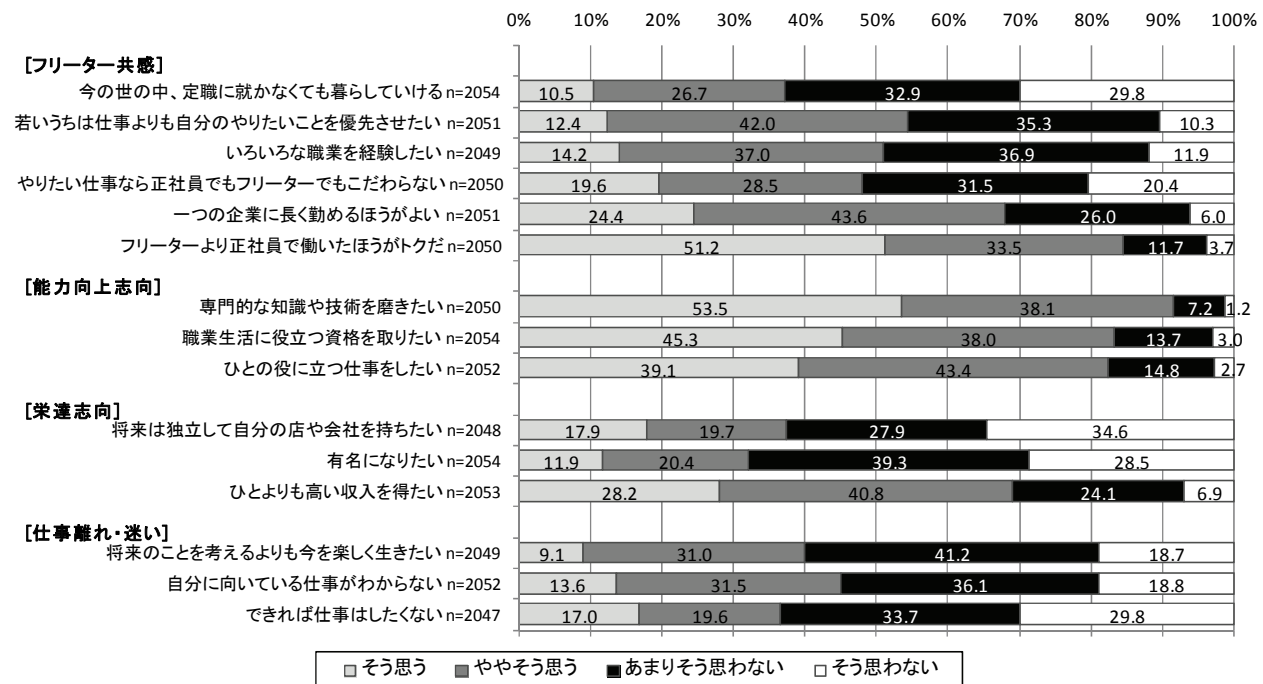
本節では、前節で説明した諸変数のうち、性別、年齢層、現在の雇用形態、学歴、キャリア類型、家族形態ごとに、第3回調査における職業意識の質問についての回答がどのように差があるのか（あるいはないのか）という点を検討する。

図表3-1は、第3回調査の調査対象全体の職業意識の分布である。「フリーター共感」の各項目について、8割以上が正社員で働いた方が得だと考え、「やりたい仕事なら正社員でもフリーターでもこだわらない」は5割を、「今の世の中、定職に就かなくても暮らしていける」は4割を、その支持が下回っている。仮に経済的な不利や就労の不安的さと、フリーターに象徴される働き方の自由さが天秤にかけられるとして、後者が支持されるとは言いがたい。専門的な知識や技術を磨くことへの支持が9割を、資格取得への支持も8割を超えており、能力向上への賛成は広く20歳代の若者に共有されている。「栄達志向」に関して、「ひとよりも高い収入を得たい」という経済的な向上への支持は7割弱存在するものの、独立や有名になることに対する支持は、全体の4割を下回っている。仕事離れ（「将来のことを考えるよりも今を楽しく生きたい」「できれば仕事をしたくない」）については全体の3～4割で分布しているものの、4割を超えた者が「自分に向いている仕事はわから

⁶ 東京圏以外の若者の職業意識を分析したものとして、例えば、仙台圏の高校生の進路意識・職業意識を分析した片瀬・元治（2008）がある。

ない」としており、就業への一定数の支持がありつつも、自らの仕事についての迷いが存在する現状を確認できる。

図表 3-1 若者の職業意識

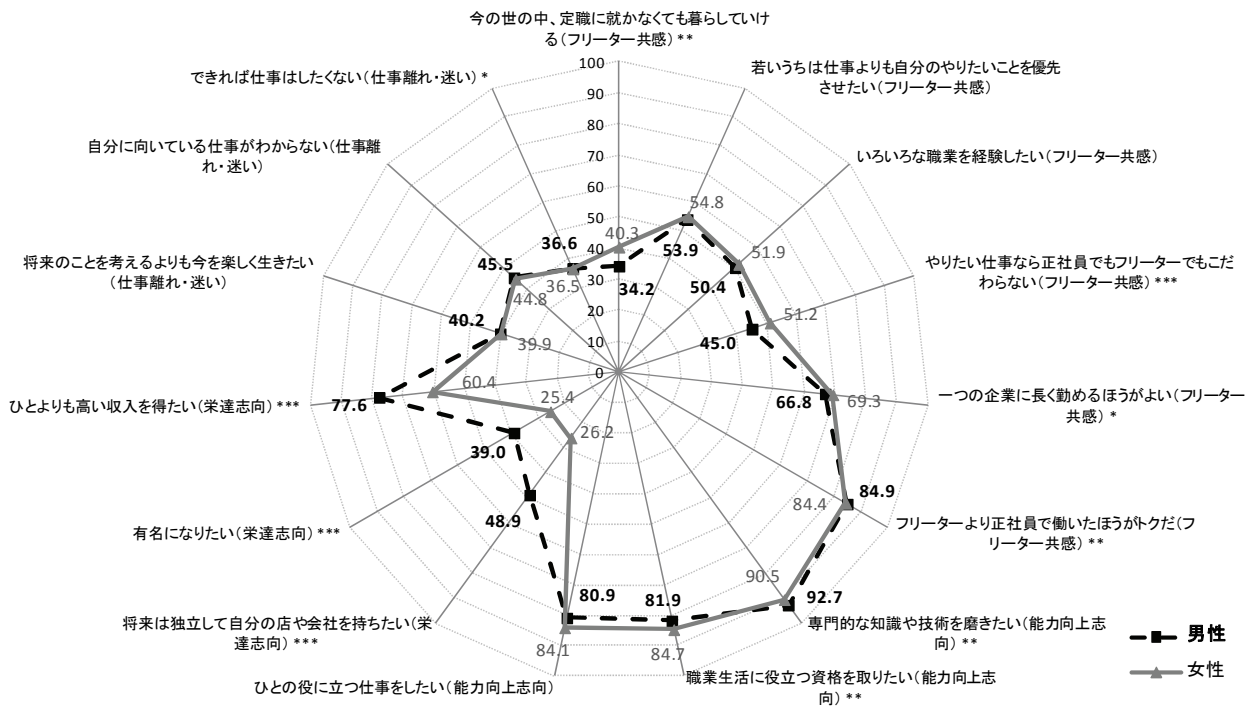


続いて、性別と職業意識の関連を確認する。前節で説明したように、性別あるいはジェンダーは、若年者の就労を考える際に重要な変数である。前述した4種類の職業意識について、第1回調査の分析時（日本労働研究機構 2001: 55）には、男女別の「違いはあまり大きくなく、『栄達志向』のみ男性の方が強いという結果」が出ている。第3回調査においては、どうだろうか。

図表3-2は男女別の職業意識項目に対する肯定回答の分布である。分布で特に違いが目立つのは、「栄達志向」に該当する項目である。男性の方が女性に比して、「栄達志向」への肯定の割合が高い⁷。他には、女性の方が相対的に、ある部分では「フリーター共感」を支持する傾向にある（「今の世の中、定職に就かなくても暮らしていける」「やりたい仕事なら正社員でもフリーターでもこだわらない」）一方、「一つの企業に長く勤めるほうがトクだ」「職業生活に役立つ資格を取りたい」といった項目への支持がわずかだが高いという結果になり、安定や堅実といったものも考慮されている。

⁷ これをもって、第1回調査時の結果と同じであるという判断を下すことには、慎重でなければならない。なぜなら、次節でも触れるが、2回の調査では対象者の抽出方法が異なっており、男女それぞれの対象者属性の構成も異なるからである。比較の作業は次節で行うので、ここでの結果はあくまで第3回調査時のものであることに留意する必要がある。

図表 3-2 男女別職業意識の分布（「そう思う」＋「ややそう思う」の％）^{8 9}



性別ごとに職業意識を見ると、項目によって分布に差があるものとほとんどないものが存在するが、こうした違いは、前節で説明した諸変数ごとに見ていくと、結果が異なっているかもしれない（例えば、在学期に近く職業に対する意識が男女でそれほど異ならないと予想される若い年齢層と、性別によって異なる就業環境を経験した後期若年層は、性別ごとに分けて結果を見た際にその違いが明示される、など）。よって、以降の分析では、各カテゴリー内での職業意識を男女別に把握していく。

1. 年齢層：20歳代前半層、20歳代後半層

図表 3-3 は、男性の年齢層別の職業意識の分布である。 χ^2 検定（有意水準 5%）で年齢層と質問項目の関連を確認したところ、「フリーターよりも正社員で働いたほうがトクだ」と「専門的な知識や技術を磨きたい」で有意な関連が認められた¹⁰。両者とも、20歳

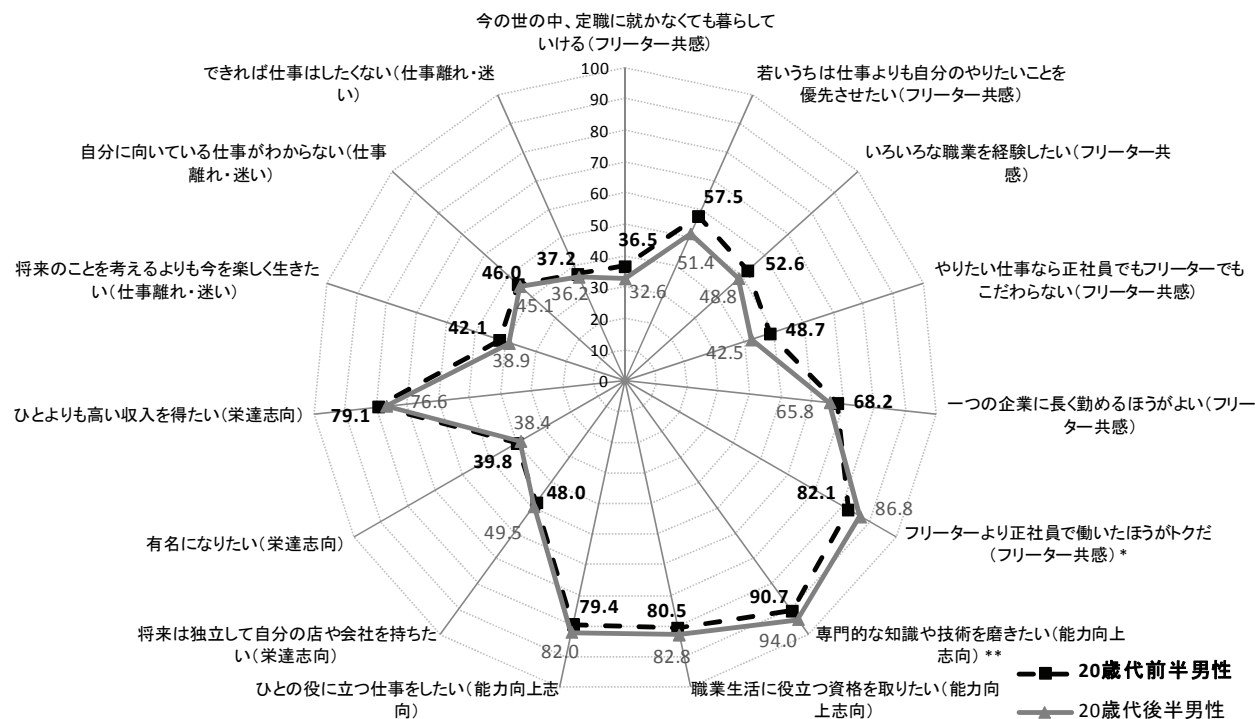
⁸ 本章のほとんどの図表において有効ケース数の記載を省略しているが、章末の付表に必要なものをまとめて示しているの、適宜参照していただきたい（図表 3-2 の男性・女性に関しては、20歳代前半と 20歳代後半を足したものがそれぞれの有効ケースになる）。なお、本章で提示する数値は、小数点第 2 位を四捨五入し、小数点第 1 位までを記載したものである。

⁹ 図表 3-2～図表 3-14 の各項目の最後に、参考として、 χ^2 検定（有意水準 5%）で統計的独立を確認した結果を示した（帰無仮説は「2 変数が独立である」）。なお、検定結果（* p<.05 ** p<.01 *** p<.001）は四件法で行ったものであり、無記載は、関連が認められなかった場合か、期待度数 5 未満のセルが全体の 20% 以上のため検定を行っていない場合である。

¹⁰ 前者は 5% 水準（df=3、 $\chi^2=10.2$ ）、後者は 1% 水準（df=3、 $\chi^2=12.7$ ）の有意差。なお、質問紙上では四件法で尋ねているので、検定も四件法のまま行った。

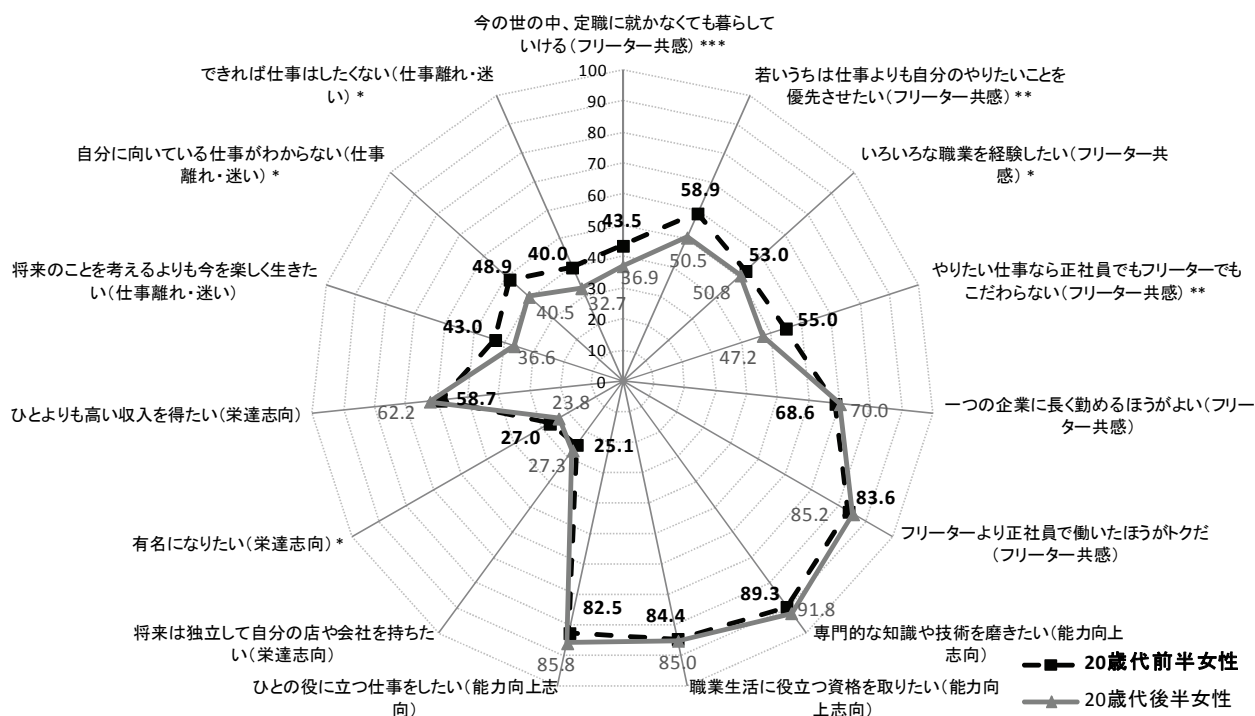
代前半層よりも 20 歳代後半層の方が肯定回答の割合が高い。正社員志向や能力向上に関して、年長層の方が支持しているという傾向を確認できる。しかし、それ以外の項目に関しては、20 歳代前半層と 20 歳代後半層で、際立った違いは認められない。

図表 3-3 年齢層別男性の職業意識の分布（「そう思う」＋「ややそう思う」の％）



一方、女性は男性とは状況が異なる。図表 3-4 は、女性の年齢層別の職業意識の分布である。「フリーター共感」に該当する 6 項目のうち、4 項目（「今の世の中、定職に就かなくても暮らしていける」「若いうちは仕事よりも自分のやりたいことを優先させたい」「いろいろな職業を経験したい」「やりたい仕事なら正社員でもフリーターでもこだわらない」）において、20 歳代後半層よりも 20 歳代前半層の方が肯定回答の割合が高い。20 歳代後半層の女性に比べて、20 歳代前半層の女性は、典型的な就労行動に縛られないフリーターのようなあり方への支持・共感が存在しているようだ。他にも、「仕事離れ・迷い」の 2 項目（「自分に向いている仕事かわからない」「できれば仕事はしたくない」）や「有名になりたい」も、20 歳代前半層の方が、肯定回答の割合が高い。

図表 3-4 年齢層別女性の職業意識の分布（「そう思う」＋「ややそう思う」の％）



以上から、年齢段階の効果かコーホートの違いかは判別できないが、女性の方が男性に比して、職業意識に対する年齢の効果が存在すると言することができる。

2. 雇用形態：正規雇用、派遣・契約、アルバイト・パート、無業・その他

ここでは、男女それぞれにおいて、現在の雇用形態で職業意識の分布がどのように異なるのか（もしくは異なるのか）を見ていく^{11 12}。

図表 3-5 は、男性の雇用形態別の職業意識の分布である。

正規雇用の男性は、「フリーター共感」への支持が低く、また「能力向上志向」全般や「栄達志向」（「有名になりたい」「ひとよりも高い収入を得たい」）の肯定が高い。この点で、堅実かつ安定的な意識ではあるが、迷いがないわけではない。「仕事離れ・迷い」の項目が4形態中で最も低い結果にはなっていない。

これに対し、派遣・契約の男性は、「仕事離れ・迷い」に該当する3項目全てにおいて、肯定回答の割合が最も低い。また、「フリーター共感」への支持も比較的高く、「能力向上志向」のうち「職業生活に役立つ資格を取りたい」と「ひとの役に立つ仕事をしたい」への肯定が最も低い。自分の働き方に対するビジョンを明確にもちつつ、既存の働き方や制度から自由な志向をもっているのが、派遣・契約の男性であると言えるかもしれない。

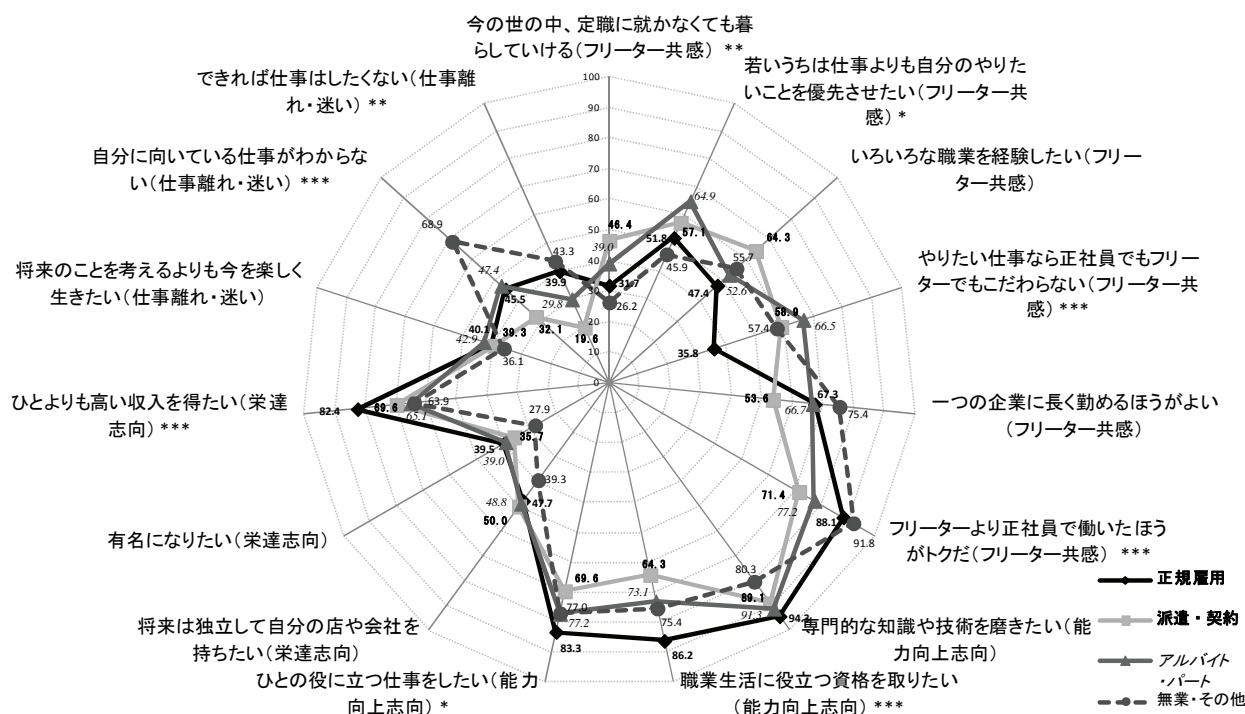
¹¹ なお、自営・家業に該当するケースは、そこに含まれる業種が多岐にわたることが予想され、職業意識に一定の傾向を見出すのは難しいと判断した。よって、本章では記載しない。

¹² 派遣・契約および無業・その他の男性と無業・その他の女性はケース数が100に満たないので、その点は留意する必要がある。

アルバイト・パートの男性は、「若いうちは仕事よりやりたいことを優先したい」や「やりたい仕事なら正社員でもフリーターでもこだわらない」の肯定回答の割合が最も高い。

無業・その他の男性は、「フリーター共感」への支持が低く、「栄達志向」への肯定回答の割合も低い。そして、「仕事離れ・迷い」の項目のうち、「できれば仕事はしたくない」「自分に向いている仕事が見つからない」に対する肯定回答の割合が最も高いが、「将来のことを考えるより今を楽しく生きたい」に対する肯定回答の割合は最も低い。ここから、刹那的な生き方や自由な働き方を肯定しておらず、迷いのなかで、できれば仕事はしたくないという意識をもつ無業・その他の男性の姿が見えてくる。

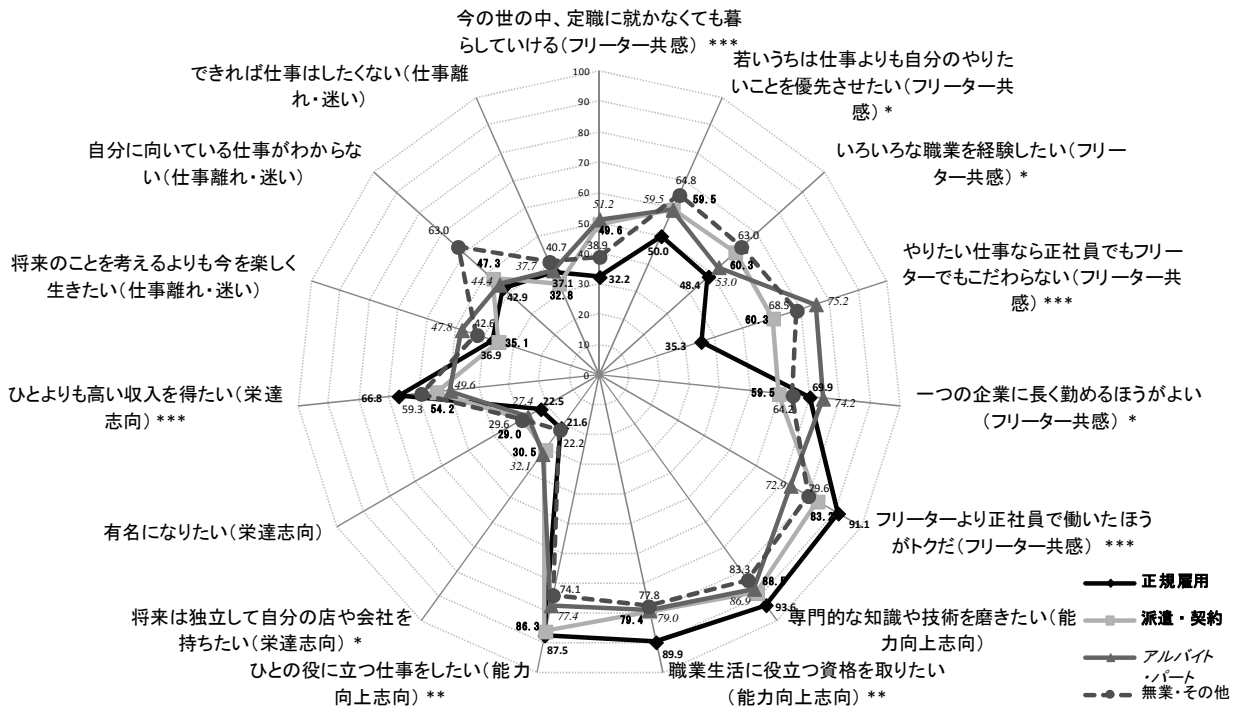
図表 3-5 雇用形態別男性の職業意識の分布（「そう思う」＋「ややそう思う」の％）



正規雇用の女性（図表 3-6）は、男性と同様に「フリーター共感」への支持が低く、その傾向は男性より顕著に見える。また、「能力向上志向」や、「栄達志向」のうち「ひとよりも高い収入を得たい」に対する肯定回答の割合が最も高く、「有名になりたい」に対する肯定回答の割合が最も低い。安定的な雇用を支持する堅実な志向が見て取れる。

だが、派遣・契約とアルバイト・パートにおいては、男性とは異なった傾向が見られる。まず、派遣・契約の女性の「能力向上志向」や「仕事離れ・迷い」の項目に対する肯定回答の割合は、他の雇用形態に比べて低いとは言い切れない。この点が、派遣・契約の男性とは異なる。

図表 3-6 雇用形態別女性の職業意識の分布（「そう思う」+「ややそう思う」の％）



また、アルバイト・パートの女性において、「フリーター共感」の4項目で他の雇用形態よりも共感を示す回答となっている。

無業・その他の女性が、「できれば仕事はしたくない」「自分に向いている仕事かわからない」に対する肯定回答の割合が最も高い点は男性と同様だが、「栄達志向」に対する肯定回答が他の雇用形態に比べて低いというわけではない点や、「フリーター共感」に該当する2項目で最もフリーターのような働き方に対する支持がある点が、男性と異なる。

3. 学歴：高卒、専門・短大・高専卒、大卒・大学院卒

ここでは、男女それぞれで、高卒、専門・短大・高専卒、大卒・大学院卒の三つの学歴区分間の職業意識を比較する¹³。

図表 3-7 は、男性の学歴別の職業意識の分布だが、前述した雇用形態ほどには意識の違いが顕著ではない。「フリーター共感」6項目のうち「一つの企業に長く勤めるほうがよ

¹³ 中卒・高校中退、高等教育中退に関しては、該当ケース数の少なさなどの理由から、比較して説明することが困難だと判断したので、以下に数値のみを記す。

	中卒、高校中退(男性)	高等教育中退(男性)	中卒、高校中退(女性)	高等教育中退(女性)		中卒、高校中退(男性)	高等教育中退(男性)	中卒、高校中退(女性)	高等教育中退(女性)
今世の中、定職に就かなくても暮らしていける	33.9	41.1	50.0	53.3	将来は独立して自分の店や会社を持ちたい	57.1	57.5	29.4	33.3
若いうちは仕事よりも自分のやりたいことを優先させたい	60.0	64.4	47.1	71.1	有名になりたい	32.1	37.0	29.4	15.6
いろいろな職業を経験したい	56.4	50.7	58.8	52.3	ひとよりも高い収入を得たい	75.0	71.2	47.1	48.9
やりたい仕事なら正社員でもフリーターでもこだわらない	50.0	54.8	79.4	64.4	将来のことを考えるよりも今を楽しく生きたい	33.9	35.6	47.1	42.2
一つの企業に長く勤めるほうがよい	70.9	72.2	82.4	62.2	自分に向いている仕事かわからない	46.4	50.0	44.1	57.8
フリーターより正社員で働いたほうがトクだ	85.7	83.6	55.9	71.1	できれば仕事はしたくない	32.1	46.6	44.1	35.6
専門的な知識や技術を磨きたい	87.5	94.5	76.5	86.7					
職業生活に役立つ資格を取りたい	75.0	84.9	79.4	68.9					
ひとの役に立つ仕事をしたい	69.6	78.1	84.8	64.4					

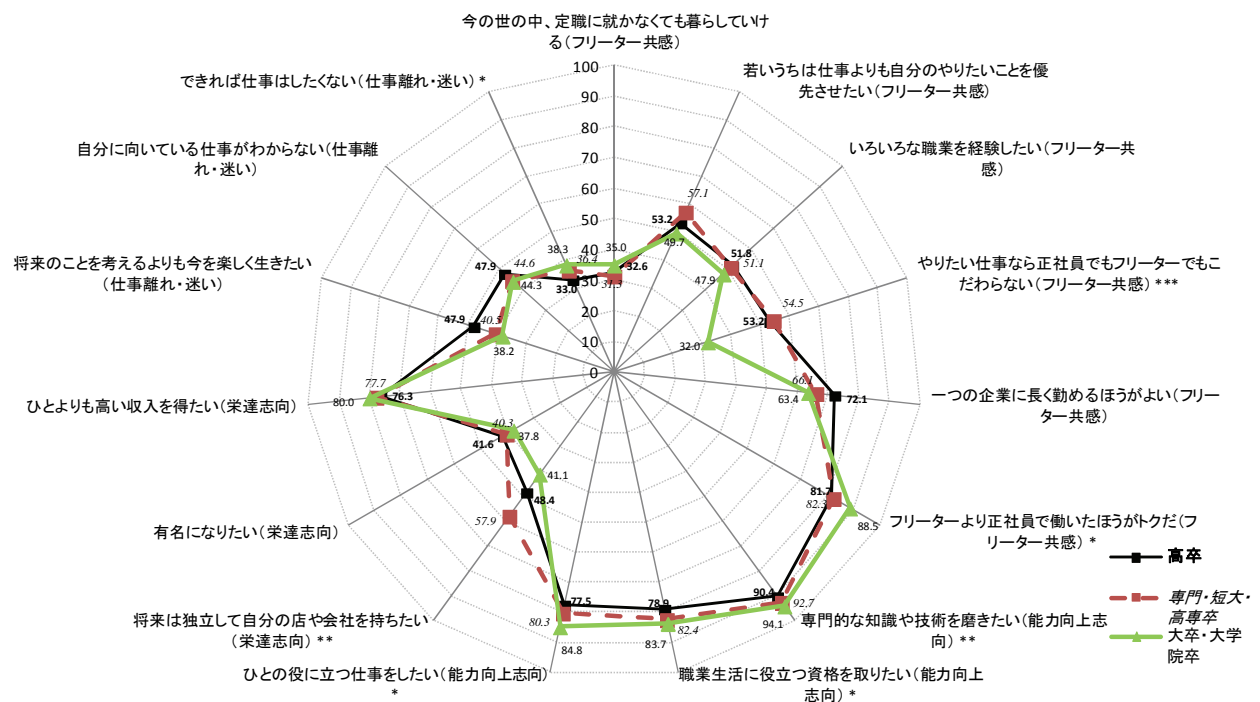
注) 数値は、「そう思う」+「ややそう思う」の全体に対する％

い」以外の5項目において、大卒・大学院卒の者が、最もフリーターのような働き方を支持していない。特に、「やりたい仕事なら正社員でもフリーターでもこだわらない」に対する肯定回答の低さや「フリーターよりも正社員で働いたほうが得だ」に対する肯定回答の高さが目立ち、正社員志向の高さがうかがえる。また、大卒・大学院卒の男性は、「能力向上志向」3項目や「ひとよりも高い収入を得たい」に対する肯定が最も高い。その一方で、「できれば仕事はしたくない」に対する肯定回答が最も高く、職業世界からの離脱志向も垣間見える。

専門・短大・高専卒の男性は、「若いうちは仕事よりもやりたいことを優先させたい」、「やりたい仕事なら正社員でもフリーターでもこだわらない」、「将来は独立して自分の店や会社を持ちたい」に対する肯定回答の割合が、他の学歴の者に比べて高い。

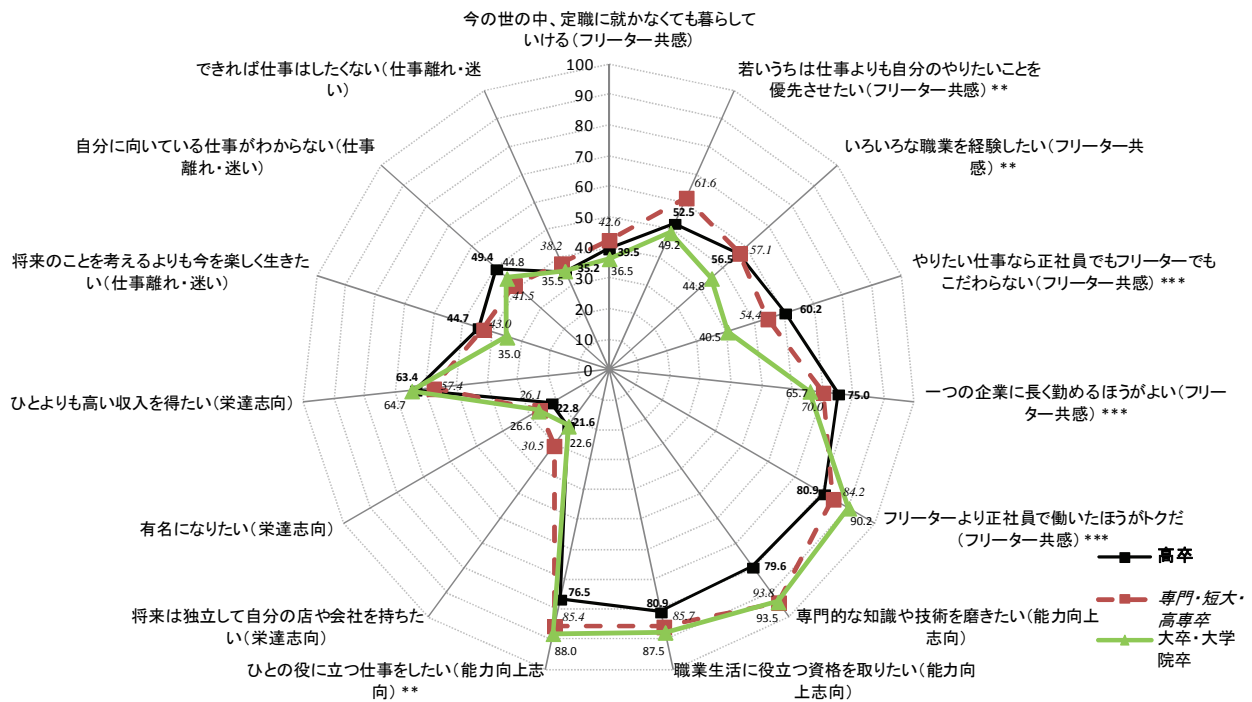
高卒の男性は、「仕事離れ・迷い」のうち、「将来のことを考えるよりも今を楽しく生きたい」や「自分に向いている仕事かわからない」に対する肯定回答の割合が他の学歴の者に比べて高い一方で、「一つの企業に長く勤めるほうがよい」に対する肯定回答の割合が最も高く、「できれば仕事はしたくない」に対する肯定回答の割合が最も低い。このことから、流動的ではない安定的な職業環境で真面目に働く志向をもっている高卒の男性像が見て取れる¹⁴。

図表3-7 学歴別男性の職業意識の分布（「そう思う」＋「ややそう思う」の％）



¹⁴ 一般的に学歴別の離職に関して、学歴が低いほど離職率が高いという説明がされる（いわゆる「七五三現象」）が、ここでの結果は、そうした離職率という指標が示す「実態」と、若者自身の「意識」のずれを示していると言えるかもしれない。

図表 3-8 学歴別女性の職業意識の分布（「そう思う」＋「ややそう思う」の％）



対して、学歴別で女性の職業意識を見たときには（図表 3-8）、全般的には男性と似た傾向（大卒・大学院卒の者の堅実さや「能力向上志向」の高さなど）にあるものの、「フリーター共感」に該当する項目において、高卒女性と専門・短大・高専卒の女性との意識の違いが見られるものがある。例えば、「若いうちは仕事よりもやりたいことを優先したい」や「やりたい仕事なら正社員でもフリーターでもこだわらない」において、男性よりも両者の肯定回答の割合の差が目立つ。また女性は、「能力向上志向」の項目でも、高卒の者が肯定回答の割合が低い。また男性に比べて、「栄達志向」の項目は全般的に肯定回答が低い。

4. キャリア類型：正社員定着、非典型一貫、他形態から正社員、正社員転職

ここでは、第 1 章第 3 節 5. で作成されたキャリア類型のうち、一定のケース数（全体の 10%以上）が確保できる「正社員定着」「非典型一貫」「他形態から正社員」の 3 つと「正社員転職」の計 4 つの類型間の職業意識を見ていく。

図表 3-9 は、男性のキャリア類型別の職業意識の分布である。

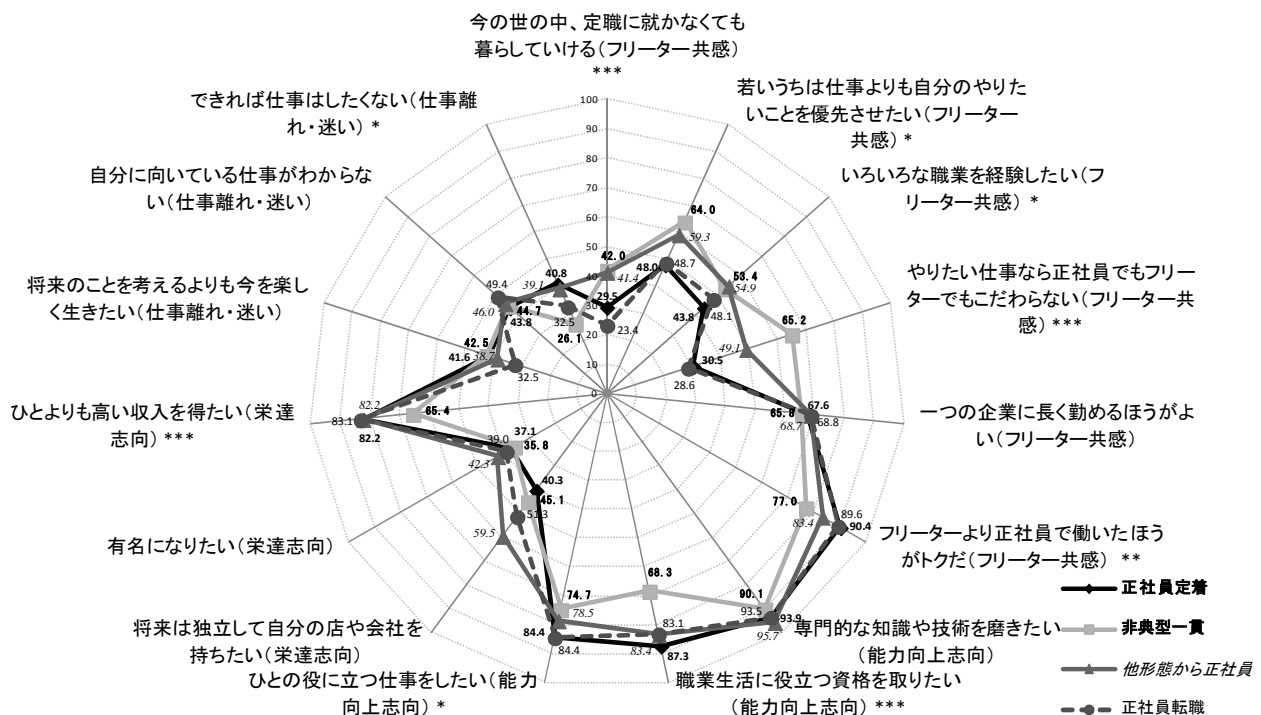
非典型一貫のキャリアの男性は、「フリーター共感」への支持が高く、「能力向上志向」の 3 項目に対する肯定回答の割合が最も低い。また、「栄達志向」の項目のうち「有名になりたい」と「ひとよりも高い収入を得たい」の肯定回答の割合が最も低く、「将来は独立して自分の店や会社を持ちたい」に対する肯定回答の割合も 2 番目に低い。フリーターのような働き方への共感の高さ、能力向上意識や職業アスピレーションの低さが非典型一貫のキャリアの男性の特徴であるものの、「できれば仕事はしたくない」に対する肯定回答の割

合は最も低い。

他形態から正社員へ移行したキャリアの男性は、「能力向上志向」の項目において、その肯定回答の割合が非典型一貫の男性より正社員定着や正社員転職の男性に近いが、「フリーター共感」の項目においては必ずしもそうとは言えない。また、「栄達志向」の項目のうち、日本労働研究機構（2001: 91-93）が＜夢追求型＞フリーターに特徴的であるとした「将来は独立して自分の店や会社を持ちたい」と「有名になりたい」の肯定回答の割合が最も高い。

正社員転職型の男性は、「今の世の中、定職に就かなくても暮らしていける」、「やりたい仕事なら正社員でもフリーターでもこだわらない」、「将来のことを考えるよりも今を楽しく生きたい」に対する肯定回答の割合が最も低く、「ひとの役に立つ仕事をしたい」、「ひとよりも高い収入を得たい」、「自分に向いている仕事が見つからない」に対する肯定回答の割合が最も高い。

図表 3-9 キャリア類型別男性の職業意識の分布
 （「そう思う」＋「ややそう思う」の％）

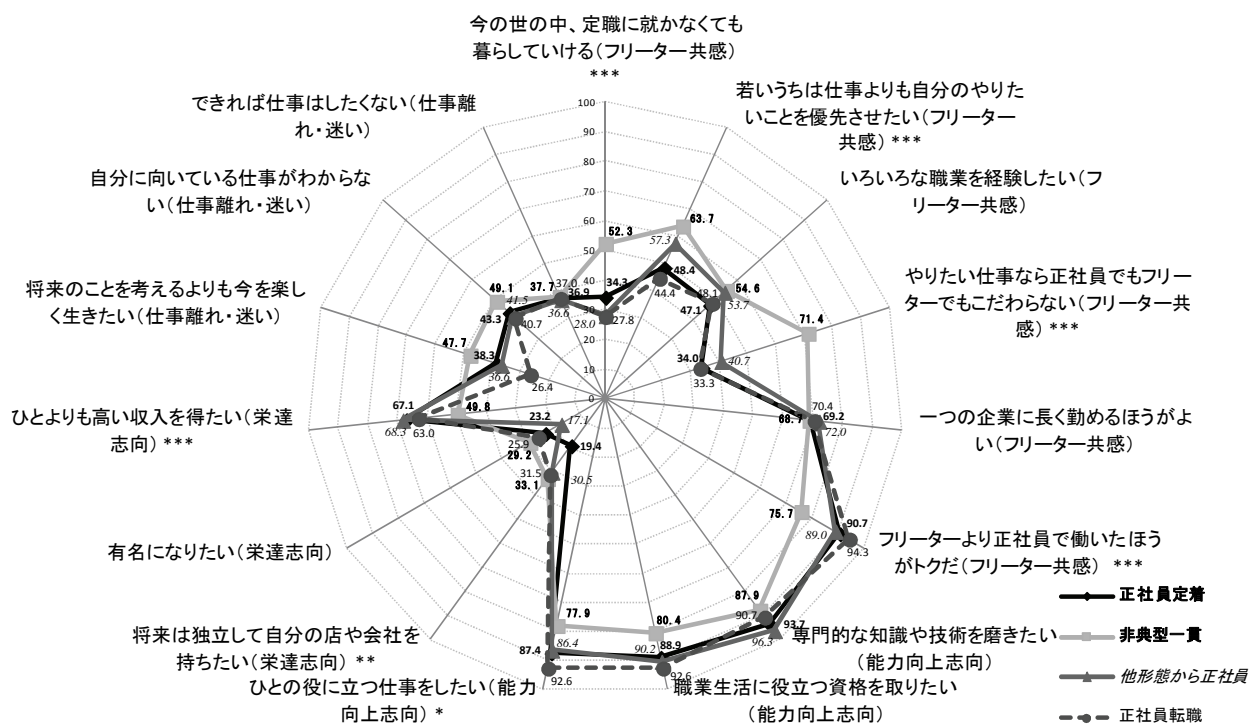


女性のキャリア類型別の職業意識の分布を見ると（図表 3-10）、男性と同様に、非典型一貫のキャリアの女性は、「フリーター共感」への支持が高く（特に、他のキャリア類型に比較して、「今の世の中、定職に就かなくても暮らしていける」と「やりたい仕事なら正社員でもフリーターでもこだわらない」の肯定回答の割合が高い）、「能力向上志向」の 3 項目に対する肯定回答の割合が最も低い。男性と異なるのは、「仕事離れ・迷い」の 3 項目

全てにおいて肯定回答の割合が最も低く、「栄達志向」のうち「将来は独立して自分の店や会社を持ちたい」と「有名になりたい」の肯定回答の割合が最も高いという点である。

正社員転職型の女性においては、「ひとの役に立つ仕事をしたい」が最も肯定回答の割合が高い点は男性と同様だが、「自分に向いている仕事かわからない」が最も肯定回答の割合が低い点は男性と対照的である。

図表 3-10 キャリア類型別女性の職業意識の分布
 (「そう思う」+「ややそう思う」の%)



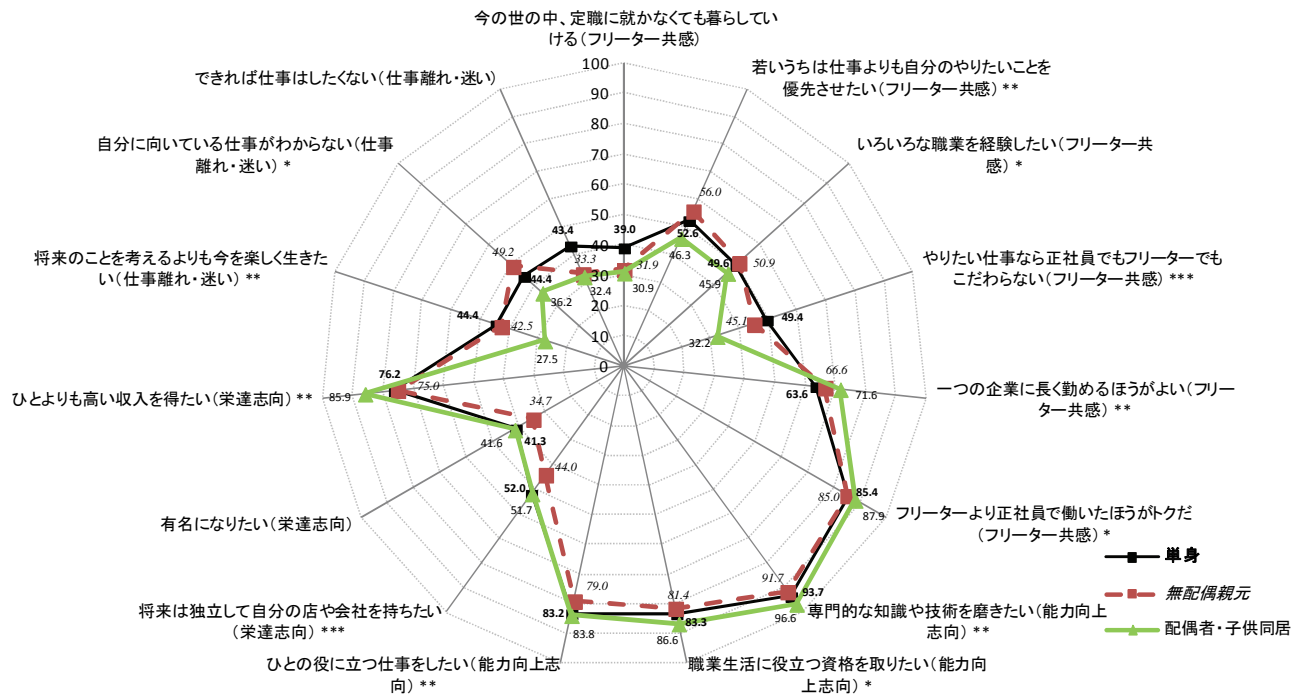
5. 家族形態：単身、無配偶・親元、配偶者・子供同居

家族形態は、前節で説明したとおり、個人の職業意識や就業行動を規定する重要な変数だと考えられる。ここでは、第1章第5節2.)で使用した家族形態の種類のうち、「その他」を除いた「単身」「無配偶・親元」「配偶者・子供同居」別の分布を比較し、職業意識の特徴を検討する¹⁵。

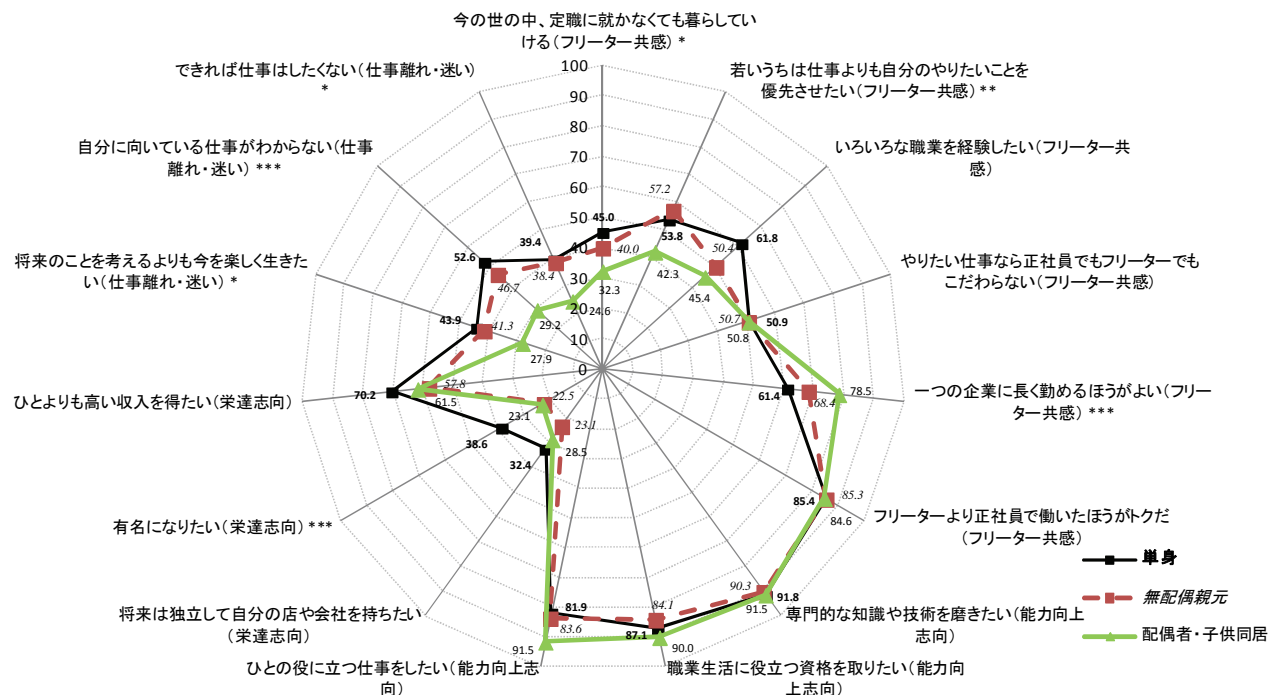
図表 3-11 は、家族形態別の男性の職業意識の分布である。家族形態による意識の分布の違いは全体的には大きくないが、配偶者・子供同居の者は、「フリーター共感」や「仕事離れ・迷い」に該当する項目への肯定が相対的に低く、無配偶・親元の者は、「栄達志向」に該当する項目への肯定が相対的に低い。

¹⁵ なお、男女ともに20歳代前半と20歳代後半に分けて結果を確認したが、その際には、20歳代前半の配偶者・子供同居が他の2つに比べて、かなり特殊な分布になっていた。しかし、これにはケース数の少なさ(男性24ケース、女性35ケース)が少なからず影響していると考えられるため、ここでの説明は省略することにした。

図表 3-1-1 家族形態別男性の職業意識の分布（「そう思う」＋「ややそう思う」の％）



図表 3-1-2 家族形態別女性の職業意識の分布（「そう思う」＋「ややそう思う」の％）



対して女性は、男性よりも家族形態による違いが顕著である。図表 3-1-2 が示すとおり、女性においても、配偶者・子供同居の者が「フリーター共感」や「仕事離れ・迷い」に該当する項目への肯定が相対的に低い、男性よりも結果の開きが大きい。また、配偶

者・子供同居の者が、「一つの企業に長く勤めるほうがよい」や「ひとの役に立つ仕事をしたい」への肯定回答の割合が高いのも特徴的である。さらに女性の分布で特徴的なのは、単身の者が、他の2つの家族形態の者と異なった分布を示す項目があるという点である。例えば、「いろいろな職業を経験したい」「有名になりたい」「ひとよりも高い収入を得たい」等である。「仕事離れ・迷い」に該当する項目や他の安定性に関わる項目に関しては配偶者・子供同居の者が、「栄達志向」に該当する項目や新しい可能性へのチャレンジに関する項目に関しては単身の者が、他の2つの家族形態の者とは異なった職業意識をもっているというのが20歳代女性の特徴である。

6. 第3回調査新設項目：対人関係、一般的信頼感、政治的有効感覚

第3回調査では、第1回調査で用いた15個の職業意識項目に、新たに3つの項目を加えた。まず、近年の労働場面では対人スキルの重要性が高まっていることと、友人関係が若者にとってますます重要なものになっていることがしばしば指摘されるので、こうした実態を把握するために「誰とでもすぐに仲良くなれる」という対人関係に対する自己評価の項目を設置した。

また、日本社会では若年層の労働に関わる政治的関心や参加・連帯が十分ではないと言われるが、そうした局面を理解するために、連帯の基礎となるための信頼の程度の項目として「ほとんどの人は信頼できる」を、政府が行う政治に対する有効感覚の項目として「自分には政府のすることに対して、それを左右する力はない」を、設置した¹⁶。

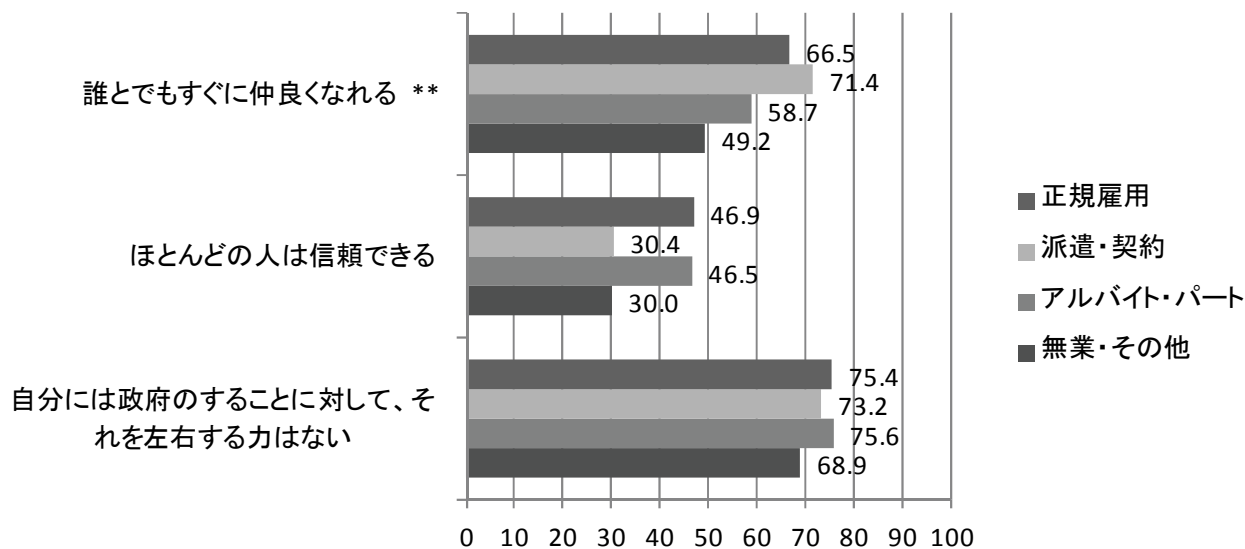
以下、これらの新設項目の分布を男女別に確認する。本節で扱った各カテゴリーのうち、雇用形態ごとで見た際に、分布にその特徴が特に表れていると判断したため、雇用形態別の結果を示す。

男性（図表3-13）は、無業・その他の状態にある者が政治的有効感覚や対人関係自己評価の項目に対する肯定が低く、また、派遣・契約と無業・その他の者が一般的信頼感の項目に対する肯定が低い。

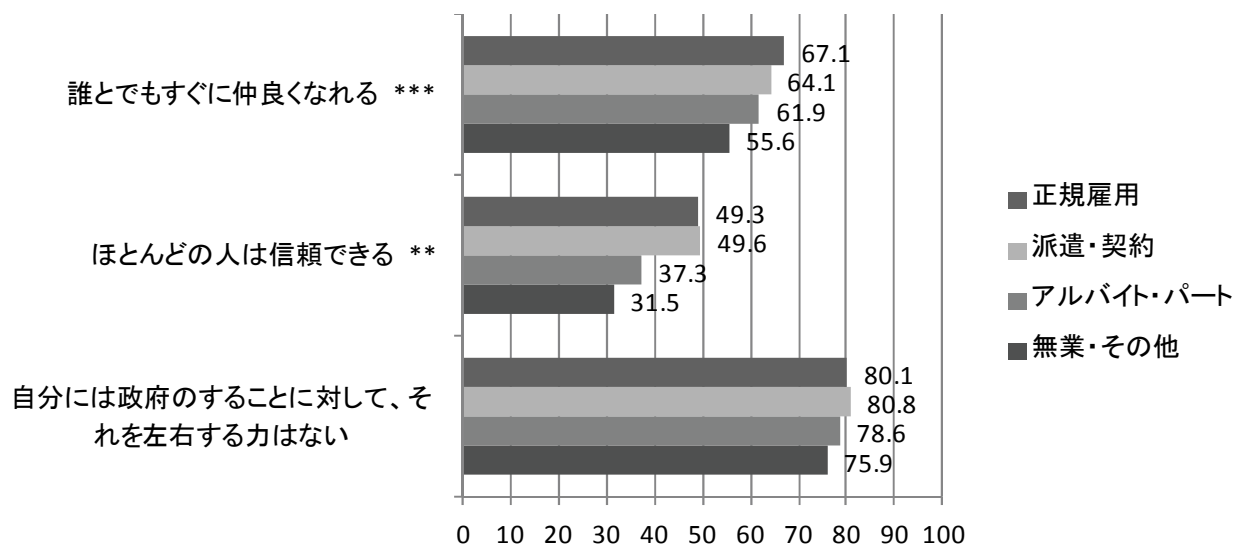
一方女性（図表3-14）は、政治的有効感覚や対人関係自己評価の項目については男性とほぼ同様の傾向を示すが、一般的信頼感の項目については、派遣・契約の者の肯定回答の割合が最も高い。

¹⁶ 第1章第5節6. で分析した社会的問題に関する設問も、同様の関心から設置した。なお、3項目の設置に際しては、青年文化研究会が2007年に実施した調査（2006～2008年度 科学研究費補助金 基盤研究(B)「若者の中間集团的諸活動における新しい市民的参加の形」）を参考にした。

図表 3-13 男性の第3回調査新設項目の分布（「そう思う」＋「ややそう思う」の％）



図表 3-14 女性の第3回調査新設項目の分布（「そう思う」＋「ややそう思う」の％）



第3節 職業意識の2時点比較——2001年20歳代と2011年20歳代

本節では、前節でとりあげた15項目の職業意識について、第1回調査（2001年）と第3回調査（2011年）の2時点で比較を行う¹⁷。まず、1. で2時点における正規雇用と非典型雇用の回答分布を確認し、傾向を概観する。続いて2.～5. では、各項目の回答を得点化（「そう思う」を2点、「ややそう思う」を1点、「あまりそう思わない」を-1点、「そう思わない」を-2点として、相加平均を算出したものを「得点」とする）し、「フリーター共感」「能力向上志向」「栄達志向」「仕事離れ・迷い」の4つの傾向が、2時点間でどのように異なるかを把握していく。

¹⁷ 第2回調査では職業意識について尋ねていないため、3時点の比較はできない。

なお、前節で確認した諸変数のうち、現在の雇用形態、学歴、家族形態について検討するが、第1回調査と第3回調査では調査対象者の抽出方法が異なる¹⁸等の理由から、時点間での直接的な比較の作業は、各カテゴリー内で行っている。

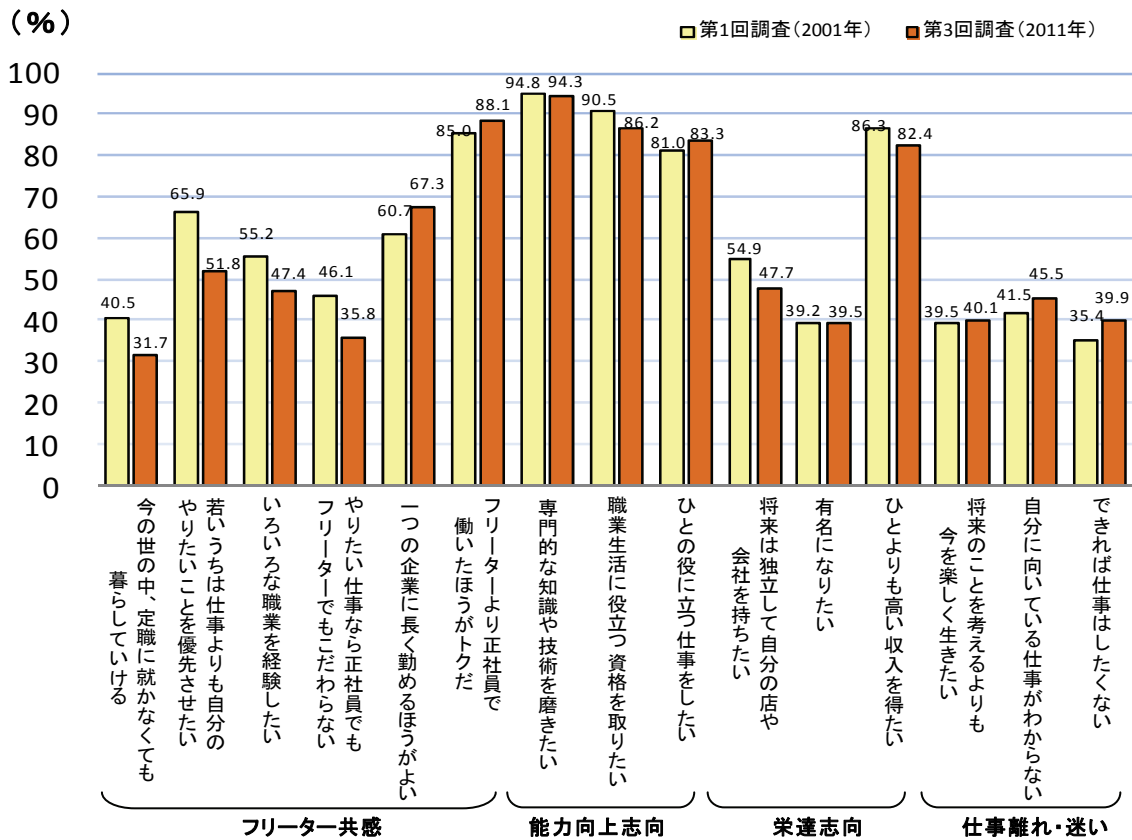
1. 2時点の回答分布の概観（正規雇用と非典型雇用）

詳細な比較に先立って、2時点での回答分布を概観しておきたい。紙幅の都合上、ここでは、正規雇用と非典型雇用についてのみ説明する。図表3-15～図表3-18は、男女それぞれの正規雇用と非典型雇用（「派遣・契約」＋「アルバイト・パート」）の肯定回答（「そう思う」＋「ややそう思う」）の割合である。

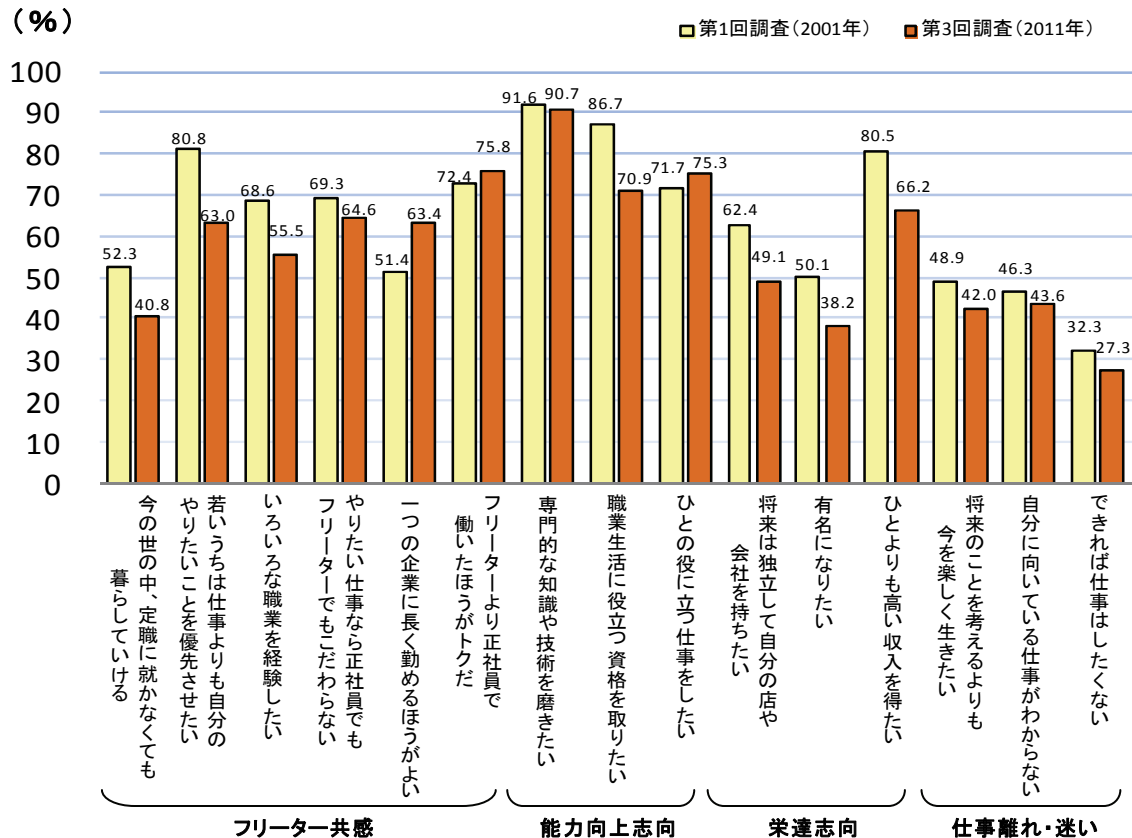
図表3-15～図表3-18いずれにおいても、第3回調査の方がフリーター的な働き方について支持する割合が低い。「能力向上志向」に関しては、男女とも正規雇用では2回の調査で大きな違いはないが、非典型雇用では、第3回調査の方が資格取得への肯定回答の割合が低い（特に図表3-16の男性の非典型雇用では、第1回調査では86.7%だったのに対し、第3回調査では70.9%になっている）。「栄達志向」に関しては、男性の非典型雇用で3項目とも、女性の非典型雇用で「ひとよりも高い収入を得たい」が、第3回調査の方が特に肯定回答の割合が低い。「仕事離れ・迷い」に関しては、男性は、正規雇用が3項目とも第3回調査の方が肯定回答の割合が高く、非典型雇用が3項目とも低い。女性は、正規雇用と非典型雇用ともに、第3回調査の方が「できれば仕事はしたくない」の肯定回答の割合が高い。

¹⁸ 第1回調査では、18～29歳を対象とし、フリーターとフリーター以外（区別は回答者の自己認識による）をそれぞれ1000標本（計2000標本）集めている。詳しくは、序章および日本労働研究機構（2001: 10-12）を参照。なお、本節の分析で第1回調査のデータを使用する際には、18～19歳および学生・主婦は除外した。

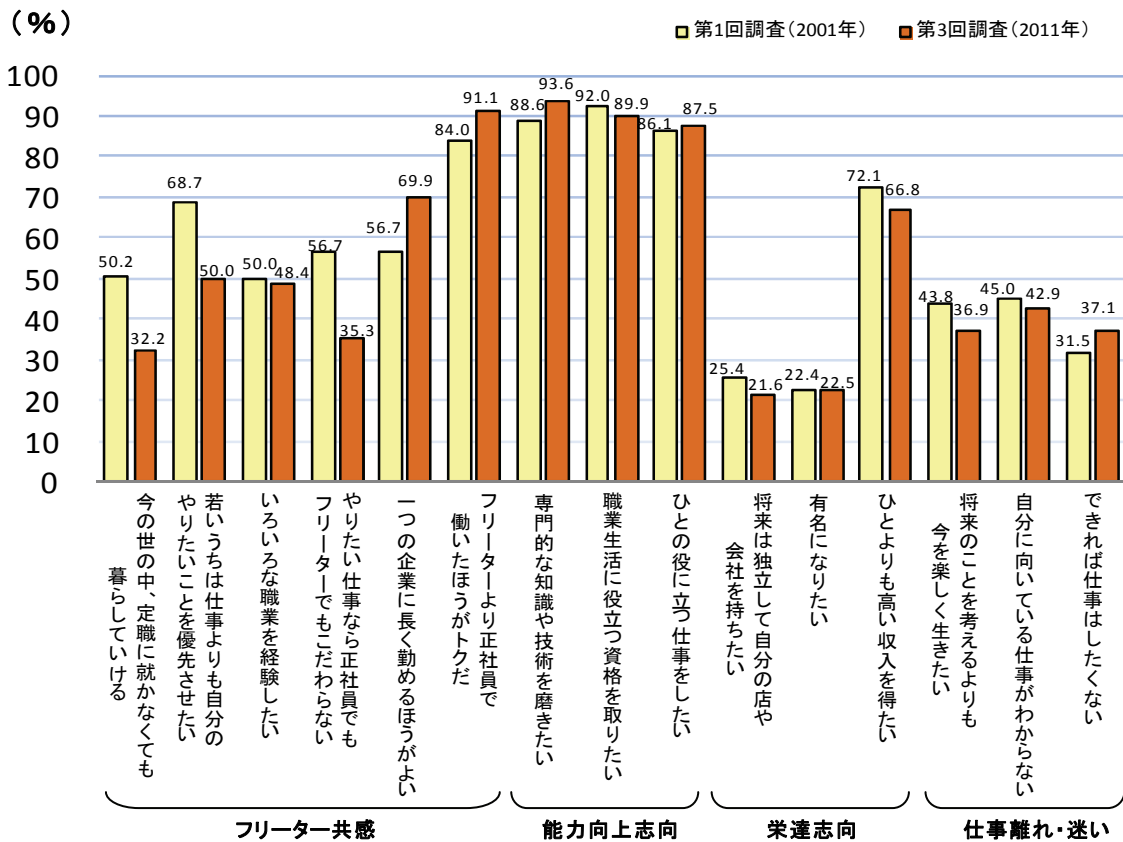
図表 3-15 2時点の職業意識の肯定回答の割合 (20歳代男性・正規雇用)



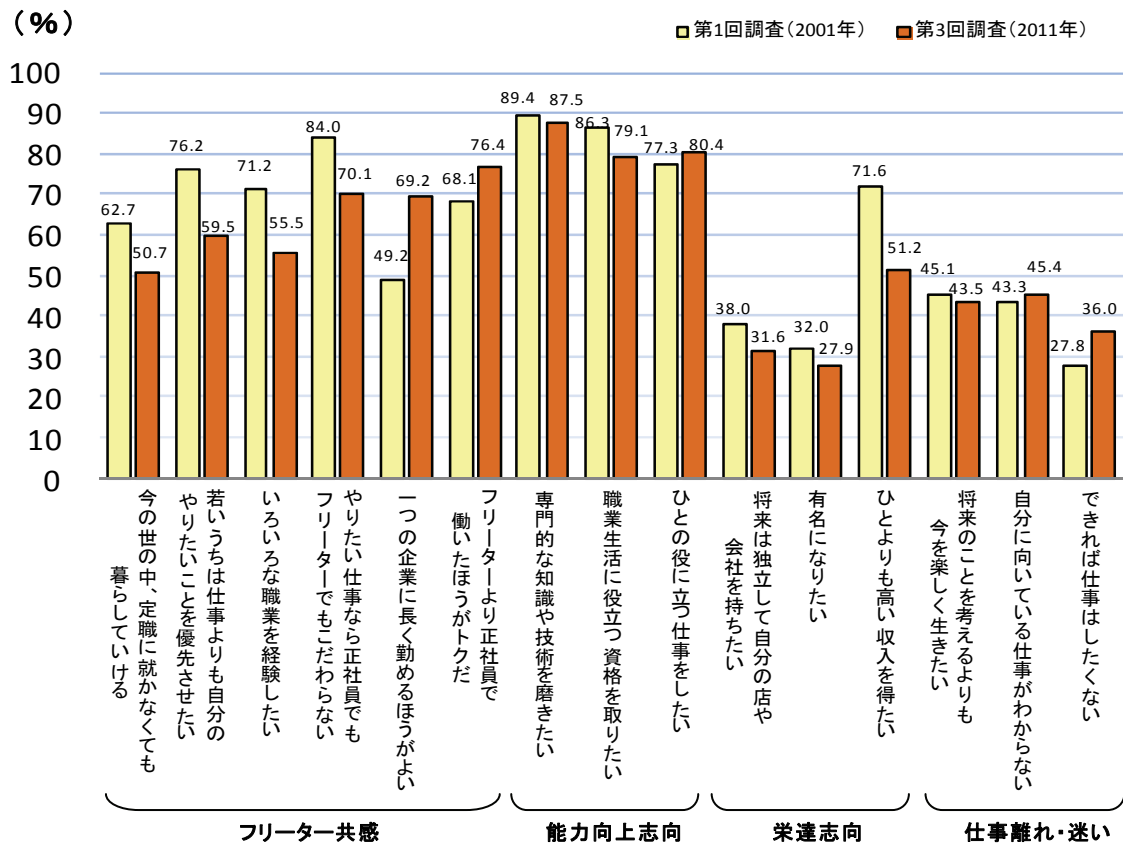
図表 3-16 2時点の職業意識の肯定回答の割合 (20歳代男性・非典型雇用)



図表3-17 2時点の職業意識の肯定回答の割合 (20歳代女性・正規雇用)



図表3-18 2時点の職業意識の肯定回答の割合 (20歳代女性・非典型雇用)



2. フリーター共感

図表3-19～3-36は、「フリーター共感」の6項目それぞれについて、雇用形態、学歴、家族形態ごとにその結果を示したものである。

「今の世の中、定職に就かなくても暮らしていける」「若いうちは仕事よりも自分のやりたいことを優先させたい」「いろいろな職業を経験したい」「やりたい仕事なら正社員でもフリーターでもこだわらない」の4項目（図表3-19～3-30）は、多くのカテゴリで、第3回調査の方が得点が低い。例えば、「今の世の中、定職に就かなくても暮らしていける」において（図表3-19～3-21）、第1回調査時には（得点0を中間として考えると）肯定に分布するカテゴリも否定に分布するカテゴリも存在していたが、第3回調査時にはほとんどのカテゴリで否定に回答が分布している¹⁹。

また、「一つの企業に長く勤めるほうがよい」「フリーターより正社員で働いたほうがトクだ」の2項目（図表3-31～3-36）は、多くのカテゴリで、第3回調査の方が得点が低い。ただし、「一つの企業に長く勤めるほうがよい」においては、中卒、高校中退の女性（図表3-32）と配偶者・子供同居の男性（図表3-33）が、「フリーターより正社員で働いたほうがトクだ」においては、派遣・契約の男性（図表3-34）と中卒、高校中退の女性（図表3-35）が、第1回調査よりも第3回調査の方が得点が低い。

2時点で特に得点差が大きなものをあげると、「若いうちは仕事よりも自分のやりたいことを優先させたい」における無業・その他の男性（図表3-22、1.06から-0.18へ1.24減少）や単身の男性（図表3-24、0.94から0.12へ0.82減少）、「やりたい仕事なら正社員でもフリーターでもこだわらない」における単身の女性（図表3-30、0.97から0.08へ0.89減少）、「一つの企業に長く勤めるほうがよい」における無業・その他の男性（図表3-31、-0.14から0.72へ0.86増加）や高等教育中退の男性（図表3-32、-0.12から0.72へ0.84増加）、などとなる。

雇用形態、学歴、家族形態それぞれにおけるカテゴリ間の意識の差は、全体として、第1回調査時よりも第3回調査の方が小さい²⁰。男性と女性の意識の差に関しては、項目や諸変数によって差が開いたものと縮まったものがあるので、一概に変化を指摘することは難しい。また、雇用形態、学歴、家族形態のうち、どれでもっともカテゴリ間の意識の差が変化したかという点も一概には指摘しづらいが、しいて言えば、家族形態で意識の差が縮まったと言える。

以上をまとめると、「フリーター共感」の項目について、2時点の間を変化と捉えるならば、やりたいこと志向の減退や安定性を求める志向の高まりを指摘できる。

¹⁹ 例外は女性の高等教育中退（図表3-20）だが、それも0.04である。

²⁰ ただし、学歴別の「フリーターより正社員で働いたほうがトクだ」は、中卒、高校中退の女性が否定の方向に変化している（図表3-35）ので、第3回調査の方が大きい。

雇用形態別

- 男性 正規雇用
- 男性 アルバイト・パート
- 女性 正規雇用
- 女性 アルバイト・パート
- 男性 派遣・契約
- 女性 派遣・契約
- 男性 無業・その他
- 女性 無業・その他

学歴別

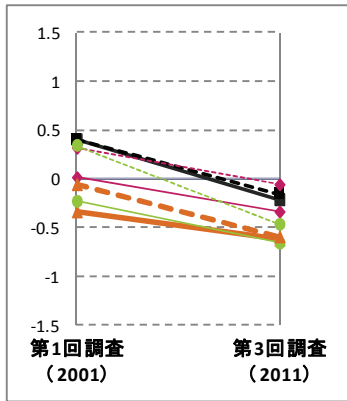
- 男性 高卒
- 男性 大学・大学院卒
- 男性 専門・短大・高専卒
- 女性 高卒
- 女性 大学・大学院卒
- 女性 専門・短大・高専卒
- 男性 中卒、高校中退
- 女性 中卒、高校中退
- 男性 高等教育中退
- 女性 高等教育中退

家族形態別

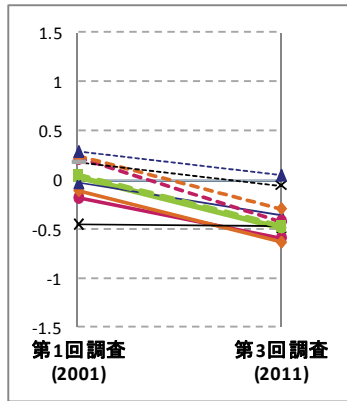
- 男性 単身
- 男性 配偶者・子供同居
- 女性 単身
- 女性 配偶者・子供同居
- 男性 無配偶・親元
- 女性 無配偶・親元

今の世の中、定職に就かなくても暮らしていける

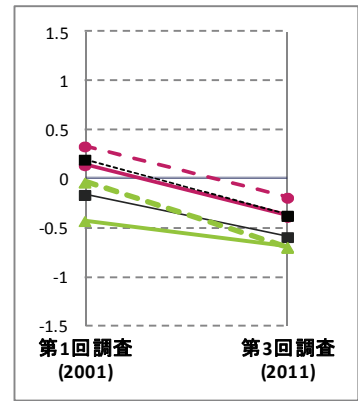
図表 3-19



図表 3-20

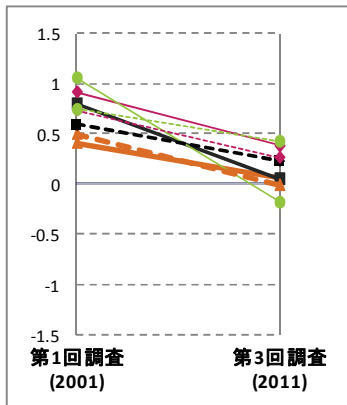


図表 3-21

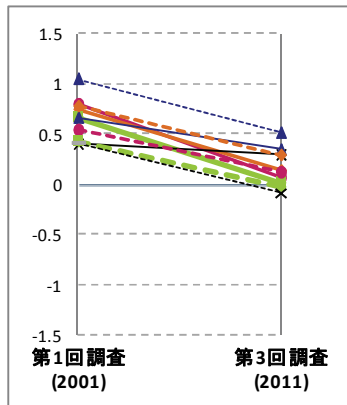


若いうちは仕事よりも自分のやりたいことを優先させたい

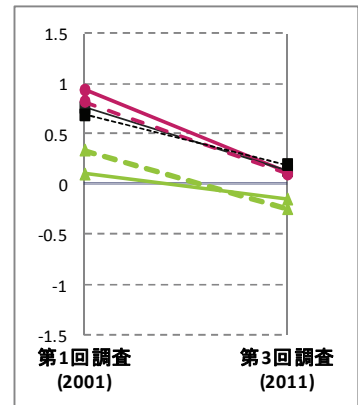
図表 3-22



図表 3-23

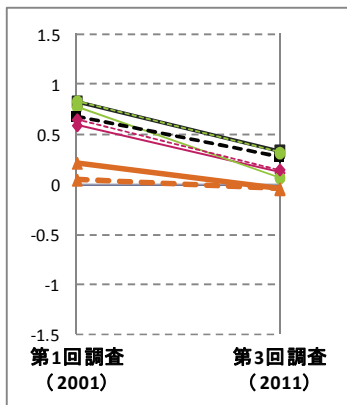


図表 3-24

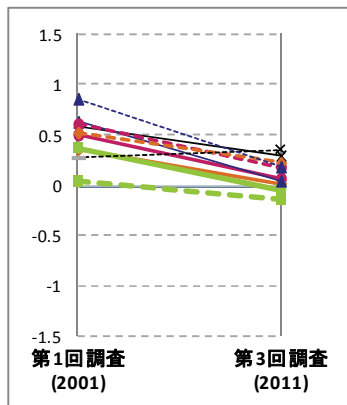


いろいろな職業を経験したい

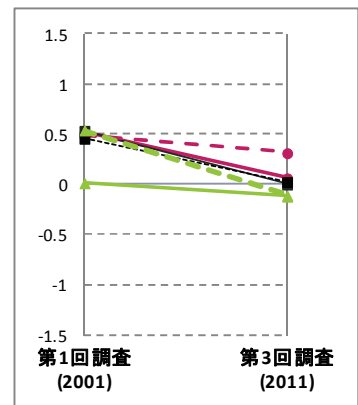
図表 3-25



図表 3-26



図表 3-27



雇用形態別

- 男性 正規雇用
- 男性 アルバイト・パート
- 女性 正規雇用
- 女性 アルバイト・パート
- 男性 派遣・契約
- 女性 派遣・契約
- 男性 無業・その他
- 女性 無業・その他

学歴別

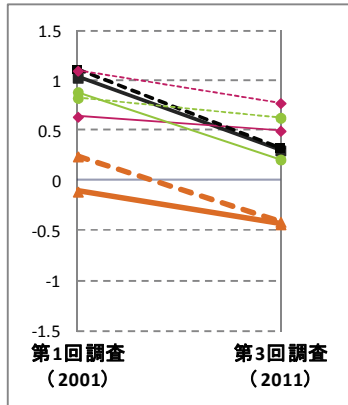
- 男性 高卒
- 男性 大学・大学院卒
- 男性 専門・短大・高専卒
- 女性 高卒
- 女性 大学・大学院卒
- 女性 専門・短大・高専卒
- 男性 中卒、高校中退
- 女性 中卒、高校中退
- 男性 高等教育中退
- 女性 高等教育中退

家族形態別

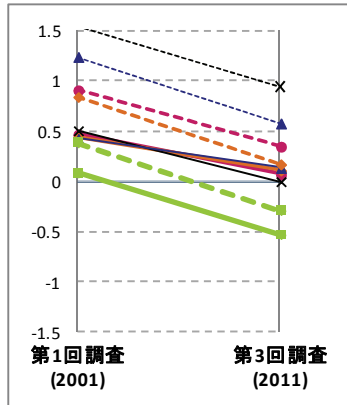
- 男性 単身
- 男性 配偶者・子供同居
- 女性 単身
- 女性 配偶者・子供同居
- 男性 無配偶・親元
- 女性 無配偶・親元

やりたい仕事なら正社員でもフリーターでもこだわらない

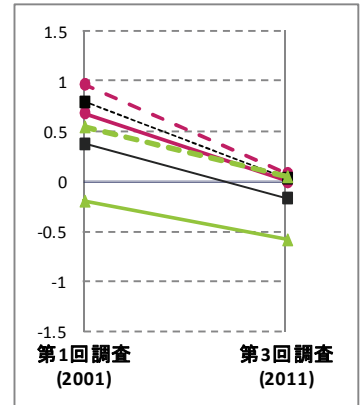
図表 3-28



図表 3-29

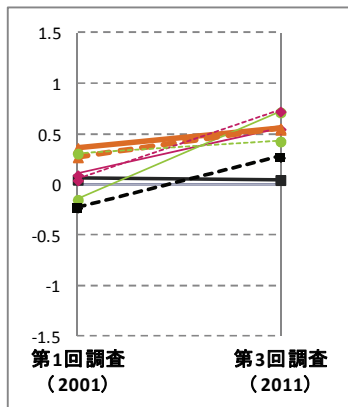


図表 3-30

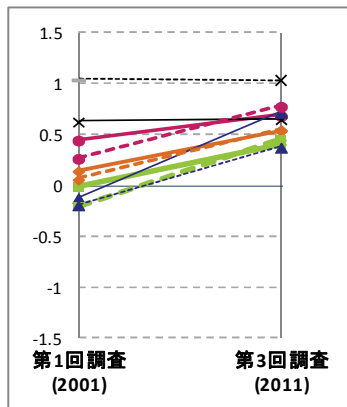


一つの企業に長く勤めるほうがよい

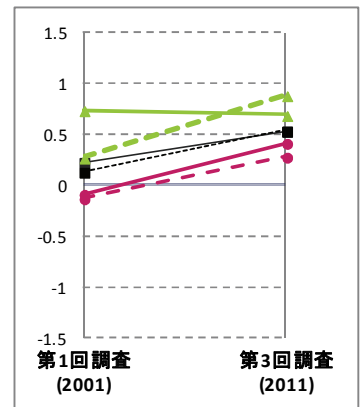
図表 3-31



図表 3-32

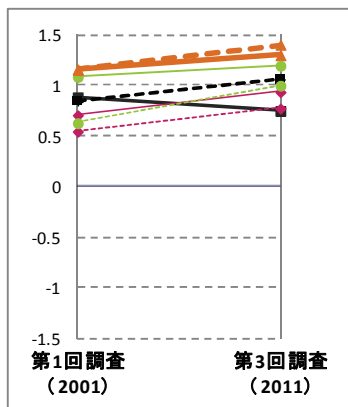


図表 3-33

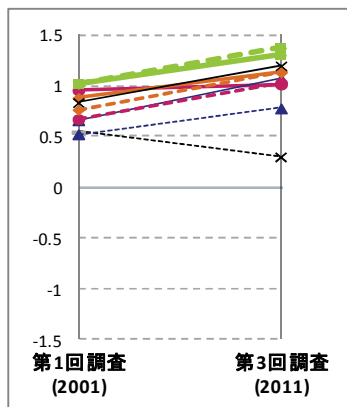


フリーターより正社員で働いたほうがトクだ

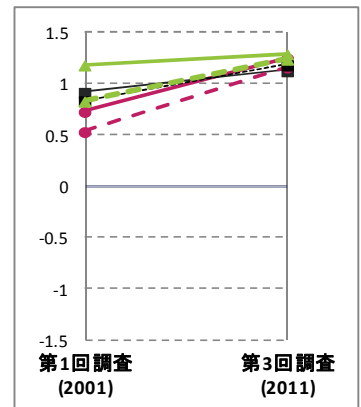
図表 3-34



図表 3-35



図表 3-36



3. 能力向上志向

図表 3-37～3-45 は、「能力向上志向」の 3 項目それぞれについて、雇用形態、学歴、家族形態ごとにその結果を示したものである。

例外は多少あるものの、全体的に第 1 回調査よりも第 3 回調査の方が、「専門的な知識や技術を磨きたい」（図表 3-37～3-39）と「職業生活に役立つ資格を取りたい」（図表 3-40～3-42）は得点が低く²¹、「ひとの役に立つ仕事をしたい」（図表 3-43～3-45）は得点が高い傾向にある。ただし、そもそも 3 項目とも両時点で、（0 を中間と考えると）回答は肯定的である。

同時に、こうした全体的な傾向とは逆に変化しているものがあることも指摘しておきたい。例えば、「専門的な知識や技術を磨きたい」における中卒、高校中退の女性（図表 3-38、0.77 から 0.91 へ 0.14 増加）、「職業生活に役立つ資格を取りたい」における高等教育中退の男性（図表 3-41、0.98 から 1.12 へ 0.14 増加）、「ひとの役に立つ仕事をしたい」における中卒、高校中退の男性（図表 3-44、0.78 から 0.61 へ 0.17 減少）、などである。

2 時点で特に得点差が大きなものあげると、「専門的な知識や技術を磨きたい」における無業・その他の男性（図表 3-37、1.54 から 0.98 へ 0.56 減少）、「職業生活に役立つ資格を取りたい」における派遣・契約の男性（図表 3-40、1.00 から 0.45 へ 0.55 減少）、アルバイト・パートの男性（図表 3-40、1.19 から 0.73 へ 0.47 減少）、中卒、高校中退の男性（図表 3-41、1.30 から 0.89 へ 0.41 減少）、高等教育中退の女性（図表 3-41、1.52 から 0.78 へ 0.75 減少）、などとなる。

雇用形態、学歴、家族形態それぞれにおけるカテゴリ間で、第 1 回調査と第 3 回調査のどちらで意識の差があるかは一概には言い難い。男性と女性の意識の差を比較した際も同様である。雇用形態、学歴、家族形態のうち、どれでもっともカテゴリ間の意識の差が変化したかという点については、3 つとも大きな変化はないが、「職業生活に役立つ資格を取りたい」において、雇用形態の各カテゴリ間の意識の差が第 1 回調査よりも第 3 回調査の方が大きい（図表 3-40）。

以上をまとめると、「能力向上志向」の項目について、2 時点の間を変化と捉えるならば、専門的な知識・技術の獲得や資格取得を求める志向の若干の減退や、ひとの役に立つ仕事をしたい志向の高まりを指摘できる。

²¹ ただし、「専門的な知識や技術を磨きたい」を家族形態別に見た際には（図表 3-39）、無配偶・親元の男女以外、僅かではあるが、第 1 回調査よりも第 3 回調査の方が、得点が高い。

雇用形態別

- 男性 正規雇用
- 男性 派遣・契約
- 男性 アルバイト・パート
- 男性 無業・その他
- 女性 正規雇用
- 女性 派遣・契約
- 女性 アルバイト・パート
- 女性 無業・その他

学歴別

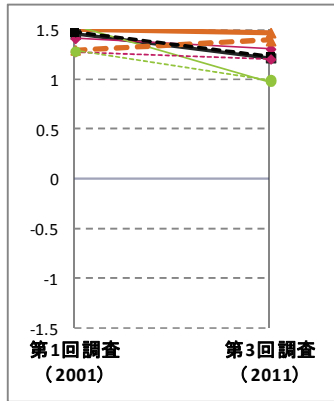
- 男性 高卒
- 男性 大学・大学院卒
- 男性 専門・短大・高専卒
- 男性 中卒・高校中退
- 男性 高等教育中退
- 女性 高卒
- 女性 大学・大学院卒
- 女性 専門・短大・高専卒
- 女性 中卒・高校中退
- 女性 高等教育中退

家族形態別

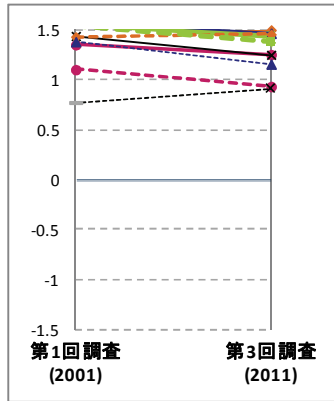
- 男性 単身
- 男性 配偶者・子供同居
- 男性 無配偶・親元
- 女性 単身
- 女性 配偶者・子供同居
- 女性 無配偶・親元

専門的な知識や技術を磨きたい

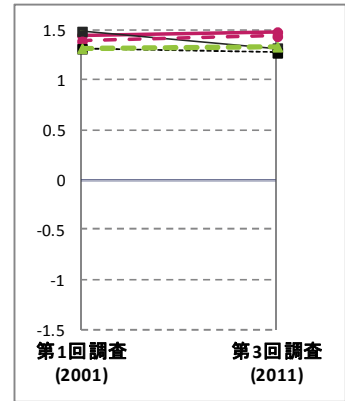
図表 3-37



図表 3-38

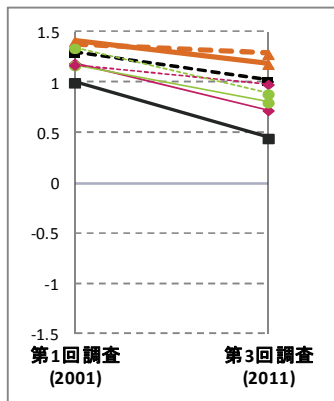


図表 3-39

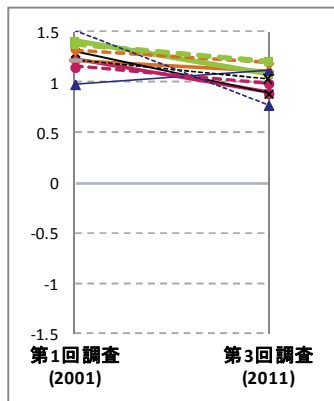


職業生活に役立つ資格を取りたい

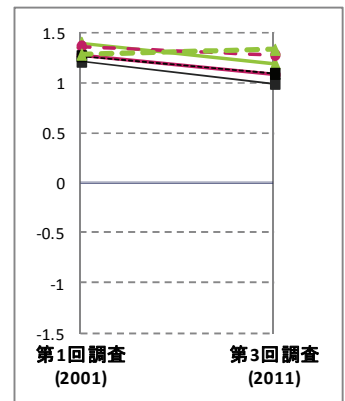
図表 3-40



図表 3-41

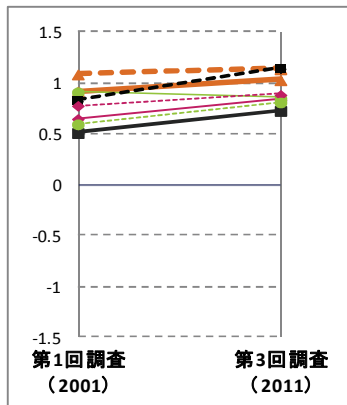


図表 3-42

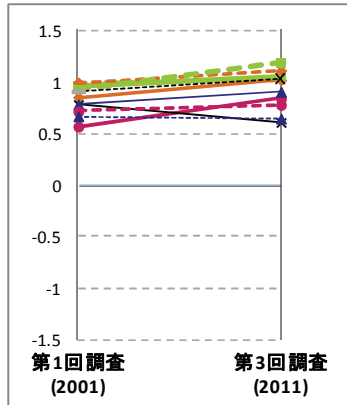


ひとの役に立つ仕事をしたい

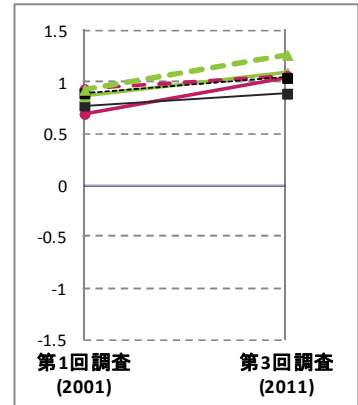
図表 3-43



図表 3-44



図表 3-45



4. 栄達志向

図表3-46～3-54は、「栄達志向」の3項目それぞれについて、雇用形態、学歴、家族形態ごとにその結果を示したものである。

第1回調査よりも第3回調査の方が、3項目ともおおむね得点が低い傾向にある²²。ただし、こうした全体的な傾向とは逆に変化している例外もある。「有名になりたい」における単身の女性（図表3-51、-0.66から-0.39へ0.27増加）、無業・その他の女性（図表3-49、-0.89から-0.65へ0.24増加）、派遣・契約の男性（図表3-49、-0.60から-0.50へ0.10増加）、大学・大学院卒の女性（図表3-50、-0.74から-0.73へ0.01増加）、および「ひとよりも高い収入を得たい」における大学・大学院卒の女性（図表3-53、0.39から0.41へ0.02増加）である。

2時点で特に得点差が大きなものをあげると、「将来は独立して自分の店や会社を持ちたい」における無業・その他の男性（図表3-46、0.63から-0.31へ0.94減少）、「有名になりたい」における無業・その他の男性（図表3-49、0.31から-0.62へ0.94減少）や中卒、高校中退の男性（図表3-50、0.34から-0.55へ0.90減少）、「ひとよりも高い収入を得たい」における無業・その他の男性（図表3-52、1.17から0.44へ0.73減少）や中卒、高校中退の女性（図表3-53、1.09から0.03へ1.06減少）、などとなる。

雇用形態、学歴、家族形態それぞれにおけるカテゴリ間で、第1回調査と第3回調査のどちらで意識の差があるかは明確には言い難いが、敢えて言えば、「将来は独立して自分の店や会社を持ちたい」（図表3-46～3-48）と「有名になりたい」（図表3-49～3-51）は第1回調査の方が、「ひとよりも高い収入を得たい」（図表3-52～3-54）は第3回調査の方が、雇用形態、学歴、家族形態それぞれにおいて、カテゴリ間の意識の差がある。

男性と女性の意識の差が縮まったカテゴリは、3項目における無業・その他の男女（図表3-46、図表3-49、図表3-52）、「将来は独立して自分の店や会社を持ちたい」と「有名になりたい」における中卒の男女、高校中退の男女（図表3-47、図表3-50）、「有名になりたい」と「ひとよりも高い収入を得たい」における単身の男女（図表3-51、図表3-54）、などである。差が逆に広がったカテゴリは、「将来は独立して自分の店や会社を持ちたい」における高等教育中退の男女（図表3-47）、「ひとよりも高い収入を得たい」における専門・短大・高専卒の男女、中卒、高校中退の男女、高等教育中退の男女（図表3-53）、などである。

雇用形態、学歴、家族形態のうち、どれでもっともカテゴリ間の意識の差が変化したかという点については、雇用形態で（特に「将来は独立して自分の店や会社を持ちたい」と「有名になりたい」において）意識の差が縮まったと言える。

²² 特に、中卒・高等教育中退の男性においては、職業意識全15項目のうち、変化が大きかった上位3つの項目が全て「栄達志向」に該当する項目である点は注目に値する。

雇用形態別

- 男性 正規雇用
- 男性 派遣・契約
- 男性 アルバイト・パート
- 男性 無業・その他
- 女性 正規雇用
- 女性 派遣・契約
- 女性 アルバイト・パート
- 女性 無業・その他

学歴別

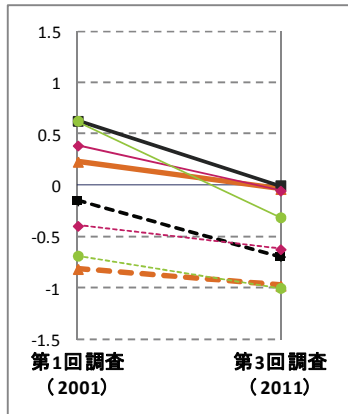
- 男性 高卒
- 男性 専門・短大・高専卒
- 男性 大学・大学院卒
- ×— 男性 中卒・高校中退
- 男性 高等教育中退
- 女性 高卒
- 女性 専門・短大・高専卒
- 女性 大学・大学院卒
- ×— 女性 中卒・高校中退
- 女性 高等教育中退

家族形態別

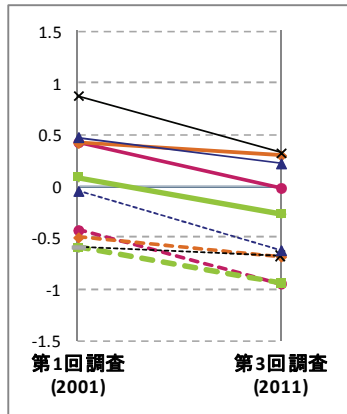
- 男性 単身
- 男性 無配偶・親元
- 男性 配偶者・子供同居
- 女性 単身
- 女性 無配偶・親元
- 女性 配偶者・子供同居

将来は独立して自分の店や会社を持ちたい

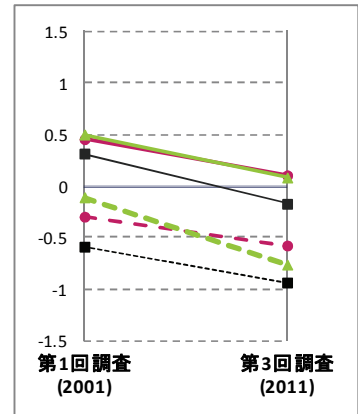
図表 3-46



図表 3-47

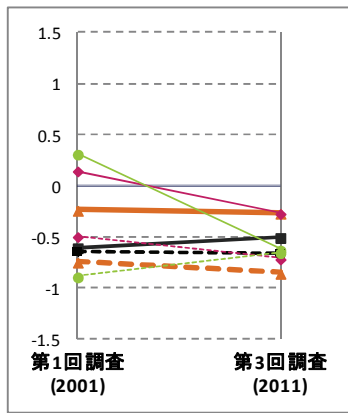


図表 3-48

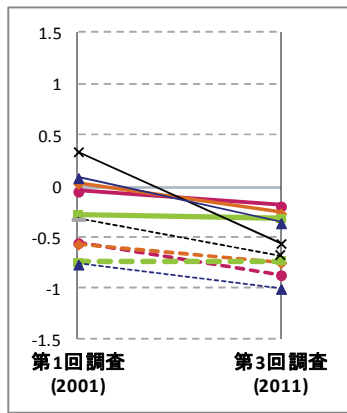


有名になりたい

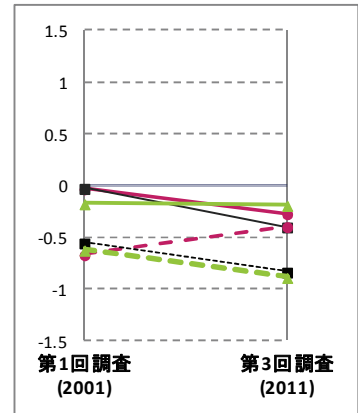
図表 3-49



図表 3-50

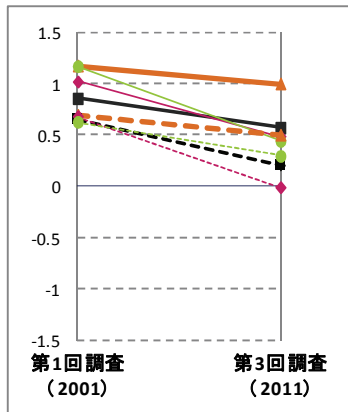


図表 3-51

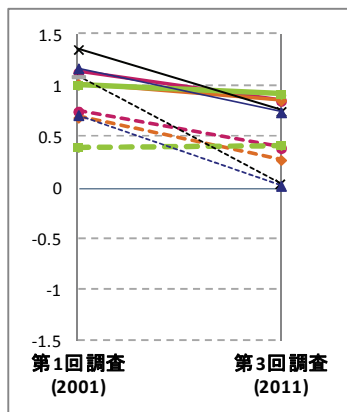


ひとよりも高い収入を得たい

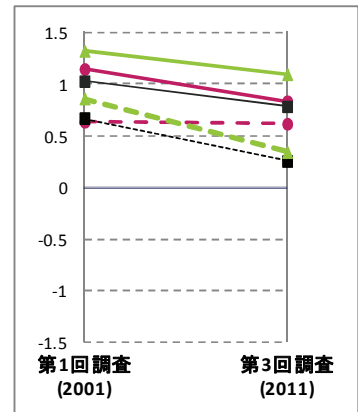
図表 3-52



図表 3-53



図表 3-54



以上をまとめると、「栄達志向」の項目について、2時点の間を変化と捉えるならば、独立志向、有名願望やひとよりも高い収入を得ることへの希望は減少傾向にある。現在の20歳代の職業アスピレーションは全体的に低下しており、野心的に何かをすることに対して冷めた見方をしているのかもしれない。

5. 仕事離れ・迷い

図表3-55～3-63は、「仕事離れ・迷い」の3項目それぞれについて、雇用形態、学歴、家族形態ごとにその結果を示したものである。

例外がいくつかあるものの、全体的に第1回調査よりも第3回調査の方が、「将来のことを考えるよりも今を楽しく生きたい」（図表3-55～3-57）は得点が低く、「自分に向いている仕事かわからない」（図表3-58～3-60）と「できれば仕事はしたくない」（図表3-61～3-63）は得点が高い傾向にある。

ただし、例外も少なからずある。その中で、第1回調査と第3回調査の得点差が大きなものは、第1回調査よりも第3回調査の方が得点が低い、「自分に向いている仕事かわからない」における派遣・契約の男性（図表3-58、0.03から-0.55へ0.58減少）、中卒、高校中退の男性（図表3-59、0.08から-0.13へ0.21減少）および中卒、高校中退の女性（図表3-59、0.05から-0.18へ0.22減少）、配偶者・子供同居の女性（図表3-60、-0.15から-0.62へ0.46減少）、「できれば仕事はしたくない」における派遣・契約の男性（図表3-61、-0.54から-0.98へ0.44減少）、などである。

2時点で特に得点差が大きなものをあげると、「将来のことを考えるよりも今を楽しく生きたい」における無業・その他の女性（図表3-55、0.43から-0.19へ0.61減少）や高等教育中退の女性（図表3-56、0.29から-0.20へ0.49減少）、「自分に向いている仕事かわからない」における派遣・契約の男性（図表3-58、0.03から-0.55へ0.58減少）や高等教育中退の男性（図表3-59、-0.61から0.01へ0.62増加）、「できれば仕事はしたくない」における高等教育中退の男性（図表3-62、-0.64から-0.14へ0.51増加）、などとなる。

雇用形態、学歴、家族形態それぞれにおけるカテゴリー間で、第1回調査と第3回調査のどちらで意識の差があるかは一概には言い難いが、「できれば仕事はしたくない」の項目に関して（図表3-61～3-63）、および家族形態において（図表3-57、図表3-60、図表3-63）は、第3回調査の方がカテゴリー間の意識の差がある。

第1回調査と第3回調査で男性と女性の意識の差を比較した際には、「将来のことを考えるよりも今を楽しく生きたい」における無業・その他の男女（図表3-55）や高等教育中退の男女（図表3-56）、「自分に向いている仕事かわからない」における高等教育中退の男女の間の意識の差が特に縮まっている。逆に、「自分に向いている仕事かわからない」における無業・その他の男女（図表3-58）、「できれば仕事はしたくない」におけるアルバイト・パートの男女（図表3-61）や中卒、高校中退の男女（図表3-62）の間の意識の

雇用形態別

学歴別

家族形態別

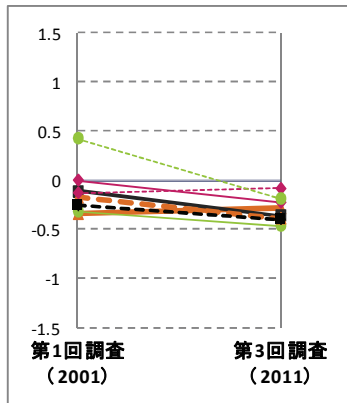
- 男性 正規雇用
- 男性 派遣・契約
- 男性 アルバイト・パート
- 男性 無業・その他
- 女性 正規雇用
- 女性 派遣・契約
- 女性 アルバイト・パート
- 女性 無業・その他

- 男性 高卒
- 男性 大学・大学院卒
- 男性 高等教育中退
- 男性 専門・短大・高専卒
- ×— 男性 中卒・高校中退
- 女性 高卒
- 女性 大学・大学院卒
- 女性 高等教育中退
- 女性 専門・短大・高専卒
- ×— 女性 中卒・高校中退

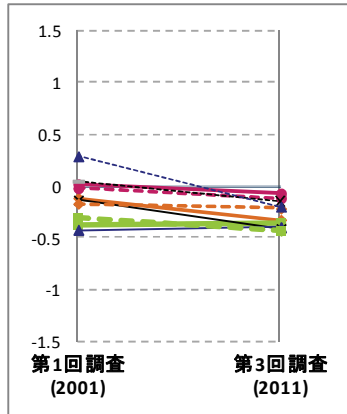
- 男性 単身
- 男性 無配偶・親元
- 男性 配偶者・子供同居
- 女性 単身
- 女性 無配偶・親元
- 女性 配偶者・子供同居

将来のことを考えるよりも今を楽しく生きたい

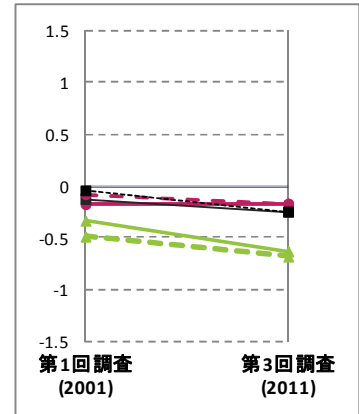
図表 3-55



図表 3-56

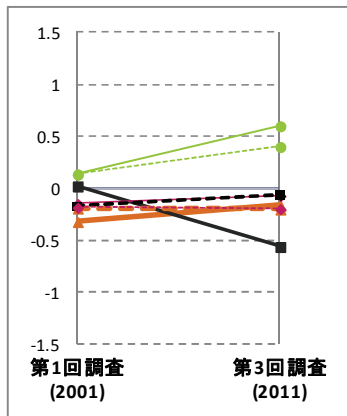


図表 3-57

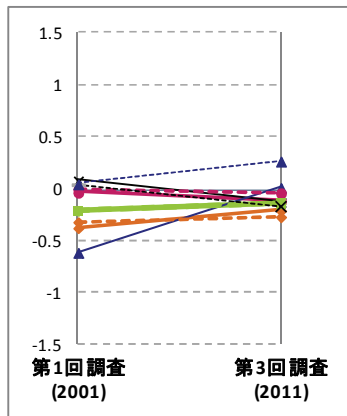


自分に向いている仕事が見つからない

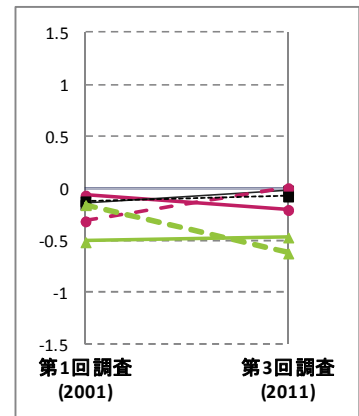
図表 3-58



図表 3-59

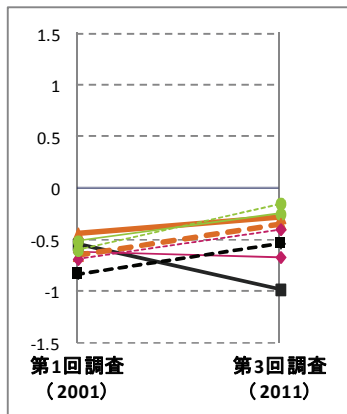


図表 3-60

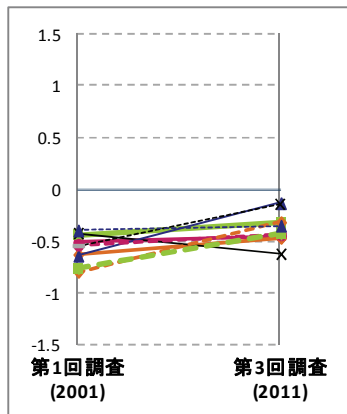


できれば仕事はしたくない

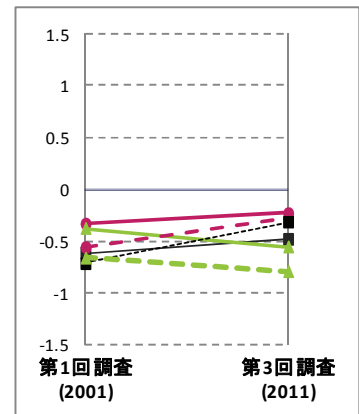
図表 3-61



図表 3-62



図表 3-63



差が特に広がっている。

雇用形態、学歴、家族形態のうち、どれでもっともカテゴリー間の意識の差が変化したかという点については、雇用形態における各カテゴリー間の意識の差が他の2つに比べて特に変化したと言える（図表3-55、図表3-58、図表3-61。「将来のことを考えるよりも今を楽しく生きたい」に関しては意識の差が小さくなり、他の2項目に関しては大きくなった）。

以上をまとめると、「仕事離れ・迷い」の項目について2時点の間を変化と捉えるならば、現在の20歳代が今を楽しく生きて将来のことを考えなくなっている、とは言えないだろう。そして、派遣・契約の男性や高等教育中退の男性等の一部を除いて、第1回調査時に比べて、自分に向いている仕事が見つからないという迷いをよりいっそう抱え、職業世界からの離脱志向が高まっている。

第4節 まとめ

本章では、第3回若者のワークスタイル調査の職業意識の項目の分布を性別、年齢層、現在の雇用形態、学歴、キャリア類型、家族形態ごとに確認したうえで、第1回調査と第3回調査の比較を行った。明らかになった知見は以下のように要約できる。

- ①第3回調査で東京都内に住む1981年～1991年生まれの者の全体の傾向を見た際、仮に経済的な不利や就労の不安定さと、フリーターに象徴されるような働き方の自由さが天秤にかけられるとして、後者が支持されるとは言いがたい。専門的な知識や技術を磨くこと、資格取得といった能力向上に対する志向は8～9割の者に支持されている。「ひとよりも高い収入を得たい」という経済的な向上への支持は7割弱存在するものの、独立や有名になることに対する支持は、全体の4割を下回っている。全体の3～4割の者が「できれば仕事はしたくない」などの仕事離れの意識をもっており、また、4割を超えた者が自らの仕事についての迷いを抱いている。
- ②第3回調査で男性と女性を比較した際、その分布で特に違いが目立ったのは「ひとよりも高い収入を得たい」などの「栄達志向」に該当する項目で、男性の方が女性に比して肯定の割合が高い。
- ③第3回調査で男女別に20歳代前半層と後半層を比較すると、男性では、正社員志向や能力向上について、後半層の方が支持しているという傾向を確認できた。一方女性においては、前半層の方が、典型的な就労行動に縛られないフリーターのようなあり方への支持・共感が存在しており、「自分に向いている仕事が見つからない」「できれば仕事はしたくない」「有名になりたい」といった項目への肯定も高いことが確認できた。
- ④第3回調査で男女別に雇用形態間の職業意識を比較した際、男性に関して、正規雇用は堅実・安定的な意識をもちつつも迷いや仕事離れ志向があり、派遣・契約は自分の働き方に

対する明確なビジョンや既存の働き方・制度から自由な志向をもつ傾向にある。また、アルバイト・パートは、やりたいことを優先する考え方や雇用形態にこだわらない考え方をもち、無業・その他の者は、刹那的な生き方や自由な働き方を肯定せず、迷いのなかで、できれば仕事はしたくないという意識をもっている傾向が確認できた。一方女性に関しては、正規雇用が安定的な雇用を支持する堅実な志向をもっている点は男性と共通しているが、派遣・契約の「能力向上志向」や「仕事離れ・迷い」の項目に対する肯定回答の割合が他の雇用形態に比べて低いとは言い切れない点などが、男性と異なった。

⑤第3回調査で男女別に学歴間の職業意識を比較した際、男性に関して、大卒・大学院卒は、フリーターのような働き方を支持せず正社員志向が高い一方で、できれば仕事はしたくないという意識も垣間見える。また、専門・短大・高専卒はやりたいこと志向や独立志向が強く、高卒は刹那的な生き方への支持や迷いを抱えながらも、安定的な職業環境で真面目に働く志向ももっているといった傾向が確認できた。一方女性に関しては、全般的には男性と似た傾向があるものの、「フリーター共感」に該当する項目において、高卒と専門・短大・高専卒の間に意識の違いが見られるという点などが、男性と異なった。

⑥第3回調査で男女別にキャリア類型間の職業意識を比較した際、男性の特徴は、非典型一貫型が「できれば仕事はしたくない」に対する肯定が最も低いこと、他形態から正社員型が「夢追求型」フリーターに特徴的な項目（「将来は独立して自分の店や会社を持ちたい」「有名になりたい」）に対する肯定が高いこと、などだった。一方女性に関しては、男性と対照的に正社員転職型が「自分に向いている仕事かわからない」の肯定が最も低い点などが特徴的だった。

⑦第3回調査で男女別に家族形態間の職業意識を比較した際、女性の方が男性よりも家族形態による違いが顕著だった。配偶者・子供同居の女性は他の家族形態の女性に比べて、「仕事離れ・迷い」の項目への支持が低く、安定性に関わる項目への支持が高かった。また、単身の女性は他の家族形態の女性に比べて、「栄達志向」の項目や新しい可能性へのチャレンジに関する項目への支持が高かった。

⑧第3回調査で新設された3項目を男女別に雇用形態間で比較した際、男女ともに、無業・その他が政治的有効感覚や対人関係自己評価の項目に対する肯定が低い。政治的有効感覚に関しては、男性ではアルバイト・パートが、女性では派遣・契約が、正規雇用と同程度に高かった。

⑨「フリーター共感」に該当する各項目を時点比較すると、第1回調査より第3回調査の方が、「今の世の中、定職に就かなくても暮らしていける」「若いうちは仕事よりも自分のやりたいことを優先させたい」「いろいろな職業を経験したい」「やりたい仕事なら正社員でもフリーターでもこだわらない」に関しては賛成が減少、「一つの企業に長く勤めるほうがよい」「フリーターより正社員で働いたほうがトクだ」に関しては賛成が増加する傾向が見出された。2001年から、やりたいこと志向は減退し、安定性を求める志向が高まった。

- ⑩「能力向上志向」に該当する3項目は、2時点とも肯定の回答傾向を示しているが、第1回調査より第3回調査の方が、「専門的な知識や技術を磨きたい」と「職業生活に役立つ資格を取りたい」に関しては賛成が減少、「ひとの役に立つ仕事をしたい」に関しては賛成が増加する傾向が見出された。
- ⑪「栄達志向」に該当する各項目を時点比較すると、例外がいくつかあるものの、第1回調査よりも第3回調査の方が、「将来は独立して自分の店や会社を持ちたい」「有名になりたい」「ひとよりも高い収入を得たい」の3項目ともおおむね賛成が減少する傾向が見出された。
- ⑫「仕事離れ・迷い」に該当する各項目を時点比較すると、第1回調査よりも第3回調査の方が、「将来のことを考えるよりも今を楽しく生きたい」に関しては賛成が減少、「自分に向いている仕事かわからない」と「できれば仕事はしたくない」に関しては賛成が増加する傾向が見出された。今を楽しく生きて将来のことを考えなくなっているとは言えず、2001年から、一部の若者を除いて、自分に向いている仕事かわからないという迷いをより抱えるようになり、職業世界からの離脱志向が高まった。

以上、本章の検討から見てきたのは、2001年に比べて堅実な意識を表明する20歳代の若者の姿だった²³。下村（2002: 99）は、「フリーターにとっては労働の対価として賃金を得るような合理的な経済行動はそれほど問題ではない。フリーターの職業意識を理解しようとするのであれば、そんなことより『自由』『経験』『出会い』が大切だと思えなければならない」と述べたが、そうしたフリーター層さえも、合理的で堅実な意識をもちつつあるのが2011年現在と言えるのではないか。今回の分析で用いた2時点のデータは対象者の抽出方法が異なるので、変化について積極的に述べることには特に慎重でなければならないが、そういった点を考慮しても、「大人」の側が危惧する若者に特有の自由な働き方は不利であるという認識が若者の間でも高まり、「大人」が勧める合理的で堅実な働き方への支持に落ち着いてきていると言いきそうである。その意味では、かつてのようなフリーター的な意識は後景化したのかもしれない。「フリーターを支える意識は広く若者に共有されている」（日本労働研究機構 2001: 17）（下村 2002: 90）とされた2000年代前半。それに対して、2011年現在、若者の間に広く共有されている職業意識があるという点は変わらないが、共有されている意識の内実は、かつて広く共有されていたフリーターを支える意識が安定性を覆すほどのものではなくなったというものである。

²³ 本章から見てきた、やりたいこと志向の減退や意識の「堅実化」いった傾向は、2001年から2011年の間に
出されたいくつかの先行研究の知見と重なる。例えば、久木元（2010: 142）は、「将来への不安がクローズア
ップされる中で、やりたいこと志向が後景化しやすいものになっていると思われる」と述べている。また、関
西圏の大学生への継続調査を行っている片桐（2009: 151-172）は、男子学生の手堅く生きる志向が2002年の
調査では1997年に比べ大きく上昇したが、2007年調査時には若干減少したというデータを提示し、その生活
目標が就職状況に影響されていると論じている。

さらに、この若者の意識の「堅実化」の裏には、職業アスピレーションの低下や職業世界からの離脱志向も垣間見える。また、この意識の「堅実化」は、キャリア形成に結びつく具体的な行動が支持されていることと必ずしも同義ではない。安定を優先し、「堅実化」が若者たちの目標となる一方で、それを達成するための手段の具体性が不在であると感じさせる現状は、まさにアノミー（Merton 1957=1961: 121-178）であり、こうした状況に対して労働行政としては、実現可能性や具体性を伴った対応が求められる。

フリーター離脱の資源となりうる専門知識や資格の取得に対する若年者の意欲に応えるための一つの支援として、かつて、職業能力開発の機会の提供を日本労働研究機構（2001: 27）は提案していた。しかし、そうした意欲自体の低下の兆しも見える今日、資格や専門知識に対して具体的なイメージをもつための教育の機会を提供するなど、自ら能力を向上させ、本人にあったキャリア形成の道筋を選択することに結びつくための支援にもより一層力を入れることが望まれる。そのためには、行われる支援が若者に届くための具体性を伴ったものか、支援の場で若者を前にして継続的に問い直していくことが、支援する側にも必要だと考えられる。

なお、第1章でも説明しているが、20歳代を対象とした本調査とは別に、30歳代を対象とした調査が2011年7～9月に実施されている。本章の分析で得られた知見は、この30歳代の分析においても妥当するか。本章では十分に検討できなかった、年齢段階や世代・コーホートといった観点を盛り込み、別途分析が必要である。

文献

- 江上節子，1991，「データが語る若者の労働観——企業の意識改革は時間短縮から」『企業と人材』552: 5-9.
- 本田由紀，2002，「ジェンダーという観点から見たフリーター」小杉礼子編『自由の代償／フリーター——現代若者の就業意識と行動』労働政策研究・研修機構，149-174.
- 堀田千秋，1991，「今日の若者にみる職業意識の特質と問題」『労働時報』44(4): 16-19.
- 亀山俊朗，2006，「フリーターの労働観——若者の労働観は未熟か」太郎丸博編『フリーターとニートの社会学』世界思想社，144-167.
- 片桐新自，2009，『不安定社会の中の若者たち——大学生調査から見るこの20年』世界思想社.
- 片瀬一男・元治恵子，2008，「進路意識はどのように変容したのか——ジェンダー・トラックの弛緩？」海野道郎・片瀬一男編『＜失われた時代＞の高校生の意識』有斐閣，93-118.
- 久木元真吾，2010，『『やりたいこと』の現在』小谷敏・土井隆義・芳賀学・浅野智彦編『若者の現在 労働』日本図書センター，117-148.
- Merton, R. K., [1949] 1957, *Social Theory and Social Structure*, Revised Edition., New York: The Free Press. (=1961, 森東吾ほか訳『社会理論と社会構造』みすず書房.)

- 村松幹子，2005，「若者のライフスタイルと職業意識」矢島正見・耳塚寛明編著『第二版 変わる若者と職業世界——トランジッションの社会学』学文社，79-92.
- 日本労働研究機構，2000，『フリーターの意識と実態——97人へのヒアリング結果より』.
- ，2001，『大都市の若者の就業行動と意識——広がるフリーター経験と共感』.
- 佐藤博樹ほか，1991，「現代の若者意識と企業の対応を探る」『労働時報』44(4): 4-15.
- 下村英雄，2002，「フリーターの職業意識とその形成過程——『やりたいこと』志向の虚実」小杉礼子編『自由の代償／フリーター——現代若者の就業意識と行動』労働政策研究・研修機構，75-99.

参考 有効ケース数一覧

男性 第3回調査(2011年)	男性全体		非典型雇用				専門・大学・中卒、					他形態			無配 配偶	元 親 子	同居 居				
	20歳代 前半	20歳代 後半	正規 雇用	アルバイト			専門・ 短大・ 大学院 卒	大学・ 大学院 卒	中卒、 高校中 退	高等教 育中退	正社員 定着	非典型 一貫 社員	から正 社員 転職	正社員 転職				単身	元	子	同居
				派遣・ 契約	パート	無業・ その他															
今の世の中、定職に就かなくても暮らしていける	422	605	688	56	172	61	218	233	429	56	73	410	162	162	77	269	527	149			
若いうちは仕事よりも自分のやりたいことを優先させたい	421	603	687	56	171	61	218	231	429	55	73	410	161	162	76	268	527	147			
いろいろな職業を経験したい	422	602	686	56	171	61	218	233	428	55	73	409	161	162	77	268	528	148			
やりたい仕事なら正社員でもフリーターでもこだわらない	421	605	689	56	170	61	218	233	428	56	73	410	161	163	77	269	526	149			
一つの企業に長く勤めるほうがよい	421	605	689	56	171	61	219	233	429	55	72	410	161	163	77	269	527	148			
フリーターより正社員で働いたほうがトクだ	420	605	687	56	171	61	219	232	427	56	73	408	161	163	77	268	526	149			
専門的な知識や技術を磨きたい	421	604	688	55	172	61	218	233	427	56	73	409	162	163	77	268	527	149			
職業生活に役立つ資格を取りたい	421	606	689	56	171	61	218	233	429	56	73	410	161	163	77	269	527	149			
ひとの役に立つ仕事をしたい	422	604	688	56	171	61	218	233	428	56	73	409	162	163	77	268	528	148			
将来は独立して自分の店や会社を持ちたい	421	604	687	56	172	61	219	233	426	56	73	409	162	163	76	269	527	147			
有名になりたい	422	606	689	56	172	61	219	233	429	56	73	410	162	163	77	269	528	149			
ひとよりも高い収入を得たい	422	606	689	56	172	61	219	233	429	56	73	410	162	163	77	269	528	149			
将来のことを考えるよりも今を楽しく生きたい	420	604	688	56	170	61	219	232	427	56	73	409	160	163	77	266	527	149			
自分に向いている仕事かわからない	420	605	688	56	171	61	219	233	427	56	72	409	161	163	77	268	526	149			
できれば仕事はしたくない	419	602	685	56	171	60	218	231	426	56	73	409	161	161	77	267	525	148			
誰とでもすぐに仲良くなれる	421	605	687	56	172	61	219	232	428	56	73	408	162	163	77	269	526	149			
ほとんどの人は信頼できる	422	604	689	56	172	60	219	233	427	56	73	410	162	163	77	268	528	149			
自分には政府のすることに対して、それを左右する力はない	420	606	687	56	172	61	219	233	428	55	73	409	162	162	77	268	528	149			

女性 第3回調査(2011年)	男性全体		非典型雇用				専門・大学・中卒、					他形態			無配 配偶	元 親 子	同居 居				
	20歳代 前半	20歳代 後半	正規 雇用	アルバイト			専門・ 短大・ 大学院 卒	大学・ 大学院 卒	中卒、 高校中 退	高等教 育中退	正社員 定着	非典型 一貫 社員	から正 社員 転職	正社員 転職				単身	元	子	同居
				派遣・ 契約	パート	無業・ その他															
今の世の中、定職に就かなくても暮らしていける	526	501	562	131	252	54	162	357	417	34	45	397	281	82	54	171	640	130			
若いうちは仕事よりも自分のやりたいことを優先させたい	526	501	562	131	252	54	162	357	417	34	45	397	281	82	54	171	640	130			
いろいろな職業を経験したい	525	500	562	131	251	54	161	357	417	34	44	397	280	82	54	170	639	130			
やりたい仕事なら正社員でもフリーターでもこだわらない	524	500	561	131	250	54	161	355	417	34	45	397	280	81	54	171	637	130			
一つの企業に長く勤めるほうがよい	525	500	561	131	252	53	160	357	417	34	45	396	281	82	54	171	639	130			
フリーターより正社員で働いたほうがトクだ	524	501	561	131	251	54	162	355	417	34	45	397	280	82	53	171	639	130			
専門的な知識や技術を磨きたい	524	501	560	131	252	54	162	356	416	34	45	395	281	82	54	170	639	130			
職業生活に役立つ資格を取りたい	526	501	562	131	252	54	162	357	417	34	45	397	281	82	54	171	640	130			
ひとの役に立つ仕事をしたい	525	501	561	131	252	54	162	357	417	33	45	397	281	81	54	171	639	130			
将来は独立して自分の店や会社を持ちたい	522	501	561	131	249	54	162	354	416	34	45	396	278	82	54	170	637	130			
有名になりたい	525	501	561	131	252	54	162	356	417	34	45	396	281	82	54	171	640	130			
ひとよりも高い収入を得たい	525	500	560	131	252	54	161	357	416	34	45	395	281	82	54	171	638	130			
将来のことを考えるよりも今を楽しく生きたい	525	500	561	131	251	54	161	356	417	34	45	397	281	82	53	171	640	129			
自分に向いている仕事かわからない	526	501	562	131	252	54	162	357	417	34	45	397	281	82	54	171	640	130			
できれば仕事はしたくない	525	501	561	131	252	54	162	356	417	34	45	396	281	82	54	170	640	130			
誰とでもすぐに仲良くなれる	526	501	562	131	252	54	162	357	417	34	45	397	281	82	54	171	640	130			
ほとんどの人は信頼できる	526	501	562	131	252	54	162	357	417	34	45	397	281	82	54	171	640	130			
自分には政府のすることに対して、それを左右する力はない	525	498	559	130	252	54	162	355	415	34	45	396	280	80	54	171	637	129			

男性 第1回調査(2001年)	非典型雇用				専門・大学・中卒、					無配 配偶	親 子	同居 居			
	正規 雇用	派遣・ 契約	パート	無業・ その他	専門・ 短大・ 大学院 卒	大学・ 大学院 卒	中卒、 高校中 退	高等教 育中退	単身				元	子	同居
今の世の中、定職に就かなくても暮らしていける	306	35	372	35	254	191	197	73	59	187	433	122			
若いうちは仕事よりも自分のやりたいことを優先させたい	305	35	371	35	252	191	197	73	59	186	433	122			
いろいろな職業を経験したい	306	35	372	35	254	191	197	73	59	187	433	122			
やりたい仕事なら正社員でもフリーターでもこだわらない	306	35	372	35	254	191	197	73	59	187	433	122			
一つの企業に長く勤めるほうがよい	305	35	372	35	254	191	196	73	59	187	432	122			
フリーターより正社員で働いたほうがトクだ	306	35	371	35	253	191	197	73	59	186	433	122			
専門的な知識や技術を磨きたい	306	35	372	35	254	191	197	73	59	187	433	122			
職業生活に役立つ資格を取りたい	306	35	372	35	254	191	197	73	59	187	433	122			
ひとの役に立つ仕事をしたい	306	35	372	35	254	191	197	73	59	187	433	122			
将来は独立して自分の店や会社を持ちたい	306	35	372	35	254	191	197	73	59	187	433	122			
有名になりたい	306	35	372	35	254	191	197	73	59	187	433	122			
ひとよりも高い収入を得たい	306	35	371	35	253	191	197	73	59	186	433	122			
将来のことを考えるよりも今を楽しく生きたい	306	35	372	35	254	191	197	73	59	187	433	122			
自分に向いている仕事かわからない	306	35	371	35	253	191	197	73	59	186	433	122			
できれば仕事はしたくない	305	35	371	35	253	190	197	73	59	186	432	122			

女性 第1回調査(2001年)	非典型雇用				専門・大学・中卒、					無配 配偶	親 子	同居 居			
	正規 雇用	派遣・ 契約	パート	無業・ その他	専門・ 短大・ 大学院 卒	大学・ 大学院 卒	中卒、 高校中 退	高等教 育中退	単身				元	子	同居
今の世の中、定職に就かなくても暮らしていける	201	58	379	35	227	316	109	22	21	101	447	92			
若いうちは仕事よりも自分のやりたいことを優先させたい	201	58	379	35	227	316	109	22	21	101	447	92			
いろいろな職業を経験したい	200	58	379	35	227	316	108	22	21	100	447	92			
やりたい仕事なら正社員でもフリーターでもこだわらない	201	58	379	35	227	316	109	22	21	101	447	92			
一つの企業に長く勤めるほうがよい	201	58	379	35	227	316	109	22	21	101	447	92			
フリーターより正社員で働いたほうがトクだ	200	58	378	35	226	315	109	22	21	100	446	92			
専門的な知識や技術を磨きたい	201	57	378	35	227	314	109	22	21	101	445	92			
職業生活に役立つ資格を取りたい	201	58	379	35	227	316	109	22	21	101	447	92			
ひとの役に立つ仕事をしたい	201	58	379	35	227	316	109	22	21	101	447	92			
将来は独立して自分の店や会社を持ちたい	201	58	379	35	227	316	109	22	21	101	447	92			
有名になりたい	201	58	379	35	227	316	109	22	21	101	447	92			
ひとよりも高い収入を得たい	201	58	379	35	227	316	109	22	21	101	447	92			
将来のことを考えるよりも今を楽しく生きたい	201	58	379	35	227	316	109	22	21	101	447	92			
自分に向いている仕事かわからない	200	58	378	35	227	314	109	22	21	101	445	92			
できれば仕事はしたくない	200	58	377	35	225	316	109	22	20	100	446	92			

第4章 若者の相談ネットワークの状況：推移と変化

第1節 はじめに

本章では、若者のソーシャル・ネットワーク（相談ネットワーク）に注目し、その実態について就業状況との関連を中心に検討する。特に、同じ質問項目で2006年に実施された調査の結果と比較しながら、5年の間でみられた変化とその背景について考察する。

ソーシャル・ネットワークに注目するのは、2006年の調査と共通の問題意識に基づいている。すなわち、学校から職業への移行過程や非典型雇用から典型雇用への移行過程など、仕事をめぐる若者の移行過程に関して、その実態を「包括的」に探ること、すなわち領域横断的かつ対象を全域的にカバーして問題を把握することが必要だという認識である。そのような意味で包括的な把握をめざすとき、若者のソーシャル・ネットワークに注目することは、就業という側面にとどまらずに、若者が生きる“世界”のあり方をより全域的かつ具体的な形で切り出すことにつながりうると考えられる。なお、若者が取り結んでいる社会関係は多様なものであるが、ここでは特に自らの悩みを相談する相手を取り上げる。つまり、ここでソーシャル・ネットワークという表現で想定しているのは、若者の多様なパーソナル・ネットワークのうちの相談ネットワークである。

本章で具体的に試みるのは、若者の相談ネットワークについての調査結果を概観しつつ、特に就業状況と相談ネットワークのあり方の関連について検討することである。具体的には、若者の就業状況（典型雇用であること／非典型雇用であること）が、彼ら／彼女らが有している相談ネットワークのあり方をどう規定している／いないのかについて探る。そのことから、若者の移行に関する具体的な支援の方策を考えることにつながる知見を得ることをめざす。

ここで直接分析の対象とするのは、2011年2～3月に労働政策研究・研修機構が実施した、東京都（島嶼部を除く）の20～29歳の男女2058人（専業主婦（夫）を除く）を対象とする、「第3回 若者のワークスタイル調査」のデータである¹。なお、この調査において相談ネットワークの分析に際して用いた質問項目は、2006年2月に同機構によって実施された「第2回 若者のワークスタイル調査」（以下、2006年調査）と同じ設計のものである。二つの調査の結果は比較可能であるので、以下の考察においても適宜比較を加えながら進めていくことにしたい²。また、同一の質問項目を用いて分析し、分析に際しての問題意識も多くの部分で共通していることもあって、以下では必要に応じて、2006年調査の報告論文（久木元 2006, 2007）で記載した説明や文章・表現などを再度用いることがあるので、付記しておく。

¹ 詳細は序章を参照のこと。

² なお、「第2回 若者のワークスタイル調査」の対象者は、東京都（島嶼部を除く）の18～29歳の男女2000人（正規課程の学生、専業主婦を除く）であった。2011年の第3回調査と比べて、18～19歳の男女も対象者となっている点が異なっている。

第2節 質問項目の設計

議論に進む前に、相談ネットワークの情報を得るために用いた質問項目についてふれておく。上述したとおり、このような質問項目の設計は、2006年に実施された「第2回 若者のワークスタイル調査」と同一である。

質問文は、「あなたは現在、a～dのことについて悩みを持っていますか。もし悩みを持っている場合には相談する相手について、あてはまる番号すべてに○をつけて下さい」というものであり、「a 今の自分の仕事や働き方について」「b これからの生き方や働き方について」「c 人間関係について」「d 経済的な問題（お金のこと）について」のそれぞれについて、相談する相手を複数回答で選んでもらうという形である。選択肢は、「悩みはない」「親・保護者」「兄弟姉妹」「職場やバイト先の上司」「職場やバイト先の友人・同僚」「学校で知り合った友人」「学校の先生・職員・相談員」「趣味をともにする友人」「恋人・配偶者」「カウンセラー等の専門家や公的な支援機関」「その他」「誰もいない」である。

この質問項目によって、悩みがある場合の相談相手の選択状況がわかり、かつ複数回答にしているため、相談相手の具体的な広がりや多様性についてもとらえることができる。しかし、あくまでも個々の悩みに対して具体的に相談相手をたずねる形をとっているため、そもそも悩みがない回答者の相談ネットワークはとらえることができないという限界がある³。また、調査票の紙幅の関係もあり、相談ネットワークの規模（人数）や連絡頻度、複数の相談相手間の密度など、ネットワークそのものの特性について踏み込んでたずねることはできていない。そのこともあって、本章は記述統計的な分析が中心となっていることも、あらかじめ述べておく。

ところで、2006年調査のデータに関して、この質問項目の回答を分析した結果、浮かび上がってきたのは次のような点であった（久木元 2006, 2007）。すなわち、(1) 若者にとって職場とは、単なる仕事の環境というだけでなく、さまざまな悩みについての相談ネットワークが供給される場としても機能していること、(2) 非典型雇用ないし無業であることは、相談ネットワークの重要な供給源である職場関係の人が自らのネットワークに加わりにくいこと——いわば、世界が広がりにくいということ——を意味すること、(3) 非典型雇用や無業であることによって、多方向的でない形の小規模で限定的な相談ネットワークが帰結されやすいこと、の3点である。そこで、以下で進める2011年調査のデータの分析に際しても、この諸点が見出せるのか、見出せないとするばどのような状況になっているのかという点を明らかにすることをめざして、考察を進めていくことにしたい⁴。

³ ただし後述するように、4つの悩みのいずれについても6割以上の人が「悩みがある」と回答しており、少数の人の相談ネットワークのデータしか得られていないわけではない。

⁴ なお、若者のパーソナル・ネットワークや相談ネットワークについての関連諸研究については、2006年調査の報告書で概観している（堀ほか 2006）。その後、2006年調査の質問項目やアプローチを参照したものとして、大阪市の若年者への調査結果を分析した菅野（2007）や内田・菅野（2010）、北海道と長野県の若者への調査結果に基づく浅川（2009）・堀（2009）がある。菅野は、2006年調査で見出された就業形態と職場関係の相談チャンネルの関係について、大阪市のデータでも近い結果を得ている。他方、浅川や堀の分析では、就業形態

第3節 相談ネットワークの状況

では、2011年調査の結果から、相談ネットワークの状況を具体的にみていくことにしよう。

まず相談ネットワークの前提となる悩みの有無についてである（図表4-1）。a～dの4つの悩み（以下、順に「今の仕事」「これからの生き方」「人間関係」「経済的問題」とする）について「悩みがある」と回答した人の割合は、それぞれ男性で64.3%、68.2%、53.9%、60.0%であり、女性で74.5%、79.1%、71.7%、71.3%であった。4つの悩みのいずれについても、全体では6割以上の方が「悩みがある」と回答しており、また男性より女性の方が悩みのある人が有意に多くなっている。この傾向は2006年の調査結果でもみられたが、4つの悩みのすべてで、全体・男性のみ・女性のみについてもその割合は増加している（ちなみに、特に顕著な増加がみられたのは「今の仕事」で、2006年の結果は、全体・男性のみ・女性のみがそれぞれ61.3%、57.2%、65.7%であった）。

図表4-1 「悩みがある」と回答した人の割合（%）

	全体	男性	女性	n(人: 男性)	n(人: 女性)	
今の自分の仕事や働き方について	69.4	64.3	74.5	1013	1013	p<.001
これからの生き方や働き方について	73.6	68.2	79.1	1013	1013	p<.001
人間関係について	62.8	53.9	71.7	1011	1012	p<.001
経済的な問題(お金のこと)について	65.6	60.0	71.3	1014	1007	p<.001

男女それぞれについて配偶状態別にみると⁵（図表4-2）、男性の場合は4つの悩みのいずれについても配偶状態による有意な差はみられなかった。女性の場合は、「経済的問題」以外の3つで、無配偶の方が悩みのある人が有意に多かった。次に、男女それぞれについて現職の就業状況（従業上の地位）による差を調べた（図表4-3）。男性では、4つのうち3つの悩みについて、非典型雇用および「無業、その他」で悩みがある人の割合が高くなっていたが、女性の場合は、そうした傾向は特にみられなかった。

最後に、学歴別にみた場合、男性では4つ中の3つの悩みで学歴間に有意差がみられなかった。一方、女性では「今の仕事」「これからの生き方」「経済的問題」で有意差が検出され、いずれも学歴が高いほど、また卒業者より中退者ほど、悩みのある人の割合が高くなっている（図表4-4）。

と相談チャンネル数の間に2006年調査と同様の結果は得られていない。堀はその理由として、長野では東京ほど就業形態の多様化がまだ進んでおらず、非典型雇用の割合が低かったことを挙げている（堀2009:228）。

⁵ この調査では、未婚の人と離別・死別して現在独身の人の区別ができないため、ここでは既婚/未婚ではなく有配偶/無配偶という表現を用いる。

図表 4-2 「悩みがある」と回答した人の割合：配偶状態別（％）

		全体	無配偶	有配偶	n(人:無配 偶)	n(人:有配 偶)	
今の自分の仕事や働き方について	男性	64.3	64.1	64.2	827	151	n.s.
	女性	74.5	76.2	60.8	866	120	p<.001
これからの生き方や働き方について	男性	68.2	67.7	70.2	827	151	n.s.
	女性	79.1	80.4	70.0	863	120	p<.01
人間関係について	男性	53.9	54.1	53.6	824	151	n.s.
	女性	71.7	73.7	58.0	863	119	p<.001
経済的な問題(お金のこと)について	男性	60.0	58.8	64.2	827	151	n.s.
	女性	71.3	71.0	72.3	859	119	n.s.

図表 4-3 「悩みがある」と回答した人の割合：現在の就業状況別（％）

		正社員(公 務員含む)	非典型雇 用	自営・家業	無業、その 他	n(人: 正社員)	n(人:パー ト・契約)	n(人: 自営)	n(人:失 業・無業)	
今の自分の仕事や働き方について	男性	61.5	68.9	62.5	80.3	683	222	48	61	p<.05
	女性	76.5	71.1	74.1	77.8	554	381	27	54	n.s.
これからの生き方や働き方について	男性	65.6	72.8	68.8	80.3	680	224	48	61	p<.05
	女性	79.3	77.8	75.0	87.0	552	379	28	54	n.s.
人間関係について	男性	52.6	53.1	61.2	66.1	679	224	49	59	n.s.
	女性	74.8	66.1	73.1	79.6	552	380	26	54	p<.05
経済的な問題(お金のこと)について	男性	55.3	70.1	58.3	76.7	682	224	48	60	p<.001
	女性	67.1	76.3	81.5	72.2	547	379	27	54	p<.05

図表 4-4 「悩みがある」と回答した人の割合：学歴別（％）

		高卒	専門卒	短大・高専 卒	大学・大学 院卒	中卒・高校 中退	高等教育 中退	
今の自分の仕事や働き方について	男性	59.4	68.5	55.2	63.5	63.0	76.4	n.s.
	女性	61.3	74.9	77.0	79.4	67.6	80.4	p<.001
これからの生き方や働き方について	男性	61.8	70.3	69.0	67.9	73.6	79.5	n.s.
	女性	70.2	77.1	82.3	83.1	75.8	84.8	p<.01
人間関係について	男性	48.6	55.9	51.7	53.6	64.2	61.6	n.s.
	女性	67.3	70.6	73.5	73.5	67.6	76.1	n.s.
経済的な問題(お金のこと)について	男性	60.2	59.1	65.5	55.3	72.2	75.3	p<.05
	女性	71.4	73.2	77.7	66.9	82.4	80.4	p<.05

		n(人: 高卒)	n(人: 専門卒)	n(人:短 大・高専 卒)	n(人:大 学・大学院 卒)	n(人:中 卒・高校中 退)	n(人:高等 教育中退)
今の自分の仕事や働き方について	男性	212	203	29	427	54	72
	女性	160	239	113	413	34	46
これからの生き方や働き方について	男性	212	202	29	427	53	73
	女性	161	236	113	413	33	46
人間関係について	男性	212	202	29	425	53	73
	女性	159	238	113	411	34	46
経済的な問題(お金のこと)について	男性	211	203	29	427	54	73
	女性	161	235	112	408	34	46

次に、悩みのある人の相談ネットワークについて、具体的な検討を行う。

まず、4つの悩みそれぞれについて、誰を相談相手として選んでいるかを概観する（図表4-5）。全体として、相談相手として選ばれているのは家族関係・職場関係・友人・配偶者などにほぼ集約されており、それ以外の立場（「学校の先生・職員・相談員」や「カウンセラー等の専門家や公的な支援機関」）の比重は小さい。このこと自体は2006年調査と共通だが、割合の数値でみると、例えば、「今の仕事」「これからの生き方」「人間関係」について、「親・保護者」を選ぶ割合が男女とも2006年より5ポイント弱から10数ポイントも高くなっている。また、「カウンセラー等の専門家や公的な支援機関」を選ぶ割合は、高くても3%台にとどまっているが、実は2006年調査では1%前後にすぎなかった⁶ため、これでも大きく割合が上昇したとみなすことができる。「カウンセラー等の専門家や公的な支援機関」は、悩みの相談先として選択肢の一つになりつつあると考えられる。さらにもう一つ、2006年調査に比べて4つの悩みのすべてで選ぶ割合が高くなっているのが、「誰もいない」である⁷。特に男性でその伸びは顕著で、今回の結果ではどの悩みについても、低いもので8%台、高いものでは10%を上回る割合となっている。悩みはあるのに相談相手が誰もいないという人が、どの悩みにも一定の割合で存在するようになっている。

図表4-5 悩みの相談相手の選択割合（%）

		親・保護者	兄弟姉妹	職場やバイト先の上司	職場やバイト先の友人・同僚	学校で知り合った友人	学校の先生・職員・相談員	趣味をとる友人	恋人・配偶者	専門家や公的な支援機関	その他	誰もいない	n(人)
今の自分の仕事や働き方について	男性	44.9	12.9	29.6	42.0	35.1	2.3	23.5	25.2	2.6	4.3	9.0	652
	女性	57.2	21.8	22.2	47.2	42.5	3.4	20.6	38.7	3.6	3.7	3.0	757
		***	***	**	#	**			***			***	
これからの生き方や働き方について	男性	43.8	13.3	21.4	32.9	34.0	1.7	23.4	29.1	2.2	4.8	8.2	691
	女性	54.6	21.0	15.0	33.1	41.6	2.9	20.3	39.8	3.1	3.6	4.6	801
		***	***	**		**			***			**	
人間関係について	男性	23.5	9.5	20.2	33.8	35.8	1.3	23.3	26.8	2.2	3.9	8.8	545
	女性	44.8	19.4	15.4	40.2	44.6	1.4	23.3	36.2	2.3	3.4	4.0	726
		***	***	*	*	**			***			***	
経済的な問題(お金のこと)について	男性	57.4	9.9	11.3	19.4	16.9	1.0	12.5	26.8	1.3	3.5	12.2	608
	女性	66.4	17.6	6.6	17.2	19.2	0.8	10.2	30.7	1.0	2.6	8.5	717
		**	***	**								*	

***p<.001、**p<.01、*p<.05、#p<.10

男女別にみると、4つの悩みに共通して、「親・保護者」「兄弟姉妹」「職場やバイト先の上司」を選ぶ割合は女性の方が男性よりも有意に高く、「誰もいない」を選ぶ割合は男性の方が女性よりも有意に高い。また「経済的問題」を除く3つの悩みで、「学校で知り合った友人」「恋人・配偶者」を選ぶ割合は女性の方が男性よりも有意に高い。2006年調査では、「職場やバイト先の上司」を選ぶ割合はこれとは逆に男性の方が女性よりも有意に高い結果だった

⁶ 2006年調査では、「今の仕事」「これからの生き方」「人間関係」「経済的問題」のそれぞれについて、男性・女性の順に、0.9%・1.3%、1.2%・1.6%、0.4%・1.1%、0.0%・0.7%であった。

⁷ 2006年調査では、「今の仕事」「これからの生き方」「人間関係」「経済的問題」のそれぞれについて、男性・女性の順に、3.8%・2.0%、4.0%・2.2%、4.5%・2.5%、6.6%・4.5%であった。

が、この点を除くと、おおむね 2006 年と似た傾向がみられる。

男性の「人間関係」を除き、男女・悩みの種類を問わず、「親・保護者」は悩みの相談相手として最も多く選ばれており、特に「経済的問題」では「親・保護者」と「恋人・配偶者」に集中している。また、悩みの種類によって程度は多少異なるものの、やはり職場関係の人は相談相手になっていることが多い。

続いて、相談相手の選択状況を、男女それぞれについて配偶状態別に検討する（図表 4-6）。4 つの悩みに共通するのは、男女とも有配偶者にとって「恋人・配偶者」（有配偶者なのでおそらくほとんどは配偶者だと考えられる）が、相談相手として選ばれる割合が際立って高いという点である。それ以外のほとんどの選択肢は、無配偶者で選ばれる割合に比べて有配偶者で選ばれる割合が低くなっており、特に「職場やバイト先の友人・同僚」「学校で知り合った友人」「趣味をともにする友人」はその傾向が顕著である。結婚に伴い、配偶者が男女ともさまざまな悩みの相談相手として大きな比重を占めるようになってきていること（それに対応して、それ以外の相談相手の比重は下がっていること）がわかる。このような、有配偶者における相談相手としての配偶者の比重の高さはきわめて顕著であり、相談ネットワークを検討する上で配偶状態別に検討することが必須であることを示している。

このような、有配偶者における相談相手としての配偶者の比重の高さは、2006 年調査の結果にもみられた特徴であるが、女性の有配偶者で配偶者を選ぶ人の割合は、4 つの悩みのすべてで顕著に高まっている（もともと無配偶者の場合に比べて高い割合だったのが、今回さらに高い値になっている）。また、男性の有配偶者では、「親・保護者」「職場やバイト先の上司」「学校で知り合った友人」を選ぶ割合が、2006 年に比べてほとんどの場合で大きく高まっている。

図表 4-6 悩みの相談相手の選択割合：配偶状態別（%）

		親・保護者	兄弟姉妹	職場やバイト先の上司	職場やバイト先の友人・同僚	学校で知り合った友人	学校の先生・職員・相談員	趣味をともにする友人	恋人・配偶者	専門家や公的な支援機関	その他	誰もいない	n(人)
今の自分の仕事や働き方について	男・無配偶	47.0	13.8	27.5	43.2	36.4	2.1	25.7	17.7	2.6	4.7	10.2	530
	男・有配偶	33.0	7.2	37.1	35.1	27.8	2.1	12.4	69.1	2.1	2.1	4.1	97
		*	#	#				**	***			#	
	女・無配偶	58.0	22.6	22.9	48.6	45.8	3.9	22.0	33.5	3.5	3.9	3.3	660
女・有配偶	49.3	12.3	16.4	34.2	16.4	0.0	9.6	86.3	4.1	2.7	0.0	73	
		*		*	*	***	*	***					
これからの生き方や働き方について	男・無配偶	45.2	14.1	19.8	33.9	35.9	1.6	25.4	21.1	1.6	4.8	9.3	560
	男・有配偶	34.0	7.5	28.3	25.5	25.5	0.9	13.2	74.5	4.7	3.8	3.8	106
		*	#	#	#	*		**	***			#	
	女・無配偶	55.0	22.0	15.9	35.6	45.0	3.3	21.8	34.1	3.3	3.7	4.8	694
女・有配偶	51.2	11.9	7.1	16.7	16.7	0.0	8.3	86.9	2.4	3.6	1.2	84	
		*	*	**	***	***	**	***					
人間関係について	男・無配偶	24.4	9.6	20.6	35.0	38.6	0.9	25.6	19.3	2.2	3.8	9.2	446
	男・有配偶	16.0	6.2	17.3	28.4	24.7	1.2	12.3	71.6	2.5	2.5	7.4	81
					*	*		*	***				
	女・無配偶	45.3	19.7	15.9	41.8	48.0	1.6	24.5	31.3	2.5	3.8	4.1	636
女・有配偶	39.1	15.9	11.6	26.1	18.8	0.0	11.6	84.1	1.4	1.4	0.0	69	
				*	***	*	*	***					
経済的な問題(お金のこと)について	男・無配偶	60.3	10.3	11.3	20.4	18.7	1.0	14.0	16.7	1.0	3.3	13.8	486
	男・有配偶	41.2	9.3	11.3	12.4	7.2	1.0	5.2	79.4	2.1	4.1	5.2	97
		**			#	**		**	***			*	
	女・無配偶	68.7	19.0	6.7	19.2	21.1	1.0	10.8	22.8	1.1	2.6	9.0	610
女・有配偶	45.3	5.8	3.5	7.0	8.1	0.0	5.8	86.0	0.0	3.5	3.5	86	
	***	**		**	**			***			#		

***p<.001, **p<.01, *p<.05, #p<.10 十分なケース数がある場合のみ検定を行っている

次に、相談相手の選択状況を、男女それぞれについて就業状況（従業上の地位）別に概観する（図表4-7）。まず注目されるのは「無業、その他」であり、無業であるために相談相手に職場関係の人を選ぶ割合が低くなっており、男性の場合は「恋人・配偶者」を選ぶ割合も明確に低くなっている。そして「誰もいない」の割合は、男女とも他の就業状況のものとは比べて顕著に高くなっている。仕事についていない状態にあることが、仕事の関係に限らず、社会的な孤立と結びつきやすいことがうかがえる。また、「正社員（公務員を含む）」（以下「正社員」と略記）の方が、「非典型雇用」よりも全般に「職場やバイト先の上司」「職場やバイト先の友人・同僚」という職場関係の人を選ぶ割合が高めになっているが、その違いがより顕著なのは女性の方である。そして「恋人・配偶者」および「趣味をともにする友人」は、特に男性で「正社員」ほど「非典型雇用」より高い割合となっている。

図表4-7 悩みの相談相手の選択割合：現在の就業状況別（％）

	親・保護者	兄弟姉妹	職場やバイト先の上司	職場やバイト先の友人・同僚	学校で知り合った友人	学校の先生・職員・相談員	趣味をともにする友人	恋人・配偶者	専門家や公的な支援機関	その他	誰もいない	n(人)	
今の自分の仕事や働き方について	男・正社員（公務員含む）	42.6	12.4	33.1	46.0	36.7	1.7	19.3	29.8	0.7	3.6	420	
	男・非典型雇用	47.7	15.0	28.1	43.1	33.3	4.6	31.4	17.0	5.2	8.5	153	
	男・自営・家業	53.3	3.3	30.0	33.3	33.3	0.0	50.0	30.0	0.0	16.7	30	
	男・無業、その他	51.0	16.3	4.1	10.2	28.6	2.0	18.4	8.2	12.2	0.0	49	
				***	***			***	***				
	女・正社員（公務員含む）	58.0	23.8	25.7	53.5	47.2	3.5	18.4	39.9	2.4	2.4	424	
	女・非典型雇用	57.9	20.7	20.3	42.4	39.5	3.3	24.7	36.5	4.4	5.2	271	
	女・自営・家業	45.0	10.0	10.0	30.0	20.0	0.0	25.0	60.0	5.0	15.0	20	
	女・無業、その他	50.0	14.3	4.8	21.4	26.2	4.8	14.3	31.0	9.5	2.4	9.5	42
				***	**								
これからの生き方や働き方について	男・正社員（公務員含む）	40.6	11.7	23.3	35.4	35.2	1.1	20.0	33.9	0.9	4.5	446	
	男・非典型雇用	46.0	15.3	19.0	33.7	31.9	4.3	28.8	21.5	3.7	4.9	163	
	男・自営・家業	57.6	12.1	33.3	30.3	36.4	0.0	48.5	33.3	0.0	15.2	33	
	男・無業、その他	57.1	22.4	4.1	8.2	28.6	0.0	20.4	8.2	10.2	0.0	49	
		*		**	**			**	***				
	女・正社員（公務員含む）	54.1	21.9	16.0	40.4	45.2	3.0	18.0	40.6	1.8	1.8	438	
	女・非典型雇用	55.9	19.7	15.3	25.8	39.3	2.7	23.4	38.3	4.4	5.1	295	
	女・自営・家業	52.4	19.0	9.5	23.8	28.6	0.0	28.6	61.9	0.0	19.0	21	
	女・無業、その他	51.1	21.3	6.4	14.9	27.7	4.3	19.1	31.9	8.5	4.3	12.8	47
				***	*								
人間関係について	男・正社員（公務員含む）	23.2	8.1	23.5	37.0	38.1	1.1	20.2	31.7	1.1	2.8	357	
	男・非典型雇用	20.2	10.9	15.1	32.8	30.3	2.5	28.6	18.5	2.5	5.0	119	
	男・自営・家業	20.0	13.3	16.7	23.3	36.7	0.0	46.7	33.3	3.3	10.0	30	
	男・無業、その他	38.5	15.4	7.7	15.4	30.8	0.0	17.9	2.6	10.3	5.1	39	
				*	*			**	***				
	女・正社員（公務員含む）	46.0	18.9	17.9	46.7	48.4	1.9	20.1	38.5	1.5	2.7	413	
	女・非典型雇用	45.4	19.5	13.9	35.1	41.4	0.4	29.1	32.7	2.0	4.4	251	
	女・自営・家業	36.8	21.1	10.5	21.1	42.1	0.0	36.8	52.6	0.0	5.3	0.0	19
	女・無業、その他	32.6	23.3	2.3	16.3	27.9	2.3	14.0	27.9	14.0	4.7	11.6	43
				***	*				***				
経済的な問題（お金のこと）について	男・正社員（公務員含む）	54.9	9.8	12.2	21.5	18.3	1.1	10.3	33.7	0.5	3.4	377	
	男・非典型雇用	63.7	9.6	8.9	18.5	14.0	0.6	17.8	15.9	1.9	4.5	157	
	男・自営・家業	57.1	3.6	25.0	25.0	14.3	0.0	14.3	28.6	0.0	3.6	28	
	男・無業、その他	56.5	15.2	4.3	2.2	17.4	2.2	10.9	6.5	6.5	0.0	46	
				*					***				
	女・正社員（公務員含む）	67.8	20.4	6.5	21.5	19.9	0.8	9.5	28.9	0.8	1.9	7.4	367
	女・非典型雇用	64.4	14.9	7.3	14.2	20.1	1.0	11.4	32.2	1.0	3.1	9.7	289
	女・自営・家業	54.5	18.2	9.1	4.5	13.6	0.0	13.6	54.5	0.0	9.1	4.5	22
	女・無業、その他	74.4	10.3	0.0	5.1	10.3	0.0	5.1	23.1	2.6	2.6	12.8	39

***p<.001、**p<.01、*p<.05、#p<.10 十分なケース数がある場合のみ検定を行っている

2006年調査の結果との比較では、男性の「正社員」で、「誰もいない」の割合が4つの悩みすべてで増加していることが注目される。

最後に、回答者の学歴による相談相手の選択状況の違いを、男女別にみることにする（図表4-8）。少数のケースになるが、「カウンセラー等の専門家や公的な支援機関」を選ぶ割

合をみると、男性の場合、4つの悩みのすべてで中卒・高校中退者において相対的に高くなっていることがわかる。この傾向は2006年調査でもみられたが、その数値は高いもので5%台だったのに対して、今回は軒並み5~8%台になっており、男性の中卒・高校中退者にとって「カウンセラー等の専門家や公的な支援機関」が相談先として一定の存在感をもつものになりつつあることがうかがわれる。また、「誰もいない」を選ぶ割合が、男性の場合、高卒の人および高等教育中退者で特に高く、4つの悩みのすべてについて10%を上回る値となっている。女性については、悩みの種類により若干傾向が異なるものの、中卒・高校中退および高等教育中退の人で「誰もいない」の割合が比較的高くなっている。学歴が相対的に低いことや中退経験が、相談相手の状況と関連している可能性がうかがわれる結果となっている。

図表4-8 悩みの相談相手の選択割合：学歴別（%）

		親・保護者	兄弟姉妹	職場やバイト先の上司	職場やバイト先の友人・同僚	学校で知り合った友人	学校の先生・職員・相談員	趣味をとる友人	恋人・配偶者	専門家や公的な支援機関	その他	誰もいない	n(人)
今の自分の仕事や働き方について	男・高卒	46.8	10.3	21.4	44.4	23.0	2.4	21.4	25.4	3.2	4.0	13.5	126
	男・専門卒	46.8	17.3	36.0	46.0	37.4	0.7	26.6	24.5	0.0	7.2	6.5	139
	男・短大・高専卒	62.5	6.3	31.3	43.8	50.0	12.5	25.0	31.3	0.0	12.5	12.5	16
	男・大学・大学院卒	40.6	11.8	31.0	44.3	41.7	2.6	20.7	27.3	3.3	2.6	7.0	271
	男・中卒・高校中退	50.0	17.6	14.7	17.6	23.5	2.9	26.5	35.3	8.8	5.9	5.9	34
	男・高等教育中退	45.5	9.1	32.7	30.9	30.9	0.0	32.7	9.1	0.0	1.8	18.2	55
今の自分の仕事や働き方について	女・高卒	54.1	23.5	17.3	35.7	31.6	1.0	13.3	51.0	5.1	2.0	2.0	98
	女・専門卒	58.1	21.2	24.6	48.6	42.5	4.5	22.9	38.5	4.5	3.4	3.4	179
	女・短大・高専卒	58.6	21.8	27.6	47.1	42.5	1.1	17.2	37.9	3.4	2.3	3.4	87
	女・大学・大学院卒	57.3	20.7	21.6	48.5	49.7	4.3	21.6	37.8	3.0	4.0	2.1	328
	女・中卒・高校中退	56.5	30.4	17.4	65.2	8.7	0.0	30.4	17.4	0.0	8.7	4.3	23
	女・高等教育中退	59.5	24.3	16.2	43.2	27.0	2.7	18.9	32.4	2.7	5.4	10.8	37
これからの生き方や働き方について	男・高卒	44.3	11.5	19.8	36.6	25.2	1.5	19.8	29.8	3.8	6.9	10.7	131
	男・専門卒	48.6	18.3	23.2	34.5	36.6	2.1	25.4	27.5	0.0	6.3	5.6	142
	男・短大・高専卒	45.0	5.0	20.0	40.0	30.0	0.0	20.0	30.0	0.0	5.0	5.0	20
	男・大学・大学院卒	42.8	11.7	20.7	34.5	40.3	2.4	23.1	31.7	2.4	3.4	7.9	290
	男・中卒・高校中退	46.2	20.5	15.4	10.3	20.5	0.0	17.9	38.5	5.1	2.6	5.1	39
	男・高等教育中退	36.2	10.3	27.6	22.4	27.6	0.0	32.8	10.3	0.0	3.4	15.5	58
これからの生き方や働き方について	女・高卒	55.8	26.5	15.9	27.4	29.2	0.9	16.8	52.2	4.4	1.8	1.8	113
	女・専門卒	52.2	17.0	13.2	33.0	40.7	2.7	25.3	39.6	4.4	2.2	6.0	182
	女・短大・高専卒	57.0	23.7	18.3	33.3	46.2	1.1	12.9	39.8	1.1	3.2	6.5	93
	女・大学・大学院卒	54.5	19.8	15.5	37.0	48.4	4.1	20.7	39.1	2.6	4.1	3.5	343
	女・中卒・高校中退	60.0	32.0	12.0	20.0	12.0	0.0	28.0	28.0	0.0	4.0	4.0	25
	女・高等教育中退	56.4	23.1	10.3	20.5	30.8	2.6	17.9	23.1	5.1	10.3	12.8	39
人間関係について	男・高卒	23.3	8.7	14.6	35.9	25.2	1.0	20.4	32.0	1.9	3.9	11.7	103
	男・専門卒	23.0	13.3	23.9	33.6	32.7	1.8	26.5	24.8	0.0	4.4	8.8	113
	男・短大・高専卒	33.3	0.0	26.7	46.7	40.0	6.7	6.7	33.3	0.0	6.7	6.7	15
	男・大学・大学院卒	22.4	8.3	20.6	34.2	44.3	0.4	22.4	27.6	2.6	3.5	6.1	228
	男・中卒・高校中退	23.5	11.8	23.5	23.5	23.5	0.0	23.5	23.5	5.9	5.9	8.8	34
	男・高等教育中退	24.4	8.9	15.6	24.4	33.3	4.4	33.3	13.3	2.2	2.2	17.8	45
人間関係について	女・高卒	48.6	23.4	12.1	28.0	31.8	0.9	17.8	47.7	2.8	2.8	3.7	107
	女・専門卒	38.1	19.0	17.9	35.7	42.9	1.2	28.0	36.9	3.0	1.2	3.6	168
	女・短大・高専卒	44.6	24.1	15.7	45.8	45.8	0.0	16.9	37.3	1.2	2.4	8.4	83
	女・大学・大学院卒	47.0	16.2	14.6	46.4	53.3	2.0	22.8	34.4	2.3	3.6	2.6	302
	女・中卒・高校中退	52.2	21.7	17.4	43.5	13.0	0.0	34.8	26.1	0.0	8.7	13.0	23
	女・高等教育中退	45.7	22.9	17.1	31.4	40.0	2.9	25.7	20.0	2.9	11.4	2.9	35
経済的な問題(お金のこと)について	男・高卒	50.4	9.4	9.4	22.0	13.4	0.8	11.0	28.3	0.8	3.9	15.0	127
	男・専門卒	66.7	15.0	15.0	23.3	17.5	0.8	12.5	20.0	0.0	4.2	11.7	120
	男・短大・高専卒	52.6	5.3	5.3	15.8	31.6	5.3	15.8	42.1	0.0	0.0	5.3	19
	男・大学・大学院卒	54.7	6.8	9.7	19.9	19.9	0.4	12.7	30.9	1.7	3.0	11.9	236
	男・中卒・高校中退	53.8	15.4	25.6	10.3	12.8	2.6	7.7	33.3	7.7	2.6	10.3	39
	男・高等教育中退	65.5	7.3	7.3	5.5	9.1	1.8	18.2	10.9	0.0	1.8	14.5	55
経済的な問題(お金のこと)について	女・高卒	63.5	17.4	7.0	12.2	15.7	0.0	7.0	34.8	0.9	2.6	7.0	115
	女・専門卒	62.8	19.2	7.0	20.9	25.0	1.2	12.8	31.4	1.2	1.7	7.6	172
	女・短大・高専卒	69.0	19.5	5.7	14.9	20.7	1.1	6.9	28.7	0.0	3.4	9.2	87
	女・大学・大学院卒	69.6	15.8	7.0	19.4	19.0	0.7	11.0	29.7	1.1	2.2	8.4	273
	女・中卒・高校中退	60.7	25.0	3.6	14.3	3.6	0.0	10.7	28.6	0.0	3.6	17.9	28
	女・高等教育中退	67.6	16.2	5.4	5.4	10.8	0.0	10.8	29.7	0.0	5.4	10.8	37

***p<.001, **p<.01, *p<.05, #p<.10 十分なケース数がある場合のみ検定を行っている

第4節 相談ネットワークの広がり

前節でみたのは、相談ネットワークの実態としての、誰が相談相手として選ばれているか／いないかの状況であった。つまり、回答者と相談相手の二者間の関係のみをみていたことになるわけだが、ひとつの悩みについて相談相手が一人だけとは当然限らず、複数の相談相手がいることもありうる。そこで本節では、回答者が個々の悩みにどのような相談相手の組み合わせを選んでいるのかについて検討する。つまり、一人が複数の人とどのようなネットワークをつくっているのかに注目し、相談ネットワークの広がりについて分析する。

なお、当該の質問項目では相談相手の選択肢が（「誰もいない」も含めて）11件もあるため、ここでは4つのカテゴリーに整理した。1つ目は「家族」で、これは「親・保護者」と「兄弟姉妹」からなる。2つ目は「職場関係」で、「職場やバイト先の上司」と「職場やバイト先の友人・同僚」が該当する。3つ目は「友人」で、「学校で知り合った友人」と「趣味をともにする友人」が含まれる。4つ目は「恋人・配偶者」である。相談相手として選ばれる割合がおおむね5%以下と低かった残り4つの選択肢（「学校の先生・職員・相談員」「カウンセラー等の専門家や公的な支援機関」「その他」「誰もいない」）は、この新しい4つのカテゴリーには含まれていない。

そして、個々のカテゴリーについて、それを構成する選択肢のうちのいずれか1つでも選択されていれば、そのカテゴリーが相談相手として選ばれているとみなす。たとえば「家族」の場合、ある回答者が「親・保護者」と「兄弟姉妹」のいずれか1つでも選択しているのであれば、その回答者は「家族」を相談相手に選んでいると考える。このようにして、11件の選択肢の選択状況を、4つのカテゴリーの選択状況に変換してとらえることにする。4つのカテゴリーのそれぞれについて、選ぶ／選ばないという2つの可能性があるため、相談ネットワークの組み合わせは16パターンあることになる。相談相手に選ばれている場合に1、選ばれていない場合に0という値を割り当て、割り当てた値を4桁に順に並べて表記すると、相談ネットワークの16パターンを4桁の数値で表現することができる（図表4-9）。たとえば、相談相手として「親・保護者」と「職場やバイト先の友人・同僚」のみを選んでいる場合、「家族」と「職場関係」というカテゴリーに該当するため、その相談ネットワークは「1100」と表記される。以下では、相談ネットワークを表現する際に、適宜この4桁の数値を用いることにする。また、4つの個々の相談先に言及する際は、それぞれを「相談チャンネル」と呼ぶことにする。

図表 4-9 相談相手の組み合わせと表記法

表記	家族	職場関係	友人	恋人・配偶者
0000	×	×	×	×
0001	×	×	×	○
0010	×	×	○	×
0011	×	×	○	○
0100	×	○	×	×
0101	×	○	×	○
0110	×	○	○	×
0111	×	○	○	○
1000	○	×	×	×
1001	○	×	×	○
1010	○	×	○	×
1011	○	×	○	○
1100	○	○	×	×
1101	○	○	×	○
1110	○	○	○	×
1111	○	○	○	○

○:相談相手として選ばれている

×:相談相手として選ばれていない

注)4桁の数値は、1000の位が「家族」、100の位が「職場関係」、10の位が「友人」、1の位が「恋人・配偶者」にそれぞれ割り当てられている。

このように整理したのは、ただ相談相手が多いか少ないかということに注目するのではなく、回答者と相談相手のつながり方の多様性をとらえることによってこそ、相談ネットワークの多様性を把握できると考えるからである。たとえば、「職場やバイト先の上司」と「職場やバイト先の友人・同僚」は異なる選択肢を設けているが、この2つが選ばれているとしても、回答者とのつながり方は上司であれ同僚であれ「職場」を介するという点で共通である。いわば、上司も同僚も同じ一つの“世界”の出身だと考えられる。これに対して、たとえば「兄弟姉妹」と「職場やバイト先の友人・同僚」の2つが選ばれているとき、この2つは回答者とのつながり方が共通ではない（「家族」と「職場」）ので、それぞれ異なる“世界”の人だとみなすことができる。したがって、「職場やバイト先の上司」と「職場やバイト先の友人・同僚」が選ばれている場合と、「兄弟姉妹」と「職場やバイト先の友人・同僚」が選ばれている場合を考えると、どちらも「2つ」の相談相手が選ばれているとみなしてしまえば、後者がいま述べたような意味でより多様なつながり方をしていることが見失われてしまうのである。ここでは、相談ネットワークがいかなる多様性を含みこんでいるかを把握するという意図があるので、11の選択肢を整理・集約するに際して、4つの異なる“世界”を表すものとして、上述の4カテゴリーを設けたというわけである⁸。

なお、4つのカテゴリーがどれも選ばれなかった場合は「0000」となるが、これは11の選

⁸ もちろん、「回答者と相談相手のつながり方の多様性をとらえる」といっても、このような形で4つのカテゴリーに整理することは、唯一の方法ではない。特に、結びつきの背景を問わずに「友人」として一括している点は、つながり方の多様性をむしろ押しつぶしているともいえるかもしれない。ここでは、家族と職場関係を中心的なものとしてそれらをカテゴリーにすることを優先したため、このような整理の仕方を選んでいる。

択肢の中の「誰もいない」と同一ではない。「誰もいない」は相談相手が一切いないという意味だが、「0000」はあくまでも4カテゴリーには相談相手がいないということなので、4カテゴリーに含まれない「学校の先生・職員・相談員」「カウンセラー等の専門家や公的な支援機関」「その他」だけを相談相手として選んでいる場合も「0000」に含まれている。しかし実際にはそのようなケースは多くなく、4つの悩みのすべてにおいて、「0000」の7割以上を「誰もいない」が占めている⁹。

以上のような方法で16パターンに整理された相談ネットワークが、実際にどのような状況であるのかを、続けて4つの悩みごとに検討することにしよう。その際、ここまでの検討をふまえて、性別・配偶状態別に分けた上で、さらに就業状況（従業上の地位）ごとにみることにする。就業状況としては、特に「正社員（公務員を含む）」「非典型雇用」「無業、その他」の3つをとりあげて比較する（以下では、正社員・非典型雇用・無業と表現する）¹⁰。このような形で検討するのは、2006年調査の結果をふまえ、基本属性（特に就業状況）によってネットワークのあり方が規定されている可能性を考慮したためである。なお、有配偶者のうち、男性の非典型雇用、および男性・女性の無業については、該当者が少ないためここでは割愛し検討していない。

以下の検討において特に注目するのは、2006年調査でみられた傾向が、2011年調査の結果からも確認できるかという点である。この相談ネットワークに関して、2006年調査の結果を分析して見出されたのは、職場関係の人を選ぶ割合は、「正社員>非典型雇用>無業」となっており、友人や家族を選ぶ割合や、相手がいない割合は、「正社員<非典型雇用<無業」となっているという傾向の存在であった（久木元 2006, 2007）。つまり、職場関係の人が相談相手として選ばれないとき、友人や家族がより選ばれるようになるという「代替関係」の存在がうかがえる。2011年調査の結果でも、これと同じ傾向は見出せるだろうか。

まず、「今の自分の仕事や働き方」についての悩みについて検討しよう。この悩みに対して、どのような相談ネットワークのパターンが選択されているかを、性別・配偶状態・就業状況別に整理して示したのが図表4-10である。この表では、それぞれの属性の組み合わせについて、選ばれた割合が多いパターンから順に列記している。たとえば、「男性・無配偶・正社員」の場合、「0100」つまり職場関係の人にだけ相談するというパターンが15.5%を占めて最も多く、次に多いのは「1110」つまり家族・職場関係の人・友人に相談するというパターンで、13.0%を占めている、という形である。

⁹ 「今の仕事」の場合、相談ネットワークが「0000」である人は106人（その悩みがある人全体=その悩みの相談ネットワークの回答が得られている人全体の7.5%）で、そのうち「誰もいない」と回答しているのは77.4%（82人）である。同様に、「これからの生き方」・「人間関係」・「経済的問題」の場合、それぞれ「0000」である人は131人（同8.8%）・106人（8.3%）・161人（12.2%）で、そのうち71.8%（94人）・72.6%（77人）・83.9%（135人）が「誰もいない」と回答している。

¹⁰ 「自営・家業」などは、該当者数が多くないことや、典型雇用／非典型雇用の間で対比するという関心から、ここでは割愛した。

図表4-10で女性・無配偶の場合をみると、「1110」（家族・職場関係・友人）が正社員および非典型雇用で最も多くなっているが、無業では一転して非常にわずかな割合になっている。また、正社員で10.2%と2番目に多い「1100」（家族・職場関係）や、9.7%で4番目に多い「0100」（職場関係のみ）は、非典型雇用ではそれぞれ7.7%・7.3%、無業ではどちらも5.9%と、その割合を減らしている。以上のように、職場関係を含む相談ネットワークのパターンは、「正社員>非典型雇用>無業」という関係に近いものがみられる。一方、「1000」（家族のみ）は正社員では6.8%にとどまっているが、非典型雇用では10.7%で2番目に多いパターンとなり、無業では32.4%と最多のパターンとなっており、「正社員<非典型雇用<無業」という関係が確認できる。「0010」（友人のみ）や「0000」（相手がいない¹¹）などについても、同様の関係がみられる。大まかな傾向ではあるが、少なくとも女性に関しては、2006年調査で見出された傾向が、2011年調査でもある程度みられるといえるだろう。

図表4-10 「今の自分の仕事や働き方」についての悩みの相談ネットワーク
(2011年調査、20~29歳、%)

男性・無配偶・20~29歳						女性・無配偶・20~29歳					
正社員(公務含む)		非典型雇用		無業、その他		正社員(公務含む)		非典型雇用		無業、その他	
0100	15.5	0100	17.5	0000	26.1	1110	13.4	1110	14.2	1000	32.4
1110	13.0	1110	13.9	1000	26.1	1100	10.2	1000	10.7	0000	8.8
0000	12.4	1000	12.4	0010	13.0	1111	10.2	1010	10.3	0010	8.8
0110	10.2	0000	10.9	1010	13.0	0100	9.7	1100	7.7	1010	8.8
1010	8.4	1010	10.9	1100	6.5	0110	8.1	0010	7.3	1011	8.8
1100	8.0	0110	8.8	0001	4.3	1010	7.3	0100	7.3	0001	5.9
1000	7.7	1100	5.8	1011	4.3	1000	6.8	0110	6.4	0100	5.9
0010	5.3	0010	5.1	1110	4.3	0010	5.2	1011	5.2	0110	5.9
1111	3.7	0001	2.2	0110	2.2	1001	5.2	1111	5.2	1100	5.9
0001	3.1	0011	2.2	0011	0.0	1101	5.0	0000	4.7	1001	2.9
0011	2.2	0111	2.2	0100	0.0	1011	4.2	1001	4.7	1110	2.9
0101	2.2	1101	2.2	0101	0.0	0011	3.9	1101	4.3	1111	2.9
0111	2.2	1111	2.2	0111	0.0	0000	3.4	0011	3.9	0011	0.0
1011	2.2	0101	1.5	1001	0.0	0111	3.4	0001	3.4	0101	0.0
1101	2.2	1011	1.5	1101	0.0	0001	2.4	0101	2.6	0111	0.0
1001	1.9	1001	0.7	1111	0.0	0101	1.3	0111	2.1	1101	0.0
n(人)	323	n(人)	137	n(人)	46	n(人)	381	n(人)	233	n(人)	34

男性・有配偶・20~29歳		女性・有配偶・20~29歳	
正社員(公務含む)		非典型雇用	
0001	19.3	0001	21.4
0100	18.1	1101	22.6
0101	10.8	1111	16.1
1101	9.6	1011	14.3
0111	8.4	0101	12.9
1111	8.4	1001	9.7
1011	7.2	0100	3.2
1001	4.8	0110	3.2
0000	3.6	1000	3.2
0011	3.6	1010	3.2
0110	2.4	0000	0.0
1000	2.4	0010	0.0
1110	1.2	0011	0.0
0010	0.0	0111	0.0
1010	0.0	0110	0.0
1100	0.0	1100	0.0
n(人)	83	n(人)	31
		n(人)	28

¹¹ 上述したとおり、「0000」に含まれるのは相談相手が一切いないケースだけではないが、その過半数を占めるのが「誰もいない」という回答であることを考慮し、要約的に表現する際は「相手がいない」と表すことにする。

男性についてみると、正社員で最も多い「0100」（職場関係のみ）は、非典型雇用でも最も多くなっており、両者でともに2番目に多い「1110」（家族・職場関係・友人）ともども、正社員と非典型雇用で割合の数値も同水準である。「0100」も「1110」も無業では著しく割合の数値が下がっているものの、正社員と非典型雇用の割合の違いは顕著ではなく、むしろ全体として両者の相談ネットワークのパターンの分布は近いものになっている。「1000」（家族のみ）や「0000」（相手がいない）のように、その割合が「正社員<非典型雇用<無業」となっているものもあるが、2006年調査でみられた正社員と非典型雇用の間の違いは、男性に関しては曖昧になっている。

そうした状況がより明確にわかるのが、図表4-11である。これは、4つのチャンネルがそれぞれ相談相手として選ばれているパターンの合計割合を、2006年調査と今回の調査と並列的に整理して示したものである¹²。2006年調査の表をみると、男性・女性のどちらについても、職場関係の人を選んでいる割合が、正社員が非典型雇用よりも、そして非典型雇用が無業よりも多くなっており、「正社員>非典型雇用>無業」という関係が、より明確に成立していたことがうかがえる。また、男性で顕著に表れているが、家族や「0000」については「正社員<非典型雇用<無業」という関係が確認できる。「恋人」については、男性で「正社員>非典型雇用」となっていることがわかる。

図表4-11 「今の自分の仕事や働き方」についての悩みの、相談チャンネルごとの選択割合（2011年調査・2006年調査、20～29歳、%）

男性・無配偶・20～29歳				女性・無配偶・20～29歳			
2011年	正社員(公務含む)	非典型雇用	無業、その他	2011年	正社員(公務含む)	非典型雇用	無業、その他
家族	47.1	49.6	54.3	家族	62.5	62.2	64.7
職場関係	57.0	54.0	13.0	職場関係	61.4	49.8	23.5
友人	47.1	46.7	37.0	友人	55.9	54.5	38.2
恋人	19.5	14.6	8.7	恋人	35.7	31.3	20.6
「0000」	12.4	10.9	26.1	「0000」	3.4	4.7	8.8
n(人)	323	137	46	n(人)	381	233	34
2006年	正社員(公務含む)	非典型雇用	無業、その他	2006年	正社員(公務含む)	非典型雇用	無業、その他
家族	36.0	41.2	45.0	家族	52.7	52.0	72.7
職場関係	65.3	45.6	20.0	職場関係	66.2	52.0	22.7
友人	49.6	48.5	45.0	友人	58.1	55.1	77.3
恋人	24.8	9.6	15.0	恋人	34.2	37.8	31.8
「0000」	4.5	10.3	20.0	「0000」	4.2	1.5	0.0
n(人)	242	136	20	n(人)	260	196	22

¹² たとえば家族の場合だと、各パターンのうち家族を選んでいる8つ（「1000」「1001」「1010」「1011」「1100」「1101」「1110」「1111」）の割合の合計を載せている。

しかし、2011年調査の結果では、女性に関しては、職場関係で「正社員＞非典型雇用＞無業」という関係が引き続きみられるものの、男性に関しては、職場関係の人を選んだ割合において正社員と非典型雇用の間の差は約3ポイントとかなり小さくなっている。男性の場合、正社員と非典型雇用の間の差が小さくなっているのは家族・「0000」なども同様であり、恋人もまだ正社員の方が約5ポイント上回っているものの、2006年に比べて差は縮まっている。つまり、2011年の結果は、女性に関しては職場関係で「正社員＞非典型雇用＞無業」という関係が明確にみられ、他の部分で正社員と非典型雇用の差はそれほど大きくない（という、2006年にもみられた結果が引き続き確認できた）のに対して、男性は職場関係も含むすべての相談チャンネルで正社員と非典型雇用の差が小さくなり、両者の相談ネットワークの差が2006年に比べて曖昧になっていることがわかった。

実際の割合の数値に注目すると、家族に関しては男女とも正社員・非典型雇用とも2006年の数値から10ポイント前後の上昇がみられ、相談相手としての家族の存在の高まりが確認できる。また男性の正社員で、職場関係が8ポイント近く減少し、恋人も約5ポイント減少したのに対して、男性の非典型雇用では、職場関係が約8ポイント増加し、恋人は約5ポイント減少と、ちょうど反対の動きがみられ、両者の差を縮めた動きをみることができる。そして、「0000」（相手がいない）つまり家族・職場関係・友人・恋人のいずれも相談相手に選んでいないパターンの割合では、非典型雇用でほとんど変わっていないのに対して、男性の正社員では4.5%から12.4%に大きく増加していることも注目される。

なお、有配偶者の場合は、図表4-10にみるように男女とも職場関係に加えて配偶者が相談相手に選ばれているパターンの割合が非常に多く、有配偶者にとって配偶者は相談相手としてきわめて大きな存在になっていることがわかる。その中でも「0001」（配偶者のみ）は表に示したもののすべてで最も多くなっている。また職場関係は、配偶者に次いで高い割合となっているが、女性ではやはり正社員でより高い割合を占めている。こうした傾向は、2006年とおおむね同様の結果である。

以上から、「今の仕事」についての悩みの相談ネットワークに関しては、以下の諸点が指摘できる。無配偶者の場合、2006年にみられた、職場関係の人を選ぶ割合は「正社員＞非典型雇用＞無業」になるという傾向は、2011年の結果では女性に関してのみ見出せる。男性に関しては、正社員と非典型雇用の相談ネットワークの状況が、職場関係以外も含めて全体としてかなり近いものになっており、2006年のような両者の差は曖昧になっている。その変化は、正社員と非典型雇用がお互いに近づいた（職場関係と恋人の割合）面もあるが、正社員が非典型雇用に近づいた（「相手がいない」の大きな増加）面もみられることが注目される。こうした変化に伴い、2006年にみられた、職場関係の人が相談相手として選ばれないとき、友人や家族がより選ばれるようになるという代替の関係は、2011年の結果ではやや曖昧なものとなっている。有配偶者では、男女とも配偶者が特に主要な相談相手となっている。

次に、「これからの生き方や働き方」についての悩みに関して検討しよう。

図表4-12をみると、無配偶の男性のうち、正社員では「0000」（相手がいない）が最も多い（13.7%）という結果になっている。これは2006年には4.8%だったのが、「今の仕事」の場合と同様に今回大きく割合が伸びており、非典型雇用よりもその割合は若干高くなっている。職場関係を含むネットワークのパターンは、これもやはり必ずしも「正社員>非典型雇用>無業」という関係は明確ではなく、正社員と非典型雇用の差ははっきりしていない。ただし「1000」（家族のみ）は、正社員・非典型雇用・無業のそれぞれで、10.2%・19.2%・35.6%という「正社員<非典型雇用<無業」の関係がみられる。2006年調査ほど明瞭ではないものの、「今の仕事」についての悩みの場合に比べて、「これからの生き方」では職場関係以上に家族という職場以外の相談チャンネルの存在感が大きくなっている。

図表4-12 「これからの生き方や働き方」についての悩みの相談ネットワーク
(2011年調査、20~29歳、%)

男性・無配偶・20~29歳						女性・無配偶・20~29歳					
正社員(公務含む)		非典型雇用		無業、その他		正社員(公務含む)		非典型雇用		無業、その他	
0000	13.7	1000	19.2	1000	35.6	1110	10.1	1000	15.0	1000	26.3
0010	10.2	0100	11.6	0000	20.0	0110	9.6	0010	12.6	0000	15.8
1000	10.2	0000	10.3	1010	15.6	1000	9.1	1110	11.0	1010	15.8
0100	9.9	0010	10.3	0010	11.1	1010	9.1	1010	10.6	1110	7.9
0110	9.3	1110	10.3	1110	4.4	1001	8.6	0000	6.9	0001	5.3
1110	9.3	1010	7.5	0001	2.2	0010	7.8	1100	6.1	0010	5.3
1010	8.5	0110	6.8	0101	2.2	1111	6.8	0011	5.3	0100	5.3
1100	6.1	1100	4.8	0110	2.2	0100	6.6	1001	5.3	1001	5.3
0001	5.0	0001	4.1	1001	2.2	1011	5.8	1011	4.9	1011	5.3
0011	4.1	1111	4.1	1011	2.2	1100	5.6	1111	4.9	0011	2.6
1101	3.5	0011	3.4	1100	2.2	0000	5.1	0110	4.1	1100	2.6
0111	2.6	1001	3.4	0011	0.0	0001	4.5	1101	3.7	1111	2.6
1111	2.6	0101	2.1	0100	0.0	0111	3.8	0001	3.3	0101	0.0
0101	2.0	0111	1.4	0111	0.0	1101	3.3	0100	3.3	0110	0.0
1001	1.5	1101	0.7	1101	0.0	0011	3.0	0101	2.0	0111	0.0
1011	1.5	1011	0.0	1111	0.0	0101	1.3	0111	1.2	1101	0.0
n(人)	343	n(人)	146	n(人)	45	n(人)	396	n(人)	246	n(人)	38

男性・有配偶・20~29歳		女性・有配偶・20~29歳	
正社員(公務含む)		正社員(公務含む)	
0001	26.7	0001	25.0
0101	12.2	1001	18.8
1111	10.0	1111	15.6
0100	6.7	1101	12.5
0111	6.7	1000	9.4
1011	6.7	1011	6.3
1101	6.7	0000	2.6
0000	5.6	0000	3.1
1000	5.6	0101	3.1
1001	5.6	1100	3.1
0010	4.4	1110	3.1
0011	3.3	0010	0.0
0110	0.0	0011	0.0
1010	0.0	0100	0.0
1100	0.0	0110	0.0
1110	0.0	0111	0.0
n(人)	90	n(人)	32

女性・有配偶・20~29歳	
非典型雇用	
0001	34.2
1001	28.9
0011	7.9
1011	7.9
1101	7.9
0000	2.6
0010	2.6
0100	2.6
1100	2.6
1110	2.6
0100	0.0
0011	0.0
0100	0.0
0110	0.0
0111	0.0
0111	0.0
1010	0.0
n(人)	38

無配偶の女性の場合、「0110」（職場関係・友人）など、職場関係を含むネットワークのパターンで、「正社員>非典型雇用>無業」という関係がみられるものがある。そして男性と同様に、「1000」（家族のみ）は「正社員<非典型雇用<無業」という関係になっている。女性についても、今ではなくこれからを考えると、職場関係にとどまらない、より長い（ある

いは深い) 関わりのある別の人間関係にこそ相談するということなのかもしれない。なお有配偶者の男女では、やはり配偶者が相談相手として抜きん出ているようである。

さらに図表4-13をみると、無配偶の男性では、2006年には職場関係で「正社員>非典型雇用>無業」という関係があることがうかがえ、恋人については正社員と非典型雇用の差は小さくない。しかし2011年には、職場関係・恋人の両方で、正社員と非典型雇用の割合の差は5ポイント以下にまで縮まり、「今の仕事」の場合と同様に両者の差は曖昧になっている。また正社員で「相手がない」が大きく増加しているのも同じである。その中で、家族に関してどちらの年も「正社員<非典型雇用<無業」という関係がみられるという特徴もある。無配偶の女性では、「正社員>非典型雇用>無業」という関係が2006年に続いて2011年にもみられることがわかる。

図表4-13 「これからの生き方や働き方」についての悩みの、相談チャンネルごとの選択割合(2011年調査・2006年調査、20~29歳、%)

男性・無配偶・20~29歳				女性・無配偶・20~29歳			
2011年	正社員(公務含む)	非典型雇用	無業、その他	2011年	正社員(公務含む)	非典型雇用	無業、その他
家族	43.1	50.0	62.2	家族	58.3	61.4	65.8
職場関係	45.5	41.8	11.1	職場関係	47.0	36.2	18.4
友人	48.1	43.8	35.6	友人	56.1	54.5	39.5
恋人	22.7	19.2	8.9	恋人	37.1	30.5	21.1
「0000」	13.7	10.3	20.0	「0000」	5.1	6.9	15.8
n(人)	343	146	45	n(人)	396	246	38
2006年	正社員(公務含む)	非典型雇用	無業、その他	2006年	正社員(公務含む)	非典型雇用	無業、その他
家族	41.1	44.9	50.0	家族	55.0	54.2	70.8
職場関係	44.1	35.3	16.7	職場関係	43.6	31.3	8.3
友人	50.4	53.3	45.8	友人	56.4	59.5	66.7
恋人	27.0	10.8	12.5	恋人	35.3	38.8	37.5
「0000」	4.8	11.4	16.7	「0000」	3.5	5.3	0.0
n(人)	270	167	24	n(人)	260	196	22

続いて、「人間関係」についての悩みである。図表4-14ではややわかりにくいだが、図表4-15をみると、職場関係に関して、この悩みについては無配偶の女性だけでなく男性についても、2006年・2011年とも「正社員>非典型雇用>無業」という関係がみられることがわかる。また両年とも、家族を選ぶ割合が、無配偶の男女間で就業状況によらず大きく異なっている。男性にとって、人間関係の悩みの相談相手として家族は優先度が低い存在なのかもしれない。そしてこの悩みでも、無配偶の男性正社員で「0000」(相手がない)の割合が大きく伸びていることが確認できる。なお有配偶者での配偶者の存在の大きさは、これまでの悩みと同様である。

図表4-14 「人間関係」についての悩みの相談ネットワーク
(2011年調査、20~29歳、%)

「人間関係」についての悩みの相談ネットワーク

男性・無配偶・20~29歳

正社員(公務含む)	非典型雇用	無業、その他
0100	18.1	0100 20.2 1000 31.4
0010	17.0	0010 17.4 0010 22.9
0110	13.0	0000 13.8 0000 17.1
0000	10.8	1000 11.9 0100 5.7
1000	6.5	0011 8.3 1010 5.7
0011	5.8	0110 7.3 1100 5.7
1110	5.8	0001 4.6 1110 5.7
0001	5.4	1010 4.6 0101 2.9
1010	4.0	1100 3.7 0110 2.9
1100	4.0	1110 3.7 0001 0.0
0111	2.9	0111 1.8 0011 0.0
1111	2.5	1111 1.8 0111 0.0
1101	1.8	0101 0.9 1001 0.0
0101	1.1	1001 1.1 1011 0.0
1001	0.7	1011 1.1 1101 0.0
1011	0.7	1101 1.1 1111 0.0
n(人)	277	n(人) 109 n(人) 35

「人間関係」についての悩みの相談ネットワーク

女性・無配偶・20~29歳

正社員(公務含む)	非典型雇用	無業、その他
0110	10.7	1010 13.5 1000 25.7
1110	10.7	0010 12.6 0000 17.1
0100	9.9	1110 10.7 1010 14.3
0010	9.4	0100 9.3 0001 11.4
1111	8.3	0000 7.4 0010 8.6
1010	7.5	0110 7.4 1011 8.6
1000	7.2	1000 7.4 0100 5.7
1011	5.9	0011 5.1 0110 2.9
1100	5.6	1100 4.7 0111 2.9
0001	4.5	1011 4.2 1110 2.9
0000	4.3	1001 3.7 0011 0.0
0111	4.0	0001 3.3 0101 0.0
0011	3.7	0111 3.3 1001 0.0
1001	3.5	1111 3.3 1100 0.0
1101	2.7	1101 2.8 1101 0.0
0101	2.1	0101 1.4 1111 0.0
n(人)	374	n(人) 215 n(人) 35

男性・有配偶・20~29歳

正社員(公務含む)	
0001	35.2
0100	11.3
0101	8.5
0111	8.5
1111	8.5
1001	7.0
0000	5.6
0011	5.6
0010	4.2
1000	2.8
0110	1.4
1011	1.4
1010	0.0
1100	0.0
1101	0.0
1110	0.0
n(人)	71

女性・有配偶・20~29歳

正社員(公務含む)	非典型雇用
0001	23.3 1001 26.9
0101	13.3 0101 19.2
1000	13.3 0001 11.5
1001	13.3 0011 11.5
1011	10.0 1011 7.7
1111	10.0 1101 7.7
1101	6.7 0010 3.8
0011	3.3 0100 3.8
0110	3.3 1000 3.8
0111	3.3 1010 3.8
0000	0.0 0000 0.0
0010	0.0 0110 0.0
0100	0.0 0111 0.0
1010	0.0 1100 0.0
1100	0.0 1110 0.0
1110	0.0 1111 0.0
n(人)	30 n(人) 26

図表 4-15 「人間関係」についての悩みの、相談チャンネルごとの
選択割合（2011年調査・2006年調査、20～29歳、％）

男性・無配偶・20～29歳

2011年	正社員(公 務含む)	非典型雇 用	無業、そ の他
家族	26.0	25.7	48.6
職場関係	49.1	39.4	22.9
友人	51.6	45.0	37.1
恋人	20.9	17.4	2.9
「0000」	10.8	13.8	17.1
n(人)	277	109	35

2006年	正社員(公 務含む)	非典型雇 用	無業、そ の他
家族	25.3	17.4	35.7
職場関係	50.7	44.0	14.3
友人	53.8	61.5	64.3
恋人	21.7	11.0	21.4
「0000」	5.0	9.2	14.3
n(人)	221	109	14

女性・無配偶・20～29歳

2011年	正社員(公 務含む)	非典型雇 用	無業、そ の他
家族	51.3	50.2	51.4
職場関係	54.0	42.8	14.3
友人	60.2	60.0	40.0
恋人	34.8	27.0	22.9
「0000」	4.3	7.4	17.1
n(人)	374	215	35

2006年	正社員(公 務含む)	非典型雇 用	無業、そ の他
家族	40.1	42.9	73.7
職場関係	49.4	38.3	15.8
友人	61.9	59.7	63.2
恋人	32.3	37.2	36.8
「0000」	3.9	5.1	0.0
n(人)	257	196	19

最後に、「経済的な問題」についての悩みであるが（図表 4-16）、この悩みについては「1000(家族のみ)」が就業状態を問わず無配偶の男女のすべてにおいて最も多くなっており、しかも非常に高い割合で、他のものに大きく差をつけている。お金に関わる悩みは家族以外に相談しにくいという感覚が広く共有されていることをうかがわせる結果だが、これは2006年の調査でも同様の結果が確認されている。2006年と異なるのは、就業状態によらず無配偶の男女のすべてにおいて、「0000」（相手がいない）が2番目に多くなっているという点である。2006年も「相手がいない」はある程度選ばれていたが、2011年では特に男女の非典型雇用と無業でその割合が伸び、このような結果になっている。そしてこの悩みも、図表 4-17をみると、職場関係に関して、無配偶の男性・女性の両方で、2006年・2011年とも「正社員>非典型雇用>無業」という関係があることがわかる。有配偶者については、他の悩みと同様に配偶者の存在が大きい、加えて「1001」（家族・配偶者）の割合も大きく、無配偶者にみられた家族の存在の大きさは有配偶者にも共通していることがわかる。

図表 4-16 「経済的な問題（お金のこと）」についての悩みの相談ネットワーク
(2011年調査、20~29歳、%)

正社員(公務含む)						非典型雇用						無業、その他					
1000	31.0	1000	36.4	1000	45.2	1000	40.4	1000	36.6	1000	48.5						
0000	14.6	0000	17.1	0000	26.2	0000	8.8	0000	12.1	0000	18.2						
1100	8.2	1010	8.6	0010	9.5	1001	7.9	1010	12.1	1001	9.1						
0001	6.4	0010	5.7	1010	7.1	1100	6.1	0001	7.3	1010	9.1						
1010	6.0	0100	5.7	0001	2.4	1010	5.8	1110	6.0	1011	6.1						
0010	5.3	1001	5.7	0110	2.4	0001	4.6	1001	4.7	0001	3.0						
0100	5.3	1100	5.0	1001	2.4	1110	4.6	1100	4.7	0100	3.0						
1110	5.3	1110	5.0	1101	2.4	0010	4.0	1011	3.4	1100	3.0						
0110	4.6	0110	3.6	1110	2.4	0100	3.6	0110	2.6	0010	0.0						
1001	4.6	0001	2.1	0011	0.0	0110	3.6	0100	2.2	0011	0.0						
1111	2.1	1111	2.1	0100	0.0	1111	3.3	1111	2.2	0101	0.0						
0011	1.8	1011	1.4	0101	0.0	1011	2.7	0010	1.7	0110	0.0						
0111	1.4	0101	0.7	0111	0.0	1101	2.1	0011	1.3	0111	0.0						
0101	1.1	0111	0.7	1011	0.0	0011	1.2	1101	1.3	1101	0.0						
1011	1.1	0011	0.0	1100	0.0	0111	0.9	0101	0.9	1110	0.0						
1101	1.1	1101	0.0	1111	0.0	0101	0.3	0111	0.9	1111	0.0						
n(人)	281	n(人)	140	n(人)	42	n(人)	329	n(人)	232	n(人)	33						

男性・有配偶・20~29歳		女性・有配偶・20~29歳	
正社員(公務含む)		正社員(公務含む)	
0001	36.6	0001	43.5
1001	26.8	1001	30.4
0000	7.3	1011	10.0
1000	7.3	0000	6.5
1101	6.1	0000	3.3
1111	4.9	0010	3.3
0101	3.7	0101	3.3
0011	2.4	0110	3.3
0100	2.4	1000	3.3
0111	1.2	1101	3.3
1011	1.2	1111	3.3
0010	0.0	0011	0.0
0110	0.0	0100	0.0
1010	0.0	0110	0.0
1100	0.0	0010	0.0
1110	0.0	0111	0.0
n(人)	82	n(人)	46

図表 4-17 「経済的な問題（お金のこと）」についての悩みの、相談チャンネルごとの
選択割合（2011年調査・2006年調査、20~29歳、%）

男性・無配偶・20~29歳

2011年	正社員(公務含む)	非典型雇用	無業、その他
家族	59.4	64.3	59.5
職場関係	29.2	22.9	7.1
友人	27.8	27.1	21.4
恋人	19.6	12.9	7.1
「0000」	14.6	17.1	26.2
n(人)	281	140	42

女性・無配偶・20~29歳

2011年	正社員(公務含む)	非典型雇用	無業、その他
家族	72.9	71.1	75.8
職場関係	24.6	20.7	6.1
友人	26.1	30.2	15.2
恋人	23.1	22.0	18.2
「0000」	8.8	12.1	18.2
n(人)	329	232	33

2006年

2006年	正社員(公務含む)	非典型雇用	無業、その他
家族	58.7	63.4	71.4
職場関係	29.6	17.6	9.5
友人	20.4	30.1	38.1
恋人	18.3	10.5	9.5
「0000」	12.2	11.8	0.0
n(人)	230	153	21

2006年

2006年	正社員(公務含む)	非典型雇用	無業、その他
家族	72.6	67.0	70.0
職場関係	20.3	15.5	5.0
友人	23.6	31.1	25.0
恋人	26.6	33.5	20.0
「0000」	7.2	6.3	5.0
n(人)	237	206	20

以上、4つの悩みごとに相談ネットワークの広がりについて検討してきた。2006年の調査での主要な発見であった、「職場関係の人を選ぶ割合が、「正社員>非典型雇用>無業」となる傾向」は、2011年の調査結果では、無配偶の女性に関しては2006年に続いておおむね同様の傾向がみられた。しかし、無配偶の男性に関して、特に「今の仕事」と「これからの生き方」の二つの悩みについては、正社員と非典型雇用との間の相談ネットワークの違いは曖昧になっており、正社員と非典型雇用との間で職場関係の人を選ぶ割合に顕著な違いはみられなくなっていた。また、2006年の結果でみられた職場関係と家族や友人との代替関係も、それに伴い曖昧になっていた。そして、無配偶の男性正社員において、多くの悩みで「相手がない」という人の割合の増加が確認された。これは2006年には、職場関係が加わらない分を代替しきれず「相手がない」になると考えられたが、2011年は職場関係が加わりやすいと想定されていた正社員で「相手がない」が増えており、この面でも代替という形ではとらえきれないことになっていると思われる。

2006年の結果の示唆として、職場が相談相手を提供する場として重要性をもつこと、特に正社員にとってそうであり、非典型雇用ではそれほどではなく、無業ではきわめて希薄になるということがあった。しかし2011年の結果では、無業はともかくとして、悩みの種類によっては、非典型雇用だからといって正社員よりも職場関係の相談相手がいる可能性が低いとは限らなくなっている。少なくとも20代の無配偶者の男性の場合、非典型雇用であるからといって“世界”が広がりにくくなっているとは言いにくくなっている。

正社員の側からみても、特に男性の正社員において「相手がない」という人の割合は、2011年の結果では非典型雇用と同水準かそれ以上に達している。正社員であるからといって相談相手の存在が保障されるというわけではなく、「相手がない」という事態が起こるリスク自体は、少なくとも20代の無配偶男性については、正社員と非典型雇用のあいだで顕著な差がみられなくなりつつあるといえる。

第5節 相談チャンネル数の状況

相談ネットワークの選択状況を検討した前節に続き、本節では、複数の相談チャンネルを利用しているかどうかという点に注目して分析する。前節でもある程度視野に入れて論じていたが、個々の悩みの相談相手の選択が、限られた相談チャンネルのみを選んでいるのか、それとも複数の相談チャンネルを選んでいるのかという点に焦点を合わせて検討する。ここでは特に、無配偶者に限って検討する。

個々の悩みに対する相談ネットワークのパターンを、相談チャンネル数によって集約し集計しなおしたのが図表4-18~21である。相談チャンネル数とは、4つの相談先（家族、職場関係、友人、恋人・配偶者）のうちいくつを選択しているかである。たとえば、これらの表で相談チャンネル数が3の欄にある数値（%）は、「0111」「1011」「1101」「1110」の4パターンの相談ネットワークの合計割合である。そしてここでは、平均相談チャンネル数

に注目する。2006年の結果では、正社員・非典型雇用・無業で平均相談チャンネル数を比較したとき、多くの悩みで男女とも正社員ほど相談チャンネル数が多く、非典型雇用はそれより少なく、無業はさらに少ないという、「正社員＞非典型雇用＞無業」という傾向がうかがえた。その背景には、相談チャンネル数に職場関係が加わる度合いが高い（正社員ほど職場関係に相談相手を有している分、チャンネル数が多くなる）と考えられた。その結果と比較するために、図表4-18～21には、それぞれ2006年の平均相談チャンネル数も記載している。順にみていこう。

「今の仕事」についての悩みの場合（図表4-18）、男女とも正社員ほど相談チャンネル数が多く、無業ほど相談チャンネル数が少ないという傾向がみられる。ただし男性の場合、正社員と非典型雇用の間での相談チャンネル数の差はわずかであり（1.71と1.65の差）、女性と比べて「正社員＞非典型雇用＞無業」という関係は明確なものではない。相談チャンネル数でも、正社員と非典型雇用との差は、男性の場合2006年に比べてやはり曖昧なものになっていることがわかる。そしてそのような変化は、相談チャンネル数からみる限りでは、正社員の側ではなく非典型雇用の側の変化（チャンネル数の増加）によるものである。男性の正社員は、既にみたようにチャンネル数が「0」（すなわち相談ネットワークが「0000」（相手がいない））の割合が2006年に比べ大きく増加し、非典型雇用よりも高い割合になっているが、平均相談チャンネル数自体の2006年からの変化は、微減にとどまっている。一方、女性の場合は相談チャンネル数が明確に「正社員＞非典型雇用＞無業」となっている。相談チャンネル数が「0」の割合も無業ほど高く、相談ネットワークに職場関係が加わらない分の差（の一部）が、平均相談チャンネル数の差に現れていると思われる。また女性の場合、2006年もみられた特徴であるが、全般に平均相談チャンネル数が男性よりも多く、女性が男性よりも多チャンネルの相談ネットワークを有していることがわかる。なお女性の方が多いという点は、後述の他の悩みも含め4つの悩みすべてに共通している。

図表4-18 今の自分の仕事や働き方についての悩みと相談チャンネル数
(20～29歳、%)

チャンネル数	男性・無配偶・正社員	男性・無配偶・非典型	男性・無配偶・無業その他	チャンネル数	女性・無配偶・正社員	女性・無配偶・非典型	女性・無配偶・無業その他
0	12.4	10.9	26.1	0	3.4	4.7	8.8
1	31.6	37.2	43.5	1	24.1	28.8	52.9
2	32.8	29.9	21.7	2	36.2	35.6	23.5
3	19.5	19.7	8.7	3	26.0	25.8	11.8
4	3.7	2.2	0.0	4	10.2	5.2	2.9
平均チャンネル数	1.71	1.65	1.13	平均チャンネル数	2.15	1.98	1.47
2006年	1.76	1.45	1.25	2006年	2.11	1.97	2.05
n(人)	323	137	46	n(人)	381	233	34

「これからの生き方」についての悩みの場合（図表4-19）も、「今の仕事」のときと同様に、男女とも平均相談チャンネル数は「正社員＞非典型雇用＞無業」となっているものの、女性では正社員・非典型雇用・無業の間の数値の差がある程度明確なのに対して、男性では正社員と非典型雇用の間の差が小さい（1.59 と 1.55）ため、やや曖昧な関係となっている。またこの悩みでも、男性では正社員で相談チャンネル数が「0」の割合が高くなっているが、そのことが 2006 年に比べて全体の平均相談チャンネル数を顕著に下げるまでには至っていない（これは他の悩みでも共通している）。

図表4-19 これからの生き方や働き方についての悩みと相談チャンネル数
(20～29 歳、%)

チャンネル数	男性・無配偶・正社員	男性・無配偶・非典型	男性・無配偶・無業その他	チャンネル数	女性・無配偶・正社員	女性・無配偶・非典型	女性・無配偶・無業その他
0	13.7	10.3	20.0	0	5.1	6.9	15.8
1	35.3	45.2	48.9	1	28.0	34.1	42.1
2	31.5	28.1	24.4	2	37.1	33.3	26.3
3	16.9	12.3	6.7	3	23.0	20.7	13.2
4	2.6	4.1	0.0	4	6.8	4.9	2.6
平均チャンネル数	1.59	1.55	1.18	平均チャンネル数	1.98	1.83	1.45
2006年	1.63	1.44	1.25	2006年	1.90	1.84	1.83
n(人)	343	146	45	n(人)	396	246	38

「人間関係」（図表4-20）についての悩みは、前二者と同様に男女とも平均相談チャンネル数は「正社員＞非典型雇用＞無業」となっており、しかもこの悩みでは男性においても正社員と非典型雇用の差はある程度明確になっている。

図表4-20 人間関係についての悩みと相談チャンネル数
(20～29 歳、%)

チャンネル数	男性・無配偶・正社員	男性・無配偶・非典型	男性・無配偶・無業その他	チャンネル数	女性・無配偶・正社員	女性・無配偶・非典型	女性・無配偶・無業その他
0	10.8	13.8	17.1	0	4.3	7.4	17.1
1	46.9	54.1	60.0	1	31.0	32.6	51.4
2	28.5	24.8	17.1	2	33.2	35.8	17.1
3	11.2	5.5	5.7	3	23.3	20.9	14.3
4	2.5	1.8	0.0	4	8.3	3.3	0.0
平均チャンネル数	1.48	1.28	1.11	平均チャンネル数	2.00	1.80	1.29
2006年	1.52	1.34	1.36	2006年	1.84	1.78	1.89
n(人)	277	109	35	n(人)	374	215	35

「経済的な問題」(図表4-21)は、既にみたように家族への集中度が高いこともあってやや他と傾向が異なることも予想されたが、結果としてはこれも男女とも平均相談チャンネル数は「正社員>非典型雇用>無業」という関係になっている。ただし男女とも正社員と非典型雇用の差は小さく、また家族への集中ゆえにチャンネル数の値も他の悩みに比べて小さいものになっている。

図表4-21 経済的な問題(お金のこと)についての悩みと相談チャンネル数
(20~29歳、%)

チャンネル数	男性・無配偶・正社員	男性・無配偶・非典型	男性・無配偶・無業その他	チャンネル数	女性・無配偶・正社員	女性・無配偶・非典型	女性・無配偶・無業その他
0	14.6	17.1	26.2	0	8.8	12.1	18.2
1	48.0	50.0	57.1	1	52.6	47.8	54.5
2	26.3	23.6	11.9	2	24.9	26.3	21.2
3	8.9	7.1	4.8	3	10.3	11.6	6.1
4	2.1	2.1	0.0	4	3.3	2.2	0.0
平均チャンネル数	1.36	1.27	0.95	平均チャンネル数	1.47	1.44	1.15
2006年	1.27	1.22	1.29	2006年	1.43	1.47	1.20
n(人)	281	140	42	n(人)	329	232	33

無業のケース数が多くないなどの理由で、統計的な有意性の検討を十分に行えないものもあり、あくまでも大まかな指摘として述べることにならざるを得ないが、その限りにおいてここで見出されたことを以下のようにまとめることができる。第一に、2006年調査の結果から見出された、正社員よりも非典型雇用の方が、そしてそれよりも無業の方が、相談ネットワークの平均チャンネル数が少数になる傾向は、2011年調査の結果からも(多少曖昧になっている面もあるものの)基本的に見出すことができる。非典型雇用や無業であることによって、単に相談チャンネルの一つとしての職場関係の分が欠けやすくなったり、さらには相談ネットワーク全体のあり方が多方向的でない形でつくられたりする可能性は、2006年調査ほどの明確さはないかもしれないが、基調として無視できないものである。第二に、第一の点の例外として、「今の仕事や働き方」についての悩み、および「これからの生き方や働き方」についての悩みという、自分自身の働き方や生き方に直接関わる悩みに関しては、第一の点は必ずしも明確ではないことがある。具体的には、この二つの悩みに関しては、無配偶の男性の正社員と非典型雇用の間で相談ネットワークや相談チャンネルの状況に大きな差はみられなくなっている。第三に、無配偶の男性の正社員において、家族・職場関係・友人・恋人のいずれにも相談相手をもたない人たちが、2006年調査より大きく増加して10%を上回るほどにまでなっている。

第二・第三の点は、20代の男性の仕事や生活の状況と今後の展開を考える上で、注目すべ

き点であるといえよう。以下では、それぞれについてさらなる検討を行う。

第6節 相談チャンネル数の年齢層別の推移

まず、「今の仕事や働き方」についての悩み、および「これからの生き方や働き方」についての悩みという、自分自身の働き方や生き方に直接関わる悩みに関しては、無配偶の男性の正社員と非典型雇用の間で相談ネットワークや相談チャンネルの状況に大きな差はみられなくなっているという点である。確かに、この二つの悩みに関する平均相談チャンネル数は、正社員の方が非典型雇用よりも若干多いものの、その差は0.1にも満たないわずかなものにすぎなかった。

では、その程度の差にすぎないのなら、今後は両者の差はさらに小さくなっていくのだろうか。あるいは、また別の展開を見せるのだろうか。そのことのヒントになりうる分析として、ここでは回答者の年齢層別に分けて検討することを試みる。つまり、これまでは20歳代の無配偶の男性たちをそのまま分析してきたが、これを20～24歳と25～29歳の二つの年齢層にわけて、平均相談チャンネル数を算出することにする。

その結果が、図表4-22である。二つの年齢層の間で、相談チャンネル数の関係がどうなっているかに着目すると、2011年の結果の場合、4つの悩みのほとんどで、20～24歳の正社員と非典型雇用間の数値の差よりも、25～29歳の数値の差の方が大きくなっている。たとえば「今の仕事」についての悩みの場合、年齢層に分けずに行った分析では無配偶男性の正社員と非典型雇用の割合は1.71と1.65であった(差は0.06)が、20～24歳では1.73と1.71(差は0.02)と、それよりもさらに近い値であった。しかし25～29歳では、1.69と1.58(差は0.11)となり、より広がっていることがこの表からわかる。

つまり、無配偶男性の正社員と非典型雇用間で、相談チャンネル数が近い値であったとしても、それは一時的な状態であって、その後加齢を経て差が広がっていく可能性がある。図表4-22に示したように、少なくとも20代の前半と後半で4つの悩みについて調べると、ほとんどの場合20代後半で平均相談チャンネル数の値の差は広がってしまっている。この傾向が続くのだとすれば、回答者が30代になったとき、さらに正社員と非典型雇用間で相談チャンネル数の差が広がることが予想される。

そして実際、2011年に同じ調査項目で30歳代の未婚者を対象に実施された調査¹³に関して、そのデータを分析すると、30～34歳の無配偶の男女では、4つの悩みのほとんどにおいて相談チャンネル数が「正社員>非典型雇用」となることが確認された。しかもこの正社員と非典型雇用の差は、非常に大きく顕著なものであった¹⁴。30歳代前半の無配偶の男性では、正社員の相談チャンネル数よりも非典型雇用の相談チャンネル数はきわめて少なくなっていた

¹³ 「第3回 若者のワークスタイル調査」と同じ調査票で、東京都の30歳代の男女を対象に2011年に実施された労働政策研究・研修機構の調査。

¹⁴ これは当該調査のクリーニング完了前のデータを、試行的に分析した暫定的な結果である。

のである。

図表4-22 年齢層別の平均相談チャンネル数（無配偶、20～29歳）

Q20a 今の自分の仕事や働き方について

男性・無配偶

	男性・無配偶・正社員	男性・無配偶・非典型	男性・無配偶・無業その他
2006年			
20～24歳	1.71	1.48	1.45
25～29歳	1.78	1.40	1.00
2011年			
20～24歳	1.73	1.71	1.11
25～29歳	1.69	1.58	1.15

女性・無配偶

	女性・無配偶・正社員	女性・無配偶・非典型	女性・無配偶・無業その他
2006年			
20～24歳	2.02	1.91	2.08
25～29歳	2.19	2.03	2.00
2011年			
20～24歳	2.20	2.07	1.50
25～29歳	2.11	1.79	1.40

Q20b これからの生き方や働き方について

男性・無配偶

	男性・無配偶・正社員	男性・無配偶・非典型	男性・無配偶・無業その他
2006年			
20～24歳	1.56	1.51	1.42
25～29歳	1.67	1.32	1.08
2011年			
20～24歳	1.53	1.57	1.18
25～29歳	1.64	1.52	1.18

女性・無配偶

	女性・無配偶・正社員	女性・無配偶・非典型	女性・無配偶・無業その他
2006年			
20～24歳	1.87	1.82	1.83
25～29歳	1.93	1.86	1.83
2011年			
20～24歳	1.93	1.87	1.46
25～29歳	2.04	1.74	1.42

Q20c 人間関係について

男性・無配偶

	男性・無配偶・正社員	男性・無配偶・非典型	男性・無配偶・無業その他
2006年			
20～24歳	1.45	1.43	1.40
25～29歳	1.56	1.19	1.25
2011年			
20～24歳	1.47	1.31	0.93
25～29歳	1.48	1.24	1.24

女性・無配偶

	女性・無配偶・正社員	女性・無配偶・非典型	女性・無配偶・無業その他
2006年			
20～24歳	1.76	1.79	2.10
25～29歳	1.90	1.77	1.67
2011年			
20～24歳	2.02	1.84	1.40
25～29歳	1.98	1.73	1.00

Q20d 経済的な問題(お金のこと)について

男性・無配偶

	男性・無配偶・正社員	男性・無配偶・非典型	男性・無配偶・無業その他
2006年			
20～24歳	1.22	1.28	1.18
25～29歳	1.31	1.11	1.40
2011年			
20～24歳	1.35	1.30	1.00
25～29歳	1.37	1.23	0.92

女性・無配偶

	女性・無配偶・正社員	女性・無配偶・非典型	女性・無配偶・無業その他
2006年			
20～24歳	1.39	1.46	1.10
25～29歳	1.46	1.49	1.30
2011年			
20～24歳	1.44	1.53	1.09
25～29歳	1.50	1.26	1.30

そのことから、2006年調査から見出された正社員／非典型雇用／無業の違いと相談ネットワークや相談チャンネル数の関連は、完全には否定しがたい、根強い傾向性なのだと考えられる。相談ネットワークに関して正社員の状況に非典型雇用の状況が近づいたからといっても、非典型雇用であり続けることは、将来的に相談チャンネル数が小さいものになってしまうリスクをはらんだものなのだとはいえよう。

第7節 無配偶男性正社員における「相談相手がいない」こと

続けて、無配偶の男性の正社員において、家族・職場関係・友人・恋人のいずれにも相談相手をもたない人たちが、2006年調査より大きく増加して4つの悩みのすべてで10%を上回るほどにまでなっていることについてである。この「相手がいない」人たちが、なぜ正社員において増加したのだろうか。

相談相手をもたないということの背景を探るにあたり、相談そのものを忌避しているからというように当事者の意識に原因を求めることもできるかもしれないが、ここではそうではなく、そもそも相談をすることが難しいような状況に置かれてしまっている可能性を考えることにしたい。そこでここでは、正社員が対象であることをふまえ、労働時間をとりあげることにする。

図表4-23は、無配偶の男性の正社員を対象に、4つの悩みについて、相談チャンネル数ごとに週の労働時間の平均値（上下5%を除いて算出）を整理したものである。きわだって顕著であるとまでは言いがたいものの、いずれの悩みについても相談チャンネル数が「0」つまり「相手がいない」人は、相談チャンネル数がより多い人よりも労働時間が長いことがうかがえる。

さらなる検討が必要ではあるものの、労働時間の長さゆえに、結果的に悩みの相談をするような関係を（あまり）もたない状態が帰結されてしまうという可能性は、考慮する必要があると思われる。

図表4-23 悩みの相談チャンネル数と週労働時間
(無配偶・男性・正社員、20~29歳)

相談チャンネル数	0	1	2	3	4
今の仕事	53.8	48.5	51.0	52.1	49.3
これからの働き方	52.6	49.6	49.3	52.6	49.2
人間関係	58.4	49.2	48.9	53.9	48.7
経済的な問題	53.8	50.1	50.2	50.1	44.0

注：上下5%を除いた平均値、単位は時間

第8節 おわりに

以上の考察から得られた知見を、以下にまとめる。

第一に、2006年調査の結果から見出された、悩みの相談相手に職場関係の人を選ぶ割合が「正社員＞非典型雇用＞無業」という関係になること、そしてそれと呼応して、正社員よりも非典型雇用の方が、そしてそれよりも無業の方が、相談ネットワークの平均チャンネル数が少数になる傾向は、2011年調査の結果からも（多少曖昧になっている面もあるものの）基本的に見出すことができる。非典型雇用や無業であることによって、相談チャンネルの一つとしての職場関係の分が欠けやすくなったり、さらには相談ネットワーク全体のあり方が多方向的でない形でつくられたりする可能性は、基調として今なお無視できないものである。

第二に、第一の点の例外として、「今の仕事や働き方」についての悩み、および「これからの生き方や働き方」についての悩みに関しては、無配偶の男性の正社員と非典型雇用の間で相談ネットワークや相談チャンネルの状況に大きな差はみられなくなっており、そのことが第一の点で述べた傾向を弱める結果になっている。

第三に、第二の点から、男性の非典型雇用であっても相談ネットワークに関しては問題がないとすることは適当とはいえない。年齢層を20～24歳および25～29歳に分けた検討からは、正社員と非典型雇用の間で差が小さくなったとしても一時的なもので、やがて両者の差は顕著になっていく可能性が高いと考えられるからである。

第四に、第一の点から、男性の正社員が悩みの相談相手に恵まれていると単純に言い切ることは適当とはいえない。男性の正社員では、相談相手のいない人の割合が2006年に比べて大きく増加しており、そうした人たちの今後は注視する必要がある。

ポイントとなる、「今の仕事や働き方」についての悩み、および「これからの生き方や働き方」についての悩みにおける、20代の無配偶男性の相談ネットワークにしぼって述べるならば、2006年の調査結果は、20代で正社員／非典型雇用であることが相談ネットワークのあり方に大きく影響していることを示していた。そこでみられた、正社員であることが相談ネットワークを多方向的なものにする可能性をより高める傾向は、2011年の結果においても決して否定されたわけではない。30代への調査結果が示唆するように、より長いスパンでみるならば、正社員であることの相談ネットワークへの影響力はやはり重大である。

しかし、2011年において、少なくとも20代にいるうちは、（男性の）正社員であるからといって非典型雇用よりも自動的に多方向的な相談ネットワークに恵まれるというわけではなくなっている。そしてまた、正社員でありさえすれば相談相手の存在が自動的に保障されるというわけではない。「相手がいない」という事態が起こるリスク自体は、少なくとも20代にいるうちは、正社員と非典型雇用の間で顕著な差がみられなくなりつつあるといえる。自らの働き方や生き方に何らかの閉塞感を感じたとき、それを相対化する契機に関して、非典型雇用と同等のリスクを負う形で、20代という期間を過ぎざるをえなくなりつつあるのが、2011年の男性正社員の状況だといえる。

2006年の報告論文において、筆者は以下のような文章を記している¹⁵。

以上の検討から浮かび上がるのは、非典型雇用や無業にとどまっていることは、ソーシャル・ネットワークが広がっていく契機をもたないまま時間を経っていくことになるという可能性である。親や兄弟姉妹、学生時代の友人などからそれほど広がらないままだとすれば、新たに生じてくるさまざまな悩みは、その中で果たして相対化されたり解消されたりするのだろうか。ごく限られた人たちの中でのみ過ごし続けることにより、どのような事態がもたらされうるのか、そして実際にもたらされているのかには注意する必要がある。

そしてさらに、家族や学生時代の友人といった相談相手は、時間の経過に伴いつながりが強まることは実際には多くないだろう。親は年を重ねていき、兄弟姉妹も家を離れていくかもしれない。学生時代の友人も、それぞれの人生を歩む中で離れていくことは大いにありうるだろう。その意味で、そうした人たちの存在が、相談ネットワークにおいて比重が小さくなっていくことは不可避だといえる。それにもかかわらず、職場をはじめとする新たな場でネットワークをつくることができないのだとすれば、悩みを相談するチャンネル数の減少、さらには「相手がいない」という事態も起こっていくと思われる。

2011年の調査結果を分析した現時点からこの文章を振り返ると、以上のまとめは現在でもなお基本的に有効であるといえる。ただし、2006年の時点で予想していなかった展開として、二つの点に最後にふれておきたい。

一つは、上で第二の点として述べた無配偶の男性の状況が示しているのは、正社員と非典型雇用との関係が今では2006年時点よりも流動的になり、その性格の差が（少なくとも相談ネットワークに関しては）明確ではなくなってきたということである。それはすなわち、20代でキャリアが何らかの意味で確立されるとは限らなくなり、むしろ20代という期間が全体としてキャリア探索期ないしキャリア形成期になったということの意味していると考えられる。今回はこうした変化がうかがえたのは無配偶の男性だけであったが、これが女性にも広がっていくのか、また探索期となりつつある20代の経験がどのように30代に帰結していくのかなど、注視し考えを重ねるべき点が新たに生まれつつあると思われる。

もう一つ、上の引用で記した「相手がいない」という事態の到来は、あっけなく実現しつつある。特に、男性の正社員で相談相手がいない人が増加するという展開は、正社員でありさえすればすべてが解決するわけではないという当然の（でも2006年の時点で筆者が十分に気づいていたとはいえない）事実を教えている。「20代という期間が全体としてキャリア探

¹⁵ 久木元（2006: 119-120）、および久木元（2007: 165-166）。

索期ないしキャリア形成期になった」ということは、一度正社員になったからといって何らかのゴールや社会的安定にたどりつくとは限らないということである。それはすなわち、そうした過程の中で、相談ネットワークも形成されたり衰退したりするということである。相談ネットワークや、それを含むソーシャル・ネットワーク一般に関して、その形成のみならず維持や変化なども視野に入れていくことも、今後求められていくのかもしれない。

以上のように、若者の包括的な移行支援は、当初「包括」という言葉を用いた時点の予想を超えて、さらなる視野の広がりを求められていると考えられる。若者のソーシャル・ネットワークについての考察もまた、同様の課題を負っているといえる。

文献

- 浅川和幸，2009，「若者の意識とソーシャルネットワーク——北海道の特徴」労働政策研究・研修機構編『地方の若者の就業行動と移行過程』労働政策研究・研修機構，103-126.
- 内田龍史・菅野正之，2010，「大阪市における若者の就業構造の変容と生活様式」『都市文化研究』21: 98-112.
- 菅野正之，2007，「ネットワークと余暇活動」大阪市市民局編『若年者の雇用実態に関する調査 報告書』大阪市，121-133.
- 久木元真吾，2006，「若者のソーシャル・ネットワークと就業・意識」労働政策研究・研修機構編『大都市の若者の就業行動と移行過程——包括的な移行支援に向けて』労働政策研究・研修機構，94-121.
- 久木元真吾，2007，「広がらない世界——若者の相談ネットワーク・就業・意識」堀有喜衣編『フリーターに滞留する若者たち』勁草書房，129-171.
- 堀有喜衣，2009，「長野・諏訪地域の若者のソーシャル・ネットワークと意識」労働政策研究・研修機構編『地方の若者の就業行動と移行過程』労働政策研究・研修機構，212-237.
- 堀有喜衣・小杉礼子・久木元真吾，2006，「問題設定と調査の概要」労働政策研究・研修機構編『大都市の若者の就業行動と移行過程——包括的な移行支援に向けて』労働政策研究・研修機構，1-13.

基礎集計表

基礎集計表(Nに対する%)

		合計	20-24歳 男性	20-24歳 女性	25-29歳 男性	25-29歳 女性	
N		2058	423	527	607	501	
問1 性別・出生	現在の年齢						
	20歳	3.3	9.5	5.3			
	21歳	6.0	13.9	12.1			
	22歳	7.2	15.4	15.7			
	23歳	13.2	23.9	32.3			
	24歳	16.5	37.4	34.5			
	25歳	11.0			19.3	21.8	
	26歳	12.2			21.4	24.2	
	27歳	9.5			17.8	17.4	
	28歳	10.1			20.4	16.6	
	29歳	11.1			21.1	20.2	
問2 望ましい働き方	(a)現在、最も望ましい働き方	正社員	69.8	70.0	65.3	74.0	69.5
		公務員	6.0	6.6	4.9	6.8	5.8
		契約社員・嘱託	2.8	1.9	4.4	2.1	2.8
		派遣社員	1.7	0.5	2.1	0.8	3.2
		パート・アルバイト	12.4	13.5	18.6	5.9	13.0
		自営業・自由業	4.6	4.5	2.7	6.8	4.0
		家族従業者(家の仕事)	0.9	0.7	0.6	1.2	1.2
		その他	1.4	2.1	1.3	1.6	0.4
		無回答	0.4	0.2	0.2	0.8	0.2
	(b)3年後に実現したい働き方	正社員	67.1	71.4	65.7	67.1	64.9
		公務員	6.5	9.9	5.3	6.4	4.8
		契約社員・嘱託	1.3	0.2	1.9	0.8	2.2
		派遣社員	0.8		0.8	0.7	1.8
		パート・アルバイト	5.0	0.9	8.0	0.7	10.4
		自営業・自由業	11.9	11.3	7.2	18.6	9.2
		家族従業者(家の仕事)	2.4	0.5	5.1	1.2	2.8
		その他	4.3	5.2	5.5	3.5	3.2
	無回答	0.8	0.5	0.6	1.2	0.8	
問3 人生や仕事について	これまでの進路選択は順調であった	かなりあてはまる	15.2	14.2	15.7	13.8	17.0
		ある程度あてはまる	48.9	44.9	51.8	46.5	52.1
		あまりあてはまらない	27.2	28.8	25.0	30.5	24.2
		ほとんどあてはまらない	8.2	11.3	6.6	8.7	6.6
		無回答	0.5	0.7	0.8	0.5	0.2
	自分の生活は周囲の人からうまくいっていると思われる	かなりあてはまる	15.6	11.3	18.8	14.0	18.0
		ある程度あてはまる	50.7	42.8	50.1	48.8	60.3
		あまりあてはまらない	25.9	33.8	24.3	28.8	17.6
		ほとんどあてはまらない	7.3	11.3	6.5	7.7	4.2
		無回答・回答不備	0.4	0.7	0.4	0.7	
	将来の見通しは明るい	かなりあてはまる	9.5	9.2	11.4	8.2	9.4
		ある程度あてはまる	36.4	31.2	36.4	33.8	44.1
		あまりあてはまらない	41.8	43.7	40.4	45.6	36.9
		ほとんどあてはまらない	11.8	15.4	11.4	11.9	9.2
		無回答・回答不備	0.4	0.5	0.4	0.5	0.4
	経済的に自立している	かなりあてはまる	16.3	13.9	12.7	20.6	17.0
		ある程度あてはまる	38.0	32.2	37.8	40.7	40.1
		あまりあてはまらない	30.0	34.3	28.3	26.9	32.1
		ほとんどあてはまらない	15.2	19.1	20.7	11.4	10.8
		無回答	0.4	0.5	0.6	0.5	
	努力次第で将来は切り開けると思う	かなりあてはまる	33.1	33.6	31.9	35.6	30.9
		ある程度あてはまる	48.3	49.2	51.6	44.5	48.9
		あまりあてはまらない	15.3	13.9	13.7	16.0	17.4
		ほとんどあてはまらない	3.0	2.8	2.5	3.6	2.8
無回答		0.3	0.5	0.4	0.3		

		合計	20-24歳 男性	20-24歳 女性	25-29歳 男性	25-29歳 女性	
N		2058	423	527	607	501	
	仕事以外に生きがいがある	かなりあてはまる	34.0	33.8	38.3	32.6	31.1
		ある程度あてはまる	43.3	41.6	37.4	46.6	47.1
		あまりあてはまらない	18.8	19.4	20.1	17.0	19.2
		ほとんどあてはまらない	3.5	4.5	3.8	3.5	2.6
		無回答	0.3	0.7	0.4	0.3	
	現在の生活に満足している	かなりあてはまる	13.0	10.2	13.9	12.2	15.6
		ある程度あてはまる	43.6	41.4	44.4	40.0	49.1
		あまりあてはまらない	31.5	33.1	29.8	35.7	26.9
		ほとんどあてはまらない	11.4	14.9	11.4	11.5	8.4
		無回答・回答不備	0.4	0.5	0.6	0.5	
問4 現在の職業生活や人間関係について	今の世の中、定職に就かなくても暮らしていける	そう思う	10.5	10.2	12.7	11.0	7.8
		ややそう思う	26.7	26.2	30.7	21.4	29.1
		あまりそう思わない	32.8	33.1	34.5	34.3	29.1
		そう思わない	29.8	30.3	21.8	32.9	33.9
		無回答	0.2	0.2	0.2	0.3	
	将来のことを考えるよりも今を楽しく生きたい	そう思う	9.0	10.9	9.9	6.9	9.2
		ややそう思う	30.9	31.0	33.0	31.8	27.3
		あまりそう思わない	41.0	40.7	40.8	40.9	41.7
		そう思わない	18.7	16.8	15.9	19.9	21.6
		無回答	0.4	0.7	0.4	0.5	0.2
	若いうちは仕事よりも自分のやりたいことを優先させたい	そう思う	12.3	13.2	14.6	12.9	8.6
		ややそう思う	41.8	44.0	44.2	38.2	41.9
		あまりそう思わない	35.2	31.7	34.5	35.9	38.1
		そう思わない	10.3	10.6	6.5	12.4	11.4
		無回答・回答不備	0.3	0.5	0.2	0.7	
	いろいろな職業を経験したい	そう思う	14.1	15.8	17.1	13.2	10.6
		ややそう思う	36.8	36.6	35.7	35.3	40.1
		あまりそう思わない	36.8	35.9	35.7	37.2	38.1
そう思わない		11.9	11.3	11.2	13.5	11.0	
無回答・回答不備		0.4	0.2	0.4	0.8	0.2	
やりたい仕事なら正社員でもフリーターでもこだわらない	そう思う	19.5	20.1	23.7	18.5	15.8	
	ややそう思う	28.4	28.4	30.9	23.9	31.3	
	あまりそう思わない	31.4	30.5	30.9	29.8	34.5	
	そう思わない	20.3	20.6	13.9	27.5	18.2	
	無回答・回答不備	0.4	0.5	0.6	0.3	0.2	
将来は独立して自分の店や会社を持ちたい	そう思う	17.8	22.7	10.2	26.7	10.8	
	ややそう思う	19.6	25.1	14.6	22.6	16.6	
	あまりそう思わない	27.7	26.5	29.4	27.7	27.1	
	そう思わない	34.4	25.3	44.8	22.6	45.5	
	無回答・回答不備	0.5	0.5	0.9	0.5		
一つの企業に長く勤めるほうがよい	そう思う	24.3	26.2	23.1	26.2	21.8	
	ややそう思う	43.4	41.6	45.2	39.4	48.1	
	あまりそう思わない	25.9	25.8	26.2	26.5	25.0	
	そう思わない	6.0	5.9	5.1	7.6	5.0	
	無回答	0.3	0.5	0.4	0.3	0.2	
フリーターより正社員で働いたほうがトクだ	そう思う	51.0	48.5	47.4	54.7	52.3	
	ややそう思う	33.3	33.1	35.7	31.8	32.9	
	あまりそう思わない	11.7	10.4	13.9	9.9	12.6	
	そう思わない	3.6	7.3	2.5	3.3	2.2	
	無回答・回答不備	0.4	0.7	0.6	0.3		
専門的な知識や技術を磨きたい	そう思う	53.3	50.1	50.1	60.8	50.3	
	ややそう思う	37.9	40.2	38.7	32.8	41.5	
	あまりそう思わない	7.1	7.1	9.9	4.8	7.2	
	そう思わない	1.2	2.1	0.8	1.2	1.0	
	無回答・回答不備	0.4	0.5	0.6	0.5		

		合計	20-24歳 男性	20-24歳 女性	25-29歳 男性	25-29歳 女性
N		2058	423	527	607	501
職業生活に役立つ資格を取りたい	そう思う	45.2	40.2	45.9	46.8	46.7
	ややそう思う	37.9	40.0	38.3	35.9	38.3
	あまりそう思わない	13.7	15.1	14.4	12.7	13.0
	そう思わない	3.0	4.3	1.1	4.4	2.0
	無回答	0.2	0.5	0.2	0.2	
ひとの役に立つ仕事をしたい	そう思う	39.0	34.0	38.9	40.9	40.9
	ややそう思う	43.3	45.2	43.3	40.7	44.9
	あまりそう思わない	14.8	17.5	15.2	14.5	12.4
	そう思わない	2.7	3.1	2.3	3.5	1.8
	無回答・回答不備	0.3	0.2	0.4	0.5	
誰とでもすぐに仲良くなれる	そう思う	24.3	26.0	24.7	22.7	24.4
	ややそう思う	40.4	38.5	38.7	41.7	42.1
	あまりそう思わない	27.3	28.1	25.2	28.2	27.5
	そう思わない	7.8	6.9	11.2	7.1	6.0
	無回答	0.2	0.5	0.2	0.3	
有名になりたい	そう思う	11.9	16.5	8.7	15.3	7.0
	ややそう思う	20.3	23.2	18.2	23.1	16.8
	あまりそう思わない	39.2	38.1	42.1	39.4	36.9
	そう思わない	28.4	22.0	30.6	22.1	39.3
	無回答	0.2	0.2	0.4	0.2	
ひとよりも高い収入を得たい	そう思う	28.1	35.9	19.4	36.9	20.2
	ややそう思う	40.7	43.0	39.1	39.5	41.9
	あまりそう思わない	24.0	14.7	32.4	17.8	30.5
	そう思わない	6.9	6.1	8.7	5.6	7.2
	無回答・回答不備	0.2	0.2	0.4	0.2	0.2
自分に向いている仕事がわからない	そう思う	13.6	15.4	15.9	12.2	11.4
	ややそう思う	31.4	30.3	32.8	32.8	29.1
	あまりそう思わない	36.0	34.5	34.3	35.6	39.3
	そう思わない	18.8	19.1	16.7	19.1	20.2
	無回答・回答不備	0.3	0.7	0.2	0.3	
できれば仕事はしたくない	そう思う	16.9	18.7	19.2	17.3	12.4
	ややそう思う	19.5	18.2	20.7	18.6	20.4
	あまりそう思わない	33.5	32.4	34.3	30.1	37.5
	そう思わない	29.6	29.8	25.4	33.1	29.7
	無回答・回答不備	0.5	0.9	0.4	0.8	
ほとんどの人は信頼できる	そう思う	6.8	7.8	5.7	7.1	6.6
	ややそう思う	37.9	38.5	40.0	35.6	38.1
	あまりそう思わない	39.9	36.6	39.3	40.5	42.5
	そう思わない	15.2	16.8	14.8	16.3	12.8
	無回答	0.2	0.2	0.2	0.5	
自分には政府のすることに対して、それを左右する力はない	そう思う	36.8	37.6	37.8	35.3	36.9
	ややそう思う	39.9	36.6	39.8	39.2	43.7
	あまりそう思わない	16.8	17.5	17.3	17.5	15.0
	そう思わない	6.0	7.6	4.7	7.9	3.8
	無回答・回答不備	0.4	0.7	0.4	0.2	0.6
問5 労働に関する問題について	ワーキングプアにとっても問題だと思う	40.4	34.5	42.5	39.5	44.1
	対してどのように感じるか	32.3	32.6	29.4	33.4	33.7
	やや問題だと思う	6.9	9.0	4.9	8.1	5.6
	あまり問題ではない	2.2	3.1	0.8	3.8	1.0
	まったく問題ではない	17.0	19.1	20.3	14.5	14.8
	わからない	1.3	1.7	2.1	0.7	0.8

		合計	20-24歳 男性	20-24歳 女性	25-29歳 男性	25-29歳 女性		
N		2058	423	527	607	501		
	派遣切りに対して どのように感じるか	とても問題だと思う	37.3	35.0	39.1	33.4	42.1	
		やや問題だと思う	40.2	37.6	43.5	36.4	43.7	
		あまり問題ではない	13.3	15.4	10.1	17.5	9.8	
		まったく問題ではない	4.0	6.6	1.9	6.6	1.0	
		わからない	4.4	4.7	4.2	5.4	3.0	
		無回答	0.8	0.7	1.3	0.7	0.4	
	新卒で就職できな いことに対してど のように感じるか		とても問題だと思う	54.6	52.2	57.9	46.5	62.9
			やや問題だと思う	26.4	25.1	26.6	26.0	27.7
			あまり問題ではない	12.2	12.3	11.4	16.5	7.8
			まったく問題ではない	4.1	7.1	1.3	7.1	0.8
			わからない	2.1	2.6	1.7	3.3	0.8
		無回答・回答不備	0.6	0.7	1.1	0.7		
	ニートに対してど のように感じるか		とても問題だと思う	46.1	47.8	49.5	43.2	44.5
			やや問題だと思う	31.0	26.5	31.1	29.8	36.3
			あまり問題ではない	12.9	13.5	12.1	13.3	12.6
			まったく問題ではない	4.8	7.6	2.1	7.6	2.0
			わからない	4.4	4.0	3.8	5.1	4.4
		無回答	0.8	0.7	1.3	1.0	0.2	
	ワーキングプアの 経験があるか		ある	9.4	7.8	7.8	11.7	9.8
			ない	86.0	85.1	87.1	85.2	86.6
		無回答・回答不備	4.6	7.1	5.1	3.1	3.6	
派遣切りの経験が あるか		ある	2.6	1.2	2.1	3.1	3.8	
		ない	94.0	92.7	95.1	94.2	93.8	
		無回答	3.4	6.1	2.8	2.6	2.4	
新卒で就職できな いという経験があ るか		ある	9.9	11.3	11.8	8.6	8.2	
		ない	86.9	83.0	85.4	88.8	89.4	
		無回答	3.3	5.7	2.8	2.6	2.4	
ニートの経験があ るか		ある	15.9	15.8	19.4	16.3	12.0	
		ない	80.6	78.3	77.6	80.9	85.4	
		無回答	3.4	5.9	3.0	2.8	2.6	
ワーキングプアの 問題を抱えている 人が身近にいるか		いる	24.3	24.8	19.7	29.8	22.0	
		いない	70.4	67.6	74.4	65.9	73.9	
		無回答・回答不備	5.3	7.6	5.9	4.3	4.2	
派遣切りの問題を 抱えている人が身 近にいるか		いる	24.4	21.0	19.5	28.8	27.1	
		いない	71.6	72.6	77.4	67.5	69.7	
		無回答	3.9	6.4	3.0	3.6	3.2	
新卒で就職できな いという問題を抱 えている人が身近 にいるか		いる	44.7	53.2	56.9	37.6	33.3	
		いない	51.4	41.1	39.5	59.0	63.5	
		無回答	3.9	5.7	3.6	3.5	3.2	
ニートの問題を抱 えている人が身近 にいるか		いる	45.5	51.3	45.7	44.8	41.1	
		いない	50.8	42.6	51.0	51.9	56.1	
		無回答	3.7	6.1	3.2	3.3	2.8	
働く中での疑問や 納得できなかった こと		ある	45.7	33.6	48.6	45.3	53.3	
		ない	50.5	61.9	47.8	50.4	43.9	
		無回答	3.8	4.5	3.6	4.3	2.8	
問6 在学した 学校につ いて	最後に在学した学 校	中学	1.4	0.9	1.7	2.3	0.2	
		高校	21.5	33.3	21.6	19.1	14.4	
		専門・各種学校	23.4	21.7	27.3	20.9	23.8	
		短大	6.5	1.9	10.8	1.3	12.0	
		高専	1.0	2.6	0.2	1.3	0.2	
		大学	42.4	37.8	37.6	47.3	45.3	
		大学院	3.0	0.7	0.2	6.6	3.6	
		その他	0.5	0.5		0.8	0.6	
	無回答	0.3	0.5	0.6	0.3			

		合計	20-24歳 男性	20-24歳 女性	25-29歳 男性	25-29歳 女性	
N		2058	423	527	607	501	
	卒業の有無	卒業	89.5	85.6	90.1	88.1	93.8
		中途退学	9.2	12.8	8.5	10.2	5.6
		その他	0.4	0.2	0.8	0.3	0.4
		無回答	0.9	1.4	0.6	1.3	0.2
卒業中退の時期		省略					
問7 卒業(中 退)した直 後の就業 状態	就業状態	正社員	56.8	55.1	52.0	58.8	60.9
		公務員	2.0	1.7	1.3	2.6	2.2
		契約社員・嘱託	6.3	4.7	8.5	4.3	7.8
		派遣社員	1.6	0.7	1.3	1.5	2.8
		パート・アルバイト	21.3	24.1	24.9	19.6	17.4
		自営業・自由業	1.4	1.9	0.6	1.8	1.2
		家族従業者(家の仕事)	0.6		0.8	0.5	1.0
		無職で仕事を探していた	3.7	5.7	3.6	3.8	2.0
		無職で公務員・教員などの資格試験準備	1.0	0.9	0.8	1.5	0.8
		無職で進学・留学などの準備	0.8	0.9	0.8	0.8	0.6
		専業主婦・結婚準備	0.1		0.2		0.2
		特に何もしていない・迷っていた	1.9	1.9	2.3	2.0	1.4
		その他	1.7	1.7	1.9	1.6	1.4
		無回答	0.9	0.7	1.1	1.2	0.4
N		830	180	240	227	183	
卒業前の相談相手 (複数回答)	親・保護者	63.7	58.3	75.4	54.6	65.0	
	兄弟姉妹	11.6	10.0	16.7	7.9	10.9	
	職場やバイト先の上司	8.3	12.2	6.3	8.4	7.1	
	職場やバイト先の友人・同僚	8.8	6.7	9.6	9.3	9.3	
	学校で知り合った友人	28.8	25.6	35.0	22.9	31.1	
	学校の先生・職員・相談員	22.3	20.0	27.9	18.9	21.3	
	趣味をともにする友人	16.5	17.8	17.1	18.5	12.0	
	恋人・配偶者	9.2	4.4	14.6	6.2	10.4	
	カウンセラーなどの専門家や公的な支援機関	2.0	2.8	3.3	0.9	1.1	
	その他	1.8	2.2	1.3	1.8	2.2	
	誰もいない	19.3	22.2	11.7	25.6	18.6	
無回答	2.7	2.8	1.7	4.4	1.6		
N		830	180	240	227	183	
その後、正社員や 公務員になったか	なった	34.1	28.9	20.8	53.3	32.8	
	なっていない	63.3	67.2	77.5	43.2	65.6	
	無回答	2.7	3.9	1.7	3.5	1.6	
はじめて正社員や公務員になった時期		省略					
N		1493	292	331	494	376	
勤務先企業の規模	公務	3.3	3.1	2.7	3.6	3.7	
	1000人以上	29.0	26.7	34.4	26.9	28.7	
	300~999人	17.5	15.1	16.3	17.0	21.3	
	30~299人	27.3	29.5	26.3	25.7	28.7	
	29人以下	21.6	24.0	18.7	25.9	16.8	
	無回答・回答不備	1.1	1.7	1.5	0.8	0.8	
N		1493	292	331	494	376	
現在も勤めているか	続けている	65.6	76.4	74.0	57.7	60.1	
	勤務先を変った、辞めた	34.0	22.6	26.0	42.1	39.1	
	無回答	0.5	1.0		0.2	0.8	

		合計	20-24歳 男性	20-24歳 女性	25-29歳 男性	25-29歳 女性
N		2058	423	527	607	501
問8 現在(最近 1週間)の 主な状況	正社員	58.3	59.1	48.6	67.7	56.5
	公務員	2.5	1.7	1.5	3.5	3.0
	契約社員・嘱託	5.7	4.3	8.3	3.8	6.6
	派遣社員	3.1	1.2	3.4	1.5	6.2
	パート・アルバイト	20.6	24.6	29.6	11.2	19.2
	自営業・自由業	2.3	1.9	0.8	3.8	2.4
	家族従業者(家の仕事)	1.2	0.7	0.6	1.6	1.6
	無職で仕事を探している	3.0	3.3	3.2	3.8	1.4
	無職で仕事以外の活動	0.9	0.5	1.5	0.7	0.8
	無職で特に何もしていない	1.2	1.4	0.8	0.8	1.8
	その他	1.2	1.4	1.5	1.5	0.4
	回答不備	0.1		0.2	0.2	0.2
入職時期	省略					
N		1937	396	492	569	480
採用経路	高校・大学などの紹介	15.8	20.5	15.9	13.0	15.4
	新卒向けの採用情報サイト	20.3	18.9	20.7	22.3	18.5
	ハローワークなど公的機関の紹介	5.3	4.3	3.7	6.5	6.3
	親・保護者・親戚・知人の紹介	14.4	15.7	11.4	17.9	12.3
	インターネット・新聞・雑誌・貼紙	23.2	23.5	28.5	20.6	20.8
	派遣会社の紹介	3.1	0.5	2.8	1.8	7.3
	パートや契約社員からの登用	3.0	4.3	1.8	3.5	2.7
	民間・NPOなどの支援機関	0.4		0.8	0.5	0.2
	公募	5.7	4.0	5.7	5.4	7.3
	その他	5.8	5.8	3.9	6.5	6.9
	無回答・回答不備	2.9	2.5	4.9	1.9	2.3
N		1937	396	492	569	480
職種	専門・技術的な仕事	28.8	26.3	23.4	36.2	27.7
	管理的な仕事	0.4	0.5		0.9	
	事務の仕事	19.2	8.3	23.8	10.7	33.3
	販売の仕事	16.6	17.4	18.5	17.0	13.3
	サービスの仕事	18.2	22.5	22.8	12.8	16.5
	生産工程・建設の仕事	4.5	9.3	0.8	7.7	0.6
	運輸・通信・保安の仕事	3.7	5.6	0.8	7.4	0.6
	その他	5.7	6.1	6.1	4.9	6.0
	無回答・回答不備	2.9	4.0	3.9	2.3	1.9
N		1937	396	492	569	480
勤務先企業の規模	公務	2.9	2.5	1.8	3.5	3.5
	1000人以上	25.8	22.5	29.5	23.6	27.3
	300~999人	14.7	14.1	15.2	13.5	15.8
	30~299人	26.2	29.8	24.4	25.5	25.8
	29人以下	28.2	28.5	26.2	31.8	25.6
	無回答・回答不備	2.3	2.5	2.8	2.1	1.9
N		1937	396	492	569	480
1週間の労働時間 (残業含む) (単位:時間)	平均値(無回答・回答不備を除いたケース数を分母として算出)	45.4	45.5	41.9	51.7	41.6
	中央値	45.0	45.0	40.0	50.0	40.0
N		1937	396	492	569	480
現在のおよその年収 (単位:万円)	平均値(無回答・回答不備を除いたケース数を分母として算出)	272.1	259.3	216.5	339.3	258.6
	中央値	250.0	250.0	210.0	300.0	250.0

		合計	20-24歳 男性	20-24歳 女性	25-29歳 男性	25-29歳 女性	
	N	1937	396	492	569	480	
	労働組合	職場の組合に加入	38.2	38.1	37.4	40.9	35.8
		個人加盟組合(独立系労組)に加入	1.3	1.5	0.6	1.6	1.5
		入っていない	56.4	55.8	58.1	53.8	58.1
		無回答・回答不備	4.1	4.5	3.9	3.7	4.6
	N	2058	423	527	607	501	
問9 学校を卒業(中退)後に経験したことがある働き方	(複数回答)	1ヶ月以上無職だったことがある(学生や主婦ではなく)これまで働いたことはない	29.9	27.2	25.6	37.4	27.5
		正社員	1.5	1.7	3.0	1.2	0.2
		公務員	62.9	58.9	53.9	70.2	67.1
		契約社員・嘱託	2.8	1.7	2.3	3.6	3.2
		派遣社員	10.9	6.4	11.2	10.5	15.0
		パート・アルバイト	8.8	4.3	7.2	7.7	15.6
		パート・アルバイト	37.0	36.2	41.9	32.8	37.5
		自営業・自由業	3.1	2.6	1.5	4.8	3.0
		家族従業者(家の仕事)	2.2	0.7	2.7	2.5	2.8
		その他の働き方	0.3	0.2	0.4	0.7	
	N	927	177	265	238	247	
問10 正社員(公務員を含む)以外の働き方について	正社員以外での就業年数	6ヶ月未満	11.8	15.3	12.8	9.7	10.1
		6ヶ月～1年未満	13.7	17.5	17.7	10.5	9.7
		1年～1年6ヶ月未満	11.1	14.1	14.7	7.6	8.5
		1年6ヶ月～2年未満	8.4	9.0	8.7	9.2	6.9
		2年～2年6ヶ月未満	9.9	9.0	6.8	12.6	11.3
		2年6ヶ月～3年未満	6.9	6.8	8.7	5.5	6.5
		3年以上	36.2	25.4	29.4	42.0	45.7
		無回答	1.9	2.8	1.1	2.9	1.2
	N	927	177	265	238	247	
正社員になろうとした経験があるか	はい	63.0	60.5	54.3	79.8	57.9	
	いいえ	35.4	37.3	44.2	17.6	41.7	
	無回答・回答不備	1.6	2.3	1.5	2.5	0.4	
	N	584	107	144	190	143	
正社員になろうとしたきっかけ(複数回答)	(複数回答)	やりたいことが見つかったから	19.0	21.5	18.8	17.4	19.6
		安定した仕事につきたいと思ったから	68.0	63.6	63.9	71.6	70.6
		夢に見切りをつけたから	3.9	3.7	2.8	6.8	1.4
		年齢的に落ち着いたほうがいいと思ったから	24.8	19.6	24.3	35.3	15.4
		スキルを身につけたいと思ったから	19.9	19.6	20.1	21.1	18.2
		結婚した、しようと思ったから	7.2	6.5	3.5	14.2	2.1
		まわりの友達が就職しはじめたから	6.0	8.4	11.8	3.7	1.4
		正社員(公務員を含む)のほうがいいと思ったから	35.8	26.2	42.4	32.1	41.3
		その他	10.8	7.5	9.7	10.5	14.7
		無回答	1.4	2.8	0.7	1.6	0.7

		合計	20-24歳 男性	20-24歳 女性	25-29歳 男性	25-29歳 女性
N		584	107	144	190	143
正社員になろうと したときの相談相 手 (複数回答)	親・保護者	54.5	57.0	59.0	44.2	61.5
	兄弟姉妹	11.1	15.0	9.7	10.0	11.2
	職場やバイト先の上司	18.0	15.0	18.8	17.4	20.3
	職場やバイト先の友人・同僚	16.4	10.3	15.3	18.9	18.9
	学校で知り合った友人	18.5	18.7	23.6	15.8	16.8
	学校の先生・職員・相談員	8.4	9.3	9.7	5.8	9.8
	趣味をともにする友人	13.2	12.1	16.7	13.7	9.8
	恋人・配偶者	17.6	8.4	24.3	15.3	21.0
	カウンセラー等の専門家や公 的な支援機関	3.1	1.9	5.6	1.6	3.5
	その他	1.5			2.6	2.8
	誰もいない	21.4	25.2	13.2	27.9	18.2
	無回答	1.2	0.9	1.4	1.1	1.4
N		584	107	144	190	143
その後正社員に なったか	正社員になった	55.1	47.7	38.2	66.3	62.9
	正社員にはなっていない	44.2	50.5	61.1	33.2	37.1
	無回答	0.7	1.9	0.7	0.5	
入職時期	省略					
N		322	51	55	126	90
正社員になったと きの採用経路	高校・大学などの紹介	5.6	9.8	7.3	2.4	6.7
	新卒向けの採用情報サイト	8.4	11.8	7.3	10.3	4.4
	ハローワークなど公的機関の 紹介	10.2	7.8	10.9	10.3	11.1
	親・保護者・親戚・知人の紹介	20.2	19.6	18.2	27.0	12.2
	インターネット・新聞・雑誌・貼紙	24.5	21.6	29.1	21.4	27.8
	派遣会社の紹介	2.2	2.0			6.7
	パートや契約社員からの登用	17.7	21.6	18.2	16.7	16.7
	民間・NPOなどの支援機関	0.3		1.8		
	公募	5.6	2.0	5.5	7.1	5.6
	その他	3.7	2.0	1.8	3.2	6.7
	無回答・回答不備	1.6	2.0		1.6	2.2
N		322	51	55	126	90
正社員になったと きの職種	専門・技術的な仕事	31.4	23.5	32.7	31.7	34.4
	管理的な仕事	0.6	2.0		0.8	
	事務の仕事	18.3	5.9	25.5	11.1	31.1
	販売の仕事	13.4	21.6	14.5	10.3	12.2
	サービスの仕事	18.0	23.5	20.0	15.9	16.7
	生産工程・建設の仕事	6.2	9.8	1.8	11.1	
	運輸・通信・保安の仕事	4.0	5.9		7.9	
	その他	4.3	3.9	3.6	6.3	2.2
無回答・回答不備	3.7	3.9	1.8	4.8	3.3	
N		322	51	55	126	90
正社員になったと きの企業規模	公務	3.1	3.9		4.0	3.3
	1000人以上	12.7	9.8	25.5	9.5	11.1
	300～999人	10.9	11.8	5.5	11.1	13.3
	30～299人	33.5	25.5	34.5	31.7	40.0
	29人以下	39.1	47.1	34.5	43.7	31.1
無回答	0.6	2.0			1.1	
N		2058	423	527	607	501
問11 フリーター 経験	フリーターの経験					
	ある	43.4	44.4	45.7	43.2	40.3
	ない	56.3	54.8	54.1	56.5	59.5
	無回答	0.3	0.7	0.2	0.3	0.2
フリーターの通算 期間	省略					

		合計	20-24歳 男性	20-24歳 女性	25-29歳 男性	25-29歳 女性	
問13 フリーター になった理由	N	893	188	241	262	202	
	(複数回答)	仕事以外にしたいことがあるから	18.9	21.3	18.3	21.8	13.9
		つきたい仕事のための勉強や準備、修行期間として	27.9	28.7	27.8	29.0	25.7
		自分に合う仕事を見つけるため	25.6	27.7	25.3	27.9	21.3
		正社員として採用されなかったから	18.9	17.0	21.2	20.2	16.3
		学費稼ぎなど、生活のために一時的に働く必要があったから	21.4	27.7	21.2	20.2	17.3
		なんとなく	21.6	24.5	17.8	23.3	21.3
		正社員はいやだったから	7.6	5.3	12.9	4.2	7.9
		家庭の事情で	6.9	5.9	9.1	2.7	10.9
		自由な働き方をしたかったから	20.0	14.4	28.6	16.4	19.8
		その他	14.2	12.8	15.8	12.6	15.8
		無回答	0.7	1.1	0.4	0.4	1.0
	問13 フリーター になった理由	N	893	188	241	262	202
最も重要なもの		仕事以外にしたいことがあるから	9.7	11.2	8.7	13.0	5.4
		つきたい仕事のための勉強や準備、修行期間として	13.3	13.3	11.6	14.1	14.4
		自分に合う仕事を見つけるため	11.1	11.7	10.0	13.7	8.4
		正社員として採用されなかったから	9.0	7.4	13.3	8.0	6.4
		学費稼ぎなど、生活のために一時的に働く必要があったから	10.4	11.7	9.5	10.3	10.4
		なんとなく	7.8	11.2	4.1	9.2	7.4
		正社員はいやだったから	2.1	2.1	2.5	0.8	3.5
		家庭の事情で	3.0	1.6	3.7	1.1	5.9
		自由な働き方をしたかったから	7.5	5.3	13.3	3.4	7.9
		その他	9.4	7.4	10.4	8.8	10.9
		無回答・回答不備	16.6	17.0	12.9	17.6	19.3
問14 フリーター 経験を通じて感じたこと		N	893	188	241	262	202
	(複数回答)	やりたい仕事に直接役立つ能力が身についた	19.7	16.5	20.3	21.4	19.8
		アルバイト先から急に日数を減らされたり、来なくていいといわれて困った	11.0	16.5	13.7	7.3	7.4
		アルバイト先がなかなか見つからなくて困った	14.9	16.5	19.5	10.7	13.4
		やりたい仕事に就くための人脈やチャンスを得た	12.9	12.2	14.5	14.5	9.4
		人間関係に関する能力(人どうまく話せるなど)が身についた	42.3	36.2	46.9	38.9	47.0
		やりたい仕事ははっきりした	18.0	18.1	20.3	17.2	16.3
		将来に不安を感じた	41.5	42.6	42.3	42.7	38.1
		いろいろな経験をすることができた	49.9	41.0	53.9	51.5	51.5
		社会的に認められていないと思った	19.5	18.1	22.0	21.0	15.8
		生活が不安定だった	28.6	30.3	30.7	30.2	22.3
		自由な時間が持てた	41.0	30.9	47.7	38.5	45.5
		正社員に比べて収入が少なかった	39.3	33.5	43.2	37.8	42.1
	この中であてはまるものはない	3.6	5.3	2.9	4.6	1.5	
	無回答	2.1	2.1	2.1	1.5	3.0	

		合計	20-24歳 男性	20-24歳 女性	25-29歳 男性	25-29歳 女性		
N		2058	423	527	607	501		
問15 活用したこ とがある行 政サービス や公的な 支援	(複数回答)	奨学金	21.4	20.8	26.4	18.5	20.4	
		授業料免除	3.1	3.1	4.4	2.0	3.2	
		失業手当	6.9	1.7	2.8	10.9	10.6	
		ハローワーク	20.8	15.1	16.7	24.4	25.5	
		若者サポートステーション	0.6	1.4	0.6	0.5		
		ジョブカフェ	1.1	1.2	1.5	1.0	0.6	
		国または自治体の職業訓練	1.1	0.9	0.8	1.3	1.4	
		生活保護	0.7	0.7	0.6	1.0	0.4	
		その他	0.7		0.9	0.8	0.8	
		どれも活用したことがない	57.4	62.6	56.5	55.8	55.9	
	無回答	1.5	1.9	1.5	1.8	0.8		
問16 現在加入 している公 的年金制 度		国民年金	32.3	34.0	34.5	32.5	28.1	
		厚生年金・共済組合	53.6	45.9	48.4	55.8	62.9	
		加入していない	6.1	9.2	5.5	6.9	3.0	
		わからない	6.7	9.2	9.9	4.1	4.2	
		無回答・回答不備	1.4	1.7	1.7	0.7	1.8	
問17 現在加入 している公 的医療保 険		会社の健康保険・共済保険	60.1	55.6	58.8	59.1	66.5	
		国民健康保険	28.1	30.7	27.7	30.1	23.8	
		その他	0.3	0.2	0.6	0.5		
		どれも加入していない	1.5	2.6	0.9	1.6	1.0	
		わからない	3.7	5.7	4.7	2.5	2.4	
		無回答・回答不備	6.3	5.2	7.2	6.1	6.4	
		N	1356	254	345	393	364	
(会社の健康保 険・共済保険を選 択した場合)		自身が加入	69.2	67.3	64.3	72.5	71.7	
		家族の保険に加入	12.2	13.8	18.0	5.3	13.2	
		無回答	18.5	18.9	17.7	22.1	15.1	
N		2058	423	527	607	501		
問18 現在一緒 に住んで いる人	(複数回答)	1人で	21.5	25.8	18.6	26.7	14.6	
		父や母と	58.6	63.1	66.8	46.0	61.7	
		兄弟姉妹と	30.7	31.9	42.9	20.3	29.3	
		配偶者や子供	13.6	5.7	6.6	20.6	19.0	
		その他	10.0	9.9	13.1	8.6	8.4	
		無回答	0.4	0.5	0.4	0.3	0.4	
問19 結婚につ いて	最初の結婚	結婚した	14.2	5.4	6.8	22.7	19.2	
		これまで一度も結婚していない	80.7	87.9	88.2	72.3	76.8	
		無回答	5.1	6.6	4.9	4.9	4.0	
	最初に結婚した時期	省略						
		N	293	23	36	138	96	
	最初に結婚したと きの就業状態		正社員、公務員	66.2	65.2	55.6	81.9	47.9
			派遣・契約・嘱託	5.5	4.3	2.8	4.3	8.3
			パート・アルバイト	17.7	4.3	38.9	6.5	29.2
			自営業・自由業	3.8	4.3		5.1	3.1
			家族従業者(家の仕事)	1.0			0.7	2.1
		学生	2.7	21.7	2.8	0.7	1.0	
		無職	2.0			0.7	5.2	
		無回答・回答不備	1.0				3.1	
	N	293	23	36	138	96		
現在の結婚		結婚している	89.8	100.0	80.6	87.7	93.8	
		結婚していない	5.8		19.4	5.1	3.1	
		無回答	4.4			7.2	3.1	

		合計	20-24歳 男性	20-24歳 女性	25-29歳 男性	25-29歳 女性
N		2058	423	527	607	501
問20 悩みの相 談相手	今の自分の仕事 悩みはない	30.2	38.5	22.2	32.8	28.3
	や働き方について 親・保護者	35.3	31.4	48.8	26.4	35.1
	(複数回答) 兄弟姉妹	12.1	7.8	17.3	8.4	14.8
	職場やバイト先の上司	17.5	18.7	17.6	18.8	15.0
	職場やバイト先の友人・同僚	30.7	23.4	34.2	28.8	35.3
	学校で知り合った友人	26.8	22.0	35.1	22.4	27.3
	学校の先生・職員・相談員	2.0	1.4	3.6	1.5	1.4
	趣味をともにする友人	15.0	14.2	17.3	15.3	13.0
	恋人・配偶者	22.2	10.2	28.3	19.9	28.7
	カウンセラー等の専門家や公 的な支援機関	2.1	1.2	2.7	2.0	2.6
	その他	2.7	1.9	2.3	3.3	3.2
	誰もいない	4.0	5.7	2.8	5.8	1.6
	無回答	1.4	1.7	1.1	1.5	1.2
これからの生き方 や働き方について (複数回答)	悩みはない	25.9	35.9	19.0	28.0	22.4
	親・保護者	36.0	28.1	46.7	30.3	38.1
	兄弟姉妹	12.6	8.7	17.6	9.1	15.0
	職場やバイト先の上司	13.0	14.4	10.6	14.3	12.8
	職場やバイト先の友人・同僚	23.9	21.7	22.8	22.2	28.9
	学校で知り合った友人	27.6	21.3	35.3	23.9	29.3
	学校の先生・職員・相談員	1.7	1.2	3.0	1.2	1.4
	趣味をともにする友人	15.8	15.1	18.2	16.1	13.4
	恋人・配偶者	25.3	12.3	29.4	24.5	32.7
	カウンセラー等の専門家や公 的な支援機関	1.9	1.2	3.0	1.6	1.8
	その他	3.0	2.6	2.7	3.6	3.0
	誰もいない	4.6	5.7	4.7	5.4	2.4
	無回答	1.6	1.7	1.3	1.6	1.6
人間関係につい て (複数回答)	悩みはない	36.5	49.6	26.0	42.2	29.7
	親・保護者	22.1	13.0	37.0	12.2	25.9
	兄弟姉妹	9.4	4.0	15.2	5.9	12.2
	職場やバイト先の上司	10.8	11.3	9.7	10.2	12.2
	職場やバイト先の友人・同僚	23.1	16.3	26.2	18.9	30.7
	学校で知り合った友人	25.2	17.0	32.8	20.3	30.1
	学校の先生・職員・相談員	0.8	0.9	0.9	0.5	1.0
	趣味をともにする友人	14.4	9.9	16.9	14.0	16.0
	恋人・配偶者	19.9	9.2	25.4	17.8	25.7
	カウンセラー等の専門家や公 的な支援機関	1.4	0.5	1.7	1.6	1.6
	その他	2.2	2.1	1.9	2.0	3.0
	誰もいない	3.7	4.3	3.8	4.9	1.8
	無回答	1.7	1.2	1.5	2.3	1.6
経済的な問題に ついて (複数回答)	悩みはない	33.8	43.7	24.9	36.4	31.7
	親・保護者	40.3	35.2	51.6	33.4	40.9
	兄弟姉妹	9.1	5.2	11.2	6.4	13.6
	職場やバイト先の上司	5.7	7.3	4.7	6.4	4.4
	職場やバイト先の友人・同僚	11.7	11.3	12.1	11.5	11.8
	学校で知り合った友人	11.8	10.6	15.9	9.6	11.0
	学校の先生・職員・相談員	0.6	0.7	0.8	0.5	0.4
	趣味をともにする友人	7.2	8.0	7.8	6.9	6.4
	恋人・配偶者	18.7	9.0	19.7	20.6	23.4
	カウンセラー等の専門家や公 的な支援機関	0.7	0.5	0.9	1.0	0.4
	その他	1.9	1.7	1.9	2.3	1.8
	誰もいない	6.6	7.3	7.2	7.1	4.6
	無回答	1.8	1.4	1.3	1.6	2.8

		合計	20-24歳 男性	20-24歳 女性	25-29歳 男性	25-29歳 女性	
N		2058	423	527	607	501	
問21 両親の最 終学歴	父親	中学	6.3	4.5	6.6	6.1	7.8
		高校	29.9	37.1	27.5	28.8	27.5
		専門学校・各種学校	6.9	8.3	8.7	5.8	5.4
		短大・高専	3.0	3.8	2.5	3.5	2.4
		大学・大学院	44.8	36.2	46.7	44.3	50.5
		該当なし	0.2			0.7	0.2
		わからない	7.6	9.0	6.8	8.9	5.6
		無回答・回答不備	1.3	1.2	1.1	2.0	0.6
	母親	中学	3.5	4.0	3.0	3.5	3.8
		高校	37.0	38.5	35.9	38.7	34.9
		専門学校・各種学校	12.0	13.5	14.0	9.6	11.4
		短大・高専	18.8	15.4	19.7	19.1	20.4
		大学・大学院	20.3	17.7	20.9	17.8	24.8
		該当なし	0.3	0.2	0.4	0.5	
わからない		6.8	9.7	4.6	8.9	4.0	
無回答・回答不備		1.4	0.9	1.5	2.0	0.8	
問22 実家の経 済的豊か さ	豊かである	10.8	10.4	10.8	9.4	13.0	
	やや豊か	37.0	35.5	36.4	35.3	40.9	
	あまり豊かでない	26.9	27.7	26.9	28.7	24.0	
	豊かでない	13.9	15.4	14.2	14.3	11.8	
	わからない	9.8	9.7	9.5	10.7	9.2	
	無回答・回答不備	1.6	1.4	2.1	1.6	1.2	

調 査 票

第3回 若者のワークスタイル調査 ご協力をお願い

「第3回 若者のワークスタイル調査」は若者の働き方について把握し、若者に対する支援について考えるために、厚生労働省所管の（独立行政法人）労働政策研究・研修機構が行うものです。「若者のワークスタイル調査」は、若者（特にフリーター）に対する代表的な調査としてしばしばマスコミ等に引用されております。

皆様にご回答いただいた結果は、すべて統計的に処理し、分析することにしており、研究目的以外に使用したり、個人としての情報をそのまま公表したりすることは絶対にありません。是非ご協力いただきますようお願い申し上げます。なお、調査の実施にあたっては、株式会社RJCリサーチに調査の委託をしております。

調査についてご不明な点がありましたら、下記担当までお問い合わせ下さい。

2011年2月

調査実施主体：独立行政法人 労働政策研究・研修機構

TEL: 03-5991-5183、5186（担当：堀、寺地、小杉）

URL: <http://www.jil.go.jp/>

当機構へのお問い合わせ時間：土曜、日曜、祝日を除く 10：00～16：00



プライバシーマーク
使用許諾事業者

調査委託機関：株式会社 RJCリサーチ

（調査のお問い合わせ先）TEL: 0120-035-217（担当：細谷、戸^と瀬、石井）

URL: <http://www.rjc.co.jp/>

RJCリサーチへのお問い合わせ時間：土曜、日曜、祝日を除く 9：00～18：00

ご記入のお願い

1. 対象者は20～29歳に限ります。正規課程の学生および専業主婦（夫）は対象者ではありません。（科目等履修生は対象者です。）
2. 特に断り書きがなければ、あてはまる項目の番号に○をつけるか、あてはまる数字を記入して下さい。
3. 調査についてご不明な点がありましたら、上記担当までお問い合わせ下さい。

この調査は、RJCリサーチの調査員が直接お伺いして調査票をお預けし、数日後に再度、調査票の回収に伺う予定です。

調査票の回収にお伺いした際、調査ご協力のお礼として図書カード（500円相当）を用意しておりますので、どうぞご笑納下さい。

回収 予定日	月	日		
-----------	---	---	--	--

第3回若者のワークスタイル調査

I. あなたの生活や働くことについてうかがいます。

問1 あなたの性別 1. 男性 2. 女性

生まれた年 19 年(昭和・平成 年) 現在 歳

問2 いろいろな働き方をしている人がいますが、(a)現在のあなたにとって最も望ましい働き方はどれですか。また、(b)3年後のあなたにとって、最も望ましい働き方はどれだと思いますか。それぞれ、の中からあてはまるもの1つを選んで に番号を記入して下さい。

1. 正社員
 2. 公務員
 3. 契約社員・嘱託
 4. 派遣社員
 5. パート・アルバイト
 6. 自営業・自由業
 7. 家族従業者(家の仕事)
 8. その他

⇒ (a) 現在、最も望ましい働き方

⇒ (b) 3年後に実現していきたい働き方

SQ2-1 将来について具体的にお考えのことがあれば以下に詳しくご記入下さい。
(1年後に今のアルバイト先で正社員になる、など。)

SQ2-2 今のあなたの仕事上の知識や技能における強みはなんですか。またその強みは、いつごろ、どんな経験で身についたものだと思いますか。詳しくご記入下さい。

仕事上の知識や技能における強みは？

その強みは、いつごろ、どんな経験で身についたもの？

問3 下のa～gには、人生や仕事についての様々な状況があげてあります。それぞれについてあなたにどの程度あてはまるか、最も近い番号1つに○をつけて下さい。

		かなりあてはまる	ある程度あてはまる	あまりあてはまらない	ほとんどあてはまらない
a	これまでの進路選択は順調であった	1	2	3	4
b	自分の生活は、周囲の人からうまくいっていると思われる	1	2	3	4
c	将来の見通しは明るい	1	2	3	4
d	経済的に自立している	1	2	3	4
e	努力次第で将来は切り開けると思う	1	2	3	4
f	仕事以外に生きがいがある	1	2	3	4
g	現在の生活に満足している	1	2	3	4

問4 あなたは、将来または現在の職業生活や人間関係などについてどのように考えていますか。それぞれについて、最も近い番号1つに○をつけて下さい。

		そう思う	やや そう思う	あまりそう 思わない	そう 思わない
a	今の世の中、定職に就かなくても暮らしていける	1	2	3	4
b	将来のことを考えるよりも今を楽しく生きたい	1	2	3	4
c	若いうちは仕事よりも自分のやりたいことを優先させたい	1	2	3	4
d	いろいろな職業を経験したい	1	2	3	4
e	やりたい仕事なら正社員でもフリーターでもこだわらない	1	2	3	4
f	将来は独立して自分の店や会社を持ちたい	1	2	3	4
g	一つの企業に長く勤めるほうがよい	1	2	3	4
h	フリーターより正社員で働いたほうがトクだ	1	2	3	4
i	専門的な知識や技術を磨きたい	1	2	3	4
j	職業生活に役立つ資格を取りたい	1	2	3	4
k	ひとの役に立つ仕事をしたい	1	2	3	4
l	誰とでもすぐに仲良くなれる	1	2	3	4
m	有名になりたい	1	2	3	4
n	ひとよりも高い収入を得たい	1	2	3	4
o	自分に向いている仕事かわからない	1	2	3	4
p	できれば仕事はしたくない	1	2	3	4
q	ほとんどの人は信頼できる	1	2	3	4
r	自分には政府のすることに対して、それを左右する力はない	1	2	3	4

問5 次の a～d の問題それぞれに対して、①あなたはどのようにお感じですか。②あなたご自身はその問題に直面したことがありますか。③身近にその問題を抱えている方はいらっしゃいますか。あてはまる番号1つにそれぞれ○をつけて下さい。

		①どのようにお感じですか					②ご自身の経験		③身近に	
		とても 問題 だと思う	やや 問題 だと思う	あまり 問題 ではない	まったく 問題 ではない	わから ない	ある	ない	いる	いない
a	ワーキングプア	1	2	3	4	5	1	2	1	2
b	派遣切り	1	2	3	4	5	1	2	1	2
c	新卒で就職できないこと	1	2	3	4	5	1	2	1	2
d	ニート	1	2	3	4	5	1	2	1	2

SQ5-1 あなたは働く中で、疑問を持ったことや納得できなかったことがありますか。

1. ある 2. ない	}	「1. ある」と回答した方：具体的に
----------------	---	--------------------

II. あなたのこれまでの経歴についてうかがいます。

問6 あなたが、(a)卒業した中学校の所在地、(b)最後に在学した学校の種類、(c)学部・学科名を教えてください(なお、ここでいう学校には自動車学校や、短期英会話教室のようなお稽古事のための学校は含みません)。また、(d)卒業の有無と(e)その時期についても教えてください。

<p>(a) 卒業した中学校の所在地</p> <p style="text-align: right;">区</p> <p style="text-align: right;">市町村</p> <p>都道府県</p>	<p>(b) 最後に在学した学校の種類</p> <p>1. 中学 3. 専門・各種学校 5. 高専 7. 大学院</p> <p>2. 高校 4. 短大 6. 大学 8. その他</p>
--	--

(c) 最後に在学した学部・学科を具体的に (普通科・文学部等)

「8. その他」と回答した方: 具体的に

(d) 卒業の有無(卒業か中途退学か)

1. 卒業	2. 中途退学
3. その他(社会人大学院生、など)	

1、2を選んだ人のみ

→ (e) その時期: 西暦 年

問7 その学校を卒業(中退)した直後、どのような就業状態でしたか。1~13のうち、あてはまる番号1つに○をつけて下さい。

1. 正社員	3. 契約社員・嘱託	8. 無職で仕事を探していた
2. 公務員	4. 派遣社員	9. 無職で公務員・教員などの資格試験準備
	5. パート・アルバイト	10. 無職で進学・留学などの準備
	6. 自営業・自由業	11. 専業主婦・結婚準備
	7. 家族従業者(家の仕事)	12. 特に何もしていない・迷っていた
		13. その他 → 「13. その他」と回答した方: 具体的に

1、2に○をつけた方は、SQ7-3に進んで下さい。

3~13に○をつけた方は次の問いにお答え下さい。

SQ7-1 卒業(中退)を前にして、その後のことについて誰かに相談しましたか。あてはまる番号すべてに○をつけて下さい。

1. 親・保護者	7. 趣味をともにする友人
2. 兄弟姉妹	8. 恋人・配偶者
3. 職場やバイト先の上司	9. カウンセラー等の専門家や公的な支援機関
4. 職場やバイト先の友人・同僚	10. その他 ()
5. 学校で知り合った友人	11. 誰もいない
6. 学校の先生・職員・相談員	

SQ7-2 その後、正社員や公務員になりましたか。あてはまる番号1つに○をつけて下さい。

1. なった	2. なっていない
--------	-----------

1に○をつけた方

2に○をつけた方は次のページの問8へ進んで下さい。

SQ7-3 はじめて正社員や公務員になったのはいつですか。

西暦 年 月

SQ7-4 その勤務先企業の規模は、次のどれですか。あてはまる番号1つに○をつけて下さい。

1. 公務	2. 1000人以上	3. 300~999人	4. 30~299人	5. 29人以下
-------	------------	-------------	------------	----------

SQ7-5 現在もその勤務先に勤めつづけていますか。あてはまる番号1つに○をつけて下さい。
 (同じ企業に籍があつての出向や教員の配属がえも「続けている」と考えて下さい。)

- | | |
|----------|----------------|
| 1. 続けている | 2. 勤務先を変つた、辞めた |
|----------|----------------|

【全員がお答え下さい。】

問8 それでは現在 (最近1週間) の主な状況は次のどれでしたか。1~11のうち、あてはまる番号1つに○をつけて下さい。

<ul style="list-style-type: none"> 1. 正社員 2. 公務員 3. 契約社員・嘱託 4. 派遣社員 5. パート・アルバイト 6. 自営業・自由業 7. 家族従業者(家の仕事) 	<ul style="list-style-type: none"> 8. 無職で仕事を探している 9. 無職で仕事以外の活動 「9. 無職で仕事以外の活動」と回答した方: 具体的に 10. 無職で特に何もしていない 11. その他 「11. その他」と回答した方: 具体的に 	<div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; width: fit-content; margin: auto;"> 8~11に○をつけた方は、次ページの問9へ進んで下さい。 </div>
---	--	---

1~7に○をつけた方は、次の問いにお答え下さい。

SQ8-1 現在、お仕事をされている方にうかがいます。あてはまる番号1つに○をつけるか、 に具体的に記入して下さい。

a. 入職時期

西暦 年

b. 採用経路

- | | |
|--------------------------|---|
| 1. 高校・大学などの紹介 | 6. 派遣会社の紹介 |
| 2. 新卒向けの採用情報サイト (リクナビなど) | 7. パートや契約社員からの登用 |
| 3. ハローワークなど、公的機関の紹介 | 8. 民間・NPOなどの支援機関 |
| 4. 親・保護者・親戚・知人の紹介 | 9. 公募 |
| 5. インターネット・新聞・雑誌・貼紙 | 10. その他 (<input style="width: 50px;" type="text"/>) |

c. 職種

- | |
|-----------------------------------|
| 1. 専門・技術的な仕事 (教師・看護師・エンジニアなど) |
| 2. 管理的な仕事 (会社や役所で課長以上) |
| 3. 事務の仕事 (一般事務・経理など) |
| 4. 販売の仕事 (販売やセールスなど) |
| 5. サービスの仕事 (ウエイトレス、調理師、美容師など) |
| 6. 生産工程・建設の仕事 (工場オペレーターや組立工、大工など) |
| 7. 運輸・通信・保安の仕事 (運転、配達、警察官など) |
| 8. その他 → 「8. その他」と回答した方: 具体的に |

d. 勤務先の企業規模

- | | | | | |
|-------|------------|-------------|------------|----------|
| 1. 公務 | 2. 1000人以上 | 3. 300~999人 | 4. 30~299人 | 5. 29人以下 |
|-------|------------|-------------|------------|----------|

e. 1週間の労働時間 (残業含む)

約 時間

f. 現在のおよその年収

約 万円

g. 労働組合

- | | | |
|-------------|-----------------------|-----------|
| 1. 職場の組合に加入 | 2. 個人加盟組合 (独立系労組) に加入 | 3. 入っていない |
|-------------|-----------------------|-----------|

【全員がお答え下さい。】

Ⅲ. 多様な働き方について、うかがいます。

問9 学校を卒業(中退)してからこれまでを振り返って、次のような働き方や無職を経験したことがありますか。あてはまる番号すべてに○をつけて下さい。なお、学生として正規の課程に在学していた時代の無職やパート・アルバイト経験は含みません。

1. 1ヶ月以上無職だったことがある(学生や主婦ではなく)
2. これまで働いたことはない
3. 正社員
4. 公務員
5. 契約社員・嘱託
6. 派遣社員
7. パート・アルバイト
8. 自営業・自由業
9. 家族従業者(家の仕事)
10. その他の働き方

「10. その他の働き方」と回答した方: 具体的に

5～7に○をつけた方は次の問いにお答え下さい。

5～7に○のない方は問11へ進んで下さい。

問10 いろいろな働き方がありますが、契約社員・嘱託、派遣社員、パート・アルバイトなど、正社員(以下、公務員を含む)以外の働き方をしたことがある方にうかがいます。

SQ10-1 正社員以外の働き方をしている期間は、通算でどのくらいですか。

- | | |
|---------------|---------------|
| 1. 6ヶ月未満 | 5. 2年～2年6ヶ月未満 |
| 2. 6ヶ月～1年未満 | 6. 2年6ヶ月～3年未満 |
| 3. 1年～1年6ヶ月未満 | 7. 3年以上 |
| 4. 1年6ヶ月～2年未満 | |

SQ10-2 これまで正社員(公務員を含む)以外の働き方をやめて、正社員(公務員を含む)になろうとした経験はありますか。

1. はい

2. いいえ

1に○をつけた方

正社員になろうとしない理由を具体的に教えてください。

問11へ進んで下さい。

SQ10-3 正社員になろうとしたことがある方にうかがいます。正社員になろうとしたきっかけはなんですか。あてはまる番号すべてに○をつけて下さい。

1. やりたいことが見つかったから
2. 安定した仕事につきたいと思ったから
3. 夢に見切りをつけたから
4. 年齢的に落ち着いたほうが良いと思ったから
5. スキルを身につけたいと思ったから
6. 結婚した、しようと思ったから
7. まわりの友達が就職しはじめたから
8. 正社員(公務員を含む)のほうがトクだと思ったから
9. その他

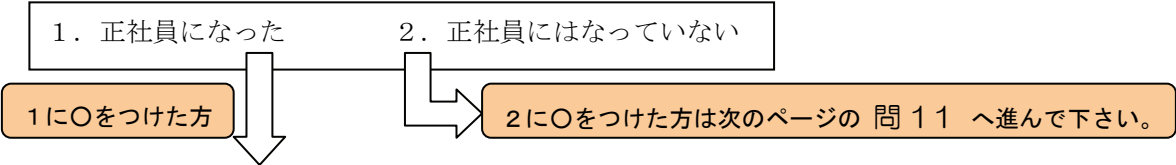
「9. その他」と回答した方: 具体的に

SQ10-4 正社員になろうとしたときに、誰かに相談しましたか。1～11のうち、あてはまる番号すべてに○をつけて下さい。

- | | |
|------------------|------------------------|
| 1. 親・保護者 | 7. 趣味をともにする友人 |
| 2. 兄弟姉妹 | 8. 恋人・配偶者 |
| 3. 職場やバイト先の上司 | 9. カウンセラー等の専門家や公的な支援機関 |
| 4. 職場やバイト先の友人・同僚 | 10. その他 () |
| 5. 学校で知り合った友人 | 11. 誰もいない |
| 6. 学校の先生・職員・相談員 | |

SQ10-5 正社員になろうとした時に、何をしましたか。具体的にお書き下さい。

SQ10-6 その後、正社員になりましたか。あてはまる番号1つに○をつけて下さい。



SQ10-7 正社員になった方にうかがいます。正社員になった直後の勤務に関して、あてはまる番号1つに○をつけるか、 に具体的に記入して下さい。

a. 入職時期 西暦 年

- b. 採用経路
- | | |
|--------------------------|------------------|
| 1. 高校・大学などの紹介 | 6. 派遣会社の紹介 |
| 2. 新卒向けの採用情報サイト (リクナビなど) | 7. パートや契約社員からの登用 |
| 3. ハローワークなど、公的機関の紹介 | 8. 民間・NPOなどの支援機関 |
| 4. 親・保護者・親戚・知人の紹介 | 9. 公募 |
| 5. インターネット・新聞・雑誌・貼紙 | 10. その他 () |

- c. 職種
- | |
|-----------------------------------|
| 1. 専門・技術的な仕事 (教師・看護婦・エンジニアなど) |
| 2. 管理的な仕事 (会社や役所で課長以上) |
| 3. 事務の仕事 (一般事務・経理など) |
| 4. 販売の仕事 (販売やセールスなど) |
| 5. サービスの仕事 (ウエイトレス、調理師、美容師など) |
| 6. 生産工程・建設の仕事 (工場オペレーターや組立工、大工など) |
| 7. 運輸・通信・保安の仕事 (運転、配達、警察官など) |
| 8. その他 → 「8. その他」と回答した方: 具体的に |

d. 企業規模

- | | | | | |
|-------|------------|-------------|------------|----------|
| 1. 公務 | 2. 1000人以上 | 3. 300～999人 | 4. 30～299人 | 5. 29人以下 |
|-------|------------|-------------|------------|----------|

ここからは全員がお答え下さい。

IV. あなたのフリーター経験(パート・アルバイト)についてうかがいます。

問11 あなたは、これまでにフリーターを経験したことがありますか。

1. ある 2. ない

1に○をつけた方

2に○をつけた方はページの下の問15へ進んで下さい。

SQ11-1 フリーターの通算期間はどのくらいですか。

年 ヶ月

問12 これまでフリーターとして最も長く経験した仕事内容について、詳しく教えてください。

問13 あなたはなぜフリーターになったのですか。あてはまる番号すべてに○をつけて下さい。

- | | |
|--------------------------------|-------------------|
| 1. 仕事以外にしたいことがあるから | 6. なんとなく |
| 2. つきたい仕事のための勉強や準備、修行期間として | 7. 正社員はいやだったから |
| 3. 自分に合う仕事を見つけるため | 8. 家庭の事情で |
| 4. 正社員として採用されなかったから | 9. 自由な働き方をしたかったから |
| 5. 学費稼ぎなど、生活のために一時的に働く必要があったから | 10. その他 |

「10. その他」と回答した方：具体的に

SQ13-1 ○をつけた理由のうち、最も重要なものの番号を選んで1つ記入して下さい。

問14 フリーター経験を通じて、次のように感じたことはありますか。1～12のうち、あてはまる番号すべてに○をつけて下さい。

- | | |
|---------------------------------------|---------------------|
| 1. やりたい仕事に直接役立つ能力が身についた | 7. 将来に不安を感じた |
| 2. アルバイト先から急に日数を減らされたり、来なくていいといわれて困った | 8. いろいろな経験をすることができた |
| 3. アルバイト先がなかなか見つからなくて困った | 9. 社会的に認められていないと思った |
| 4. やりたい仕事に就くための人脈やチャンスを得た | 10. 生活が不安定だった |
| 5. 人間関係に関する能力(人とうまく話せるなど)が身についた | 11. 自由な時間が持てた |
| 6. やりたい仕事ははっきりした | 12. 正社員に比べて収入が少なかった |
| | 13. この中にあてはまるものはない |

V. あなたとあなたのご家族のことについてうかがいます。

問15 あなたは次のような行政サービスや公的な支援を活用したことがありますか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。

- | | | | | |
|-------------|-----------------|---------|-----------|------------------|
| 1. 奨学金 | 2. 授業料免除 | 3. 失業手当 | 4. ハローワーク | 5. 若者サポートステーション |
| 6. ジョブカフェ | 7. 国または自治体の職業訓練 | 8. 生活保護 | | |
| 9. その他(具体的に | | |) | 10. どれも活用したことはない |

問16 現在、あなたご自身は、どの公的年金制度に加入していますか。あてはまる番号1つに○をつけて下さい。

1. 国民年金 2. 厚生年金・共済組合 3. 加入していない 4. わからない

問 17 現在、あなたご自身は、どの公的医療保険に加入していますか。あてはまる番号 1 つに○をつけて下さい。

- | |
|---|
| 1. 会社の健康保険・共済保険 → (1. あなたご自身が加入 2. ご家族の保険に加入) |
| 2. 国民健康保険 |
| 3. その他 (具体的に) |
| 4. どれにも加入していない 5. わからない |

問 18 現在のあなたはどなたかと一緒にお暮らしですか。あてはまる番号すべてに○をつけて下さい。

- | | | | | |
|--------|---------|----------|-----------|--------|
| 1. 1人で | 2. 父や母と | 3. 兄弟姉妹と | 4. 配偶者や子供 | 5. その他 |
|--------|---------|----------|-----------|--------|

問 19 あなたが最初に結婚したのはいつですか (事実婚は含む。同棲は含みません)。

- | |
|--|
| 1. 西暦 <input type="text"/> 年に結婚した → SQ19-1 へ |
| 2. これまで一度も結婚していない → 問 20 へ |

SQ19-1 最初に結婚したときに、あなたはどのような就業状態でしたか。1~7のうち、あてはまる番号 1 つに○をつけて下さい。

- | | | |
|------------|-----------------|--------------|
| 1. 正社員、公務員 | 2. 派遣・契約・嘱託 | 3. パート・アルバイト |
| 4. 自営業・自由業 | 5. 家族従業者 (家の仕事) | 6. 学生 7. 無職 |

SQ19-2 現在あなたは結婚していますか (事実婚は含む。同棲は含みません)。

- | | |
|-----------|------------|
| 1. 結婚している | 2. 結婚していない |
|-----------|------------|

問 20 あなたは現在、a~d のことについて悩みを持っていますか。もし悩みを持っている場合には相談する相手について、あてはまる番号すべてに○をつけて下さい。

		A 悩みはない	B 悩みがある										
			親・保護者	兄弟姉妹	職場やバイト先の上司	職場やバイト先の友人・同僚	学校で知り合った友人	学校の先生・職員・相談員	趣味をともにする友人	恋人・配偶者	家や公的な支援機関 カウンセラー等の専門	その他	誰もいない
a	今の自分の仕事や働き方について	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
b	これからの生き方や働き方について	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
c	人間関係について	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
d	経済的な問題(お金のこと)について	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11

問 21 あなたのご両親の最終学歴について、あてはまる番号 1 つに○をつけて下さい。

		中学	高校	専門学校・各種学校	短大・高専	大学・大学院	該当なし	わからない
a	父親	1	2	3	4	5	6	7
b	母親	1	2	3	4	5	6	7

問 22 あなたのご実家 (または保護者の家) の経済的豊かさはどのくらいですか。あてはまる番号 1 つに○をつけて下さい。

- | | | |
|---------------------------|-------|-------|
| 豊かである | 豊かでない | わからない |
| 1 …………… 2 …………… 3 …………… 4 | 5 | |

4月以降に、若者の働き方についてのインタビュー調査(約1時間半)を予定しています。調査にご協力いただける方には詳細をご連絡いたしますので、氏名・連絡先をご記入下さい(強制ではありません)。

氏名 () メールアドレスまたはご住所 ()

ケース記録

ケース記録内での名前	性別	年齢	最後に在籍した学校	婚姻	インタビュー実施日	インタビューア	ケース記録執筆
B	女性	27	大学	未婚	6月23日	小杉、寺地	小杉
C	男性	28	大学院	未婚	6月29日	堀、寺地	堀
D	男性	26	大学	未婚	7月2日	久木元、寺地	久木元
E	女性	29	大学	未婚	7月4日	久木元、堀	久木元
F	女性	26	専門・各種	既婚	7月5日	小杉、寺地	寺地
G	男性	28	大学	既婚	7月6日	小杉、寺地	小杉
H	男性	23	大学	未婚	7月7日	堀、寺地	寺地
I	女性	29	専門・各種	未婚	7月9日	堀、寺地	堀
J	女性	20	高校	未婚	7月19日	堀	堀
K	女性	25	大学	未婚	7月20日	堀、寺地	堀
L	女性	30	大学	既婚	7月21日	小杉、寺地	小杉
M	男性	28	大学	既婚	7月22日	堀、寺地	寺地
N	女性	27	大学院	既婚	7月24日	堀、寺地	堀
O	男性	26	専門・各種	未婚	7月27日	久木元、寺地	久木元
P	男性	24	大学	未婚	7月30日	小杉	小杉
Q	男性	29	大学	既婚	7月30日	小杉	小杉
R	女性	27	大学	未婚	8月10日	小杉、久木元	久木元
S	女性	27	高校	未婚	8月20日	堀、寺地	堀
A	女性	24	短大	既婚	6月22日	堀	堀

Bさん

26歳女性。就職のことも考えて大学は薬学部に行き、薬剤師となる。今は薬剤師専門の派遣会社で派遣社員。待遇はいい。将来はカフェを開きたくて準備中。

1. 学校時代について

高校までは北関東の都市に住んでいた。高校は地元の普通科進学校。同じ中学から進学した人はいない。中学時代は卓球部だったが、高校は家が遠いことがあり部活はやっていない。成績は上のほう。高2の時に理系コースを選択。

「文系の教科のほうが好きだったんですけども、でも、将来考えたら理系へ行ったほうが何かと有利かと思ひまして、で、理系を。…(中略)… 理系の何か生物、生物が得意だったので、A大学にある園芸学部か、どこかの理系の学部か薬学部かぐらいで考えていたんですけども。」

理系のクラスは女子が少なく10人程度。女子は女子で仲が良かった。特に担任の先生と仲が良いとかいうことはなく普通の感じ。誰かに影響を受けて生物が好きになったというようなことはない。友達も皆、進路については迷っていたので、クラスの友達で話すことはあった。

「(受験したのは?) 園芸学部も受けました。でも、何か全然わからなくて、全然受からなかったの。結局受かったところに行った。…(中略)…もう1個違う学部もうかったんですけども、薬学のほうが就職に有利そうだったので、こっちを選んだというか。」

B 大学薬学部に進学

「最初は研究方面に行こうかと思っていたんですけども、大学に入ってから、研究に行くには大学院まで行かなきゃいけないということに気づいたんですよ。そこまで勉強したくないと思って」

「授業は思った以上に大変。大学って遊ぶイメージだったんですけど。高校よりも大変だなと思って。」

大学生活

東京に出てきて。1年目は寮、2年目から一人暮らし。高校時代の友達とは、東京に出てきた友達とはたまに会う程度。

サークルは軽音楽部に入り、ロック系のバンドでベースを弾く。

「(サークルは熱心に?) そうです。どっちかという、そっちがメインになっていました。」

「クラスでは、寮のときの一緒の友達が結構仲がよくて、放課後とか、そのサークルの友達が多かったです。」

「(進路のことなど、友達の影響は?) それはどちらかという、先輩のほうの影響がありま

した。先輩がこういう実習に行ったりとか、いろいろな話を、企業とかもいろいろ聞かせていただいて、だんだん決まっていた感じです。」

サークルの先輩から聞くことが多かった。

就職活動

就職を意識したのは3年生の前半ごろから。

「(薬局に決めたのは?) 最初、単純に給料の面と、お休みの面と、労働条件は、薬局が病院とかよりも、研究よりも一番よかったんです。給料はそんな上がらないんですけど、安定しているなと思って。それで、決めたというのもある。」

薬剤師試験は卒業直前なので、それを通る前提で就職活動を始める。4年生の初めごろからだった。

「3社、気になっているところがあって、そのうちの、1社目で受かったから決めちゃったような気もする。一番ここが受かったらいいな、次、落とされたらこうって決めて、最初に受けたところで受かったの。」

「(選択の基準は?) 薬局でも調剤だけやるところと、あとドラッグストアと調剤と両方あるところがあって、いろいろやれたほうがおもしろそうだったんでその両方やりたいなと思ったんです。…(中略)…あとはあまり転勤とかしたくなかったんで、東京に主に展開しているところと、あとやっぱり給料という感じで決めました。」

会社訪問は特にしていない。インターネットで会社情報を見て、そういった条件をチェックして、あとは面接に行った。

「面接も、2次とか、3次とかはなかった。けっこう、ちゃつと行って、ちゃつと決まったような気がします。…(中略)… 薬剤師は足りてないので、まだ今のところは売り手市場なので。来てくれたらありがとうぐらいだった。」

アルバイト

大学ではアルバイトをした。コンビニとレストランのウエイトレス。食品工場でサラダを詰める短期バイトもした。仕事は週1, 2日しかできず、ほとんど稼げなかった。

2. キャリア

最初の薬局は大手のチェーン店。サービス残業ということはなかったが、残業は多かった。また、有給休暇が使いえなかった。

「何かそういう空気ができ上がっていて、有休は絶対に取っちゃいけないみたいなのがあって、だれ一人申請する人がいなかった。病気でも使いえなかったです。何でも使いえなかった。」

2007年の4月に入社して、2009年の12月に辞めた。

「やりたいことが出てきたので、このときはシフト制で土日休みじゃなかったんですけど、

土日休みにしたいなと思って変えた。」

次の仕事は 2009 年の 9 月ごろから探し始めており、翌月からの勤め先を決めてからやめている。2 番目の仕事は、パートの薬剤師。調剤だけにして時間もきっちり決まっていて残業もない。賃金は最初は低かったが、交渉してあげてもらい、残業代を考えると最初の職場と変わらない水準になった。

それを 2011 年 3 月まで続け、今は 3 番目の会社に。今度は派遣。薬剤師ばかり登録している派遣会社である。パートの時は週 40 時間で 300 万ぐらいの年収だったが、派遣に変えて、週 35 時間で 400 万ぐらいに増えた。

「(転職のきっかけは)パートよりも派遣のほうが時給が高いということに気づいたというのが(笑)。派遣というのは、あまり存在に気づいていなかった。…(中略)…働いていたときに、職場に派遣の人が来たんですよ。話を聞いたら、何かよさそうだなと思って、で、調べたら、完全にこっちのほうが待遇がよかった。」

「薬剤師免許を持っていれば、だれでも登録できるんです。ただ、いろいろなところに派遣されるので、ある程度、経歴が少しはないと、1 年目から派遣をやる人ってあまりいないと思うんですけど。」

薬剤師としての知識

「(大学で勉強しただけではだめですか?)大学 4 年の知識は今なにも使っていないですね。実践して覚えていくことなので。」

「(新薬とかの知識は?)新しいのが出たときは、勉強します。出ますっていうので勉強会があったりとかはします。結構頻繁にあります。」

「(薬剤師として一人前という感じはありますか?) 薬剤師としては全然ないです。結構ふらふらしているんで。(上司から怒られたりは?) 薬局長から怒られるっていうことは最近はないですけども、昔はよく指導、指導というか、教えてもらっていましたけど。最近怒られるのは、どちらかという患者さん。(笑)何か 1 個間違えたりすると命にかかわってくるので。」

「(薬剤師の仕事は好きですか?) 好き? どうなんでしょうね。どっちかという、私は仕事は仕事ですね。やりがいはあると思うんですけど、で、仕事内容のわりに給料がいいというのがあります。(笑)」

3. 将来について

カフェを開きたい

「(土日休みにした理由は?) カフェとかの経営とかに興味があって、そういう勉強がしたいなと思ったので。(どういうふうに勉強するんですか?) 知り合いでそういうのをやっている方がいるので、そういう方に教えてもらったり。やっぱりそっちに合わせなきゃいけなかつ

たんで。」

「(なぜカフェに?)もともと興味があったんですけども、気づいたら薬剤師になっていて、何かあきらめていたんです。けど、そういう何かやっている人と知り合えたので、だったら何かやってみたいなと思って。」

教えてくれているのは、30前半ぐらいの男性。カフェを自分でやっている。友達の知り合いだった人。

「あこがれはありました。でも、全然本気では考えていなかった、どうせ無理だと思っていたので。でも話を聞いていたら何か、結構余裕があったんで、時間、余裕というか、薬剤師というあれがあるので、だから、大きいもとがあるので、別にちょっとぐらいほかのこともできるんじゃないかと思って。」

「音楽が一番趣味として、大きくて好きなんです。なので、そういう音楽を働きながら聞きたいっていうのが最初だったんですけど。薬局でロックとかパンクとか流せないんで。

(笑) だったら自分でお店を持ちたいなっていうのが最初のきっかけではあったんです。」

「(どのくらい本気で?) 結構今は真剣に学んでいます。(具体的な場所とか?) 何か、ここにできたらいいなみたいなのはあります。(資金は?) 考えています。」

「(カフェをやっても薬剤師は続けていく?) いや、あまりないですね。カフェがうまくいったらそっちのほうやりたいです。できたら30代のうちには、そちらにシフトしたい。」

4. 育った家庭について

両親と兄、それに祖父母の6人家族。田んぼがあり、祖父母は自家用の米を作っている。両親はともに教員。勉強をやらされたという感じはなく、勝手にやっていた感じ。家にはたくさんあった。

「絵本があって。それを幼稚園のころは毎日読んでいた記憶がある。あとは漫画、だんだん漫画になっていきましたけれども。」

携帯電話は高校時代から持っていたが、特にほしいと言った記憶はない。家が遠かったから、迎えに来てもらったりする必要性からだった。

両親に対しては、進路を決める時にも結構事後報告が多かった。転職の際もそうだった。「そうですね。むしろ休みが取れやすくなったので、実家に帰りやすくなったので喜んでます。(笑) 1年目は全く帰れなかったんで。」

カフェの話は父親にはまだしていない。「余計な心配をかけたくないんで、うまくいってから言おうかなと。」

5. 結婚について

独身。今は結婚は考えていない。30を超えたぐらいだと思う。今はカフェのほう大きい。

6. 友達関係・シェアハウス

「(友達が多いほう?) どうなんだろう。自分じゃちょっとよくわからないですけども、少なくはないと思うんですけど」

一緒にライブに行ったりする趣味が共通する友達が多い。大学の頃からの延長上の友達も、社会人になってからの友達もいる。

1年半ほど前から、友人4人で賃貸住宅を借りて暮らしている。最初の会社で知り合った友人とそのまた友人。皆同じ世代の女性。

「はやっているみたいです。結構多いみたいです。安いので。楽しいです。」

2人1部屋で、夕食は個人個人で。冷蔵庫には名前を書いている。いつまでと特に決めてはいない。

7. その他

「(あなたのこれまでを理解するのに大事なことって?) 何だろう。でも、そういう何か、カフェをやるにしても、人との出会いが自分にとってすごい大きかったのがあるんですよ。出会えなかったら多分ずっと薬剤師やってたと思うんですよ。疑いもなく薬剤師の道しかないと考えていたので。そういう人と出会って、あ、違う道もあるかもしれないって、可能性がやっぱり広がったなと思って。(その方も友達の友達でしたね。) そうですね。なので、最近はあるべく広くするように、人とのつながりっていうか。前は深く狭くでよかったんですけど、それが楽だったので。最近はあるべく広くいろいろな人と話したいなと思って。」

「それもあって、派遣というのもしっかりいろいろなところに行けるんですよ。それもおもしろいなと思ったので、派遣というの。給料が一番だったんですけども、いろいろなところへ行けるというのも一つの要因です。(特に正社員になりたいと思わない?) そうですね。私は今はそうです。」

Cさん

九州出身。公立小中学校から、県内で有数の進学校に進む。高校卒業後にいったん京都にある大学の理学部に進学するが違和感を覚えて1年で辞め、東京の大学の農学部へ再度進学する。多趣味で、旅、登山、サイクリング、料理（調理師免許をもつ）、昆虫採集、柔道（二段）、写真を嗜み、ネットワークも広い。現在はNPOの活動に職員として従事しながら、大学でも非常勤職員として教えている。

1. 学校時代について

こどもの時はアトピー・ぜんそく・肥満のため内向的だったが、囲碁の習い事をきっかけにガキ大将のような存在になる。

「何か言うのもなんですけど、昔ちょっと肥満児だったんですよ、体質的に、あと、ありとあらゆるアレルギーがあってぜんそくもあって、そばとか卵とか牛乳とか、何でもあったんですね。水泳でぜんそくは克服しようというのもやってて、でも、プラス何かでも趣味やろうかということで、おやじの大学時代の後輩が道場の師匠をやってたんで、紹介していただいて、そこからのつきあいですかね。そのうちに全部解消されましたけどね。アレルギーとか、肥満も全部解消されて、何で始めたんだろうっていう。

結構内向的だった気がしますね。友達は多かったんですけど。囲碁、友達か、内向的だったのもその囲碁で、おれのやっぱり師匠が、そういった子供の教育にもすごい力入れて、内向的なやつをバシバシたたいて表向きにさせる、何ですかね、すばらしい師匠で。」

公立の小中学校で学ぶ。昆虫が好きで博物館と様々な関わりを持っていた。

「僕は昆虫が好きなんですね。トンボとか、あと、ガですね。小学校のときから、採集とかするじゃないですか。たまに珍しいのをとったら博物館に持っていくとか、また、博物館の方も、僕1人じゃなくて何人もいたいんですけれども、面倒見てくださって、そういう調査に同行するかい？ とか、分析とかやらせていただいて。」

高校は囲碁の一芸推薦で進学校に進む。高校では生徒会長。部活は柔道、ラグビーや、囲碁も部活もやっていた。

大学は生物に関心があったので知っている助教授が所属していた理学部に進んだが、人とかかわりがいいことに不満を覚え、本を読んで関心を持った教授のいる大学に再進学した。

「最初ちょっと違う大学に、京都のほうで理学部だったんですよ。ただ、ちょっとおもしろみがなくて、何か。1カ月ぐらいでやめまして。人とのつながりがいいというのが、なんで、今の大学では大学1年から今の教授のところにつかせていただいてやっているんですけど」

も。

（最初の理学部に入ったのは）生物が、生態系というんですか、そういうのを保全したいなというのもある。 （入学から）2週間ぐらいして、たまたまそこも知っている助教授の方がいらっやって、その関係で入ったんですけれども、でも、ちょっと何か、そのお話をじかに伺うと教養科目が多いとか、もう社会から隔離されたというんですか。ちょっと自分には向かないなと思ひまして、それを考えたら、もうすぐに何かにとりかかれる場所に行きたいという意味合いで今の大学のほうに行かせていただいたというのが背景ですかね。大学の教育者になりたいというのは、もう中学のときからずっと思っていたんで、ただ、やはりちょっと何かあまりに無機的過ぎる感じとか、ちょっとそこに疑問を感じて。」

大学時代は仕送りをもらわず、奨学金・アルバイト・授業料免除を活用しながら、自分で生活を賄った。

「仕送りとか一切もらっていないですね。授業料も含めて全部やっていたんで、なんで、その途中で1年間仕事したり、海外行ったりとかいう機会もあったり、研究も含めて行って来たんですけど。」

親は出そうとするんですけどね、突っぱねて。だって、もう出たら出ただろうみたいな、あとは自分で稼いで何ぼでしょうと。全然苦勞もしていないですし、むしろやったおかげでいろいろネットワークも広がったりとか、職も身についたりとか。」

2. キャリア

学部には5年間所属し、その後大学院に進学。学部在学中に訪問した国が現在関わっているNPOの本拠地であり、それが縁で現在のNPO法人で働くようになる。現在は、NPO職員として経済的に自立している。

「もともとこの〇〇（関わっているNPO法人）の本拠地がイギリスなんですね、発祥は。そこだとほんとうに、何ですかね、議会で、国家予算の中に組み込まれるような団体なんです、ここは。」

事務局長が、何か指導教官のお弟子さんとかいろいろと関係があって、僕も個人的に存じあげていまして、その学部時代に最初にイギリスに行ったときに一緒に視察をしていただいたんですよ。その方がどうだということ、東京にいていいから、いろいろな仕事があったら手伝わない？という話で。」

NPOに必要なスキルは、企業の立ち上げに関わらせてもらったり、他の事務局員の人から学ばせてもらったりして身に付けている。

3. 将来について

中学の時から将来は大学で教職に就きたいと考えているが、政策に携わるような仕事も志

向している。専門は地域研究。

「今のある種悩みで、(アカデミックな)常勤のほうにすぐ行ってもいいですけど、またちょっと別の話が今あって、ちょっと。農業関係の政策をやっている研究所のようなところに働きに来ないかと、5年ぐらいでっていう話で。だれかがやっぱりそういうのをやっていかないと、もう今の省庁にはとても任せられないですから、彼らにはですね、現場が見えないもんですから、なんで、ぜひやりたいかなと思って、思いますね、それは、できる範囲で。」

結婚については、1年半前から考え中である。

4. 友達について

交友関係は極めて広く、東京にもA県にも多くの友達がいる。友達は趣味でつながっていることが多い。特に囲碁をきっかけにした知り合いは、年齢を超えて様々な分野にわたっている。

「親友って呼べる人で多分15人ぐらいいます。大親友で。なんで、あと、それ以外にも仲いい友達とかはいますけど。各世代で、高校もそうですしね、中学、囲碁関係もそうですし、囲碁関係はもう親友を越えて兄弟みたいな感じですけどね。」

就職活動はしたことがないが、もしするとすればネットワークを活用するという。人とのつながりの重要性を痛感している。

「就活っていうのがありますよね。僕は就活したかったら、じかにそういった企業の人でネットワークある人を呼んで、飲んでみてみたいな話をするっていいいます。コネクションは最高の就活形態ですよ。僕はもうほんとうに近くの後輩とか学生はそういう就活させないで、個人的に紹介してます。」

何にしてもそうです。人とのつながりですね。それが最後の武器になりますよね。

いろいろな方々にもう大学1年から、囲碁つながりとか、いろいろなつながりで、ほんとう社会人の方とか、そういった会合とか、囲碁つながり。

でも自分でアンテナ張らんとだめですね。自分からつながりをつけるっていうのは、やっぱりどんどん広がっていきますね。」

自分のネットワークの原点は、囲碁である。囲碁をきっかけに、年齢を超えた付き合いが展開している。

「高校のときからいろいろなことを、常にそういった自分の枠外の活動っていうんですか、年代関係ない、多分それは囲碁が原点です。小学校のときから、言ったら、じいちゃん、ばあちゃんっていうんですか、周りにいつも、おじさんもそうですけどね、いろいろな先生がとかやってるじゃないですか。だから、就職とかされたいんだったら、囲碁をやらせれば、すぐに見つかります。」

(自分の活動は) 囲碁の世界から外に出る感じじゃないかな。そういう人たちと会う機会というか、幾らでも、この大学で変なふうに幅きかせられたのも、その囲碁のおかげで。ほかの趣味もそうかもしれないですけど、やっぱ続けて、しかもネットワークを外にも広げるっていうのをやれば、いまだに世の中コミュニティって広いなって思いますよね。こんな新参者の若者がいきなり話しに行っても、(囲碁の関係者は) 話を聞いてくれますね。」

自分のネットワークを展開する上で、趣味を継続する重要性があると感じるようになった。「1本の趣味だけだっというのは、多分根詰まる可能性がありますよね。何ですかね、壁とか考えちゃったりする。例えば、何ですかね、ちょっと囲碁とか、何段とかあるじゃないですか、あれで真剣に上がれないとか、柔道もそうですよ。トーナメントが抜けられないとか。それだけでやってしまうと、ちょっと重い趣味になってしまうかもしれない。それをしてもいいんですけど、それ以外にも、何かこう、またちょっと違う方向性のっていうんですかね、そういうのもあると代償が常にきく、それをやっているうちに、またそのもとのをやっていこうとかできますし、何かね、それをすごく感じますよね。大学でもサークルも山ほど入りましたしね、ほどよく、ほんとうに、それはありますね。コアな部分、コアな趣味と、何かちょいちょいやっていけるものとか、最終的には娯楽系ですかね、無理のわからない範囲とかね。」

現在の学生が孤立している状況を憂いており、個人的にも働きかけをしている。「新しく入った新入生、あれどうなのっていう話をして、引きこもり系の子とかもいっぱい僕はサークルに入れていきますよ。囲碁とかESSとかにしても、僕なんかがいるとは多分思っって来ないんですよ、そのサークルに。囲碁、ESSのイメージだとそういうドメスティックな人たちが集まるような限界かと思って来たら失敗するんです。違います。みんなでも外に、リーダー格になっていきますよ。いろいろなことができる、仕向けるっていうのを、食事もそうですよ。おいしいものをしっかりと考えて食べる。食育とか言いますが、実際日常生活からできるんですよ。みんな興味を持つ、重い話じゃなくて、これうまいじゃんとか、最近はいしん坊になんですけど。でも、ほんとうね、それも解消できますね。」

現在は被災地の支援にも関わっている。自分の専門やネットワークを生かしながら、積極的な活動を展開している。

5. 家族について

父は写真家で、主に東南アジアの人や風景についての写真を撮ってきた。母は困難を抱える子供たちのための学校の教員をしている。兄弟は弟が1人。

「(両親には)やっぱりものを言えというんですかね、うちの家もそうかもしれないですけど、でも、しっかりとものを発言すること、返事をしろとか、礼儀とか、そういうことを結構大分長期的に言われた気はしますね。

Dさん

26歳男性。東北地方出身。地元の大学の情報関係の学部を卒業し、東京でシステムエンジニアとして就職。仕事の忙しさに加え、会社の状況の変化、さらに震災の経験などから、出身地にUターンして生活スタイルを変えることを考え始めている。

1. 学校時代

東北地方の生まれ。小・中学校の頃は、親の仕事の都合で県内を転校していたが、中学校の途中からは県庁所在地で暮らし、大学卒業までその自宅に住む。

高校は地元の進学校だが、「正直、勉強だけをするという感じの、つまらない学校だったと思っています」。将来IT系の仕事をやりたかったこともあり、2年のときに理系を選択。しかし高校時代は全然勉強せず、成績は下から数えたほうが早かった。

高校時代、教師との関係はよく、職員室に「暇な時間に話しに行ったりとかしていた」。部活は物理部だったが、「部室になぜかパソコンが置いていまして、とりあえずそれをいじって、飽きたら帰る」という感じで、文化祭の出展などを除くと「実質、帰宅部だった」。物理部のときの友人とは縁が続いていて、今でも会うことがある。

地元の予備校に通いつつ一年浪人してから、地元の公立大学に進学。「ちょうど浪人したときに、自分の友達がその大学に入ったんですよ。それでちょっと興味があって遊びに行ったんですけど、そこで会った教授がちょうど（その後の入試の）面接官で」。もともと地元志向が強く、地元の大学に行きたいと考えていた。

「何か外に出るのが怖かったんですね、正直言って。今なら知らない土地にいても大丈夫だと思いますけどね、当時はやっぱり怖かったですね。」

大学時代

入学したのは情報関係の学部。サークルには入っていなかった。「1年生のときから研究室に強制配属という学部なんですよ。ですから、別にサークルに入らなくても、そういうつながりの範囲で友達とかはできたので、特にサークルに入りたいとかは全く思わなかったですし」。

最初の研究室は自分の意思とは関係なく割り振られるが、その後2度研究室を移る機会があり、2度とも移った。最終的に選んだ研究室は、「卒業しやすそうだったから」というのもあったが、「分野的にも、ほかのところよりはまだ興味あった」ため、コンピュータネットワークに関する研究室に所属。「学校自体のレベルがあまり高い感じではないので、死ぬほどやらなくても何とかできるという感じでは」あったものの、進級の条件になる必須の演習があったり、卒論が義務だったりして、勉強については厳しい大学だった。

就職活動

就職活動は3年の頃から始めた。当時はまだ「売り手市場と言われていた時期」の最後の頃で、東京から大学に企業が説明をしに来ていた。そのため、隣の県まで行くことはあったものの、就職活動のために東京に出向くことはなかった。

情報関係の学部だったこともあり、同級生の多くは情報系の会社などに絞り込んでいたが、自分自身は情報系のところの話を優先的に聞いたものの、「大学に来た企業を、ジャンル関係なしに片っ端から説明を聞いていた」。勤務地も、東京に行きたいと考えていたが、そうでなければ帰省しやすいところというぐらいの考えだった。

その中で、第一希望だった東京のソフトウェアの会社に「すんなり」内定する。そこを希望した理由は、「やっぱり単純に給料がよかったというのと、あと、東京へ行きたかった」。その会社には、自分の大学からは「数年前に1人採用実績があったくらいで、我々の代で久しぶりに採用があったという感じ」（大学の同期で同じ会社に入った人もいた）。

2. キャリアと仕事の状況

新卒時に就職した東京のソフトウェアの会社に、現在もシステムエンジニアとして勤務している。入社したころは仕事にも意欲的だったが、「去年ぐらいまでは、わりと気持ちは上向いていたんですけど、最近は停滞傾向ですね」。

「朝は9時に着くように行っています。大体、家を出るのが、比較的家が近いので、8時15分ぐらいに家を出て……。 (帰宅時間は) 最近は10時、11時、12時くらいですね。」

仕事が忙しく、自分の時間がとれないことに不満を感じている。

「上を見ていると、上司とか、夜遅くまで働いていて、上司って、自分が昇進していったら、将来、なる姿じゃないですか。そういう人たちが夜の12時ぐらいまで働いているのを見て、なりたいたいと言えば、さすがにお断りしますという感じなので。(その上司の年齢は?) 35ぐらいですね。(10年後ぐらいの自分の姿が) あれだったら絶対嫌ですね。(上司たちも、12時まで働くというのは) 本来、あるべきじゃないと思ってやっていますが、やっぱり企業顧客を相手にする会社ですので、納期とか、そういうのを考えるとそうなっちゃって。」

会社の状況の今後まで考慮すると、転職することも考えている。

「会社の体制も、裁量労働制になって、みなし残業になろうとしているんです、今、うちの会社。それもあって、残業代が20時間ぐらいで上限で、そういう会社さん多いですけどね。でも、それだったら、もう少し労働が軽いほうがいいですし、やっぱり自分の時間は欲しいですから。……別に会社を変えようと思っているのは、私に限った話じゃなくて、結構いろいろな人から話を聞くと、裁量労働制になるんだったら、この会社に見切りをつけようという人は中で多いですね。」

副収入

年収は700万円だが、会社の給料は500万円。仕事とは別に、海外のソフトを日本語化（ローカライズ）するプログラムを作成し公開するサイトを個人で運営しており、このサイトのアフィリエイト広告の収入が200万円くらいある。サイトの運営は浪人していた予備校生時代に始めて、現在まで9年にわたりずっと続けている。

「パソコンが好きだったので、パソコンのいじり方はわかっていたくらいで、予備校時代に読んだ雑誌にこれのやり方が書いて、何かできると自慢できちゃうぞとかという感じの内容だったんですけど。それで自分でやってみて……。」

このサイトには、現在1日1万3,000から、休日だと1万8,000ぐらいのアクセスがある。ただ長くやっていることもあり、サイト運営にかかる時間はさほど長くない。

「(サイト運営の作業は) 帰宅後にやったり、休日にやったりして、大体1回、最近は面倒くさがっているんで、30分とか、多くて1時間ぐらいでやって更新しちゃいますね。(短時間でできるのは) 慣れがありますね。さすがに9年間やっていると、大体、生活の一部として更新が組み込まれちゃっているんで。(続けられている秘訣は?) 惰性です。惰性しかないですね。」

ただ、アクセス数が多いため、多数のアクセスに対応できるようなサーバーをレンタルしており、その分維持費は高く(「結構、お金をつぎ込んでいるんですよ」)、アフィリエイトの収入がすべてそのまま利益になっているわけではない。それもあって、この収入をメインにして生活するといったことまでは考えてはいない。

Uターン志向

こうした中で、今の会社を辞めて出身地にUターンすることを、半年ぐらい前から考えている。東京で、同じ業種の他の会社に移っても大きく状況は変わりそうにないためUターンを考えており、また出身地で今と同じ仕事をするのも難しいのが実情であることから、今とはまったく異なる仕事をするようになってもいいと考えている。単に転職するというよりは、Uターンすることによってライフスタイル自体を変えることが意識されている。

「(出身地で生活の基盤を) 構えたいですね。もうちょっとスローライフで。最近、ちょっと週末、土いじりしたいんですよ。昔、小学生のころに、自分で家に土を耕すところがあったので、勝手に畑を耕して野菜を植えたりしていたんですよ。最近、週末、野菜を買って、自炊したりしているんですけど、やっぱり東京の野菜っておいしくないんですね、スーパーに売っているのは基本的に。もう自分でつくりたいなみたいな願望があるんです。」

「(Uターンへの関心も、仕事の面というよりも) どちらかといえば自分の生活スタイル(を重視するからこそ)。今の大学生とかはみんな、就職は大体、給料がよくて、大手企業でというので、自分もそうだったんですけど、やっぱり3年目ぐらいになってくると現実も見えてきて、自分の生活スタイルってどうすればいいんだろうという考え方に入ってくる時期にあ

りますね。今、ちょうど入社4年目なんですけど。(今の時点での理想は?) 田舎でスローライフ。(土いじりしたりしながらという感じが) 理想ですね。」

「(今の) 生活スタイルは変えたいと思っているので、今の企業にいる限りは(変えることは) 見込めないので、自分からいる環境を変えるしかないですね。(ライフスタイルを変えるのは) できれば1年から2年ぐらいのスパンでやりたい。ただ、……(出身地で何ができるかを積極的に探るという段階) まではまだいっていませんね。」

それでも、Uターンしてどんな仕事があるのかは、それなりに調べている。公務員の採用試験にも、既に応募している。

「(出身地の) 求人情報を見ているんですけど、(理系の仕事だと) やっぱり下請けとか、そういうのしかないんですね。……転職サイトとかに登録して、ぴらぴら見ているんですけども、やっぱりいいのはないですね。転職がないのをやっぱり探しているんですけど、ないんですよ、なかなか。社会人をやっている限り、会社の都合で飛ばされちゃうので、ほんとうに転職が嫌だったら、自分で事業を起こせという話になっちゃうんですけど。」

「とりあえず手始めに公務員試験ぐらいは受けてみようかなと思うんですけど。受かる気はしない、記念受験ですけどね。地元の市役所。実は願書は出しているんですけど。一般事務職という感じで募集しています。(中途採用という枠はなく) 新卒扱いですね、28歳未満というくりだったので。いけていないですね、あの採用は。もう少し、社会人経験ある人とかを入れて多様化を目指したほうが、行政としてはいいと思うのに、最初から経験浅いような、何も経験していない人とかをいっぱい入れて、行政の将来になるかと言われてたら、そうは感じないです。(採用試験は) 来月です。公務員の試験問題集をやってみたんですけど、うーん、何かなというのがあったので。知っているか、知らないかの世界ですね。何か勉強する意味を感じなかったので、やめちゃいました。それだったらもっとやることがあると思う。本を読むとか、もうちょっと自分の視野を広げるほうに時間を割きたいので。」

3. 家族

家族構成は両親と弟。父親は高校教員をしていたが、自分が就職したときにちょうど退職。母親は専業主婦。弟は今も実家で両親と暮らしており、土建の仕事をしている。

父親は物理などを教えていた。「(そのことは、自分が理系方面に関心を持ったことに関係が) あると思いますね。私が小学校のころに、親が学校の実験室に連れていってくれて、いろいろ見せてくれたんですよ。やっぱりそういう関心は少なからずありますね。ちょっとかたい父親でしたけど、いろいろやってくれたと思います。」

「(進路の選択の際に、両親から) 反対はされませんでしたね。そこは全くされませんでした。……アドバイスもなかったですし、ほんとうに、今思えば、何も言われていないです。あと、多分、(自分が) 地元志向だったので、仕送りとかもなかったから、経済的に負担がなくて、親にとってもよかったんじゃないですかね。」

「最近、祖父とかも亡くなって、(将来的に)親も亡くなるから、今まで育ててくれたから恩返しをしたいとか思う気持ちもあって、戻りたいというのはありますね。」

東京のいとこの存在

東京に住んでいる同じ年の親戚(いとこ)がいて、身近な関係が現在に至るまで続いている。東京への就職や、Uターンを考えることなどにも、そのいとこの存在が影響している。

「(東京周辺に親戚はいるか?)親戚、東京と、あと、千葉にいます。東京の親戚には月一ぐらいで泊まりに、遊びに行ったりしています。いとこの家です。(子供のころから仲がよかった?)そうですね。もともと東京に来る前から仲がよかったので、その親戚は。」

「(そのことが、東京の会社に就職しようと思ったことに影響したか?)それはありましたね。困ったときに頼れるというのはやっぱり気持ちとしてはありました。それがなかったら東京を選んでいなかったですね。」

Uターンのアイデアも、このいとこと話すことがあるという。ライフスタイルを見直そうという考えも、このいとこの姿を見ていることが背景にある。

「Uターンのアイデアは、最近、いとことよくそういうのを話しますね、生き方とか。(いとこは)今、都内で薬剤師をやっています。もともと東京生まれ、東京育ちで、東京就職なので。彼の生活スタイルが私と対照的で、定時で帰れて、自由に時間があるという感じなので、やっぱりそういうところから生き方については大分考えさせられます。何かSEをやっているのがばかばかしく思っちゃいますね。何でこんなに命削ってやっているのにといいはあります。(収入の面では、自分の方が)上ですけど、自分の時間がない上での、犠牲を払った収入なので、ぶっちゃけ、定時で帰れるんだったら、収入は大幅に下がっていいと思っているんですよ。」

このいとこからは、新しい提案も受けている。

「いとこから、何かビジネスをやってみないとかという話も来ていて。ちょっと親戚同士でやるという恐怖感はありますけどね、身内同士でやって、こじれたときの跳ね返りが怖いというのはあるんですけど、仮に失敗するにしても何かやってからのほうがいいかなとか思ったりしているので、ちょっとそこでタイミングは揺れています。」

4. 結婚

現在恋人はいない。将来的に結婚したいという思いはあるが、Uターンすることとの関係も考えている。

「(結婚は)したいですね。ただ、ほんとう将来的という話で、今、例えばUターンとかするとなるとやっぱり一人のほうが動きやすいので、とやっていると、そのうち時期を逃して独身とかなっちゃうような気がするんですけどね。」

5. 趣味

休日は音楽鑑賞（クラシック）。これも U ターンへの思いとつながっている。

「土・日だったら、土曜の午前中で大体、家事を全部終わらせちゃって、最近、私、クラシック好きなんですよ、ぼけーっと音楽を聞きつつ、あとはホームページを更新しつつ、それが飽きたら買い物へ行ってとか、そんな感じですね。あと余裕が、タイミングが合えば、クラシックコンサートへ行ったりとか。」

「大学時代にホームシアターセットが欲しくて、バイトして、安いホームシアターを買ったんですよ。サラウンドの音楽が鳴るやつだったんですけど。2万円くらいのちゃっちゃやつですけどね。それ買ったら、ホームシアターはサラウンドだから、サラウンドの音楽が聞けるソフトが欲しいと思ったんですよ。それで買ったのがそのソフト、クラシックで、そこからはまっちゃいましたね。」

「地元に戻りたいという話であるんですけど、やっぱり地方って文化的なものが弱いので、そういう何か文化をもたらすものみたいなのはやりたいなみたいのは感じているんですけども。東京でよくあるんです、名曲喫茶みたいな、音楽を流しながらコーヒーを飲めてみたいな、ああいうのが地方って全然ないので、そういうゆったり空間でのんびりみたいな、やってみたいですね。……コンサートとか行くと、やっぱり東京の人たちって、何かあまり真剣に聞いていないんですよ。地方の人たちって、回数も少ないから、ものすごい真剣に聞くんですよ。だから、潜在的需要はあると。」

「結構、CDを買うので、大体、部屋に置けなくなると実家に送りつけて、親に聞いてもらって、その繰り返し。結構、CDをばんばん買っちゃって、量が今、1,000枚以上になっちゃっているんです。さすがに処分に困っているんで、将来的には何かどこかの図書館とかに寄附しちゃって、そうすれば、私の社会的役割にもなるのかなみたいな感じではいます、文化をもたらすという意味で。」

6. 震災

U ターンというアイデアには、震災の経験も影響している。

「私、江東区に住んでいるというのもあるので、ちょっと住んでいるところが危ないなというのがあります。……（液状化は）自分の住んでいるエリアは大丈夫でした。隣の地域のほうは結構、砂ぼこりが舞っていましたね」

「（地震は、将来のキャリアを考える上で大きかったか？）大きいと思いますよ。東京というのは、世界一災害危険度が高い都市でもありますし、ほんとうにあのクラスが襲ってきたら、もう生きるか死ぬかになっちゃうと思っていて、ちょっと大げさな話ではありますがけれども、そういうリスクも考えると、やっぱり東京にいるのって、そういう意味でも危ないのかなというのを感じていますね。」

「（震災の）当日、たまたま家にいて、さあ出かけようというときに地震が起きてきたので。（帰宅難民に）ならなくてよかったです。」

Eさん

29歳女性。東京近県で生まれ、幼稚園のときに都内に転居し、そこで育つ。第一志望だった教育関係の会社に就職し、やがては教える仕事につきたいと思いつつ、配属された営業の部門で働くが、入社後半年を待たずに、望んでいた教育の部門に異動する。地方と東京での勤務を経た後、父の仕事を継ぐことを考えて退職。父の仕事を学ぶ合間に、とって非正規の事務職員として勤め始めた個人指導の塾で、過去の経験もあって再び教える仕事に登用される。結婚が決まったため、父の仕事を継ぐことは一旦凍結し、ペースを抑えながら塾の仕事を続けている。

1. 学校時代

地元の公立小学校・中学校を経て、都立高校の外国語コースに進学。その高校を選んだきっかけは、「(習っていたピアノの教室が)ちょうどその高校の近くにありまして、たまたま」。英語の勉強と水泳部の部活に熱心に取り組む高校生活を送る。

「そのときから大体その学生さんとかが……漠然とした感じなんですけど、雰囲気とか結構気に入って、パンフレットを見たときに、そのときも英語がすごく好きで、その高校は外国語コースというのが、都立のわりには珍しくそういうコースがあったので、それも含めて全体的に雰囲気もよさそうだなというのと、レベル的にもそんなすごく高過ぎず、まあ、頑張ればぐらいな感じも、場所も近いと結構条件がそろったので、そこにしたいなというのが最初のきっかけで、それで、一番はやっぱり英語がそれだけ学べるんだっただけというので、第一志望に決めて。」

「(高校は) やっぱり英語の授業がメインで、約半分近く英語の授業だったので、ほんとにネイティブの先生とじかにしゃべったりとか、そういう授業もあったので、すごい充実していたというのと、あとは私の中では部活も、水泳部に入っていたので、それも小さいころから習っていたというのもあって、水泳部にも入ってみたいというので、なので、部活と勉強と確かに忙しくて大変なときもあったんですけど、それ以上に今思えば充実していた3年間だったなというのはありました。」

進路選択

高校は外国語コースだったが、大学の進学に際して、外国語と特に関係のない分野に進む同級生も少なくなかった。自身も、教育関係の仕事につきたいという思いから進路を考えていった。たまたま、自らの関心や条件に合った大学の指定校推薦が得られることがわかり、推薦でその大学に進学する。

「高校時代に興味を持ち始めたのが、私はもともと小さい子がすごく好きなので、教育関係とか、幼児関係の勉強とか、将来はそういう仕事とかについてみたいというのはあったので、それに生かせるような大学かなとまず大まかには考えていまして、そのときに母のアド

バイスもあったんですけど、そういう教育関係につくのであれば、心理とか、そういうのも学んでいたら何かしら役に立つんじゃないか、もちろん子供だけじゃなく、親御さんとか、大人とも接するわけだし、一般の社会に出たときでもそういうのが役に立つんじゃないのかというアドバイスを受けて、私もそれがどういう世界なのかなと全く、嫌だなという拒否反応はなかったの、そのまま結構すんなり受けたので、じゃあ、心理を学べて、なおかつそういう保育系の免許とか、資格とかが取れたら一番いいよねという話をして、そういう感じでパンフレットとか、資料を見たり、あと、高校の進路相談とか行ったときにそういうところで聞いたら、私の行っていた大学は両方できるよ、こっちで心理の勉強をしながら、免許も取れてできるよというのを聞いて、それじゃ普通に受験しようと思っていたので、センターを受けるとかいろいろ考えたんですけど、その高校がたまたま指定校推薦をとれますということで、それで入れるのであればということで、評定とかを見てもらって、だったら大丈夫ですということで、なので、急遽試験を受けることになって、推薦で。」

大学時代

進学したのは、人文学部児童学科。資格取得の関係で、多くの授業に出る必要があり、勉強で忙しい毎日を過ごす。

「もうほんと朝から晩まで正直忙しい、中高より忙しかったかなというぐらいな4年間で、1限から6限までが毎日という感じで。本来の単位数だったら、普通に4限ぐらいで1日とか、半分ぐらい休みになったりとか、私もそういう学生生活だったと思っていたので、楽に遊べたりとか、バイトできたりとかするんだと思っていたんですけど、やっぱり両方とるといので、資格を取る授業を含めると、普通の卒業単位数の1.5倍近くの単位をとることになると、時間数を組み合わせると結構……。 (かなり授業に打ち込んだという大学生活?) そうですね、はい。」

就職活動

児童学科ということもあり、幼稚園や保育園などへの就職が多い中で、そのままそうした道に進むのは、世界が狭くなってしまうかもしれないと思った。そこで、学んだことを生かせる一般の企業に就職することを考えるようになる。

「私の中ではそれは正直、もちろんそれ (幼稚園や保育園への就職を視野に入れた授業や勉強) はそれで楽しかったし、就職につなげてよかったんですけど、狭くなっちゃうかな、社会がそれだけの感じになっちゃうかなというのが、先入観というか、何かがあって、だったら、理想を言えば、就職が難しいとか言われている時代ではあったんですけど、これを生かした、社会に、普通の一般企業とかに勤めて、教育関係とか、そういうので学生時代学んだこととかを生かせる職業をまず探してみて、それで、ほんとになかったり、入れなかったり、できなかつたりで自分なりにあきらめがついてであれば、そういう幼稚園だったり、保

育園だったり就職すると、とりあえず悔いがないようにやってみようかなとか思って、もう無理なのは承知でいろんなところからの会社にエントリーシートを送ったりとかしたんですけど、運よくというか、そこで、企業のほうで採用していただいたので、結局そっちなほうに行かなかった。」

そのため、就職活動は同級生から離れて一人で進めていくことになる。

「ほんとに個人的にパソコンで、あとは、何でも送ってもらって、どんな感じの会社かというのを自分で調べて、でも、この辺だったらという感じでエントリーして、出さないことには無理かな、1人50社、100社とかいうのは当たり前ぐらいのときだったので、自分にそんなすごい能力が云々とかいうわけでもなかったんで、数こなさないと無理だろうなと思っていたので、そうしたら、来るところ来るところからとりあえず出そうみたいな感じでいたんですけど、結果的には運よく1社目でという感じで。」

「(応募する会社を選んだ基準は)自分の考えと似ていた考え方というか、子供に対してだったりとか、教育に関して何か価値観的なものが似ているとか、あと、仕事の内容が、ただ単に会社という中でも何となく教えたりとか、そういうのをしたいとかいうのも、やってみたいというのがあったので、もちろん入社してすぐにはできないけれども、何年間か学んで、営業とか、そういうのをやったらそういうこともできるという、確定ではないんだけど、そういうことも可能性としてはありますというのだったり、というのがやっぱり、会社の考え方が一番自分と似ているなというので幾つかエントリーをして、優先的に。」

最終的に、第一希望だった、教育関係の事業や出版をしている会社の内定を得る。第一希望だった会社から最初に内定が出たため、就職活動は非常に短いものになった。

「(就職活動期間は)短かったですね。パンフレットとか集め始めたのが年末、秋口ぐらいで、たしかエントリーを出したのが2月ぐらいだったと思うんですよ。決まったのが、4年生の4月で。2月からなので、2カ月ちょいぐらい。ほんとうまくいくわけがないと思って、「こんなうまくいったって最後にどーんと来るんだよ」とか周りに言われて、私もそうだと思っていたので、次の会社の面接のスケジュールとかを組もうとしていた矢先にだったので。」

2. キャリア

入社した会社では、最初に1年半営業の仕事をやること、かつ地方の勤務になることがあらかじめ知らされていた。それを終えてからなら、もともとやりたいと考えていた教育に直接関わる業務に配属される可能性もあると伝えられ、望んでいた仕事ではなかったが取り組んだ。

「私は最初営業で1年半とかやってもらいますという条件だったので、最初から東京じゃなくて地方勤務だったので、その初めてというのと社会人としての初めてというので、もうほんととあっという間に過ぎたみたいな感じで、営業は、自分は全くそういう関係のことは、どっちかといえば苦手なほうだったので、もう言われるがままというか、言われたとおりにやる

感じで、そういうときは正直つらいときも確かにあった分、逆にアポイントをとれたとか、やっぱり今まで以上にすごくうれしいとか、達成感とか、何かそういうのもあって、つらいのもあったんですけど、だからといって別にやめたいとかそれはなかったんですよ。それが普通とか、これは仕事としてやらなきゃいけないことなのかなと多分日ごろ中で思っていたのか、何もかもがほんと初めてだったので、こういうのが普通なのかな、何か比較できるものもなかったんで、でも、ここで頑張れば、もしかしたら興味のある部とか、に行けるかもしれないというので何とか乗り切ったかなみたいところが今思えばありました。」

興味をもっていて、やがてはその仕事をしたいと思っていたのは、「指導部」の仕事であった。それは、毎日子供にファックスでプリントを送り、返送されてきたものを自分が添削して送り返して勉強を習慣づけ、加えて週1回はその家に電話をして、保護者に勉強の内容などを報告するというもので、その際に保護者からも子供の取り組む様子などを聞き、翌週以降の指導の方針を調整する、という形で進められる。中学生以上の場合は、夏休みや冬休みに希望者に対して塾のように講習を行うことがあり、そこで教えることも含まれる。

実際には、4月の入社後、しばらく関東地方のある県で営業の仕事をしたが、1年半も経たないうちに、幸運にも急遽この「指導部」の仕事に異動することが決まる。7月に1カ月間の研修を受けて、8月から九州に赴任し、そこで「指導部」の仕事について。転勤自体はあまり深く考えていたわけではなかったが、絶対に都内や自宅からがいいという考えもなかったという。九州という、東京から離れた場所での勤務になったが、自分がやりたかった仕事ができることの方が大きかった。

「(仕事の内容は)確かに塾とかと比べれば教えるという内容のあれでは、全然規模としては違うんですけど、自分の好きな子供と接するだったりとか、そういうところではほんとにやっぱりこっちのほうが向いているとか、好きだなとか、もちろんつらい、大変なこととか、仕事なのでやらなきゃできないこととか、こなさなきゃいけないこととか、時間外とか、そういうのも、正直きついときもあったんですけど、それを乗り越えられたのはきっとそれ以上に何か自分の中で楽しかったりとか、苦でない部分のほうが強かったかなとは思う。」

九州で1年半ほど勤務した後、東京の「指導部」に移る。数年後に退職するまで、そこで勤務を続けた。

退職

父親は保険の代理店を営んでいた。母親は専業主婦だったが、父が多忙なときにその仕事を手伝うという形で関わっていた。退職という選択の背景には、一人娘である自分が父の仕事を継いでもいいという思いがあった。

「それ(父親の仕事)を自分が継いでもいいかなというのもあって、それと時期的なものも

あって、やり始めるんならもうそろそろかなというのあって、それで、時期と父親のほうの、もしするのであれば、研修だったりとかいうのを含めると、結局一人前としてなるにはそこからまた何年もなので、自分もいずれ結婚したりとか、家庭を持ったりとかしたらまたできなくなったりとかとなると、今のうちにしておいたほうがいいのかとか、いろいろ、漠然とではあったんですけど、家族とも話して、じゃあ、そろそろそういう時期なのかなというので、だったら研修とかでも丸一日というわけではないけど、時間があいたときに仕事をやれるような感じで、正社員にはなれないけども、派遣とか、そういう感じだったらやれるんじゃないかというので。」

塾での仕事

保険の仕事を引き継ぐことを視野に入れて、その勉強をしながら他の時間は調整がつきやすいように、正社員ではない形で仕事をしていくことを考えて退職した。しかしその後結婚が決まったため、保険の仕事を引き継ぐことはひとまず先送りになり、当面は結婚後も現在の正社員ではない形の仕事を続けていくことになった。そこでどんな仕事をするかと考えた時、やはり教えることに関わる仕事に心が向かった。

「教えるということがやっぱり好きだったのと、前のときにファクスとかで間接的な感じだったので、それをやっているときに子供がだんだんできるようになったとか、親御さんから「やっているうちにできるようになったんです」とかいう報告を受けると、自分が何をやったわけじゃないけど、少しでもそれで役に立っているとか、そういうふうに言ってもらえるのがすごくうれしくて、間接的にそうやって携わるんだけど、そうやって直接やってきているのも、実際夏期講習とかで生徒と会って話したりしたときにそれが楽しいな、おもしろいなと、直接質問できたりとか、話したりとかいうのもしているのは楽しかった。そういう関係であるかなと思って探して。」

現在の仕事は、ハローワークで探した、個別指導の塾の仕事。ただし当初の仕事内容は事務だった。望んでいたのは教える仕事だったが、同じ事務をやるなら一般企業よりも教育関係の方がいいと思い、事務の仕事で半年ほど続けた。その過程で、前の会社での教育経験を話すなどしている中で、事務ではなくその塾の個別指導を担当してみることを打診される。一時は事務をやりつつ、人手が足りない時は指導もするという形だったが、やがて後者がメインになり、現在では指導の仕事だけを担当している。また、この塾の会社は家庭教師もやっていたため、家庭教師の仕事もやるようになり、現在ではそれが中心になっている。教えている(いた)のは、小学生から高校生まです。

幼稚園や学校で教えたくないというわけではないが、集団よりも個人に対して教えるという、これまでやってきた指導の形は自分に合っていると考えている。

「集団でいると、個人となったときに、集団だと正直目に入れられる範囲がほんとに限られてくるんだなというのがつくづく実感だったりとかで感じたのと、あと、友人で実際にそう

いうのについている人もいるので、やっぱりそういう話を聞いたりとかすると、本来の業務以外のこととかもちろんそういうのも出てきたりとか、それはやむを得ないことなので、それも確かにしょうがないことなんですけど、なので、そうなったときに集団だったら、個人個人、一人一人それぞれに応じた何か指導とかのほうは私はまだ見られるかなとか、自分でもそっこのほうが向いているのかな、この子にやりつつこっちもやってとか、自分がそれこそパニックになって逆に周りに悪影響なんか及ぼすようなあれだから、自分がだったらその子に完全につきっきりになって、その子のことをわかった上で、前やっていた心理とかも生かしながら、その子のタイプとかわかりつつなおかつ指導もできるというほうが自分には合っているのかなとか思って。」

3. 家族

小学校のときから多くの習い事やっていた。「ピアノ、水泳、あと、期間は短いんですけど、英語教室、習字、合唱と、一番多いときはそれだけやっていましたね」。ピアノは大学卒業まで続け、今でも趣味で弾いている。水泳も、高校で部活に入るなど熱心に取り組んだ。

「ピアノはどっちかといえば、父親が、自分が聞いたのを自分の子供にも弾かせたいなという思いがあったのと、あと、水泳は母がやっぱり、自分が泳げなかったというので、別にそんなプロとかのあれじゃなくて、最低限だけは泳げたらいいだろうなというので最初習わせたみたいなんですけど、それ以外は私が興味を示したとかで、英語は確かに将来ちょっとこれから必要になってくるだろうというのを見越して両親が、知り合いの人だったんですけど、基本的なものとかだけ、簡単なことを教えてもらったみたい、あんまり強制的にとというのはそんなになかった。……（両親は）ほんとに好きなこととか、やりたいことは結構やらせてくれましたね。できる範囲でというか。結構、それは今では感謝していますけど、はい。」

就職のときの判断と親

就職のときは、自分の判断で決めたが、両親はその判断を尊重してくれた。

「もちろん（親に意見を）全く聞かなかったわけではないんですけど、仕事の内容とか、そういうのは別に両親も言わなかったというのもあるんですけど、私が多分聞けば何か答えるぐらいの感じで、基本的には私をすべて尊重していたので、自分が勤めるんだし、自分がやりたいことを見つけてやってくればいいかなという感じで、ほとんどあんまりタッチもしなかったです。（学校の先生からも）アドバイスとかは受けてはいたんですけど、かといってそれをすべて100%うのみにしていたかという、そこまではしていなかった、あくまでも参考程度みたいな感じで、先生のと、進路相談の方の話を聞いた上で、家で親と話して、それをまたもとに自分で結局決めたみたいな感じが多かったですかね。」

地方に転勤することについても、否定的に言われることはなかったという。

「正直九州に行ったときとかは「そんな遠いの？」という、ちょっと驚きはあったみたいな

んですけど、そういう会社に勤めた、だったらその時点で反対をしても、そのときにしていればというあれだったんですけど、それを言ったときにも、あなたが、私が決めたことなのだったら、それはやむを得ないこと、父は自分がひとり暮らしとかをしていたので、女の子でもこれから女性社会とかいうので、自分で何でもやれるとか、そういう意味ではすごい、どっちかという応援するほうなので、昔からあんまり、一人っ子という結構過保護的な感じに思われるんですけど、うちは小さいころから全然そういう感じではなかったもので、逆にいろいろなものをそれこそ吸収させて、いろいろなものをやらせてという感じだったので、多少心配なかった、寂しくなかったといえようそののかもしれないんですけど、私は別にだめとか、何で行くのかとかいうのはなく、頑張ってくればみたいな感じで、そのかわり帰れるときがあれば帰ってくればぐらいな感じで、どっちかといえば応援してくれた感じですね。」

4. 友人関係

学校時代の友人関係とは今でも連絡をとっている人が多い。高校・大学とも、同級生の多くとは異なる方面に卒業後進んだが、そのことは影響せず、今も友人として普通に付き合いがある。

5. 結婚

質問紙調査に回答した時点では決まっていなかったが、このインタビューの時点までの間に、2つ上の都内勤務の男性と結婚することが決まる。

相手と知り合ったのは、調査年の2月ごろの「合コンパーティーみたいな感じの」集まりがきっかけ。友人と行くことになっていたが、行く途中その友人から体調を崩したという連絡が入る。キャンセル料を払うのも…と思いそのまま参加したが、その会で相手と知り合う。相手もまた、人数が足りなくなったため声をかけられ、乗り気ではなかったが参加した。たまたま帰りに一緒になり、話をすると似ている部分が多いと感じたのがきっかけになったという。

その後「自然に」結婚しようということになり、11月に式を挙げる予定になる（このインタビューは7月）。結婚後も、当面は今の仕事を、担当人数や日数などを減らしつつ続けていく意向。

「(結婚後、子どもができたら) やっぱり自分が子供とかに携わっていた部分があった以上、余計に自分の子供は自分で見てあげたいなというのが何かあって。(純粋な主婦になりたい?) できることなら。ただ、経済的なことだったり、相手の考えだったりにもよるけれども、まだ全然ほんと結婚とか、そういうのがないときから、もし自分がそういうことになったら、自分はできるんだったら、条件がそろうんだったら、自分の手で育てたいなという思いはあったんです。でも、どうしてもそうせざるを得なければやむを得ないなと思って、そ

ういう話もしたときには、彼もそういう考え方だったんですよね。それで、それができるんだったら、そうしてくれていたほうがいいと。……ほんとにそういうことがあるかどうかはわからないんですけど、そうなったときには多分一時休みというか。今の仕事がたまたま運よく休業とかいうよりかはいつでも復帰できるような形態に一応なっているんで、だから、会社にもそれは伝えた上でという感じにはなると思うんですけど。……（塾という、午後から夕方以降が勤務時間になる仕事なので）多分（子どもが）小学校とか行かないと無理なのかなという感じ。」

6. 父の仕事を継ぐかどうか

結婚が急に決まった中で、父の仕事を継ぐかどうかについての考えも揺らいでいる。

「このご時勢……（父の仕事をめぐる環境が今後）どうなるか、全く想像もつかないとかいう、自分自身がそういうふうに言われてきつつある中で、それで、（父がやっていた頃と同じ環境が続くとは限らない中で）私がそういうことをする（引き継ぐ）のは（父にとって）申しわけないというか、そこまでしなくても、別に父としては残したいとか、全然そういうあはれないと（父は言っていた）。逆に私がそういうふうに（継ぐと）言ったことのほうが（父は）びっくりしたぐらいだったので。」

そもそも継ごうと思ったのは、自分自身が営業を経験したことがきっかけだった。

「今の父のお客というのは父親自身が何か営業でいろいろやってきたお客さんたちなので、その人たちのおかげで今の自分たちもあるみたいな感じを社会人になってから気づかされて、やっぱり営業のとき正直きつかったり、つらかったりというのを経験したので、それをもし父がやめたりしたときに手放すとかなので、ちょっとどうなのかなと思ったときがあって、そういうんだったら、自分がもしやれる内容、やれる業務というか、やれることなのだったら、やってみてもいいかなと思って、親に話をしてみた。……（父が努力をして開拓してきたお客さんなのに）全然違う人のお客になっちゃうんだったら、それが自分のできることなんだったら、自分がやってもいいかなと思うようになったので。」

結婚など、自分の状況も変わる中で、継ぐ話は「とりあえずはいいかな」と考えている。

7. 震災

震災の時期と、結婚相手との出会いの時期が重なったので、震災がすべてではないにしても、転機になったのは確かだと感じている。

「（出会いの時期が）まさにそれ（震災）ぐらいのときだったので、それで価値観が変わったというか、そういうことがあったから自分の中でもいろんな、今まで感じていなかったこととか、感じなかったことが感じるようになったりとかなので、それが地震なのか、その出会いだからなのか、自分たちでもよくわからない部分もあるんですけど、多分もしかしたら両方があったからそういうことになったのかとかいろいろ、まさにあの時期、ほんとにあのと

きという感じだったので。」

8. その他

順調に人生を進んできたようにみえるが、節目節目で自分自身で決めてきたという実感がある。また、先にめざすものがあつたからこそ、めげることなく進むことができたし、教えることに対する関心は早い段階からあつて、そのやり方は仕事の中で変わっていったものの、その関心自体はずっと保持していた。

「中では自分で、挫折まではいかないですけど、努力だったり、確かにきつところはちょこちょこ、一つ一つ大きなまとまりで見ると順風満帆で来ているなど自分でも納得することはするんですけど、だからといって全く何も考えずにというか、言われるがまま来たかと言われると、それほどでもないなみたいな。どっちかという、頑固な部分があるので、結構自分の意見とかを、人の意見も聞くんだけど、結局最後は自分で決めちゃうみたいなのところがあるので、自分が違ったときとかもだれのせいとかというわけではなく、自分が違ったんだなみたいな感じにはなるんですけど。」

「多分一つ一つこれをやりたいからこうしたとか、ここに入ったとか、その営業とかも確かにやめちゃえば簡単だし、楽になるし、で、全く思わなかったかといったらそれはうそだったのかもしれない、自分の中でもほんとに嫌いになっちゃったので、全く思わない日がなかったかと言われるとうそになるかもしれないんですけど、それはきっと今が試練のときなんだと思った部分と、あと、何年後かにそういうことを自分ができるんじゃないかという、確定はないにしても、いや、できるだろうという望みを持ったのと、せっかく入れたんだしというので、まだ入って間もなくだったので、その後どうなるかわからない、これが何年も続いていって、ずっとこういう状態だったらもしかしたらめげていたかもしれないんですけど、始めたばっかだし、これがずっと続くのか、それとも今だけなのかもわからなくて、見切りをつけるのは早いのかなとかみたいな感じはあつた。先にやりたいことがあつたから何とか我慢できたのかなということも少なからずあると思います。」

周囲の人間関係がよかったことも、続けられた一つの要因だったと考えている。

「確かに……人間関係もよくないと多分やれないというか、あれもあつたと思う。先輩とか、上司の方もすごくよくしてもらつたというのがあります。」

Fさん

26歳女性。専門学校卒。生まれ・育ちともに都区内東部で、現在勤務している職場も、実家の近くにある自身の出身幼稚園。幅広い交友関係をもつ。

1. 学校時代

通っていた地元の中学校は、1学年5クラスで、全校でおよそ600人の生徒がいる学校だった。地元を含む通学区域が荒れていたこともあり、Fさんは、都心部にある全学区の高校に行きたいと思っていた。中学時の部活に関しては、1年時に運動部に所属していたものの、仲のよかった友人を含めていじめにあい、2年時に別の運動部に転部した。

高校進学の際に中の上程度の学力だったFさんは、推薦入試は不合格だったものの、1日8時間以上の受験勉強を経て、一般入試で無事に希望の高校に入学した。小学校3年時から一緒だった親友（上の上の成績。推薦入試でFさんより先に合格）と一緒に学校に通いたいという思いも、受験勉強に励んだ理由として大きかった。

高校時代はダンス部に入り、週2回の活動の他に、前述した親友と公園で自主練習に励んだ。これとは別に、高校にはボランティアをするゼミが週1回あり、そこに参加して、土日に老人ホームなどにボランティアに行くこともあった。また、放課後はスーパーのレジ打ちのアルバイトをしたり、期間限定で学童保育や児童館で働いた。後者のアルバイトは、進路選択に悩んでいたFさんの現場を見たいという希望から、担任の先生のアドバイスを受け、母親を介して紹介されたものである。

2. これまでのキャリアや働き方について

学生時代の進路選択

幼稚園の先生になろうと初めて思ったのは、小学校のときだった。幼稚園のときにお世話になった先生が好きだったことや、子どもが好きだと思ったことがきっかけだった。祖母が長期にわたって入院していたこともあり介護職に関心をもったこともあったが、高校3年で進路を考える際には保育も含めた現在の道を志すことに決め、専門学校への入学を選択した。

高校の進路指導時には教師に大学や短大も勧められたが、Fさんの決意は固かった。

「大学、……4年かけるか、2年かけるかで同じ資格が取れるなら、私はすぐにでも保育士をやりたいからと。高校のときにアルバイトで、学童保育と児童館のアルバイトを担当の先生から紹介してもらって、やっていたんですよ。だから、今すぐ私は現場に出たい。だから、2年間で取れる資格を4年もかける必要はないと思うと言って。……4年かけて取るんだったら、その間に何か、大学の友達の話とかを聞くと、結構遊んでいるじゃんみたいな、バイトに励んでいるとか。いや、別に私、そんなバイトに励むんだったら、現場でどんどん経験したいし、と言って。」

高校3年時のクラス約40人のうち、多くが大学に進み、専門学校を選んだのはFさんを

含め3人程度だった。そうした状況で専門学校を選ぶことに抵抗を感じる瞬間も多少あったが、クラスの雰囲気がかかったことや先生方の応援、学校名よりもその内実や雰囲気に目を向けて進路を考えている周りの姿を見たことで、自分で考えたとおりの進路を選択した。

専門学校見学時に勉強、部活、行事どれもが盛んな雰囲気が高校に似ていると感じたことや、高校選択のときも自分で見学に行って決めて充実した高校生活を送れたことなどを理由に、学校を決めた。この学校選びの際にFさんが活用したのは、後でも述べる、路上ライブ通いをきっかけにできた友人関係から得られた情報だった。

「……当時、高1からずっと好きで行っていたから、まわりが高2、高3とか、大学生とかだったので、その中でも結構、保育を目指している人とかも多くて。その人とかに『私も、保育を目指そうか、今、介護を目指そうか迷っているんだけど、ちなみに保育だったらどこの学校がいい?』とか。」

「友達が行っている学校は(説明会に)行きませんでした。……その友達がまさに生徒だから、生の話が聞けるじゃないですか。学校説明会とかってあまり信じられなくて、結構飾っているというか、いい面しか聞けないから、だったら文化祭とかを見たほうが、生徒の本当の姿を見れるし、先生の対応も見れるし。」

社会人になってから

専門学校卒業前の就職活動時には、行きたいと思っていた2つの幼稚園の採用に落ちている。Fさんが就職活動をしていた時期は倍率が高く、しかも希望していた地域(現在勤務している地域)は子ども数の割に幼稚園数が少なく、また退職する教員もさほど多くなかった。現在勤務している幼稚園は、Fさんが卒業した専門学校が送った卒業予定学生の名簿の中から幼稚園の先生がFさんの名前(旧姓)を見つけ、縁をもった。2005年から4年間勤めたが、もう少し小さい子どもと関わりたいと思い、円満退社の後に、一時期は保育園に職場を移す。

「せっかく資格を2個、幼稚園教諭と保育士を持っていたので、年少、年中、年長と全学年を見たから、今度はもっと小っちゃい子とかかわってみたいなとか思って……。自分も、その当時、結婚したかったから、いずれ結婚して子どもができれば、そういう保護者の立場とかも同じ立場になるわけだし。勉強じゃないけど、ちょっと行って、いろいろそういうのを経験したらいいかなと思って挑戦したんですが、……」

しかし、上司と馬が合わず、体調を崩して入院した後に、精神面の不調から医師の診察を受け、退職する。その後、他の職種で働くことも考えたが、仕事を探しているうちにやはり保育園・幼稚園での仕事が好きなことに気づく。そして、別の保育園に派遣で勤務するも、派遣切りにあう。この間約1年間だが、正社員として再び現在の職場に戻った。

ヒアリング時点で、Fさんが勤めている職場には12名の先生がいて、1度退職した期間を除いても、ほとんどがFさんの後輩にあたる。離職率は高い。土曜登園がある週も含めると、

週あたり 50 時間以上働いている計算になる。年収は手取りで 200 万円を超えるくらい。

「結局、その幼稚園に勤めた子も 1 年でやめちゃったりしたので。それを考えたら、人間関係もそこそこだし、別に生活できない金額でもないし。去年、結婚してからは 2 人になったから、彼の収入は多少不安定だろうと最低のラインは保っているみたいだから……。 (自身の収入面に関してはしょうがないという感じがあるかどうかについて、) 何より自分が好きな仕事だから、別に……。」

3. 交友関係について

小学 3 年からの親友の存在

前述したように、F さんには小学 3 年生からの親友がいる。2011 年春からその親友が教育関係の職業に就いて職場の近くに引っ越したため、以前のように時間が空いていれば遊ぶということはできなくなったが、それでも連絡をして会っている。親友が結婚した相手が地方の出身でいずれ家を継がなければならないので、頻繁に会えなくなるだろうことが悩ましい。F さんにとってその親友は、昔から知っている部分がある理解者であると同時に、新しい発見を与えてくれる存在である。

「趣味は、彼女の場合は私にないものを持っていて、彼女に対して、お互いそうだから、結構、一緒にいると、共感し合える部分と、毎回新鮮な部分があつて。あつ、そんなことやっている、えー、おもしろそう、行きたい、行きたいとかが結構お互いにあつて。会うたびに、えっ、そんな趣味、始めたのみたいなものがあるから。」

対人関係観の変化

F さんは、調子を崩して 2 つ目の職場を退職した後に派遣で働こうと考えたときに、対人関係についての考え方が変わったと言う。

「1 つの園にこだわる必要はないんじゃないかなというのがすごい自分の中で思えるようになって。そこから結構、人づき合いが変わりました。自分をすごい支えてくれている人の大切さというか、それまでも友達のことはすごい大事にしているつもりだったんですけど、結構、つもりだったらしくて。深い子とはすごい深くつき合うんですけど、その親友だったりとか。だけど、八方美人じゃないけど、浅く、広く……。」

「周りからは結構、友達多いよねと言われるタイプだったんですけど、私の中では、いや、どこまでが友達というんだろうみたいな、ちょっと冷めた感じがあつて。今は、結婚式のときも、会場の大きさにこれだけしか呼べない、どうしよう、誰を呼んで、誰をごめんなさいしよう。じゃ、2 次会をもっと大きい会場にして、呼べなかった人を呼ぼうとか、すごい思ったときに、『私、自分のつき合い方変わったな』とすごい自分で感じて。広く、浅くは変わらないんだろうけど、でも、その浅くがもっと深くなったというか。」

趣味の音楽から広がるつながり、進路に関わる情報の収集

Fさんにとって趣味の音楽は、そこから広がりつながる人間関係も含め大事なものである。特に関心を持ち始めたのは高校生時代。家が厳しくそれまで1度しか原宿には行ったことがなかったが、高校に入り、同級生と行ったときに、街のおもしろさを感じると同時に、路上ライブにも興味を持ち始めた。

「ダンスを始めて、いろいろなダンスに使う曲とかを聞くようになって。あと、カラオケもはやり始めて、友達とカラオケに行っ。自分が聞かないジャンルの曲とかも聞くようになるじゃないですか。あっ、楽しいな音楽ってというのがあって。……そういう路上ミュージシャンに通っている自分も楽しいなみたいな、そこでつながる出会いもすごい楽しいというのがあって。最初は、その人たちの音楽も好きだけど、そこで出会う仲間と、毎回、違う仲間がどんどん増えていく、その友達の輪が増えていくのもすごい楽しくなって。今は、また別のメジャーアーティストの方のライブとかによく行くんですけど。それでも、やっぱり友達の輪がどんどん広がってって。なので、結婚式も結局、ライブ三昧にして。」

「高校に行ったら、……近いじゃないですか、渋谷も原宿も新宿も。大人じゃんという。『私、原宿行ったことない』と言ったら、じゃ、行こうよと行ったのが最初で。人の多さにびっくりして。上野は魚くさいのに、原宿は香水くさい。『何か安いし、おもしろい。何だここ』となって、2回目に行ったときに。そのときに路上、音楽とかも興味を持ち始めて、路上ミュージシャンとか、ゆずとかいいよねと友達と行ったら、路上ミュージシャンを見つけて、あれがうわさの路上だってみたいな。最初は…、ただそんな感じだったんです。」

『音楽だけじゃないんだね、楽しいのって』みたいな。そういう友達とのつき合いも楽しいし、音楽を通じて今の仲間もいるし、それを通じてだんなども知り合ったし、だから、結構大きいですね。」

Fさんにとってこの趣味をきっかけにしたつながりは、人間関係自体の充実だけでなく、前述したように、専門学校への選択に必要な情報の収集の場ともなった。路上で集う友人たちは、年上かつ保育の道を目指している人も多かった。同じバンドをおっかけている、たまたま路上で出会った人と友だちになり、そういった人たちとの関係の中から進路に関わる情報を得ていた。

地元という場

生まれてから今に至るまで、地元とそこでの人間関係は、Fさんにとって重要である。例えば、都心の高校への入学希望を親に反対されたときに、近所のもんじゃ屋のおばちゃんが味方をしてくれた。

「実家の近くのもんじゃ屋さん(の)おばちゃん、私がおなかの中にいるときから知っているから、おばちゃんに愚痴を言いに行っったんですね、お母さんがいるけど。『おばちゃん、聞いて、お母さん、こうでこう言うんだ。お父さんもこう言うんだ。でも、私は、そういう

つもりで行くわけじゃないし、この学校に自分で行きたいと思ったから行きたいと言っているのに反対される』と言ったら、『やりたいことがあって行くんだったら、あんたの道なんだから、親にとやかく言われて、それで諦めるんだったら別に行く必要はないんじゃない？それでもあんたが行きたいなら行けばいいんじゃない？そうしたら、私はあんたに協力するよ』と言ってきて。」

「……お母さんにその場で言うてくれて…。『娘がこれだけ強い意志を持って行きたいと言っているのに、あんた、それ、反対するの』みたいなの。『それで反対するなら、私は悪いけど、あんたたちじゃなくて、娘の味方だよと。……自分の娘を信じなよ』みたいなことを言うてくれて。そのときはお父さんとかも『じゃ、もういいんじゃない』みたいなの。で、高校はオーケーで。」

「血はつながっていないんですけど、その人の妹さんの子どもたちが、私の兄弟関係と全員同い年なんです。だから、何か自分の甥っ子、姪っ子と同い年だからというのもあるし、ほんとう一月に何回もおばちゃんのところへ行って、用事がなくてもおばちゃんのところに行ってしまうのがあるから、おばちゃんの中でもほんとう娘状態なんです。」

また、地元という場所で働くことの価値も、Fさんにとって大きい。

「……地元がすごい好きで。しかも出身園で働けるって、一番最初は簡単に格好いいと思ったんです。何か自分が幼稚園の先生大好きで、幼稚園の先生になれたらいいなと思い始めたところで、最初は何かやりたいぐらいな感じだったんですけど、思い始めた場所で、実際にその夢をつかんで、それをそう思った最初の原点で働けるってすごいなと思って。給料とかで考えるんだったら都心のほうが高いんですけど、でも、それが実現できるのってすごいことだなと思って、就職はそこにしたのもあります。」

こうした地元に対する愛着がある一方で、自立のためという理由と、プライバシーがないと感じたり、プライベートと仕事の分離をしたいという理由で、2008年夏から、実家や職場がある地域とは少しだけ離れた場所でひとり暮らしをした。

「いろいろ挑戦したいと思って。どうせ、幼稚園をやめると決めたときに、じゃ、実家も出て、ちょっと自分で家事とか、年的にはそろそろ結婚とかもあるかもしれないし、今のうちにいろいろやらないと、今の自分、親に頼り切っているなというのがすごいあって。」

「彼氏との姿を見られたくないというか、プライベートと仕事を分けたかったんですよ。ひとり暮らしをするまでは、……出かけるために、ライブとかに行きたくて〇〇（最寄駅）に行ったら、保護者に会って、どこ行くんですか。いや……。」

4. 家族（生まれ育った家庭）について

きょうだいと学費

Fさんのきょうだい構成は6、7歳離れた兄が2人。長兄は高卒で、20歳のときに結婚して今は4人の子どもがいる。次兄は、短大から大学に編入して大卒だが、卒業までにかかった費用は全て自分で申請した奨学金で賄った。Fさんは非常にかわいがられてきたが、高校卒業後の進路を決める前に、長兄と話をしている。

「1番上の兄に『おまえ、そこ、正座』って、ある日……兄貴に言われて、『何?』と言ったら、『俺は高卒だよな。……あいつ（次兄）は奨学金で短大、そこから編入もちゃんと自分で払って、大卒でしょう。おまえ、この後、どうするんだ、どういうふうに生きたいんだ』と言われて、『一応今は、悩んだけど、幼稚園とか保育園の先生になりたいと思っている』と。『じゃ、大学、短大、専門とか行くんだろう。……お金、どうするんだ』って。えっ、親じゃないのと心の中で思ったんですけど、あえて聞かれるということは何かあるなと思って、『えっ』と言ったら、『いいか、〇〇（次兄）は奨学金で、今のおやじたちは家のローンあるんだぞ。おやじたちの年を考えたか』と言われて、『うん、それも考えて、ちょっと学費とかも見てるけど』と言ったら、『いいか、おやじたちはどう言うかわかんないけど、今って高卒までが当たり前だよな。だから、俺の中では、高校までは義務教育だと思っている。高校以上は自分の責任で行く学校だと思っている、俺は。それ、俺が何を言いたいかわかるよな』と言われて、『それは、じゃ、自分で払えということ?』と。『そう。自分で行きたくて行くんだろう。就職とかも……あるから、高校まではせめて出なきゃと思う。それは思うよ。だけど、高校以上は、別にそこで就職してもいいわけだろう。それでも、おまえはやりたいことがあって、その先に進むと思うんだったら、それはおまえの責任だろう。おまえで決めた道だろう。それはおまえの責任なんだから、おまえが払うべきだよな』と言われて、最初はそうなのか?と思ったんですけど、でも、確かにそうかもなと思って。」

4年と2年で同じ資格が取れるならすぐに現場に出たいと思っていたFさんだったが、自分で学費を払うことは想定していなかった。その頃はちょうど、それまでピアノを習ったことがなかったFさんが進路のことを考えて、自分で月謝を払って習い始め、10万円以上する電子ピアノも自分のバイト代から払って買った時期だった。高校3年生で10万円以上する買い物は大きな出費だと思ったのに、200~300万円する学費を自分で払えと言われたことに衝撃を受けたと言う。このような長兄との会話に対して、母親はまた別の反応だった。

「『あの子は、ああいうことを言っていたけど、2番目のお兄ちゃんは、自分の意思で奨学金、お袋たちには迷惑かけないからと言って、自分で奨学金を選んだのと。だから、あんたも別にそこまで気負いする必要はないよ』みたいなことを言ってくれたんですけど、自分も頑固だから、『でも、お兄にそう言われたし、絶対、親のすねかじったら、お兄に何されるかわからないし』みたいな。自分も……お兄ちゃん大好きだったから、お兄ちゃんに逆らえないところがあって、じゃ、わかったと言って。」

結局、学費に関しては親から立て替えてもらい、就職後に全額返済した。

「学費のほうは一時的に親に立て替えてもらって、在学中は。だけど、そんな大した額じゃない定期とか、教科書代とか、そういうすぐ払えるものは自分でバイト代をためて払って、学費は一時的に親に負担してもらって、卒業してから、就職してから毎月幾ら払うという形で、月7万とか。手取りの半分以上…3年半とかかけて全部、学費を親に返済して。」

両親の職業

Fさんの父親はガソリンをタンクローリーで運ぶ仕事をして、母親は結婚前にパートで働いていたが、結婚後は専業主婦をしていた。ただ、Fさんが保育を目指してから、もともと子ども好きで大家族で育った母親は、児童館、小学校の放課後クラブ、保育園などでパートで働くこともあった。

5. パートナーや結婚について

2010年春、派遣切りにあったのと同時期に、高校3年のときから8年間交際した3歳年上の現在のパートナーと入籍した。出会いのきっかけは、パートナーがやっていたバンドの路上ライブを、Fさんが見に行ったこと。パートナーは現在、BGM付きの絵本の読み聞かせをする際のギタリストをしている。一時期保育士を目指していたパートナーの高校の後輩から、路上で大人向けに絵本の読み聞かせをすることを仕事にしたいという話を聞いたのをきっかけに、4~5年前から始めた。国内外で演奏の機会があれば赴き（国内では関西の方が活発）、その試みを取り入れている雑貨屋でアルバイトとしても働いている。講演会で絵本作家に会うことなどを通して絵本に関する知識が付き、Fさんと共通の話題も増えた。

しかしFさんは、アルバイトがないと収入が安定しない点については、しっかりしてほしいと感じ、元々幼稚園の先生をしていた、パートナーの母親に相談に乗ってもらうことがある（堅実な家風だということもあり、Fさんの父親も、パートナーを人間としては買っているが、不安に感じたり憤ったりしている）。ただ、もがいている姿が見えるので、直接言うことはたまにしかせず、今は見守ろうと考えている。

一方、Fさんの働き方について、パートナーは理解を示し、応援している。

「応援していますね。私は結婚しても続けるよ……自分の天職だということも言っているし、高校3年生からつき合っているから、本当に自分の進路を選ぶときからずっと一緒にいるじゃないですか。向こうのお母さんが、もと幼稚園の先生なんですよ。そこで相談に乗ってくれていたのもあって、だから、幼稚園の先生に対する理解もやっぱりあって。最初は、『でも、子どもが小さいのに、自分も子供を保育園とかに預けて、自分は人様の子どもを預かる。どうなの？』という考えはあったんですけど、今は、やっぱりさっきお話ししたように、絵本の読み聞かせとかで幼稚園とか保育園を見て、幼稚園、保育園（の中だけ）じゃなくて、一般の方対象で、親子のそういうかわりをする中で、だんだん考えが変わってきたみたいで、

今は大分理解してくれるようになって。(現在 18 時退勤だが、子どもができたなら、早めに退勤して子どもとの時間を多くとるようにしたいと F さんが言ったら) ……『そういうふうやっていくんだったら別にいいんじゃない』と。今、共働きも多いし、子どもができたからこうしなきゃいけないとかいうふうに、自分のやりたいことをお互いに束縛とかしていくのはやっぱり嫌みたいで、だから、『俺は俺でやるし、ただ、F は F で好きなことをやったらいいんじゃない』みたいな。それで家庭が崩れないなら。やっぱり自分に無理して仕事をすると自分がだめになるというのを、だんなはだんなで、自分で壁にぶつかって経験しているし、私は私で、そうやって心を崩したりして経験しているから、だから別に、応援はしてくれています。私は、一生やっていくというのは言っているの、幼稚園が、年的にもおばあちゃんだからやめてくださいというふうにならなければ、続けていきたいなと思っています。」

6. 将来についての考え

F さんは、少し前までは、現在の職場で全体主任になることを目標としていた。それは、産休明けに復帰する働き方ができない雰囲気および園長の考え方があった現在の職場で、役職に就けばポジションが確保されると聞かされていたからだった。しかし、今は、「産休明けでも復帰できる、女の人が仕事しやすい幼稚園にしたい」と考え、職場環境や園長の考え方を変えていきたいと考えている。実際、園長は F さんが小さい頃から知っている間柄なので将来の働き方について改めて熱心に話してみたら、「今までの人はやってこなかったけど、別に先生、子どもができたなら、(今、2 歳児保育をやっているの) ……それまでは自分の実家なり、どこか保育園に預けるにしろ、2 歳から別にうちの幼稚園で預かってもいいんだから」というようなことを言われた。保護者と接していても、経験のある先生の方が信頼されている印象を受ける点、また、幼保一元化の流れの中でモデル園に選ばれれば補助金が入り、経営面でもメリットがあるという点で園長の関心を向けられるかもしれないという点でも、自分が職員の代表となって幼稚園を変えていきたいと考えている。

Gさん

27歳男性。大学卒業後、海外支援のNGOに2年契約で雇用され現地法人を立て直す。日本に戻って、現在はSEとして働いている。システム開発の仕事には「役に立つ」という確信が持てる。

1. 学校時代について

小学生で少年野球チームに入り、中学校では野球部、高校は進学校でありながら野球も強い公立A高校に進学。しかし、野球は途中でやめる。

「ちょっと挫折したんですけど、ずっと野球をやっている。…(中略)…A高校が実は合わなかったと自分では思っています。あんまり居心地はよくなかったです。野球部だけではなく。何か、「おれたちA高校」みたいな雰囲気になじめなかったのがあったのかな。ちょっと、屈折してると思う。(笑)」

高校時代に留学

野球を辞めた後、国際交流基金の留学プログラムに応募し、試験を受けて合格した。当初はインドネシアに行くはずであったが、政情不安からアジアのB国に変更になった。高校2年生の夏から1年間B国でホームステイ。

「みんな、英語で頑張ってくれるんですけど、何か聞き取れないんです。アジアの英語、B国の人もあんまりうまくないので。でも、ちょっとずつは、聞いて大体反応できるぐらいには。」

「(一緒に行った高校生とは) ばらばらですね。場所はばらばら、学校はばらばらで、たまに何か会合みたいな、パーティーをやったりとかっていうので一緒になったりするんですけど。…(中略)…日本からだけじゃなくて、同時期に海外から(の留学生がいて) どちらかという、そっちとつるんでいた感がある。なので、B国語より英語を覚えたというのが大きいと思うんですけど。」

大学時代とNGO

翌年6月に戻りそのまま3年生に進級。翌春には、現役でC大学に進学する。

「(C大学に進学したのは)、センター試験とかを受けたくなかったという、それだけの理由です。…(中略)…国際関係学科って名はついていますが、あんまり関係ないようなところですね。一応学制的には国際法だとか、国際経済だとか、NGO論だとか、そういうことはちょこちょこやりましたが、個人的に力を入れていたというか、関心がそこしかなかったのは哲学ですね。…(中略)…現代思想ですかね。」

大学2年の時から国際NGOに参加。毎年行われる国際NGOのフェスティバルの運営に携わる。

「きっかけが、大学の親しくしていただいた教授が関係していた C 国支援の NGO がありまして、そこに国際ツアーという形で、2 週間ぐらいかな、C 国に行って、そこでの活動を手伝ったりしていて、その流れで、そのフェスティバルの運営に携わりみたいなことになりました。」

その教授との出会いは、厳しい授業だとの評判を聞きながらも、内容に興味を持って授業を取ってから。「(その教授は) 教育しているなと思いました。大学の先生で初めて、この人は教育者になろうとしているなと思った人が、その人だったんですね。実際、いろいろ授業も工夫されていて、とにかく話し合う場をつくる。講義形式は、そもそも好きではないので。そういう意味では、それだけでも一気に距離が近く感じられた。」

大学の授業はほとんど毎日だった。NGO に参加してからは、午後は NGO の職場に行くことが多かった。

「(NGO は) 仕事でした。実際にちゃんとお金をもらって、バイトみたいな扱いでもらっていたのはほんとうに 3 カ月とか 4 カ月ぐらいですね。あとはボランティアという形で。2 年生から、結局、最後までですかね。4 年、5 年、そうですね。最後までですね。」

アルバイト

最初のアルバイトは、高校時代の終わりごろから喫茶店で、コーヒーが好きだから自分で見つけた。家庭教師の経験もある。はまったのはバーテンダー。

「ちょっと上の仲間たちと一時期いろいろ、雑誌をつくるかみたいな話になってですね。地元の店を回って、営業をかけたりにしていたんですよ。そのときに、この店というか、グループの店で、そのオーナーの店がちょうど D 市だったので、じゃあ、ちょっと 1 人働かせろみたいな話になって、いけにえになったというのがきっかけです。… (中略) …雑誌計画は途中でつぶれたんですけど、バーテンダー自体を 2 年ぐらいやっていましたね。途端にちょっと体がもたなくなっただけ。」

週 4 日入ったこともあったが、週 2 回ぐらいの時が一番安定していた。喫茶店も同時並行で週 3、4 日。日曜日は、朝から喫茶店で働き、夜はバーテンダーをやる生活。「それで、月曜日の単位がもらえなかったんです。(笑)」

アルバイトの収入はほとんど NGO の交通費に消えていた。

就職活動

就職活動はほとんどしていないが、1 つだけ、航空会社のパイロット試験を受けた。

「ほんとうに、(パイロットに) なってやろうと思っていましたよ。どこかで、おそらくいろいろなフェスティバルの運営とか、人を扱うというか、まとめるというか、というようなことばかりやっていて、技術者とかにあこがれていたんですよ。」

試験には落ちた。

「何か就職とかは真剣に考えていなかったのは事実ですね。何でそんなに無謀だったんでしょう。…(中略)…ものすごく楽観的だったのと。」就職氷河期と言われた余波はあったが、周囲は就活に躍起になっている雰囲気ではなかった。「当時は何になりたかったのかまだわからなかったし、いまだにわからないのがありますけど。」

卒業の半年前頃、フェスティバルの運営で知り合ったB国の農村部の支援をしているNGOの理事長から、現地法人の立て直しの仕事を頼まれた。2年間しか給与は払えないから、2年間で何とかしてくれということだった。

「結局はそんなに悩まなかったのかな。どうやろうみたいな話をよく話していたので。」

2. キャリアについて

海外のNGOで

仕事は、具体的には現地の任意法人を財団法人化することで、そのこと自体は2年間で達成した。しかし、それ以外の問題がたくさん見えてきて、それに四苦八苦した。

「日本のNPO法人格をとるよりは楽かなという感じはしましたけどね。行政手続きのようなこともあったり。ただ、それ以上に四苦八苦したのは、現地の職員が、結局2名とかなんですけど、要はミッションみたいなものがきちんと立てられていないし、それに向かって施策を練っていないし、実際の実務にも非効率な部分がいっぱいあるというようなところを、どうにかしたかったというのもありましたね。形式的に財団法人にはなったんですけど、それ以外の部分では、達成感をはっきり言ってなかったですね。自分がほぼ育てて、つくった組織なんですけど、ほんとうに必要なのかなという疑問は今でもあります。」

「(問題は) 事業評価できていないんです。実際、じゃあどれだけ、メリットといたら変ですけど、何が向上されたの、どれぐらい向上されたのかというような統計学的なことでもできなかったし、社会学的な調査もできていなかったし、調査能力不足というのが一番気にかかったことだったんですが、私にもそんな専門性はなかったというのが一番の、自分に対するジレンマですね。…(中略)…実証的なデータをそろえられないというのは、やっぱりNGOの課題なんだと思うんですね。自分のところに限らずですね。そればかりは。そういった課題を持って帰ってきた感がありますね。いまだに自分の中で問いです。」

そうした疑問から、日本に戻ってから、NGOとは距離を置くようになった。

帰国後はシステム開発の仕事に

2008年の3月に日本に戻り、結婚したパートナーの仕事が忙しかったこともあり、しばらくは「主夫」で過ごした。6月にシステム開発会社の採用試験を受け、7月からSEとして正社員で働き始めた。

「(この会社に応募したのは?) まず、システム屋になるつもりになったんですね。この中で言えば、どうやったら非効率をなくせるかっていう。実際に、B国でも猿まねみたいな

感じで会計システムをつくったり、実際にやってみていたんですよ。…（中略）…専門家がだれもいないし。教えてもくれないし。そしてシステムがないし、買えないしという状態で、つくるしかなかったんですね。それがきっかけで、で、システム屋をちょっと、門をたたいてということで。その流れですね。」

初めに目についた会社であったこと、未経験でもよかったことが応募のきっかけだった。「はっきり言って、基準がわからないんですよ。どこがいいとか、どこで選ぶべきものなのかっていうときには、大体は運に任せます。でも、ある程度、3年ぐらいやってきて、わかってきたので、もう今度はしっかり選ぼうとは思っていますけど。」

今の勤務先は、中小企業だから、システム設計からコーディングまですべてを一人でやる。週40時間、年収400万程度で、残業はあまりない。能力を身に着けるには良い会社だった。

「ただ、コーディング、プログラミング、システムの知識という意味では、もう物足りない会社になってしまっているんで、多分、今、私が一番になっちゃったので。次はもっと、そっちに特化しようかなと思っはいますね。年齢的には厳しいんですけど。」

「プログラミングのほうを、ちょっと突き詰めて勉強していますね。…（中略）…（もっと高い領域に）行きたいですね。やっぱりあこがれていますよね、何か。いわゆるスーパープログラマーとか言われるような領域に足を突っ込みたいなというのはあります。結局、最後に来ているのが、やっぱり技術者への憧れというか。腕一本で食えるような人になりたいなというのは思っていますね。」

「まだ迷っていますね。やっぱり自分の今の職場の組織のあり方みたいなことも考えちゃう。技術だけに没頭したいと言いながら、考えちゃうんですね。…（中略）…嫌ですね。何かドロッカーとか読んじゃうんです。」

3. 交友関係について

中学、高校など近所の友人2,3人と付き合いがあり、今もふらっと家に来たりする。

「(大学や、NGOの仲間とは)今は迷いがいろいろあるっていうのが現実なので、それもあって。大学の仲間ともそこまでとってないですし。NGOでの仲間でも、そこまで連絡はとってないですかね。」

4. 生まれ育った家庭について

父親は銀行員で転勤が多かった。

「朝起きたら父はいなくて、家に帰ってきて寝てから父が帰ってきていたっていうのがあって、それは避けたいなというのが多分、いまだにあると思うんです。別に父を責めるわけではなく。(今子供と)なるべく一緒に過ごしたいというのは、多分そこから来ているのかなとは思っていますね。父もそうしたかったでしょうし。」

母親は、専業主婦。兄がいる。似たタイプではないが仲は良い。「兄はどっちかというと

努力家で。そうですね。勉強しているタイプですね。僕はあんまり……。目に見えて頑張っているなということは、母に言われたことはないんです。でも、兄より成績はいいみたいな。だから、兄は気に食わなかったんじゃないかなとは思いますが。勉強しろっていうのはあんまり言わなかったですね。」

「本、昔は大嫌いでした。ほんとうに算数とかのほうが好きでして。本とかを読み出したのは多分、高校ぐらいでしょうかね。本は買ってくれたんですけど、読まないみたいな。で、怒られました。多分、勉強に熱心な教育ではなかったと思います。でも、気づいたらやってきたからまあいいかみたいな、そんな感じだったと思うんですよね。」

「サラリーマンとかっていうあり方に疑問を持っていたのは確かだと思うんです。小・中、父の姿、父はもちろん尊敬していますが、何かこんなに大変なの、どうなのっていうような感覚ですよ、きっとね。それが普通だと思いたくなかったみたいなのがどこかであったのかなと思いますね。おそらくNGOという世界に足を突っ込ませた一番の原因というのは、反発もありますね。父も母も、きっと海外に行ったこともないような典型的な日本人でしたし。結構、反対もされた、心配もされてっていうところだったので、よけいに外に行きたいという気持ちが芽生えたというのはありますよね。」

5. 結婚について

B国にNGOの職員として赴任した時、高校時代の留学仲間だった女性と結婚した。彼女は留学後も現地に残り、現地で結婚して娘がいたが離婚していた。2008年に夫婦で日本に戻った後、現地の元夫のもとに残っていた娘を引き取ることになる。今は、7歳になるその長女と2歳の息子、それに第3子の出産予定がある。

「(長女が日本に来たのは)小学校に入る2カ月前ぐらいですね。もう急遽、ちょっと幼稚園とか入れてみて、なじんで、そこから入学してということで。…(中略)…(心配だったが)もう今ではほんとう、ただの悪餓鬼ですよ。(笑)」

奥さんは今は専業主婦だが、アパレル系の会社でB国での生産管理をしていた。出産後には仕事をしたいという。

6. 将来について

システムの仕事を極めたいと思っている。

「役に立つという確信です。(好きというより)そのほうが大きいですね。まだ、ほんとうに好きかどうかはわからない部分もありますし。自分がそれに向いているかどうかともわかりません。役に立つ確信はある。おそらく。人が喜ぶだったり、便利だなと思ったりとか、そういうところで。すごくちっちゃなものかもしれないけど、役に立つという部分がありますね。」

「もちろん不満もあります。もっと行けるといような。多分、そういう感覚がある仕事と

いうのにあこがれていたのかなと今、改めて思います。技術者って何なんだろうみたいな問いを考えるんですけど、やっぱりそこなのかと。目に見えて何か実感が、「あ、こう役に立った」という実感があるものが物理的にできるみたいな、そういう感覚ですかね。」

「(器用貧乏で) ナンバー1みたいなエリアにはまだ行けてないと思います。どの分野でも。それは自分で実感しているんで、そこが一番嫌なところと言っちゃあれですけど。じゃあ、そのナンバー1の分野って何なのかはよくわからないんですけど。でも、おぼろげながら見えてきているのはあるかなと思いますね。」

「5年後は起業をできればしたいですね。と言いつつ、(今の)組織のことも考えちゃうという性格上、やっぱり理想の組織は自分でつくるしかないなというところがありますね。」

「資金どうしようみたいな、いろいろありますよね。子供がいますのでね。その辺は足かせ、直接的に言えば足かせ、自由には動けないというのもよくよくわかっています。こればかりはね。」

7. 働くことに対する考え方への震災の影響

「ありますね、やっぱり。だめだなんて言ったらあれですけど、いろいろ変えなきゃいけないというの、特にどしんと来まして。…(中略)…もっといい方向に、いい国にしたいみたいなことを思っている人たちはいっぱいいると思うんですよ。その人たちの声は何で生かされないんだろうっていうところがありますね。それは別に国レベルじゃなくても、おそらく会社とか、もっと小さい単位でも同じなのかなと。およそ組織っていうところで、日本っぽい組織みたいな、悪いところが見えてきたのかなとは思いますがね。それをもっと的確に言葉にできたり、研究対象にできたりしたら、何かいい方向に行くのかなというのがありますし。」

「一方では批判というか、それこそ利益を上げないでは食っていけないというのもありますし、自分自身も給料を稼がなきゃ食っていけない部分もある。だから社会的に役に立つことだけをしていればいいとは思っていないのも事実なんですね。経営しなきゃいけないというところで。でも、そういう目で見ても今の結構多くの日本企業はアウトだと思うんですよ。実際、不況を脱出できていないのは大きいですすね。両方向で、これからも社会的には見ていきたいし、自分自身でもし何かできるチャンスがあるんだったら、そういうのは生かしていきたいなとは思いますがね。すべがまだないです。知りたいです。」

8. その他

「(趣味としては)書くことですかね。小説みたいなものを書いたり。最近は、娘のために童話を書いてみたりとかというのはやっていますね。書くのが好きですね。…(中略)…。多分、自分が哲学を勉強していた中での自分なりの表現をどこかで求めているのがあります。小説とか童話という形態で。」

「正直、未完なのが多いです。何だか続きがありそうなんだけど今書けないみたいなのが多いですね。完結していないのが多い気がします。ちょっと中途半端な感がありますね。この2つは、読書とか、読むことと書くことというのはずっとやるだろうなとは思いますが。」

Hさん

23歳男性。大学を中退したが、5年間は再入学できる状態にある。生まれ・育ちともに都区内西部で、現在はお笑い芸人を目指して、養成所に通っている。

1. 学校時代

地元の公立小中学校に通い、当時の成績で合格できると考えた近所の都立高校を受験して、入学した。まわりの友人にも、同じ高校に入学した人が少なからずいた。普通科のみの高校だったが、学校選択時に、専門学科がある高校に行くことは考えなかった。入学時点で、卒業後に関しては、漠然と専門学校に行つて何かするだろうと考えていた。

高校生活は、部活などはせず、アルバイト中心だった。1年生の夏過ぎにはアルバイト情報誌でファミレスのキッチンの仕事を見つけ、週3、4日のペースで働いていた。まわりの友人に関しても、部活派とアルバイト派が半々くらいだったようだ。勉強に関しては、最もお世話になった2、3年時の担任の先生が担当していたこともあり、好きな科目（公民科目）は頑張った。

卒業後の進路に関しては、3年生の春くらいに、服飾系の専門学校に行こうと考えていた。しかし、願書を出す直前の9月頃まで迷った末に、自分は手先が不器用で、仕事にするのは違うのかなと思い直し、やめた。その後、就職することは考えていなかったの、合格しそうと考えた大学をいくつか受験したが、現役で合格できず、都心にある予備校に通うことになる。

1年間の浪人期間を経た後に、志望校のうち上位ランクの大学には合格できなかったが、滑り止めとして合格できた首都圏の私立大学に入学する。高校時代とは別の近所の飲食店でアルバイトをするのと同時に、入学した外国語学科には、学部公式の部活（入部は任意）があり、そこに所属して、キャンプや留学生との交流などの活動をした。勉学面に関して、Hさんは英語の勉強は嫌いだったのでそれを克服する意味でも外国語学科を選んだが、講義にまじめに出席したり TOEIC の勉強はしたものの、英語や海外に対する関心はそれ以上もたなかった。

その後、就職活動の時期になり、大学のキャリアセンターに足を運んだときに、自身の大学が職員を募集していることを知って説明会を受ける。そのときに、自分は本当にこういうことをしたいのかなと思い始め、考えた末に、小学校のときからお笑い芸人になりたかったということ、人を笑わせるのが本当に好きだということを実感した。当時から小学校時代を振り返り、子どもながらにコンビを組んで級友を前にネタ見せをし、クラブ活動でも自分たちでお笑いサークルを作って活動していたことも思い出した。

こうしてHさんは自身の進む道を決めていきつつ、2010年夏（大学4年時）に、大学の友人とM-1グランプリ（漫才のコンテスト）に出場する。ここで初めてセンターマイクを挟んで舞台に立ち、お笑いの世界の空気を肌で感じたことで、翌年に養成所に通うという進路

選択を両親に相談することとなる。それまでそれとなく伝えてきたものの、いざはっきりと言うと、「本当にやりたいのか?」「就活から逃げているだけじゃないのか」という反応だったが、後に父親はあっさりとその方向性を認める。

大学に関しては、4年終了間際に単位が足りず卒業できないことが判明し、休学すると学費がかかるので、中退した。

2. これまでのキャリアや働き方について

現在、Hさんは、年間数十万かかる学費を両親に用立ててもらい、お笑い芸人の養成所に通っている。養成所ではネタ作りの訓練、舞台上で声を通るための発声練習（ちなみに、他のインタビューアに比べHさんは非常に声を通った）、感情をスムーズに引き出し、コントで実際に活かすための演技の練習、などを行う。週3回、午前から夕方前まで通う。通えるのは1年間。養成所の同期は、高卒後に来ている人と大卒後に来ている人が多く、また20歳代前半が多い。入所時には同じ時間帯に通っている人は50人弱いたがインタビュー時点で40人以下になっていて、さらに卒業前の審査で選ばれた数組のみが、養成所を運営している芸能事務所に所属してその道が続けていける。

大人数の養成所が好きではなかったということと、上下関係が厳しくないことを理由に、現在通っている養成所を選んだ。養成所を選ぶ際には、お笑い芸人のSNSで得た情報も活用した。

Hさんはコンビで活動している（Hさんがツッコミ）。相方は、近所に住んでいる小学校のときからの友人。養成所に行く日以外でネタ作りをするときは、1人で行う。近所に住んでいる相方との打ち合わせは週1~2回程度。2人合わせての練習はどちらかの家や公園で行う。そうやって練習をした後に、講師の先生に見せて、コメントをもらうという過程を繰り返す。

養成所で言われていることはいくつかあるが、サービス業のように振る舞えることと、自分たちにしかできないことをやれるかどうかという点を挙げている。

「……お前らは究極のサービス業だからって言われて。そんなの、正直、ほかのサービス業はできて当たり前だぞって、さんざんはっぱかけられてて、ディズニーランドぐらいはできて当たり前だって言われてて。」

「……ないことをしたほうが、やっぱりおもしろいというのはあるんじゃないですか。今、もうお笑いも飽和状態で、ネタももう出し尽くされちゃってるんですよ。正直、もうパターン化してきちゃって、マンネリ化で。だから、今までにないことをやるというのは、1個人より出るには一番近道なのではないかというのは、さんざんたたき込まれているので。おまえらにしかできないネタをやらなければいけないというのは、ほんとう、ずっと言われてますね。」

また、お笑いには本を読むことが欠かせないという。大学時代に通学時間が長かったこと

もあり、本を読むことが趣味になったが、養成所でも幅広いジャンルの本を読むように言われ、最近どういう本を読んだか尋ねられる。公立図書館も活用し、小説、ビジネス書、漫画雑誌など、さまざま本を読んでいる。また、お笑いに活かせる小説の展開はどのようなものかということも養成所で指導される（例えば、後からネタを明かす展開ではなく、伏線がきちんとあって、それを回収していく展開の方がよい）。

「僕は読みますね。養成所で本を読めって言われているのもあるんですけど。とにかく知識をつけないと。おもしろければ知識に直結してくるから読めって言われてるのもあるんですけど、元から、僕は本を読むのが好きで。」

「あと、やっぱり、しゃべってたら、僕、いろいろつまなきゃいけないんで、語彙力つてもものすごく…。」

相方はあまり読まないなので、本の話はしないが、Fさんは読んだ方がよいと薦めている。

3. 交友関係について

コンビを組んでいる相方

前述したように、相方とは小学校で知り合った。中学校のときは部活（野球部）も一緒に、高校・大学は別だが、今もしょっちゅうつるんでいる4人組のうちの1人。仕事を辞め役者を目指して事務所に所属していた相方に、Hさんがお笑いの道を目指すことを話したら、事務所を辞めてコンビを組むと言われ、一緒に養成所に入学、活動することになった。コンビを組む際に「お前の人生を背負えないぞ、しんどいぞ」とHさんは相方に話したが、それでもいいという答えだった。

Hさんは、お笑いをやるのが初めての相方に対して、自分には見せないが大変だろうなと思っている。

「大変なんじゃないですか。おれには言わないだけで、そういう見方をするのは、多分疲れると思うので。（これまで友人だったのが、相方になるときに、Fさんの見方が変わったかという点に対しては、）いや、そんなには変わりませんが、でも、つらいのかなと思ったりしますけどね。」

大変というのはどのような感じかという、笑いに対するスタンスが変わるからだという。「笑いに対して真剣に考えないじゃないですか、お笑い芸人にならない限りでも。これで笑いを取ってやろうとか、それを考えないと思うので、そういう見方をしなきゃいけないじゃないですか、いやがおうにも、お笑い芸人って。だから、それを取りに行くというのは、多分、結構大変な作業な気がして。」

一方、自分自身については、違うと感じている。

「僕はもう、やりたいことをやってるんで。まあ、今、大変ですけど、その辺は覚悟してたというか、変な言い方ですけど、覚悟はあったんで、どうにかなってるというか。」

アルバイトや部活での人間関係で学んだことや、大学の学部を選ぶきっかけ

Hさんは現在の活動における自身の強みを、体育会系だった中学の部活や、高校以降のアルバイトでの上下関係で培ったコミュニケーション能力だと考えている。また、高校1年生で働き始めたときにはまわりは年上の人ばかりだったので、仕事以外の面でも、いろいろな世の中の仕組みを教わったという。

「……高校生のときはわからないですよね。バイトでもしないと、そういう社会のヒエラルキーみたいな、わからないんで。」

Hさんが外国語学部を選んだのは、高校時代のファミレスのアルバイトで同僚だった大学生の影響だった。現在英語の先生をしているその大学生はHさんと仲が良く、よく一緒に遊んだり、仕事のときもよくしてもらっていたという。

このような交友関係をもつHさんは、対人面で苦勞したり、思い詰めたりしたことはない。

高校時代の友人と趣味のパソコン自作

高校での友人の1人とは今も関係が続いている。Hさんもその友人も服が好きで、話もすぐ合う。その友人がデジタル系が好きだということで、一緒にパソコンを作ることになったことをきっかけに、パソコン自作や家電が趣味となった。今はお笑いの道に専念しているが、万が一お笑いの道以外を進むことになったら、この趣味が今自分のもっている中では一番潰しがききそうなので、伸ばしたり、資格を取ろうとも考えている。

海外志向の人が集っていた大学時代の学科

お笑いの道に進むと決めたとき、大学の友人たちに話をしたが、そこでの反応は「好きなことをやれば」というものだった。学科柄、海外志向が強く、自由な生き方をしようとする人が集まっており、誰にもとがめられず、やりたいことをやったほうがいいじゃないかという雰囲気があった。休学して、もしくは卒業後にワーキングホリデーに行く人も一定数いた。

4. 家族について（生まれ育った家庭について）

現在、両親と父方の祖母と、父方の祖父が残した実家に暮らしている。きょうだいは4つ上の姉が1人。サービス系の専門学校卒で、現在は結婚して家を出ているが、都内に住んでいる。Hさんも、2～3年後には実家を出ていきたいと考えているが、経済的に難しいかもしれないので、現在やっているお笑いの活動の展開次第という状況にある。

父親は50代後半で会社勤めだが、早期退職して、嘱託職員として残って働いている。母親はパート勤め。両親との仲は比較的よい。父親はお笑いが好きで昔からテレビで見ているが、Hさんがやるお笑いに何か言うことはない。

Hさんの進路に関して、両親が強く反対することはこれまでなく、Hさんの選択を尊重している。学費を出してもらって好きに活動できていることに、Hさんは申し訳なさを感じる

とともに感謝しており、成功して返したいと思っている。

5. 結婚について

結婚について、いずれできたらとは考えているが、具体的に考えていることは特にはない。

「結婚はぴんときませんよね。女の人の方がリアリティあるんでね。」

「……まず、経済力的な問題ですよ。そうですね、中途半端だから。多分、今よりちょっとしてからの方が、多分つらいと思うんですね。ネタ見せが毎週にあるし、だから、もうバイトもろくにできないけど、ネタはやらなきゃいけないぐらいのときから、相当つらいと思うんで、金にならない仕事でやらなきゃいけないみたいな。その辺かなと。そういう女の人じゃないと無理ですよ。多分、今、もし結婚となったら。」

「一番そこですよ。経済的な。もし働いているんだったら、多少なり、多分、やり方があると思うんでいいんですけど、定職ではないので。」

6. 将来についての考え

舞台上で使える時間が短くなってきていて、ぼけ数が多く短時間でアピールできるお笑いが求められていると思い、また、しゃべくり漫才でやっていきたいと考えている。

養成所卒業時の審査で合格できなかったらこの先の進展は難しいが、それ以降も売れるまでは10年かかると見積もっている。また、今はお笑いブームも若干下火になっている状況なので、ネタ以外の部分も必要になっていると考えている。

「……多分、もうこれからはネタで出て来られないだろうと言われていて。だから、ネタ以外の部分を鍛えなければいけないんじゃないか。だから、今、この話したらあれなんですけど、やっぱり、お笑い以外でも出られるようなタレント性がないと出てこれないなど。」

「……手相が見れたり、風水やったりみたいな。だから、プラスアルファで。お笑い以外の分野でやっていかないと、もう飯、食えないだろうというのが現実で。」

卒業時の審査で合格できたら、大学を卒業しようと思っているので、お笑いの活動やアルバイトをしながら、中退した大学に再入学して通おうと考えている。

1さん

29歳女性。首都圏に生まれる。5人兄弟の3番目。総合学科を卒業したあと簿記の専門学校に進み、日商の一級を取得。卒業時に両親が離婚することになり、家を離れたいとの思いからオーストラリアにワーキングホリデーに行く。1年で日本に戻りすぐに会計事務所に勤務、5年ほど働くが、もっと様々な世界をみてみたいとの思いから派遣で半年就業、そのあと紹介予定派遣で正社員化を提示されるも断る。人材会社の紹介で、通信系のベンチャー企業のマネージャーとなり、これまで身に付けた簿記の知識と英語を駆使しながらハードな毎日を送っている。

1. 学校時代について

小中学校は地元の学校に通ったが、高校は総合学科に進む。

高校の選択

「昔でいう偏差値的な高さがちょうど合っていたというのと、自宅から通える距離でというのと、ちょうどその学校が普通科と美術、音楽、書道とか、何かそういったちょっと特色がある学校だったんですね。家よりもっと近くて、偏差値とかで合うところはあったんですけども、それよりも何か新しいことやるらしいというほうにトライしてみたというか、そんな形で引きつけられて。私の場合は、あまり自分の進路とかやりたいことって、全然明確になってなかったんです。逆に、普通でいいと思っていたので。なので、(総合学科に通ったことは) まあよかったんじゃないかなみたいな。」

手に職をつけたいので、簿記の専門学校へ

「(母親は) 小さいときから働いてました。母が資格がないこととかスキルがないことで、仕事を得るとか働くことについて大変な思いをしていたのを多分見ているんですよ。そういうのがあったので、女性は資格が必要というのが、すり込まれてたんだと思います。中学生のときから、ほんとは何か、はりきゅう指圧のとか、そういった人を助ける仕事がやりたかったんですね。で、高校卒業するときには、推薦で鍼灸指圧の学校を全部受けたんですけど、高校時代、あんまり勉強せずに遊んでしまったもので、推薦受からなかったんです。あとは一般で受ければよかったんですけど、ちょうど両親の離婚が近くにあたりとか、4年制の大学に行く余裕はなかったんですね、うちには。で、ただ、自分がやりたい指圧とかは、今の学力で入ろうとしても、ちょっと無理だなと思ったのがあったので、やりたいことは鍼灸指圧で人を助けたい。でも、そうじゃなくて、まずは社会に出て、自分がお金を稼げるようにならなきゃと思って、社会に出て役に立つ資格は何ですかって進路の先生に聞きに行ったら、簿記の学校を薦められ、言われるがままに、はい、行ってきますとって、そのまま入学したので。」

私も高校時代、もっとほんとは勉強とかに集中できればよかったんですけど、学業というのはしつつ、あとはアルバイトに明け暮れ……。やっぱりお小遣いとかも、そんなもらえるわけではないので。そのときから、もう育英会でお金もらって、それでやっていったというのがあったので、ひたすらアルバイトをしていると、何か悪いお友達ができてしまうというか、ちょうど高校がミニスカートでルーズソックスとかになり始めたときだったので、そんな格好をしつつ、アルバイトで、夜とか遊ぶということを知ってしまいみたいな。2年生からバイトを開始したので、2年生から卒業するときまで。週5日とか6日とかやってみました。学校終わって、そのまま真っ直ぐ行って、夕方5時か6時から、閉店が8時だったかな、とかまでやってる。」

勉強に燃えた専門学校時代

「楽しかった。一番楽しかったと思う。勉強に集中できたことかな。というのは多分、小中高校って、自分ってものもわからないし、何か取り組める一つのものがなかった気がするんです。本来であれば多分、中学校か高校で、部活とかに燃えるじゃないですか。それがなかったんです。私は多分そういった集中するものが欲しかったんだと思うんです。7月に試験を受けて、全然試験もわかんなかったんです。でも、多分、楽しかったんですよ、試験が。試験終わって、そのまま学校に行って、「おお、どうしたんだ、どうだった」とか言って、「全然だめでした」とかだったんだけど、その日から勉強を本気で始めたんですよ。自習というんですか、自分でひたすら問題を解くことを始めて、そしたら12月の試験で受かったんです。(税理士の国家資格の)受験資格ができたので、もうそのまま12月から税理士コースに入れられて、2年目の夏には法人と簿記、財務諸表という3科目勉強してましたという。税理士の勉強は丸2年間続けて、5科目、一応勉強したんですけど、1科目も受からず。勉強は楽しいけど、自分がそれで、じゃ一生食っていくかということ、多分違うなと思ってたので、2年になって、夏に一応、もう一回ちゃんと受験して、受験した後から、よしと思って、ワーホリでオーストラリアに行こうって。それも多分、2年生になったときぐらいから、もう準備を始めてたので。その冬にワーホリに行ってるんです。」

ワーキングホリデー

「何のためにワーホリに行ったかというのが、今までいた親に支えてもらっている。食べさせてもらって、自分が寝るところを提供してもらっているというか、その家から出たかった。ただ、それだけなんです。ちょうどその年に親が離婚するんですけど。」

多分そのときの私には、自分の進路を考えるよりも、もう家から離れたいというのが強くなっちゃってたと思うんです。

それで、家を出る方法の唯一の選択肢がワーホリだったんです。それまで、飛行機とか海外なんて、一度も行ったことないんですよ。

英語とか普通に3か4かという、成績は普通だったと思うんですけど、たしか英語の発音を先生に褒められたことがあったんですよ。そういったことがあったので、自分は何か留学とか海外とか向いてるんじゃないかという激しい思い込みをしてまして。

専門学校では勉強しかしてないから、ほかの人たちとコミュニケーションをとって、いろんな遊びをしたら社会を知る機会がないまま、勉強しかしてないで、勉強が終わったら、次はじゃ、家を離れるのにワーホリに行こうと思って、ワーホリに行くにはとりあえず100万必要だったんです。でも、勉強してるときはバイトもできないので、試験が8月10日ぐらいで終わるので、試験が終わってから11月まで、そこでコンビニで毎日10時間ぐらいずっと働いて、そこで100万ぐらい一気にためたんです。」

ワーキングホリデーでの過ごし方

「(日本食レストランのアルバイトは) お昼が多分、11時ぐらいから入って、午後に休憩があって、夕方、またディナーの時間が始まって、お店が閉まるまでだったので。

ワーホリに行ったのは、自分が家を離れたいという、ひとりになってみたいということが目的だったので、ほかの人みたいにもっと格好よくとかいろんなことを経験したいとかじゃなくて、日本でも働くんだから、海外でも働こう。日本でも家に住むんだから、海外でもどっかの家に住もうという、そんな感じだったので、別に旅をしたいとか、じゃ海の近くがとか、全然なかったんですよ。向こう版フリーター生活。」

2. これまでのキャリアや働き方

ワーホリから帰ってきて1週間以内に専門学校に仕事を紹介してもらいに行ったが時期が悪く、ハローワークに行くように言われた。ハローワークに求人が来ていた会計事務所に簿記の資格を生かして就職した。その後、派遣で働き、紹介予定派遣で正社員に誘われるも断る。

「5年弱、4年ぐらいかな、働いて、それから派遣で何かほかの会社にぶらぶら行きました。

とりあえず入りやすい派遣で、いろんな会社というんですか、一般的にって、こう見つつ、でも、ちゃんと安定して働かなきゃだめだよなというの、ずっとあるんですよ。それで、紹介予定だと、最初は派遣で入って、お互い相性がよければ、条件が合ったら、じゃ正社員で雇用しましょうということなので、私にとっては都合がいいやり方だったんですよ。2月の中旬まで、正社員になるんだって思い込んでたのか、突然、部署はかわるからねというふうになっちゃって、ええって。そんなだったら、こんなところにいたくないと思ってしまい、2月の末には、紹介予定やめますとって、契約を3月末で終了ということになっちゃったんですよ。

(そのあと) 人材紹介に登録に行ったんです。2月の末か3月の頭に。

で、担当になった人に、どういうことを考えていて、どういうことをしてきてというのを言うじゃないですか。で、言ったら、「ベンチャー向きですね」って言われたんですよ。ああ、そうなんだと思って。でも、確かに言われてみれば、大きなところの1部門、全体のこじか見えないという仕事じゃなくて、全体を見て、全体が最適になるためには、自分はこうしたほうがいいなという仕事のやり方、そういうふうに考えて仕事をしたいので、そうかもなと思ったんですよ。」

現在は国際的な通信系の日本支社の経理・管理のプレイングマネージャーとなっている。「(ワーホリの経験は) 多分、生きてると思います。具体的にどれがというのはわからないんですけど、あらゆる文化を受け入れなきゃいけないんですよ。というのは、日本流はこうだよというのを押しつけても、実際オペレーションするのは現地の人とか、お客様が現地で生活している人、現地の文化はこうだよというのを持ってて、それに合ったニーズをうちから提供しなきゃいけないわけじゃないですか。そうすると、日本のよさを生かすことはできても、強制することはできないんですよ。そういう違いを受け入れなきゃいけないわけですよ。出張に行って調整したりするんですね、そういうのを。最初は日本の一経理として雇われたんですよ。経理がない会社だったんです。(簿記の資格は) ポイントとなったというか、それが必要だから私を雇ったんだなという。

経理のスキルって、多分、私のほんの3分の1ぐらいしかないと思ってるんです。それ以外の、そうやって全体を見て、もっとこうしたほうがいいなというのを結構考えられるというか、客観的に見えるというか、そういったのが自分のよさだと思ってるので、そういったところを生かせるのが、今のポジションというか、この会社のいいところ。」

3. 交友関係

体を壊したことがきっかけではじめたヨガにはまる。

ヨガを始める

「最初の1年間、私、すごい頑張ったんですよ。働き過ぎちゃって、体壊したんです。1回倒れても、まだ気づいてなくて、2回倒れて、やっと気がついたんですけど、さすがに、ああ、このままじゃ、この働き方じゃいけないんだなと思って。それで、運動はずっとスポーツクラブでしたので。今までの運動の仕方、生活の仕方じゃいけないから、何かを変えようと思って、ちょうど体にいいと言われているヨガとかが、スポーツクラブのあるじゃないですか、クラスが。体にいいというし、何か変えないと、体がよくなるしなと思って、ヨガのクラスに入ったんです。最初週3から始めて、それが週4になり、5になり、6になり。で、夜だけやってたのが朝もやるようになって。朝早く起き始めたら、夜がもう早く寝ないと、できなくなって、今はもう完全に朝型で、朝2時間ヨガと、毎日10キロ歩いている

んですね。」

気を許せる友達はヨガの仲間と、英文会計の専門学校で知り合った仲間である。

「ヨガをし始めてから、ヨガの先生と、あと、ふだんは別々のところでやってるから、全然会わないけど、年に数回、お互いの近況報告をしてという人はいるのと、あとは、ヨガ仲間ではないけれども、何か女友達で1人、お互いリスペクトし合えるというか、というのはいるので、3人ぐらい。

私、会計の専門学校、また別のところに行って、英文会計の勉強してるんですよ。最初は日本の経理として雇われたから、日本の経理だけやってればよかったんですけど、どんどん仕事が増えて、日本の経理の知識だけじゃ足りなくなってきたんです。

それで、英文会計の学校に半年間通って、そこで、試験の受験するまでに、偶然同じクラスに来てた女の子と仲よくなって。というのは、英文会計の先生に「多分、気が合うよ」って言われたから、それで友達になったんですけど。あっちは何かビューティーとかいってるし、こっちはばりばりキャリアで、全然違う。何だろうなと思ってたんですけど、お互い、何かしゃべってるのが未来のことばかりで、過去がどうだったって、一切出てこないらしいんですよ。」

4. 家族について

父は自営業で大工だった。母はケアマネジャーであり、ホームヘルパーを10年経験したのち、国家資格の勉強をしてケアマネジャーになり、現在は施設長。兄弟は仲が良かったが父の暴力があった。

「(前節の未来について考えるという性格は) 多分、育ってきた環境は大きいとは思いますが。というのは小さいときから、家族というものの中で、いがみ合ったりとか暴力があったりとか、つらくて泣いたりとかしてるんですよ。そしたら、目の前を見ることとか過去を振り返ったりしてたら、生きていけないんですよ。はっきり言って。将来、いつかは絶対楽しくなるんだって思わないと、生きられないじゃないですか、夢を持って。多分そういうのがあったんだとは思いますがね。」

5. パートナーや結婚について

「もちろん。結婚はしたいし、相手がいればと、いつでも思ってるんですけど、まあ、急がなくてもいいかなみたいな。まあ、相手がいらないからしょうがないですね、みたいな。(笑)」

6. 将来について

通信制の大学に通い、認定心理士と学士をとりたい。

「この秋から通信制の大学に通い始めるんですよ。どこにいても、目の前でだれか人が困ったときに助けられることを、当初は仕事にしたかったわけですよ。それで、指圧というのを考えていたので。なので、その夢はいまだに全然あきらめてなくて、今回、認定心理士のほうをとるんですけど、心理とか心の面とかカウンセリングとかそういったこともできれば、もっとう、自分がひとりで役に立つことができるじゃないですか。

あと、専門学校卒だと、大卒じゃないじゃないですか。そうすると、今も海外の子会社見ているのは、海外だと、ビザとるために、マネジャーという役職のためには学卒、学士が必要で、ビザとるためには最低ライン、大学卒で、それからじゃ、マネジャーとして何年間キャリアがあつてというのが必要になるんですね。

そうしたときに、自分が今の自分だと、そういった可能性を狭めてることになっちゃうんですよ。なので、もうすぐもう30とかにもなるし、大卒というのを取っておかないと、今後どういうふうに進路になるかわからないので。」

7. 震災の影響

震災をきっかけに、通信制の大学に通うことに決めた。またボランティアについては、NPO団体になりたい団体を自分の専門知識を生かして支援することを始めている。

「震災というのがあったおかげで、今の私がひとりで生きていくんだったら、目の前の仕事を大事にして、趣味でヨガというのをやって、自分が健康であればいいだけなんですけど。もっとヨガを伝えることだったりとか、人を最終的に助ける仕事というのを60歳まで待つてちゃいけないと思ったから、大学にももう秋から通おうと始めたんです。具体的に人の役に立てるということを今から始めようと思って、それで今、インストラクターもそうだし、ボランティアももう始めてるんですね。」

Jさん

20歳女性。首都圏に生まれる。高卒後すぐにフランスに9ヶ月間留学し、ステンドグラスの技法について学ぶ。現在はオークションで自分の作品を売りつつ、時々アルバイトをしている。

1. 学校時代

小中学校は地元だった。中学校の時は3年間バスケット部に打ち込み、合唱コンクールの委員長を務めるなど充実していた。

「(バスケットは)最初は何となく入ったんですけど、結構おもしろくて、きついんですけど、やめたら負けみたいな。ギリギリ最後までギリギリ、ちょっと途中、体調崩しちゃって、挫折しかけたんですけど、ギリギリセーフでやり切った。合唱コンクールというのがあって、それに結構命かけてたというか。みんなでまとまって何かやっていくのが結構好きで。クラスの合唱コンクールの委員みたいな感じで、一応3年間やって。一応、最後に委員長をさせてもらって。」

高校の選択

普通科には進みたくなかったの、総合学科を選択する。

「普通科にあんまり進む気はなくて、結構全然狭まってなかったんですけど、芸術系とかものをつくったりとか、とりあえず普通科には行きたくなかったというか。学校のそのときのキャッチコピーが「自分探しの旅に出よう」みたいな。それが結構おもしろいなと思って。」

学校のカリキュラムで、1年生のときに結構自分の今までの、そういう生まれてからの自分とかを見直しながらやりたいことを見つけていくみたいな感じのことがうたってあって、2年次からはそれに基づいて授業を選ぶみたいな感じで学校の説明会で言われて、すごいそれがいいなと思って。」

総合学科について

高校では芸術系の実技に力を入れた。

「結構おもしろかったと思います。でも何か、実技というか、ものをつくったりとか、デザインしたりする授業が実技というんですけど、その学校の中では。普通に英語とか、数学とか、理科とかが座学というんですけど。そっちの実技系が楽しすぎて、座学に身が入らない。実技は工芸の授業があって、それをやったりとか、あとデッサンの授業があってデッサンとか、あとクラフトデザインという木をちょっと加工して、何かスプーンみたいなのでつくってみたりとか、ちょっと陶芸のさわりみたいなので器つくってみたりとか、そういう……。何かとりあえずものがつくりたかったんで。そういうつくる系のものが。」

(将来、芸術系とかいう方向に進みたいという気持ち)もあつたと思うんですけど、単純に

ものづくりしたかったという。何か、やってみたかったという。」

将来について①

高校での自分の過去を振り返って見直すという授業で思い出した記憶から、ガラス系に進みたいと考え始め、高校1年生の時からステンドグラスの教室に通い始める。

「2年の夏くらいからは考えていたんですよ。担任の先生と、あと授業の先生とかも、ぼちぼち進路の話もしてくるしみたいな感じで。最初は大学とか専門学校に行くつもりだったんですけど、芸術系の。」

1年次の自分を見直そうという（授業）ので、自分は結構、ガラスが好きなんだと気づいて。（その授業は）自分が何が好きだったかとか。小さいときに自分が何を好きだったかとか、生まれたときにはやっていた話とかが、全部、出してくれるんですよ、先生が。それを見ながら自分を思い出して、何が好きだったかとか書いていくうちに、ガラスとか、結構、昔から好きだったなみたいな、きらきらしたもの好きだったなみたいな記憶がぽっと出てきて。それで、ガラス系に進んでみるのもいいかなっていうふうに。それで、1年の秋に、ステンドグラスの工房、教室に通い始めたんですよ。（教室の選択は）ネットで幾つか見繕って、体験と、お話を聞きに行っって、それで一番いいところにしました。」

将来について②

専門学校や美大でまずガラスを学んでからステンドグラスに入っていくというのがまどろっこしく感じられ、直接ステンドグラスを学ぶ道を模索していたところ、海外に学びに行ったらいいのではないかと高校の先生に示唆され、海外に行く道を選ぶ。

「2年の夏あたりから結構、考えていて。大学を見に行ったりとか、ガラスの専門学校の卒業生の作品展みたいなのかそういうのを見に行っって、大学も専門もちょっといまいかもと思っちゃって。」

私はステンドグラスがやりたいと、もう決まっているんですけど、ガラスの専門学校へ行くと、回り道してからステンドにたどり着かなきゃいけない。ステンドグラスをやるために行きたいけど、ガラスをやってから細々とした道に進んでいくじゃないですか。ちょっと無駄かなと思って。メインがステンドグラスで、そこからちょこちょこ違うわざを覚えていくのもいいんですけど、とりあえずステンドグラスをきわめたいと言ったら変ですけど、最低限、身につけたかったと思って。どれも決め手に欠けるかなと思って。

それで、学校の進路指導室みたいなところ。そんなことを言っっていたら、その先生が、ガラスなんて向こうのほうが主流なんだから、海外に行っってみればいいんじゃないの？ みたいな感じで先生に言われて。それを、ああそうかと思って、担任の先生とか親とかに話したら、いいんじゃないという感じで言われて。みんな全然とめないと思って。語学もできないけど、まだ時間があるし、ちょっと調べてみようかなと思って、いろいろ探して。国を決

めてというより、どこでもよくて、とりあえずステンドグラスができればいいかなと思って。海外でステンドグラスをできたら、結構、それだけでもうけもんかなと思って。どこでもいいからとりあえずネットで探していて。最初はイタリアのところが見つかって、そこは結構、奥さんの道楽みたいな感じのところ、資料を請求したらちょっといまいちかなと思って。

(インターネットで検索して) ヒットしたんですよ。先生が、その人はフランス人じゃなくて、日本人の先生がフランスの学校を出て、向こうで仕事をされている方が、ついでに生徒をとっていますみたいな感じのところだったんですよ。日本語のホームページだし、先生も日本語だし、助手さんも日本人だったんで。ラッキーでした。

海外に行きたいなと思ったのも、ここのお教室というか、フランスのほうに決めたのも、日本ではあまり学べない技法があって。日本でステンドグラスというと、ランプの傘とかじゃないですか。私がやりたかったのは、教会のステンドグラスとかって、パネルで絵がかいてあったりするじゃないですか。あれって、ちょっと違うんですよ、技法が。それが、やっぱり本格的に教えてくれるところが、日本にあったかもしれないんですけど、うまく見つけられなくて。そういうのを学べると書いてあったんで。」

留学に向けて

「学校でフランス語の先生がいたんで、ちょっと教えてもらったんですけど、ほんとうにさわりぐらいしかわかんなくて。それぐらいしかしていませんね。(海外は)初めて。結構、意外と腹くくっちゃったら。最初は、えーっとか思っていたんですけど、意外と、近くなったらもうやるしかないみたいな感じで。」

2. 留学について

留学中は1軒の家を研修生数人で共有するという、半分ホームステイ、半分寄宿舎のような形態で滞在しながら、すぐ隣にある工房で学んだ。研修生は同年代がおらず、30代以上がほとんどを占めた。はじめは2年くらい勉強したいと考えていたが、最長のコースである9ヶ月間学び、帰国後のことは考えないまま帰国した。

「もうちょっと(勉強)できたらよかったかなとも思うんですけど、結構、人間関係とかも考慮すると、限界かなという気がします。」

(帰国後のことは)結構考えていたんですけど、何かもうどうしようもないなと思って、普通に帰ってきちゃいました。先生と、最初に2年やりたいみたいな感じで、最初は言っていたんですよ、行った当時は。でもやっぱりきついなと思って、帰りたくなっちゃったんで。結局、切り上げて帰ってきちゃって。帰ってきてから、工房の生徒さんの卒業生の人の作品展をやるというのがあって、その準備とかをやっていました。」

帰ってきてから

2-3年はふらふらするつもりだが、イギリスの工房でお手伝いをする、窯などスタンドグラスを製作するのに必要な道具をそろえる、自分のホームページを作成するのが主な目標である。

「親とかと話していて、まだ二十だしまいたいになって。私的には、何か、ちょっとまだふらふらしていたい気持ちがあって。二、三年ぐらいはふらふらしていたいみたいな話を親と話していたら、まあいいんじゃないみたいな感じに、準備期間も含めてみたいな感じで。

一応、何個か目標があって、二、三年のふらふら期間の間に、またちょっと、今度はイギリスのほうに行ってみたいと思うのがあって、今度は何のつてもなくて、工房を自分で見つけて、ちょっとお手伝いをさせてもらえないかなみたいな感じは一緒なんですけど。まだ全然達成できていないんですけど。

窯で焼くんですよ、絵をかくときに。それがちょっと高くて。そういう必要な道具をそろえたりとかするのが一応、目標で。それはもうすぐ買えそうなので、ちょっと達成できそうなんですけれど。」

アルバイト

現在は時々単発の引っ越し手伝いのアルバイトをしている。

「ものをつくって、オークションに出してみたりとか、ぼちぼちしていたんです。小物なんですけど。したりとかしていたら、材料費が足りなくなってきたら、それで11月末ぐらいにバイトを始めたんですよ。それで、あわよくば窯も買えたらいいかなと。

こん包するサービスってあるじゃないですか、お荷物を。オークションでものをこん包して送るときに、もうちょいうまくできないかなと思っていたんで、ちょうどいいかなと。日にちが結構、自由に入れるんですよ。それがいいかなと思って。」

オークション

現在はオークションに作品を出しており、リピーターもいる。オークションの時には自分が作りたくかつ売れそうな作品を出品している。

「オークションで買ってくれた人が、またつくってくださいみたいな感じで、気に入ってくれた方が言ってくれたりして。経験もないし、若造なんで、全然、駆け出しだし、安めみたいな感じで設定しているんで、そこがよくて頼んでいるのかなみたいなのはあります。結構いいって言ってくださるんですけど。でも、全然小物なんで、単純な。コメントとかに直接差すフットライトみたいな。スタンドグラスで結構、定番なんですよ、小さい。安く売れるし、取っつきやすいんで、そういうのとか出したりして。

でも、オークションのときは、自分がつくりたい感じで売れそうなものをみたいな。これだったら売っても大丈夫かなみたいな。でも、いいねと言ってもらえるんで、大丈夫かと思

うんですけど。結構、ランプとかではそうでもないんですけど、パネルとかつくる時とか、寂しげな感じだねってよく言われて、それは多分、だめなんだろうなど。

何か、受けはよくないかなと思って。どうなんですかね。いまいち、でも、個数をまだこなしていないので、ちょっとわかんないかなっていう。」

職人志向

自分はアーティストではなく職人だと分析している。自分が作りたいものを作るというよりは、お客さんに合わせて作っていききたい。

「自分が、特にアーティストって思っているより、どっちかというとな職人のほうが、何か、そういう才能がないのは自分がわかっているんで。つくりたい、つくればいいやみたいな部分。よく個展とか開きなよとか言われるんですけど、あまりそういう意味でのいい作品は多分つくれないんじゃないかな。

理想なのはやっぱり、こういうのがほしいんですけどっていうお客さんと、話していきながら、ちゃんとその人の希望に合っているものをつくれたらいいかな。自分の気に入ったというか、アーティストの人だと、自分の世界観を買ってくれる人が買うっていう感じで。じゃなくて、合わせていききたいみたいな。」

ステンドグラスのプロ

プロとアマの境界があいまいな世界である。教室を開けば食べていけるが、年齢的にまだ講師は難しい。またつてで経験を積ませてもらう予定である。

「皆さん結構、教室開いたりとかすると、食べていける。自分がつくっている場所を教室みたいな感じで。そうすると、場所代はとりあえず。

多分、ステンドグラス作家としては、建物の中の窓にパネルを入れたことがないのは、多分、プロとは言えないかなみたいな。でも、一応、今年というか、すごいつてとコネなんですけど、兄の関係の福祉施設に一応、入れさせてもらうことになって。ほとんど寄付みたいな感じなんですけど、それで経験を積ませてもらおうと思ひまして。

今は、どこかの工房に働かせてもらうというのものもあるんですけど、あまり、今はいいかなと思っていて。プロとアマの境界線があいまいで。私結構本格的に学んだんで、いまいち、ちゃんとやっていないでしょうみたいなのはある。そういうところにはあまり行きたくないっていうのもあるし、結構、若過ぎると前に言われたことがあって。それで、もうちょっと待ってみようみたいな気もあります。

でも、まだその先が全然考えられていない。とりあえず、来年中に行けたらいいなと思うんですけど、イギリスに行って、そこから先はどうだろうみたいな感じで。」

現在の進路の評価

「ぼちぼち就職し始めている子とかもいて、それを見ると、ちょっとやばいかなみたいなのは思うんですけど。でも。大学生は、別に後悔していないです、なっていないのは。美術系の子とかは、楽しそうだなとか思うんですけど。でも、普通に真剣にはかりにかけたら、全然いいかなと。」

3. 交友関係

高校時代から同年代の人間関係は広がっていない。ステンドグラス教室は年上の人ばかりだったので、年上の人とのコミュニケーションはとりやすくなった。

「2カ月に1回とか、3カ月に1回とか、結構、間があくんで。よく会う友達、やっぱり高校の子と地元の子の仲のよかった人たちですかね。

いつの間にか、結構、人見知りみたいな感じになっていて。特に、結構あいた年上とかだったらいいんですけど、二、三歳ぐらいだったり同年代ぐらいだったりすると、何かちょっと、うってなっちゃう。

何か、同年代の子と全然知り合っていないんです。高校以来、同年代の知り合いは増えていないんで。それで結構、よく高校の友達とか、同じ人じゃないんですけど、なるべく月の中で会うようにしておいてみたいな。

高校のときに通っていた先生とちょくちょく連絡とったりとか、あとはフランスのときの、一緒に生活していた中の何人かとたまに連絡とるぐらいで、全然ないです。」

4. 家族との関係

父はサラリーマン、母は子供のころは専業主婦であった。兄に軽い障害があり、作業所に通っている。

総合学科に行くに行った際のアドバイス

小学校の時から将来について考えているのを知っていたので、否定されることはなかった。「いいんじゃないとか。やってみればとか。あまり否定されることはなかったかな。小学校のときから将来のことを考えている風なのを知っていたんで、親は。そんなに、真剣に考えていたわけじゃないんですけど、小学校のときに、作文か卒業式か何かで、将来ちゃんとやりたいことを見つけないみたいなことを言ったのを聞いた親が、あんたその年でみたいな。そういう子みたいな感じで多分思っ。そういう面では信頼してくれていたんで、あまり口出しはなかったんですね。小さいときから、うそでもケーキ屋さんになりたいとか、あまり言えなかった。いや、決まってないし、みたいなお子だったんで。」

兄との関係

子供のころは気になったが、最近は兄の障害は気にならない。ただし両親は兄のことで我慢させてきたと感じており、フランスのステンドグラスの学校に行かせてもらったのも負い目があるのかもしれないと感じている。

「親にはよく言われるんですけど、あんまり気にしてなさ過ぎみたいな。(兄の障害は)結構軽いんで、そんなに気にしていない。小さいときはすごく迷惑をかけているところが嫌だったんですけど、自分自身がかけても嫌だから、人に迷惑をかけるというところが嫌だけなんだなって気づいて。

でも、もし兄が障害じゃなくても、(ステンドグラスの学校に進むことを) うんとは言ってくれたと思うんですけど、結構、小さいときからフォローに回ったりとか、そういう、やっぱり普通の兄弟とは違う面での我慢っていうのあるじゃないですか。そういうのをしていた自覚もあるし、させていた自覚も多分あるから、そういう意味で、ごめんっていう気持ちもあるから、そういう感じのプレゼントみたいなというのは言われました。」

Kさん

24歳女性。地元の公立中学校を卒業、都立高校に進学し、一般入試で体育大学で学ぶ。大学時代はチアリーディングに打ち込む。卒業後は不動産会社に就職し、今年3年目。海外旅行が大好きで、日本だけでなく海外にも沢山の友人がいる。

1. 学校時代

小学校の時は水泳やピアノをずっと続けていた。中学校は地元ではなく、隣接する学区の中学校に通った。

「地元よりは一駅離れたところに通っていたので。地元の指定のところだと2クラスしかなくて、ちょっと評判も、私が出たところのほうが当時よかったので、お父さんがそこ出身だったこともあって、部活もバスケット部もバレー部もなかったの、そちらへ行こうということになって。」

中学校の部活はバスケットをしており、週に5日以上は練習していた。高校はスポーツで有名な高校に入りたいと思ってはいたが、地元の入れる高校に入った。

「違うスポーツをやってみようと思っていて、いろいろ強いスポーツのところを探していたんですけども、なかなか私の頭もついていなくて、それで選んだところに普通にもう入ってしまったんですけど。何が強いというわけではなく、まあ入れるところに入った。」

しかし入ってみると、スポーツ以外の生活が楽しくなり、高校生活を楽しんだ。

「(高校に)入って、今まで厳しかった分楽しくやるというのが楽しくなってきたというものあって。それになれて、あとはもう友達と遊んだりということでエンジョイしてました。(アルバイトは)1年生から。家から自転車で1分、2分ぐらいのところのコンビニで。週4とか。5時から10時とか。高校は自転車で25分ぐらい……、30分ぐらい。」

大学進学

大学進学時は語学を勉強したいと思ったが志望校には届かず、希望を変更してスポーツ系の大学に進むことにした。

「私、語学がすごい好きで、高校2年生の初めごろから行きたい大学があったんですけど、その大学に入る気はずっとまんまだったんですけども、全部最後まで、推薦もやったし、学科も全部、4学科あったんですけど、4学科全部受けたんですけど、全部だめで、ちょっとレベルが届かなくて。それで、やっぱりスポーツも好きだしということで、名前があまり知れてない大学に行くよりは、そういうところに行こうと思って、体育大に行きました。生涯を通じてスポーツをして健康でいようみたいな、介護、お年寄りとかお子さまとかにやっていただくようなスポーツを考えたりとか、指導とか、障害者の方とかのスポーツの指導方法とかを学んでいました。」

大学生活の中心は何と言ってもチアリーディング部の活動であった。

「部活はチアリーディング部に入ったんですけど。もうそれしか大学はやっていないです。相当厳しいです。体力的にもつらいんですけども、やはり、部活なので縛りがすごくて。時間の拘束とか、10時まで練習があったり。昼休みとかも全部練習があったので。毎日（やめたいと）思ってたんですけど、もうほんとうに、根性じゃないですけど、それをやりたくて入ったというのもちよつとはあったので。そこ、すごい強くて。同じ学年で入った子たちは、すごいもうきずながある感じですね。3年の12月まで。」

また海外旅行も大好きで、休みがあると友達と一緒にいていた。

「9月だけ1週間オフというのがあって、それで大学4年間は毎年、そのときだけ行けてたっていう。もうずっとリゾート、サイパン、グアム、ハワイとかタイとか。高校から一緒にすごい仲いい友人と、あともう1人、チアではない友人がいるんですけども、その3人でいつもつるんでいるんですが、で、毎回行ってました。」

就職活動

就職活動を開始した時期は早く、大学2年生の終わりくらいから情報収集をしていた。

「2年の2月ぐらいからやっていたと思うんです。エントリーシート書き方とか、実際に説明会に行き出したのは、やっぱりその夏とかになると思うんですけど。」

就職活動はとても楽しかった。

「私、すごい就職活動を楽しんでいて。すごい楽しかったんですよ。今まで拘束されていた時間が就職活動の説明会というので、ちょっと抜けられたりするということも、拘束から外れてすごいそれも息抜きになったというか、楽しかったです。いろんな企業を見れるということもすごい楽しくて、私は職種を絞ってなくて、なので、とりあえず行ってみようということで、いろいろ探していました。何社だろう、70、80ぐらいは見たと思います。」

就職活動の際に企業を選ぶ基準は海外と関わることができること。

「一応、全部共通しているのが、海外とかかわる仕事というので探していて。探してみたら結構、ほとんどの会社が、今のところグローバルにやられているので、海外とのつながりはあったんですけども、その中から絞るというのも結構大変だったんですが。とりあえず受けてみようと思って、結構、受けるのも練習かなと思って受けたり。自分試しじゃないですけど、そういうところもあって、日程が合えば受けたりとかしていました。」

当初は留学支援会社を希望していたが、企業規模が小さいところが多く、新卒の募集はなかった。

「自分でインターネットで探して、留学会社とかを結構見てたりしたんですけど。留学会社って、やっぱりちょっと小さかったり、ベンチャーだったりするので、ちょっとまだ雇えませんというところで、直接リクナビを通したりしないでやったので、そういうご回答とか来

ていて。」

就職活動の際に助けになったのが、大学のキャリアセンターである。

「自己分析を結構していたので、自分に合ったのが、実際どういうのかわからないので、探してみようかなということ。学校にキャリアセンターというのがあるって、そこで支援してくれるので、面接とかの練習もしてくださったり、あとは、うちの大学は体育系だったので、そういうところの求人はあったんですけど、ほかがあまりないので、それは自分で情報収集するんですけど、一般教養的なことは教えてくださるので。すごい頼ってて、もう毎日のように。履歴書の書き方だとか、「どうですか」と言って、「ここを直したほうがいいよ」というふうにおっしゃっていただいていたって直すという形ですね。大学3年に入ってから。」

自己PRに力を入れた。

「自分の自己PRとかは全部、教えていただいたとおりのまま使用して、あとは、その企業に対するイメージとか、いろいろエントリーシートによって項目とかは、試行錯誤しながら考えて。私は、好奇心が旺盛でいろんなことにチャレンジするので、今までもこうこう、こういうことにチャレンジしたとか、バスケとかチアリーディングもそうですし、結構、ピアノも15年間だったりとか。それから習字とか、飽きっぽいと思わせて、いろいろ長くやっていたので、そういうところで、いろいろなことに対応する柔軟性がついたので、いろんなことに柔軟に対応できますというふうに……。」

就職した会社に決まったのが3年生の2月であった。

「第一志望じゃなくて、まだ次は続けようという気持ちはあったんですけど、そこはすごい皆さんいい人で、何か断るのも申しわけなくなってしまうって、いっぱい受けるのはいいけど、そこで断るのがちょっと申しわけなくなってしまうので、それで絞って行って、もう最終的にここでいいかなと思って、早く決まったら遊べると思って、もう決めちゃったようなところがあって、今の会社に決まって。3年の2月。」

就職活動後

就職活動のあとは、留学支援会社のインターンシップとディズニーランドでアルバイトで充実した学生生活であった。

「(インターンシップ先の会社は)面接に行ったときに、インターンシップをやってみて考えてみたらいいんじゃないというふうに言ってくださって、じゃあお願いしますということでさせていただきました。」

しかし実際に働いてみると、最初は企業規模の大きい会社に入っているいろいろな経験をつんで、そのあと留学支援会社に行った方がいいと考えるようになった。インターンシップは、就職

活動終了後も続けた。

「営業事務なんですけれども、メールを送ったりだとか、電話対応とか、そこら辺で、ふだんはできない社会知識というか、対応とかをさせていただいたかなと思います。3年の2月ですね。3年の2月から6月ぐらいまでです。

無給だったので、ちょっと頑張ったし、行ってきなと言って、2週間オーストラリアに行かせてくれて。航空券とかは出したんですけど、向こうの現地でホームステイとかさせてくれたりとか。施設見学とか、あと、保育園とかにボランティアとか、老人ホームとか行ったりして、施設見学してレポートを書くという仕事だったんですけど、それで行ってきなと言ってくださって。」

ディズニーランドのアルバイトは部活をしているときからしていたが、さらに力を入れてやり、また誘われて子供にチアリーディングを教えたりしていた。

「ほんとうにいろいろなことに挑戦したかったので、アルバイトは今しかできないとか。部活をしているときも、土日とかでバイトはしてたんですけども。ディズニーシーでお土産屋さんをやっている。その隣接するディズニーリゾートのホテルのアルバイトをして、終わってから行くような感じとかあって。年パスを家族で買っていて行くぐらい（ディズニーランドが好き）。

あとは（ディズニーランドの）バイトですね。

子供にチアを教えにいたりとか。子供に、まだ今もチアを教えていたりするので。」

2. キャリア

4月に不動産会社に就職し、しばらくは研修を受けた。同期の大半は残っており、まだ離職者は少ない。総合職として就職した。

「入って半年ぐらいは、いろんな部署に行って、仮配属という形で。あとはもう、研修とかで、ほとんど仕事という仕事はあまりしていなくて、人について行ったりとか勉強している期間なので。私は総合職なんですけれども、短大とか専門を卒業されている方は一般職、事務職で。

室内にいなきゃいけないんですよ、一般職ってずっと事務で。それじゃつまらないと思って。何かもうちょっとおもしろいことしたいなと思って。いろんな仕事を学びたいなと思ったので。いろんな部署があるので。」

最初はビルの管理に関わる仕事に配属された。土日休みという条件が良く希望したところ、希望が通った。

「ビル営業部なんですけど、そこで経理をやっていました。体育会系だから営業をやっても

らうと言われたんですけど、私は、もう日曜日とかは休みたかったし、入って3カ月、休みがないというふうに聞いてしまったので、それは無理ですと人事に言って、そうしたら考慮してくださって、そこはビルなので法人向けで日曜日は絶対にお休みだしということで、そこになって。たまたま通りました。経理の人がいなくなっちゃって、そこが今、あいてるんだけどどう、というふうに。じゃ、ちょっとやってみようかなということ。

結局は室内に座っている仕事だったんですけど。ほんとうにできませんがいいですかというふうに言って、いろいろ教えてもらったんですけど。なので、そこでエクセルとか、そういうところはすごい学べたなと思っているんですけど。1年ぐらい。」

次の配属先は、ビルの賃貸営業。

「ビルの賃貸営業ですね。外に出れる。経理とはほんとうに全然違う仕事で、しかも私、女子が1人だったんです。一般職の方はいらっしゃったんですけど。結構、おじさまが多かったというのあって、すごいかわいがってくれて、やっぱり1人だけ女子というのがあってか、別に売り上げ、売り上げというふうに言われなくて、好き放題やらせていただいたというか、すごい毎日楽しいぐらいで。」

2か月前から他部署で産休取得者が出たため、そちらに移った。総合職だが、やることは事務職である。

「総合職だけどやることは事務ということで入っています。もう6時過ぎ、7時までに帰れるという楽しさを覚えてしまったので。営業部のときは10時ぐらいまで普通に残っていて。で、もうへとへとだったの。住宅の賃貸のほうなんですけど。」

3. 人間関係

人間関係が広く、友達が多い。

「才能だと思うんですけど、人に恵まれるということで、周りの人がすごいみんないい人で、頼れて、そういういい環境にいるので、相談とかはいつでもしやすいし、何不自由なくというか、そういう人たちに助けられて生かされているような人間なので、そういうところでは全然苦勞してないです。一人で悩むことはないですね。」

多様な集団に所属している。

「高校のバスケ部の友達とかは、2週間に1回は会っていたりとか。今も。大抵、遊ぶとしたらその子たちだったりとか、あとは、旅行とかも。

(仲いいグループ)は10ぐらいあるんじゃないかな。アルバイトをしていたときの人だとか、部活とか中学とかもいるので。」

海外にも友人が多い。

「(海外の友達)はチア関係で。中国とか、お友達が行ったりして。台北なんですけど。あと、タイの友達が来たりとか。一回、向こうに私も行ったりとか、そういうのがあったりして。」

結構、旅行とか行くと現地で友達になるというのが多くて。絶対、だれかしら友達になって帰ってくるぐらいなので。そこで交流できたりするので。100人ぐらいは、それはフェイスブック上なんですけど。」

4. 将来

留学したい

仕事をやめて留学したいが、なかなかお金が貯まらない。

「(仕事をやめたいと) もう毎日思っています。入る前からやめたくて、でも、ちょっとやってみようと思って、1週間やって、あっ、続けられたと思って、1カ月できたと思って、そういう感じですね、毎日。

私、お金がたまり次第海外に留学しようと思っていて、でも、たまらなくて。実際旅行とかすごい好きで、もう暇さえあれば、私、旅行に行っているんですよ。だから、それでなくなっちゃって。行かなければたまるんですけど。今年からため始めて、やっとな。それで、もう絶対今年じゅうには、ほんとうは1年続けただけでも、自分、えらいかなと思ったんですけど、ここまで来たら頑張って3年続けようかなと思って、それで、お金をためて行けたらいいなって。

最近、ちょっとフランスに行ってきて、すごい魅了されてしまって、ヨーロッパとかも、英語ができるのはもう当たり前の世界になっているので、スキルをつけるためにも、ちょっと違う言語プラス英語とかできたら、もうちょっと、帰ってきたときの就職に役立つとか、スキルになるかなと思って考えてはいるんですけど。

(海外は) 年に四、五回は行っている。グアムとかは、もうすごい気軽に、4日間とかで行けちゃったりするので行くんですけど、この前、ゴールデンウィークはパリとか、あと、香港とか、ベトナムとか、韓国とか、ボルネオ島とか、結構島とか行ったりするので、島系が多いかもしれない。ランカウイ島とか。海でのスポーツは個人的にしているんですけど、それとは別に、ちょっと現実から離れたようなところに。高校のときからサーフィンをしていて。」

常に全力投球

「1年間ぐらい行けたらいいなと。語学留学で。高校からNOVAには通っていて。ちょっとしたすきを見つけてスケジュールを組むのが、自分でもうまいと思うんですけど。だから、これだけやっていて、親も友達も、今、死んでも悔いはないよねみたいな感じで言うぐらい、私、人より倍生きてるんじゃないかなというぐらい。」

これまでの人生を振り返って、順調ではなかったかもしれないが、周りには全体としてうまくいっていると思われているように感じる。

「どうだったのかな。進路選択は、自分がフリーターになったりとかしなかったというところ

ろ、ちゃんと就職したし、大学もちゃんと行けたというか、行かせてもらったというので、自分の進路選択、一番最初に思ったところには行けなかったというところですけど、でも、結果的にはよかったですし、行けたという、進んでいることで、周りもいいと思ってもらっているのではないかなと。」

5. 家族と結婚

妹と両親で住んでおり、近くに祖父母が住んでいる。祖父は書道の先生をしていたので、小さいころから習字を習っていた。

今はパートナーはいないが、結婚するなら海外の人がいい。

「結婚するのは外国の方というふうに、小学校から言っていて、お母さんも、ハーフじゃないと孫見ないからと言っているぐらいなので。ちょっと留学先でつかまえてこようという…。これだけ忙しいとというか、自分の好きなことをやっていると、面倒くさくなっちゃって。落ち着かないといけないところではありますけれども。来年とか、1年間留学できたとして、29とか30までにはというふうに思っています。」

将来はできれば専業主婦になりたい。

「現実的な話で言うと、結婚した方の年収にはよると思うんですが。もし働かなくていいようでしたら、パートとかそれぐらいで。あとは、共働きでがつつり働いて稼ぐというふうには考えていないですね。せざるを得なかったらもちろん働くんですけど、なるべくそれは避けたいというか、専業主婦じゃないですけど、頑張りますのでというところはありますね。」

Ｌさん

29歳女性。高校でドイツ語を始め、大学もドイツ語専攻。在学中に留学し、ドイツの大学生と同等レベルの語学力を証明する資格を取る。就職はドイツ語を生かしたかったがかなわず、地元の広告代理店で営業。4年半務めたのち結婚退職した。以降は派遣社員やパートで働き、現在3社目。

1. 学校時代について

6年生までは都内在住。中学からA県に。公立中学で、茶道部に入る。同学年で5,6人が所属していた。

「(入部のきっかけは)文化部で唯一おかしが食べられる部だったので(笑)。一緒に入った子が何か茶道を習うことが日本の文化だとか何とか言っていたんで、そのときは私もあまり日本の文化とかも考えていなかったんですけど」

高校でドイツ語を学ぶ

高校は私立女子高。県立高校も受けたがそこは受からなかった。

「本当に自分が何をしたいかわからないまま育っていた子だったので、その学校自体がうちの父が勤めている学校だったので。来ればみたいな感じだったのですね。…(中略)…ちゃんと試験も受けて行きましたけど。」

普通科や体育コースなどがある学校だったが、外国語コースでドイツ語を専攻する。

「その学校は英語とドイツ語とフランス語が勉強できたので、私はドイツ語、英語がだめだから、じゃあドイツ語を勉強してみようかなという形でドイツ語をやりました。…(中略)…その学校がすごくそういう外国語に力を入れているのと、やはり多少、父の影響があって、父がすごくドイツ人と交流があるような、家に来ていたことがあって、何かそのドイツ人の人にドイツ語で言えたらいいなと思って。」

「(同じ中学出身の人は)1人もいないですね。何か私はずっと中学校のときに転校したのもあって、卒業してからまた再会するということは一度もないのです。同じクラスだった子とか、同じ学校だった子とか全然なくて、逆に私のことを知らなくておもしろい。

(友達ができなかつたらとか心配は?) 思わなかったですね。おかげさまで、うちの母親もあなたはすぐ友達ができるからいいわねという形で。」

ドイツ語の授業は毎日2コマ、英語は週2コマ。ドイツ語コースの生徒は2人しかいなかったんで、ドイツ人の先生に生徒2人の授業だった。

「だから、覚えることもできたし、本当にその先生はあまり日本語を使ってくれなかったんで、もう泣きながら授業をしたような思いも。」

高校2年の秋には3カ月間、ドイツに短期留学もした。

「何年生のクラスに入ったのかな。高校よりも下のクラスに行ったんですけれども、もうや

っていることがすごくて、英語の授業とかも英語で始まって英語で終わるから、はあ、全然わからないと。ドイツ語の授業は一応、何かドイツ語で説明してくれるのです。もうそのときはドイツ語のほうがわかっていたんで、英語は本当にネイティブな感じで、先生が入ってくるなりに、もう本当にすらすら英語を話しながら、一切ドイツ語、母国語は口にしないで終わっていく。日本と違うなど。」

大学もドイツ語学科へ

大学はドイツ語が学べる大学を選んで数多く受け、2つ合格したうちのB大学ドイツ語学科に進学。3クラス70人程度。ドイツ語既習コースはなかったので、2、3年生の授業に参加した。

「クラスの子と仲よくなりたかったので、そこにも参加して、で、またほかの上級、上のクラスにも参加してというのをやっていたね。だから、教科書代が2倍かかった。…(中略)…1年生のときに(授業は)目いっぱい受けました。もう朝から最後の授業まで休みなく。」

大学でもドイツに留学する。2年の夏から1年間。ドイツの大学生と同じくらいの語学力をつけ資格を取る。

また、大学では、アジアのC国の少数民族を支援するサークルに入り、C国語の授業も聴講した。

「(きっかけは)何か授業を担当した先生が、D国人の先生だったのです。亡命してC国人になって、で、今、日本でC国語を教えているという先生だったんで、その先生がいろいろ、C国ってこんな国でねと。同じアジアなんだけど、全然日本と違うんだよという話をして、じゃあ見に行こうって思っ行って、それで現状が大変というのを実際に見て、何か力になりたいなと思ったんでそういうサークルに入ったというのが経緯ですね。」

C国に行ったのは1年生の夏休み。

「毎年夏に先生は行っているらしいのですが、生徒を連れて。で、行ってきて、何か私みたいに感極まった人たちがサークルに来て、何かしたいと思う人たちが集まるようなサークルでした。」

「(アルバイトは)土日にちょこっとできるイベント的なバイトだけやって、うちの父が学生の本業は勉強だろうというのをすごく言う父だったもので、なかなかアルバイトができなかった。」

ドイツ語の資格を取ったことで、4年生で必要な単位は認定されていたが、ドイツ人の先生と一緒にいたいなと思って、最後までドイツ語の授業には出ていた。

「やっぱりわかってくるとどんどん楽しくなって、あと先生とも気軽にコミュニケーションをとれるぐらい年齢の近い先生だったので、今、こういう曲がはやっていてねとかと、授業でいきなりその曲を流したりとかしていておもしろかったですね。」

就職活動

ドイツ留学から戻ると、3年生の秋。学校で就職ガイダンスがあり、リクナビに登録する。
50社ぐらいエントリーして半分ぐらいは面接までいった。

「全然私はわかっていなかったの、とりあえず企業全部にエントリーしようと。そうしたら、逆にいっぱいメールが来ちゃって、よくわからなくなっちゃった。…(中略)…そこからまあ気になるころ、やっぱりドイツ系とか選んでやっていたんですけど、まあ、結構企業によっては学校を見て選ぶところがあって。…(中略)…全然決まらなくて、そもそも募集もしていないようなところにもドイツの製品を扱っているということで電話して、募集ないですかとかと聞いたりとかしたんですけど、まあ、募集は現在行っていませんという形で断られたりとかしていました。」

大学の就職課にはよく相談に乗ってもらった。友達もかなり相談していたという。

「こういうことがあってとか報告したりとか相談したりとか、こういう会社ってやめたほうがいいですかねとか、いろいろ。じゃあ、四季報を見なよと、結局自分で調べたり。」

年が明けたぐらいから、ドイツ語にこだわってはいはダメかなと思いはじめた。

「切り換えたのは、やっぱり仕事になるとつらいかもしれないし、大学のときはすごくフランクな日常会話的なことをやったけど、それこそ専門のビジネスドイツ語は知らないから、それはそれで苦勞するんじゃないかもしれないとか、いろいろ言いわけを考えて、じゃあ改めて自分が何が好きかなというのを考えて、まあ、広告代理店とかそういうちょっとミーハーですけども、華やかなことをしたいなと思って」

就職課で、新聞の求人広告のほうがすぐに人を必要としているから、そちらに問い合わせたほうがいいと聞いて、地元紙の求人広告をみて応募。新卒ではなく中途募集の求人だったが、採用された。

「そうですね。何か私も本当にこの会社でいいのかと思ったぐらいな決まり方だったんですけど、面接して、もうその日に、じゃあ、次はいつから来られるみたいな形で言われて。」

2. キャリア

その広告代理店は不動産の広告を扱う企業だったが、新規に女性向けのフリーペーパーを扱うことになったための求人だった。今まで中途しかとったことのない会社で、研修は銀行が開いているビジネスマナー研修に半日行っただけ。

「教えてくださる先輩はいましたけど、すごいぶっきらぼうに、ここはこうしてよと。…(中略)…(営業の電話の仕方とかも)周りの人がしている雰囲気をつかんで、私が勝手に電話しました。そこで自分で一応、表をつくって、この会社は全然だめだとか、この会社はまた電話してみようとか、ここは担当者不在だったからまた電話するとかつくって電話をとって、一応、それで2社から広告を取ることができました。いっぱい電話した中で。(手探りで広告を取ったことは)褒められましたね、やっぱり。」

その後しばらくして社長が交代し、それを機にLさんが担当していた媒体から会社は撤退する。「せっかく軌道に乗りかかっていた企業さんもあったんですけど、ごめんなさいの電話を入れて。」Lさんも不動産の広告を担当するようになった。

その会社に4年と11カ月。2009年2月、違う営業所にいる会社の先輩と結婚して、退社する。結婚相手の希望もあり専業主婦になる。「うちの母親も専業主婦をしていたので、まあ結婚したら専業主婦になろうとは勝手に思っていましたけど。」

しかし、子供もいないので暇だからと、市役所が募集していた定額給付金の事務をおこなうアルバイト(派遣会社に登録)に就く。もともと数か月の短期雇用であった。

その後、ハローワークで失業給付を受けながら、結婚後住んでいる地域で、仕事を探す。「やっぱり就職先を地元にしてほしいというのが主人の希望だったんで、その希望にこたえるべく一生懸命地元で探しました」

2010年2月に、ハローワークの紹介で就いたのがコンサルティング業務の個人事務所の秘書の仕事。パートだった。社長と秘書4、5人だけの会社で、秘書はそれぞれ、社長の作る情報誌の編集や名刺管理などの仕事を担当する。Lさんは、セミナーの準備が担当だった。

「小さいセミナーなんですけど、個人の人と連絡があったら連絡をしなきゃいけないので。」どうしても残業が発生するが、残業手当は出なかった。「向こうの言い方は、時間内で終わらせないおまえが悪いんだと。」

「結構暴言を吐く人だったので。社長さんと奥さんと切り盛りしている会社だったので、奥さんのほうに、社長のこういうところが嫌です。直してほしいですというのはいろいろ言ったんですけど…」

11月には辞めた。しかし、翌12月には次の会社が決まる。市役所のアルバイトの時に登録した派遣会社の求人を気軽に見ていたら、以前の担当者から連絡が入ったという。不動産会社の事務の仕事を紹介された。今はその会社の人事部門で採用を担当している。

「今は新卒の対応をしたりとか、中途の人の対応したりとか、すごく充実した毎日なんです。(収入は?) (営業職の時の)半分ぐらいですよ。やっぱりやりがいなんです。まあ、楽しいと時間がたつのもあつと言う間なんで、去年の12月に始めたんですけど、もう本当にあつと言う間。…(中略)…セミナーをするための準備、荷物を会場に送ったりとか、セミナー資料を用意したりとか、あとはデータ入力とか、それこそリクナビ、マイナビは、今、私が使って学生さんとやりとりをしているところなので。」

「(今は)私がいないと仕事が回らないとみんなに言われています。インターネットとかも私、結構できるほうなので、インターネットの修正とかも行うんですけど…(中略)…40か50ぐらいの上司に教えたんですけど、全然わからないと言われてしまって、なので結局、私がやるしかなくて。」

3. 交友関係

仲のいい友人といえど 50 人ぐらいいるが、特に絞れば 15 人ぐらい。頻りに会うのは大学の時の友達。中学の時の友達は、皆地元にはいないので、頻りに会うわけではない。

「(フェイスブックは)、ドイツ人の友達が教えてくれたんで登録しただけなんですけど、あまり熱心にやっていないです。名前を登録して、私はだれだみたいな書いただけで、写真を早くアップしてほしいというのをこの間言われたけれども、めんどうだから、また今度と。

(笑) …(中略)… ああ、でも日本の友達も見ついたら声をかけたりとか、もしくは声をかけられて。いや、久しぶりとか、私も一人見つけてメールを打ったら、いや、元気にしてるって。僕はこの間、日本人の人と結婚したよとか何か、そういうのが書いてあって。」

外国人の友達は 10 人ぐらい。

4. 生まれ育った家族

兄弟は 4 人。兄と妹、弟がいて、2 歳づつ離れている。父親は高校教師で母は専業主婦。父親は最初は家庭教師で不安定な状況だったが、埼玉県に引っ越したころ私立高校の教師となって経済的に安定した。今は、子供たちは皆家を出ている。

父親は仕事で海外に行くが、家族で海外旅行をしたことはない。ほかの兄弟も語学に興味はない。妹がイギリスに 3 か月留学したことがある程度。

「(海外に行くことにご両親は心配されなかった?) いえ、全然。やりたいことをやりなさいと。ただ、お金は自分で稼ぎなさいと、その費用は。」

5. 結婚

「(今は、家庭と仕事を両立したいということですか?) そうですね。何かそのほうが自分らしさを保てるというか、生きやすい。」

「(語学を生かすチャンスがあつて、でも、それが家庭のほうの生活に何か引っかかるとしたら?) 家庭はやっぱり優先にしますね。まあ、家庭を壊してまで働くつもりはないですね。」

「うちの家庭が専業主婦だったのと、主人の実家もまあ専業主婦だったらしいのです。ただ、子供がもういなくなったので、お母さんはスーパーで働いているとは聞いたんですけど。だから、本当に私もうちの主人も全然、母親は家にいるものだみたいな感じがあつて。」

「(お子さんが生まれたとして、その先また働く?) そんなまだ漠然とですけど、短時間正社員とかあつたら、そういう制度を利用して家庭と仕事を両立したいな思うんですけど。」

6. その他

「(扶養家族の範囲内で働くのではなく、保険も自分が加入者になっていますね?) そうですね。計算したら、別にそんな 103 万とか 130 万でやるよりかはがつつり稼いだほうが結局は、税金を払うけど手元には残るかなと…。」

Mさん

28歳男性。既婚。中部地方出身。大学進学を機に首都圏に出てくる。大学卒業後は首都圏で青果関係の企業に就職し、現在に至る。小学3年から始めたバドミントンでは、かつて全国大会に出場するほどだった。

1. 学生時代

バドミントンに打ち込んだ学生時代

公立の小中学校に通う。近所のお兄ちゃんがやっていたのを見て、小学3年生からバドミントンを始める。小学校にあったバドミンントンのクラブには、地域の大人が指導にきていた。中学校の部活の練習は、生徒たち主体で行われた。Mさんの上の学年はそれほど強くなかったが、Mさんの学年が強く、全国大会で上位になったこともある。進学したバドミントン強豪の高校は、中学よりも練習や上下関係が厳しかった。

「練習も、中学校のときは自分の好き勝手に、基本練習しないですし、自分で考えてやればよかったんですけども、やっぱり高校になると専門の先生がいて、朝練とか夜練とか、そういう基本練習がすごく増えてきたんで、心身ともにきつかったですね、最初のうちは。」

そうしたなかで、自由な時間をもっていたまわりの生徒をうらやましく思ったこともある。「そういう【部活に入っていない生徒が放課後に自由にしている】のは、やっぱりうらやましかったですね。朝とかも朝練やってたんで、校舎の前とかをダッシュとかしてるんですよ。こっちがづらいのに友達は悠々と来ているみたいなの、そういうのを見ると、やっぱり、いいなどは思わないんですけど、ちょっとうらやましいなというか、そういう生活もありだなというのはいましたね。」

バドミントン推薦で入学した大学では、部活動で週5日の練習をしつつ、飲食系などのアルバイトをした。

2. これまでのキャリアや働き方について

就職の際には、いずれ実家の家業を継ぐこと（4.を参照）を前提としていたこともあり、選考を受けたのは、現在の職場ともう一つの企業のみであった。「バドミントンで就職しようということは、全くなかったです。」と言うように、バドミンントンの活動は趣味という形に落ち着いた。

入社して最初に配属されたのは、デパート内の店舗での販売の仕事だった。新社員向けの一般的な研修はあったが、商品についての専門的な知識やラッピング等の技術については、独学およびOJTで習得する必要があった。

「……あれって結構、技術要るんですよ、かごに盛ったりとか箱にやったりとか。それもやっぱり、最初は全然わからないので。リンゴ1個売るだけなら、全然簡単なんですけど、これをギフトングしてくれとか、そういうのは、やっぱりちゃんとできるのに半年以上はか

かりましたね。」

配属1年半後に、副長として現在勤務している店舗に異動。以前の店舗に比べ規模は小さい反面、1人で対処する必要性や責任の重さは増した。そうした状況下で、現在必要だと考えていることは、店舗経営面でのスキルである。

「今、私が一番考えているのは、いかに利益を取れるか。うちの売場は独立店舗で、売り上げだけ取ればいいというわけではなく、売り上げも、あと粗利、利益率、あとは人件費とかそういう経費を全部見て、最終的に利益を出しましょうという会社のスタイルなので、売り上げが全然取れないとわかったら、そのときは人件費を抑えるか、それとも利益を取っていくかとか、そういう、いろいろ、月によって戦いが……。」

このような経営面について指導をしてくれた課長を、Mさんは尊敬している。2009年夏頃から月1回のミーティングの時間を設けるようになり、1対1で課長からアドバイスももらっている。

「今まで、ほんとうに上の方から教えてもらおうということがなかったんです、経営に対しては。経営に対してはほとんどなかったんですね。うちの店長も、やっぱりそんなにしゃべる人じゃないというか、それで、このことはこういうふうになればこうなるとか、そういう、いろいろなことを教えていただいて、そういうので、全然、自分の考えになかったことを新たに取り入れることができたので。すごいなというのが一番最初に、で、自分もやってみよう。自分なりの考えも入れて行動すると結果が出るという、そういう、自分の中でいい循環ができるようになりまして。」

（でも、1対1って、ちょっと気詰まりですよ？）「気詰まりといいますか、何かやっていないと思われるのが嫌だったんです、仕事で。でも、確かにいろいろお話すると、やっていないんじゃないなくて、何をすればいいかわからないという自分がやっぱりいたんですよ。自分の今ある能力の中ではやっているんですけども、それ以外のことは考えもつかない。そのことを、例えば、自分が課長にいろいろ言ったら、全部返してくれる。何か言ったら、それはそういうふうなやり方もあるけど、こういうのもあるよって、そういういろいろなことを言っていて、すごい細かいんですけど、内容が。細かいんですけど、意外と、自分、A型でして、意外と、そういう細かいことが好きなんです、数値管理というか。そこがちょっとマッチしたというのもあると思うんですけど。」

店舗経営の難しさに頭を悩ませる立場になり、年配世代の仕事に対する意識に、疑問をもっている。

「バブル時代とかあるじゃないですか、今はこんな、結構タイトな時代じゃないですか。昔の人が今、自分たちの上司、40代、50代じゃないですか。その方たちが、昔は、働いてないということはないんですけど、やっぱり、人もいっぱいいましたし…。その分売り上げもあると思うんですけど。そのときの20代後半ぐらいと、今の、私たちの、結構タイトにやったり、人件費を削れとか、でも売り上げをつくれって。……。昔の人ってあんまりしな

くても、下がいっぱいいるんで、下が全部つぶしていってくれるんですね、仕事を。そういうイメージを持っている人が、今の現状で上に立つと、下にいると結構きついですよね。仕事量も多いのに人件費も使えない、管理もしないといけない。というと、やっぱり、体もきついですし、精神的にもきついですし、そういうのが結構、百貨店の同じぐらいの年代の人とかとしゃべると、同じような意見を持っているんですよ。」

3. 交友関係について

Mさんにとって、以下の3つの交友関係が重要となっている。

中学のときにダブルスを組んだ友人の存在は、現在に至るまで大きい。

「ダブルスを組んで、結局、高校が違うとなったじゃないですか。それで、その子はその子なりに頑張ってる。その子…、進学校なので、部活に全然力を入れないんです。こちらは部活にしか力を入れない高校なので、負けられないっていうのがあったり、結構、そのころの存在というのは大きかったですね。」

東京近辺に住む同郷の仲間とのつながりもあり、定期的集まる。

「今でも月1回ぐらいは、県人会というか、〇〇から東京に来ていて、同じ中学校、同じ学年の子が十何人いるんですよ、東京近辺に。その子とは、多いと月一ぐらいは飲みに行くんですよ。大学のころからずっと。」

同年代でチームを作って、現在も趣味でバドミントンをしている。

「チームをつくって。それも同年代だけのチームで、結構、同年代のチームが強いんですよ、同年代がですね。オリンピックに出た人なんかもいるんですけど。」

(それは誰が声かけたんですか?)「一番最初ですか?一番最初は、自分と、もう一人友達と…、友達3人ですね、チームをつくらうということになりました。」

「……全員バドミントンで同じ学年で、全国各地にいるんですけど、今、関東にいる人ですね、基本的に。」

「……どこかの試合とかで会おうと、お互い知っているんで、ゼロからじゃないので、試合が終わった後に飲みにいこうって言って、じゃあチームつくろうよみたいな。だれかまた人が人を呼ぶじゃないですけど、ばーっと広まって。」

「……職種も全然違いますし。ただ、大体みんな土日というか、日曜日が休みなので、そうになると、[不定休なので、]ちょっと自分が行けないときのほうが多いんですね。」

バドミントンで実力上位だったことが集まるきっかけになったというよりも、何か一つをもとに集まって、かつては話さなかった人どうしも話すようになる、そうした関係形成の部分が、Mさんにとっては重要とされる。

(やっぱり、強い人同士、相通じるものがありますか?)「強い人同士って、あんまりないですよ。」

「……強い、弱いよりは、バドミントンということでつながっているみたいな。福井県人も

そうですけど、何か一個つながる場所があると、別に、昔しゃべらなかつた人とかでもあんまり関係なく普通にしゃべったり、飲みにいったり。まあ、飲みが中心なんです。自分、飲み会大好きなので。」

また、現在勤めている店舗が入っている百貨店内にも、交友関係がある。

「……。やっぱり人件費があまり使えないので、例えば店長と自分がいましたら、2人とも朝から晩までいる必要がないんです。どっちかがいたらどっちかが休みとか、ばらばらにしたり、朝だったり夜だったりということで、店舗内で飲みに行くことはほとんどないですね。」

「……。まあ、どっちかが待っていればいいんですけど、そこまでという。なので、でも、多いのは、百貨店内の人たちと飲むのは多いですね。例えば、今、…目の前に△△があるんですけど、△△の店長の家族とうちの家族で飲みに行くとか。結局、百貨店の中でのつながりというのは結構ありますね。」

「……。多分、そっちのほうがしゃべる、いろいろな事情というか、全く業種が違う方とも、しゃべるとおもしろいですし。」

(百貨店の中でつき合いがあるというのは、これは一般的にそうなんですか?) 「いや、多分普通の人あんまりないんじゃないですか。……。階が違って、例えば、喫煙所とかであいさつすると、じゃあ飲みにいこうかみたいな感じで、全然違う、婦人服の人とかのマネージャーとか、そういう方とかと結構飲み。」

(年上の方で?) 「全然年上ですね…。」

4. 家族について (生まれ育った家庭について)

Mさんは長男で、妹が2人いる。実家は代々青果販売業を営んでおり、Mさんは、家業を継ぐことを、“そういうもの” だとして肯定している。

「継ぐかどうか、今はわからないんですけど、一応継ぐというあれはあったんで、将来考えるということは、あまり普通の人たちよりなかつたんですよ。将来何になりたいとか。それで、好きなことをやればいいという形で、親が何かを言うということはほとんどなかつたです。」

(フルーツ屋ではなくて違うことやりたいとかいう気持ちは?) 「それは思わなかつたですね。」 (そういうものだと?) 「……多分、宿命じゃないんですけど、でも、やっぱりおやじとかはそういうのが嫌で、絶対にいろいろ考えないということが嫌だったらしくて、いろいろ考えて、継がなくていいよということは言うんですけど、そうも思わないで。」

(ご両親はどうおっしゃっているんですか?) 「両親は、ほんとうにおやじは、今でもどっちでもいい。で、やっぱり母ちゃんは継いでほしいということですね。」

5. パートナーや結婚について

大学2年のときからお付き合いをしていた、バドミントン部の後輩 (その姉も同じ部活に

所属)と2008年に結婚。全国大会に出場していたこともあり、高校時代から互いの存在は知っていた。現在、現在3歳になる娘がいる。パートナーは現在専業主婦で、医療事務の資格を取るために勉強中。働けたら働くという形態を予定していたが、保育園の空きがなく現状に至る。

6. 将来についての考え

将来的には実家を継ぎたいと考えているが、今後数年の方向性については、娘が小学校に進む段階で地元に戻るか、現在の仕事を続けて首都圏に残るか、検討中である。以前はなるべく早い時期に実家を継ぐことも考えていたが、そのように検討するに至ったのには、前述した職場の上司(ミーティングを行う課長)の存在が大きい。

7. 働くことに関する考え方への震災による影響など

考え方で大きな変化はないが、計画停電による冷蔵機器利用の制限、売り上げの変化、店舗が入っている百貨店が短縮営業をしたことによる勤務体制の変化、残業代分の収入減、など実際的な影響は少なからずあった。

Nさん

27歳女性。北陸地方に育つ。北陸地方の工学部を卒業後、関東の大学院に進学し就職するが、研修中に体調を崩して退職。まもなく結婚し、派遣社員として働いている。現在はネットワークビジネスに関心を持つ。

1. 学校時代

小学校の時は、ピアノやお習字、トランポリンや英語など習い事を本人の希望で多くしていた。中学校に入って吹奏楽部に入り、日曜日以外は毎日練習をした。担当はクラリネット。勉強も頑張り、理系科目が得意だった。

高校選択時

「進路選択は、やっぱり自分が行けるレベルで、なるべく上のところがいいなというのと、あと、お父さんの影響がやっぱり強くて、お父さんと同じ高校へ行けたらなというので選びました。」

高校時代

「高校生活は、最初は勉強を頑張ったんですけど、途中から何かいろいろ、遊びとかも楽しくなったのと、吹奏楽に入ったんですけど、そこはそんなに強いところじゃなかったんですね。周りに影響されちゃって、ほんとうはバイトしなきゃだめだったんですけど、バイトしたりとかしていました。高2のときだけですね。きっかけは夏休みくらいだったかもしれないですね。それで3月までやったような気がします。マクドナルドです。高校生ができるバイトがそれぐらいでしたので。いろいろ勉強にはなりましたね。要領が悪いので、全然追いつけていなかったんですけど、でもマクドナルドで、何か笑顔が大事とかそういうのとか、接客はちょっと学べたかなと思いますね。

（アルバイトをしたのは）お小遣い。服を買いたいとか、自分もちょっと余裕があったらいいなというので。」

大学進学時

当初は薬学部を考えていたが国公立であることを優先し、同じ北陸地方の国立大学工学部電気科へ進学した。第一希望の大学ではなかったのが編入なども考えたが、次第に大学になじんでいった。

「大学は絶対に行こうと思ってて、最初、高校1年生ぐらいのときは薬学部とかいいなと思っていました。やっぱりこれだけバイトとか、遊んだりとかしていたら、勉強がちゃんとできていなくて、国公立で最初考えていたので、そこをねらえるレベルはなくなっちゃって。私大の薬学部は一応受けて受かったんですけど、選ぶときは国公立の工学部を選びました。」

(抵抗は)最初はなかったですね。物理も化学も、結構どっちも好きだったので。両親とか家族は、やっぱり近くに住いてほしいと言ったんですけど、でも地元の大学をねらえない時点で、もう東京もちょっと考えようと思って、それで何を言われても行こうかなと思っていました。

大学に入ったときに、やっぱり絶対に行きたいっていう大学じゃなくて、みんなやっぱり上を目指して浪人している人とか見ていたら……。何だろうみたいな感じになってきて、私もいつかはこの大学じゃなくて、もっと違うところを目指したいなというのがあって、最初は編入を考えていたんです。3年受験で〇〇大学とか行きたいなって。ですけど、そのときに一度部活はやめようかなと考えていました。(大学)1年のとき。あんまり頑張らないようにしようかなって思っていたんですけど、部活のほうで人がそんなに多くなかったので、やらなきゃいけないなくなっちゃって、そうしたらそっちにのめり込んでしまいましたね。」

大学時代

大学は地元を離れてひとり暮らしを満喫し、オーケストラと学業の両立に頑張った。「(初めてのひとり暮らしは?)よかったです。全然ホームシックとかならなくて、すごく楽しくって。やっぱり自由なところですね。小さいときはおばあちゃんが厳しくて。門限があって、いつも破って怒られていました。

(オーケストラは)大変でしたね。やっぱり単位をとるのが、オーケストラをやっていると、そっちも結構縛られちゃうんで。みんなやっぱり留年したり。留年は絶対にしたくなかったの。」

大学院への進学

高校の時から大学院進学は決めていた。関東の大学院(工学部ではない、理系の総合学部)に進学したのは、当時つきあっていた相手が東京に就職したことや、もう少しレベルが上の大学に行きたかったことがあった。

「院は絶対に行こうって、高校のときから決めていたんですよ。それを高校のときに言ったつもりだったんですけど、お父さんがそれをまだわかっていなくて、4年のときに言ったら、ちょっと自分の計画とは違うっていう感じで言われましたね。お母さんは、高校のときから言ってたじゃないって言うていたんですけど。〇〇(大学のある場所)から抜け出したかった。

(関東の大学院に進学したのは)知り合いとかはいなかったんですけど、その時、つき合っていた人が、実家が東北で、勤務先が東京になったので、どっちかにいるっていう感じになって、そっちに近いどこかの大学院に行こうかなって思って、レベルがもうちょっと上のところに行けたら……。

(入学後)大学が違うので、何か雰囲気も違いましたし、いろんなことを勉強できて、ほ

かの学科の先生のちょっと詳しいお話を聞けたりとか、そういうのも勉強になりましたし、すごい今までなかったものを取り入れられた感じはしました。

最初は確かに孤独感はありましたね。なんですけど、研究室で飲み会とかあって、あるとき、お酒の席で結構、私も舞い上がっちゃって、今度旅行に行こうとかいって仲よくなっていきました。」

大学院卒業時

就職先に悩んだが、人事の人がいい人だったので決定した。

「そのときも、これっていうやりたいものがちょっと見つからなくて、そう考えたときに、何となくやっぱり薬学部の、それがまた思い出されてきて、医療系とか、あとMRとか、やっぱり電気系もあったんで、電気系もちょっと見てみようっていうのと、あと情報系のところを回っていましたね。(大学の) 掲示板とか見たら、いっぱい企業が書いてあったりしましたね。イベントに来ていたりとか、私はちょっと行ったことなかったんですけど。ちょっとちらちら見ていたんですけど、でも何か自分に引っかかるところがあんまりなくて……。OBの方とかもすごくいましたね。それで、そこの方にお世話になったこともあったんですけど。

(就職した会社は) 人事の方がすごくいい方だったので、うまかったですね、リクルートするのが。会社のやっていることが、環境のこともちゃんとやっている会社だなというのと、でもやっぱり一番大きかったのは、その人事の方の熱意がすごくて。すごい迷いました。もう一つ、OBの方の、そっちのほうでも推薦みたいな感じで入れるところもあって、そこと迷ったんですけど、やっぱり人で選びましたね。」

2. キャリア

初めの1カ月が新人研修、約半年間技術研修があった。大学や大学院の専攻とは全く違いう大変だった。体調を壊してしまい休職したが、復帰の際にはうつになっており、もうだめだと感じて自分から退職した。

初めての研修

「1カ月だけは本社とかだったんですけど、5月ぐらいから技術的な研修がありましたね。最初の研修は、ほんとうに会社の概要的な感じの研修で、5月ぐらいからは技術的な研修。5月から9月ぐらいまでやっていたような気がしました。すごく大変でした。ハードでした、毎日が。宿題とか、あと毎日テストみたいなのがあったので、それで何点以上とらなきゃ……。 (大学や大学院でやった内容との重なりは) 全然ないですね。

〇〇の研究所を目指してやっていたんですよ、資格を取るために研修を。そこで一度〇〇の研究所をみんな受けさせられて、落ちたので、ほかのところにみたいな感じですかね。

若い人を研修させて、資格を取らせて、その人をほかのところで働かせるみたいな……。派遣じゃないんですけど、そういうところだったんです。

私は、〇〇の研究所の面接の時期に体を壊しちゃって、それだけ大変だったので、ストレスもあって、それで受けたんですけど、やっぱり落ちちゃって、どうしようかなって言っていたときに、ほかの人はもっと上の資格を取るためにまだまだやっついこうみたいな話だったんですけど、私はもういいですって言って、だったらほかの〇〇の子会社に出向しませんかという話が来て、環境も変わるので、じゃ、行ってみますと行って行くことにしました。1月にまた体を壊しちゃったんですよ。このときは、もう精神的にもちょっとだめになっていて、で、休職にしました。

そこからはずっと結構休んでいたんですけど、一応5月までは会社に在籍してて、5月で復帰しようと思って、新しい部署も紹介されていたんですけど、もうそのときはほんとうにうつになっていて、電話もとれない状況だったので、私がもうだめだと思って、で、やめました。きつかったのもあるんですけど、でも自分の考え方の問題だったような気がしますね。結構、こうじゃなきゃだめだというのが自分の中にいっぱいあったので、そういうのが原因だと思いますね。」

退職後は実家に戻り、収入だけは得ようと思ってパン屋さんで3カ月ほどアルバイトし、結婚が決まったのでアルバイトはやめた。結婚のきっかけになったのは、靈感のある親戚の言葉だった。

「今までやってみたかったけど、できなかったことをちょっとやってみようと思って、パン屋さんのバイトとか……。小さいときの夢だった。6月から8月ぐらいしかやっていなかったですね。9月の時点で夫と結婚することを決めて、そのときにすごく自分が太ってて、結婚式までに何とかしなきゃいけないと思って、ちょっとダイエットとかしていました。そのときもちょっと精神的にまだちゃんとした状態じゃなかったんで、それだけやっていたら何もできなくて。水泳というか、プールに行ってウォーキングとか。

私の親戚でちょっと靈感のある方が、今、この人と結婚するタイミングだよと言ってきて、実はそのとき、その夫とは別れようと思っていたときだったので、別れるという話をしたら、夫がもっと頑張ってきたので、じゃ、それならみたいな、そういう感じでしたね。」

スピリチュアルに関心

親戚に靈感の強い人がおり、スピリチュアルに関心がある。

「やっぱりスピリチュアル的なことに興味があるので、そういうこととか……。やっぱり江原さんとか。すごい共感する部分があるので。やっぱりテレビですごい人気があったじゃないですか。「オーラの泉」、あれが夜、やっているのを見てて、親戚でもやっぱり靈感の強い人がいて……。なので、すぐすーっと入ってきたんですね。」

その人は、その靈感で何かをやっているというわけじゃなくて、小さいときから見えていたみたいで、その方以外の親戚の方でもすごい靈感の方がいまして、その方も結構みんなが集まって、何かお参りとかもしていましたね。ネットワークビジネスで知り合った方とかも結構、そういう人に会ったというので……。そういう周りの方で、占いというか、靈感のある方にお話を聞くという人もちらほらいたりします。

社会復帰の第一歩

退職した後に初めて派遣会社の紹介で本格的なアルバイトをした。勇気がいったが、何とか乗り切ることができた。仕事を紹介してもらう際には、特に病気のことは話していない。「税務署の確定申告の派遣のバイトみたいな感じで、3月だけ。最初はすごく毎日どきどきしながら行っていたんですけど、でも環境がよくて、一緒に働いていた人が結構フレンドリーにしてくれたので。結構打ち込んでやる仕事だったので、そんなに何も気にせずみたいな……。」

6月からは本格的に働こうと思い、別な派遣会社で仕事を紹介してもらう。今の仕事はあっているが、少し前まではやめようと思っていた。

「6月から今の派遣の会社で、今は医療品とか医療機器とかの卸の倉庫の事務です。でも、最初は倉庫で、倉庫の中を歩くほうでした。倉庫のもののピッキング作業ですね。(2011年)1月から事務をやっているんです。最初、倉庫の仕事も、ピッキングとか全然やったことなくて心配だったんですけど、結構自分に向いてるなと思って。物を箱に詰めていくんですよ。それが、私、結構昔からきちんと順番にそろえるとか好きで……。そういうのが合っていると思いましたね。ちょっと前までは、ほんとうはやめようと思ってて、時給が上がらないからとか、あと、ほんとうにお手伝い程度の事務だったので、最初は。なので、このまま続けていても自分の成長にならないかなみたいなので、やめようかなとは思っていたんですけど、私の前にやめちゃう子が出てきて、その子がいなくなると、私がそれをやらなきゃいけなくなってる。」

将来について

一時は現在の会社で正社員登用を目指そうかと考えたが、現在はあまり考えていない。むしろ自分の経験の幅を広げたいと考えている。

「その会社はどんどん上がっていきみたいで、派遣からパートになって、パートから契約社員になって、契約社員から正社員になれる道があるので、それを聞いたときに、ああ、いいなと。頑張っていたら、結構早い段階で上に行けそうな感じはしましたね。」

でも、今は思っていないんです、実は。この倉庫の仕事をして、ちょっとしたころはそう思ったんですけど、今は事務をやって自信がついてきたこともあって、ここにこだわってい

なくてもいいかなって。今は正社員とかは考えていません。正社員になっちゃったほうが、やめづらいとか、いろんなことに挑戦したくなってきたので、正社員でがっちりというふうには、そんなに思っていないですね。今は、最初は営業とかは絶対に嫌だったんですけど、営業にも興味がありますし、サービス業とか、受付っぽい感じのこととかも、結構いろいろですね。

今、興味があるのは、カウンセリングとか、アロマとか、化粧品とか、何か人のいやしになるようなことにちょっと興味があって、そういう感じの経営ができればいいなと思っています。今、この正社員に興味がないっていうところもあるんですけど、ほかのお仕事の話をして、ネットワークビジネス、それをこれからしようかなというのもあるって、そんなに正社員に興味ないというのもあるんですね。お化粧品とか、私の興味のある化粧品とか、サプリとか、シャンプーとか日用品とか。」

大学院に進学したのに、関係のない仕事をしていることに対して

「もったいないと思うんですけど、何かそこに縛られちゃうと、またやりたくないことをやっちゃう感じがするので、今はそういうことにとらわれていない。事務をやってみて、事務も結構向いているかなという。今から専門職だと、多分入れないと思うんですけど、見た感じでは。私、そんなにすごい専門がちゃんとしていたわけじゃないんで、いろいろこころ変わっていたので、なので私の技術じゃ無理だと思うんですけど、もしそういうのを目指すとしたら、もう一回大学に入り直したりとか、そうかなって思うので。」

3. 友人関係や家族について

出生家族は父、母、妹。現在は夫と二人暮らしであり、将来は出産を考えている。

「(将来の出産について) そうですね、考えています。でも、ちょっと夫が子供嫌いなので。近々では考えていないですね。(出産後も) できれば働き続けられるんだったら、したいですね。夫も働き続けてほしい、やっぱり収入の面では。」

趣味を夫に聞くと、2チャンネルとか言って。ほんとうに2チャンネルが言っていることが全部正しいみたいな感じで。書くまではいかないですけど、読むのがすごく好きで、毎日読んでいないと……。」

友人関係

「すごく仲よかった子は今でもやりとりしますし、最近私から、携帯の番号とか変わって、それで、ああ、久しぶりってメールとかはちょっとしたりとかしましたけど。」

4. 震災について

親せきや知り合いが被害を受けたわけではないが、放射能のことが気になっている。また

人のために何かしなくてはという気持ちになった。

「やっぱり何か放射線のこととかもあって、いろいろ後から後から情報が来るじゃないですか。なので、だれかに頼っていちゃだめだなというのを感じました。なので、会社に頼って正社員でというのも考えなくなったというのがありますね。今もなるべく水道は使っていないです。

何かこのままじゃいけないなって感じはしてて、その経営とかというの、人のために何かしていかなきゃいけないとか、そういうものは芽生えましたね。」

〇さん

26歳男性。東京生まれ東京育ち。小学校のときに引っ越してきた家に現在までずっと住んでいる。短期大学で生物系の学科で学ぶが、卒業後保育士をめざすことを決め、学費を稼ぐアルバイトを1年した後、専門学校に入りなおす。卒業して最初に就職した保育園で人間関係の問題が起こり、半年ほどで退職。新たな就職先の内定取り消しなどもあったが、最終的に別の保育園に保育士として就職できた。給料の面など満足でない部分もあるが、現在の仕事には基本的に満足していて、このまま経験を積んで将来的には公立の保育園に移ればと考えている。

1. 学校時代

中学校は地元の公立中学。最初に入った部がすぐ廃部になり、3年まで部活をやらないで過ごしてきたが、3年の時にテニス部が新設されたので入部した。テニスの成績はふるわなかったが、放課後に活動をすること自体が新鮮な経験で楽しかった。また、学級委員を3年間務めた。そうした代表のような立場に立つこと自体に抵抗はなく、「何かいつも推薦されるような形で、いつの間にかなっているという感じでした」。

高校は都立高校に進学。部活はしていなかったが、文化祭や修学旅行などの行事関係の委員会の活動に力を入れていた。その高校では行事の運営や企画自体が学生にかなり任されていたため、重要な役割を担った。

アルバイトの経験

高校1年の秋からアルバイトを始めた。「やっぱり、中学生のときから、高校生イコールバイトみたいな感じがあったので、多分、お金が稼げるんだなというのがきっかけだったと思います」。学校としては本来アルバイトを認めていないが、黙認していた。

最初にしたのは自宅の近所のラーメン屋のアルバイト。週1~2回ぐらい、1日5~6時間程度働いた。仕事の内容は、厨房で麺をゆでて具を乗せて提供するといったもので、あとの店は甘味、デザートにも力をいれていたため、ラーメンに限らずデザートやパフェをつくらせたりもしていた。この仕事は、自分で探して見つけてきた仕事であるという。働くのは週末だけだった。しかしその店長の「いいかげんなところ」が嫌だったため「さんざん、怒られたりはしました」。結局、半年でこの仕事はやめることになる。他には、短期の年賀状配達バイトも経験した。

進路選択と大学生活

高校2年からは理系のクラスに進む。もともと動物や生き物が好きだったためだが、社会が苦手だったこともあり文系に進もうとは考えなかった。

第1希望・第2希望の大学に受からなかったため、第3志望のところに進学。浪人して第

1 希望などに再チャレンジしたかったが、親から浪人はできないと言われて、「仕方なく」第3志望に進む。進学したのは、都内の私立大学の生物系の学科（2年制の短期大学部）。オープンキャンパスに行ったことが、そこを受験したきっかけとなった。

「酵母の働きを知るという模擬授業みたいなのがあって、それでクロワッサンをつくったんですけれども、それがおいしくて、こういうこともできるんだなみたいな感じですよ。興味があって、進みました。」

入学後は動物専攻に進み、家畜の解剖や人工授精なども経験した。

「人工授精が一番（印象に残った）。研究室に、ほんとうに毎日、夏休み2週間通い込んで、マウスの雌と雄を解剖して卵子と精子を取り出して受精させて、それを観察するというのをしたんですけれども、それがすごくハードでしたね。（そうした経験は）楽しかったですね。やっぱり、周りにも仲間がいたので、一緒に学べたということはすごく価値のあるものでしたね。」

専門学校への進学

2年修了時に、3年に進学することも、卒業して就職するという形もとれたが、卒業する道を選んだ。そして、もともと大学受験時に第1・第2希望だったのが教育系だったこともあり、子供にかかわる仕事をめざすことに決める。

「(大学を選んだときは) やっぱり、子供に携わる仕事か動物、生物にかかわる仕事かって。結局、その大学で2年間いて、自分はやっぱり子供たちに何かできることがしたいなと思って、まだ漠然とはしていたんですけれども、卒業して、自分なりに学校とか調べて、この専門学校なら学ぶこともできるだろうということで、学費をためて専門学校に進んだということです。」

子供にかかわる仕事をめざすことの出発点になったのは、中学3年生のときに職業体験で保育園に行った経験だった。

「たった2日間という間だったんですけれども、そこですごく楽しかったので、こういう仕事もあるんだなというのが、多分、最初のきっかけだったと思います。」

短期大学卒業後、1年間アルバイトをして学費を稼ぎ、翌年に都内の専門学校（児童福祉学科）に入学する。4年制大学への編入や、もう一回大学を受け直すことはせずに専門学校を選んだのは、資格の面を考慮したからだった。

「自分は今、保育士をやっているんですけども、専門学校で、ここだと卒業と同時に取れたんですね、幼稚園の免許と。資格がたくさん取れるということで、そこだったら、大学を受け直すよりももう少し早く、気軽に取れるかなということで選びました。やっぱり、大学を出るよりも今は資格をとっておいたほうがいいのかないかなということで、周り（親や親戚）とよく相談して決めました。」

進学することになるその専門学校を選んだのは、学校説明会に行って、ここだったらおも

しろいんじゃないかなと感じたことで決めた。

専門学校に入るための学費を稼いだのは、高校時代に続いてラーメン屋でのアルバイトだった。父親の知り合いが店長をやっている近隣の店で、土日を除いてほぼ毎日朝から晩まで、調理から接客まで中心となって働いていた。

専門学校での生活

専門学校には3年在籍した。本来2年間のところ、幼稚園の免許もとるために、平日は専門学校で保育士になるための勉強をしながら、土日はスクーリングで幼稚園教諭の勉強をするという形だったため、3年間学ぶことになった。

その学校は、実習が多いことを強調しており、現場とのかかわり合いが多く、それもあって多忙な学生生活を過ごすことになった。

「保育園実習、幼稚園実習、施設実習、で、あとほかにもボランティア活動とか、そういったのにも力を入れているというのがあって、即戦力になれるよみたいなうたい文句があったので、そこが、やっぱり引き付けられるところなのかなと思います。……（授業は）ほぼ毎日、1限から4限、5限まであって、土日がスクーリングがあって、レポートも締め切りが、提出しなければいけないということで、ほんとうに毎日学校に行っているようなものでした。」

それ以外の時間はカレー屋でアルバイトをしており、深夜まで働くことも多かった。週末も、「土曜日をフルに出て日曜日はスクーリングに行くとか」、忙しい毎日だった。ただ、全体として現時点で振り返ると、学生生活は大変だったという以上に楽しかったと考えている。

2. キャリア

専門学校を卒業後の4月から、保育園を運営している社会福祉法人に、正社員の保育士として採用される。しかし、勤め始めてすぐから、同僚の先輩との人間関係がうまくいかず、苦勞することになる。保育園の園長や主任にも相談したが、話は聞いてもらえても、先輩の方が上なので、「やっぱりあなたが（改めないで）ね」と言われてしまっていた。やがて体に不調が出るほどになってきたため、とにかく辞めたいという思いで、11月に退職する。

新たな就職先を探すのが、年末にかかることもあってなかなか見つからない中、1月中旬に応募したある保育園から、4月からの採用の内定を得る。しかし、働き始める直前の3月の終わりになって、お金を渡されて内定を取り消されてしまう。

何としてでも4月から働きたかったので、即日ハローワークに行く。やっぱり自分は保育士であり、保育園でもう一度やり直したいという思いから、保育園を希望して仕事を探すのが、年度末という時期でもあって見つからなかった。そんな中で、例えば学童保育で働きながら保育園に就職する機会を探ることもできるから、まずはそこからチャレンジしてみればという助言を受け、4月のはじめに学童保育を運営しているNPO法人に応募する。

しかし、面接を受けると、学童保育についてはスタッフの空きがないと言われてしまい驚くが、その NPO が運営している都内の保育園の方は空きがあると言われる。それならぜひということで、その面接の2日後ぐらいに保育園で実習と二次面接を受けて、さらにその次の日に三次面接を受けて、採用されることが決まる。そしてさっそく4月16日からその保育園で働き始めるという、内定取り消しから2週間ほどの間にとんとん拍子の展開になった。その保育園での勤務が、インタビュー時点で2年目になっている。

仕事の状況

現在はその保育園で、週6日で勤務している。人が少ないこともあり、多い日数だが「頑張っています」。保育士は常勤が4名、非常勤が3名。新しい保育園を立ち上げることになって、自分より上の保育士がすべてそちらに移ったため、2年目だが園長を除くと一番上になっている。人間関係は良好。男性の保育士は自分一人だが、「特別、何か、男だから、女だからとか、そういうのはあまり感じずに働ける職場」だという。

専門学校で学んだことは、仕事でかなり生きていると感じている。

「結構、今の保育士というのはピアノも弾けない人が多いらしいんです。うちはピアノがすごい好きだったので、ピアノを練習したり、ペープサート、人形劇とかそういうのも、やっぱり、実際に子供の前でやるのと、大人の、一緒に同級生の前でやるのと全然違うんですよ。やっぱり大人の前だと恥ずかしいです。そういった授業が多かったので、それなりに自信もつきましたし、学生時代にそういうのもたくさんつくってきたので、どうしても働くとなかなかつくる時間がなくて、そういったものが今、役に立っていますね。やっぱり3年間じっくり勉強してよかったなという感じですね。」

給料

保育士一般にいえることだが、給料はあまり高くない。「たまに専門学校時代の友達と会うと、ボーナス全然もらえなかったとか、これじゃだめだとか、そういう話はたまにしますね。……もともと、男で保育士というはある程度覚悟して、仕事を決めるわけなんですけれども、やっぱり、実際にこれしかないのかみたいな」。

将来

将来的には、公立（区立）の保育園の保育士として働きたいと考えている。

「今は私立の保育園で働いているんですけども、やっぱり、来年以降は区の保育園も受けて、後々、区全体の子供たちのケアとか、そういうのも視野に入れて働きたいなということで、公務員というのは、区立の保育士として働くということですね。（公立の保育士になるには）一般の公務員試験と同様で、一次試験が筆記と作文、二次が面接という形ですね。都が年に1回夏にあって、秋以降に一般の、県とかそういうところの試験があるという感じですよ。」

ね。今は私立でちょっと経験を積んだ後に勉強してやりたいなど。実際に、学生時代に一回、公立の試験は受けて、一次は受かったんですけど、二次でちょっとだめで、やっぱり、受けた人が、周りがもう全員保育園出身というか。現役の保育士というのが多くて、やっぱり経験を積まないといけないのかなという感じがして、今は保育士として経験を積んでいきたいなという感じです。（採用試験を受けるのを）どこの区にするかは、まだ迷っています。よく知っているこの（現在の勤務先のある）区か、地元の区か、ちょっとまだ決めかねているという状況です。」

試験を受けるには、30歳までという年齢制限がある。何度か受験して、それまでに受ければと考えている。

「今年は受験しないです。今年1年間勉強して、来年臨むという形になりたいなどは考えています。……（以前その試験を）受けた感触では、そこまで難しくなかったんですよ。公務員で、よく数的処理とか、そういうのがあるじゃないですか。あれをみっちり勉強したんですよ。そうしたら、すごい簡単過ぎて、何でこんな勉強したんだろうという感じで、それよりも苦手な社会とか、そういったものを勉強しないと点は取れないんだなという感じで、今、少しずつ社会とか理科とか、そういう基礎的な勉強をし始めていて。だから、あいた時間、帰ってから勉強するという形でやっついこうかなという感じですね。」

また、今持っている資格の他に、将来的にはさらに別の資格も取ることができればと考えている。

「保育士、幼稚園免許だけでも食べてはいけるんですけども、例えば、小学校の免許とか、あと社会福祉士……、社会福祉士は難しいんですけども、介護福祉士とか、ヘルパーとか、そういった福祉関連の資格を取れる方法を探して、取れたら取りたいなと思っています。やっぱり高齢化社会なので、将来的にもそっちのほうにも、例えば、老人ホームとかと保育園が併設した施設とかもあるので、やっぱりそういう、両方の資格を持っていれば、より視野を広げて働けるのかなと思って、そういう資格が取りたいなと。（そう思ったきっかけは？）うちの保育園の近くに老人福祉センターがあるんです、今年、そこにたまたま遊びに行ったときに、ちょっとお話を聞いて、それから自分独自で調べて、たまたま友達が働いているところが、そういう併合というか、合併した施設というのを聞いて、そういった資格を取るのもまた一ついいのかなと。」

3. 家族

家族は両親と弟2人。父親は会社員、母親はパートで図書館勤務。進学する高校の選択や、一度大学を出てから専門学校に行くこと、男性が保育士という道を選ぶことなど、いずれも両親は自分の意思を尊重してくれた。「（最終的には）決めさせてくれる両親でした」。

一番下の弟は高校3年生で、進路について話すことが多い。「（その弟も）同じ子供に関する仕事につきたいとは言っていますね。（それは、兄の仕事を見ていてそう思うようになって

た?) そうじゃないかなと……。今、それを視野に入れて勉強しているみたいです。」
給料が安いこともあり、今のところ実家を出ることは考えていない。

祖母の存在

「これからの生き方」についての悩みの相談相手として、母方の祖母がいる。70歳ぐらいで、比較的近くに住んでいる。元々店の社長をやっていて、その後は「どこかの施設の経理担当」をしていた。

「女手一つですごい働いてきた方なので、そういった、すごく自分の確固たる考え方を持っていて、やっぱり親とは違った、一步引いた状態で、的確なアドバイスをくれるので、相談しには行っています。今でも、二月に1回とかは遊びに行ったりしているので、そういったときに話を聞いて、こうあるべきだというわけではないんですけども、こういった姿勢でいくといいよとか、そういうアドバイスはくれるので。」

特におばあちゃんっ子だったというほどではなかったが、成人してからも近い関係が続いている。

「小学生とか中学生で、年にほんとうに数回、夏休みとか冬休みとか行く程度だったんですけども、結構大きくなって、大きくなってという言い方も変なんですけれども、成人してからも、やっぱり泊まりに行ったりとかはしているので、おばあちゃんっ子というわけではないと思うんですけども、やっぱり、そういう関係ですね。」

4. 結婚

現在、交際相手はいない。結婚については、今のところあまり考えていない。仕事が忙しいのと、給料が安いことが理由。「給料がすごく安いので、なかなか、養っていけないかなという。養うのは自分だけで精一杯かなということで、そこはやっぱり、給料改善とかがあればなというのはありますね。……大体、男の人の保育士がやめてしまう理由の1位が、これじゃ食べていけないという理由で、やっぱり周りの友達も保育士やっているんですけども、このままじゃできないなって悩んでいる人も結構いますね。」

5. 友人関係

中学・高校・大学ときの友人とは、今でも会うことがある。大学時代の友人の中には、小学校の教師をめざす人もいて、自らが保育士という畑違いの道を選ぶことに対しても、「同じ子供を目指す分野だから頑張ろうねということで応援してくれました。」

専門学校時代も友人はできたが、友人たちは地方出身者が多く、地元に戻って保育士になっているため、「月に1回ぐらいは会う友達はいるんですけども、大体地方に行ってしまったので、メールとか電話をするぐらいですね」。

仕事の状況が徐々に落ち着いてきたこともあって、友人とまた頻繁に連絡をとるようにな

っている。「今年とか去年にかけてから、急に何か増えたという感じですね。まあ、自分に余裕ができたのかわからないですけども、結構ひんぱんに連絡をとって、じゃ、この日遊ぼうねとか言って」。

6. 震災

震災当日は、保育園にいた。

「地震当日、ちょうど2時46分、お昼寝の時間だったんですけども、最初は、軽い揺れがぐらぐらぐらっと来たときに大きな揺れが来た状態で、そのときに、園長も主任もいなくて、下の、ほんとうに保育士たちだけで判断しなくちゃいけない状態で、すごく大変だったんです。ほんとうに、お母さんたちもお迎えに来られない状態で、泊まるのを覚悟で保育をしていたという感じ。何とか無事に、9時ぐらいには全員お迎えが来て帰れたんですけども」

震災は、保育園の状況に大きな影響を与えた。

「(子どもの人数は、今は定員の) 半分ぐらいしかいないです。震災の影響ということで。職場復帰するお母さんとかが、震災の影響で職場復帰できなくて、それで保育園に預けられなくなったという理由もありますし、あと、東京は怖いということで西日本のほうに行っちゃったりして、それで今、あきが結構出てきちゃっているという状況ですね。」

「次の年の入園児募集のときに、決まっていた子が、仕事ができなくなってしまったということで、すみませんけれども、ちょっと来年はやめさせていただきますというのが、まず影響が出て、その後に食べ物ですね、一番出たのは。やっぱり、水道水に対して、ミネラルウォーターじゃなくてはいけないというのがあって、今、うちの園は100%ミネラルウォーターを使っているんですけども、それで、やっぱり保障もないので、結構ミネラルウォーター代、食費がかさむというのがあって、あとは、やっぱり、すごく心配される保護者の方もいまして、カウンター、計測器を持ってきて、これで毎日にかけてくださいという方もいて、やっぱり人ごとではないなという感じはありますね。」

「(震災後の今) 結構、見学に来る方もいるんですけども、やっぱり、ミネラルウォーター使っていますかとか、どうなんですかって、そういう質問がすごく多いですね。……いつまでミネラルウォーターを使わなくてはいけないのかとか、それは園による判断だと思うんですけども、そういったのがいつまで続くんだろうなという心配はありますね。」

Pさん

23歳男性。4年制大学卒で就職2年目。3年次にはインターンシップを経験し、大学就職課にも相談した。今の職場は日々勉強という感じ。残業が多いのはいやだと感じている。

1. 学校時代について

小学校で少年野球を始め、中学でも部活で野球をつづける。中学時代は、ほとんど勉強しなかった。

「(高校進学について) そこまでやる気もなかったんですよね。だから、行けるところを単願で行ったんです。しかも、そんなに選んでないです。…(中略)… お姉ちゃんが大学に行かなかったんですよね。結構親にも迷惑をかけているような人だったので、そういう人にはなりたくないなという意味で、大学の附属校へ行きました。」

「(誰かに相談は?) あまり覚えはないんですけど、ただ、父親に聞いた覚えはありますね。私立にしようか、それとも都立にするかという話で、どこの高校にすればいいか話した覚えがあります。…(中略)…大学もそうなんですが、結構父親の意見を聞いています。なので、そのとき多分この高校がいいんじゃないかと言われたところに行っていると思いますね。」

高校に入ってから部活は野球以外のスポーツがしたかった。「(中学で)レギュラーをとれなかったというのが大きい。」スタートラインが皆一緒だからと、ラグビー部を選んだ。

大学進学

付属高校であったが、大学は一般受験した。

「中学のころは、大学といたら全部一緒だというイメージで、どこでもいいやと考えていたんですけど、高校に入っているいろいろな大学を調べて、もっと上の大学に行きたいという気持ちが出てきたので行きました。…(中略)…附属校だったので、大学にラグビーの練習とか頻繁に行っていたんですよ。新しみもないですし、また3年間と同じような生活の延長でしかないと思って、新しいところに行きたかったというのがあります。」

大学について考え始めたのは、3年生の初めごろ。進学について友達同士で話すことはなく、親や教師と話した。受験勉強はラグビーを引退した3年生の10月ごろから。予備校にも行った。

複数校受験して、A大学に合格。「12月くらいの模試では、どこも行ける気がしなかった」ので、この大学に合格したことはよかったと思っている。受験した学部は皆経営学。

「経営を選んだのも、父親と相談して。特に将来何かやりたいことがあるというわけじゃなかったんで、どうしようかなという相談をして、経営学部に決めた。…(中略)…父親が自営業だから、継ぐとかいうのもあったのかもしれない。」

大学生活

「(大学生活で自分の中で大きかったのは?) サークルですかね。オールラウンドサークルというか、特に何か決めてやるわけじゃないんですよ。自分たちでやりたいことを企画して…(中略)…サッカーとか野球とかフットサルとか。」

「いろいろなサークルを見たんですけど、一番そこが居心地がよかったというのと、ほかのサークルは飲み会とかやったんですよ。飲み会に行くたびにコールをしていたんですよ。コールって、一気飲みですか。盛り上げて、だれかが一気飲みする。必ずと言っていいほど、どのサークルもやっていましたね。それが嫌だった。そのサークルにはなかった。」

「人柄というか、先輩の人たちがすごく魅力的でした。(どんなところが?) 何ていうんですかね、難しいんですけど、一人の人としてちゃんと接してくれるというか、そんな感じがしました。みんながみんなそんな感じでした。」

「(大学でどんなものを得た気がする?) それは難しいですね。何ですかね。もともと高校までがスポーツばかりやっていて、勉強したというのも最後の受験勉強をしたくらいで、しっかりと長い間勉強したというのがなかったの、そういう意味では、ゼミに入ったことで2年間がっつりと勉強した、勉強に対する姿勢とかつくられた気がします。それは会社に入っても生きている気がしますね。」

「ゼミのスタイルがすごくおもしろかったです。発表して、それに対してみんなで議論するという。それはおもしろかったです。…(中略)…ほとんど毎回必ずと言っていいほどみんなしゃべっています。」そういう雰囲気先輩と先生が作っていた。

就職活動

大学卒業は2010年の3月。リーマンショックの影響があった。就活を始めたのは3年生の2月ごろだが、その前の夏休みからインターンシップに参加していた。人材派遣会社が直接募集していたものに応募した。

「とりあえず何か夏休みにしたいなという。そうしたら、インターンシップ。説明会とかが多分あって、都合がよかったんだと思います。」

インターンシップの内容は、就活生が応募したくなるような会社案内のビデオをつくるというもので、5人で1チームを作り、全部で5チームが競いあうかたちであった。最初は、2週間集中で毎日のように集まって作成し、それを発表した。その後、選抜されて秋から別の課題に取り組んだ。

「学生のうちに会社に携われたというか、組織に入れたというのは大きかったと思いますね。(インターンシップを)やったというのも大きかったですね。今まで1つの大学に属していて、ほかの大学の人との交流はなかったので、そこで全く別の大学の人とディスカッションするというのはよかったです。…(中略)…頭のいい大学ばかりでした。慶應とか東北大学とか、中央、東大とかもいたんです。」

「(そこで) いちいち言葉の意味を聞くためにディスカッションをとめたりしました。まず、言葉の意味がわからないとディスカッションできないので、それで最初のうちはとめて。」

「(その経験は) 自信になりました。夏休みで幾つか競い合って、優勝チームにいたんです。優勝することもできて、その後選抜もされて、そこで自信ができました。…(中略)…就活する上で、夏休み、秋を通してインターンシップをやったんだという自信が、説明会とかで生まれました。」

そのインターンシップは年を越すくらいまで続いた。そのあと就職活動を始めた。インターンシップの仲間と就職の話をした。「就活に対して何もわからなかった。その人たちは結構勉強していたりするので、ためになりました。」それから合同説明会などでたくさんの会社と接触した。

「合同説明会はたくさん行きました。まず、何がやりたいかというのも決まってない状態だったので、とりあえずいろいろな企業を見たい。そうしたら、効率的に見られるのは合同説明会。」

エントリーシートを提出した会社は10社程度。そのすべてで一次面接まで進み、最終面接まで残ったのが、5、6社ぐらい。最初に内定が出た1社目は辞退して、就職活動を続け、2社目の内定先に就職を決めた。

「1社目は、その会社を知れば知るほど、あまりよくないブラックな企業だという感じがしました。(それはインターネットの情報?) もちろんインターネットの情報もありますし、僕が会社に言わずに抜き打ちで営業所に行ったことがあったんです。そのときの雰囲気最悪でしたね。どなり声ばかりしているところなんです。…(中略)… 最初は、人事の人に対して社員のひとと話がしたいと言ったんですけど、真摯に僕の話聞いてくれなかったんです。じゃあ、行くかということで勝手に。」

「2社目は、そこと比較するわけじゃないんですけど、僕に対してすごく真摯に対応してくれたので。この企業に対しても、僕は社員のひと話をしたいと聞いたと思うんです。ちゃんと時間をつくってくれて、その社員の方の携帯番号も教えてくれたりして。」

2社目はA大学の求人サイトでみつけた求人である。

「この会社が決まったのが8月くらいなんです。7月くらいになって、だんだん募集している企業も少なくなってきてすごく不安になって、就職課に行きました。」

就職課では大学の求人サイトを教えてくれただけでなく、「話を聞いて、不安を消してくれたりとかしました。すごく真摯に受けとめてくれて、役に立ったと思います。」

2. キャリア

就職先は、印刷会社で今は生産管理を担当している。大学で学んだ経営学との関係はほとんどない。入社後、最初の一か月は研修で、その後に正式に配属された。ただし、その12月には異動があった。

「異動になった理由は、私が入った会社は新入社員が僕を入れて2人だったんですよ。もう一人のほうはやめちゃったんです。その席に行ったんです。…(中略)…(辞めた理由は) その人自身に問題がありましたね。すごく会社に対して求め過ぎていて、自分を会社の環境に合わせようとしません。自分の環境ありきで、会社が合わせてくださいみたいな。」

知っている範囲では、ほかに辞めたという話は聞いていない。今年の新入社員は4人。後輩ができて一息ついた感じがあるが、仕事は、まだ知らないことばかりで日々勉強と感じている。

一番就きたい働き方

今、一番就きたい働き方として「公務員」としたのは、今の仕事で嫌なのが残業が多いことだから。定時に帰れて安定している仕事がしたい。

「公務員になりたいという希望で、やろうという気にはなってないですね。」

「実際にシステム上で出る残業イコール今の残業ではない。(サービス残業?) そうですね。だから、実際にどのくらい残業しているのかわからないですね。土日は休みなんですけど、そこを出たりしているの。」

3. 友達関係について

飲みに行ったり遊びに行ったりする友達が多い。小学校のころからの友達も高校のラグビー一部の友達も、大学のサークルの後輩や同期の友達もいる。20人とか30人ぐらいになる。

「月に必ず会う友達は1人ぐらいしかいないですよ。年に何回か会うぐらい。」

「友達に対してあまり相談したことはないですね。あまり親密な話とか深い話はしない。」

4. 家族について

今、一緒に暮らしているのは、両親と2人の妹と弟。姉は家を出て一人暮らし。妹は大学を出て就職したばかり。弟は大学生。父親は、少年野球のころのコーチでもある。「尊敬します。すごく社交的ですし、交友が広いというのがすばらしいと思います。」仕事は、新聞の専売所を自営しているが、今、経営は苦しくなっている。

「購読者が減っていますし。そうすると、広告収入が減って悪循環。厳しいんですよ。僕がちっちゃいころはすごく稼いでいたんですけど、今は。そういう意味でも、跡を継ぐのはどうしようかなと思っています。」

事務的な仕事は母親がしている。「(母のことも) すごく尊敬しますよ。陽気ですし、すごく優しかったですから。」

「(結婚とかはまだ考えていない?) したい気持ちはあります。(おつき合いしている人は?) いないです。いないんですけど、将来したいとは思っています。子供が欲しいです。」

今、家には月8万円入れている。食費というのものもあるが、今までお世話になったことに対

してという気持である。「経営状態もあまりよくないので、そういう意味でなるべく多く。」

5. その他

（ニート状態の方が身近にいるということですが？）「働く気がない友達があります。僕以上に将来のことを考えてないですね。その日暮らしで何とかなるだろうみたいな。」

「(心配な感じですか?) そういう気がしますけど、その人の人生だからいいかなみたいな。… (中略) …働きたいのに働けないという人は、すごくかわいそうですね。だから、身近にいる人はちょっと違うと思うんですよ。」

Qさん

28歳男性。東北地方の地方都市出身。大学卒業後就職したが、1年で離職して、学生時代にプロとなった格闘技を続けながらパートの仕事で生計を立てる生活に。2年後に結婚を機に正社員になる。今は、子供が2人でき格闘技とは少し距離を置くが現状には満足。将来は地元に戻りたい。

1. 学校時代について

中学では柔道部で活躍し、地元の私立高校からスポーツ推薦を受け、特待生枠で受験してその高校の国際科に進学した。「高校も半ば部活で選んだようなところもあったので。中学、高校は、そうですね、部活ばかりしていたような。」ただし、2年生からは部活と大学進学を両立できる進学コースに学科を変更した。

「ずっと農業の関心に興味があって。海外に木を植える仕事をしたいとか何か、そうですね。海外の農業を支援したいとか、当時そういうことを志していた。それで、国際科を選んだりとかもしたんですけれども。どっちかというところ、その国際寄りよりも農業寄りに頭が回って行って、だったら理系の勉強も必要だねっていうことで、進学科に移って理系の勉強をして。」

「中学とか、小学校高学年ぐらいのときからやっぱり農業って大事だなとか、何か食べ物をつくる仕事をしないとだめとか、そういう木を育てていかなきゃまずいんじゃないかとか…(中略)…『木を植えた男』っていう話を読んでそれにあこがれたっていうのが一つと、あと何ですかね、環境破壊についての何か、おっかない歌みたいなのを聞いたんですよ。井上陽水の「最後のニュース」だったかな。それが何か、環境破壊になって何か人類滅んじゃうよみたいなことを示唆するような歌詞だったと思うんですよ。それを聞いて、幼心にすごく怖くなって、それで、何か子供ながらに環境とか考えなきゃいけないのかなというふうに思ったんですかね。」

大学進学では農業系大学のみを受験し、A農大に進学。

「(進学先について) 結構調べました。やっぱり農業が好きだったので、農業にかかわる大学で自分の学力でもねえそうところは結構調べて、大学はだめなことも考えて専門学校とかでも同じような分野を勉強できるところも調べたりして。その中で受かったここを選んだっていう感じですかね。」

「親は、やっぱり好きなようにすればいいと言ってくれましたし、学校も行かせてくれるっていう話もあったので。で、先生のほうも結構、自分の熱意を買ってくれたというか、それなら、応援するっていうことでいろいろ勉強も……。たまたまここ(A農大)のOBの先生とかもいて、話聞いたりもしたんですけれども。」

上京して最初は寮に入る。学費は親に出してもらおうが、生活費はアルバイトでまかなった。

居酒屋での調理の仕事で週 5, 6 日、月にすると 120~130 時間ぐらい。

「(アルバイトを)夜中から朝までやって……。朝から学校へ行っていたから、ちょっと正直、大学に入って勉強もおろそかになっちゃうこともあったんですけども。日中は日中で大学終わってから別のことをやっていたので。柔道はやめちゃったんですけど、ちょっとほかの格闘技のジムに通い始めて、それ、大学に行って、ジム行って、バイトしてっていう生活。」

進学した学科は、理系大学の中の文系学科のような位置づけで実験などの比重は小さく、研究室に入る人もいたが、本人は研究室には入らず、授業をとるだけの学習の仕方を選んだ。勉強は面白いとは思っていた。

「好き好んで入った大学なんですけれども、(研究室に入ると)そこに時間が割かれてしまって、大学後に行っていた格闘技のジムのほうにはまっちゃった部分もあったので、そっちの時間もちょっと大事にしたいなと思って、研究室は入らなかったですね。」

在学中に格闘技のプロに

「初めに大学の柔道部にも入ったんですけども、やっぱり研究室と同じようにちょっと時間の縛りがきつかった。この大学に入ったので自分で農業実習とかも選んで行ったりもしたので、そういうのが、部活とかに所属してしまうとできなくなってしまうので、だったら、民間の格闘技できるジムに行ってみようと思って。で、何となくやったら(その格闘技に)はまっちゃったみたいな感じですかね。」

「それで結構はまってやったら大学在学中にプロになることができて。そんなにメジャースポーツではないので、(ファイトマネーは)あるはありますけれども、ほんとうに何か微々たるものなんで、あると考えるほうが。ただ、その試合のために照準を合わせてバイトをいっぱい休んでしまうと、そっちのほうが、稼ぎが減っちゃうかなというような感じだった。」

「(プロになったのは)大学の3年生のとき。そのときはほんと忙しくしているっていうのが何かいいことというか、自分今、輝いているじゃないですけども……。暇な時間をつくれなかった。できるだけ動いていたいなと思ってて、多分忙しくてもそこまで苦にはならなかったです。みんな好きなことで忙しいだけなので。」

就職活動

「大学3年の終わりごろに大学でも就職セミナーみたいなのが始まってて、初め全くびんと来なかったんですけども、周りが何かそういうのをし始めているのを見て、これはしたほうがいいのかと思って、やり始めて、大学4年の6月ぐらいに内定もらってっていう感じでしたかね。」

「農業に関する仕事がしたいなと思ってて、農業関連団体のところを選んだんですけども、2つぐらい落っこちて。で、結局内定もらったのが、農業団体に特化した旅行会社で、旅行会社なので農業には直結していないんですけども、お客さんは農業に携わる人が多かった

ので、おもしろいかなと思って、受けて内定をもらったので、やってみようかなって感じで就職したんです。」

「1個内定取ったらもう就職活動やめちゃって、決まったからここでいいやっていう感じになっちゃってて・・・(中略)・・・もっと内定もらうために続けるとかいう人もいたんですけど、何か、僕は決め打ちでしたし。就職しなきゃいけないっていう切迫感はありましたけれども、やりたくないことをしてまで就職したくないなと思っていたので。バイトもずっと続けていて、経済的に何とかなるってこともありました。就職できなくても何とかなるだろうというものもあったので、だから、たまたまどっか受かりましたからよかったですけれども、受かんなかったらそれでもよかったかなというのがあったから、幾つも応募はしなかった。」

2. キャリアについて

内定をもらった旅行会社に就職するが、その会社は1年でやめた。

「会社の人にも恵まれていましたし、環境的にはよかったですけれども、やっぱりちょっとお給料も安くて拘束時間もすごく長くて。A県に配属されたことで、格闘技もやめなきゃいけなくて。仕事自体はおもしろかったんですけども、それ以外に割ける時間の余裕がなかった。」

「やめて、また東京に戻ってきて格闘技始めたので、格闘技のためにやめたみたいなところがありますかね。あと、やっぱり旅行会社、楽しかったは楽しかったんですけども、やっぱり農業とはあまり直結していなかったというのがあったので、そのときにもっと農業に直結した仕事であればもっと自分の興味がわいて仕事やめるには至っていなかったかもしれないですけども」

パートで働きながら格闘技

東京に戻ってきて、大学在学中のバイト先の居酒屋で週末働き、さらに他大学の学食で調理パートとして週6日働いた。合わせて手取りは月25万円ぐらい。前の会社より格段に多い。

「忙しかったですけども、A県にいたときよりはバイトでも稼げるし。ずっとやっていた調理の仕事だったので、好きな仕事でもあったので。農業には全く関係ない仕事ではあったんですけども、好きな仕事でそれなりに稼げたので。ただ、やっぱりパートっていう雇用形態にはかなり不安は持っていました。」

結婚と正社員

元の会社の同僚でB県に配属されていた女性と会社を辞める前から付き合っていた。会社を辞めて格闘技がしたいという相談をしたら、彼女は「そういう理由があったらいいんじゃないの」と理解を示してくれたという。

「パートの1年目のときに入籍しちゃったんです。奥さんはB県にいたんですけれども、パートの2年目になる年に奥さんが東京に出てきて、奥さんも働きながらだったんですけれども、結婚もするとやっぱり夢ばかり追っていてもなという感じで。ちゃんと就職しなきゃということで、パートの2年目の秋ぐらいから就職を考え出して、今の会社に採用してもらえたという感じなんです。」

「ずっと調理の仕事をしていて、調理師免許とかも取っていたので、農業が第1だけれども、もし、選択肢が広げられるのであれば、調理関係もいいかなと思ったんです。…(中略)…面接まで受けたのは、今の会社と前に1個落っこっちゃった会社があるんですけれども、そこだけです。」

「面接になると結構、勘違いかもしれないですけども、面接官の人が、おもしろがって話を聞いてくれるのかなと。自分で言うのも何ですけども、格闘技したりとか、今までの生活の仕方っていうのが、結構変わっている部分があるのかもしれないので、そういう部分をおもしろがって聞いてもらって、その辺を買ってくれたところに選んでもらえたのかな」
今の仕事は米の卸売り業。

「お米の販売っていうところでは、やっぱり農業に携わってくることになりますし、やっぱり米っていうのは、日本の一番の基幹作物ですので、そういったものを販売してお米の販売量を増やすっていうことが日本の農業を支える上でも非常に大事なことであるという自負もあるので、そういった部分ではその農業を今までいろいろな仕事をしてきましたけれども、一番やりがいのある仕事ではあるのかなという気がしています。」

「(格闘技は)今もしているんですけども、会社の面接のときに正直にやっていますと言って、やりたいですって、今後もプロとしてはやりたいと思っていますっていう話をして、ほんとは何かコンプライアンス上、好ましくないのかもしれないですけども、やらせてもらっていますし、ちょっと今けががして1年ぐらい休んじゃっているんですけども、まだ復帰してやろうと思っています。」

3. 交友関係

中学、高校、大学、格闘技関係と、おのおのの時期に親しい友達ができる。

「親しいっていう友達だったら、20人もいるかもしれないですけども、ほんとうに深い話もできる友達も5人、6人とか、そのぐらいいはいると思いますけれども、実際やっぱりもうなかなか会えないですけども、時間的にも。」

「自分の転機に実際どれだけ力になれるかっていうのは、その友達とかは、その力を持っていないかもしれないですけども、自分の気持ちを相談したりとか、力になってもらえるとか、相談できるような人は、そういう意味では結構みんな気兼ねなく話せるかなとは思いますが。結構ほんと、友達にも恵まれていると思います。」

4. 生まれ育った家庭について

進路選択にあたっては、高校の時の転科も大学選択も、離職の際も、親は本人の好きなようにすることを支持し、選択に介入することはなかった。

兄弟は兄と妹。両親と祖母がいる。兄は東京に出てきている。兄弟と会う機会は少ないが親しくしている。年に何回かは実家に帰っている。

5. 結婚について

今は、2歳と生後半年の子供がいる。奥さんは今は専業主婦。

「それもあって家庭のほうも忙しくなってきたので、格闘技もやりたいですけども、比重がちょっとそこまで置けなくなってきたりしてしまっているのかなと。それはでもその分、家族に比重を置くっていうのも自分の中では満足していることですし。そういう意味では、ほんとうに恵まれている人生かなというふうには思います。」

「葛藤する部分もありますけれどもね。もっとやりたいっていうのもありますけれども、仕方ないかなっていうのが。やっぱり仕事行って、練習に行くと帰ってくると相当遅くなっちゃいますし、そうすると、やっぱり奥さんはもうちょっと育児で疲れきったりするので。奥さんは格闘技やればいいとは言うんですけども、100%本音じゃないのかなというのは、気もしますし。そこはやっぱり我慢しなきゃいけないのかなというふうに。もう一人子供欲しいなとかも思ったりもしますし。」

6. 将来について・震災の影響

「いずれ地元の仕事があれば、田舎に帰りたいとは思っているんですけども。奥さんのほうも地元がB県ですし、やっぱりいずれは東北に帰れたらいいのかなと思っているんですけども、やっぱりどうしても仕事があっち、ないもんで。」

今回の震災では、奥さんの親せきや知人に亡くなったり、家を流されたりした人がいる。本人の福島友人には、放射能のせいで避難しなきゃいけなくなった人もいるという。

「(考え方の変化としては)昔より、いずれ田舎に帰りたいっていう気持ちが強くなったかもしれないです。東京にいて昔より不安を感じるようになりましたね。もしここで地震が起きたりしても、東京で被災はしたくないとも思えます。」

「自分で食べる物は自分でつくりたくないともう危ない世の中になってくるんじゃないのかなっていう気もします。…(中略)…ただ、実際現実問題、仕事はないので、実際地元で農業してみたいなとかも思ったこともありますけれども、そんなに甘いものでもないですし。自分に農業、勉強はしていましたけれども、実際のノウハウがあるわけでもないです。」

「奥さんも東京は楽しいけれども、ずっと住む場所じゃないっていうようなことも言っていますし、いずれ田舎に帰るっていうのは共通しています。」

Rさん

27歳女性。都内出身。希望していた大学には落ちてしまったものの、親の勧めで入学した大学で友人に恵まれ、満足の行く大学生活を送る。内定を得るまで時間がかかったものの、卒業後はIT系の企業に就職。3年後に異動した部門で仕事の面白さを感じるが、1年でその部門が統合されてしまう。同じ会社での勤務を続けているが、漠然と転職を意識し始めている。

1. 学校時代

現在も住んでいる自宅には、小学校から上がることに引っ越してきた。地元の中学校では、陸上部の部活に取り組む。高校は、自分の居住地の学区にある、第一志望の都立高校に進学。バレーボール部に入るが、メンバーが固定されるのをみて1年でやめることになる。クラスに仲のいい友達ができず、高校のときは、あまりいい思い出はないという。

大学の進学に際しては、進みたい方向が特に見えていたわけでもなく、進学校だった高校でも、特に進路についての指導はなかった。

「何がしたいというのはほんとうに特になかったの。それよりは結構すごい先のことを見過ぎて、何でもつぶしがきくような学部とかがいいと友達の話とかを聞いていて思って、法学部とかにしようかなと。親に、そんなのは多分入っても興味がなければつまらないんじゃないみたいなこととか言われて。ただ自分では何がいいかわからないから、とりあえず名前的に今後が見込めそうな学部とかを。」

社会科学系の学部を受験するが、希望していた大学にすべて落ちてしまう。浪人も考えるが、現役での進学を望む親が見つめてきた大学（女子大）を受けることになり、そこに進学することになる。

「大学受けるときにその大学は候補に入っていなかったんです。女子大だったんですけども。私、絶対女子大には行きたくなかったんです。で、希望していたところが全部実は落ちてしまって、でも後期の試験で受けられるところということで。私は受けたくなかったのもう浪人とかでもするかと思ったんですけども、うちの親的にはもう現役でという考え方で、多分私がそんなにもたないと思ったのか、とりあえず親が調べて、その中でこういうのがある。その中で、その大学を受けたくなかったけれども受けたっていう感じですね。」

大学生活

入学前は女子大一般にあまりいいイメージはなく、消極的な選択だったが、友人に恵まれ楽しい大学生活を送ることができた。

「もともと何がやりたいと入ったわけでもなく、この大学に行きたいからどこの学部でもいいというわけでもなく、結構仕方ないからという感じで入ってしまったので。最初はすごいイメージはよくなかったんですけども、結果オーライなのが、すごい楽しい大学生活を送

れたので、そういう意味だと親に感謝はしていますけどね。」

「(楽しかった理由は) やっぱり友達ですかね。高校のときにすごい固まっているような友達関係だったので、大学、もちろん女子大というのもあって同じような、みんな女子というのもあるんですけども、何だろう、やっぱりサークルとか、大学ならではのそういうので友達の関係がすごい広がったというのと、ほんとうは英語のクラスとか、クラスが分けられているものがあるって、その英語のクラスですごい仲よくなった子たちというのがやっぱり今も仲がよかったり、あとはゼミで、やっぱりそれもゼミっていう空間で。どうしても研究とかって時間がかかったりするので、一緒にいる時間が多かったの。それで仲よくなったりって、いろいろなグループみたいのがある。ずっとこれっていうわけではなくて、授業であったりだとか、ゼミだったりサークルだったり、いろいろなカテゴリーの中で友達ができたっていうのがすごいおもしろかったというのがありますね。」

「友達もやっぱり、自分が行きたい大学ではなくて、結構仕方なくじゃないですけども、そういう感じできている子がすごい多かったというのがあるって……。全員がすごいやりたいことがあって、それに向かって「はい」って進んじゃう感じだと、多分ちょっと考え方の差みたいのを感じたりするんですけども、そういうのもなくて、結構友達も、のほほんとしているわけではないんですけども、一緒にいてすごい楽しかったりだとか、勉強でこれがやりたくて入ってすごい夢中になるというわけでもなく、やっぱりちょっと似たような感じだったので、そういう意味だと仲よくなれたのかなという1つのきっかけだとは思いますがね。」

就職活動

就職活動には、早い段階から進んで取り組んだ。

「結構、私は就職に対して、今まで高校とか大学とか、高校は希望のところに入ったにもかかわらず自分の描いていたような高校生活ではなかったというのと、大学入ったけれども、その大学ももう少し勉強しておけばよかったのかなというのがあったので、就職は失敗したくないという思いがすごい強くて、結構大学1年のときからなるべく早目に単位を取ったりとか、そういう努力はしていたので、やり始めたのも結構早くて3年ぐらいから。」

3年のときに参加した旅行会社のインターンシップで、他の大学の学生たちと接して刺激を受ける。

「私は途中で(就職活動を)やめるという選択肢は自分の中でなくて、仕事をしたいという気持ちがいっぱい強かったので、絶対就職は成功させたいという思いがあったんです。その中で、自分の大学だけだとやっぱり考え方とか見るところというのがすごい狭まってしまう気がしたので、ほかの大学の友達と会ったりとか、ほかの大学の友達から直接情報をもらえるというわけではないんですけども、いろいろな考え方を聞いたりとか、そういう情報が回ってくるというのはすごいおもしろかった気がします。」

しかし、業種を絞らずに早くから活動する中で、3年の2~3月になって「疲れて」しまう。

その後、ITというものを、自分のやりたい仕事のイメージとして語れるようになったのは、4年の5月ごろだった。だが、その時期と採用のタイミングが合うわけではなく、就職活動はさらに続くことになった。

「やっぱり仕事を続けていきたい、やりたいという思いがあったので、入ったら何かしら技術とかを身につけて、どこでも通用するような力をつけたいなというのがあったので、それでその1つにITがあって、あとは何ですかね。仕事をする上で、多分やりたいことというものも自分の中ですごい重要だなと考えていて、私がやりたいことって、仕事を通して何がやりたいかって考えたとき、結構仕事を通して何かを大きく変えたいって思ったんです。何か自分がやることとか仕事を通して、みんなの何か思っているようなことを変えられたりとか、不便に思っていることとか、それをプラスのほうに変えていけるような、そういうことをしたいなという漠然な思いから、もちろん結構いろいろなことで変えられると思うんですけども。そうしたらやっぱりITの力って多分これからすごい大きいらしいなと考えたのと、ITってそれ自体が大きなインパクトというよりは、ITを入れた会社が大きく変わったりとか、効率がすごいよくなったりとか、そういう部分を自分で何か変えていきたいという思いがあったので、それでITを選んだのが1つあって。」

「私がやりたいことって、大きい企業とか、ある程度上のほうの企業でないとできないのがあって、もちろんITというとすごいいっぱい会社はあるんですけども、下のほうの工程をやっている会社だとそれを実感することはできないんですね。それを語れるようになったときには結構応募とかが始まっていたりとか、もう終わっていたりとか。……やりたいということが固まったときにはちょっともう遅かったみたいな部分は少しありました。」

夏の終わりに内定を得るが、希望していたITとは無関係のものだったため、ITの技術に関する営業ができる仕事をめざし就職活動を続ける。12月にIT関係の内定を得て、そこも「100%やりたい企業でやりたい仕事というわけではなかった」ため迷ったが、ある程度大きい会社で将来その仕事ができる可能性がまだあるだろうと考え、最終的にそこに決める。

2. キャリア

最初に配属されたのは、ITとは直接関係のない、電話での問い合わせに対応する部門。10ヶ月ほどで、ITの知識を使って電話でサポートする部門に異動し、3年ほどその仕事をする。次の異動がまだ電話対応なら仕事をやめることも考えたが、次にすることになったのは他の会社の人と共同でする仕事で、自社の人間関係から離れた新鮮さや、また望んでいた営業に近い仕事ができることもあり、充実した時間を過ごす。

「今までチームで仕事をしてきたものが私1人で仕事をするようになって、同じ会社の人ではなくて別の会社の人と仕事をするようになったんです。……いろいろな考え方の、実際にほかの人と仕事をするようになってすごい刺激を受けたりだとか、今までできなかった仕事

ができるようになって、それが営業系の仕事で、結構出張に行かせてもらったりとか、いろいろな場所で説明会をやったりとか。いろいろな人と何かをつくり上げるという私がやりたかったようなこととかができるようになって、それはすごいおもしろかったんです」

しかし、1年で部署が統合されてしまい、事務の仕事に変わってしまい、現在に至っている。

「今までやっていたことってというのが全部できなくなってしまって、今はずっと事務作業。電話のサポートがメインなわけではないのですが、何かを考えてつくり出したりとか、提案とか、そういう部分ができなくなったのは、仕事でやりたかった部分が今ちょっととられている感じがして、どうしようみたいな部分がまた出てきていますけどね。」

組織の組み替えや会社の状況の変化もあり、再びそのおもしろかった仕事が今の会社でできるようになる可能性はおそらくない。同僚の入れ替わりも多い中で、この会社でこのまま働き続けていくイメージが持ちにくくなっている。でもまだ、転職する・しないも含め、具体的な展望を得るには至っていない。

「やっぱり同じ会社で仕事をしていくというのは不安があつて。というのも、やっぱり今これだと思えるものがないので、そういう会社でずっと働いてっていうのは、ちょっとやっぱり不安があるのが。でも、やめても不安だし、やめなくて後悔するのも不安だしと思うと。」

ITというスキル

就職活動ではIT系を志望し、実際にIT関係の会社に勤務しているが、もともとITに関連する技術や資格を持っていたわけでも、また就職活動の過程で身につけたわけでもなかった。

「(IT関係は)むしろ嫌いだったので、今後は絶対必要になるものだと思っていたので、やってちょっと自分のものにしようと思って。(会社に入ってから教えてもらうつもりだった?) そうですね、その意味が強かったですね。」

就職後、短期間の研修を受けたり、資格も取ったりしたが、基本的にはIT関係の知識や技術は、実際の業務を通じて身につけていった。ただ、そうした知識を積極的に学ぼうという気持ちは、やがて薄れてしまった。その結果、自分が持っている知識も、転職で売り物になるぐらいのレベルには及ばない程度にとどまっている。

「すごい面倒を見てくれる先輩がいて、その先輩の希望にこたえたいみたいな部分のときは勉強したりとかしましたけど、もう後からは、うるさく言われる一方だとかこっちもちょっと勉強という気持ちにもなれなくて。……スペシャリストでも、どこでも通用するというほどの知識ではないですね。」

転職のイメージ

仮に今の会社を辞めて他に移るとしても、今の仕事との関連性や継続性があることにはこ

だわらない。

「(新しい仕事の具体的なイメージはあるか) うーん、イメージ。それが結構ないので、それでちょっと今迷っているような部分ですね。(ITの知識や経験を強みとして転職しようとは考えないのか?) 売りにしたら多分それはあると思うんですけども、でもそれを前面に押し出して、次の仕事でも同じ仕事とは考えていないです。仕事をする上でこれだったら強みですとは言えますけれども、それでその仕事を、ばりばりITというもので探そうとは、別にこだわりはないです。」

そのため、まだ転職サイトを見たりするまでには至らず、漠然とこのままだと心配だと思っているぐらいの状態にいる。

3. 家族

家族は両親と弟。弟は既に社会人で一人暮らしをしているため、現在は親子3人での生活。両親は、基本的には、進路選択や就職・転職などについてあまり意見を言うてくることはなく、見守るというタイプ。

「基本的にうちの親はあまり口出しはしない感じなので。ただ、よほど間違っていると思ったら多分言うのかなというぐらいで。これに行きなさいとか、絶対やめなさいというのは、よほど考え方が間違っているなと思ってそれを選んでいるのであれば多分注意すると思うんですけども、そうじゃない場合にやめたほうがいいというのは基本的にない……。」

「(就職活動のときに、親が口出しすることは) いや、特にないですね。別に何かどういうところを受けているとか、そういうことも言わなかったし、聞かれることもなかったし、結構そういう意味では自由だったので。」

「(調査票の「これからの生き方や働き方」を相談する相手として、親を選んでいたことについて) やっぱり仕事をやめるとかそういうことに関しては、自分の意思で結局はやめるけれども、一応(親に)言うておく必要があると。会社の状態とか好きなこととか、そういうのは伝えた上でということが多分親の欄に丸をしたのかな。最終的な意味で。」

4. 結婚

いま付き合っている人はいない。「結婚の前にしたいことがありすぎて」。ただ、周囲の友人に結婚が多く不安を感じることも。

5. 趣味

自分にとって「趣味の部分はすごく大きい」。

「仕事以外の部分で楽しいところを見つけないと、日常がやっていけないというか。」

趣味のひとつは語学(英語と韓国語)。学校に通ったりするほか、手紙をやりとりする英語圏の友達がいる。もうひとつはヨガ。大学生の頃からやっている。

「(結婚の前にしたいことがありすぎて、と言っていたが)何か好きなことをやりたいなと思って。それは趣味の語学もそうですし、あとヨガが好きなのでヨガの資格取ったりとかしたいなって。自分の好きなことを。今まで就職して、ずっと流れに乗っていたので、ちょっとそろそろ自分のやりたいことをやりたいなというのが。」

6. 震災

震災のときは会社にいた。当日は帰宅できず、会社にそのまま泊まる。部署統合の前だったので、その時点ではおもしろく感じる仕事をやっていたが、震災を機にその仕事が自粛や先延ばしの対象になってしまい、さらに部署統合があったので、震災は業務に直接的な影響があった。「震災さえなければ」という思いも。

海外から来ていた友達が帰国するなどもあったが、自分自身の考え方は特に震災前後で変わってはいない。

Sさん

27歳女性。定時制高校に通いながら家業の飲食店の手伝いをはじめ、定時制高校卒業後もそのまま継続し、つい最近まで10年続けた。この3月にお店を閉めることとなり、雑貨の卸売りのアルバイトを始める。現在けがのため休職しているが、治ったら復帰する予定。

1. 学校時代

地元の小中学校に通う。小学校の時はピアノや習字、バレエなどの習い事をしていて。母は働いていたので、おばあちゃんがよく面倒を見てくれた。中学生の時は、背が高かったことで誘われたバスケの部活に入ったが、きつかったのですぐにやめ、そのあとは友達との遊びが中心になった。

「1年のときはバスケをやっていました。すごい背が高かったので、顧問の先生に呼ばれたというか。1年だけやったんですけれども、きつくて、無理でしたね。合宿があつて、その合宿でもうやめようと思って。

（空いた時間は）遊んでましたね、基本。カラオケに行ったり、あと、公園ですっとみんなで話していたりとか。同じ中学です。小学校と中学校が隣同士になっているんですよ、うちのすぐ近く。だから、みんな周り、友達なんですよ。

先生と（の関係）は決してよくなかったですね。中学校時代はあんまり、先生と仲がいいとかないですね。多分、だれもがそうだと思う。中学生とかは結構反抗期だったので、学校もあんまり行ってないです、中学は。うち、自営で朝から晩までいなかったの、親は、うちの母親のほうは、結構、中学の呼び出しは食っていたんですけど、お店抜け出して。（今から振り返って）すごいかわいそうだと思う、親が。」

中学生の時からアルバイトをこっそりしていた。

「いや、もうほんと、お金が欲しくて。年をごまかして、中学とかから働いていたので。近所のお店とか。結構ふけていたので、あんまりばれないですね。やっぱり中学、高校って、基本、お金が欲しくて。親はくれるんだけど、やっぱりそれじゃ足りないみたいな。（お友達もそうやって働いていたとか？）していました。

基本的には、あまりばれないような仕事というか、車のワイパーに「車を買いますよ」みたいな、そういうチラシとかを挟んだりとか、そういう仕事。人目につかないでみたいな、そういう仕事をしていました。チラシ配り、ティッシュ配りとか、そういう系を結構。」

高校進学

高校に進学したいという気持ちはなかったが、親の強い勧めで定時制高校に進学した。

「高校は行く気はなかったんです、ほんとうは。でも、やっぱり親に行ってくれと言われて、1回、昼間の高校を受けたんですけど、私、小学校のころから勉強はしていなかったの、

「でも行けないよ、多分」という話はしていたんですけど、一応、昼間の普通の高校を受けて落ちちゃったんです。それで、「やっぱり落ちちゃったから、高校はやめるわ」と言ったら、それでも行ってくれと言われて。定時制にいたことが通っていたんですよ。それで、定時を受けて、受かって、そこから定時に4年間。

(定時制高校は)楽しかったです。(笑)ほんとうに。まず、給食がありますし、あと、私服です。あんまり行かなくても、全く怒られないです。だから、基本、1学期、2学期はほとんど学校に行かなかったです。行かないというか、遊びに行っていたみたいな感じで。それで、単位が足りなくなると、先生から電話がかかってくるんですよ。

でも、学校は行っていました。ただ、授業を受けていなかったから、単位が取れないんですよ。で、遊びに行くんです、そこから。授業を受けなかったのも、単位が取れないじゃないですか。それで、もうそろそろ授業出ないと単位が取れないからと言われて、それから、教室にいるようにしているような感じでしたね。」

高校はきちんと卒業したが、やめた友達もいた。

「どうだろう。うちの友達はみんな、卒業、一緒にしたんですけど、やめた人も何人もいます。それでも三、四人ぐらいやめたかな、友達の間で。面倒くさいとか。似たような感じが集まるみたいな感じだったので。クラスは四、五人。2クラスあって、向こうにまた五、六人とかいて。あと、先輩とかと遊んでいた。カラオケとか、居酒屋さんとか、基本的にはそういうところばかりですね。先輩が結構車で来ていたので、車でどこかに行ったりとか。みんな、ほんとうにどうしようもなかったと思いますよ。今、考えると。」

中高では繁華街によく出かけていた。

「中学、高校はブクロとか新宿とかによく行っていたんですよ。今はもう行かないですね、繁華街は。疲れるから。しかも、すごい人ごみが嫌いなので、いつも車移動なんで。買い物とかができるとしたら、ショッピングモールぐらいしかないの。」

アルバイト

高校に進学するとすぐにアルバイトを始めるが、途中でそれまで家業を手伝っていた兄の怪我がきっかけで、家業を手伝うようになる。

「(高校に入ってすぐは)一応、昼間はスーパーをやっていて、それで、夜、学校に行っていたんですけど。うちのお兄ちゃんが手伝っていたんですよ、うちのお店。でも、うちのお兄ちゃんが何か手を骨折したか何かで、配達の仕事なんですけど、できなくなっちゃったから、やってくれと言われて、スーパーをやめて、そこからお店をずっと今年の4月まで。だから、10年以上、私、ずっとやっています。

中華料理のお店なんですけど。配達。朝10時から夜、時間も結構、最初のころは夜の12

時までやっていたんですけど、10時にならなくなったり、9時にならなくなると、結局、最終的には8時にならなくなりましたよ。まで、ずっとお店です、私は。」

高校卒業時

卒業時には家業を手伝うことに決まっていたが、友達も就職はしていない。

「(就職について考えるということは) 私はなかったですね。お店だったので。友達は別に。結構、結婚する子が多かったの。あと、どうだろう。普通にバイトとかしている子が多かったですね。あと、男の人だったら、男友達だったら、職人さん。ずっとそのまんま。就職とかはないです、定時というか、私たちの友達では。

多分、1人も就職はしていないと思います、うちの友達。そのまま持続みたいな。卒業してもあんまり変わらなかったですからね、遊んだりするのは。でも、会わなくなりますがね。全然会わないです、今は。みんな働いたり、結婚していたりするんで。」

今から振り返ると、きちんと勉強して大学に行きたかったような気もする。

「やり直したいです。小学生から。大学に行きたいです。大学に行っている友達はいないんですけど、テレビですけど、見ていると、楽しいそうじゃないですか、大学生って。基本から勉強し直したいなという。もう小学校からちよくちよくちゃんと勉強して、高校も昼間の高校受かってみたい。勉強はしなかったの、今のところ、困ることはないですけど、将来、子供ができたときとかに困るじゃないですか、算数とか。だから、そういう面では勉強しときたかったなと思いますね。」

2. キャリア

家業手伝いを10年ほど継続したが、様々な事情でお店を閉めることになり、現在は近くの雑貨の卸売りでアルバイトをしている。

家業手伝いは長時間労働で拘束があったので、辞めたい気持ちもあったが、自分が辞めると家族みんなが困ってしまうというのがあったので、やめることは難しかった。

「(家業手伝いを辞めたいということは)ほんと、ずっと思っていました、それは。やっぱり親と一緒に働くというのはきつかったですね。やっぱりいいところもあれば、悪いところもあるような感じで。そのころにはもう親とはすごい仲よかったの、一緒に働くこと自体はいいと思って働いたんですけど、やっぱり家族だと甘えも出るし、きついといえばきつかったですね。それはもう自営業の苦しみというか、私がやめたらもう、みたいな面もある。(みんな、困っちゃうという) そう。

雨の日とかも、かっぱを着て、外に行かなくちゃいけないんですよ、大雨のときとかも。それが一番きつかったですね。一番きつかったですね。あと、雪とか、あと、風とか、台風

のとき。配達の仕事って、そこまで女の人っていないじゃないですか。それを雨でびしょびしょになりながらやるというのが、自分的にはすごい嫌で。」

現在の仕事は新聞の折り込み広告で見つけた。家に近く、時給が高いのが魅力だった。「だれかの紹介とかじゃなくて、自分で探して、面接行って、受かったところなんですけど。新聞の折り込み（で探した）。パソコンは持っているんですけど、基本、あんまり使わないんですよ、私。でも、そういうのは携帯とかでは探さなかったですね。知り合いに新聞屋さんがいて、日曜日になると広告が入るんですよ。それを毎週もらって、それで。まあ、近かった。大体、いつも時給とかも850円とかが多かったんですけど、そこ、900円だったし。親会社は卸会社なんですよ。雑貨屋さんとかも、いろいろなことをやっているところで、基本、私がやっているのは、雑貨屋さんで接客をしたり、あと、いろいろあっちこちに倉庫がすごいいっぱいあって、倉庫で検品したりとか。

今のところは、一応9時からなんですよ。終わる時間は、基本、あんまり決まっていらないんです、私の場合は。主婦とかが多いので、主婦とかは5時とか6時までとかって決まっていて、私は適当。（仕事）残っていれば。結構忙しい会社なので、遅いときは9時とか9時半とかまで。1日の半分ぐらい働いているときもありましたね。」

働くことが好きである。

「（働くことって苦にならないタイプですか）あんまりならないですね。お店をやっているときからそうだったんですけども、基本、ずっと働いていないと、私的に、家にいても何もすることないというか、だったら、働いていたほうが良いと思う。家にいられないんですよ。事故して1カ月ぐらいもう家にはいるんですけど、こうやって出歩いたりたまにするんですけど、もうだめですね。うん、もう働きたくて。

多分、私、集中力があんまりないというか、だから、勉強という、机に向かって何かやるというのがだめですね。ずっと外で遊んでいましたから。遊んでいたいというのがありましたね。公園で座っているとかなので、別に動いたりはしてないんですけど。」

現在はけがのためアルバイトを休職中だが、早く働きたい。

「お金のありがたみも、多分、働かないとわからないです。今までずっと自営だったので、親から給料をもらうわけじゃないですか。だから、欲しいときにくれるみたいな感じだったので、どれだけ働いて、どれだけ給料をもらえるというのがなかったんですけど、今までずっと。今、働き始めて、働いた分だけお金をもらえる、長く働いた分だけ時給ももらえるというあれで、だから、今、働きたいですね。

事故っちゃったんですけど、1カ月ぐらいで。いい会社で、もう治ってからでいいとか、そういう、結構、みんな、何か家族みたいな感じの。人自体は30人以上はいるんですけど、

社長とか常務とかが親子だったりとか。しかも、昔から働いている、長い人が結構多いので。みんな、すごいいい人で、すごい働きやすくて。相当、仕事運がいいんですよ、多分。多分、主婦の方と違って、年間幾らまでってあるじゃないですか。だから、週5で、時間も短いかなんですよ。でも、私は関係ないので、働けるだけ働くみたいな感じなので、基本、そういう人が欲しかったみたいで。」

3. パートナーとの関係

結婚を今年か来年に予定しているが、パートナーは職人さんで朝が早く職場が遠いため、生まれ育った場所から移動しなくてはならないのが不安である。

「(結婚は)今年か来年ぐらいにしようかみたいな話はしています。もう7年ぐらいつき合っているのです。紹介みたいな感じで。ちょっと遠距離なんですよ。基本的には専業主婦になりたいですけど、家にひとりでいるんだったら、働きに出ます、私。子供がいるんだったら、子供と一緒にいたいです。前はあんまり好きじゃなかったんですけど、弟の、おいっ子が生まれて、めっちゃかわいくて、早く子供が欲しいって言って。うちの親というか、母親ですけど、早く結婚しなよって、早く子供産みなよってすごいずっと言っていて。早く子供は欲しいですね。結婚して、子供ができるまでは働きます、多分。お金云々とかじゃないんですけど、家にひとりではいられないです、絶対に。お金もたまりますし、そしたら。」

家族と仲がいいので地元を離れるのは嫌だが、やむをえないと考えている。

「こっち(彼の地元)に行きます。嫌です、絶対に、ほんとは。親から離れられないです。私、ほんとに親と仲がいいんですよ。仲がいいというか、ずっとママと一緒にいるんですけど。考えられないですね、多分、親と離れるというのが。おばあちゃんも大好きだし。でも、仕事があるので、どっちにしたって、私が行くしかないんですよ、多分。通うのが朝早い職人さんなので、だから……。そうしたら、ほんとに私はどうなるかわからないです。ノイローゼになるかもしれないし。多分、ホームシックにかかると思います。1回も家を出たことがないですから、私は。ひとり暮らしもないですし。不安なことばかりですよ、多分。」

将来の夢は、一戸建ての家を建てることである。

「家を持って、ほんと幸せに暮らしたい。ほんと、それぐらいしかないです。買うということですよ。彼氏のほうが職人さんで、家を持つのが夢みたいな感じで。だから、一軒家じゃないかな、多分。」

子供は元気であればよい。

「元気ならいいかなと思います。自分も大したそういうのをやっていなかったですし、例え

ば大学まで行ってほしいとかもないですし。今回は多少勉強してほしいなと思いますね。やりたいと言えば、やらせてあげたいぐらいで、押しつけるというのがすごい嫌だったんですよ、昔から、私。親が、例えばバレエに行くよと言われてたとか、そういうのは嫌だったので、だから、そういう意味では、やりたいことがあったら。塾に行きたいと言えば、塾に行ってもいいよと言うし。」

4. 友人関係

昔から人間関係で困ったことはない。

「人間関係はそこまで心配はないですね。なかったです、そこまで。昔から、社交的というか、人づき合いで困ったことはそこまでないんですよ。

だから、お店やっているときとか、スーパーとかも、結構、従業員の年配のおばさんたちとかとよくしゃべったりとかもしていたし。逆に（年齢が）近いほうが気を使ったりとか。

ちっちゃいころからも、どこにでも行っちゃう子だったので、人なれしていて。ちっちゃいころはおばあちゃんが結構来ていたんで、年配の方がすごい好きだったんですよ。

逆に年が近いと気を使っちゃって、だめですね、私は。だから、今の仕事場も、結構上の人もいますし、上の人とのほうが仲がいい。ずっと家にいるほうがだめですね。」

自分の社交性は、友達の中では珍しいように思う。

「うちの場合だったら平気なんだけど、たまに知らない人が来たり、違う人が来たりすると、黙っちゃう子のほうが結構多かったですね。

（ニートの友達）面倒くさいんじゃないですかね（働くのが）。そういう人って、多分、お金がなくても、どうにか生きていけるんですよ。だから、私の知っている、ずっと働いてない子は、携帯も持ってないですし。そういうのも全然いけるんですよ、多分。近くに仲のいい友達が1人だけいるので。私にはちょっと考えられないんですけど。」

趣味はギャンブル。

「ギャンブルかな。スロットとか。あんまり勝てないんですよ、私は。（笑）博才がないんですね、多分ね。好き。唯一のストレス解消みたいな。わからない。お金になるところ。（わくわくした感じ？）そう、そう。」

5. 家族との関係

家族とはとても仲が良い。両親は「まあ、元気ならいいみたいな。自由ですから、自由、結構。」という教育方針だったように思う。

「うちのお父さん、18からもう中華のお店に入っているんで。それで、多分、自分のお店

を開きたいというので、開いた。小学校のときだったので。ママとパパがずっといなかった
ので。でも、毎週火曜日はお休みだったので、いつも出かけていました。あと、旅行に行っ
たりとか。基本、家族でどこかに行くのが、うち、すごい好きだったので。すごい仲いいで
す。」

兄弟とパートナーも仲がよい。

「お兄ちゃんも弟もバスケットだったんです。この人もバスケットだから、一緒にバスケットをしに行っ
たりとかもしたこともありますし。あと、どうだろう。あと、みんな車が好きなんですよ、
お兄ちゃんも彼氏も弟も。だから、洗車しに行ったりとか。結構、兄弟とか家族ぐるみでみ
んな、仲がいいので。」

現在は、父はトラック運転手に転職、母は専業主婦。2歳違いの兄も弟もトラック運転手
である。

「今、お母さんはやっていないんですけど、お父さんはトラックの仕事。うちのお兄ちゃん
と同じような仕事なんですけど、トラックの仕事をしています。パパは大型まで全部持っ
ています。」

Aさん（専業主婦のため、参考）

24歳女性。短大卒。認証保育園→公立非常勤→公立正規保育士をしていたが、妊娠をきっかけに退職。

1. 学校時代

中学校時代はバレーボールの部活に打ち込んだ。中学時代から保育士になりたいと考えていた。高校は大学付属の私立高校に進学した。

「うちの両親も結構厳しい人で、公立に進んで、ちょっと乱れるといたら変だけれども、ちょっと道がそれたりとかするよりは、しっかりした校則があるところのほうがいいんじゃないかと言ってきて、私自身もそういう気持ちはすごくあったので、そうだなと思って。別に公立が悪いわけではないんですが、いろいろなこと、後先のこととか考えると、私立で附属がついていてといったほうが、金銭的にはすごく負担をかけてしまったと思うんですけども、いいかねと言って、といったのがきっかけですね、私立を選んだのは。」

高校卒業時に悩んだが、短大の児童教育学科に進学した。

「成績がいい順で、全附属高校の成績がいい順で好きなところに入れるので……。なので、うちの高校は附属高校の中でも、まあ学力的にいいほうだったので、みんな希望するところに入れたりとかはしたんですけども、ふだんの授業の成績というので、希望するところに入れるか入れないかが決まってくるみたいなの。厳しい。附属なのだと思います。」

保育士になろうと思ったのは中学生ぐらいから。高齢者のお仕事もしたかったんですけども、すごい、どちらか迷って。高校生のときに、進学ですよ、進学するときいろいろ悩んだ結果、やはり子供のほうがいいなと思って、短大に入学するのにいろいろ勉強してという感じです。附属高校に通っていたので。もし高校の途中で違うことをやりたいと思っても進路変更できるようにと思って、総合大学がある附属の高校に入って、結局そのまま児童教育学科に……。」

障害者支援に関心を持ったきっかけ

「何のテレビか忘れちゃったんですけども、高校生のときに、児童養護施設のテレビをやっていたんですね。ドキュメンタリーで。それがすごく衝撃を受けて。自分の家庭環境からは想像できなかったといたら変だけれども、私はすごくほんとうに幸せな家庭に育ってきて、そういうことを全く知らなかったといたら変だけれども、わからなかったんです。こんな世界があったんだというのにすごく衝撃を受けて。」

短大では、保育士と幼稚園の先生と小学校の免許をとるため、朝から晩まで授業を受けていた。

「もう、土曜日まで、朝から晩まで授業を受けて。バイトする暇もなくて。短大はA県ですよ。結構実習先でいろいろな輪が広がるといったら変だけれども、東京に戻って実習はしたほうがいいんじゃないかと先生に勧められて。

実習先は東京でいろいろ探して。電話して。実習は寝られないくらい忙しいと聞いていたので、家から近いところをとりあえず探して……。自分が卒園とか卒業したところに連絡して、どこかご存じないですかというのを聞いて。断られたりとか、いろいろあったんですけども。

結構、自分で言うのは何なんですけど、ほんとうに動き回る、動き回るといったら変だけれども……。短大時代も、障害とか児童養護施設のところにしゅっちゅう、自主実習といって、日曜日を使って、ちょっと勉強させてとって施設にお邪魔させてもらったりとか、そういうことをやっていたので。頑張りましたね。なので、そのままその自主実習をやっていたところ、障害だったりとか児童養護施設にそのまま就職ということもできたんですけども、戻ってきたらいいんじゃないと（両親に）言われて。」

最初の勤め先を自分で見つける

短大の友人は学校に送られてきた求人票の中から探していたが、東京に戻るため自分で開拓した。

「知るきっかけは、いろいろ調べているときに、障害のお子さんを持っている施設があるというのを見つけて、そういうところの施設での実習は、学校ではなかったんですけども、夏休みを使ってそこに連絡して、ちょっと、仕事じゃないけれども、実習でもないけれども、ちょっとお手伝いさせてほしいと言ってやらせてもらっていて、で、そのまま拾ってもらったという形です。」

2. キャリア

初職は、保育園から高齢者施設までもつ大きな組織であった。配属は認証保育園だったがあきたらず2年で辞め、公立保育園の非常勤保育士となり、試験に受かって正規の保育士になるも、1年で離職。

「いろいろな施設を持っているところで、障害関係の施設がある大きなところだったんです。私は学生時代、子供は子供でも障害のほうにという気持ちでそちらに入ったんですけども、配属された先が普通の保育園だったんです。2年間、とりあえずやるだけやってみて、その最中にやはりという気持ちが、異動なり転勤なり転職なり、何かいろいろ考えようと思っていて……。

学生時代に、ただの子供だけじゃなくて、障害を抱えているお子さんだったりとか、逆に児童養護施設といって、親御さんと離れ離れになってしまったお子さんを見たいという気持

ちもあって、2年間ここで、民間でやった後に、ちょっと考え直す時間が欲しいなというのが、この1年間（公立非常勤）だったんですね。で、結婚等もいろいろあって、主人や両親とか家族にはやはり反対されて。普通の仕事といたら変だけれども、普通の保育園やそういうところで働いてほしいって。そういうストレスがもしかかかってしまったときにと言われて、いろいろ考えて、公立受けて、公務員資格に受かったんですね。」

非常勤の時の状況

「非常勤やりながら、そこでもまた障害関係のバイトをしていたんです。かけ持ちで。ある意味、すごく忙しい。忙しくて大変だと思ってやめたのに、こっちのほうがまた余計忙しくなっちゃったんですけれども。3時ぐらいまで保育園で朝からやって。で、夕方からまた違うところに行って、夜までやってみて。そのときに結婚の話とか何かいろいろ出ていて、結婚する相手が家にいてほしいという気持ちがあるというのはわかっていたので、このまま結婚したら絶対後悔が残るからと思って。だったらもう、入籍する前の半分自由な、その時間を思い切り使おうと思って。ハードな毎日を過ごしました。その結婚やら何やらの話が出ているときに、やはり（配偶者が）障害関係はよしてほしいって。不規則、1日24時間運営しているようなところだったので……。ほんとうにやりたかったらいいけれども協力はできないみたいな。ええーと思いました。」

離職の要因

就職して1年目で結婚、出産というのがなかなか受け入れられない雰囲気だった。配偶者も家にいてほしいという希望だったため、離職となった。

「籍を入れたのは公立に入ってすぐだったんです。主人はもともと仕事をしてほしくないタイプだったんです。なので、受からないと思って半分、やっていたものですので。

まあ、私自身もやるだけやってみようかなという気持ちと、あと、非常勤をやっていたときに、皆さんにほんとうに、やってみなやってみなって言われて、やったら、受かっちゃったという言い方はすごく失礼なんですけれども……。あ、受かっちゃったけれどもどうしようみたいな形で。

で、私も悪かったと思うんですけれども、働きづらかったというのもあったんです。1年目で、結婚しますとって報告したときの反応だったり、何だかんだ、もう何かちょっと怖いという気持ちもあったときに、妊娠もわかって、やっていけるのかなという気持ちがちよっとあって。それで、主人もうちの両親も、別にそんな一生懸命仕事をする必要はないんじゃないかと言われて、考えて考えてという形で退職しちゃったんですが。うちの両親も主人も働いてほしく——働いてほしくないわけではないけれども、フルでというのはという気持ちでいて……。

私は、そうだなという。自分自身の性格とか、うちの母が専業主婦でやっていて、それを

見ていたので、そういう気持ちもあったんですけども、公立のいろいろな話とか聞いていて、続けられるんじゃないかって思ったんです。

やはり難しかったのかなという。つわりとかもあって。公務員として働いて、半年ぐらいして妊娠がわかって、やはりすごくひどくて、つわりも。そういうときに、でも休みづらくなって、1年目というのもあるので。何かいろいろ考え込んだりしたというのも、精神的にもやられちゃってというのがあって。いっとき我慢とか、ちょっと苦勞、ちょっとほんとうに我慢すればよかっただけかもしれないんですけども、どうしようかなと思って考えて、決断して。

保育士や幼稚園とかって、私、小学校の免許も取ったんですが、そういうのって、資格があればほんとうにいろいろなところで、正規じゃなくても短時間でも仕事ができるなど思っている。だから、もう、いいって言って、割り切っている。今は後悔ないんですけどもね。」

将来の展望

子供が小学校に入ったくらいでまた仕事をしたいという気持ちもある。

「やはり資格、せっかく取ったので、それを生かせる仕事をしたいなという気持ちはありますね。ただどれにしようかなと思いつつながら。家のことを大切にしたいという気持ちと、自分自身も、退職して今、ゆっくりしたからわかる、自分自身がすごく気がやさしくなったというか、余裕が持てて、そういう気持ちがあるので、その気持ちを忘れたくないので。今、フルで働けるのが一番いいのかもしれないけれども、フルで働いてそういう気持ちも忘れないほうがいいのかもしれないけれども…子供も落ち着いたぐらいには、またちょっとやりたいなという気持ちもあります。」

3. パートナーとの関係

パートナーは経済的に安定しており、専業主婦を望んでいる。

「7つ上です。一番最初の職場の先輩の紹介ですね。全く違う会社なんですけれども、飲み会みたいなのがあって、そこで知り合ったのが主人という形です。(経済的に)安定しています。

私と主人の夫婦関係とうちの両親が似ていて、主人の考え方とうちの父の考え方が、親子なのかなと思うぐらい……。ほんとうに思うくらいすごく似ているので、私も、こうやっとなっていくのかなと思っているんです。」

4. 友人関係

生まれ育った地元に住んでいる。地元の友達はまだ子供がいるが、短大の友達は働いている。

「結構みんなここが、ここが好きみたいで、離れないですよ、みんな。私も結婚したの

に、ここら辺に住みたいとって。高卒の子もいたり、大学まで行ってちゃんとほんとうに就職している子もいるし、いろいろですね、ほんとうに。地元の友達は逆にすごく早過ぎたですね、結婚が。もう子供が2人3人いたりとか。

（短大の友達は）まだ早いとか、ちゃんと仕事をしている、ちゃんと仕事をしているといったら変だけれども、仕事をしている子からしたら、やはりその仕事が今一生懸命、すごく楽しい時期みたいで、話を聞いていても、いいなあと思いつつながら。話が合うのはやはり、学生時代の、同じ短大の友達のほうが合うけれども、A県なのであまり頻繁に会えなくて、1年に1回とか2回ぐらい、みんなで集まってという形ですね。」

5. 両親との関係

両親、兄、妹の5人家族だった。両親は厳しかったが、自分も子供を同じように育てたい。「うちは、勉強しろということよりも、そういうことじゃなくてすごく厳しかったですね。ふだんの生活の中で、最後までやるとか、家のことをちゃんと手伝うとか、自分が結婚して子供が生まれると思うと、絶対自分もそういう厳しい親になるんだろうなというような気持ちにはなるんですが。

両親がすごく子供のことを思ってくれているのがわかっていて、3兄弟みんなバレーボールやっていたんです。うちの両親もバレーボールをやっていたんですけれども、家族みんなバレーボールをやっていて……。体育会系ですね。うちの母がまさに体育の教師だったんです。兄が生まれてから退職したのかな。なので、ほんとうに私も母と同じような道というか、母もやはり公務員で、中学校の教師として働いていて、公務員なのにもったいない、もったいないと言われていたから。」

労働政策研究報告書 No. 148

大都市の若者の就業行動と意識の展開
－「第3回 若者のワークスタイル調査」から－

発行年月日 2012年 3月 30日

編集・発行 独立行政法人 労働政策研究・研修機構

〒177-8502 東京都練馬区上石神井4-8-23

(照会先) 研究調整部研究調整課 TEL:03-5991-5104

印刷・製本 有限会社 太平印刷

©2012 JILPT

* 労働政策研究報告書全文はホームページで提供しております。(URL:<http://www.jil.go.jp/>)